

黙阿弥全集

第九巻

解説

これは默阿彌の書いた引札である。引札といふのは廣告のチラシである。茶屋、料理屋、寄席、其他各種の商店、飲食店等の賣出し、開店披露等の廣告文、口上を、戲作者連がよく草した。默阿彌も、假名垣魯文や瀨川如皐等と共に、各所から依頼されて、よく書いた。約二百餘種も默阿彌の分だけでも殘つてゐる。これは其の見本である。文は默阿彌であるが、版下は梅素亭玄魚の筆である。其水は默阿彌の俳名である。

此のおかめ茶漬の報條卽ち引札は文久頃のもので、おそらくは默阿彌の引札中代表的なものと言つてよいほど、趣向もよし、評判のよかつたものだといふ。京橋本材木町七丁目を受持つてゐた二番組せ組の鳶頭久次郎の悴金之助が南傳馬町へ茶漬屋を始める時の口上であつた。金之助の顏付がおかめのやうだつたので、「おかめの金太」と渾名されてゐたから「おかめ茶漬」と付けたのだといふ。鳶の者に緣の深い纏印しの將棊をきかした戲文である。

井かのめ茶漬 報條

冬至ハ一陽来復して。目出度閏の正月ニ注連ひめく引札も。土地の
纏の駒ヱ因将棊づくしの狂文さへ下手の考へ長くしく。先駒組ニ並べ
立。フ二ツと御披露申ハ名ニおふ南傳馬町。二[illegible]間馬へ通から。
東へ半町入王の蔵ニ新手の新見世ある。井茶漬[illegible]といふる。
其名も銀ル金之助。顔ぶれあれ[illegible]茶漬と名ぶけて
へと岡目の助言を家号ニ呼。冬至楪の見世開扱色品の員くち。
手ニ何くと申さんも皆御存の蜻の定沙魚の甘露煮海老の佃煮。
甘いもあれバ辛いもあり成丈ヶ口ニ合ひし飛車取追手の桂馬の
両点されど高飛の高直ハ售ぬ。下直上る銀一本香車是ハ妙手と
御意ニ入ぬ。端の歩を突手のある程詰将棊の[illegible]詰り。込合
時も先手後手なく。御眺ハ待あし[illegible]二歩の重み[illegible]事いなるとも。
聞えんども致さぬ意唯角行の定座の左利き[illegible]掛まゐりぎ。
相手かりやの御酒の義ハ。石田のかくく御断。野暮かる事ハ御兼知
にて四時對馬の絶間なく。番数繁く御来駕あれかしと。箱ニ入きたる
駒貞の[illegible]ハ立派な見世となりう。歩も金となる繁昌を将棊
盤の隅から隅まで御贔屓ねがひ上げ。手へ頼とひとへに記かくえ

来ル霜月十日見世開
當日粂景ら一上ヶ仕

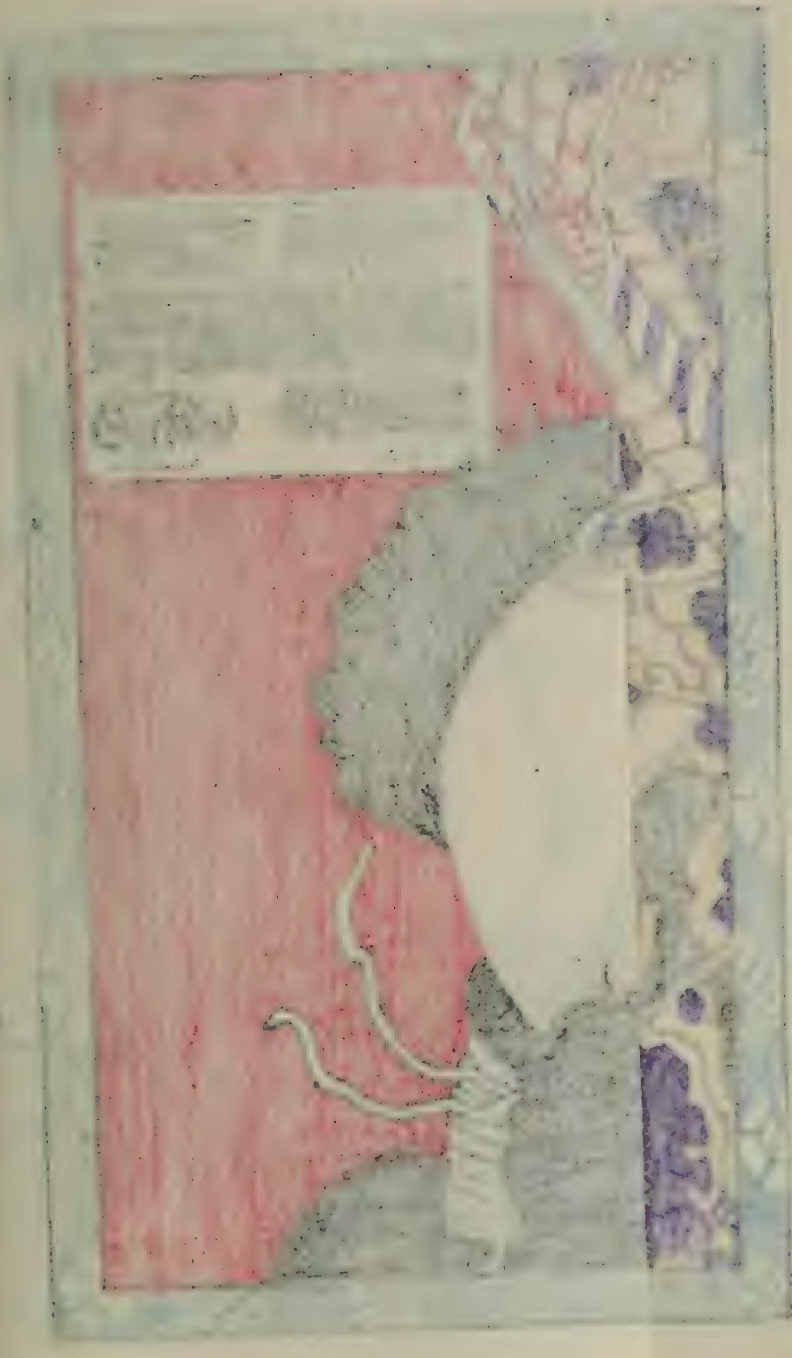
南傳馬町二三の横町

佐野屋金之助

河竹其水







河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集　第九卷

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第九卷目次

挿繪目次

御定連の御贔屓より中座のスケを頼まれて未熟ながらも掛けもちに扨講談は元和年間治世を祝す諸侯の宴會客は名におふ井伊殿に亭主は齋藤紀伊守その執持に浪花江のよし足輕の才助が眉間の疵に見あらはされ名乘れば武用の舊臣にて泥に醉うても本性は違はぬ勇士の馬場三郎兵衛がまはらぬ舌に軍場の讀切

大杯觴酒戰強者

『大杯』は明治十四年五月猿若座に於て書卸された、作者六十六歳の時である。丸橋忠彌が市川左團次の名と關聯して考へられるが如く、此の「大杯」の馬場三郎兵衛も亦直に左團次を連想せしめる。「大杯」は特に先代左團次の爲に、作者が講釋より材を採つて書いた中幕物であるだけに、今に至る專賣物として一般から認められてゐる。書卸しの時井伊掃部頭に扮した市川權十郎が、いかにも癇癖の强い殿樣らしくあつたとか、女性の出ない作として、それに替るべき色彩として主水、采女のみめよき小姓二人を點出したのは、作者のはたらきであるなどゝいふことが語り殘されてゐる。「中幕物としては出色の名作なり」と「續續歌舞伎年代記」にも記されてゐる。

書卸しの時の役割は、市川左團次（足輕原才助實は武田家の舊臣馬場三郎兵衛信久）、市川權十郎（井伊掃部頭直孝）、市川壽美蔵（内藤紀伊守信政）、市川八百蔵（家臣平岡治右衛門）、市川猿十郎（足輕太郎兵衛）、市川荒次郎（九郎藏）、關歌助（四郎介）、坂東三津三（小姓木村采女）、岩井松之助（松浦主水）等であつた。

挿繪にしたのは、明治四十三年九月明治座にて當代左團次上演の時の舞臺寫眞である。

大正十四年八月　　校訂者



大杯觴酒戰强者（大杯――一幕）

内藤家足輕部屋の場
同・書院酒宴の場

【役名――足輕原才助實は馬場三郎兵衛信久、井伊掃部頭直孝、内藤家臣平岡治右衛門、内藤紀伊守信政、小姓木村采女、同松浦主水、近習、茶道、足輕等。】

（内藤家足輕部屋の場）――本舞臺四間通し常足の二重板羽目の蹴込み、上の方一間板戸の戸棚續いて鼠壁是れに刀掛安大小を掛け、掛竿に古袴掛けあり、此の下膳棚を取附け、是へ箱膳皿茶碗など載せあり、いつもの所屋根附板羽目の入口、下の方無双窓上白壁下板羽目、すべて屋敷うち足輕部屋の體、二重に太郎兵衛菖蒲革の袴足輕小頭にて楊枝を削り居る、平舞臺へ薄縁を敷き、九郎藏着流し足輕にて、草鞋を造り居る四郎介同じく足輕にて藁を槌で打つて居る、下手へ茶賣の女房おでん岡持をおろし、門口に酒屋の御用聞三太徳利を提げ立掛り居る、此見得飴屋の唐人笛四ツ半でございと、廻りの聲にて幕明く。

太郎　いや商人といふものは、刻限を違へぬものだ、唐人笛の飴屋が來ると、きつと四つ半の廻りが來

る。

九郎　このお茶屋のおツかあも、雨が降つても雪が降つても、

四郎　よく四つ半の廻り時分に、毎日かゝさず出て來るの。

でん　町と違つてお屋敷は時廻りがござりますから、九つ前に上りませぬと商ひを仕そこなひます。

太郎　おツかあ、今日は何があるな。

でん　二三日此方風の吹くので、ひどいしけになりましたから、けふは鯡と棒鱈ばかり、外には何もござりませぬ。

太郎　棒鱈を三つばかり、皿を出して置いていつて下せえ。

でん　はい〳〵畏りました。（ト下手の棚から皿を出し、岡持をあけ鱈を取りながら、）おまへさん方は何も入りませぬか。

九郎　おいらは鯡の腹の方を、四五本置いていつて貰はう。

四郎　四五日跡に買つた鯡は、堅い上に澁くツてよつほど旨くなかつたぜ。

でん　あの時は急ぎまして漬が前でござりましたから、それで澁うござりましたらうが、今日のはよろしうござります。

四郎　よければおいらも三本ばかり、やはらかいのを見て下さい。

でん　はい／＼畏りました。（ト膳棚から皿を出して取り分ける。）

三太　前町の伊勢屋でござりますが、けふは御用はござりませぬか。

九郎　おいら達はみんな下戸ゆゑ、酒屋の御用に用はない。

三太　私共の一のお得意、才助さまはおいでなされませぬか。

四郎　才助は今朝町方へ、楊枝を賣りにいつて留守だ。

三太　もうお歸りなさいませうか。

九郎　晝でなければ歸るまい。

太郎　朝から晩迄德利と首ッ引をするのんだくれ、噓貸が出來たらうな。

三太　出來たどころではござりませぬ、節句前の書出しに三兩二分程溜りましたが、たつた一兩下すつて、後は楊枝を賣つたらやると、おつしやつたきりでござります。

でん　そりやお前の所ばかりではない、わたしなども安元手でお屋敷方の部屋々々へ、かうしてお菜を賣つて歩くも、わづかなまうけでやう／＼と其日を送る貧乏商人、それさへ借りてお拂ひなさらず、實に困りきりまする。

九郎　外の者は兎も角も、こなたなぞのわづかな錢を借りて置くのはよくないことだ、もし才助が拂はずば、足輕部屋の恥だから、おれが拂ひをしてやらう。

でん　不斷お世話になりますのに、それをお貰ひ申しては、お氣の毒でござります。

三太　お菜屋さんのおついでに、私共の酒の代も、どうかお拂ひ下さりませ。

太郎　いや手前の所は大家の酒屋、殊にはお上のお出入なれば五兩や三兩貸したとて、申さば些細な勘定故、手前の所の拂ひは致さぬ。

三太　島屋だつたら小僧の方へ拂ひをして下さるだらうが、勤番部屋は女のことだ。

九郎　それは手前が言はないでも、下馬煮の人參牛蒡より、

四郎　こつてりと煮た赤貝の、丸煮の方が誰でも喰ひたい。

三太　いや、これは恐入つた。

でん　これそんな憎まれ口を利かないで、今に歸つておいでだらうから、一廻り廻つておいでな。

三太　あい御家中の御用を聞いて、歸りに寄つて居なすつたら、二朱でも貰つて行かねばならない。

でん　わたしも晝にならぬ内、お徒士部屋から大部屋へ商ひをして參りませう。

太郎　今買つた鱈や鯡の、代を持つて行かないか。

でん　歸りにお貰ひ申します。さあ小僧さん、一緒に行かう。
三太　おまへと道行は御免だな。
でん　白雲天窓は、こつちで御免だ。（トやはり右の鳴物にて、兩人連立ち花道へはひる。）
太郎　扨々困つた才助だ、眉間に疵はあるけれど、人品といひ骨柄といひどうか役に立ちさうゆゑ、お組頭のお目利でお抱へになつた新參者、辛抱次第で行く〳〵は侍分になられるのに、酒が好きなばッかりで、貯とては百もなく、酒屋を初め小商人に、よつほど借が出來た樣子。
九郎　そこらこゝらの拂ひをすると、此間から削り溜めた楊枝を町へ賣りにいつたが、首尾よく賣つた其錢を屋敷へ持つて歸ればよいが。
太郎　錢さへあればいくらでも呑んでしまふ才助ゆゑ、拂ひをするを忘れてしまひ、大方今にぐでんぐでんになり、みんな遣つて歸りませう。
九郎　物見遊山はいふに及ばず、祝儀不祝儀何事も酒がなくては興が薄く、
太郎　取わけ人に取入るは、酒に越したものはない。
四郎　其替り又しくじるも、たいがい酒から起つたこと。
九郎　これを思ふと世の中に、酒は呑むべし呑むべからずだ。

ト合方唐人笛を冠せ、花道より原才助額に疵の跡あり、縞の袴安大小草履にて少し酒に醉ひし思入にて、一升德利を提げ出來り、

才助　けふはたんとも呑まないが、晝前のせゐか大そう醉つた、算へて見ると十何年久し振で皆樣にお目に掛るも面目ない、故鄕へ飾る錦どころか紅葉おろしに湯豆腐で、いつぱいきめて來ましたから、無禮は御免下さりまして、以前に替らず御贔屓にどうぞなされて下さりませう。（ト見物へ辭儀をなし、）かうお願ひ申しておけば、是から歸つて小頭がどんなに小言をいはうとも、うしろ楯は何れもさま、すこしも恐れることはない。（ト生醉の思入、右の鳴物にて本舞臺へ來る。）同役今歸りました。（ト內へはひる。）

九郎　おゝ才助どの歸つたか、今も爰で三人が、

四郎　こなたの噂をして居た所だ。

才助　定めて惡く言つたであらうな。

太郎　いや惡くは言はぬが、よくも言はぬ。

九郎　譬にもいふ千日に刈つた萱と同じことで、

四郎　削り溜めた楊枝の錢も、みんな呑んでしまつたかな。

才助　お察しの通り芋酒屋で二合やつたが初まりで、それから歸りに二三軒居酒屋へ這入り込み、たうとう屋敷へ歸る迄に、財布の中は此通り。（ト懐から財布を出しふるつて見せる。）

太郎　大方そんなことであらうと、實は惡く言つて居たのだ。

才助　何で惡く言はしつたのだ。

太郎　惡く言ふのは外でもない、足輕風情の身に過ぎた酒屋に多くの借りのあるのも、よいといふではなけれども、向うが大きな商人だから貸を當にはせぬけれど、洗濯婆あや菜屋の女房に、わづかな錢を借りて置き返さうといふ心もなく、内職をしたその錢を側からみんな呑んでしまひ、それでよいと思つて居るのか。

九郎　こなたはよいと思ふか知らぬが、大部屋に居る中間にもこんな所業の者はない、安大小でも腰にさし、位も一段上つて居る足輕組の恥になる。

四郎　我々ばかりかお屋敷の第一恥になることだ、惡事千里と此事が終には町の噂となり、こなたゆゑに同役が、湯へはひるにも肩身がせまいわ。

才助　なに借があるといつて、高が五兩か七兩ばかり、十兩あれば片ッぱし、きれいに拂ひの出來ること、そんなに兎やかう言はつしやるな。

太郎　高祿を取る身分なら、きれいに拂ひも出來ようが、取るのは五兩に二人扶持十兩といふ其金が容易に出來よう譯がない、こなたと違ひ爰に居る二人の衆は酒は呑まず、暇さへあれば内職を朝から晩迄精出す故、借といつては少しもなく一枚々々年々に着物の殖えるは誰が爲、みんな其身の徳になるのだ、それに引かへ着たまゝに年中寐ぐさいこなたの體、あんまり出來たことでもない。

九郎　さつぱり止めてしまはつしやいと、言つた所が飯よりか好きなものは止められまいが、五合呑むのを三合でも我慢の出來ぬことはあるまい、後の殘りの二合だけ積んでおいたら大きなこと。

四郎　さうしたならば其金で、世間へ不義理な借も出來ず、暑さ寒さに着物を着られて人にも安く見られまい、もう三十を越したれば、よく考へて見たがよい。

才助　朋輩仲のよしみを思ひ新參者の才助に、異見をいつて下さるのは何よりか有難いが、實は是迄幾度となく酒を斷つたことがあつたが、ぷんとにほひが鼻へはひると、いゝも惡いも忘れてしまひ、ぐび／＼するのがおれの病、たとひ借は出來るとも、五合呑むのを三合で、どうしんばうが出來るものだ。

太郎　出來ぬといふは其身の我儘、止めて止められぬことがあるものか、役に立たぬが小頭と言はれて上に立つからは、惡いことは決して言はぬ、人と違つてこなたなどは、見るから立派な恰幅に、

武藝は何でも出來るやうす、酒さへ止めたことならば、必ず出世の出來る體。

九郎　ほんに小頭のいふ通り、酒で出世をした者は、是迄一人もありはしない。

四郎　下戸の建てた藏もないが、上戸のつぶした家藏は、いくらあるか知れやあしない。

太郎　たらふく呑んだ身の果は、紋切形で押したやうに、重くて卒中輕くて中氣、

九郎　大小捨て兩杖を、突くのはどつとしないことだ。

四郎　こゝらが人の異見について、こなたも酒のやめ時だ。

才助　いや年中寐ぐさい裝をして仲間の者に嫌はれても、酒ばかりは止められぬ、呑むのが科でお暇が出たなら出た迄仕方がない、呑んで〳〵呑盡し、路頭に立つて乞食になるとも、酒菰を身の晴に着る氣だ。

太郎　立派に出世の出來るのを、酒ゆゑその身を破るとは、

九郎　扨々こなたは、

三人　馬鹿げたことだ。

才助　馬鹿と言はうがたはけと言はうが、酒はのまずに居られない。どれ、殘つた酒を呑んでしまはう。

トオ助德利の口から酒をのむ、三人は困つたものだと是を見る。合方になり、花道より平岡治右衛門

羽織袴大小用人のこしらへ、友平袴股立大小若黨にて附添ひ、中間丸介角平の二人紺看板一本ざしにて、白木の臺へ上下小袖を載せ上へ淺黃の袱紗をかけ、是を持出來る、此内才助は二重下手へ德利を枕に寐る。

平岡　こりや友平、その方參つて案内いたせ。

友平　はツ、（ト若黨先へ駈け拔け、）これ小頭、唯今是へ御用人の、平岡さまがおいでなされるぞ。

太郎　なに御用人の平岡さまが、此部屋へおいでなされるとか。

九郎　それはなんの御用だか、

四郎　むさくろしい此處へ。

太郎　唯今掃除を致しまする。

ト手箒を持つて立掛る、平岡内へはひり、

平岡　いや〳〵苦しうない、其儘に致せ。

太郎　へい〳〵、左樣仰せられますなら、埃の中でござりまするが、

九郎　是へお通り、

三人　下さりませ。（ト平舞臺下手へ住ひ、二重へ案内する。）

平岡　然らば許しやれ。（ト合方になり、平岡二重上手へ住ふ、若黨中間は平舞臺下手へ控へる。）

太郎　思ひがけない平岡さま、何御用ござりまして、むさくろしい足輕部屋へ御自身においでなされましたな。

平岡　今日是へ參りしは、則上の御用なるぞ。

九郎　お上よりの御用とは。

四郎　いかなることでござりまするな。

平岡　才助は部屋に居るか。

太郎　へい、居りますでござりまするが、彼をお尋ねなされまするは、

九郎　扨は何か酒興の上で、不調法がござりましたか。

四郎　いつか一度はお咎めが、ござりませうと存じました。（ト三人案じる思入。）

平岡　いや〳〵氣遣ふことではない、部屋に居らばこれへ出せ。

太郎　畏りましてござります。（ト才助の側へ來り、）これ才助々々、お上からの御用だぞ。

トゆり起す、才助目をこすりながら顏を上げ、

才助　いつぱいやつてぐつすりと、い丶心持に寐たところ、御用は堪忍して下せえ。（ト又ばつたりと寐る。）

太郎　これ〳〵何を寐ぼけて申すのだ、御用人の平岡さまが御用でおいでなされたぞ。
　　　ト才助これを聞き起上り、
才助　なに、平岡さまがおいでなされた。
九郎　何か知らぬがお上より、
四郎　こなたに御用があるとのこと。
才助　思ひがけない私へ、お上よりの御用とは。（ト手をつき心得ぬ思入）
平岡　ちと尋ね度きことあつて、某自身に參つたが、豫て家中の噂にも、大酒を致すと申すことぢやが、凡一日どの位その方は酒を呑むぞ。
才助　御扶持もわづかな足輕ゆゑ、遂に是迄呑めぬといふ迄呑んだことがござりませねば、どの位呑めますか私にも分りませぬ。
平岡　然らば一度に一升位は、大酒とあれば呑めるであらうな。
才助　いえお恥かしうござりまするが、楊枝や草履の內職で呑みます酒でござりますゆゑ、一升位で止めますが、唯呑む酒でござりますなら、たとへ三升が五升でも、桝の隅から呑みまする。
平岡　それ承つて安堵致した、何程呑むかその高の計り知られぬその大酒が、今日お上の御用にたつ

だぞ。

才助　のんだくれと人に言はるゝ、大酒が御用に立ちますとは、

太郎　合點の行かぬその仰せ。

九郎　いかなる譯で、

三人　ござりまするな。

平岡　大酒が御用に立つ仔細、唯今申し聞すであらう。（ト合方きつぱりとなり）今日當家へ御老職井伊掃部頭直孝殿を御招待致すに付、豫て殿中の取沙汰に、侯は天下無双の大酒、諸侯の内誰一人酒量につゞく者なきよし、それゆゑ誰ぞお相手に大酒の者を出さんと、重役共と評定せしに、其方ならで外になしと衆人の申すに付き、どの位呑めることかと、某尋ねに參りしところ、其呑むところおのれにも知れぬとの今の答へ、これくつきやうなることゆゑに、今日井伊侯のお相手を其方へ申附ける。（ト皆々びつくりなし）

才助　いや思ひがけない其仰せ、御前において唯酒を呑むばかりなら、いくらでも呑んでお目に掛けますが、當時名高き御老職掃部樣のお相手を、身分も輕き足輕風情が、どういたして出來ませう。

太郎　是は才助が申す通り、菖蒲革の破袴で、御殿へ出てお相手致さば、

九郎　第一お客へ失禮にて、
四郎　お家のお恥になりませう。
平岡　其儀は申す迄もない、足輕にては出されねば御近習の列に加へ、衣服を改め御前へ出さん。
才助　すりや私は御近習の、列に加はりお相手を、致しますのでござりますか。
平岡　いかにも、今日一日は足輕ならぬ御近習役、則上より其方へ上下衣服を下さるゝぞ。
才助　それはまことでござりますか。（ト嬉しき思入）
友平　持參致せし上下衣服、いざ頂戴致されよ。（ト臺に載せし上下、衣服を才助の前へ出す。）
才助　さつきいつぱい呑んだ儘、側にあつた德利を枕にぐつすりやりましたが、こりやあ夢ぢやあござりませぬか。何にいたせ下され物、有難く頂戴致しまする。（ト三人はあきれし思入にて、）
太郎　これ才助、こなたはいかなるよい月日の下で生れたことなるか、たとへ一日半日でも足輕の身で御近習の、列に加はるのみなるか、
九郎　殿中にては飛ぶ鳥も落つる威勢の掃部さまの、
四郎　御酒のお相手するなどゝ、こんな果報なことはない。
太郎　實にうらやましい、

三人　ことだなあ。（ト三人うらやましき思ひ入、才助こなしあつて、）
才助　今日お上の御用にたつて、御近習格で御酒宴の席へ列なる身の仕合せ、小頭初め二人の衆、こりや何故でありませう。
三人　さあ、それは。
才助　方圖なしに酒を呑めば生涯出世は出來ないと、今しがた言はしやつたが、寐臭い裝を脱ぎかへろと、麻上下に黑羽二重の、小袖を頂藏いたしましたぞ。
三人　さあ、それは。
才助　これは下戸では出來ますまい。（ト三人の前へ臺の衣服を見せびらかす。）
三人　むゝ、（ト詰る。）
才助　のんだくれに限りますぞ、はゝゝゝ。（ト笑ふ、三人むつとして、）
太郎　いや、何がお役にたつものか。
九郎　こんな馬鹿げた、
三人　ことはない。
才助　何にしろ有難いのは跡の見られぬ酒の御馳走、今から喉がぐびつくが、けふこそたらふく呑むね

ばならぬ。

平岡　呑むは何程呑んでもよいが、名におふお客は井伊侯ゆゑ、たらふくなど〻いふ詞は申さぬやうに心を附けよ。

才助　畏つてござりまするが、しらふと違つてぐでんになると。

平岡　いや、其ぐでんなぞが悪いぞ。

才助　ぐでんがわるくば、よたんばう。

平岡　よたんばうもよろしからぬ。

才助　然らば、酩酊。

平岡　むゝ、酩酊ならば苦しうない。

ト此時ばた〳〵にて、花道より左源治紺看板の中間にて走り出來り、直に舞臺へ來て、

左源　はツ、平岡さまへ申し上げまする。

平岡　おゝ、何用なるぞ。

左源　唯今井伊樣お入にて、御前さまと御一緒に御庭前を御見物、程なく御酒宴になりまするゆゑ、急ぎ御出仕これあるやう、お詰合の御重役より御通達にござりまする。

平岡　委細承知仕ると、重役方へ申せ。
左源　畏つてござりまする。（トばた〳〵にて引返してはひる。）
平岡　最早御入りとあるからは、御殿へ同道致すであらう。
太郎　何に致せ、あまり亂鬢、
九郎　御近習役で出るからは、
四郎　髮を結はずばなるまいぞ。
平岡　いや結直しては手間どらん。
才助　此儘撫附け袴をつッぱき。
平岡　其つッぱきがよろしくない。
才助　左樣なれば、上下を附け。
平岡　支度がよくば、
才助　あなたと一緒に。
太郎　これ。（ト袖を引く、才助思入あつて、）
才助　御供いたすで、（ト手をつくを道具替りの知せ、）ござりまする。

ト辭儀をする、平岡は立上る、此見得よろしく時の太鼓にて道具廻る。

（書院の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面下り藤紋散しの銀襖、上下折廻し同じ襖、日覆より同じ紋散しの大欄間を下し、舞臺花道共一面に薄縁を敷詰、すべて内藤家書院の體、上手に井伊直孝上下一本ざしにて住ひ、後ろ刀掛へ刀を掛け、下手に内藤紀伊守信政上下一本ざし、少し更けたる拵へにて住ひ後ろに近習新吾、勘六、千藏、傳平の四人麻上下にて控へ居る。此見得合方調べにて道具留る

内藤　今般自邸の手入をなし、聊模樣も變りし上、丁度櫻の盛りゆゑ粗酒を一獻さし上げ度く、今日御招待申せしところ、よくこそ御入來下さりまして、大慶に存じまする。

井伊　豫て噂に聞及び、疾より一見致し度く存じをつたるところゆゑ、招きに應じて參上せしが、茶事をお好みなさるゝ故か、花車風流なる座敷の物好き、又庭前の樹木の位置、直孝感心致してござる。

内藤　なかく〳〵もつて茶事などは心得をらぬ無骨者、萬事作事へ任せ置き、出來なせしを其樣に御賞美に預りては、實に汗顏の至りでござる。

新吾　然しながら御老職の、

勘六　御意に叶ひて、主人は元より、
千藏　お席に控へし臣等迄、
傳平　大慶至極に、
四人　ござりまする。（ト辭儀をする。）
井伊　先刻庭中の案內せし、みめよき小姓兩人が立振舞を見し所、猿樂の仕舞などをたしなみ居ると存ぜらるゝ、心得居らば時の興、何か一差見たいものぢや。
內藤　思ひ掛ないお望みながら、是は侯のお目違ひ、見掛に寄らず兩人共亂舞の道は一向に、存じませぬやうにござります。
井伊　はてさてそれは似合ぬことぢや、內藤侯には謠曲を御執心と申すことゆゑ、必定亂舞のお相手と手前推察致してござる。
內藤　今泰平の御代なれど、治に居て亂を忘れざる敎へを守りて臣下の者は、詩歌を初め亂舞などをたしなむ者一人もなく、唯武藝一道を心掛け居りまする。
井伊　そは何寄りのお心掛、武士は斯こそあり度きこと、然らば最前のみめよき小姓も、武藝はたしなみをりまするか。

内藤　未熟ながら兩人共、聊心得居りまする。
井伊　して、兩人の姓名は。
新吾　先刻御供仕りしは、當家の用人木村又左衛門が悴、
勘六　同苗采女と申しまする。
千藏　今一人も同役たる、杉浦作之進が悴、
傳平　同苗主水と申しまする。
新吾　いづれも弓馬槍劍とも、免許を受けて、
四人　ござりまする。
井伊　それは一入感心せり、仕舞に替へて此場にて、武藝の試合を見たいものぢや。
内藤　なか〳〵もつて侯などへ、御覽に入れる業にあらず。
井伊　いや、辭退めされず兩人へ、仰付けられ下されい。
内藤　左程迄にお望みあるを、辭退致すも却つて失禮。それ、兩人へ申附けい。
新吾 勘六　畏つてござりまする。
ト合方調べにて、兩人下手襖の内へはひる、直に木太刀とたんぽ附の槍を持ち出で舞臺眞中へ直す。

井伊　むゝ、槍劒の試合と見ゆるな。
新吾　仰せの如くに、
兩人　ござります。
內藤　早く是へ呼出せ。
千藏
傳平　はッ。
千藏　殿のお召し、急いで、
兩人　これへ。（ト襖の內にて、）
采女
主水　はあゝ。

ト小鼓の合方にて、下手襖をあけ、采女若衆かつら振袖袴小姓のこしらへ、主水同じ拵へにてしづしづと出來り、下手へ手をつき、平伏する、井伊見て、

井伊　女というても恥かしからぬ、やさしき姿の二人の者、武藝の免許を取りしとは最たのもしきことなれば、此場で手練の程を見たし。
內藤　お望み受けしは武門の面目、疾く〳〵是にて勝負致せ、
采女　武術の稽古致せども、不鍛練なる私共、

主水　君の仰せを蒙りて、是にて試合の勝負を致すは、
采女　冥加至極に、
兩人　ござります。
新吾　いざ御兩所には、
四人　支度をめされ。
采女
主水　畏つてござります。

ト白囃子になり、兩人懷より紅白の襷を出し掛ける。是を四人介錯なし兩人前へ出て、井伊、内藤へ辭儀をなし、左右へ別れ采女は槍、主水は木太刀を持ち、

主水　いざ、
采女　いざ、
兩人　いざ〳〵〳〵。

ト兩人立上りきつとなる、これより三絃入り白囃子になり、槍と木太刀の立廻りよろしく、能き見得にて、

井伊　兩人待つた。

釆女 主水　はツ。（ト控へろ、これにて鳴物を消し、）

井伊　學べる道は槍劍の二流に別れど兩人共、勝り劣らぬ互角の手練、最早勝負を決すに及ばぬ、直孝感心致せしぞ。（ト兩人襷を取り、）

釆女　手練も未熟の私共、

主水　御懇の御意を蒙りまして、

釆女　此上もなき身の譽れ。

主水　有難う存じ。

兩人　奉りまする。（ト辭儀をする、諸士槍と木太刀を後ろへ片附ける、内藤思入あつて、）

内藤　試合終りし上からは、用意の酒肴を持參致せ。

四人　はあ。

ト合方になり、四人下手へはひる。釆女、主水跡へ下る。直に奥より三ッ組の大杯を三方へ載せ肴を積みし硯蓋を掛盤へ載せ、大銚子を二ッ持ち出來り、大杯を井伊の前へ出す。

井伊　下戸の御家に珍らしき、三つ組の大杯、これは見事なものでござるな。

内藤　祖父の代より傳はれど、誰あつて三つ組を殘らず呑みし者ござらず、今日こそは尊公に五合入り

より一升入り迄、杯開きをお願ひ申す。いざ、お取上げ下されい。

井伊　幸ひ是なる兩人へ、試合の褒美に杯取らせん。

采女　すりや私共へ、

主水　お杯を。（ト井伊五合入りを取つて、）

井伊　おゝ、此の杯を遣すぞ。

采女・主水　え。（ト兩人びつくりする。）

內藤　それ、お酌いたせ。

采女・主水　はツ。

ト琴入り誂への合方になり、井伊杯を出す、采女、主水銚子を取り酌をする、井伊これを呑みほし

井伊　是は東都に稀なる銘酒、いづれよりして此佳品を、お取寄せなされしぞ。

內藤　それは伊丹の別製にて、世上で申す一本生、夫の富士見とか申す酒。

井伊　いかさま是は別製ならん。なか〳〵もつて勝れし香味、此の杯は劍道の褒美に采女へ遣はさん。

采女　はツ、有難う存じまする。（ト杯を取上げ、）身に餘りたる賜物ながら、五合入りのお杯は。

井伊　一盞呑めずば、半過せ。

釆女　甚恐れ入りまするが、もとより一向下りませねば、
井伊　釆女が呑めぬとあるからは、それなる主水に遣はさん。
主水　有難うはござりますが、私事も釆女同樣、
井伊　その方も呑めぬと申すか。
主水　はッ、御意にござりまする。
井伊　折角させし此杯、二人共にて受けられぬか。
釆女　兩人共にすごしませねば、
主水　お許しなされて、
兩人　下さりませ。
井伊　むゝ、呑めぬとあれば是非もない。（ト井伊不興なる思入、内藤は四人に向ひ、）
内藤　これ、誰かおあひを致さぬか。
新吾　拙者共も少々は、御酒を頂戴致しまするが、
勘六　御當家名代の三つ組杯、
千藏　なかなかもつて五合入りの、

傳平　お相は致し、
四人　兼ますする。
井伊　すりや、誰れ彼れも受けられぬか。
四人　はツ。
井伊　斯くおもてなしにあづかれど、此杯の受手がなければ、これにてお納め下されい。
　　　トきつと思入、ばた〳〵になり花道より以前の平岡出來り、花道よき所へ下に居て、
平岡　はツ、憚りながら其のお相手、召連れましてござります。
井伊　左いふは當家の平岡治右衞門、我相手を召連れしとか。
内藤　それを疾より待兼ねしぞ、猶豫致さず呼出せ。
平岡　はツ、（ト揚幕へ向ひ、）それに控へし原才助、御前のお召し、急いで是へ。
才助　（花道揚幕の内にて、）畏つてござりまする。（トこれより床の淨瑠璃になる。）
　　　〽呼次ぐ聲に原才助、以前に替る麻上下、行儀霰の作法さへ知らぬ其身におづ〳〵と、さしうつ向いて控ふれば、
　　　ト花道よりいぜんの才助、かづら替り、麻上下にて出來り、花道へ平伏する。

井伊　して、相手を致す其者は。

平岡　即當家の家臣にて、近習役を勤めまする、原才助と申す者。

才助　君のお相手仕るは、身の面目にござりまする。

井伊　相手をするとあるならば、此の杯を受けるであらうな。（ト五合入を見せる。）

才助　はツ、五合入りはまだなこと、七合五勺一升入り、殘らず頂戴仕りまする。

ト才助顏を上げて舞臺を見る。

采女　や、誰かと思へばあの者は、

主水　大酒と噂の、（トいひかけるを冠せて、）

平岡　あいや、太守のおゆるしある上は、あれへ參つてお相手致せ。

才助　畏つてござりまする。

〽物に馴れたる平岡の跡に續いて才助が、汗を拭ひて座に附けば、掃部頭は機嫌よく、

ト平岡先に才助跡に附き舞臺へおづ／＼と來り、下手へ控へる。井伊思入あつて、

井伊　こりや、才助とやら、是へ進め。

才助　はツ、仰せではござりますが、かゝる所へ出附けませねば。（ト汗を拭ふ。）

平岡　これ、無禮のなきやう身をつゝしみ、前へすゝみてお相手致せ。
才助　はツ。
井伊　是なる小姓に嫌はれし、此杯を受けてくりやれ。（ト以前の杯を出す。）
才助　頂戴致すでござりまする。（トおづ〳〵と杯を受ける、元の琴入りの合方になり、主水銚子をとり、）
主水　いざ、お酌を致さうか。
才助　これは憚りでござりまする。（ト主水つぐ、才助一息にぐつと呑みほし、）なんと申す銘酒だか、芋酒屋で呑む酒と違つて。
平岡　これ。（ト押へる、才助氣をかへ、）
才助　いや結構な御酒でござります。とてものことに、もういつぱい。
井伊　や、その大杯を。
四人　重ぬるとか。
才助　はて譬にもいふ駈つけ三ばい、こりやお定りでござります。
　ト杯を出す、此内奥より茶道銚子の替りを持つて來る、主水酌をする、才助又一息にぐつと呑む。
井伊　これはなか〳〵勝れた呑手ぢや。

内藤　お相手になられませうか。
井伊　ずんとよい相手ゆゑ。我においても悦ばしい。こりや、今度は中を遣すぞ。（ト中の杯を取上る。）
才助　中と聞いては、ぐびつきます。
平岡　これ。
才助　いや首を延ばしてお杯を、お待ち申して居りまする。
井伊　なか／＼小氣味のよいことぢや。（ト中の杯を出す、采女酌をなす。井伊も一息に呑みほし、）才助さすぞ。
才助　はッ、頂戴致しまする。（ト杯を受ける、主水酌をなす。才助ぐつと呑み、我を忘れて天窓をたゝき、）あゝ甘露々々、一本生のこんな酒は、彌太一では呑まれない。
平岡　これ。（ト袖を引き氣遣ふ思入。）
井伊　こりや、彌太一とはなんのことぢや。
平岡　さ、それは。
才助　いえ、彌太一ではござりませぬ、唯今のは、灘一と申しましたのでござりまする。
井伊　其の灘一と申すのは。

才助　按摩のやうでござりますが、盲目も知れる酒の呑口、かの灘物のその内でも、上物ゆゑに、灘一と褒めましたのでござりまする。
井伊　左樣なことであつたるか。いざ、此上は一升入り、是はそちより初めくれよ。
才助　それは何より願ふところ、有難うござります。（ト才助一升入りを取つて頂く。）
內藤　いかに其方大酒でも、先祖傳來の三つ組杯、一二と呑みし其上に、末は名におふ一升入。
主水　酒量知れぬと申せども、よもやそれは呑まれまい。
才助　いや呑めとあれば重ねまして、呑んでお目に掛けませう。
井伊　一升入りを重ねるとは、
主水　世にも稀なる才助どの。
井伊　さあ〳〵、早く手並を見せい。
才助　いざ、滿々とついで下され。
〽大杯をさし出せば、心得たりと左右よりなみ〳〵つぐを才助が、鯨が潮を吸ふ如く、舌打なして呑干せば、直孝侯も打驚き、
ト才助大杯を出す、釆女、主水左右より酌をなす。才助是をぐつと呑む、みな〳〵びつくりなす。

井伊思入あつて、

井伊 凡天下に直孝に續く大酒はあるまじと、けふ迄思ひ居つたるが、我にまさりし原才助、一升入りの大杯を、唯一息に呑みほせしは、實に猩々も斯やと思ふ驚き入つたる汝が大酒、直孝感服致せしぞ。

才助 恐れいつたる御懇の御意、うまれだちから無骨にて元より何の能もなく、分に過ぎたる大酒をするゆゑ、是迄人にうとまれましたが、今日君のお相手なし好な酒をたらふく呑み、お褒めのお詞頂戴なし、こんな有難いことはござりませぬ。(トすこし醉ひたる思入にて手をつき辭儀をする。)

内藤 かの唐土の李白にもおとらぬ程の御大酒と、豫て承り及びしゆゑ、今日御招待申すに附き老臣共へ申附け、大酒の者を詮議なせしに、お相手になる者ござらず。

平岡 大概一升前後にて、二升と過す者なきゆゑ、如何はせんと存ぜしに、これなる才助衆に勝れ、大酒ゆゑにお相手に、差出せしを御意に叶ひ、

采女 主人は元より此席へ、

主水 出仕致せし私共まで、

新吾 大慶至極に、

皆々　ござりまする。
井伊　我は一二の杯で、餘程酩酊なしたるが、分量知れざる程あつて、才助そちは一向に醉ひたる體も見えざるな。
才助　いえ五合入りを二つ重ね、七合五勺に一升入り、合せて二升七合五勺、手前もづぶ六醉ひました
　ト醉ひたる思入。
井伊　そのづぶ六と申すのは、やはり大酒を好む者か。
才助　左樣ではござりませぬ。
井伊　して、づぶ六と申すのは。（ト平岡氣遣ひ才助の袖を引くを、醉ひたるこなしにてふり拂ひ、）
才助　ぐでんぐでんのことでござります。
井伊　いや、面白き事を申すが、其ぐでんぐでんと申すのは、それはなんのことなるぞ。
　ト平岡又袖を引くを構はず、
才助　へえ、醉つぱらひのことでござります、はゝゝゝ。（ト手を打ち生醉の思入皆々氣遣ふこなしにて、）
內藤　こりや才助、そちは何と心得る。あなたは天下の御老職、多言は候へ失禮なるぞ。
平岡　あれ程申附けたるに、何故左樣な粗言を申す。

釆女　醉に乘じて平生の、身の行ひを顯すか。
主水　粗相があらば其方ばかりか、御招待せし殿の御恥辱。
新吾　そこへ心が、
四人　附かざるか。
才助　ついづぶ六に醉ひまして、我を忘れてぐでんだの、醉拂ひだのと申しましたは、眞平御免下さりませ。（ト手をつき詫びる。）
井伊　いや／＼是も酒席の一興、決して咎むることなかれ。こりや才助、其杯を我にさゝぬか。
才助　今の小言で、はたと失念、失禮ながら仰せにまかせて。（ト一升入りを三方の上へのせる。）
主水　どれ、お取次致すであらう。（ト井伊の前へ出す、井伊杯を取上げる。）
才助　君のお手際拜見致さん。
井伊　そちに負けるも殘念ゆゑ、なみ／＼ついでくりやれ。
兩人　はッ。

〽はッとばかりに左右より、大杯へ酌なすを、目を打ちすゑて才助が、見やる面をとくと見て、

ト此内井伊大杯を出す、茶道が運びし銚子を采女、主水取上げ酌をなす、才助は膝へ手を突き、これをきつと見る、井伊は才助の顔を見て思入あつて、

井伊　才助、肴いたせ。

才助　はツ、畏つてござりまする。（ト立掛るを、）

井伊　いや、肴はそちに望みがある。

才助　へえ、わたくしにお望みとは。

井伊　外でもないがその方の、眉間に残るその疵は、いかゞ致して受けたるぞ。

才助　さあ、これは。

井伊　此場の肴に話して聞せよ。

才助　はツ。

〽問はれてはツと才助は、暫し答へにためらひしが、酒に醉ひたる風情にて、

ト才助ぎつくり思入あつて、わざと酒に醉ひたるこなしにて、

恐れ入つたる其お尋ね、名におふ君は將軍家の四天王の隨一にて、智勇人に勝れたる掃部頭さまのお目に留り、いやはや面目次第もなきこと、向う疵は侍の晴とはいへど此疵は、唯今申上げ

ましたるづぶ六ぐでんに醉つた時、石に躓き轉びましたが、その時眉間を石で打切り、斯の如く呑倒れの證據を殘してござりまする。（ト生醉の思入にていふ、井伊思入あつて、）

井伊　夫の下々の諺に、生醉本性違はずと申す詞を存ぜぬか、いか程大酒をなすとても、性根を失ふその方ならず、なぜ僞りを申すぞ。

才助　いえ、僞りは申しませぬ。

井伊　然らば斯いふ掃部頭を、盲目なりと思つて居るか。

才助　何しに左樣存じませう。

井伊　そも關ヶ原の一戰より、續いて大阪兩度の大戰、軍功によつて四天王の列に加はる掃部頭、石で打つたる疵と申すが、刀疵か槍疵かを、見分からざるとそちは思ふか。

才助　さあ、それは。

井伊　我はそれと察し居れど、石で打ちしと申し張るか。

才助　さあ、それは。

井伊　掃部頭を盲と思ふか。

才助　さあ、

井伊　有體に仔細を申すか。
才助　さあ、
井伊　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
井伊　我は刀で突いたる疵と、目利なせしがいかゞなるぞ。
〽酒氣十分に直孝が、詞するどく言放せば、胸に應ゆる才助が、今は包むによしもなく。
ト井伊きつといふ、才助ぎつくり思入あつて、是非なきこなしにて、
才助　はゝ、驚き入つたる御眼力、いかにも眉間の此の疵は、刀疵にござりまする。
井伊　はゝお、さもあらん〳〵。
內藤　すりや、其方が面體の、疵は刀で切つたる疵とか。
平岡　流石は武士の本阿彌と、世上でお噂申す如く、
釆女　唯一目にて才助が、眉間の疵を刀疵と、
主水　お目利ありし御眼力、恐れ入つて、
皆々　ござりまする。

井伊 して面體のその疵は、いかなることで受けたるか、武士たる者の向う疵は憚る所あらざるぞ。包、まず仔細を話し聞かせよ。

才助 仰せではござりますが、此儀ばかりは才助が、唯今申上げ兼ねまする。

平岡 いかなる仔細あつてのことか、御老職のお望をもどくは第一無禮なり、疾々是にて申し上げよ。

才助 たとへ無禮になりますとも、憚ることのござりますれば、御免なされて下さりませ。

井伊 汝が我を憚りて眉間へ受けたる其疵の、仔細をいはぬは覺えあり、亂軍のなかゆゑにしかと面は見とめねど、原才助とは正しく變名、まことは武田の浪人にて、馬場三郎兵衛であらうがな。

〽眼力するどく井伊侯に、星をさゝれて是非なくも、

才助 眉間の疵より御老職が、お見留めありし上からは、最早包まずお明し申さん。これまで主人を僞りて原才助と申せしは、いかにも武田の浪人にて、馬場美濃守信房が嫡男同苗三郎兵衛信久なり。

ト これにて皆々びつくりなし、

内藤 扨は汝は武田の家臣、馬場美濃守が嫡男にて三郎兵衛信久なりしか。

平岡 何ゆゑこれ迄本名を、包み隱して奉公せしぞ。

釆女 これにも深き仔細ぞあらん。

主水　つゝまづ此場であかされよ。

才助　討死なすべき命延はり、浮世にひそみをつたるも深き望みのあることにて、武家奉公を望みしかど、眉間の疵に抱へ手なく、其名を替へてやう〳〵と當家へ住込む三郎兵衛、今日計らず身の大酒が媒となり御老職の、御前へ出てお相手なせしに、素性をお察しある上は眉間へ受けし此疵の仔細を是にて申上げん。

內藤　おゝ、その物語り承りたし。

平岡　して〳〵仔細は、

皆々　いかゞなるぞ。

才助　いで、お物語仕らん。

〽扇をとつて座を占むれば、常に變りし勇士のありさま、仔細いかにと人々が、固唾を呑んでひかへれば、三郎兵衛は威儀を改め、

ト才助扇を持つて前へ進み、きつと思入。みな〳〵顏見合せ思入。

父美濃守信房は、天正三年長篠表合戰の折討死なし、其後主君勝頼公御運つたなく情なや、天目山にてはかなき御最期、さしも名高き武田家も滅亡なして散々ばら〳〵。

〽袖に時雨のかわく間も、なく〳〵乳母と諸共に我は民家に人となり、
武術修業に事よせて、諸國を經歴致さんと年を重ねて北國より、西國四國打廻り大阪表へ出し折、
秀頼公には浪人を抱へたまふと聞きし故、
〽これ天の時到れりと、軍師眞田幸村を便り入城なして三十騎の、武者を預り一方の持口守る將となりしが、
慶長の亂治りて一度關東大阪と、和睦になりしも再び破れ、治世も忽ち修羅の街、數度合戰に及びしも、
〽諸葛臥龍が再來ともいふべき軍師幸村が、智略によつて利ありといへども、女儀の悲しさ淀殿が、大野が詞を信じたまひ眞田が諫めを用ひられねば、木村後藤もこぶしを握り、早大阪も是迄と討死なさん覺悟なし、打つていでしは元和元年五月六日の朝まだき、
〽天下分目の晴軍、（ト此内才助扇を持つて、物語のふりよろしくあつて、）

井伊　おゝ、其の時我君大御所には、茶臼山を陣所と定め、
〽白地に葵の紋附きし、旗を木の間に幾流れ、夏山風に吹きなびかせ、
而も魚鱗に備へを立て、

〽雲霞の如く關東勢、鬨を作つてひかへたり。

内藤　我もその折御供なせしが、越中少將忠直公には、

〽軍令背いて拔駈なし、眞田が出丸を的となし、手勢引連れ攻掛る、

才助　折しも繰出す我勢と、出合頭に打出す鐵砲、火藥の烟りに白晝も、

〽忽ち闇夜の如くになり、物のあいろも見えわかず、

井伊　此虛を計つて討取れと、御本陣にて惣攻の、

〽太鼓はげしく打ちたつれば、

采女　住吉浦にあたりたる、

〽磯の千鳥のむれたつ如く、

主水　敵も味方も入亂れ、

〽打ちつ打たれつやゝしばし、

平岡　火花をちらして双方とも、

〽勝負爭ふ折からに、（ト此内皆々物語模樣のふりあつて、）

才助　而も其時某は。（ト肥前ぶしの合方になり、）

森を小楯に陣頭より、はるか向うを見渡せば、赤地へ井筒に橘の紋を附けたる旗押立て一際目立つ赤備、勢ひこんで押寄する。

井伊　それぞ則甲陽に雷名轟く武田の勇士、山縣三郎兵衛昌景が名譽となりし赤備を、君命受けて其儘うつし、先陣なせしは外ならず、斯いふ掃部頭直孝なり。

才助　我も左こそと存ぜしゆゑ、天晴能き敵打取つて末世の譽れになさんずと、待ち得し所へ乘込み來り、互ひに姓名なのり合ひ、

井伊　その時我は大身槍、

才助　又某は太刀をもつて、

井伊　突いてかゝれば、

才助　ちやうと受け、

井伊　追ひつ追はれつ戰ひしが、

才助　双方得物を投げ捨て、

井伊　組んづほぐれつ捻合ふ内、

才助　言甲斐なくも組敷れ、既に此首かゝれんと危き場所へ味方の城兵、馳附來つてうちかくる透を窺

ひ刎返す、はずみに受けし眉間の疵、仔細はあらまし斯の通り、
へ直孝公と組討の次第をつぶさに物語れば、扨は勇士の果なりしかと、人々奇異の思ひをな
し、(ト此内才助井伊組打の物語り、兩人よろしくこなしあつて、)

井伊　我推量に違はずして、大阪落城の其砌組打なして討ちもらせし馬場信久でありしよな。

才助　實にものゝふの本阿彌と、世上で申す直孝公、並々ならぬ御眼力、恐れ入つてござりまする。

内藤　此程抱へし新參ゆゑ、そちが素性を知らざりしが、武田家譜代の勇士にて馬場美濃守が血統とは、
由緒正しき三郎兵衛。

平岡　かゝる勇士が計らずも、當家へ仕官致せしは、まことに武門の賜物なり。

釆女　柔弱非力の私共は、

主水　遠く及ばぬ人品骨柄、

新吾　嘸御前にも御滿足、

勘六　今日お席に列なりし、

千藏　私共に至る迄、

傳平　恐悦至極に、

四人 ござりまする。
才助 武田家盛んの其折は、四天王と賞されし馬場美濃守信房父の恥辱と存じまして、素性を包み今日迄土民の倅と僞りし、身の科御容赦下さるべし。
〽頭を疊へすり附けて、身の詫なせば直孝公、
ト才助平伏なす、井伊思入あつて誂への合方になり、
井伊 今物語りし元和の戰ひ、汝と組討なせし折首級を上げぬ殘念さに、脱捨て置きし兜をば、分捕なして持ちかへり、今に倉庫に納めあるが、今日計らず再會の土産に汝へ遣すぞ。
才助 扨は御手にござりましたか、その兜は先祖より傳來なせし重器にて、前立物は菊の折枝、今はいづれにあることか、竊に尋ね居りましたが、それをお惠み下さりますとか。
井伊 いかにも、返し遣さん。
才助 はゝ、有難う存じ奉りまする。
井伊 此再會に改めて、今一獻目出度く過せ。（ト一升入の杯をさす。）
才助 頂戴致すでござります、
〽又も差出す大杯、押頂いて左右より小姓が酌を待兼ねて、唯一息に呑みほして、

ト才助大杯を頂く、釆女、主水酌をなす、才助これをのんで、
憚りながら彦根さまへ。(ト鼻紙で杯を拭ひ出す。)

井伊　おゝ、我も目出度く過すであらう。

内藤　それ、お酌致せ。

釆女
主水　はッ。

〽なみ〳〵つぐを掃部頭、半呑みほし下に置き、
ト小姓兩人酌をする、井伊一ト口呑んで杯を下へ置き、

井伊　今引受けた此杯、今度は御主人内藤殿へ、お肴を所望致す。

内藤　御老職へさし上げんと、申しつけたお肴を、はたと失念いたしたり、急いで是へ持參致せ。

四人　はッ。(ト四人立掛るを、)

井伊　いや、そのお肴は手前より、おねだり申す品がござる。

内藤　改りたるそのお詞、してお望みとござりまするは。

井伊　いや、外でもござらぬ、これに居る馬場三郎兵衞信久を、手前へ頂戴致したい。

内藤　えゝ。

〽思ひ掛なき肴の所望に、

ト內藤は平田と顔見合せ、はッと思入れ、才助はうつ向き居る。

すりや彦根侯には、三郎兵衛を。

井伊 手並の程も戰場にて、篤と實見致し居れば、折入つて貴殿へお賴み、今日のさかなにお讓り下されい。

內藤 外ならぬ御老職のお賴みゆゑに、他事なれば仰せに任せお讓り申すが、武門に名高き武田の舊臣馬場美濃守が血統を、計らず家來に抱へしは當家へさづかる天の賜物、仰せをもどくは恐入れど、彼はお讓り申難し。

井伊 其美濃守が嫡子たる馬場三郎兵衛信久を、見出せしは此掃部頭、手前勝手を申す樣ぢやが、名乘らぬ前と思召し、枉げてお讓り下されい。

內藤 何樣お賴みござるとも、又と得難き勇士の信久、お讓り申し難ければ、此儀は御容赦下さりませ。

ト これにて井伊氣に障りし思入にて、

井伊 すりや直孝がかほど迄、貴公へお賴み申しても、お讓りなされて下さらぬか。

內藤 むゝ。(ト內藤つかへる。)

平岡　御老職のお賴みを、もどきまするも外ならず、勇士を惜しみまするゆゑ。
采女　餘儀なきことゝ思しめされ、
主水　御宥免下さりますやう。
新吾　偏にお願ひ。
皆々　申し上げまする。
井伊　お聞入なければ是非もなし。

〽かたへにありし大杯息をもつかずかたむけて、酒氣に日頃の癇癖起り、

ト井伊以前の大杯を取り上げ、ぐつと呑みほし酒に醉ひし思入にてきつとなり、

勇士を惜しみて讓られぬは、無理とは更に思はねど、我も一旦望みたるその念止り難ければ、幸ひこれに槍木太刀尊公と試合の勝負なし、勝ちたる方の家來となさん、此儀お聞濟み下されい。
内藤　折角のお望みなれど、なか〳〵もつて未熟の拙者、試合致すは思ひもよらず、
井伊　然らば誰ぞ名代に、家來衆を出されよ。
平岡　名におふ君のお相手に、なるべき者は、
四人　ござりませぬ。

井伊　うむ、主人に替る者はなきか。

〽いふに采女が進み出で、

采女　恐れながら、私が、主人に替りて此場にて、君のお相手仕らん。

〽言はせも果てず、

主水　いや、そのお相手は私が、勤めまするでござりまする。

采女　いゝや貴殿はひかへめされ、手前がお相手仕る。

主水　いゝやひかへぬ、わたくしが。

采女　いゝや、手前が。

主水　お相手致すで、

兩人　ござりまする。

井伊　まだ前髪の若年にて、感じいつたる志、なれども汝等兩人を相手になすはおとなげなし。

采女　すりや、お相手には、

兩人　なりませぬか。

井伊　我恥辱ゆゑ相手に致さぬ。

〽鶴の一聲是非なくも、さしうつ向いてひかふれば、三郎兵衛は顔を上げ、

ト釆女、主水ハッとひかへる、此内うつむき居たる才助顔を上げ酒に酔ひたる思入にて、

才助　心嬉しくなみ〴〵と唯今受けし大杯で、餘程酩酊致してござるが、拙者が主人の名代にお相手致すでござりまする。

井伊　むゝ、その方主人の名代なすとか、望む所のよき相手。

内藤　すりや三郎兵衛が彦根侯の、

平岡　此場でお相手致すとか。

釆女　勝負によつて馬場氏は、

主水　彦根侯へ隨ふか。

新吾　やはり當家へ仕ふるか。

勘六　試合の勝負が、

四人　仕官の定め。

〽いざや勝負と双方へ、獲物たづさへ立別れ、

ト井伊槍を持ち上手へ立掛る、才助は坐りしまゝ木太刀を持ち兩人思入あつて、

井伊　いつぞや大阪落城の、その折汝に出逢ひしも、
才助　彦根侯には大身槍、我は手なれし太刀なりしが、
井伊　今日又も此場にて、
才助　試合の勝負も、
井伊　太刀と槍。
才助　いで、お相手を、（ト立上り、酒に醉ひし思入にてひよろ〳〵となり、）仕らん。
トしやんと留まる、是をきつかけに鉢の木の謠になり、
〽扨御前には諸侍其外數人並居つゝ、目を引き指をさし、笑ひあへる其中に、
ト能本行の鳴物になり、井伊槍をしごいてかまへる、才助ひよろ〳〵しながら木太刀をさし附ける、井伊透なくて突けぬ思入。
これは大變、御殿がくる〳〵廻つて來た。
井伊　その酩酊をさましてくれん。
ト突きかける。右能の鳴物にて才助ひよろ〳〵と立廻りよろしくあつて、井伊をきつと見て、
才助　はてさてこれはめんえうな、彦根さまが二人に見ゆる。

井伊　何を。

才助　あれ〳〵、二人、三人に見ゆる。

ト生醉の立廻りよろしくあつて、トゞどうと下に居てそのまゝうつ伏になる、井伊エイと聲かけ、槍を突きかける、才助跡へ體を引き起上つて木太刀で受け、きつと見得。これより鳴物早めてはげしき立廻りちよつとあつて左右へ別れ、井伊槍をかまへ、才助木太刀を差附ける、井伊感心せし思入にて、

井伊　内藤殿はいかなる果報か、よき御家來を得られしよな。

ト槍を置き下に居る、これにて才助も木太刀を下に置く。

内藤　すりや、彦根侯には。

井伊　及ばぬ手練に約束ゆゑ、望みは思ひ止つてござる。

平岡　然らばこれなる、

皆々　三郎兵衞は。

井伊　千石以上に取立てゝ、長くお目を掛けられよ。

内藤　是迄家例にござらねど、千五百石に取立てまする。

采女　すりや、千五百石に。

主水　お取立とな。

才助　有難う存じ奉りまする。（ト平伏する。）

井伊　おゝ、目出度く祝せ。

才助　はツ。（ト扇を持ち立上り、）

〽今こそ勇め此馬に、打ちのりて上野や、（ト跡下座へとり、）〽佐野の船橋とりはなれし本領に安堵して、帰るぞ嬉しかりける。

ト下座の謡になり、才助扇を開き舞ふことあつて、拍子を踏むを木のかしら、段切の見得にてみなみな引張りよろしく、右の鳴物にて、

ひやうし　幕

大杯觴酒戰强者（終り）

四十七刻忠矢計

義士銘々傳之實録稀書

御贔屓様より贈られて御進に取りあへず今曉六つを發端に立て幕なし道具を山と掛け其時々に合詞川と答へて本庄の七つに仇を討果せ引上に鷄鳴の勝鬨單鬨より作嚣迄を狂言の榮

敵齢　夜當　五十　三刻　徒黨　人數　晝當

「十二時忠臣藏」は明治四年十月、新富座（當時の守田座）に書卸された、作者五十六歳の時である。義士に關する講談や俗說に據つたもので、明け六つ時から明け七つ時まで、十二時に書分けようとした趣向であつたから、十二時の忠臣藏と呼ばれ、好評を博した作であつた。特に大石が後室葉泉院と訣別するの場と、左團次の小山田を中心とした件とが最も評判であつた。左團次の小山田は丸橋以來の當り役と評せられた。

書卸しの時の役割は、河原崎權之助卽ち後の九代目團十郎（高の師直、大星由良之助、高田郡三郎、小林平八、玄宗皇帝、唐の哥如官、大鷲文吾）、岩井紫若（官左衞門娘お組、お蘭の方、葉泉院、楊貴妃）市川左團次（小山田庄左衞門、八百屋元助、清水大學、竹林唯七）、中村翫雀（戶田の局、小汐田又之丞）中村仲藏（近藤源四郎、井桁玄蕃、內山官左衞門、堀部彌次兵衞、門番半左衞門）、河原崎國太郎（又之丞女房おきさ、湊屋抱へおなみ、大星力彌、兵左衞門娘お雪）、市川子團次（千崎彌五郎）、岩井紫松（內山の下女おしづ、お雪の母おむつ）、市川幸升（磯貝重三、雇ひ嗅おくら）、中村翫太郎（楠屋十兵衞、原鄉右衞門）、中村鶴藏（茶道竹齋、燗酒屋女房おいち）等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪で、葉泉院屋敷外の場、權之助の由良之助、左團次の清水大學である。

大正十四年八月

校訂者



四十七刻忠矢計（十二時忠臣藏…九幕）

序幕

明六ッ時　高輪八山下の場
朝五ッ時　泉岳寺會合の場

〔役名――大星由良之助、小山田庄左衞門、井桁玄蕃、矢間重太郎、千崎彌五郎、原郷右衞門、大星力彌、近藤源四郎、小寺十內、近松半六、間瀨孫八、礒貝十藏、相原伊助、志馬三郎兵衞、角野十平、泉岳寺了岳和尙。湊屋の抱へお浪、其他。〕

（八つ山下の場）――本舞臺向う二段に浪手摺、遠見の前へ黑幕を釣込み、上手八つ山裾の心にて、石垣の上に高き草土手の張物、此蔭より出這入あり、下手葭簀にて圍ひし出茶屋、總て八つ山下夜の體。

爰に夜そば賣荷をおろし、○△の駕籠かき明駕籠を置き、そばを喰て居る、此見得浪の音にて幕明く。

○　蕎麥やさん、がうぎに鹽がからいぜ。

そば　ちつと煮詰つたと見えます。

△　さうぢやァあるめえ、おめえの水ツ洟がはひるので、大方鹽がからいのだらう。
そば　成程、此雪空に風を引いて居りますから、隨分水ツ洟もはひりませう。
○　其替り鰹節が高いから、出しはろくに遣ふめえ。
△　何しろ熱くして、もういつぺいくんなせえ。
そば　お氣の毒でござりますが、もうやまになりました。
○　何だ、もう仕舞か。
△　それぢやあ湯でもくんなせえ。
そば　どうで明けてしまふ湯だから、たんとおあがりなさいまし。（ト駕籠屋二人湯を貰つて呑みながら）
○　蕎麥やさんに時を聞くのは、昔から極つて居るが、もう何時だらうの。
そば　さやうさ、今しがた七つ半を廻りましたから、もう直に夜が明けませう。
△　今時分蕎麥やさんに出ツくはすのは珍らしいが、お前は今迄歩いてゐたのかえ。
そば　引け過を當てに四つ過から出まして、いつも八つ時分には仕舞ますが、昨夜はどうしてかしつかり殘りまして、たうとう夜明しをしました。
○　何でも稼業程つらい物はねえ、己達も七つ歸りの客をのせて、赤羽根迄行つて來たが、此雪空の

△ 風に吹かれて、からだがひりひりするやうだ。

けふは師走の十四日だといふに、高のしれた錢を取つて草鞋の五足づゝも切つてしまふのだから

よけいに寒からうぢやねえか。

○ 然し腹に身がはひつたので、やう〳〵少し暖になつた。

ト此内駕籠屋かます煙草入より錢を出し、そばやへ渡して、

△ それ、是で二人の分があるぜ。

そば 有難うござります。

ト やはり波の音になり、上手より女郎屋の若い者喜助湊といふ印ある弓張提灯を持ち、後より佐助

伊助附き出來り、

喜助 もし〳〵、ちつと聞きたい事があるが、おめえ方はさつきから爰に居なすつたか。

そば はい、もう少しさつきからをりました。（ト駕籠屋喜助の顔をすかし見て、）

○ もし、おめえは湊やの、喜助さんぢやござりませんか。

喜助 おゝこなた衆は新宿の駕籠やさんだな。

○ 何ぞ尋ね物でもござりますかね。

喜助　外でもねえ、内の抱のお浪さんが、今しがた逃出して、内中が亂騷ぎ、それから直に手分をして出口々々へ追手を掛けたが、因果と昨夜はおれがねず番、旦那にしたゝか小言をいはれて此寒いのにさがしに出たが、どうしても見當らねえ。こうおめえ方、お浪さんを愛らで見かけはしなんだか。

○

喜助　私共は今赤羽根迄仕事に行つて來たが、そんな者は見かけませぬ。

伊助　はてな、一筋道の高輪で逢はないといふからは、御殿山から裏手を廻つたか。

佐助　それとも鮫洲の方へ逃げたかしらぬ。

○　女の足だから、まだ遠く行く氣遣ひはねえ。

喜助　さうして相手でもありますかね。

そば　どうで女郎衆が逃げるのだから、たれか差金を遣ふやつがあるだらう。昨夜はさういふ筋の客も上らねえから、別にかんゝ付きやうがねえのよ。

喜助　何にしろ、雲をつかむやうな尋ね者でござりますな。

伊助　目黑から麻布の方へは、別に人が出て居るから、之から本芝の方を尋ねよう。

何でも氣の付かねえ所に、隱れて居るに違ひはねえ。

佐助　此寒いのに、ばか〳〵しいめに逢ふものだ。

喜助　もしお前方も見當つたら、それだけの禮をするから、ちよつとしらせてくんなせえ。

○　承知でござります。もし見掛けましたら、直に見世迄知らせませう。

△　とかく駈落者には、駕籠舁きがいつでも引合に出るやつさ。

喜助　それぢやあしつかり頼んだよ。どれ、一と廻りさがしてこよゥか。

ト喜助先に若い者二人附いて下手へはひる。

そば　どれ、わつちも早く歸つて、一と寐入りやらかしませう。左樣なら、大きに有難うござります。

ト荷をかつぎ下手へはひる。

○　こう棒組、湊やの内でお浪が逃げちやア氣を揉む筈、あすこの内で一番客取だ。

△　いつも本所迄かついで行く、源四郎さんの相方も、慥あのお浪であつたな。

○　さうよ、あの女にあつくなつて、足を近くおいでなさるが、色といふ樣子でもねえから、あの人の所へ逃げて行きもしめえ。

△　大方外に色男でもあるのだらう。

○　それはさうと、折角蕎麥を喰つてあつたまつた所を、飛んだ事に懸りあつて、すつかり冷めてし

まつた。

△　早く内へ歸つて、焚火でもして當らうかの。

○　違えねえ、さあ〳〵

兩人　歸らう。

ト兩人明き駕籠をかつぎ行懸る、波の音早き合方ばた〳〵になり、上手よりお浪縞物の仕掛を羽折り手拭ひを冠り、上草履を履き走り出で來り、下の方へ行くを兩人すかし見て囁き合ひ引留め、

○　もし〳〵、おまへはお浪さんぢやねえか。

△　今時分どこへ行きなさるのだ。（トお浪兩人をすかし見て、）

お浪　おまへ方は新宿の駕籠屋さん、爰で逢つたのは丁度仕合、どうぞ私の行先迄、駕籠にのせて下さんせ。

○　とんだ事を言ひなさえ、今湊やから若い衆の追手が掛つたお浪さん、駈落者と知りながら、どうしてのせて行かれるものか。

△　それよりは是から直に、お前を見世へ連れて行けば、うまい酒の呑める仕事。さあおれ達と一緒に歩びなさえ。（ト兩人立掛る。）

お浪　あゝもし、待つて下さんせ、成程私は駈落者でござんすが、是には種々様子があつて、今宵の内さる所へ行かねばならぬといふ譯は、頼みに思つた夫の心が、さあ心一つに納め兼ね、命にもかへられぬ悲しい事が出來た故、うちを拔出し逃げては來たれど、遠い夜道を女の足、殊に斯うした姿故、見咎められゝは身の難儀、お前方も不斷から見ず知らずの人ではなし、私をどうぞ助けると思うて見世へ知らせずに、駕籠に乘せて行きさき迄、送り屆けて下さるやう。もし、私が一生の、頼みぢやわいなあ。（ト是を聞き兩人思入あつて、）

○　成程女郎衆は女郎衆だけ、行屆いた殺し文句、さう事を分けて頼むものを、滿更無慈悲な事もされめえ。

△　さうだ〳〵、駕籠屋が駕籠へ乘せるのは、生業だからこつちの勝手、しかし湊やから骨折賃を貰ふ所を貰はずに、こつそり送り屆けるにやあ、並の駄賃ぢやあやり難いが、そりやあお浪さん承知かえ。

お浪　其事ならようござんす、おまへ方を頼むからは、四つ星位は私も承知。（ト言ひながら、お浪掛守を取り、中より二兩出して紙に包み、）何れ跡でお禮はするが、まあ是を取つて置いておくれな。

ト金を出す、此時件の掛守を落す、駕籠屋金を受取り見て、

○　おい虎や、二兩の仕事だ。先一兩づゝの胸ぐらで、やる所迄やらうかの。
△　さうよ、湊やへ知らせた所が、高が二人へ二分か三分、それよりやあおなみさんの、味方に付くのが上分別だ。
お浪　そんならおまへ方、急いで行つて下さんすか。
○　さうしておまへ、どこ迄行くのだえ。
お浪　さあ、行先は本所でござんす。
△　本所なら、あの源四郎さんの所かね。
お浪　いえ〳〵源四郎さんは、今夜も丁度宵から上つて、私の所に遊んでなれど、あの人にも隱してちつと外に行く所があるわいな。
○　何にしろ本所迄、一兩づゝなら割事だ。
△　跡でいゝぶを喰へばとて、見た金は見のがせねえ。
お浪　そんならどうぞ、少しも早く。
○　見咎められちやアむだ骨だ。
△　早く駕籠へ乘んなせえ。

ト是にてお浪駕籠へ乘り、たれをおろし、此間より仕掛の裾すこし出てゐる事、兩人捨ぜりふにて駕籠をかつぎ下手へ行かうとする。此時下手より以前の若い者三人出で、

喜助　おい、其駕籠ちよつと待つて下せえ。

○　おめえは喜助さん。

△　なんで駕籠を留めなさるのだ。

兩人　何でもいゝから、待つて下せえ。（ト三人にて棒鼻をおさへ留める、是にて餘儀なく駕籠をおろし。）

○　もし、おめえ方はをかしな事を言ひなさるが、何も怪しい駕籠ぢやあねえ。

△　こりや朝歸りのお客さまだ。

喜助　お客さまなら、たれを上げて見せてくれ。

○　いゝや見せる事はならねえ、中は立派なお武家さまだ。

△　わるく留立しなさると、おまへ方の首にかゝりやすぜ。

喜助　べら棒め、立派なお武家の乘つた駕籠から、仕掛の裾が出るものか。

伊助　こいつァお浪さんに違えあるめえ。

○　それ知られたら百年目、

△たゝんでしまへ。

ト波の音になり、兩人息杖にて打つてかゝる、三人是をさゝへちよつと立廻り、トヾ若い者兩人息杖をひつたくらうとする、駕籠屋とられまいとする立廻り、此内喜助は駕籠の所へ來り、たれを上げて見て、

喜助　扨こそお浪さん。

お浪　喜助さん、どうぞ後生だから見のがして下さんせ。

喜助　えゝ馬鹿な事を言ひなせえ。

トお浪を駕籠から引出さうとする、此前方より源四郎好みのかづら袴大小下駄掛、身持惡き侍の拵へにて出て窺ひ居て、此時つか〳〵と寄つて喜助を突きこかし、駕籠のたれをばたりとおろし、後へかこふ、喜助起上り、

喜助　何をしやアがる。

ト立掛るを源四郎ひぢにて當てる、是にて喜助たぢ〳〵となり、どうとなつて悶絶する、此内かごやは若い者兩人をさん〴〵に打ち、兩人逃げてはひる。駕籠屋兩人源四郎を見て、

○やあ、あなたはいつもお乘せ申す。

△ 割下水の旦那さま。

源四 これ、（ト駕籠屋○に囁く、○は△にさゝやく。）二人共骨は盗まぬ、ちつとも早く。

兩人 合點でござります。

ト駕籠をかつぎ兩人逸散に花道へはひる、源四郎思入あつて、

○ そんなら旦那、先へ行つて待つて居ります。

源四 お浪が逃げたと聞いた故、あの湊屋に居られもせず、眞闇暗を歸つて來たが、爰で彼奴が源四郎の手にはひるとは不思議な仕合せ、是から行つて往生づくめ、口說いてしつぽりつもる思を、

ト雪おろしかすめて、日覆より雪ちら〳〵降る、源四郎襟の冷たきに心付き、

昨夜から催したが、こりやたうとう雪になつた。どれ小降の內に參らうか。（ト行きかける、此時お浪が落せし以前の掛守に躓き取あげ見て、）こいつは慥にお浪が守、そんならさつき落したのか。（ト何心なく明けて見て、中より書物を出し、）此書面が小汐田と取かはしたるたしかに起請。

ト空にかざしても讀めぬ思入、此時ばた〳〵になり、花道より勘六半合羽判人のこしらへにて、逸散に出來り、源四郎に突當りてどうとなる、源四郎は書物に氣を取られて居る。

勘六 何だ往來ぱたに立つて居やァがつて、人の來るのが見えねえか。

源四　いかにも、暗くツて文字がよめぬ。

勘六　べらぼうめ、直に夜が明けらあ。

ト此時烏笛、知らせなしに正面の黒幕を切つて落す、向う高輪沖夜明の遠見、是にて白みし心にて、源四郎書附を讀み、

源四　こりや起請と思ひの外、又之丞が離縁狀。

勘六　さう言ふお聲は。（ト額をのぞきこむ、源四郎も見て、）

源四　おゝ勘六か。

勘六　旦那かえ。

源四　丁度貴樣に逢ひたい所だ。

勘六　わつちも少し話があります。

源四　何にしろいゝ所で出ツくはした、早速ながら、（ト勘六に囁き）な、かういふ譯だ、何分頼むぞ。

勘六　こいつアおもしろい仕事だが、そんなら玉はお前さんが。

源四　たつた今引上げた、是から先は貴樣の骨折。

勘六　そんならどうぞ前祝ひに。

源四　又欲張か、こまる男だ。（ト源四郎紙入を出し、小判三枚を算へる。此時六つの鐘鳴る。）

勘六　もし旦那、丁度明六つ。

源四　それ金だ。（ト出す、勘六取つて頂き、）

勘六　いや有難い、ときに旦那、是から直に本所へ出帆としませう。

源四　おれも跡から仕かけて行くが、昨夜からの持越しで、腹加減が悪いから、湯へでもはひつて一杯やるが、貴さま是から一緒に行きやれな。

勘六　それは何より有難い、直さまお供を致しませう。

源四　さあ、大降にならねえ内に出かけようか。

トこんな事を言ひながら、兩人並んで花道へ行く、浪の音烏笛、浪の音のやうに雪おろしをかぶせる、兩人歩きながら、

勘六　ちら／＼やつて來ましたが、雪を見ながら朝酒は、格別旨くのめませう。

源四　それはいゝが、朝からやらかして、肝腎の掛合に役に立つかえ。

勘六　それは大丈夫、お案じなさるな、乍憚一升や三升やらかしても、

源四　これサ、そんなに呑まれてたまるものか。

ト此せりふにて花道へはひる。是と一緒に此道具廻る。

(泉岳寺の場)――本舞臺一面平舞臺、向う彫物欄間、廣大なる位牌の棚、鷹の羽の紋付し判官の位牌をかざる、此前に須彌檀打敷を掛け、禪家の佛具よろしく並べ、此左右扉を明け附けたる裏を見せ、色即是空見性成佛と記したる旗を兩方へ建て、尤も旗竿入用の事。上下舞臺一面へ薄縁を敷詰め、道具替りと一時に花道へも薄縁を敷き、揚幕へ杉戸を取附け、總て泉岳寺鹽冶家位牌堂の模樣、上手に由良之助羽織袴大小にて住ひ、つゞいて小山田羽織大小にて住ひ、下手に矢間羽織大小、千崎同じ拵へにて住ひ、小寺磯貝其外の義士、思ひ〳〵に浪人の拵へにて宜しく居並び、ずつと下手に住持了海和尙、所化兩人控へ、銘々に茶を出し、廣大なる器にまんぢうを盛上げ出してあること、此模樣きんの入りし合方にて道具留る。

了海　これは〳〵大星氏をはじめ、何れも早朝よりの御參詣、御苦勞千萬に存じまする。

由良　明日は亡君の御命日故、歲末の拜禮仕らん爲、是なる方々と申合せ、久々にて由良之助參詣仕ツてござる。

了海　厚き心の各々方、此雪中にようこそ御入來、粗菓ながら寒氣の節故あたゝかに蒸したる品、冷め

ぬ内おとり下されい。

由良　かならずお構ひ下さるな。

小山　いやなに、御老體の長老、定めてお見忘れもありつらん、拙者事は殿の御在世の砌、御側勤にて罷有りし、小山田庄左衛門でござる。

矢間　拙者は御馬廻を相勤めたる、矢間重太郎でござる。

千崎　御近習役たりし、千崎彌五郎でござる。

小寺　拙者事は小寺十内、

磯貝　磯貝十作、

間瀬　間瀬忠太夫、

志馬　志馬三郎兵衛、

角野　角野十平次、

岡野　岡野新右衛門、

木浦　木浦岡右衛門、

星野　星野藤藏、

奥田　奥田唯右衛門、
三村　三村次郎、
小山　何れも鹽冶の祿を食み、
矢間　殿の御恩を受けたる者共、
千崎　是迄參詣、
皆々　いたしてござる。
了海　何さま御姓名を承はれば一々に存じ出す諸士の面々、鹽冶家御退去の後はいかゞとお案じ申せしに、何れも堅固の體、祝着至極に存じまする。
由良　何は格別長老へ對し、御詫の仕る事は、殿の御遺骸を納めたる當山へ日頃の御疎遠、尤も拙者事は赤穗離散の後都山科に住居致し、爰とかしこと隔たれば、夫故參詣も相ならず、其外諸士の面々も或は遠國他鄕へ移り、まつた當地に住ひの者も、活計の爲に行ひを亂し、旦帶刀致せし者も夕には脫劒なし、止む事を得ず下賤の行狀、他見の見苦しきを恥辱と存じ、されば後室葉泉院樣まつた御舍弟縫之助樣へ時々御機嫌も伺はず、まして御廟所へ參詣の儀も怠り勝、亡君尊靈の思召も如何と存じ居つたる所、此度由良之助仔細有つて出府致し、其餘の面々も折よく當地に

矢間　罷り合せ、過半人數も打揃へば、今日俄に申合せ、是迄集會仕りました。さりながら亡君御在世の砌には、御先祖代々此御法會も、鹽冶家の格式にて、諸家中一同綺羅を飾り、御追福を營みしが、

小山　今は昔に事替り、高貞公の御墓所へ、一つの花を備へんにも、心に任せぬ浮浪の我々。

由良　あるに甲斐無き身の上を、杲老御推察下されい。

了海　何がさて昔善美を盡せし大法會より、只今の御身分にて、一滴の水をお手向けあらば、泉下にまします冷光院殿にも嘸かし御滿悦、愚僧も今日は法筵を開き、一山の僧侶を集め、御經讀誦致すでござらう。

由良　其儀は何分、お賴み申す。

了海　して御子息力彌殿には、久々お目にかゝらざりしが、今日は御參詣めされぬか。

小山　力彌殿にも御同道なれど、先刻由良之助殿のお指圖にて、亡君お石碑の掃除萬端、

矢間　鄉右衛門殿諸共に、其餘兩三人の者を召連れ、御廟所へお出でゞござる。

了海　其儀なれば、伴僧共に申付けんもの、雪中と申し御苦勞千萬。こりや其方共、爰へお伴ひ申したがよい。

所化　畏りました。（ト所化兩人立ちかゝる、此時花道の揚幕にて、）

力彌　あいやお出に及ばぬ。大星力彌只今それへ。

ト合方になり、花道より、力彌羽織袴大小の拵へ、鄕右衞門羽織袴大小、其の他三人何れも義士の裝、浪人の拵にて出で、本舞臺下手へ來り、

原　父上のお指圖により、是なる鄕右衞門殿諸共に、御廟所へ罷越し、我々一同お石碑を掃き淸め、雪を拂つて香華を供へ、

義士　御燒香の用意萬端、

三人　整ひましてござりまする。

由良　それは〳〵、悴は兎もあれ各々方、寒氣の折から御苦勞千萬。

矢間　さゝ、是へ〳〵。

五人　然らば御免下されい。

ト力彌由良之助の傍へ住ひ、みな〳〵宜しく座に着き、由良之助思入あつて、

由良　彌五郞殿、最前の品是へ。

千崎　はツ。（ト立上り佛前へ行き、白木の臺に百兩包みを載せたるを持來り能所へおく、由良之助こなしあつて）

由良 長老、是へおすゝみ下されい。

了海 はッ。(ト前へ出る。)

由良 扨改めて申入るゝは、我々共昨年以來今日迄は主君に仕へず、かね〴〵公邊へ願ひ置きし御舍弟縫之助樣の御身の上、いかゞと相待ち居たる所、御家再興の御沙汰も無く、御本家廣島公へ永のお預け、頼みの綱もきれし故、思ひ〳〵に當地を立退き、或は他家へ仕官いたし、又は武士の道を捨て町人百姓になり下り、他國へ赴く者もござれば、猶更もつて此後は廟參の儀も心に任せず、尊靈の御墓前に拜禮なすも今日限り、先差當り心にかゝるは、來る三月の御法會我々當地に有合さずとも、何卒長老の計らひにて、御經讀誦下さらば、諸士一同の大慶、それに付些少ながら御法事料の金子寄附仕れば、是をもつて亡君御追福の營み、宜しく御周旋下さるやう、此儀偏に賴み存ずる。(ト右の包金を出す、了海思入あつて、)

了海 それは〳〵お名殘惜しき各々方、たとひ他鄕へ赴かるゝとも、御法會の儀は當院にて取行ふが寺門の役目、必ず共にお案じあるな。まつた心をこめられし御法事料の儀は、お詞に任せ受納仕る。(ト右の金を頂いて所化へ渡し、)さるにても、今日限りと承れば、何は無くとも心ばかり、粗酒一獻差上げたうござれば、暫時お控へ下されい。

由良　それは千萬かたじけなうござる。

矢間　いつに替らぬ長老の御芳志、此後の參詣覺束なければ、御禮申すも今日限り、

小山　それに付ても、水魚の交はり致せしに、

原　是より諸所へ離散なし、

小寺　廻り逢ふ日も知れざる身の上、

力彌　暫し是にて朋友の名殘を惜しめば長老には、お構ひ無くと御退座下され。

了海　左樣ござれば各々方、いつ迄なりと御遠慮無く、是にて御休息なされませ。

ト住持先に所化兩人件の金を持ち奥へはひる。由良之助思入あつて、

由良　いやなに各々方、兼々申合せし如く、今日參詣に事よせて、人數も過半着到致し、先は大慶、種々申し談ずる密事もござれば、それ。

ト思入、みな〳〵心得、上下折廻しの杉戸を明けて見通しになる、由良之助四邊を見廻し居直つて、

何れも、お進み下されい。(トみな〳〵前へすゝみ思入。)扨各々、只今此席にて改め申すには及ばねど、去年三月御主君御大事の砌、我人共に魂を失ひ、一身治定の道を知らず所存一決なさざる折柄、此良金が心腹をひそかにお明かし申せしより、まこと忠義の各々方、つひに拙者に御同意

あつて、後日の大望を思ひ立ち、恥を忍んで城地を立去り、今日只今迄時節を待つの千辛萬苦、何をもつて是に比すべき、然るに漸々時來つて、不倶戴天の志、成る成らざるは知れざれど、いよ〳〵今宵と定めたるは昨夜評定の席に於て、逐一申述べたる如く、此期に及んで各々方の本心動く可きにあらねど、千丈の堤も螻蟻の一穴より崩るゝ習ひ、今大望の際となり、萬一變心などなすものあつて事の破れに及ぶ時は、則ち冷光院殿尊靈の御恥辱と存ずる故、再應御所存の程を承る。如何に何れも、今宵決定の一大事、よもや異變はござるまいがな。

ト思入あつて言ふ。

原　はッ、其儀は昨夜鄉右衛門が、連判狀に引合せ、一々本心聞糺し、貴殿へ通達いたした通り、

小山　忠義の二字を膽にゑりつけ、

矢間　思ひ詰めたる日頃の大望、

千崎　時節到來の期に及び、

小寺　我々異變は、

皆々　ござりませぬ。（ト是にて由良之助思入あつて）

由良　はて、亡君尊靈の御位牌の前において、一同の誓言頼もしく。此上は四十餘人が忠肝義膽の鋒

先にて、鐵石の堅きをも碎かん事はいと易し、其御心底を承る上は、只今是にて良金が御目に掛ける品こそあれ。(ト手箱の内より師直が屋敷の繪圖を出し。)今宵の事件に各々一同知らで叶はぬ孫吳が祕書、何れも篤と御披見めされい。

皆々　はッ。(ト小山田、矢間眞中へ、右の繪圖面を開き皆々双方より見て、)

皆々　して此品は。

由良　それぞ則ちさいつ頃、中浦、鳶の森御兩所が反間苦肉の奇計により、我手に入れし繪圖面にて、高野殿の御邸宅、地理は元より御建物、内外すべて坪割まで、其儘寫す六韜三略、

原　扨は敵地の、

皆々　繪圖面とな。(トきつぱりとした合方になり、皆々繪圖を取卷き見て、)

力彌　ほゝう、實や天の時は地の理にしかずと、闇夜に燈火を得たるが如く、進退かけ引自由をなす、

矢間　先づお屋敷は乾に向き、表御門に塗出しの桐の薹の御定紋、敵地の案内目の當り、

小山　仁木殿は北隣、南隣に續きしは、石堂殿の總高塀、

千崎　門內總て百間餘り、此玄關の正面より右へ廻れば遠侍。

原　表座敷は廣書院、爰が竹の間、孔雀の間、

小寺　庭は築山泉水の、橋を越えれば稲荷の社、

士一　馬場の左は植込みにて、裏手は總て堅固の練塀、

士二　爰に土藏の棟を並べ、厩に續くは雜物藏、

士三　是より西の長屋造は、軒を並べし家中の住居、

士四　扨奥向は表より、鈴の廊下を辰巳へかけ、

士五　棟をへだてゝ一樣に、建つらねたる座敷數、

士六　間每々々の中央に、居間とおぼしき揚疊、

士七　靱柱に孫庇、左右自在に通の細どの、

力彌　緣側つゞきの次の間は、正しく宿直の詰所ならん。

小山　もし近習小姓の者、主人の大事と駈集り、

矢間　多人數揃つて我々に、刃向ひなして防ぎなば、

千崎　又味方にも力を合せ、是なる襖を小だてにとり、

力彌　此廣庭に切抜けて、人數をまとめて此方へ廻り、

小山　爰をしきつて、

矢間　かう攻めて、

千崎　寢所へふん込み、

皆々　目ざす敵を、

由良　討つ討たざるは天運なれど、かく嚴重なる敵地の内へ、込入らん事たやすからず、此良金が思ふには、先づ御屋敷の四方を取巻き、繼階子にて一兩人、外構への塀を乘越え、内より竊に開門なし、大手は魚鱗搦手は、長蛇に備へて討入らん。

矢間　して／＼前後に別るゝ人數は。

由良　先づ表御門は、身不肖ながら此良金が隊長にて、同士の者共二十三人、

小山　して裏門へ向ふ者は。

由良　鄉右衞門殿に力彌を添へ、其數合せて二十四人。

千崎　して／＼夜討のかけ引は。

由良　山鹿流の太鼓を合圖に、或は進み、或は退き、右往左往の混雜に、敵と味方を分かざる時は、山と川との合詞。

矢間　して〳〵我々持參の獲物は。

由良　太刀はかさねの厚きを帯し、着込は堅固にして輕きをえらみ、家の内なる働は弓に半弓、槍の柄は短き方を便利となす、しかし我々四十餘人目ざす敵は只一人、漫りに老人婦女子等へ疵付けぬやう心を付け、逃ぐる者は追ふに及ばず、刃向ふ者は討つて捨て、ひとへに日頃の本望を、達せん事を心がけ、匹夫の勇に誇るべからず、誰にもあれかの御方の御座に近付き奉らば、呼子をもつて味方を集め、一同御前に拜謁なし、謹んで御首級を申請けん事こそ肝要なれ、必らず共に禮を失ひ、法を亂すのおこなひは、（ト言ひかけ思入あつて、）こりや御銘々に御得心も有る可き事、今改めて良金申すまでもござらねど、事の序に演舌致す。何は扨置き今宵は何れも、拔群のお働を、何卒拜見が致したい。

矢間　何が扨、大星氏の采配ならねば、今宵の勝利、心許無き我々共、

小山　只今のお指圖、殘る方無き軍慮の極意、

千崎　一々發明、

皆々　いたしてござる。

由良　數ならねども良金が、賢しげなる御指圖、各々お用ひ下されば、拙者が大慶此上無し。それは

格別、差當り大望の際に捨ておかれぬは同士の面々、定めて永の浪々中、借財は申すに及ばず、諸式買掛り等もあるべき事、只今此席に洩れたる者もござれば、小山田氏には御苦勞ながら、先刻お渡し申したる二百兩の金子を以て、銘々に聞合せ、借財の類返金の儀を、宜しく御周旋下されい。

小山　心得ましてござりまする。（ト由良之助矢間に向ひ、）

由良　まつた重太郎殿には、是より織部氏の浪宅へござつて、今晩の一儀御通達下され、其上我々出陣の儀式、形ばかりなる用意の儀、お計らひ下さるやう、此儀は貴殿へお頼み申す。

矢間　はゝッ、其儀は兼々うけたまはる通り、則ち是より彌次兵衛殿の浪宅へ罷越し、出陣の用具を取調べ、門出の用意仕らん。

小山　拙者とても同士の面々、買掛りの借財を、ことごとく返金なし、死後の恥辱にならざるやう、委細周旋仕るでござらう。

トばたばたになり、花道より所化走り出で、下手へ來り、

所化　大星氏へ申上げまする。

由良　何事でござる。

所化　只今御廟所へ井桁玄蕃様、御參詣にござりまする。

由良　扨は昨日申入れたる故、舍兄入來とあるからは、某も衣服を改め、御墓所にて面會なさん。

所化　然らば御案内仕ります。

由良　何れも暫時御容赦下されい。(ト所化案内して由良之助奥へはひる。)

矢間　只今大星氏のお指圖なれば、是より織部の浪宅へ、

小山　庄左衞門も大事の役目、萬事の手つがひ仕らん。

原　御兩所共に御苦勞千萬、小山田氏には取分過ち無きやうに、お心掛下されい。

小山　なに、庄左衞門に過ちなきやう致せとは。

原　郷右衞門が心配致すは別儀にあらず、忠義拔群の其許なれど、生れ付て酒を好み性根を亂すが一つの疵、殿御在世の砌にも、大酒に前後忘却なし、度々の御勘氣蒙られしを、大星氏の取なしにて、つひに異議無く相濟みしは、是偏に君の御慈愛、されば此度の一儀に付ても、由良之助殿御心配あつて、嚴しく御異見、それ故貴殿も身を愼み、是まで禁酒と承りしが、最早我々が大望の成る成らざるも只一日、此期に及び庄左衞門殿、必ず一身を過つやうな、心得違ひを召さるゝな。(ト思入あつて言ふ、小山田面目なき思入にて、)

小山　ハヽア鄉右衞門殿のお心添、庄左衞門身にこたへ忘却は仕らぬ、必ずお案じ下さるな。
原　其お詞を承り、拙者も安堵仕る。
矢間　原氏の御教諭は、庄左衞門殿ばかりで無く、我々一同へよき御異見、
千崎　かゝる義を企つれば、我人共に身を愼み、
力彌　忠義の二字を肝要と、時節を待つも最早一日、
小山　猶一心の臍を堅め、腕を磨いて今宵こそ、常々拙者が秘藏なす、二字國俊の刀の切味。
矢間　某とても日頃手馴れし志津兼氏の手槍を以て、刃向ふ奴輩みなごろし、
小山　一世の働き、
兩人　お目にかけん。（ト此時五つの時計鳴る。）
矢間　益なきことに暫時のひま入り、最早五つの時計なれば、
小山　いざ御同伴仕らん。
力彌　我々も是より直に、御廟所へ罷越し、父諸共に何かの用意。
小山　左樣ござれば各々方、
矢間　御兩所には、お役目御苦勞、

千崎　然らば是にて、

皆々　おわかれ申す。

ト矢間、小山田は花道へはひり、舞臺は力彌先に、殘らず奥へはひる、磬の音にてしらせなしに、此道具廻る。

(墓前の場)――本舞臺三間中足の二重、石垣の蹴込み、眞中石の踏段、此上に臺石なする廣大なる石碑、鷹の羽の紋付、判官の戒名宜しく、此前に香爐樒を供へ、此後石の玉垣、向う泉岳寺の山、樹木の間より海の見える書割、左右樹木の張物、上下へ雪持の松の立木、日覆より同じく釣枝、總て一面に雪の積りし道具、舞臺花道共雪布を敷き、石碑の前筵の上へ薄べりを敷き、下手に井桁立番、備前蝶の紋付熨斗目麻上下にて中ぬき草履をはき、雪の上に立身、傍に若黨宅內、中間立番の合羽傘下駄を持ちて控へ居る、此模樣磬の音にて道具留る。

立番　こりや宅內、

宅內　はッ。

立番　只今大星方へ申入れたれば、やがて是へ參らるゝであらう。其方共は供待にて、暫時休息致した

がよい。

兩人　はッ。

ト若黨中間下手へはひろ、玄蕃石碑へ思入あつて、薄べりの上へ上り、石碑に向ひ燒香なし、平伏して拜禮する思入。此時花道より、由良之助麻上下に着替へ、中ぬき草履にて雪の上を歩き出來り、舞臺へ來て玄蕃の樣子を見て、下手に手を突き控へ居る、玄蕃拜禮をしまひ、此方を向き由良之助を見て、

玄蕃　これは〳〵良金には、いつの間にやら是へ參られしな。

由良　はッ、只今是へ罷越し、御樣子を伺ひしに、御拜禮故暫時差控へましてござります。

玄蕃　それは嘸かし待久しくあつたであらう。さゝこれへ〳〵。

由良　然らば御免下され。（ト由良之助薄縁の下の方へ住ひ、）扨、御舍兄には久々拜顏も致さゞりしに、先以て御健勝の體を拜し、祝着至極に存じまする。

玄蕃　御身にも息災にて重疊々々、昨日委細を承りしより、今日は主君へ願ひ、御暇を賜はりて先刻是迄罷越し、まづ取あへず判官殿御廟所を拜し、しきりに懷舊の情を催し、思はず手前取り存外なる失敬ゆるしめされ。

由良　是は又恐れ入つたる御挨拶、何はしかれ雪中のお厭ひなく、ようこそ御出で、既に昨日書面を以

て中入れたる如く、赤穗離散の砌より思ひ立つたる拙者が大望、夫の御方を討奉る可き一大事、彌々今宵を過さず、右の事件に及びますれば、是ぞ一世のお別れと存じ、是迄お招き申せしに、早速の御入來、良金身に取つて此上の大慶はござりませぬ。

玄蕃　某とても、此度御國許より歳末の嘉儀として、鎌倉御屋敷へ出府なし、圖らず其許に面會致すは祝着至極、殊更以て日頃志願の一儀、いよ〳〵決定致されしとあれば、先づ差當り一つの安堵。さりながら主君に離れし其日より、忠義の二字に凝りかたまり、切瑳琢磨の御身が大望、其心勞はいかばかり、某とても君に仕へ、食祿をけがす身の上、もし鹽冶家に等しき凶變、殿の御身に出來いたさば、其時の我々が無念の程は嘸かしと、己が心に引きくらべ、御身が胸中、玄蕃深く推察致す。

由良　仰の如く去年三月高貞公の御切腹、鹽冶の家名斷絶に臨みたる我々は、手の舞足の踏度を覺えず、さながら魚の水を失ひ、鳥の塒を燒れし心地、主君御最期の其砌、數ならぬ良金へ恐れ多き御遺言、其時の御無念を五臟六腑にゑり付けて、不俱戴天の思ひ立、今日の只今迄尺寸の間も忘却せず、一味荷擔の者を語らひ、薪に伏し漆をそゝぎ、姿をかへて間者となり、忍び〳〵に敵地の樣子、最早こと〴〵く見定めたれば、いよ〳〵今宵と決定致し、同志の輩四十餘人、夫の御

邸宅へ推參なし、日頃の宿意を果さん存念、しかし浪々の我々が、斯くやんごと無き御方を、敵とねらひ奉る事、かの蟷螂が斧を上げて、龍車に向ふの譬にひとしく、身にも應ぜぬ血氣の勇と、必ずお笑ひ下さるな。

玄蕃　何が扨血氣の勇といやしむ可き、大敵と見て恐れざるは武門の習ひ、誠や君々たれば臣々たりと判官公の御家臣に、かゝる誠忠の者あるは、即ち鹽冶の譽れ、まつた我弟にかゝる義心の者あるは玄蕃が面目是に過ぎず、して力彌も同道召さるゝか。

由良　いまだ若年にて、物の用には立つ可きならねど、兼々同道致しくれよと彼が願ひ、それ故今宵召連れる所存でござる。

玄蕃　彼は慥十五歳と存ぜしが、扨々天晴なる心底、其餘拙者が知る人なる、織部親子、不破氏なども、定めて一味の内でござらうな。

由良　彼等とても同道の約定、其外同盟四十餘人、各々粉骨碎身なし、身不肖なる良金の指揮を守り、義心金鐵の如き者共、斯迄荷擔致しくれまするは、拙者が仕合せと申すもの。

玄蕃　何さま抜群なる忠義の面々、左程迄合體なせば天地神明の加護により、本望遂けんは目前、しかし此玄蕃が申す迄にはあらざれど、戰場の駈引總て勝敗を爭ふもの、運と不運の差別あるは、人

由良　力の及ばぬ所、萬一事を果さず、敵と目ざす御方を、討もらしなばいかゞめさるぞ。
宿業の破れに及び、運拙なくして討ちもらさば、其座を去らず切腹なし、泉下に至り亡君に申譯
仕る外、別に所存はござりませぬ。

玄蕃　して又首尾能く勝利となり、彼の御首級を申受け、本望遂げし其時は。

由良　仰迄も候はず、法は卽ち天下の大法、忠は一人の忠義なれば、何れの道にも國土の罪人、公邊の御沙汰をまち、たとひ縛り首仰付らるゝとも、毛頭お恨みとは存じませぬ。

玄蕃　何さま、武士たる者は、左程の覺悟はあるべき事、して又忠義御賞美あつて、助命の御沙汰に及びなば、其時は如何めさる。

由良　寬大の御處置にそむくは、恐れ多き事ながら、足利殿のお膝許に鮮血を流すの大罪、萬一助命の御沙汰ありとも、何面目に存命なさん、餘人は知らず我々父子は、誓つて相果つる所存でござる。（トきつと言ふ、是にて玄蕃小膝を打ち、）

玄蕃　はて感じ入つたる志、義を泰山の重きになぞらへ、命を鴻毛と輕んじて、采配握る今宵の事件、首尾能く敵を討たんこと、必ず共に疑ひなし、若又やみ／＼仕損じなば、御身が無念は我無念。其時こそは、（ト玄蕃胸を叩いて見せ、氣味合の思入あつて、）な、跡々へ心を殘し、必らずおくれを

取らるゝな」（ト由良之助玄蕃の所存を悟りし思入。）

由良　はて頼もしき御胸中、持つ可き者は骨肉同胞、其御所存を聞く上は、由良之助が心も勇み、最早仇たる御方の、御首級を得たるの心地、一入勇氣が備はりました。

玄蕃　勇ましゝ〳〵、是に付けても其昔、父玄蕃行正殿、大星頼母殿に懇望され、養子に送り給ふの時、御身を傍近く招き給ひ、武士たる者の心掛、さま〴〵との御教訓、我かたはらにて見聞せしが、今日只今思ひ當り天晴見上げし其魂、それには引かへ此玄蕃は、疊の上に安座して、なす事も無く月日を送り、井桁の家を繼ぎながら、他家相續の御身に及ばず、忠義の道をくらぶる時は、良金殿、我よりはるかに兄でござるぞ。

由良　こは勿體無き其仰せ、玄蕃殿こそ我爲に兄にして又親なりと、日頃お慕ひ申せしが、今日の期に及び御目に懸れば又一入、亡き父上の面ざしに瓜を二つの其御樣子、今良金が冥土の旅に踏出さんず際に望み、父御在世の其昔を漫に思ひ出されて、腸を斷つの思ひあり、是限りなる對面に、由良之助が面をも、能く御目に殘るやう、兄上お見屆け下されい。

玄蕃　何さま兄弟一世の別れ、生者必滅會者定離と、夫の佛經の敎へはあれど、忍び難きは人間の愛情、互ひに初老を越ゆる迄兄と呼び弟と呼び、因みも深き其許が、おもてを見るも今日限り。

由良　餘儀無くお暇仕るも、瓦と成つて全からんより、玉となつて砕けよとの、其本文を思ふが故。
玄蕃　只一朝の名を惜み、忠義の爲になげうつ命。
由良　實に是非無きは武士道と、
玄蕃　玄蕃も初めて承知いたした。（ト兩人額をそむけ、ホロリと思ひ入、玄蕃氣をかへ）あゝ我ながら不覺の愁傷、大望のさいさきに勇氣をくじくは不吉千萬。申さば今日は目出度き出陣、此場で一盞を汲みかはし、門出を祝して退散いたさう。
由良　何さま、某も一期の思ひ出、兄人のお杯は、此方よりも願ふ所。
玄蕃　しかし爰は御墓所と申し、
由良　此場においての杯は、
兩人　はて、何をがな。
ト兩人上下を見廻し、雪持の松に目を付け、双方同じ心にうなづき、これにて合方になり、扇を取つて一時に立上り、玄蕃は上手の松、由良之助は下手の松へ來りて、互ひに扇をひらき雪を少しづゝ取つて扇へ載せ、元の座に直り、
玄蕃　御身へすゝむる杯は、實に千歳の色かへぬ、松につもりし六つの花、雪にすゝぐの聲あれば、

由良　言ひあはさねど某も、十八公の操に習ひ、今會稽の雪の杯、是復讐の門出の餞別。

玄蕃　しからば良金、

由良　いざ兄人。

玄蕃　目出度く一獻、

兩人　過し申さん。（ト兩人扇の儘取交し、双方雪を頂いて呑み、互ひに扇を見て、）

玄蕃　時に扇の名にしおふ、要は則ち忠義の要、骨は刃にくだくるとも名は末廣の末世に殘らん。

由良　世俗に申す天地金の、天地にひとしき御賜、取も直さず兄上の恩義を表する此扇面。

玄蕃　此儘落手。

由良　某とても。（ト兩人扇をちつと見て、）

兩人　是が形見と。（ト思はず顏見合せて氣をかへ、）

玄蕃　又しても思はぬ落涙。

由良　他人が居らば笑ふでござらう。

玄蕃　扨々女々しき、

由良　はゝ、

玄蕃　はゝ、

兩人　はゝゝゝゝ。

ト双方笑ひにまぎらし、涙を隱す思入、ばた〳〵になり上手より以前の力彌、彌五郎先に、原、小寺其他殘らず袴もゝ立大小わらぢがけ、赤合羽を着し、銘々竹の子笠を持ち出來り。

千崎　由良之助殿、樣子は殘らず承る。

原　御兄弟の御別れ、我々共もさこそと推察、

小寺　はからず落涙、

皆々　いたしてござる。

由良　これは〳〵近頃赤面、何れもおゆるし下されい。

玄蕃　扨は是なる方々は、かの同盟の面々なるか。

千崎　仰せの如く我々は、大星氏に荷擔の者共。

原　非桁氏にもお見知り下されい。

玄蕃　是は〳〵御挨拶、御存じの上は名乘るに及ばず、お心急きの折柄推參致して思はぬ失禮。

力彌　あいや伯父上、私こそ最前より、失禮御免下さりませ。（ト玄蕃力彌を見て）

玄蕃　おゝ力彌であつたか。

力彌　御存じ知らるゝ今宵の儀、父諸共に一命捨つれば、最早是がお暇乞。

由良　はて、千萬言うても名殘は盡きぬぞ。

力彌　然らば伯父上、百年の後冥土にて、御面會仕りませう。

玄蕃　おゝ、冥土の對面とは面白い、其覺悟なら身共も安心、今宵は花々しき手柄をいたしやれ。

力彌　はツ、仰せにや及ぶ可き、是より直さま敵地へ魁け、

千崎　思ひまうけぬ此雪は、姿をかくすに最究竟、

原　何れも下部の赤合羽に、下賤と見せて忍びより、

小寺　高野の屋敷の弓手馬手、遠巻なして樣子を探り、

力彌　合圖を定めて、

皆々　討入らん。

玄蕃　はて天晴なる各々方、斯迄勇氣備はれば、本望遂げんはまたゝく內。して由良之助には、是より
いづれへ。

由良　仇討の前方に、亡君の御後室、薬泉院様へ參上なし、餘所ながら御暇乞、

玄蕃　我も主家に用事あれば、名殘は盡きねど歸國なし、夜討の吉左右相待ち申す。

ト玄蕃立上り草履を穿き、下の方へ來る、此時下手より以前の家來兩人出で、

若黨　もはや御歸宅にござりまするか。

玄蕃　いかにも。

トかすめて雪おろし、日覆より雪ちら〳〵と降る、若黨空を見て傘をひらいて出す、玄蕃是をさし、中間下駄を直すを、玄蕃御廟所故穿かぬといふ思入、是にて下駄を片附ける、由良之助思入あつて、

由良　然らば、ます〳〵御健勝にて。

玄蕃　御身も今宵は、必ず本望。

千崎　いで我々も、

皆々　是より直に、

ト立かちゝる。

由良　アこれ、他聞を厭へば、竊に〳〵。

皆々　はツ。（ト控へる。）

女番　はて勇ましい。

由良　それ御見送り。

力彌　はッ。（ト立掛ける。）

女番　あいや、其儘。

由良　しからば失禮。（ト片手突いて會釋なすを木の頭。）御免下され。

ト皆々引ぱり宜しく、雪大分降る、力彌、千崎左右より、由良之助へ竹笠を翳す、女番は行きかける思入、此模様雪おろしにてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

朝四ッ時　割下水八百屋の場

組屋敷内山宅の場

返し

晝九ッ時　高野邸茶座敷の場

〔役名――高野師直、高田郡三郎、八百屋元助、内山官左衞門、醫者多比浦雲齋、高野師泰、茶道升齋、

小堀伊平太、行田喜太藏、山住九郎八。官左衞門娘お組、高野の愛妾蘭の方實は覺兵衞娘おせつ、下女お賤、其他。」

（八百屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手折廻し一間の障子屋體。眞中暖簾口。上の方中敷居のある押入、上の所佛檀、惣體鼠壁、下手よき所に青物の流し棚を取付け、是に前栽の色々並べあること、下手跡へ下げて葺おろしの下家、玉椿の生垣、何れも雪積り有るもやう、いつもの所に門口爰に醫者雲齋羽織着流し一本差の拵へにて煙草を呑み居る、門口の所に下女おしづ風呂敷包の小重箱を持ち立掛り居る見得、總て本所割下水八百屋住居の體。稽古唄にて幕明く。と兩人よろしく思入あつて、

しづ　マウシ、今日はこちらの御内は、お留守でござりますかえ。

雲齋　おゝ、誰かと思つたらお隣の、内山さまのお召仕おしづ殿でござるか。

しづ　雲齋さま、あなたがお留守ばんでござりまするか。

雲齋　左樣の譯でもないが、かの一條で參つて居るのでござるが、お手前は何か御用があつてござつたのか。

しづ　一寸お使に參つたのでござりまする。

雲齋　それは御苦勞でござるが、元助殿は買出しに行かれて留守でござるが、弟御の郡三郎殿は今便所へ行かれたれば、こちらへはひつて待つてござらつしやい。

しづ　郡三郎樣がお内なら、お待ち申して居りませう。

雲齋　さあ〳〵ずつとはひらつしやれ〳〵。（ト是にておしづ内へはひり、よき所へ住ふ、雲齋思入あつて、）時に何御用でござつたのぢや。

しづ　いえ、別に用事と申すではござりませぬが、あのお孃さまより、お言傳がござりますゆゑ。

雲齋　何さま其筈の事、顏が見たさにちよつと來てくれであらう、日頃から近邊の噂にも、此高田氏と内山の娘御のお組どのを娶合したら、よい女夫であらうとの取沙汰、人の目は替らぬもの、親御にも其お含みで、疾より愚老へ御緣談のお話しがあつて、橋渡しをお賴みゆゑ、嘸先方でも御直參の聟養子に望まるゝとは、結構な事と思ひの外、よい返事をなされぬので、耆婆扁鵲とも言はるゝ愚老も、此療治にはもてあましてをるが、又工風を致したら、匙加減のないでもござるまい、かならずお案じなさらぬがよいて。

しづ　そこ所はあなたのお取持故、お取結びにならぬと申す事もござりますまいが、お孃樣が明暮思し召しての事ゆゑ、どうかお早く御緣に成るやう願ひます。

雲齋　いや、そこに如在と小遣のない男でござるて。しかしあんまり古いかしらんて、あは〻〻。

ト兩人宜しくある、合方きつぱりとなり、奥より郡三郎好みの着附着流し裝にて、烟草盆を持ち出來り、

郡三　是は〱雲齋老、近頃失禮を致してござる。

雲齋　何の〱、御挨拶で痛み入ります。いや時に御隣家よりお使でござります。

ト是にて郡三郎おしづを見て、

郡三　お〻、是は内山どの〻お召仕でござるか、此寒いのに御苦勞でござる。してお使は何御用でござりますな。

しづ　いえなに、用向と申すではござりませぬ、私共の旦那さまが、此雪のお寒さ凌ぎに、鴨をお拵へなされましたゆゑ、あなたへも差上げたいとおつしやつて、少々ながらお目に懸けますのでござります。（ト風呂敷をとき重箱を出す故、郡三郎取つて、）

郡三　是は〱お心に掛けられまして。（ト言ひながら蓋をあけ、）お〻是は小松菜に鴨、見事なる品を澤山に下され、忝なうござる。（トこなしある、雲齋見て、）

雲齋　はあ是は菜と鳥ぢや、〻〻〻なとりとは結構々々、是で一杯きこしめせば、どのやうな寒氣でも凌げま

するて。

郡三　ふむ成程、、、、なとりとは侍の身に取つては耳よりの事、格別の品郡三郎忝なう受納いたすと、仰せられて下されい。

しづ　いえもう、つまらぬ品ながら御意に叶ひまして私もお嬉しう存じまする。それに今日は雪故か世間も穏かゆゑ、ちとお話しにお出遊ばしますやう、お孃さまからのお言傳でござりまする。

郡三　それは早有難う存じまする、何れお禮ながら出まするでござる。何とぞ皆さまへよろしく申上げて下され。

しづ　左やうなら、あなたお暇いたしまする。

雲齋　おしづどの、大きに御苦勞でござつた。

しづ　雲齋さま、御ゆるりとおいでなされませ。

ト右の合方にて、おしづ宜しく下手へはひる。跡に郡三郎思入あつて、

郡三　あゝ何かに付け男暮しの不自由と、内山殿の心遣ひ、何共早氣の毒千萬、今日は兄貴もいつより早く出られたゆゑ寒うあらう、幸ひの寒さ凌ぎ、もどられたら是を煮て進ぜませう。

雲齋　おゝ頼もしい兄弟思ひ、しかも元助殿もこなた樣を、大切にさつしやるが、揃ひもそろつた兄

弟衆、其志を見込れてか此間より度々申入れる内山殿の御縁談、官左衛門殿は御存じの通り、武藝は元より馬術も名譽、又文學においても博覧の聞えありて、日頃の行ひ仁愛深く、殊には此邊の組屋敷中の頭役をも勤められ、第一内福で飛鳥落ちる當時の勢ひ、又娘御のお組殿は器量は申さずとも御存じの通り、世間の人の噂にも今楊貴妃の小町のと、評判をする美人、針持つわさは勿論の事、茶の湯香花詩歌連俳、絲竹の道に至るまで、なんでも出來ない事はない。其上やさしく親孝行、家柄といひ何一つ不足無き御縁談と申すもの、失禮ながら斯様な所へ聟入なさるゝはお仕合せと申すもの、それを彼是御辭退なさるゝは、愚老において一圓合點が參りませぬが、ちとお心得違ひかと存ずるゆゑ、篤と御勘考なされたがよくござらうて。

郡三　此程よりだん／＼との御親切、内山氏へ聟養子に參れとの御説得、實以て忝なうござるが、御覽の通り見る影も無き某、家柄と申し、中々もつて及びもないことでござる。

雲齋　いや、それは其許さまが毎度仰せられて卑下なさるお詞ぢやが、先方にては隣づからの御懇意を結ばれ、御出入あること故、一を知つて萬を知るとやら、其許のお立振舞萬事につけ、見所ある御器量と思ひ込まれての御懇望、最早卑下成されての御辭退はおやめなされ、此雲齋悪い事は申さぬ、達てお勸め申す程に御得心なされて下され。又兄御の元助殿へは愚老から委しくお話しを

致しませう程に、善は急げと申す諺、御得心なされて下され。それとも又舅御のあるのがおいやか、御縁女がお氣にでも入らぬか、しかしお氣に入らぬ御器量ではなし、只一と通りのお斷りでは、お片意地と申す者でござる。あゝ餘りしやべつて口がすくなりました、お茶を頂戴。

ト有合ふ土瓶を取つて、茶碗へつぎ呑む事、郡三郎思入あつて、

郡三　こりや成程御尤も、仔細を申さねば片意地のやうにも思し召さうが、あながち左樣の儀ではござらぬ、豫てより拙者心願ござつて、是より三ヶ年の間獨身で暮しまするといふ内願を神佛へちかひ置きましたれば、それ故貴方の御媒介と申し、折角の御懇望をもどきまするは餘儀なき仕儀、實もつて願うても無き御縁邊を失ひまするは、天運を取りはぐるやうなる心地にて、殘念至極に存じますが、是も拙者が薄命と思ひあきらめ居りますれば、此儀ばかりは御容赦下されい。

雲齋　そりや早何か御内願があつて、御獨身でお暮しとは是非もなけれど、又行末をお考へなさると、獨身では身の立たぬもの、今日に限る事でもござらねば、篤と御勘考なされた上で、御挨拶を承りませう。

郡三　いやもう、何かと御親切のお詞忝うござる。おゝ、それはともあれ伺ひたいは、いつぞや拙者よりお願ひ申して、御療治を受けましたる番場町に住ひ致す、小汐田又之丞殿の御病氣はいかゞ

でござりますな。

雲齋 いや、あの御病人は其許のお頼み故、愚老も一と通りならず丹精致し、やうやく配劑の効によつて、癪疾は治しましたが、又此程より脾胃兩腑の衰へにて鷄目の煩ひ、困つたものでござるが病人根性と申して、急に直したいと心ぜきの樣子なれど、自然と腹中に積廻せし毒ゆゑ、容易の藥では急速に平癒はなされぬて。

郡三 はて、其眼病の事は只今始めて承知致したが、嘸かし難儀致すでござらう、拙者も此頃は用事に取紛れ、見舞もおこたりましたるゆゑ、存ぜずに居りましたが、何んとか急速に治する御配劑はないものでござりまするか。

雲齋 そりや早急速に治する妙藥がないでもござらぬが、其お話しを致した所が、容易に得難い品故、益もない儀でござるて。

郡三 たとへ得難い品なりとも、支那天竺は言ふに及ばず、蠻夷の產も居ながらに自在に集まる吾國、多くの金銀にかへたなら、得難いと申す儀もござるまい。

雲齋 そこでござるて、得難いと申して異國の品でもござらぬが、只人命にかゝはる事ゆゑ。

郡三 して人命にかゝはる品と申して、如何なるものを用ゐまするな。

雲齋　されば でござる、益ない儀を申し出しましたが、申さいでは何か愚老が虚言を申したやうでござる故、お話しを致すが、其妙藥と申すは、七歳未滿にして酉の年月日時揃ひし女子の生血を用ふる時は、いかなる難症の鷄目たりとも立所に快氣する事また〻く内、實に疑ひ無き良法なれどもなんと得難い品ではござらぬか、迚も及びのない事でござるて。

郡三　何さま空な尋ね物、しかし得難いと申しても廣い世界ゆゑ、ないとも限らぬ事ながら、病を救ふ良藥なればとて、人命にか〻はれば是も不仁の至りと申すもの。はてさて又之丞殿の御病症、困つたものでござるな。

雲齋　いや、それは療治のお話し、今日愚老が參つたは、先づ差當る縁談の儀、とつくりと又一應も再應も考へて御覽じろ、決して惡しくは計らひませぬ。いや、短日の折柄益ない話しで遲刻致した、まだ兩三軒見舞はねばならぬ故、お暇致しまする。(ト立上る故郡三郎こなしあつて、)

郡三　毎度ながら何の風情も無く、失禮のみ、御免下され。

雲齋　いや、其の御挨拶は入らぬ事、くれ〴〵も御縁邊の御挨拶は、色よい返事が承りたいて、は〻は〻〻、毎度御造作に相なります。

ト稽古唄になり、雲齋宜しく花道へはひる。郡三郎門口迄送り出て、立戻り思入あつて。

郡三　あゝ人の心は人知らずと、あの雲齋老とした事が、我心中をしらずして緣邊勸むる心の笑止さ、最早此身も今宵を限り生死の瀨戶、それに付ても又之丞殿の眼病、見舞はうにも已の刻迄には、原氏へ打合せ置く事がある故出向かねばならぬが、どうぞ早く兒者人が、戻つてござればよいが。しかしもう戻られるであらう程に、其內奧へ行つて、何かの用意致して置かうか。

ト是を唄になり、郡三郎宜しくこなしあつて奧へはひる、此唄にて花道より元助象股引草鞋前裁賣好みの拵へにて兩掛の荷駕籠へ、時の靑物をいろ〳〵入れ、片荷に蜜柑箱三つ程を載せ、天秤棒にてかつぎ出で來り、花道よき所へ息杖を立て、空へ思入あつて、

元助　雪も止んだやうなれど、お日さまが見えぬ故、何時であるやらさつぱりわからぬ、今朝はいつより早う買出しに行つたつもりぢやが、今內山樣へ呼込まれ、ついお話しが長いゆゑ大分遲くなつた、嘸かし弟が待兼ねて居よう。どれ早う內へ行つて、賣り物の仕分をしておかうか。

ト こんな事を言ひながら、右の鳴物にて舞臺へ來り、直に門口をあけ、荷を內へ入れながら、

元助　弟どのは奧にか、今戻つたぞえ。（ト是にて以前の郡三郎出來り）

郡三　おゝ兒者人、今戻られましたか、嘸かし寒うござつたであらう。

元助　なに寒いとてどら程の事があらう、今夜寐る時一と風呂はひると、一日の寒さをぢきに取かへし

ますわ。

ト言ひながら青物を取分け、流し棚へ並べることなどある。

郡三　おゝ、あたゝかになるといへば、最前御隣家より鴨をお貰ひ申したれば、あれを煮て進ぜたら、あつたまるでござりませう。

元助　なに、鴨、そりやあ結構な物をお貰ひ申したの。しかしあんまり前裁賣には食過ぎるの、いつもいつもお貰ひ申すばかりで、お氣の毒な事ぢやなう。

郡三　何かお禮の致しやうもござらう。それはさうと、今朝はいつより早う出られたに、何故お手間が取れましたなア。

元助　さればさ、今日はこなたも用向で出るといふ事故、早く行つて戻らうと、買出しは四つ目ばかりにして急いだのに、ぢき近所へ來て、大きな暇入をしました。

郡三　そりや近所で、どのやうな事で手間がとれました。（ト合方きつぱりとなり、）

元助　さあ、外でもないが御隣家の内山樣の御門を通ると、旦那さまが朝湯のお戻りがけ、そちに逢ひたくつて居た、幸ひのこと、まあ／＼這入れと呼込まれ、仕樣事なしに、お庭からお座敷へと招かれて、旦那さまが直々わしへのお頼み、此中から雲齋老をもつて、當人へは内々申入れたれど

も、兄のそなたへ直々に頼みたいと思うた折柄、そちに逢うたは此縁談を結ぶの神の引合せと言ふのぢやとて、是非にそなたを聟にしたいと、たつてのお頼みなれど、此間からそなたが雲齋さまへお斷りを言ふ樣子を薄々知つて居る故、いろ／＼言うてお斷りを申したが、無理にも懇望せにやならぬと達てのお詞、何をいふにも爰の地面の地主さまなり、此本所で多くのお武家のお組頭を、お勤めなさるゝ旦那樣が、我々風情へ手を下げてのお頼み、此前米の高い時御扶持のお米を下すつた御恩、命の親の其お方の聟になるといふは願うてもない身の仕合せ、それに又先の孃さまを女房にするとは有難い、殊に粂三娘と評判の美しいお孃さんの聟になるとは身の果報、馬鹿げたことを言ふやうだが、此兄でさへ氣がわるい、殊に又家柄といひ身代といひ、何處一つ點の打所のない縁談を、なぜ得心せぬのぢやいの。

　トいろ／＼思入あつていふ。郡三郎こなしあつて、

郡三　未熟の此身を左程迄思し召し下さる、内山殿のお志、又兄者人の御教訓忝なうはござれども、何を申すも此郡三郎は、亡君御存生の砌には人に勝れ御厚恩を蒙り、おなさけ受けし拙者故、何程の出世致せばとて、他家へ養子に參り榮華を極め、二君に仕へる所存はござらぬゆゑ、豫ての願ひ、最早拙者も今日限り武士道を捨て、剃髮なして出家となり、亡君の御跡弔ふ追善に、諸國

を廻り靈場へ納經致さん所存故、緣邊の儀は平にお斷りなされて下さりませ。

元助　出家致すといふ者が、なぜ差料の刀を研がせにやつたのぢや。

郡三　えゝ（トぎつくりこなし。）

元助　いや、研屋から持つて來たを、此間ちらりと見て置いた、しかもきのふ寢刃を合せたあの刀は、出家には用のないものぢやが、ありや何の爲にするのぢやぞ。

郡三　さあ、それは。

元助　身の出世を好まぬといふは、命を捨てる心であらうがの。

郡三　何といはつしやります。

元助　おゝ由良之助さまを初めとして、一家中にて心ある方々が、徒黨を結び、敵討をなさるゝといふこと、疾から薄々聞いて居る、他言はせまいと誓ひはあらうが、血肉を分けた兄弟は、跡にも先にもたつた二人、其兄を餘所にして、明して聞かしてくれぬのは、水くさい心ぢやの、わしは其方にどんな事でも隱しはせぬ、あゝ無けなしの兄弟ぢやと思へばこそ、寒いに付暑いに付案じる兄の心も知らず、明して言つたら他言をせうかと、私が心を疑ふとは、情ないコレ弟

トいろ〳〵こなしあつて言ふ、郡三郎ぢつと聞居て、

郡三　ア、其お恨みはお道理なれど、是と言ふのも某一人の大望ならねば、たとひ親兄たりとても迂濶に底意を洩らさぬは、同士の者の互ひの誓約、それ故にこそ是迄は我心中を申上げねど、斯く御存じある上は、隠し包むは兄へ對して不信と言はれん、殊に切なるお心にほだされ、今一大事を明し申さん。なれども、必ず御他言ばし下さるな。

元助　何の他言をするものぞ、我弟が御主君の敵を討つ、武士ならばおれも助太刀でもせにやならねど、何をいふにも其日稼ぎの前栽賣、天秤棒はかたげても刀持つ術は知らず、しかしマアしがない身ながら、立派な弟を持つたからは、心は武士ぢや案じぬがよい、決して他言はしませぬぞ。

郡三　とは言ふものゝ、壁に耳ある世の諺。

ト元助へこなし、元助も心得、四邊へ思入ある、郡三郎は門の外を窺ひ戸をぴつしやり締める、是を合方きつぱりとなり、此方へ來り住ひ、

只今仰せある通り、噂のもれてお耳に入りし事ならんが、亡君御死去ありし後、由良之助殿を初めとして、一藩中の同士の面々、竊に敵師直が首討取りて亡君の、鬱憤を晴らさんものと、何れも流浪に身を苦しめ、其動靜を窺ふに、敵は要心堅固にして、殊には權家の事なれば容易に事を起しなば、破れとならんも計られずと、由良之助殿が千辛萬苦の、配慮も既に天の時運を得たり

とて同士の物へしめし合せ、今日今宵敵の屋敷へ、深夜に討入る豫ての手つがひ、殊に又此四つ時には、原氏とも申し談ずる儀もござれば、是非に他出の心構へ、わづか半時一時をたがへる時には日頃の辛苦も水の泡、かゝる大願ある身の上、後榮思ふ緣邊の儀は存じもよらぬ事、夫故達てお斷り申すも、今宵につゞまる拙者が一命、兄者人御賢察なされて下され。

トよろしくこなしあつて言ふ、元助思入あつて、

元助　始めて聞いた其方の底意、あつぱれ見上げた其膽玉、御恩になつた殿樣の其敵討を餘所にするのは武士ではない、よく刀を研がしておいた、出來した〳〵。あゝ多人數の大望とて、此兄に明さぬは、それがまことに武士ぢや、これ弟、恨みを言つたは私が誤り、どうぞ料簡してくれい。これぢや〳〵。(ト手を突いて詫びるこなし。)

郡三　あゝこれ、勿體ない事おつしやりますな、只願ひ成就致す迄は、何事も密々に。

元助　さうぢやとも〳〵、此樣な事いつ迄も言うて居て、人に聞かれては一大事ぢや、したが今宵と言つては早急な事ぢや、あゝ是が兄弟一世の別れぢや。(トホロリと思入あつて、以前の蜜柑箱へ心附き、)幸ひ是を皆さまに、息繼に上げるのも、お味方する道理に當れば、今宵竊に持つて行かうわい。

郡三　何さま、それはようお氣が付かれました、時に取つての甘露でござりまする。

元助　そんならば、さう仕ませう〳〵。

郡三　拙者は他の朋友共へ、申し殘し置きたい儀もござれば、此間に一筆認め置きませう。

元助　私は是から仕分して、荷拵へをして置きませう。

ト合方きつぱりとなり、郡三郎は有合ふ掛硯を持つて來て、狀を書きにかゝる。元助は前栽物を分ける思入あつて、前栽棚へのせる事などあり、是迄の内よき時分に下手よりお組、屋敷風振袖娘の拵へ好みの裝、おしづ以前の下女にて付添ひ出で來り、門口よりちよつと內を覗きて、おしづ紙を丸めて出し、お組に是を投げろと仕方する、お組恥かしさうに投げる。件の紙元助に當る故、是を見つけ。

又大きな雪が降つてきをつた。(ト言ひながら不思議さうに取つて見て、)雪ぢやと思うたら、こりやなんぢや、紙の丸めたのぢや。(ト外の方を見る、兩人居る故、はゝあ、今の雪を降らせた、天人さまの正體を見付けた、これはお隣のお孃さま、そこはお寒うござりますから、まあおはひりなされませ。(ト言ふ故おしづもどかしき思入あつて、)

しづ　さあおなた、早くおはひりなされませ。

ト無理に連れてはひり、郡三郎の側へ突きやる、是にて郡三郎は書きさしたる狀を手早く卷いて懷中する、お組は間の惡きこなしよろしく、

しづ　申し元助さん、わたしやお前にお頼み申すことがある故、ちよつとこちらへ來て下さりませ。

ト元助を引つばる。

元助　何やら小氣味のわるい。

しづ　早く來て下さんせいなあ。

ト引ばられながら元助捨セリフ宜しくあつて兩人奥へはひる。跡にお組恥しきこなしあつて、郡三郎の側へゆき、

お組　申しあなた、今日は嘸お寒うおいで遊ばしませうなあ。

郡三　何さま、雪故か大分に寒氣も强うござるて。

お組　それにまあ、爰にはお火鉢もなうて、尙更冷えませうに。

郡三　いや、拙者はいまだ老屈致さねば、さして火も欲しうはござらぬ。（トすげなくいふ故、）

お組　そりやもうお若い內は、お互ひに左程寒いとは存じませねど、ほんにもう私は、顏があつうなりましたわいなあ。

郡三　それは早御壯健なことでござる。
お組　えゝもう其様に、堅苦しい御挨拶をなさらいでも、ちつとはおやさしいお詞を。
　　ト段々側へよる程郡三郎はかたくなつて、
郡三　慳貪邪險かは存ぜねど、斯様の御挨拶致すは、拙者が生れ付の持前でござるて。
お組　さあ、其のお堅いが御氣質でも、木竹にあらぬお身なれば、情といふ事御存じでござりませうがな。
郡三　いや情とやら申す事は、どのやうな事やら、剛毅朴訥の拙者故、更に辨へませぬでござる。
お組　てもまあ、情ない其のお詞。（トちよつとなまめいたる合方になり、）此様な事申したなら、嘸おさげすみもござりませうが、思ひ迫つて打附に申し出すも恥しながら、いつぞや此家へお出成された其時より、床しいお方と思ひ染め、表向にて言入しもお聞入がないとやら、それも足らはぬ此身故、おきらひなさるはお道理なれど、斯程にこがれし身の因果、どうぞ不便と思し召し、女夫になられぬものならば、せめてお側に置いてなりと、お遣ひなされて下されませいなあ。
　　トいろ〳〵こなしあつていふ、郡三郎迷惑の思入あつて、
郡三　これは〳〵御息女には、何を仰せられるやら、見る影もなき流浪の拙者、殊にしがなき前栽渡世

の、其弟が御直參たる、内山氏のなんとして聟養子になられませうや、殊に拙者は一生涯妻は迎へぬ誓でござる。
お組　すりやあのあなたは、一生女を持たぬ心と、おつしやりますするか。
郡三　いかにも。
　　ト　これにてお組本意なきこなしにて、
お組　此のお願ひのかなはぬ上は、せめてお側で、さうぢや。
　　ト　懷中より匕首を出し、自害しようとする故、郡三郎あわてゝ留め。
郡三　血迷うたるか、これ御息女。
お組　血迷うたかとはお情ない、放して死なして下さりませ。
郡三　いゝや殺さぬ。
お組　どうぞ死なして。
　　ト　兩人宜しく爭ふ。此時奥より以前の元助おしづ走り出來り、
元助　こりやまあお孃さま、どうしたものでござります、お前樣を爰で殺しては、此元助が何と旦那樣へ言譯がなりませう、えゝも、とんだ事をなされますなあ。

しづ　急かずと申しお孃さま、お手をおはなしなされませ。

ト元助おしづ兩人して懐劍をもぎとる、郡三郎は腕をくんでぢつと思入、元助も思入あつて、

元助　始終の事は、殘らず奥で聞いて居りました、あなたも御尤もぢやが又弟も、尤もと言うて居ては埒口がない故、お互ひにかう突詰めては理も非も分らぬものぢやによつて、跡でとつくり言うて聞せ、惡いやうにはしませぬ程に、此場はさつぱりと私に、お任せなされて下さりませ。

しづ　ほんにさうでござんす、おまへが兄さんの効驗で、弟御にもよう御得心のゆくやうに、とつくりと御異見なされて、何卒早う女夫にして上げて下さんせいナ。

元助　おゝ呑込んだ〳〵、私がきつと呑込んだほどに、先づお宿へお歸りなされまして、お氣を落着けなされませ。

しづ　さあ兄さんが呑込ましやんしたからは、あなたのお願ひも叶ひませうほどに、あゝ申し、其樣に泣いてばかりお出で遊ばしては、お父樣が何事かと、お案じ遊ばしますから、何氣なしに、早うおかへりなされませ。

お組　それぢやといふて。(ト行きともながるゆゑ、)

しづ　あれまあ、お情の強い。さあ、おいでなされませいなあ。

ト早き唄になり、行くまいとするを無理に連れて下手へはひる。元助跡を見送り思入あつて、

元助　やれ〳〵大風の吹いた跡のやうぢやな。（ト郡三郎はつとこなしあつて、）

郡三　あゝ迫るは女子の性質ながら、はてさて迷惑千萬な。兄者人。

元助　何ぢやぞいの。

郡三　ほとんと當惑致してござる。

元助　困るといふは尤もぢや。おれも今のやうに呑込んではやつたものゝ、やつぱり困るて。女子供と言ふものは、わからぬ者ぢやの。出家するによつて女は持たぬと譯を言ふに、死ぬと言ふのに、先が無理と言ふものぢや、弟が忠義を立てようといふ、其邪魔になる事ぢやもの、此上分別はない。ほどに、つい一走り行つて旦那樣にお目に懸り、きつぱりお斷りを言ふ分のことぢや。

郡三　しかし只今の樣子では、一と通りのお斷りでは、得心も致すまいほどに、御如在はございますまいが、一應も再應も、きつとお斷りなされて下さりませ。

元助　案じぬがよい、いはゞ賣物買物ぢや、代物はこつちの物、賣らぬと言ふを買はうといつても、賣らぬ分のことぢやて、一走り行つて斷つて來ますぞよ。

郡三　何分にも、宜しう願ひます。

元助　やれ〳〵盆と節季と、一緒になつたやうぢやなあ。

ト唄になり、元助宜しく花道へはひる。跡に郡三郎思入あつて、

郡三　大事の前の小事といへど、今降りかゝる妨げも、積れば解ける白雪と、ともに消行く命の際、是がいはゆる寸善尺魔、爰に長居は、（ト立上り、膝の塵を拂ふを道具替りの知らせ。）ならぬわえ。

ト此仕組宜しく道具まはる

（内山宅の場）――本舞臺正面中足本緣附三間の屋體、上手附屋體の所淺黄壁の丸窓、障子建てある事、欄間角がらの書割、屋體の向う上の方へ一間の床の間、軸懸けてあり、眞中塗り下げの瓦燈口、太鼓張り三尺の出這入口、此下手一間の所地袋戸棚、下の方落間、跡へ下げて建仁寺垣、此前に柏の立木、下座の所植込の張物にて見切り、いつもの所に風雅なる枝折門、總て割下水組屋敷内山住居、庭内座敷の懸り誂への通りに飾り付け、二重の上に内山官左衞門羽織袴一本ざし、少しふけたる好みの拵へにて煙草盆を控へ居る、緣の上に以前のおしづかしこまつて居る見得、稽古唄の合方へ張扇の音をあしらひたる鳴物にて道具納る。官左衞門こなしあつて、

官左　こりやしづ、先程そちがまゐりし時、郡三郎どのは何と申した。

しづ　種々お話し申しましたが、更に御承知なされませず、後より返事をいたすとのこと故、おッつけ御返事がござりませう。

宮左　おゝ左樣か、今に誰かまゐるであらう。こりやしづ、茶を一ついれてまゐれ。

しづ　かしこまりました。

トおしづ奧へはひる。花道より元助出來り、

元助　どうか旦那樣が、内においでなさればよいが。（ト舞臺へ來り、）おゝ旦那樣、これにおいでなされましたか。

宮左　おゝ、元助か、待兼ねてをつた。さ爰へまゐれ〳〵。

元助　へゝ、まつぴら御免なされませ。（ト住ひ、）

宮左　さて元助、此間より申入れし緣談、先刻も雲齋老を遣はせしが、郡三郎殿は得心であらうな。

元助　あなた樣の折角のお賴みといひ、殊には弟が出世の事、願うてもない結構な御緣談と嬉しよろこび、戾つて弟へ其由を申し聞かせましたらば、

宮左　早速得心致したか。

元助　いえ、得心は得心でござりますが、不得心でござります。

官左　なに、弟は不得心ぢやと申すか。
元助　へい、御意にござりまする。
官左　不得心と申すからは、此官左衞門が氣に入らぬか、娘がいやか、身代が不足なか、何と申した。
元助　なか／＼左樣な譯ではなく、お家柄と申し御身代と申し、結構過ぎた身の果報、とは言ひながら八百屋風情の弟が、內山樣の御養子となつては、御名跡を穢すやうなもの、御辭退致してひらにお斷り申してくれいと弟が賴み、此事ばかりは兄の效驗にも行かぬ故、よんどころなくお斷りに上りましてござりまする。
官左　いや／＼、假令其方が前栽賣でも、人は皆神の御末、高下を申すは開けぬのぢや、貴賤を論ぜず正直にて、器量ある者がまことの人間、そちが弟郡三郎は、流浪致せど人柄といひ立振舞、器量ある侍と見拔きしは此官左衞門が目水晶、殊に娘が懸想して二世の夫と思ひ込み、人を以て親への賴み、おれも惚れたりや娘も惚れたと、そこが親子の恩愛で、早う貰うて悅ばせたさ、其媒介も雲齋老に賴みおけど、いまだになんの返事も無く、待遠故に此方を呼込み、直々賴むも心の急く儘、最前とても此官左衞門が手を下げて賴むといふも、よく／＼のこと、卑下も辭退も時によるもの、不足がないといふに斷るといふは、こりや何か外で言かはしたる女子でもあるのか。

元助　いえ〳〵弟に限り、其やうないやらしい事のござりませぬは、此兄が誓言、必ずないは知れて居ります。

官左　左すれば外に望みがあらうが、其あるないは弟の事故、知らぬ事はあるまい程に、その仔細を申したがよい。

元助　こりや成程一と通りのお斷りではお聞入はござりますまい、實の所は弟に望みの有ると申す事今日迄存じませなんだが、種々に責めましたら、實は亡君鹽冶樣の菩提の爲に出家なし御菩提を弔ふがせめての忠義、夫故に女房は持たぬと申しまする。色々異見を致しましたが片意地な弟ゆゑに、中々承知致しませぬ程に、お斷りに上りましたが實の所は旦那樣此のことにござりまする。

官左　むゝ、すりや弟には出家致して、亡君のなき跡弔ふゆゑ、妻帯はならぬと申したのぢやな。

元助　左樣さうにござりまする。

官左　こりや尤もと申したいが、餘人は知らず此官左衛門、此義一圓呑みこめぬて。

元助　そりや又なぜでござりまする。

官左　おゝ豫て見所あるものと、先頃閑暇の折柄に、詩作をせんと招きし時も、餘人を交ぜずたゞ兩人茶を煮て終日夜に入る迄、今昔和漢の雜談に事よせ、弟が器量を試さんと種々と心を引見るに、

才智勝れて勇有り義有り、名を擧る其器備り末頼もしき若者なり、それに何ぞや出家せんとは人を謀る僞り、深き大望ある故に品能く申して緣邊を斷るは、底意に一物有りと見ぬいた、其實正を其方がよも知らぬとは申されまい。

元助　いえもう只今申上げた通り、外になんにも私は、存じませぬでござりまする。

官左　其方が知らぬとばかり言張つても、今申す通り、一物ありと見拔いた上からは、隱すとも益なき事、必らず存じて居よう程に、其仔細を申せ、事の筋道理にあたらば、達ての斷り聞入れまいものでもない、それぢやによつて弟が、腹藏の所、さゝ申せ〳〵。

元助　是はまた旦那さまとしたことが、存ぜぬ事を申せとは、餘り御無體でござりまする。

官左　いや無體でない、存じ居る事を申せと言ふのぢや、なぜそれが無體ぢや。

元助　それぢやと申して知らぬことを。

官左　左程に申し張る上は、此方とても刀の手前、申出せしうへからは聞かではおかぬ、さあ申せ〳〵申せ。

元助　何も申す事はござりませぬ。

官左　はて強情に申張るな。よし〳〵、言はぬにおいては此座はたゝせぬ、覺悟致して挨拶いたせ。

ト きつと言ひ、刀の柄に手を掛け、きつとなりおどすこと、是にて元助びつくりして飛のき、

元助 あゝ桑原々々、まあ〳〵お待ちなされて下さりませ、あなたが其樣にお腹をお立ちなされておつしやる事、日頃御恩の旦那樣へ申し上ぬも不人情、といつてあれ程弟に、他言はせぬと誓つて言つた一大事、とんだ所へ出合して跡へも先へも動かれぬ、あゝどうしたらよからうなあ。

官左 何と申す、他言はせぬと弟へ、誓ひし詞の一大事故、申されぬといふのか。

元助 左樣でござりまする。

官左 むゝ成程、元より律義な其方なれば、其儀に當惑致すなら、此方とても內密の事承るには、他言はせまじき武士の金打。(ト手早く差添の小柄にて金打して見せ、)まツ此通り。

ト元助嬉しきこなしあつて、

元助 えゝ有難うござりまする、御他言なされて下さらねば、弟が日頃の一大事申上げても大事ない、もしや洩れた其時は、弟はともあれ多人數の方々が、心盡しも水の泡、どうぞ密々になされて下さりませ。

官左 きつと承知致し居る程に、安堵致して申聞せい。(ト是にて官左衞門の側へ寄り、)

元助 旦那樣、斯樣な譯でござります。(ト合方きつぱりとなり、聲をひそめる心有つて四邊を窺ひ思ひ入あつ

て」弟が日頃の心願は、けふが日迄も存じませなんだが、やう〳〵本音を出しましての堅い口留め、實の所は鹽冶の御家老由良之助樣を始めとして、忠義の人が徒黨を結び、敵を討たんと艱難辛苦、しかも今宵と事極まり、一命捨てゝの敵討、弟も人數の内なれば、それ故どうも御緣組はならぬといふ譯、どうぞ此事、御他言なされて下さりますな。

ト いろ〳〵こなしあつていふ、官左衞門思ひ入あつて、

官左　おゝさうあらう〳〵、流石は高田郡三郎、さうなうては叶はぬこと、心に願ひある事は、此官左衞門が見拔きし眼力に、相違あるまいがな。あゝ適れ忠義の志し、猶々床しく慕はしゝ、もう此上は手短に、直に參つて懇望致す。（ト立上るを元助あわてゝ）

元助　あゝ申し、おいでなされたとていけませぬ。（ト留めるを振切り）

官左　いゝや參るわ〳〵。

元助　成りませぬ〳〵。

ト 爭ふ、此時奧よりお組おしづ出來り、

お組　あゝ申し父上さま、樣子は奧で聞きました。

しづ　まあ〳〵おしづまり遊ばしませ。

ト留めることよろしく、此時四つの時計鳴る、是を聞き元助びつくり思入あつて、

元助　南無三、ありやもう四つを打つ、弟が大事ぢや、さうぢや。

ト逸散に花道へはひる。官左衞門思入あつて、

官左　ても狼狽たあの元助、もう此上は片時も早く、鄰家へ參り是非を論ぜず、强談なして貰うて見せうわ。それ、腰を。

ト是にておしづ刀掛の刀をとつて出しながら、

しづ　おいではよけれどお互さまに、詞つのりて、もしもの事があつたら。

官左　いや案じまい、先はともあれ最早身共は、耳順に近いわ。（ト行きかゝる故、お組思入あつて、）

お組　父さん、必ず荒氣なことを。（トちよつと袂をひかへるを、）

官左　あゝこれ。（トふり切るを道具替りのしらせ、）氣遣ひ致すな。

ト此仕組よろしく、道具廻る。

（八百屋の場）――本舞臺元の八百屋の道具、平舞臺に郡三郎以前のなりにて、書さしの狀を書いて居ろ見得、相方にて納まると、よろしく筆を留め思入あつて、

郡三 兄者人の歸る迄と、書殘せしを認めしまへど、未だに戻つてござらぬは、變つた事のなければよいが。（ト此時四つの鐘鳴る、是を聞き、）ありや慥に入江町の四つ、あゝこれもう參らねばならぬが、留守にしても出られまい、はて待久しい事ぢやなあ。

ト花道よりばた／＼になり、元助いつさんに走り出來り、直に内へはひり、

元助 大事ぢや／＼、あゝ苦しい／＼息がきれる、ちや、茶、くれ／＼。

ト是にて郡三郎有合ふ土瓶にて茶を汲んで出しながら、

郡三 あゝこれ兄者人、譯をもいはず大事とは、何事でござります。

元助 あゝ、やう／＼口がきけて來た、さあ大事とは内山さまが御自身に、今爰へござるわいやい。

郡三 ござつたとて、苦しうはござらぬ。

元助 所がおれはまことに苦しい譯ぢや、つい／＼口が辷つて、今となつては仕樣がない。

郡三 口がすべつてとは、そりや何を。

元助 それ、あの事をな。

郡三 むゝ、すりやあの一大事を。（トきつさうして元助の胸倉を取り、）おつしやりましたか。

元助 おいやい。

郡三　此方さまはなア。(トきつとこなし、元助済まぬといふ思入にて、)
元助　料簡してくれ〱。断り言うても聞入れず、先さまに理を強く辯に任せて問ひ落され、言はねばならぬ仕儀となり、つい言つてしまつたわやい。
郡三　今更悔んで返らぬこと、とんだ事をなされましたなあ。
元助　おれが悪い〱、え丶此口めが悪いのぢや。(ト我手に口をつめる、郡三郎ぢつとこなしあつて、)
郡三　え丶情ないお心ぢやなあ。
元助　あ丶堪忍してくれ〱。
トふるへて居る、ばた〱になり花道より以前の官左衛門、袴羽織大小雪踏にて足早に出來り、門口にて、
官左　心急き故御免下され。(トずつと内へはひり、能所に住ひ、)扨高田氏、先寒暖の禮儀は差置き、急速の儀故申さうが。(トへ方きつぱりとなり、)先刻兄御元助どのより其の許の胸中委細承り、適れなるお覺悟に、猶々思の彌増して今日直々推參なし、是非共身共が聟がねに所望致さにや相成り申さぬ。
郡三　これは〱内山樣には、分に過ぎたる賞美のお詞、兄元助が御縁談のお斷りに、何を跡かたも無

き僞りを申上げたやら、全く左樣の儀、いさゝかもござりませぬ。

宮左　ないと申して、女童なら僞りと聞いても濟まさうが、正直律義の元助殿が、何僞りを申さうや、斯樣に申すその譯は、先宮左衛門死去の後入夫と成りし某故、義理有る娘がこがれる男、添はれぬ時は一命捨てんと覺悟の樣子、若しもの事がある時には、我胤ならねば知らぬ顏して置きしと、世のあざけりもある習ひ、左ある時には組中へ宮左衛門が顏が出されぬ、今主人が仇討も其許一人の事ならば、何しに拙者が留めようぞ、良金始め多人數と聞く上は、假令一人かけたりとて仇討成就は知れたること、それぢやによつて、平に承引して下され。

トいろ〳〵こなしあつて言ふ、郡三郎ぢつと聞いて、

郡三　其許さまの御胸中、委細に承知して見れば御尤もではござれども、何度申すも同樣ながら、此儀ばかりは、何とぞ御容赦下されい。

宮左　すりや加程迄恥をあらはし、事を分けて賴み入るのに、承引無くば是非に及ばぬ、是より直に登城なし、老若方の退出なき內、此段を申達なし。義黨の望みを失はさうか。

郡三　さあそれは、

宮左　但し承引めさるゝか。

郡三　さあ、それは、
宮左　左なくば申達致さうか。
郡三　さあ、
宮左　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
宮左　其許一人洩れたとて、障りにならう樣はない。
郡三　むゝ。
宮左　おゝ、忠義に傾く其性根、最早何程申すとて承引はござるまい、此上彼是申すに及ばぬ、お暇申す。（ト立上り、行かうとする故元助留めて、）
元助　あゝ申し旦那樣、ちよつと待つて下されませ。これ〳〵弟斯ういふせつぱになつた故、此せつない義理合を、大星さまへ申上げたら、そなたの越度になりもせまいに。
宮左　おゝ、人我につらければ我又人に辛しの諺、是非共申達致すの所存。
郡三　すりや、どうあつても。（ト袖をとらへぢつとなる。）
宮左　知れたことぢやわ。（トふり切り行かうとするを郡三郎きつと思ひ入あつて氣をかへ、）

郡三　貴殿のお賴み、承引いたした。

宮左　何と申す。

郡三　徒黨を洩れて、貴殿の聟に相成りませう。

宮左　すりや、眞實以て。

郡三　今宵の仇討、思ひ切つてござりまする。

宮左　おゝ、よくこそ得心致された、此上相違はござるまいな。

郡三　何しに二言のござらうや。

宮左　それにて身共も安心致した。

元助　そんなら弟は、得心してくりやつたか。どうなる事と思つたに、やう／＼是で落着いた、悲しみあれば悦びと、扨お目出度くなつて來て、こんな嬉しいことはない。

宮左　おゝ、其方が嬉しきやおれも嬉しい、嘸娘も悦び居らう、何はともあれ差當る結納替り、此差添を進上申す。（ト差添をとつて郡三郎へ渡し、）中身はしかも備前長船、齡も長く船底の、枕と祝ふ二世の緣、さ、受納の一札お認め下され。

郡三　即座の結納、あまり性急。

宮左　いや善は急げぢや、片時も早う。
郡三　心得申した。（ト有合ふ硯にて、手早く一札を書く事あつて、）
宮左　おゝ、是にてまことに幾久しく、今日より互ひに聟舅、
元助　是からわしも里親同然。はて、さま〴〵な浮世ぢやなあ。
　ト是迄の内よき時分下手よりお組おしづ出で來り、門口に窺ひ居る、此時兩人よろしくこなしあつて、
しづ　旦那さま、首尾よく事がとゝのひまして、お孃樣もこよない御機嫌。
　ト是にて宮左衞門兩人を見遣り、
宮左　兩人も爰へ來やつたか。
しづ　はい、案じたよりも産むが易いと、こんなお目出たいことはござりませぬわいなあ。
宮左　こりや娘、嬉しうあらう。
お組　父さん、ほんとでござんすか。
宮左　ほんとぢや程に、悦べ〳〵。
お組　ほんに、嬉しうござんすわいなあ。

官左　さ時に取つての最上吉日、是より直に同道いたさん。
郡三　すりや、直さま御同道とな。
官左　おゝ、延引致さば其内に、もしも故障の出來もやせん、殊に落着くそれ迄は、窮屈ながら他出をとゞめ。
郡三　さりながら、男子が一世の身祝ひ、支度とゝのへお跡より。
官左　いや、支度萬端此方にて、疾より用意致してござる。
元助　そんな事にはお差支のないお内、
しづ　御遠慮なしに、すこしも早う。
お組　そんなら是より内へ行つて、
官左　暮れなば直に婚儀の式。
しづ　雌雄の銚子のおさゝ事、
元助　三々九度も弟が身の上、
官左　いや、兎角いふ間も心が急く。いざ連立つて。いや歸るといふは忌詞。さ、開きませうか。
郡三　其のひらくとは優曇華の、

官左　花聟どのには、直さま輿入れ。

郡三　あゝ、末代不忠の、

官左　え、

郡三　いざ、御同道。（ト刀の下緒を捌くを木の頭。）いたすでござらう。

ト刀を帶へ差込むをキザミ、官左衛門お組は嬉しきこなし、元助は辭儀すること、おしづは門口の外へ履物を直すこと、此の仕組よろしく早き合方へ、雪おろしを冠せたる鳴物にてよろしく、

ひやうし　幕

（返し、高野邸内の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面三間の間上の方に四尺位の水屋綺麗に飾り、是に水桶、其外茶道具、好みの通り棚に竝べ、眞中の所三尺塗下げ瓦燈口、太鼓張りの襖明けたてあり、是より下の方ずつと塗壁にして風雅なる下地窓、此前に利休形の刀掛に刀かけてある事、此邊り能き所に大花溜の花瓶に白玉椿大分活けてある、何れも惣體茶壁にして白紙の腰張、上下折廻して一間の所、上手は障子、下座の所杉戸、總て高野の屋敷圍ひ次の間の體、爰に佐五八袴裝にて料理人の拵へ、幸内、喜多藏兩人同じく袴裝下役人の拵へにて居竝び、鼓のしらべ、かすめたる

雪おろしたあしらひたる鳴物にて幕明く。

佐五　折悪しく今日は雪故、大分冷えるではござらぬか。

幸内　左樣でござる、雪は豐年のみつぎと申せど、日勤致す我々には、大の禁物でござるて。

喜多　いやみつぎかは知らぬが、拙者などは寒うて身動きもなりませぬて。

佐五　しかし餘程小降になつた樣子ではござらぬか。

幸内　時々止んでは又降り出しますが、夜に入つたなら大降になりませうて。

喜多　いや降るの降らぬのと、我々共が傾城買に參つたやうなものでござるて。

佐五　これさ〳〵、其雜談は取置いて、今度大殿樣には御本家上杉樣の御下屋敷へ、新にお座敷の御普請出來にて、いよ〳〵此十九日にはお引移り、それ故に日々御暇乞に大名衆がお入りある故、料理方はこつぱいになるが、しかし又鰹節から味淋醬油其外諸式の掌握ものが澤山あるゆゑ、ばゝアを言ふ所ではない。

幸内　左樣々々魚類はこつぱい身所迄もあらへ切込み、四斗樽の儘さツさとお流れになる故、お互ひに女房子供は仕合せと申すもの。

喜多　又昨日近江から來た源五郎鮒のあらを貰つて行つて、南蠻煮に致したら、まことに結構な味でご

ざりました。

幸内　今日は又お内輪ばかりでお茶を出しなさるといふことだが、何か御趣向でもあるのか知らん。

佐五　されば、明日は上杉様がお出で、當殿様が御亭主役でお茶が出る筈、お合役が皆お茶人故、今日は其の稽古に大殿様が御上客で、お蘭の方様と竹齋どのがお詰役、今漸くお會席を濟ませた所、是からがお茶になるのでござる。

幸内　左様でござるか、しかし大きな聲では言はれぬが、大殿様はお茶が不得手といふ噂ではござりませぬか。

喜多　いかにも、お茶の方は大不得手でござるが、其替り欲と意地のわるい方へかけては、大の得手でござる。けふの茶の湯のお手前も、首尾よくいけばよいけれど。

佐五　是はしたり、左様の事は船中にては申さぬことにて候。

三人　あはゝゝゝ。

ト此時はた〳〵と音して、勝手口を明け、茶道春齋茶道の拵へにて、竹の花活を持ち逃げて出て來る、跡より高の師泰袴羽織若殿の拵へにて、白玉椿の枝を持ち、追かけて出來り、

師泰　うぬ、憎い奴めが。

春齋　どうぞ御免遊ばして下さりませ。

師泰　おのれ、逃るとてにがさうや、それへ出い、手は見せぬぞ。

　　ト有合ふ刀掛の刀を取つて拔きかける故、佐五八始め三人是をとめながら、

佐五　先づ〳〵わが君、

三人　おしづまり遊ばされませう。

師泰　やあ不吉を仕出す不屆やつめが。

春齋　此春齋には、何か粗相を致しましたか。

師泰　おゝ、今床へ差す白玉の此の椿を、此奴めが落せし故、差當つて差支に相成るわえ。

春齋　いや〳〵、私ではござりませぬ、御前がお落しなされたのでござります。

師泰　まだ〳〵申すか、口ごたへ致すはきつくわい千萬。（トきつとなるを佐五八とめて、）

佐五　其のお怒りは御尤もではござりまするが、春齋が不調法、平に御容赦の儀、

三人　とも〴〵願ひ上げまする。（ト皆々よろしくわびる、師泰思入あつて、）

師泰　佐五八始め皆の者が、詫る故ゆるしたけれど、今日の茶席に玉椿八千代を壽き、父を祝せし此花を、此奴が粗忽で落せしは第一不吉、あゝ何とやら心がゝりな。

佐五　何さま、是はお心掛りではござりませうが、元よりもろき花なれば、落ちましたとてあながち心ざはりにも相成りますまいかと存じまする、又是なる花溜に、澤山仕込み置きましたれば、何れなりとも思し召しに叶ひましたるを、お差かへ遊ばされませ。

ト件の花溜を兩人額にて指圖する、是にて兩人師泰の前へ持つて出ること。

師泰　おゝよく心付いた。（トあちこち花を見る思入、佐五八こなしあつて、）

佐五　是なる枝は花と申し木振と申しよろしいではござりませぬか。（ト取つて出す。）

師泰　どれ、見せやれ。（ト師泰取つて持かへ、いろ〳〵詠める内花仕掛にてぱつたり落ちるゆゑ、）又もや花が

ト　ホツと思入、春齋是を見て、

春齋　それ、又御前さまでござりませうな。（ト言ふをかぶせて、）

佐五　是はしたり春齋殿、だまりめされい。（ト是にて春齋尻込をする。）

師泰　返す〴〵も心掛りな、おゝ此上は緣起直しに、此奴が素首まつこの如くおとしくれん。

ト刀を引拔き春齋に切掛る故、春齋逃退くを追ひまはす、佐五八皆々入亂れになり、ト、眞中にてしつかり留める、師泰眞中にて刀をふり上げるを道具がはりのしらせ、春齋下手にて慄へる、皆々引ぱりよろしく、此道具廻る。

(庭内待合の場)――本舞臺正面上手寄りに九尺程、奥行四尺程にして、四ツ谷丸太の柱、葺おろしの屋根、赤松の椽竹打まぜの木小舞切板、床面じやくりのぬぐひ板、高き常足位、下手の棲に下地窓下通りはよき板、此上手跡へ下げてそげ板、檜垣の屋根付、塗壁の塀、眞中よき所に角がらの庭口、格子をたて、何れも惣體中ぬり、引ずり壁、下手下座の所迄畫心に折廻して塗壁の塀、眞中よき所に織部形角形の石燈籠、此側につくばひの手水鉢柄杓添へてあること、下草樹木共雪降り積りある體、二重の上に好みの手焙煙草盆、圓座を置き、よき所に路次笠をかけ、總て高野家庭内待合の體。腰掛に師直被布着ながし好みの裝、お蘭の方着ながし妾の裝、何れも路次下駄にて圓座を敷きかけて居る、下手に竹齋茶道の拵へにて居る見得、雪おろしにて、道具半より、九つの時計にて道具納る、と誂への合方にて、師直思入あつて、

師直 今打ちしは九つなるか。

竹齋 御意の通り、丁度正午のお時計でござりまする。

師直 はてさて短日な事ぢやな。

お蘭 雪ぞら故、猶更時刻も分り兼ねまする。

師直　折惡しく今日は寒氣も嚴しいやうぢやな。
お蘭　御意の通り、雪故別して冷えますやうでござりまする。
竹齋　雪と申せば御前さま、御覽遊ばしませ、此燈籠へ薄雪の積りました風情は、何ともたとへやうがござりませぬ。
師直　何さま雪と申すものは、趣のあるもので、詩歌に心を寄せる者はわけて愛するものぢやて。
竹齋　左樣さうにござりまする。しかし又此燈籠はいつ見ても、始めて拜見致すやうに思はれます。
師直　予も左樣に思ふて、兎角見ざめのする品が多いものぢやが、是らは隨分名物と申してもよいではないか。
竹齋　號けましたら何とか申す銘もござりませう、どうも寂のあぢはひと申し、火ぶくろ、棹の工合、何處からどこ迄申分はござりませぬ。いつたい是は、何れよりお手に入れました。
師直　是は前かた相州が、饗應司を勤められた時、予が茶事を好むを知つて、かやうの品の穿鑿いたして、態々持たせ越したのだ。
竹齋　何さま左樣でござりませう、相州公にも格別お心に掛けられ、隨分と凝つた御音物でござります、餘程の御散財と相見えました。

お蘭　餘程時代も見えますが、いつ頃のものでござりませう。
師直　さればさ、鎌倉時代のものかと予は鑑定いたした。
竹齋　成程是はお目利でござります、遠州公にござりました重忠所持と申す燈籠も、矢張此形でござりました。
師直　予も是を珍物と、祕藏いたし居るて。
竹齋　御祕藏遊ばしましても、嘲りはござりませぬ、毎度お客來の折柄は、どなた樣も御賞美なされてでござりまする。
お蘭　まあ燈籠のお話は兎も角も、最前より餘程の間、もう御案內がありさうなものでござりますなあ。
師直　さればさ、何を致して居るやら、餘り延引いたすではないか。（ト此時奥にて大勢の聲にて、）
大勢　まづ〳〵おしづまり下さりませ〳〵。（ト是を聞付け、竹齋思入あつて、）
竹齋　何やら高聲に聞えまするが、誰やらが若殿の御機嫌を損ねましたか知らん。
師直　又例の疳癖であらう、竹齋其方勝手を見てまゐれ。
竹齋　御意ではござりまするが、それは餘りの失禮故。

師直　いやさ、他人交ずの内輪の茶會、苦しうない見て參れ。
竹齋　はッ畏まりました。
　　ト此時かすめたる雪おろしになり、日覆より雪ちら〳〵降る、竹齋見て、
竹齋　是は又ちらついてまゐりました。
　　ト路次笠を取つてかざし、右の鳴物にてよろしく上手へはひる、跡兩人殘り、師直空を見やり、
師直　いや又大分降つてまゐつた。
お蘭　雨とは違ひ、よい景色でござりますわいなあ。
師直　まだ〳〵こんな事でない、今度予に引移らせんと申して、本家上杉の下屋敷へしつらへた座敷の普請、また庭内の手入もよく行屆き、大の好者に樹木の植込み、築山泉水の模樣迄、感心致す程よく出來致した故、はやく其方に見せたいわえ。
お蘭　いえ〳〵、私はお下屋敷に參ることはいやでござりまする。生れ付いて淋しいのは大嫌でござります故、お出遊ばすなら、御前お一人おいで遊ばしませ。
師直　又其樣な愛想づかしを申すか、十三日の引移りと極りしが、其方がいやと申すばかりに、風邪と申して十九日迄延ばしたのぢや。

お蘭　それにいつぞや御前のお詞にも、其方がいやならいつ迄も爰に居ようとおつしやつたは、ありやお僞りでござりまするか。

師直　僞りではなけれども、是非とも今度引移らねばならぬといふ仔細は、去年三月殿中にて予に手を負せし鹽冶高貞、切腹仰付られ家斷絶せしを、其家來共が無念に思ひ、徒黨を結び敵討をなさん企あるとの噂、それ故小林平八郎が片時も早く上杉の下屋敷へ引移れと、此程より數度の勸め尤もかしこの屋敷は構へ堅固にしつらへたれば、たとひ何樣浪士共が徒黨なしても及ばぬこと、枕を高く安臥致し居らるゝわ。

お蘭　さあ、それぢやによつて、いえもう、其樣にお案じなさるゝも御無理ならねど、なか／＼鹽冶の浪人などに敵を討たうといふやうな、まことの武士はござりませぬ。承れば國家老の由良之助といふ者も、遊里通ひの酒と色とにうつゝなき愚者との噂でござりまする。高取りさへも其通りゆゑ、跡は取るに足らぬもの、用心過ぎるもかへつて人の物笑ひかと存じますわいなあ。

師直　予も左樣存ずるて、高の知れたる小藩の家來共、何程の事を仕出さん、平八めが臆病風に誘はれたやら、兎角怯氣付いての事ぢやわえ。

お蘭　それぢやによつてお引移り遊ばさずと濟む事故、只此上は御前さまの、お心お一つでござります

わいなあ。

師直　左程に其方がいやがるもの、どうなりと申し延ばして置かうわえ。

お蘭　ほんにお嬉しう存じまするわいなあ。（ト是より誂への獨吟になる、）

〽散る花と見しやそれともわかぬのも、ほんに思へば風寒く、身に染々と、まだ春ならぬ庭もせや、

ト兩人是を聞き、思入あつて、

師直　あの唱歌は鄰家の樣子、はてなあ、おゝさうであるはず、けふは鄰に內客があつて、催しがあると申す事であつたが、藝人も參つて居ると見える。

お蘭　ほんに左樣と見えまする。

師直　あれは長唄とやら申すのぢやの。

お蘭　御意にござります。

師直　はて風情のある音色ぢやなあ。

お蘭　まあ何も御意遊ばされず、ぢつとお聞き遊ばしませいなあ。

〽千代をふるとも變らぬ色の、松の梢にむつの花、咲いてちら〱白妙の、

ト此文句の内兩人よろしくこなしあつて、

師直　あの長唄はよけれど、餘り長く待たせ居るので、手先がひえこゞえて來た。

ト手あぶりにてあたゝめるこなし、日覆より雪ふり、雪おろしのあしらひ、

お蘭　ほんに又降つて參ります故、猶冷えませう、私がお手をあたゝめて差上げませう。

師直　なに、其方が手をあたゝめてくりやるとか。

お蘭　さあ、こちらへお出遊ばしませ。

〽肌にふれたる衣手の、香取もいつか炷きしめて、はなれがたなきぬくめ鳥、

トお蘭師直の手を取り、自分の袖にてあたゝめる。よきほどに上手より以前の竹齋窺ひ出で此の様子を見て氣の揉めるこなし、トゞ植木の枝の雪落ちて竹齋の頭へかゝる。

竹齋　あゝつめたい。（ト思はず大きく言ふ。）

お蘭　あれえ。（トびつくりする。）

〽風に枯木の雪の枝折れ。

ト竹齋、頭の雪を拂ふ、是を獨吟の上げにて、

師直　これ竹齋、何をそれにいたしをつた。

竹齋　さあ、それはあの、斯樣でござります。あれなる枝に餌をあさる小鳥が一羽をりました故、捕へようといたしまして、大きに恥辱を取りました。
師直　そちのやうな粗忽者に、なんで小鳥が捕へられうぞ。
竹齋　恐入りましてござりまする。（ト此時合圖のドラを打つ。）
お蘭　ありやもう、お詰の入りでござりまする。
　　ト師直お蘭の手を取り立上る。
竹齋　あゝ又お茶のお席で。
お蘭　え。
竹齋　いえなに、濃茶がお好きの御前樣。
師直　はて濃茶を好むは、お蘭のことぢや。
竹齋　てもお美しい、（トお蘭に見とれる故師直杓柄の水を竹齋にかける。）えゝ、つめたい。
　　ト下にゐるを木の頭。
師直　たはけ面め。
　　ト笑ふ、雪おろし誂への合方にて、

幕

三幕目

晝八ッ時

葉泉院御殿の場
同　屋敷外の場

【役名　大星由良之助、淸水大學、寺岡平右衛門、澁川五太夫。後室葉泉院、戶田の局、其他。】

（御殿の場）――本舞臺平舞臺向う白地中形の襖、上下杉戶、花道の揚幕同じく杉戶の出はひり、舞臺花道共一面に薄緣を敷き、總て藝州侯下屋敷葉泉院御殿の體。爰に侍女おうめ、腰元置霜、みゆき、夜雨、腰元の裝の上に白地の浴衣を上張になし、手拭をかぶり煤掃の拵へ、澁川五太夫白髮かづら袴一本差奥侍の拵へ、是を腰元四人胴上にして居る、目出たく〱の唄にて幕あく。

腰元四人　目出た〱の若松さまよ、枝も榮えて葉も茂る、お目出たや、さつさお目出たや。

ト　あちこち歩き、トゞ突放しに澁川を落す、澁川腰を打ちし思入にて、

澁川　あいたゝゝゝ、年寄を胴上にして、突放しにするといふがあるものか、あいたゝゝゝ。

置霜　突放しにする氣はなけれど、つい寒いので手がこゞえ。

みゆ　それであなたを落しましたが、どこぞお怪我はなされませぬか。

夜雨　しかしお煤拂ひの胴上は、昔からお家の御嘉例。
うめ　一つ間違へば、侍は痛い腹を切らねばならぬ、胴上の突放しぐらゐは、何でもないことでござります、痛い顔をなされますな。
澁川　いや痛い顔をせずには居られぬ、どうかして胴上の敵をとらねばならぬ。
置霜　おゝ敵といへば、御家老の大星さまを始として、御家中の其内で、忠義なお方が寄りあつまり、
みゆ　亡き殿樣の敵を討つと、お噂がござりまするが、
夜雨　其後なんの御沙汰もないが、どうなつたのでござりませう。
みゆ　大星さまは大層な智慧のあるお方だと、お話に聞いて居りましたが、なぜ殿さまの敵をば、お討ちなさらぬのでござりませう。
澁川　未時節が來たらぬ故ぢや、本國赤穗を離散してより、大星氏をはじめとして、一味の諸士が世を忍び、千辛萬苦してござるも、敵を討たうばつかりだ。
うめ　そんならいよ〳〵噂の如く、（トおうめ思入。）
澁川　今に敵討がござるであらう。（ト此時奧にて、）
戸田「ものいへば、脣寒し秋の風」

澁川　やゝあの聲は

四人　ありや戸田のお局さま。

ト誂への合方になり、奥より戸田の局補襠 局の 拵へにて出で來る。

澁川　これは〳〵戸田殿でござるか、今日はお家の御嘉例、

置霜　おすゝ取の御祝儀、

四人　お目出たう存じまする。

戸田　澁川さまには御老體にて、此大雪に早朝より、お煤取のお見廻り、さぞお寒うござりませう。

澁川　寒いと申せば戸田殿には、何か寒いとおほせられたな。

戸田　御存じの通り後室樣は、歌俳諧がお好故、お相手を致すので、當時名高い宗匠方の、秀逸を覺えまして、今口ずさみしあの句は「物言へば脣寒し秋の風」と、翁が吟にござりまする。

澁川　して其翁と申すは、いづれの仁でござりまするな。

戸田　是は伊賀の出生にて、芭蕉翁桃青と申す、當時名高い俳師にござりまする。

澁川　はゝ左樣でござるかな、身共は又四日市の、稻荷の神主かと思つた。

うめ　まあ何をおつしやりまするぞいなあ。

澁川　して其發句の、脣寒しとは、どういふ意味でござるな。

戸田　只秋の季に言ひなしたれど、由無き事を申しますれば、跡の害になるもの故、口善悪なき戒めには、よい發句と存じられます。

澁川　いかさま、是はよい誡め。

置霜　今お襖ごしに戸田さまが、

みゆ　此句をお吟じ、

四人　なされましたは。

戸田　亡君の敵討は、他聞を憚る一大事、由無き事をおつしやる故、おとゞめ申せし翁が名吟。

澁川　成程迂闊に物言へば、

戸田　脣寒し秋の風、

澁川　以後はきつと愼しみ申す。

　ト澁川辭儀をなす、ばた／＼になり侍袴一本差、錠口番にて出で來り、花道にて、

侍　はツ、申上げます。

戸田　何事でござりまする。

侍　御家老大星由良之助殿、只今御入來にござりますが、是へお通し申しませうや、如何はからひませう。

戸田　其のおいでを此程より、後室樣にはお待兼ね、直に是へお通し申しまをしや。

侍　はッ畏つてござりまする。（ト引かへして花道へはひる。）

瀧川　すりや御家老の大星氏が、只今是へ御入來とな。

置霜　お出迎ひをいたしませうか。

戸田　御嘉例とは申しながら、おすゝ取の其裝でお出迎ひは見苦しい、しばらくお次へおいでなされ。

みゆ　左樣なれば私共は、お三の間のお掃除が、まだ殘つて居りますれば、

夜雨　此間に參つていたしませう。

うめ　私はまだ大星さまを、見上げたことがござりませぬが、是に居て御家老さまの、お顏が見たうござりまする。

置霜　ほんに其方は新參故、大星さまを知らぬ筈、

みゆ　お年は四十の上なれど、どこやらお若い御家老さま。

夜雨　しかもお顏はたくましく、よい御器量でござりまする。

うめ　其お方が敵討を、なされますのでござりますな。
澁川　是はしたり又申すか、今戸田殿が言はれたる、脣寒しを忘れしか。
うめ　へい〳〵、恐れ入りましてござりまする。
置霜　左様なれば、
四人　私共は、
戸田　お次へお出なされたなら、置霜殿は後室さまへ、大星殿がおいでの趣、申上げて下さりませ。
置霜　畏りました。
うめ　どれ、私も御一緒に、
澁川　身共も參つて、張番致さう。
戸田　お居間へ襖一重故、必ずともに秋の風。
澁川　おゝ、脣寒しは忘れ申さぬ。
皆々　さあ參りませうわいなあ。
ト唄になり、澁川先に置霜、みゆき、夜雨、おうめ思入あつて奥へはひる。
戸田　後室樣にはお待ちなされし、大星殿の計らずお入りに、嘸お悅びでござりませう。最早お入りに

間もあるまい、是にてお出迎ひ致しませう。

ト誂への合方になり、花道より由良之助袴羽織大小にて、以前の侍付添ひ出來り、花道に留る、戸田の局出向ひ、

戸田　これは〳〵大星殿には、此雪中にようこその御入來。

由良　さいふは局戸田殿か、お出迎ひ御苦勞千萬。(ト侍を見かへり、)最早是にてよろしうござる。

侍　はッ。(ト引返してはひる。)

戸田　今日はお煤取にて、取ちらしございまするが、先づ〳〵是へ。

由良　然らば御免。

ト由良之助舞臺へ來り、戸田下手へ下り、由良之助會釋して上手へ住ひよろしく思入、やはり右の合方にて、

さて其後は意外の御無音、葉泉院樣の御機嫌をも伺はず失禮の至りにござるが、御健勝にていらせられまするか。

戸田　秋の末より兎角おわづらひ勝にござりましたが、此程は御持病御平癒遊ばして、御機嫌宜しういらせられます。

由良　夫れは重疊な儀でござる、戸田殿にも相變らず御無事にて、悅ばしうござる。
戸田　又あなたにも御壯健にて、お目出たう存じまする。
由良　此程は健かなるが、京地より下りし折は、かの水替りのゆゑなるか、三度の食も進みかね、心わるうござつたも、藥用の驗見え、全快に及びしが、今日の樣な雪中には、持病の疝氣にて足痛なす、是等は年のせゐでござらう。
戸田　まだまあお年のせゐなどゝ、其樣なことおつしやりますと、とんとお似合なされませぬ。
由良　いや似合はぬこともござらぬて、最早四十の坂も越し、人命五十の峠に近く、六十までの打越しは、所詮及ばぬことでござる。
戸田　いえ〳〵古稀は愚な事、七十七のお祝ひも、つい今の間でござりまする。
由良　七十七か八十八、軈て此身も百ケ日。
戸田　え。（ト兩人宜しく思入。）
由良　いや、百歲迄も生きられて、長生したいものでござる。
戸田　御長壽に逢ひござりませぬ。
由良　益なき餘談は後しての事、今日某推參せしは、御無音なせしお詫かた〴〵、お暇乞に參つてご

ざる。(ト是を聞き戸田扨はといふ思入あつて、)

戸田　すりや貴方には後室様へ、お暇乞においでなされしとか。

由良　疾より参上なす可きを、彼是繁多に思はぬ延引、最早今日に迫りし故、お目通りを願はんと、推参致してござる。(ト戸田敵討のいとま乞といふ思入にて、)

戸田　それはお目出たい事でござりまする。此程より後室様にも、貴方の御沙汰をお待兼ね故、只今お出の趣きを、直に申上げて置きました。

由良　それは御配慮忝うござる。(ト此時下手杉戸を明け、以前の置霜出て、)

置霜　はッ、戸田様に申上げます、大星さまを御佛間へお通し申しまするやう、仰付けられましてござります。

戸田　承知しました。(ト由良之助へ向ひ、)只今お聞きなされた通り、後室様より御沙汰なれば、お奥へお通りなされませ。

由良　御意とあらば、是より直に。

戸田　後室さまの御佛間へ、

由良　いざ、御案内下されい。

ト唄になり由良之助先に、戸田置籍附いて奥へはひろ、下座の杉戸よりおうめ窺ひ出來り、あたりを見て。

うめ　そんなら今のが國家老の、大星由良之助といふ人か、見るから知慧のありさうで、一と際勝れし人品骨柄、あの大星が隊長で、忠義の者が集つたら、敵を討たれぬことはない、今日後室樣へお暇乞に、來たといふのは何でも曲事、お次へ忍んで樣子を窺ひ、大學樣へ知らさうと、書掛け置いた此の密書。（ト此時後へ澁川出て。）

澁川　おうめ、其文はなんだ。

うめ　え、（トびつくりして懷へ入れ。）此文でござりまするか。

澁川　不義はお家の堅い御法度、附文なぞは相成らぬぞ。

うめ　いえ／＼是は母の所へ、おこつをねだつてやります文。

澁川　いや／＼それは慥に色文、詮議致さにや相成らぬ。（ト澁川取りにかゝる。）

うめ　いえ／＼さうではござりませぬ。（ト懷を押へる、澁川うしろより抱付き。）

澁川　見せずば身共が言ふ事聞くか。

うめ　なに、言ふ事を聞けといふのは。

澁川　しはを延ばして貰ひたいのだ。

うめ　えゝも好かない、梅干親仁め。（ト突倒す、此時文を落す、澁川拾つて、）

澁川　こりやこれさつきの。

うめ　どつこい、それを。

ト目出度々々の唄、文を奪ひ合ふ立廻りよろしく、此道具廻る。

(居間の場)――本舞臺三間の間平舞臺、向う眞中一間の床の間、好みの掛物、置花活へ椿を活け、上手一間袋戸棚、下手一間、違ひ棚、茶道具好みの品を並べ、上の方一間附屋體、佛間正面四枚開きの扉、經机立派な三つ具足、正面立像の阿彌陀其外佛器宜しく飾り、正面に誂への位牌、此佛檀の下銀地に蓮の畫の襖、此屋體前側兩つま共塗骨障子、下の方銀張りの襖、總て葉泉院居間の體。上手に葉泉院切髪誂への被布衣裳、好みの後室の拵へ、褥の上に住ひ、傍に鼻紙臺。文臺に硯箱載せてあり、前に蒲團附の手焙、金銀物の煙草盆など小道具宜しく飾り、眞中に以前の由良之助、下手に戸田住ひ、よろしく床の三重にて道具納る。

〽時めきし春は昔に冬枯れて、今は花なきそぎ尼の、葉泉院の奥御殿、思ひがけなき大星

の、入來に御機嫌麗はしく、
ト跡合方になり葉泉院思入あつて、

葉泉　先頃其方が尋ねし折は、大師河原の邊りなる、平間村とか申す所に、假住居の由承はりしが、當時は何れの住居なるぞ。

由良　はツ、京より當地へ參りし折は、只今仰せの平間村に寓居致し居りましたが、萬事邊土の不都合に、當節石町三丁目の貸座敷を借受けまして、拙者は垣見五郎兵衞、又忠息力彌は同苗左内と變名致し、公用有つて旅宿なす體にもてなし、此程より暫く寓居仕りまする。

戸田　石町邊にお住ひある事、仄に承はりしが、人目を忍ぶ御身故、此方より存じながら御疎遠に致しました。

由良　拙者とても矢張同樣、包む事こそ漏れ易く、赤穗の藩と知れざるやう、言語に迄心を用ゐ、京地の武士と今日迄、計り果せてござりまする。

葉泉　〽言ふ顏つく〴〵後室は、打ながめて淚を拭ひ、（ト葉泉院由良之助を見て思入あつて、）其苦心故か三年跡、國の用事にて出府せし其折から算ふれば、月日はわづか二年に足らねど、面窶れせる由良之助、日夜の心勞察し入るぞよ。

由良 はッ、有難き其仰せ、申し上げるも憚りあれど、後室様にも以前と違ひ、お髮の飾り無き故に、三年跡にお目見得せし其きざみに替りしお姿、仰せ無くとも御心痛は、お面を拜しまして、拙者も御推量申上げます。

戸田 後室様をはじめとして、數なりませぬ私共迄、二重の帯も三重廻り、身體の痩を覺えしも、亡き殿様の仇敵、かの方故でござりまする。（ト悔しき思入）

葉泉 御思慮深き我君が、殿中において刃傷に及び給ふはよく〳〵に、忍び難き事にこそ、それも御本意遂げ給はず、其お咎にて御切腹、遂にお家も改易に、あまたの家中も扶持に放れ、路頭に迷ふを冥土にて、御覽遊ばす我君は嘸御無念でござりませう、是皆高野師直故、憎しと思ふ一心は、寢ても忘れはせぬわいなう。

〽返らぬ事を繰返し、珠數の玉なす御涙、御傷はしやと落涙なす、折柄うしろに窺ふお梅、襖の音に良金が、見かへる途端に立てきる襖、戸田は樣子を見てとりて、

ト葉泉院口惜しき思入にて泣伏す、由良之助、戸田も是を見て共に涙にくれる思入、此時下手の襖を明け、以前のお梅そつと窺ふ、由良之助早くも悟り振返る、お梅びつくりなしてばつたりと襖を〆める、戸田も思入あつて、

戸田　折角雪のおいとひなく、御入來有りし大星殿へ、後室樣は兎も角も私迄が同じ樣に、由無き事を申出し、お恥かしう存じまする。(ト是にて葉泉院も氣を取直し、)

葉泉　嘸、これ迄長途の所、雪風に膚を通し寒かりし事ならん、良金も深く好めば、酒の支度を申し付きや。

戸田　其儀は只今柏木どのへ、申付けましてござりまする。

由良　好物の御酒下さるは、有難うはござりまするが、前申す不快勝に、暫くつゝしみ居りますれば、御無用になし下さりませ。

戸田　左樣でもござりませうが、今日はお家の御嘉例にて、おすゝ取のお祝ひ日、肴の仕立もあれば、常はおつゝしみあるにもせよ、折角の思し召し、一と口あがつて下さりませ。

葉泉　春を迎へる煤取も、今の此身に樂しみなけれど、嘉例の事故良金も、目出度く一獻過してくりやれ。

由良　お煤取の御祝儀に、參り合せし身の果報、目出度く頂戴致すでござりまする。

葉泉　それは何より嬉しいわいの。

〽悅び給へば良金が、(ト誂への合方になり、由良之助思ひ入あつて、)

由良　其お煤取に付まして、申上げたい儀がござりまする。

葉泉　なに煤取に付いてとは、そりや如何やうのことなるぞ。

由良　後室さまへも俳諧の、お相手に出でましたる大鷲文吾にござりまする。

葉泉　おゝ、子葉が如何致せしぞ。

由良　本國離散致せしより、當地へ參り住居なせしが、浮浪の身の活計にせまり、煤取に用ゆる竹をひさぎ、其日の活計を立てしが、昨日兩國橋の邊りを、竹や〳〵と呼びながら、過ぎりましたを、呼留めましたは、かの俳師寶井其角、一別以來の挨拶終つて、大小たばさむ身の上にて、身にはつゞれの衣を纏ひ、見る影もなき有樣を、其角も歎息いたせしか「年の瀨や水の流れも人の身も」と言ひかけましたれば、取あへず、「あした待たるゝその寶船」と子葉が付けしと申すこと、竹を賣る身になりましても、風韻を捨てざるは、俳諧者流の英雄でござりまする。

ト葉泉院思入あつて、

葉泉　ても面白い其附合、筆記して置きたい故、今一度吟じてたも。

由良　再吟致すでござりまする。

葉泉　戸田、其方書留めてくりや。

戸田　はッ、畏りました。

〽あり合ふ文臺とり出し、墨すり流せば由良之助、

ト戸田有合ふ文臺を出し、墨を摺り筆を取上げる、由良之助見て、

由良　年の瀬や水の流れも人の身も、　明日待たるゝ其寶船。（ト戸田さら〳〵と書き、）

戸田　年の瀬や水の流れも人の身も、

葉泉　あした待たるゝその寶船。（ト葉泉院戸田よろしく思入あつて、）あした待たるゝ、子葉が附句は、

戸田　正しく深き、

〽主從心にうなづき合ひ、（ト葉泉院戸田顏見合せ、敵討といふ思入あつて、）

葉泉　はて、天晴な附句ぢやなあ。

〽扨こそ今宵本望と、さかしき戸田は推量なし、（ト戸田敵討の暇乞といふ思入あつて、）

戸田　すりやそれ故に貴方にも、

由良　お暇乞に參つてござる。

戸田　扨こそ日頃の一儀調ひ、今宵御本望でござりまするか。

由良　如何にもかねての望叶ひ、

〽聞くに後室座をすゝみ、（ト葉泉院嬉しき思入にて、）

葉泉　おゝ、本望の時來りしとか。

由良　はッ、名におふ東都の名所古跡、殘るくまなく見物致し、最早日頃の望も叶ひ、明朝都へ立歸る所存故に後室樣へ、お暇乞に出ましてござる。

葉泉　東都の名所見物なし、日頃の望叶ひし故、暇乞に參りしとは、合點の行かぬ其の詞。

戸田　赤穗離散の其砌、企てありし、かの一儀は、

由良　敵討の儀でござるか。

戸田　いかにも。

由良　それは思ひ止りました。

兩人　なんと。

へあんに相違の良金が、詞に輿も覺果つれば、此方は莞爾と打笑みて、
ト葉泉院戸田呆れし思入、誂への合方になり、由良之助思入あつて、

由良　今改めて申さずとも、御存じの事ながら、本國開城の其砌、御寶藏に貯へ置きし御用金を配分なし、赤穗を立退き思ひ〳〵に、知邊を便り寓居致し、旣に拙者も山科の片邊りへ住ひを構へ、勤無き身の心安く、祇園淸水知恩院又は愛宕南禪寺、見るもの每に珍らしく、日每遊覽なす折柄、

若侍にそゝのかされ、遊里の酒を呑み習ひ、浮きにうかれて浮と言ふ、名を取る程遊び盡し、原吉田小寺なんど、老臣共が異見なすその事件には眉をひそめ、敵へ油斷さす爲と、まことしやかに僞りしも、跡より禿ける後家鞘の言譯さへも差詰り、我身のさびを隱しかね、敵地の樣子さぐらんと、東へ下向なしたるも、名所古跡を詠めん爲、上野飛鳥の花は知らねど、三つ股の月隅田の雪、けふは目黑明日は王子と三月此方見物なし、日頃の望み叶ひし故、遣ひ殘りの五百金、失禮ながら後室樣のお納戸金に獻上なし、明朝都へ出立致せば、何日また東都へ參る事やら、計り知られぬ由良之助、それ故今日雪中ながら、お暇乞に推參なしたり、今獻上なす五百金も、元はお家の御用金故、御受納なし下さらば、大慶至極に存じまする。

〽明けていはざる良金が、袱紗包の金取出し、御前へ出せど見もし給はず、

ト由良之助懷中より袱紗包の五百兩を出し、葉泉院の前へさしだす、葉泉院思ひ入あつて、

葉泉　赤穗離散の其砌、斧九太夫を始めとして臆病未練の者を省き、義を鐵石にかためたる、誠心無二の者を選み、其方親子をはじめとして、徒黨を結びし仇討を、思ひとゞまり其儘に、再び都へ歸るとは、心得がたき其詞。

戸田　定めて是には深き御所存、有つての事でござりませう、包み隱さず御心底、後室樣へおあかし下

され。

由良　別に深き所存はござらぬ。是より都へ立歸り、年頃馴れし大小捨て身は町人となり下るも、今の時勢は侍より遙に增る商家の生計、されば拙者も商法立て、十露盤秤の目をせゝり、生涯樂に暮す所存、我心底はかくの通り、

〽日頃に似合はぬ良金が、詞は實か僞か、流石は女儀に後室も、附添ふ戸田も測りかね。

ト葉泉院戸田よろしく思入。

葉泉　すりや其方は亡君の、多年の御恩うち忘れ、企なせし仇討を、今此儘にとゞまる所存か。

戸田　して〳〵徒黨の人數もみな、御身同樣變心なし、亡き我君の御無念を、晴らす者はござりませぬか。

由良　まづ〳〵一人もござるまい。

戸田　何とおつしやる。

由良　是を思へば斧九太夫、奧野宗玄、森五平太、かれ等は未然を察せしもの、殿御切腹の其砌は、足利殿さへお恨み申し、血氣に逸る者共が、只復讐の志のみ、されば拙者親子を始め、二百餘人の徒黨なりしが、月日の立つに隨つて、去る物日々に疎しの譬へ、一月每に列を洩れ、變心なす

者數知れず、當今跡に殘りしものは、人數もわづか四十餘人、頼み少き世の中に、敵討を思ひとまり、誓ひに立てし神文を、徒黨の者へ返せしが、誰一人何故と、拒む者もあらざるは、何れも當時の形勢に、浮浪人では活計立たず、大小捨てゝ拙者同様、町人となる所存と見ゆる。さすればこれが今の人情、御諦め下さるべし。

葉泉　すりや良金は本心にて、

由良　いかにも、變心仕る。

葉泉　えゝ、見さけ果てたる心よなあ。

〽頼みに思ふ良金が、心替りに葉泉院、御無念おもてに見えければ、戸田の局は詰め寄りて、

ト葉泉院ちつとなり無念の思入、戸田の局是を見てこなしありて、由良之助に詰寄り、

戸田　執事を權に師直殿、惡口雜言なせし故、萬人の爲天下のため、御家を捨てゝ殿さまが、御刃傷に及びしも、桃の井殿の家來たる加古川本藏に抱留められ、御本望を遂げ給はず、御切腹遊ばせし其御無念はいかばかり、君辱かしめを受くる時は臣死すとやら申す事、臣下の者が雪がずば、誰が御恥辱をすゝぎませうぞ、赤穂離散の其折は御遺言をお守りなされ敵討ちの御企ては、さすが

は御家老職、武士は斯くこそありたきものと後室樣と明暮に、お褒め申さぬ日とては無く、先頃東へお下りは、最早近々御本望の時至りし事と思ひ、今日か明日かと御沙汰をば、待ちに待つたる其所へ、今日のおいでは事極まりお暇乞と思ひし故、天へも登る嬉しさに打て替りし御變心、あなたばかりは臆病な、よもお心はあるまいと、思ひの外なる御料簡、女でこそあれ私は、去年三月殿樣が果敢なき御最期遊ばしてより、悔しうて〳〵、只の一日此胸に忘るゝ事はござりませぬが、御家老職の御身にて、あなたは悔しうござりませぬか、いやさ、御無念にはござりませぬか。

〽女ながらも鐵石に、こりかたまりし忠義の一心、適れ健氣と良金が、心にほめてそしらぬふり、

ト此内戸田段々由良之助へ詰寄り、疊をたゝいて悔しき思入、葉泉院も是をぢつと見てこなし、由良之助せつなき思入よろしくあつて、

由良　其砌は我人共無念にも思ひしが、今はとんと無念にござらぬ。

戸田　なに、御無念にござらぬとは。

由良　篤と退き考へれば、亡君が御短慮故。

戸田　なんと。（ト合方きつぱりとなり、）

由良　そも饗應使の御使を命ぜらるゝ其時は、殿に限らず何れの諸侯も、勝手知れざる事故に、萬端高野師直どのが傳習受けねば勤まりがたし、さすれば執事は教師同然。賄賂致すは是禮物、殊には慾心深きと聞けば、他家にまさりて音物なさば、かゝる變にも及ぶまじ。こりや亡君の惡きにあらねど、家來共が吝嗇より、お家を失ふ期の至りしは、下賤の者の譬へにいふ、一文惜しみの百損とやら、既にお相役たる桃の井殿はよき家來があつたる故、賄賂をもつて事故無く、饗應使を勤められたり、されどかたくな成る料簡には、本意ならざる事などゝ申すやからもござらうが元より執事は小身故、賄賂を取るは是役德、其手違ひより殿中にてお役の指圖も齟齬せしならんが何やう雜言申さうとも、御先祖代々連綿たる鹽冶のお家を思召さば、御堪忍ある可きを、御短慮故に殿中にて刃傷におよび、つひにお家は御改易、拙者を始めあまたの家臣、扶持に放れ活計にせまり、今日路頭に迷ふのも、殿御一人の御料簡、御癇癖をお忍びあらば、今にお家は榮えんもの、申さば御思慮淺き故、さすれば執事師直どのを、さのみ恨む廉もござらぬ、それ故復讐の一條は、拙者は思ひ止つてござる。

〽恐れげもなく良金が、主君をさみなす一言に、戸田の局はこらへかね、

ト此内由良之助よろしく思入にて言ふ、戸田こらへかねし思入にて、

戸田　良金殿には名を捨て、命をしさに血迷うたか、理を非にまげて亡君を、さみなすからは聞捨ならぬ。

〽用意の懐劍くつろげれば、

ト戸田後にある短刀を取つて拔きかける、葉泉院是を見て、

葉泉　こりや〳〵、局控へぬか。

戸田　てもあまりなる一言ゆゑ。

葉泉　はて、はしたない、控へいと申すに。

戸田　其のお詞がござりませずば。

〽無念をこらへ控へれば、葉泉院は佛間より、君の位牌を取出したまひ、

ト此内葉泉院戸田を留める、戸田是非なく控へる。葉泉院こなしあつて立上り、佛間より誂への位牌を取出し、鼻紙臺へのせ思入あつて、

葉泉　これ、良金。

由良　はツ。

葉泉　あゝ其方は見損ぜしぞよ。（ト誂へ笛の入りたる合方になり）わらはゝ女子の事なれど、是なる亡君尊靈の御目違ひとなつたるか。女でさへ此戸田は、只一日も亡君の、御無念をば忘れぬとは、男子も及ばぬ武士の魂、それに引かへ大小捨てゝ町人になるとは何事なるぞ、尤も其方は他家に生れ、當家へ養子に參りし故、其身に恩義は薄くとも、家督なしたる大星の、家は代々家老を勤め、當家においては二無き家柄、養父賴母が目鏡にて貰ひ受けたる其砌、仔細あつて鄰國の松山殿の御家斷絕、城受取のお役目を亡君蒙り給ひしに、御不快によつて其方が、御名代に參りし所、家老二人が棟梁にて、一家中籠城なし、城を枕に討死なさんと、

〽六具をもつて身をかため、既に戰爭にも及ぶ可きを、（ト葉泉院こなしあつて、）

其方上下の禮服にて、開門させて禮儀を述べ、家老二人を說得なし、易々開城致させしは、天下無双の大器量、鹽冶どのは適れなよき家來を持たれしと、殿中にても諸侯方が、御賞美ありしと亡君が、常々手柄の御物語。それより此方政事向も、仁義をもつて人を懷け、慈愛厚きに民百姓、親の如くに思ふ故、

〽赤穗離散の其折も、袖に縋り袂にとり附き、泣き悲みしと話にきく、

其大器量の其方が、企ありとの風聞に、高野家にても用心なすよし。假令何程用心なすとも、

良金麾をとるならば、本意を達せぬことあらじと、待ちにまつたる大望も、今日の今となり、大小捨てゝ町人になり下るとは何事ぞ、昔の忠義に思ひかへし、本意を遂ぐる所存はないか。

〽言へど良金さし俯き、とかういらへもあらざれば、

ト此内葉泉院よろしく思入にていふ、由良之助うつむき居る。

葉泉 斯程に言ふに返答なきは、扨はいよ／＼其方は、名義を捨てる心よなあ。

由良 いかにも捨てる所存となりしは、敵は名におふ大家の縁家に、一流極めし武夫を、數十人付置かれ、日夜警固致すよし、味方は高が浮浪人、わづかな人數を頼みになし、高野殿の邸宅へ亂入なすとも、所詮本望は思ひも寄らぬ事、さすれば恥辱に恥辱を重ね、命を捨てゝ亡君の御名を穢すは益なき事故、身は町人になる所存、畢竟帯劍致せばこそ、不具戴天の主君の仇、討たねば武士の名義が立たぬが、帯劍捨つれば平民故、名義の立たぬこともござらぬ。かやうに申すも全くは命がをしうござります故、

〽一命をしむ良金が、臆病未練に後室も、爪繰る念珠を捨て給ひ、

ト床の相方になり、葉泉院口惜しき思入にて、手に持ちし珠數を投げ捨て、きつとなつて、

葉泉 此期に及んで命を惜しみ、名義を捨てゝ變心なすとは、斧九太夫に勝りし臆病、かゝる不忠の者

とも知らず、千五百石與へ給ひし亡君が、嘸御無念にゐらせられませう。

戸田　おゝ御尤もにござりまする、言はうやうない良金殿、亡君御存世にましませば、此儘には遊ばすまいに。

葉泉　せめて不忠の折檻は、君に替つて自らが。

〽襟がみ引附け後室が、位牌を取つてちやう／＼、涙とともに打ちたまへば、

ト葉泉院由良之助の襟がみを引附け、位牌にて打つ、由良之助ぢつと思入。

由良　打つてお腹の癒ることなら、御存分に遊ばしませ。

葉泉　おゝ、存分にせいでなんとせう。

〽又もちやう／＼打ち給ふ、御手を良金おしとゞめ、

ト葉泉院又打ちすゑる、由良之助思入あつてふり拂ひ、葉泉院の手をとゞめ、

由良　お待ち遊ばせ後室さま、拙者は命のかはり故、ぢつと辛抱仕るが、あなたのお手が痛みませう。

葉泉　假令此手が折るゝとも、思ふ存分打たいでおかうか。

〽けしきを替て打ち給ふを、跡のさはりと局はさゝへ、

ト葉泉院又打たうとするを、戸田思入あつて葉泉院をとゞめ、

戸田　もうよい加減に遊ばしませ、いか程お打遊ばすとも、命を惜しむ良金どのゝさして恥とも思ひますまい、又御持病のおさはりゆゑ。

薬泉　でも此儘に。

戸田　はてまあ、お待ち遊ばせ。

〽抑留むれば後室も、位牌を頂きかたへに置き、打ちしをれたる良金が、姿を見れば何故にかゝる心になりしぞと主從涙にくれ給ひ、

ト戸田、薬泉院を留める。由良之助はぢつとうつむきゐる、兩人見て情無いといふ思入、此内床の合方。

薬泉　かへすぐも殘念なは、あまたの家來も有りしかど、斧九太夫、奥野宗玄、かれらにひとしき者のみにて、今良金が變心なせば、最早外に徒黨を結び、君の御無念晴す程の器量ある者一人もなし、此儘空しく過行かば、鹽冶家には人らしき家來は無きかと諸家方の、笑ひものになるのが悔しい、御緣家ながら御當家の御家來衆へも面ぶせ、嘸我君も冥土にて御殘念にござりませう、月は替れどお逮夜故、佛間へ參つて御囘向なし、君をおなぐさめ申しませう。

戸田　最早是より亡君の、御跡訪ふより外はなし、申出して詮なけれど、妻子眷族養ひし、其君恩を忘

るゝとは、民百姓におとりし事、鋤鍬とれど義によれば、命惜しまぬ百姓氣質。
葉泉　田の面にうつる月ならで、人の鏡の武士が、
戸田　弓矢は取れど案山子同然、
葉泉　引板の鳴子の音におぢて、
戸田　逃げる雀の臆病者、
葉泉　詞かはすも今日かぎり、
由良　すりや、拙者めを、
葉泉　君に代つて、勘當なすぞよ。（トきつと言ふ、由良之助思入あつて）
由良　御勘當を蒙れば、これ今生のお暇乞、
〽見かはす顔も憎くしと、思へば主從三世の別れ、
ト由良之助、是が別れといふ思入にて、葉泉院の顔をぢつと見る、葉泉院も由良之助を見て、ホロリ
と思入あつて顔をそむけ、
葉泉　ふたゝびおもては、
由良　や、

葉泉 合はさぬぞよ。

〽位牌を守護なししづ〳〵と、佛間へおもむく葉泉院、手は合さねど後影、心で拜む暇乞。

ト此内葉泉院位牌を持ち上手屋體へはひる。是にて前側へ障子を建切る、由良之助跡を見送り、落涙の思入。

戸田 どれ、私も御佛間へ。

〽續いて席をたつ戸田の、袖をひかへて良金が、

ト戸田思入あつて上手へ行懸るを、由良之助袖をひかへる。

由良 あいや戸田どの、お待ち下され。

戸田 何御用かは存じませぬが、後室樣の御用もあれば。

由良 いや決してお手間は取らさぬ程に、暫くお下においで下され。

〽いふに是非無く座について、（ト戸田是非なく下に居て、）

戸田 して、お止めなされしは。

由良 別儀でもござらぬ、其許に賴み置きたき此の一封。（ト懷より狀程の封じ物を出し、）葉泉院樣御立腹ゆゑ、申出す折なくて控へ居つたるが、是は拙者が此程より東都の名所古蹟を尋ね、其時々つ

たなき發句をしるし、首尾とゝのひし東日記、御風流はお好きの道、雨の夜雪のつれ〴〵に、御一覽下さらば、お慰みにもならうと存じ、持參なしたる此一封、先刻呈上仕し此金子諸共にお預かり置き下されて、程を見合せ、御機嫌の麗はしき折二品共、葉泉院樣へおあげ下され。

ト戶田思入あつて、

戶田　それはお易きことながら、再び詞は交さぬと、仰せありし上からは、大星どのゝお頼みでは、お取次は致されませぬ。

由良　其のお斷りはさる事ながら、包の內は某が、書つゞりたる日記の外に、勿體無くも亡君の、御書物も封じあれば、明けていはざる包もの、金子諸共戶田どのには、お預り置き下されい。

戶田　お心ありげな封じ物、日記の外に亡君のお書物があることなら、お取次いたしませう。

由良　それは千萬忝ないが、日記は身共が隨筆にて、他聞を憚る事をも認めあれば、御直覽下さるやう。

戶田　申上げるでござりませう。

〽かたへの手箱へ二品を、仕舞ふ折しも打出す、時計の數も未の刻、

ト戶田有合ふ手箱へ二品を入れる、此時八つの時計鳴る。

由良　あのお時計は未の中刻、最早おいとま仕る。

戸田　して又是より東都へは、いつ頃御出府なされますな。

由良　さればゞ都へ立返れば、町人となる此良金、手なれぬ事の商法に、いつ又東都へ參られようか、老少不定の世の中に、今日別れては戸田殿に、手前は再び逢はぬ心、さすれば是が。

ト愁ひの思入あつて、

いやさ、此後お身を大切に、葉泉院樣の御介抱、くれぐお身にお頼み申す。

戸田　其儀はたとひお頼み無くとも、後室樣の御身の上は、一命かけて私が、生涯御守護致しまする。

由良　それにて手前安堵致す。

戸田　左樣ござれば、大星どの。

由良　時節ござらば、

戸田　え、

由良　再會いたさん。

〽互ひに包む心とこゝろ、をしむ名殘ぞ、

ト由良之助に此世の暇乞の心、戸田は深き樣子ありげなと疑ふこゝろ、兩人よろしく、三重中の

舞にて此道具廻る。

（屋敷外の場）――本舞臺ずつと前へ寄せて一間の冠木門、此左右練塀、此後雪の積りし屋根を見せ、下手樹木の張物、後へ日窓の屋敷、長屋柵矢來の竹遠見、日覆より雪の積りし松の釣枝、舞臺花道共雪布を敷き、總て葉泉院屋敷外構へ、雪ふりの體よろしく、三重雪おろしにて道具納る。

〽降りしきる雪に街も埋れて、往來まれな屋敷町、大道せましとあゆみ來る、高野の家來清水大學、さす傘の澁川流し、白慢の鼻の高足駄、雪踏分けて立留り、

ト花道より清水大學、袴大小爪皮の附きし足駄、澁蛇の目の傘をさし、悠々と出來り、花道にて、

大學 あゝ降るわ〳〵、近年にない今年の雪、此間から降つゞくが、今日はみつしり積りさうだ、歸りは駕籠と思つて來たが、是では駕籠もむづかしい。すこし道は廻りだが、木挽町から一つ目迄、船で返るが上分別だ。

〽吹雪をよけて來かゝる途中、計らず出逢ふ腰元おうめ、

ト大學吹雪をよける思入にて舞臺へ來る、此時上手より以前のおうめ白張の傘をさし出來り、兩人行きあひ彼方此方とよける思入あつて顏見合せ、

うめ　や、そこへおいでなされましたは、清水さまではござりませぬか。
大學　むゝ、其方は足輕半左衞門が娘、おうめなるか。
うめ　よい所でお目に懸りました、只今前町の駕籠やを賴んで、お使を上げますところ。
大學　何ぞ怪しい事でもあつたか。
うめ　はい、今日大星由良之助が、葉泉院へ暇乞に參りましたは、敵討の暇乞と存じまして、身を忍び委しく樣子を聞きましたら、是から元の都へかへり、大小捨て町人になるに付いての暇乞、思ひの外のうつけ故、もうお案じには及びませぬ、仔細は委しくみつ〳〵に書取りました此書狀、とつくり讀んで御覽じませ。
〽隱しもつたる密書を取出し、渡せば大學打ちうなづき、
ト　おうめ懷から密書を出し、大學に渡す。
大學　おゝそれはよくぞ知らせしぞ、豫て心利きたる其方故、葉泉院へ忍びに入れしが、密書の知らせ出來したく〳〵。
〽言ひつゝ密書押ひらき、くりかへして打ちみやり、（ト大學密書をひらき見て、）扨は敵討の企ても、敵と狙ふ高野家に、腕前勝れし附人が、多人數あるに恐れをなし、すごく〳〵

是から都へ歸り、大小捨てゝ町人に、なるとはよく〳〵意氣地のない奴。（ト卷しまひ、）そちが知らせの此密書、旦那を始め家中の者に、見せて安堵をいたさせん。

うめ 始めの内は私も、拵へ事と思ひましたが、葉泉院に打たれても、命が惜しいと申しますのは、心底臆病未練もの。

大學 身共は初手から左のみとも、由良之助を思はぬが、同役小林平八郎は、天下無双の大器量、彼が徒黨の隊長では、油斷ならぬと怯恐れ、夜も碌々枕に付かぬは、生中其身が兵學を、心得たる故力まけ、是で惑ひを晴らさせくれん。

うめ あの由良之助が隊長なら、其組下は知れたもの、もう御案じには及びませぬ。

大學 しかし燒鳥に經緒なれば、猶も怪しき事あらば、

うめ 直におしらせ申しまする。（トおうめ上手を見て、）あれ、噂をすれば影とやらで、今向うから參りまするは、その由良之助でござりまする。

大學 おゝ、見覺えのある由良之助。

うめ 見咎められぬ其内に、

大學 道を違へて片時もはやく。

うめ　心得ました。

〽しめし合してとつかわと、道を違へて急ぎ行く、

トおうめ上手へ行かうとして思入あつて、下手へツイとはひる。大學は密書を懐中して上手へ思入。

〽折から爰へ歸り來る、道も一筋大星が、弓手へよければ弓手へつき、馬手へ除ければ馬手へ付く、はたと行合ひ大學が、喧嘩仕かけに突當り、

ト此内雪おろし、雪ちら〳〵降り、上手より以前の由良之助長合羽、大小爪革付の下駄、白張の傘をさし出で來り、上手へ行かうとして行合ひ、右へ避け、左へよけ合ひ、トヾ由良之助下手へ行かうとするに、突きあたりきつとなつて、

大學　これお侍、待たつせへ。

由良　手前がことでござるかな。（ト誂への合方になり、）

大學　おゝ、何れの藩か存ぜぬが、降り積む雪に狹き往來、互ひに道を避けあふべきを、我物顔に往來なし、なんで身共に突當つた。

由良　いや突當りしは其はずみ、何方が粗相と申されぬが、手前とあらばお詫致す、御覧の如く狹き道避けるはずみの粗相故、平に御容赦下されい。

大學　いや、町人ならば容赦しようが、大小差してござるからは、此儘容赦は致されぬ。

由良　して御容赦下されずば、いかゞめさるゝ御所存よな。

大學　はて、言はずとも知れたる事、腰に差したる大小は犬脅しでもござるまい、此場で身共と勝負さつせへ。

由良　其儀は猶更御容赦を。

大學　いゝやならぬ、容赦はならねえ、此儘濟ませば後日に至り、此方の腕に恐れしなどゝ、世の人口もはかり難ない、身共が恥辱に相成れば、是非に勝負をいたさにやおかぬ。

由良　いや御尤もの儀にござるが、貴殿と違ひ拙者めは、浮浪人にござりますれば、なか〳〵もつて腕などゝ申す手練はござりませぬ、幸ひ雪に往來も途絶え、あたりに知る者ござらねば、お見のがし下されい。

大學　むゝ、左程身共が腕に恐れ、尻尾を卷いて恐れるなら、犬つくばひにつくばつて、三聲ほえて詫びさつせへ。

由良　仰せの通り犬つくばひに、兩手をついてお詫申す。

〽兩手を突いて詫びければ、猶も弱身に付込んで、（ト由良之助手を突き詫る、大學思ひ入あつて）

大學　はてさて意氣地のない奴だ、こなたは何處でか見た顏だが、(ト思入あつて)おゝ、いつぞや京の祇園町、一力かたで見受けたる、慥遊里で浮といふ、浮名を呼ばれし鹽冶浪人、こなたは大星由良之助だな。

由良　かく御存じの上からは、包み隱すも詮なき事、如何にも手前は鹽冶浪人、大星由良之助でござる。

大學　おゝ天下無双の大器量と噂のあるは此方のことか、聞けば義黨の有志を語らひ、亡君の仇を討つとやら、武士はかくこそ有り度き事。いつ頃討ち入り召さるゝな。

由良　それは全く浮世の雜說、手前に於ては左樣の企、毛頭致せし覺えござらぬ、旣に今日亡君の後室葉泉院殿へ暇を乞ひ、大小捨てゝ明日より、町人になる由良之助、是と申すも命の惜しさ、手前に企無き事は、是にてお察し下されい。

大學　すりや、いよ〳〵仇討の、志はござらぬか。

由良　いかにもござらぬ。

大學　其志がないとあれば、尻尾を卷いて詫びた筈、犬に劣つた由良之助、相手に致すも刀のけがれ、かやうな家老へ高祿を、あたへし鹽冶もうつけもの、當時出頭第一の師直公へ刃向つて、し

かも五萬三千石、知行を捨てたも尤もだ、こんな家來が差配なすゆゑ、破れ扇に破れ笠、つゞれに殘る鷹の羽の、紋もあはれな鹽冶浪人、一錢二錢の合力受け、路頭に迷ふを知らねえか、遊里で遣ふ金があらば、なぜ貢いではやらねえのだ、人は死なうとのめらうと、其身を樂になさうなぞと、あまりと言へば恩しらず、獅子身中の蟲といふのは、命を惜しむおのれが事だわ。

ト由良之助を足駄で蹴かへし、

大學　武士の風上にも置けぬやつ、面を見るのも、かアッ。（ト由良之助へ唾を吐きかけ、）穢らはしい。

トきつと思入、

〽身の大望にたへしのぶ、弱身へ付込む傍若無人、命はやがて雪諸共、今宵消ゆると白妙の道ふみ分けて歸り行く。

ト由良之助ぢつと思入あつて、鼻紙を出し唾を拭ふ、大學は意氣地のない奴だといふ思入あつて傘をさし、悠々と花道へはひる。

〽跡見送りて良金が、落散る手札取りあげて、

ト由良之助大學が落せし手札を取りあげ、向うを見送り、床の合方、よろしく思入あつて、

由良　我を惡口雜言せし、彼は正しく高野の家來と、推量なせしに案に違はず、此場に落散る手札の姓

名、清水大學と記しあるは、噂に聞きし本家の附人、反間苦肉の計策に、此良金が臆病を、彼が實と思ひし上は、高野の家中へ流布なして、敵地の油斷疑ひなし、今宵討入るさい先に、爰で彼めに出逢ひしは、弓矢神の守護ならん、味方の本望うたがひなし。

〽あら有難やかたじけなやと、天地を拜す良金が、忠臣義士の英名は、降積む雪にかゞやきけり。

ト由良之助よろしく思入あつて、淨瑠璃の切、かすめしばたく／＼にて、上手の門より以前の戸田、つか／＼と出て舞臺へ手をつき、

戸田　由良之助殿、段々あやまり入りました。

由良　なに、某にあやまるとは。

ト此時門の内より、以前の藥泉院蛇の目の傘をさし、黒塗結構なる下駄にて出來り、琴唄誂への合方になり、思入あつて前へ出て、

藥泉　神ならぬ身の露知らず、折檻なせしのみならず、勘當なせし妾が誤り、良金ゆるしてくりやいなう。

由良　すりや東日記を、

戸田　御開封遊ばしまして。（ト書物を懐より出す。）
由良　御覽の上は他聞の恐れ、たゞ何事も是ぎりに、
葉泉　言はず語らず、
戸田　目出度き吉左右、
由良　曉天迄にお知らせ申さん。（ト此時おうめ窺ひ出で、）
うめ　其の書物を。（ト取りにかゝるを、戸田引付け、）
戸田　此の書物を目がけるは、
うめ　いかにも私は高野の間者。
戸田　扨こそ曲者。（ト立まはつて、戸田短刀をぬかうとするを、）
由良　あいや、本望遂ぐるそれ迄は、
葉泉　事穩便に、
戸田　心得ました。

ト戸田の局おうめを當てる、是にてどうとなる。ばた〳〵にて、花道より平右衛門菖蒲革の袴股立、大小わらぢ赤合羽、饅頭笠を持ち、つか〳〵と出て花道につくばひ、

平右　はツ、お迎ひ。（ト由良之助見かへり、）

由良　平右衛門か。

平右　はツ。（ト手を突く、葉泉院見て、）

葉泉　すりや、あの者も、

由良　徒黨の一人。

葉泉　むゝ、

由良　御機嫌よろしう。

ト辭儀をなし花道へつか／＼と行く、おうめ起上り、夫をとかゝるを、戸田傘にておさへ付けろ、葉泉院由良之助名殘を惜しむ思入よろしくあつて、

葉泉　良金さらば。

由良　はツ。

ト辭儀をする、戸田傘にておうめを見事にかへす、雪の花ぱつと散るを木の頭。此時雪おろし、雪しきりに降る、葉泉院名殘を惜む、戸田うしろから傘をさしかけ、よろしく、右の合方雪おろしにて、

ひやうし　幕

ト幕外由良之助、平右衛門入替り、由良之助傘を開きしやんとかまへる、是をきつかけに誂への鳴物になり、平右衛門附添ひ、花道へはひる、雪おろしにてつなぎ、直に引かへす。

四幕目

夕七ツ時　麹町御堀端の場
飯田町裏家の場

【役名】——小山田庄左衛門、燗酒屋勘助、辻番の權平。勘助女房お市、杉浦兵左衛門娘お雪、同母おむつ、其他。】

(辻番の場)——本舞臺三間後淺黄幕、一面の練塀、眞中に九尺の辻番、下手三尺小庇付無窓の板羽目、窓の内より正札附の草鞋を下げ、上手へ折廻しの黒板塀、三尺戸を建て雪隱の出這入口、此道具にて舞臺花道共雪布を敷き、日覆より雪のつもりし松の釣枝、二重の上に權平木綿のどんざ布子、破れた袴、辻番人の拵へ、づぶ六紺看板の中間にて、今戸燒の火鉢に五合徳利を入れ、ひくき衝立の蔭にて兩人酒盛をして居る、總て麹町邊寄合辻番の模様よろしく、合方雪おろしにて幕明く。

權平　あゝ甘露々々、ちつとまだぬるいかもしれねえ。（ト茶碗をづぶ六にさし、酌をする。）

づぶ　なんの冷でもかまはねえ、こんな寒い時は、焚火をするか酒でなくつちやあ凌げねえ、何にしても野暮に降るぢやあねえか。

權平　なに野暮な事があるものか、今夜みつちり降つて歩かれねえ程積れば、夜廻りに出る世話はなし明日はゆつくりと内職が出來て、こんな有難いことはねえ、おれが爲には雪は恩人だ。

づぶ　お前の伯母さまぢやあねえか。

權平　べらぼうめ、犬ぢやァあるめえし。

づぶ　はゝゝゝ、然しお前の言ふ通り、天氣がよければおれなども、やれお供だの使ひに行けと、こきつかはれるのをかうやつて、馬鹿口でも聞きながら酒を呑んでゐられるのも、給金の内、それを思ふと雪は有難え。

權平　それ見ろ、惡く言はれた義理ぢやァあるめえ。

づぶ　あやまるから、もう一杯呑ませねえ。

權平　えゝ出しツこで呑む酒だ、こめられてたまるものか。(トづぶ六茶碗をひつたくる。)

づぶ　それだつて、先刻ッから三杯よけいに呑まれて居るものを。

權平　そんなしみッたれたことを言ふなら、拳を打つて勝呑みとしよう。

づぶ　面白え〳〵、拳ぢやあ手めえに負けやあしねえ。
權平　その替り一本勝負だぞ。

ト始終合方雪おろしにて兩人拳を打ち、酒盛をして居る、此内花道より、朝暮の小山田庄左衞門大小赤合羽まんぢう笠を冠り、草鞋がけにて腕組を仕ながら出來り花道にて、

小山　あゝ寒い〳〵、斯ういふ時には酒でなければ凌がれぬ、一杯呑めば此雪に少しも恐れはせぬけれど、酒興に前後忘却するゆゑ、願酒といふではなけれども、身の愼みに呑まずに居れど、今も矢間十太郎殿が今宵限り本望を、遂げても死ねば遂げいでも、どうで死なねばならぬ體、寒さ凌ぎに一杯と杯をさゝれた時は、餘程呑まうと思つたが、いや〳〵爰が辛抱と、大星殿の御一言を守つて呑まずに出て來たが、此寒風は身内へこたへ、足の踏所もおぼえぬやうだ。

ト言ひながら、二足三足行き、石に躓きしこなしにて、草鞋の紐きれたるこなし。

南無三草鞋の紐が切れた、どこぞ爰らに草鞋を賣る。（ト本舞臺を見て）おゝ、幸ひ向うの辻番に番人の内職の草鞋がある、丁度よい〳〵。（トそろ〳〵本舞臺へ來り）もし草鞋を一足下さい。
權平　正札附二十四文だ、どれでもよいのを持つて行かつしやい。
小山　成程札が附いて居つた。（ト草鞋を一足取り懷より錢をいだし）代料は、爰へ置きますぞ。

權平　あい〳〵、そこへ置いて下せえ。

小山　しばらく式臺を借用いたす。

權平　遠慮なく支度をしてござるがいゝ。（ト錢を取りに出來り、庄左衞門が草鞋を拵へるをみて、）手がこえるなら出しなせえ、片々拵へて進ぜませう。

小山　それは何より忝うござる。
　ト權平式臺へ下り、庄左衞門會釋して草鞋の片々を出しながら、兩人顏見合せ、

權平　おゝ、さう仰やるは小山田樣でござりましたか。
や、そちは御足輕の權平ではないか。

小山　はて、思ひがけない所で逢ふものだ。

權平　とんとお身裝の違ひましたので、さつぱりと心付きませぬゆゑ、失禮を申上げましたが、どうぞ御免なされて下さりませ。

小山　いやもう其筈ぢや、以前に替る今の身の上、權平推量致してくりやれ。

權平　まことにはや、お氣の毒さまな譯でござりまする、先づ其お話しはむさくとも、此方へお上りなされまして、承りませう。

小山　いや〳〵、今日は差しかゝつた用事もあれば、左樣致しては居られぬ、必ずもうかまやるな。
權平　なんの、お構ひ申したうても御覽の通り故、せめて寒さ凌ぎに、火鉢へ火でもおこしませう。
トいひながら二重へ上り火鉢へ炭をつぐ。
づぶ　おい權平、ありやあ知つたお方か。
權平　むゝ、おれが以前勤めて居た、鹽冶さまの御家來だ。
づぶ　それぢやあまだ御浪人でゐらつしやるのか、やれお氣の毒な。（ト庄左衞門に向ひ、）あなた此方へお上りなされませ、決して御遠慮なものぢやあござりませぬ。
權平　是は私の朋輩でござります。
小山　さうであつたか、挨拶も致さずゆるしてくりやれ。
づぶ　どう仕りまして。
小山　して權平、此辻番へは何日頃から參つたのぢや。
權平　お屋敷があゝいふ譯になりましてから、三河町の元締の世話になりまして、此辻番が明いて居ますから、先月中こちらへ參りました。
小山　それはよかつた。以前屋敷の勤と違ひ、何よりか氣散じであらう。

つぶ　そりやあ旦那のおつしやる通り、乞食ぢやあござりませぬが、三日すると忘られませぬ、番をするのはほんのつけたり、商人何ぞを見るとよわい物いぢめで酒にしたがる、又こはい者がくれば戸を締て、本の田圃の案山子同然、實の事辻番は、生きた親父の捨所と、川柳にある通りでござります。

權平　これさ、あなたなぞは苦勞人でゐらつしやるから、武家奉公の事なぞは、何から何迄御存じだ、餘計な口はきかねえがいゝ。（ト草鞋の片々を拵へ、）時に旦那、お草鞋の紐は通しましたが、兎も角もこちらへお上んなすつて、御休息なされませ、其内にはちつと小降になりませう。

小山　いやなかなか小降になりさうもなし、それに又宿許にて待合す約束の仁もあれば、一と思ひに歸宅致さう。

權平　只今では、どの邊にお住ひでござります。

小山　當時は下谷邊に寓居致して居る。

權平　下谷も所によりますると、よつほどの道程でござりまするが、さうして今日はどちらへいらしつたお歸りでござりました。

小山　今日はなに、おゝそれ、堀の内へ參詣致してまゐつた。

權平　それはまあ御信心な、よく御參詣なされました、嘸お寒うござりましたらう、かう火鉢の火が熾つたら、爰へあけてくれ。

づぶ　火鉢をとられると、燗がさめるぜ。

權平　おゝ、ほんに燗といへば、貴方は召しあがるお口であつたが、さつぱり忘れてしまつた。（ト立て行き、德利と茶碗を持來り、）旦那、失禮ながらお寒さ凌ぎに、一杯いかゞでござります。

ト庄左衞門へ茶碗をさす。

小山　いや、志は忝いが、酒はさつぱりやめてしまつた。ほんに、手前もとんと忘れて居つたが、其方も酒は好きであつたな。

權平　好の段ではござりませぬ、酒故一生こんな奉公致して居ります。

づぶ　それに私共は此寒の内でも、綿のはひつた物は着ることはなし、酒でも呑まなくつちや寒さが凌がれませぬから、嫌ひなものでも自然と呑むやうになりまする。

小山　そりやあ呑めば寒さを忘れるから、さうありさうなものだ。

權平　さあ、其寒さを忘れる酒でござりますから、あなたも一口召上つて、其勢ひで歩いて御覽じろちつとも寒くはござりませぬから、お猪口ぢやあないお茶碗を、お取りなされませ。

トむしやうに勸め、茶碗を庄左衞門の鼻の先へいだす、庄左衞門酒の匂ひをかぎ、たまらぬこなしにて思はず知らず手を出し、

小山　しからば一つ。（ト茶碗で呑まうとして心付き、）あゝいや／＼、只今も申す通り、酒はやめてしまつたから、もう／＼どうか勸めてくれるな。

權平　あれ程お好きなお酒を、なぜ上らぬのでございます。

小山　おゝ、心願あつて禁酒いたした。おゝさうだ、今日堀の内へそれに付いて參詣致した、志は忝いが、酒といつたら一杯も飲めぬ。

權平　何の御願がけか存じませぬが、外のものになさればよいに、酒を斷つとはあんまり野暮ぢやあござりませぬか。

づぶ　もし、都々逸の文句にもある通り、お祖師樣さへ御神酒をあげると言ひますから、堀の内なら、かまふことはござりませぬ。

權平　それに神佛は、見通しと言ふぢやあござりませぬか。

づぶ　罰のあたる氣遣ひはござりませぬ。

兩人　一と口お上りなされませ。

ト權平は茶碗、づぶ六は德利を持ち、しきりに勸める。庄左衞門苦しき思入いろ〳〵ありて、トヾ氣をかへ。

小山　はてさてしつこい、身共は禁酒致せしと申すに。(トきつと言ふ、兩人少し悄げたるこなしにて、)

權平　それぢやあどうしても上らぬと仰しやるから、御免を蒙つて二人でやらうか。

づぶ　やらうとも〳〵、おらあ先刻ッから、咽がぐび〳〵いつて居るのだ。

權平　それでは旦那、

づぶ　まつぴら御免なされませ。

小山　さあ〳〵遠慮無く、どうかそつちの方へいつて吞んでくりやれ。

兩人　さやうなればお許しなされませ。(ト兩人德利と茶碗を持ち、二重へ上り宜しく住ひ、)

權平　折角酒であつたまつたが、醒めたせゐか寒くなつた、まあおれに先へ一杯吞ましてくれ。

づぶ　何のかのと理窟を付け、よく先へ吞みたがりやあがるぜ。

ト言ひながら權平茶碗を持ち、づぶ六酌をして一口吞みて舌打なし、

權平　あゝいゝ燗だ、五臟六腑へしみ渡るやうだ。

づぶ　かう、酒も二三ばい吞むうちが命だぜ。

權平　べらぼうめ、たとひ命でもおらあ酒故なら惜しくねえ、どうか願ひにやあ、酒でよい〳〵になつてのたれ死をしてえのだ。

づぶ　違えねえ〳〵、おらあまた死ぬ時は末期の水はいらねえから、そこの所を酒として、又早桶替りに四斗樽で、ならう事なら湯灌も酒でして貰ひてえものだ。

權平　お念佛は生醉だ〳〵か。

づぶ　わるく洒落やあがらア。

權平　はゝゝゝ。

ト此内兩人酒盛をする、此間庄左衞門草鞋を穿きかけ、是に見とれて茫然として、いろ〳〵呑度き思入あつて心づき、

小山　あゝ、眼前見るは目の毒だ。

兩人　え。

小山　いやなに、雪は目の毒ぢやといふが、其せゐか大分眼がかすんで參つた。

權平　もし、いくら毒でも百藥の長、酒さへ上れば大丈夫。

づぶ　かう〳〵其の藥のお代りだ。（ト言ひながら徳利をふつて見せる、庄左衞門こなしあつて、）

小山　おゝ、つぎめとあらば、いろ〳〵と世話になつた其禮に、（ト懐の胴巻より金を一分出し紙に包み、）是で一升買ふがよい。（ト投げてやる、權平とつて、）

權平　是はお氣の毒さまな、大きに有難うござります。

づぶ　又ぐつすり呑めるぜ、おい旦那は御如在がねえな。

小山　辻駕籠のやうぢやな。（ト笑ひながら立あがる。）

權平　もうあなたお歸りでござりまするか。

小山　少し小降になつたから、此内に急がうと存ずる。

ト此内づぶ六生酔のこなしにて、よろ〳〵しながら二重より下り、

づぶ　もしえ、此雪ぢやア歸らせんよ、けふは流して居なましと言ふにさあ。

トいやらしき身振をして庄左衞門の袂をとらへる。

權平　これ、常談も、相手による、失禮千萬などうしたものだ。

小山　いや、是も全く酒興の上、憎むべきことでない。

づぶ　憎くなけりやあ袖引酒でありますよ、一つおあがんなんし。

ト持つたる茶碗を出す、庄左衞門呑度き思入にて、

小山　あゝ遊里でさやうにいはれたら、どんな禁酒も。

權平　其氣でお一つ召上りませ。（ト徳利を持ち立ちかゝる。）

小山　いゝや、それは常談、えゝ放さねえか。

トづぶ六がとらへた袖を手荒くはなす、づぶ六どつさり尻餅をつく。

世話であつた。

トやはり雪おろしにて、庄左衞門思ひ切つて足早に上手へはひる。づぶ六起上り腰の痛む思入にて、兩人よろ〳〵しながら二重へ上り、

づぶ　あゝ痛い、いやといふ程腰の骨を打つた。

權平　手めえが惡巫山戯をするからだ。

づぶ　それでもあの侍は大層金を持つて居るから、もう一分も取つて晩に明でも追ひに行かうと思つた所から、女郎の身ぶりでおやまだうけにやりかけたら、飛んだ目に逢つた。

權平　あの人がさう金を持つてる譯はねえが、そいつあよつぽど不思議だ、そんなに持つて居ると知つたら、昔の誼に、二三兩ふつかけてやりあよかつた。

づぶ　ふつかけるといやあ、腰の骨がめつぽう痛むから、燒酎替りに酒でもふつかけてくんねえ。

ト徳利を取つて茶碗へついで見て、

づぶ　なんだひとツたらしもねえ。おい、今ので一升買ひねえな。

ト此内權平ちつと考へ居て、

權平　金が大層あると聞いちやア。（トあたりの脇差を取つてさし、）跡追かけて。

づぶ　どうしたと。

權平　いやさ、もう一升跡を引かうか。

ト徳利を提げて立上り、よろ〳〵と式臺へ下り、どつさり下に居るを道具替りのしらせ、

こいつアもう歩けねえ。

トづぶ六權平を介抱する。此模樣よろしく雪おろし、なかしみの合方にて此道具まはる。

（御堀端の場）――本舞臺三間中足の二重、前側石垣の蹴込、花道の附際へ同じく足掛り、正面上の方腰通り海鼠壁、曰窓のある屋敷長屋のつまを見せ、下手へ寄せ、はすに正面へおなじく屋敷長屋の遠見の書割、總て此道具雪持、日覆より同じく松の釣枝、舞臺前へ一面の波板を出し、やはり麹町邊堀端の模樣よろしく、雪おろし早き合方にて道具止る。と直に薄きばた〳〵になり、花道よりお富島

田かづら留袖の娘裝にて、頭へ手拭を吹ながしに冠り、其はしを口にくはへ、小褄を高くとり、跡先を見廻しながら足早に出來り、花道に留り、

お雪　もう爰はお堀端、まだ日暮には間もあれど、此大雪に往來のないは死ぬるに丁度幸ひ、あの世で早く父さんにお目にかゝるが樂しみなれど、跡に殘つたあの母さん、私が身を投げ死んだと聞いたら、嘸やお嘆きなさるであらう、是もみんな約束事、惡い主人に使はるゝ、私の因果おまへの業と、どうぞあきらめて下さんせ、其替りには草葉の蔭から、お前のお身を守つて居れば、親に先立つ私の不孝は、どうぞ堪忍して下さんせいなあ。

ト向うへ向つて手を合せ、よろしく愁ひの思入あつて、

あゝいつ迄言うても返らぬ繰言、人の目つまにかゝらぬ内、少しも早く、さうぢや／＼。

ト本舞臺へ來り、四邊を窺ひながら、死なうといふ思ひ入、此内上手より以前の庄左衞門出來り、お雪の體を見て合點の行かぬ思入にて、そつと身をひそめ窺ひ居る、お雪是をしらず涙を拭ひ、

母さん、どうぞ恨んで下さんすな。（トつか／＼舞臺前へ行き、）南無阿彌陀佛。

ト飛込まうとするを、庄左衞門駈けよつて抱留め、

小山　あゝこれ待つた、女中早まらつしやるな。

お雪　いえ〳〵どうぞ放して、殺して下さりませ。

小山　いや、おれが目にかゝつては助けにや置かぬ。はて、待てと言つたら、まあ〳〵待たつしやい。（ト　お雪を抱留め、無理に下へ置く、お雪其儘わつと泣伏す、庄左衛門思入あつて、）これ女中、どういふ譯か存ぜぬが、夜でもあるか晝日中、身を捨てようと致すのは、定めて餘儀無いことであらうが、若い身そらで身を投げるは、十が九つ色戀か、但しは又緣付いた其先の舅めが邪險故家出なし、内へ歸れば親達に叱られるのが切なき故、いつその事死なうといふ、無分別はまゝある事、左樣な事なら死ぬには及ばぬ、そちにも身寄りがあらうから、そこ迄手前が同道して、此場の樣子を話しなば、どうでも方法がつかう程に、死ぬのは思ひ留るがよい、袖ふりあふも他生の緣、思はず爰へ來合した某が異見に付、知べの方へ案内して、同道致す道すがら、委しく仔細を聞くであらう。（ト　お雪又行かうとするを、）急く所でないこれ女中、こなたはなんで死ぬるのだ。

トきつと言ふ、是にてお雪顏を上げ、袖にて淚をぬぐひながら、

お雪　何處のお方さまかは存じませぬが、御親切なる其のお詞、有難うはございますが、なか〳〵左樣な譯ではござりませぬ、申上げるに上げられませぬ、お恥かしい事ゆゑに、どうかお慈悲と思し召し、此儘に私を、いつそ死なして下さりませ。（ト又立かゝるを庄左衛門留めて、）

小山　又しても聞分のない、左様で無くばないやうに、どうでも話の分ること、氣を落着けてこれ女中とつくり手前に其仔細を。（トよろしく留めながら、お雪と顔見合せ、互にびつくりなし。）や、そなたはお料理方の、兵右衛門が娘ではないか。

お雪　ほんにあなたは小山田さま、お恥かしう存じまする。（トちつとなる、庄左衛門不審の思入にて。）

小山　思ひがけない其方と知らずに、丁度留めたは盡きせぬ緣か、但し又殿の御名も出る事故、はからず此方が死ぬ所へ、參り合せて助けたは、やつぱり亡君のお導きかも知れぬ程に、何事も隱さずに、死なうとした其譯を、逐一話して聞かすがよい。

ト少し愁ひの思入にて言ひさとす、お雪實にもといふ思入あつて涙をぬぐひ顔をあげ、

お雪　おつしやる通り殿さまの、實はお名の出ますこと故濟まぬ事とは存じながら、死なうとせしも身貧から、起りましたる一部始終、お聞きなされて下さりませ。（ト誂への替つた合方になり、）鹽冶の御家沒落後、親子三人浪々なし、町家の住ひに父さんは、あすこや爰の料理茶屋へ雇はれても僅かな取まへ、其手助けに母さんと二人は内で賃仕事、すゝぎ洗濯致したとて、高が女子の稼ぎ故煙の代のたしにもならず、貧しく暮す其内に、かてゝくはへて父さんには御大病、醫者の手當も内證の、廻らぬ故に買ひ藥、效驗も見えず遂に御病死、跡に殘りし親子二人、其日々々を送る

のも女手業に行き兼ねしを、見かねて以前父さんが、雇はれてゐた縁により、此麹町貝坂の小料理屋の御亭主が、一年五兩の給金でおれが内で奉公せいと、度々迎ひのお人故、一人の口の減ることなり、其上お金のはひること、母さんのお爲ぢやと、參りまして二た月程、つとめて居ります其内に、風呂屋女子同樣に客をとれとおつしやる故、斷りいへば責めさいなみ、暇をとれば本金つけと、お金の出來ぬを付込んで、身うごきさせぬ板しばり、私さへ死んだなら給金もそれなりに、母さんの難儀にならず濟まうと存じた心から、主人先を駈け出して、死ぬる所をはからずも、あなたさまに止められ、跡へも先へも參られぬ、身の苦しみを小山田さま、御推量なされて下さりませ。

ト涙ながらに言ふ、庄左衛門も不便だといふ思入あつて、

小山　あゝ聞けば聞く程氣の毒な、父御の病死跡々の難儀、見ず知らずの者にもせよ、捨置けぬ此場の仕儀、殊更元は御家の御家來、かゝりや繫がる其娘が、僅か五兩の金故に、命捨てるを見脱しにするのも武士の本意であるまい。（ト懷中よりちよつと胴卷を出し、お雪に見えぬやうに思入あつて、）大星殿の言付で、同士の者が借財の拂方にとお渡しありし、二百兩の此內で、命を助けてやつたとて、なぜ助けしともおつしやるまい。（トうなづき、お雪に向ひ、）それでは五兩金さへあらば、死

なずとも濟まうがの。

お雪　はい、其の金さへ戻しますれば。

小山　濟むとあらば其金は、手前がこなたに進ぜよう。

お雪　え、そんなら貴方が。

小山　おゝ、其の給金さへ戻したら、其方の體は身儘になれば、母へ孝行忘れずに、是からもあることだが、今のやうに突きつめた、無分別はせぬがよいぞや。

お雪　有難い其の御異見、決して忘れは致しませぬ。しかし貴方に其のお金を、お貰ひ申すといふ譯には。

小山　なぜ行かぬのぢや。

お雪　さあ、あなたとても只今では、御浪人の御身なれば、失禮ながら御不自由勝ち、それをみす／＼存じながら、お貰ひ申すは何とやら、餘り心がないやうで、お氣の毒さゑに存じまするゆゑ。

小山　成程其身に引きべつして、浪々の身を思ひやり、さう言はるゝは尤もだが、何を隱さう此金は。

お雪　え。

小山　いやさ、此金のない時は、死なねばならぬ仕儀ではないか、金で買はれぬ人の命、それにとやか

う言ふ時は、片意地と申すものぢや。又左程氣の毒に思ふなら、必らず其身を全うして、義士の亡跡、いやさ、義理を思はゞ其金も、亡き殿さまより頂戴した、御高祿の餘慶をば、其方へ手前がやるのだから、亡君へ御回向を、申して上げるが何より御禮、爰の道理を聞き分けて、心得違ひをせぬがよいぞよ。（ト思入にていふ、お雪氣の毒だといふこなしにて、）

お雪　返す〴〵もそれ程迄、御親切におつしやつて下さるもの、御辭退申すも失禮故、お詞に甘えまして、頂戴致すでござりませう。

小山　おゝ、惡いことは言はぬからさう致すがよい。然し此方に金を渡し、宅へ持つて歸つても、主人先を出た事故、母の前が惡からうから、內迄送つて遣はさうが、して其方の宅は何處だ。

お雪　飯田町でござりまするが、それではあまり恐れ入りまする。

小山　いや〳〵、飯田町とあらば丁度歸り道ぢや。

お雪　道の御都合さへ宜しくば、お供を致して母さんにも、ようお禮を言うて貰ひませう。

小山　然し此の始末を委しう申すと、驚いて氣打ちでも致すと惡いから、そこは體よく申して置くがよい。

ト此以前上手より、お雪の母おむつ、ごま鹽かづら婆アの拵へにて出で、此樣子を見て傘にて顏を隱

し窺ひ居て、此時少し前へ出で、

むつ　いえもう、最前から是で承り居りました。（トお雪おむつを見て、）

お雪　思ひがけない、お前は母さん。

小山　そんなら、其方は。

むつ　はい、母でござりまする。小山田様お久々のお目もじ、先づは貴方さまにも御機嫌よろしう、お目出たう存じまする。

小山　其方にも替る事無く、重疊でござる。然しながらわづか逢はずに居つたのぢやが、とんと見わすれ申した。

むつ　御尤もさまでござりまする、昔に替る此姿、貧故に一人の娘を、とんだ事になります所、貴方さまがお止め下さりましたので、無事な顔が見られまして、此やうなお嬉しいことはござりませぬ。

小山　存じたとあらば隠さぬが、よい所へ某が参り合せて娘の命助かりしも、そなた衆が信心なす神佛の利益であらうが、實にあぶない所であつた。

むつ　いえもう、神佛より貴方をば、あそこで拜んで最前から、有難涙をこぼして居りました。

ト落涙のこなし、お雪こなしあつて、

お雪　それはさうと母さん、お前どうして爰へおいでなさんした。

むつ　さあ麹町の主人から、そなたが家出したによつて、たつた今給金返せ、それが出來ずば娘を出せと、家さがし迄した上で、なんでも今日中に埒をあけろと言うて歸つた故、今言譯に行く所ぢやわいの。

小山　それは丁度よい所で逢うた。

お雪　左樣なれば兎も角も、私の宅迄おいでなされて下さりませ。

小山　いや、母御に逢うたこそ幸ひ、爰で金子を遣したら、もう參らずともよいではないか。

むつ　お歸りのお道筋とござりますれば、むさくともちよつとお立寄り下さりませ。

小山　然らば、兎も角も同道致さう。

むつ　左樣なされて下さりませ。

お雪　どれ、お供いたしませう。

ト合方雪おろしになり、庄左衞門先にお雪おむつ、相合傘にて東の假花道へかゝる。よき程にしらせなしに、此道具まはる。

（裏借屋の場）――本舞臺三間平舞臺、向ふ納戸口、上の方佛壇、此下戸棚、下手破れたる鼠壁、上手一間反故張障子屋體、いつもの所門口、下座の前へ一間隣家の門口、腰障子に「おでんかん酒」と筆太に記し、爰にかん酒屋勘助、布子の上へ甚兵衞を引掛け、象股引をまくりあげ、草鞋がけにておでんやの荷を拵へ居る、同じく女房お市手傳つて居る、總て飯田町裏借家の體。やはり合方、雪おろしにて道具留る。と兩人荷を拵へながら、

お市　野暮に降るぢやあねえか。

勘助　此又雪に、となりのおつかァは何處へ行つたのだ。

お市　何だかもうちつと先刻、娘御が行つて居る主人先から逃げたとか言つて、人が來たものだから、慌て眼をして出掛けて行つたが、どうしたかしらん。

勘助　そりやあ嘸心配だらう、然し男を拵へて逃げるやうな、うはついた娘ぢやあねえが、是を思ふと色は思案の外だなあ。

お市　それだからお前が案じられてならないのだ。

勘助　株であいつの事をいやあがる。

お市　又かぶでお堀端へ出る引ぱりのお惚けか、久しいもんだ、あんなじやんこツ面がそんなにいゝかなう。

勘助　はつくしよ、畜生め、噂をしやあがる。

お市　いけすかねえかぼちや野郎だよう。

ト此内始終合方、雪おろしにて、庄左衞門お雪おむつ本花道へかゝり、

小山　して、此方衆の家は何れだ。

むつ　あの、向う長屋の三軒目でござりまするが、もし、そこはどぶ板がござりませぬから、お氣をお付けなされませ。

小山　承知致した。

お雪　まことにむさい所へお連れ申しまして、お氣の毒さまに存じまする。

小山　いや〳〵裏長屋で此くらゐなのは結構だ。

ト言ひながら、三人舞臺へ來る内、おむつ入替りて先に立ち、

むつ　お鄰のお上さん、大きに有難うござりました。

お市　おや、おつかさんお歸りなすつたか、おゝお雪さんも御一緒かえ。

お雪　をばさん、暫くお目に懸りませせぬ。

勘助　少し見ない内に、大層い、姉さんになつた。

ト此内おむつ、門口を明け内へはひり、あたりを片付けながら、

むつ　さあ、あなた、甚だむさい所ではござりまするが、先づ此方へおはひりなされて下さりませ。

小山　然らばゆるしやれ。（ト庄左衛門先にお雪も内へはひる。）

お雪　どれ、おみ足をすましませう。

ト お雪盥へ水を汲み、庄左衛門草鞋をぬぐ、お雪庄左衛門の世話をしながら、

お雪　母さん、お茶を入れるやうにして下さんせ。

むつ　それはよいわいなう。先づこちらへ入らつしやりませ。

小山　御免下されい。（トよろしく住ひ、）おかげで少し寒さを忘れたやうだ。

ト此内お雪茶煙草盆を出し、大和風呂の火鉢へ炭をつぎ居る。おむつ門口へ來り、

むつ　もし、お鄰のおかみさん、ちよいとあの一番よいお酒を。（ト指を五本いだし、）これだけ、お願ひ申します。

お市　はい〳〵、それはよいがおつかさん、どうだつた。（ト小聲で言ふ、おむつお市囁く。）

お市　それではあのお方が、それはよかつたねえ。
勘助　商ひの出がけに、よかつたとはいゝ辻占だ。
むつ　このまあ雪に、御生業においでなされるのでござりまするか。
勘助　かういふ日が、私共のつけめだ。
むつ　御生業とは申しながら、嘸お寒うござりませう。
お市　早く行つておいでよ。
勘助　牛込あたり迄行つたら、賣切れて歸るだらう。（ト言ひながら荷をかつぎ花道迄行き、）おでんかん酒。（ト呼ぶ。）
お市　えゝ、なんだな、長屋内で呼ばなくつてもいゝわな。
勘助　つい口癖になつてならぬ。（ト笑ひながら荷をかつぎ花道へはひる。）
お市　それぢやあ今直に持つて行きますよ。
むつ　どうぞ大の御酒家でいらつしやるから、極くよいのを頼みます。
お市　はい〳〵畏りました。（ト下手門口へはひる、おむつこちらへ來り、）
むつ　これはまあ、ろく〳〵にお構ひも申しあげず、御免なされて下さりませ。扨まあ今日は、娘がい

ろ〳〵御厄介になりまして、先程は途中故、しみ〴〵お禮も申上げず。これ娘、不調法なものぢやないか、なぜ爰へ來て、とも〴〵お禮を申さぬのぢや。

お雪　あい〳〵。

小山　いや、其樣に言はれては、却て手前迷惑を致せば、もう濟んだ事ゆゑ、最早禮には及び申さぬ。

むつ　どう致しまして、是がお禮を申さずに居られませうか、貴方がおいで下さらずば、今頃は此母が泣の涙で狂ひ死。

お雪　私の不孝になります所、有がたい御異見で、

むつ　娘についた死神の、

お雪　放れましたも皆御恩、

むつ　それを思へば親と子の、

お雪　二人の爲には命の親、

むつ　何とお禮を申さうやら、

お雪　有難う存じまする。

ト兩人手を突き涙ながらに禮を言ふ、庄左衞門ぢつと思入、

小山　是と申すも、最前申した通り、亡君のお導きでがなあらう程に、手前に禮を言ふより、朝晩共におこたらず、佛間へ向つて殿さまへ、よう御回向を申すがよい。

兩人　畏りましてござります。（ト此時お市鄰より兩手に五合徳利と丼を持ち出來り）

お市　もし、ちよつとあけておくんなさい。

むつ　はい〳〵。（ト門口をあけ、）これは大きに御苦勞さまでござりました。

お市　一番上物を持つて來たぞえ、それから此の大根は惣菜に煮たのだが、枯木も山の賑かしと、色數にもならうと思つて、ちつとばかり持つて來ました。

むつ　それはまあ有難う存じまする、丁度お肴がない所、早速是で一と口あけませう。それはさうと知つての通り、私もあれも御酒は一向不調法ぢやによつて、どうぞお相手をして上げて下さんせいなあ。

お市　どうしてまあ、私のやうな不調法なものが。

むつ　まあ兎も角もこちらへはひつて下さんせ。（ト無理にお市を内へ入れるこなし、お市思入あつて、）

お市　ほゝゝゝ、あなた御免なされませ。

小山　何も遠慮なものではござらぬ程に、さあ、ずつとこちらへおいでなされ。

お市　有難う存じまする。

ト此内おむつ膳立をして、燗徳利へ酒をうつし燗をして居る、庄左衛門思ひ入あつて、

小山　見受けた所が、何か手前へ心配のやうすぢやが、酒なら一水も呑まぬから、必ずともに無用にしやれ。

お雪　それでもあなたお好きで入らつしやりますれば、決してお構ひ申しは致しませぬ。

むつ　どうぞお茶の替りに、一と口召上つて下さりませ。

小山　志は忝いが、何を隠さう、未だ屋敷にをつた時分、初午の夜の事であつた、少々ばかり呑過ぎて朋友共と口論なし、すでに命にもかゝはる所、亡君のお慈悲にて、同家中に居るこなた衆へも知れぬやうに、内分のお計らひにて事濟みし、其折以來禁酒致せとある、御主人のいましめなれば、好な酒ぢやがどうも呑めぬ。

むつ
お雪　それはまあお生憎でござりましたなあ。

小山　決して手前に構はずに、今御主人で思ひ出したが、又捨置いたら主人先から、とやかう申して參らう、早く參つて五兩の金を返して來やれ。（ト手早く懐の胴巻より金を出し紙にのせ、）然らば金子を受取つたがよい。

むつ　はい〳〵、有難う存じまする、左樣なればお詞にあまえまして、御辭退申さず頂戴致しまする。（ト金子を受取り、）これ娘、よう御禮を申したがよい。

お雪　先程からいろ〳〵と、お世話になるのみならず、お金迄お貰ひ申し、お氣の毒さまに存じまする。

小山　さう重ね〴〵禮を言はれては、こなた衆より手前の方で氣の毒なれば、もう何も申さずと、餘り遲くならぬ內、早うそれを返して參るがよい。

むつ　ほんに左樣致しませう。

お市　おつかさん、行つたら思ふさま言つておやんなさいよ、四邊に家のない所ぢやあなし、先刻の樣に大きな聲をされると、世間へ對して外聞がわるいわね、よつぽど私やあ出掛けて來て、野中の一軒家ぢやあねえやい、靜にしやあがれと、叩きおろしてやらうと思つたのさ、なんぼ主人だつてあんまりだわねえおまへさん、言ふ事にも程がありまさあね。

むつ　それもこちらに金が出來ぬと、見くびつてする事なれば、是さへあればやかましく言ひ居つた、顏を張つてやりまする。（ト身づくろひをなし立上り、）左樣ならあなた、ちよつと行つてさんじまするが、御ゆるりとなされませ。

小山　雪で足場が惡いから、氣を付けて行かつしやれ。

お市　もし、内の人の息杖があるから、あれを突いておいでならいゝ。
むつ　なあに、それには及びませぬ。
お雪　かゝさん、早う戻つて下さんせ。
むつ　直行つてくるわいなう。（ト門口へ出て、）それではお鄰のおかみさん、跡をお頼み申しまする。
お市　ようござんすわいな。
むつ　あなた、行つてさんじまする。

ト始終合方雪おろしにて、おむつ花道へはひる、お市跡を見送りこなしあつて、

お市　ほんに、お雪さんの前ぢやあちよつと言憎いが、無い子ぢやあ泣をしないとやらで、可愛さうに嘸寒からう。（ト言ひながらこちらへ來る。）
小山　それはこなたの言はるゝ通り、子を持つて知る親の恩、とかく親程有難いものはない、取分け主人は猶大切。（トちよつと思入あつて、）これは思はず知らず長座いたした、最早お暇仕らう。
お雪　まだよろしうござりまする、どうぞ母の歸ります迄おいでなされて下さりませ。
お市　あひにく降がつよくなつて來ましたから、ちつと小降になります迄お待ちなさい、其内にはおつかさんも歸りませうから、もう一ぷく召上つていらつしやい。

小山　いや、今日は差懸つた用事があれば、左樣致しては居られぬ。又此頃にゆつくりと話しに參る。
（ト兩人の留めるをふりもぎつて立掛り、腹痛の思入にて、）あいたゝゝ。

ト下に居る、お雪あわてゝ介抱なし、

お雪　あゝもし、どうなされましたぞいな。

小山　さあ雪中を步いたので、持病の癪がさし込んで、あいたゝゝ。

お雪　それはお惡うござりまするなあ、もし伯母さん、お前さんの所になんぞお藥はござりませぬか。

お市　私共ぢやあ二人ながら達者だから、藥といつたらなんにもないが、雜作もない、ちよいと行つて買つて來て上げよう。

小山　いや／＼それには及ばぬ、にがい藥を呑まうより、ぴんとした上酒を一ぱい、あつがんでぐつと呑めば、たちまち癪は治まれど、酒をつゝしみ居る故に、呑みたい藥も呑むことがならぬ。

お雪　それでは一杯召しあがつては、いかゞでござりまする。

お市　今あなた初午のお稻荷樣へ、お斷ちなされましたとおつしやりましたから、それでは初午の日だけでよろしうござりませうわね。（ト言ひながら、火鉢の土瓶から德利を出し燗を見て、）お誂へのあつ燗でござります、さあ／＼一杯召上りませ。

小山　いくら薬にならうとも、酒ばつかりは呑まれぬ、あいたゝゝゝ。

お市　あれまあ、貴方もお義理のかたい、お薬にも酒で呑むお薬が、幾らもあるぢやござりませぬか。中には焼いて粉にして酒で呑むのがありまする、おや御免なされませ、ありや都々逸の文句だつけ。

お雪　おどけはおどけ、ほんにお酒で呑まねばならぬお薬もござりますれば、其お薬を召上ると思召したら、何もお心悪い事もござりますまい、たんと上らずお薬に、お一つお上りなされませいなあ。（ト庄左衛門ぢつと思入あつて、）

小山　いかさま、かゝる苦しみでは、是迄艱難辛苦した、日頃の願ひも水の泡、誓ひし酒も御免を蒙り薬と思うて一つ呑まうか。

お市　やつと御相談がおツついた。（ト膳を庄左衛門の前へ持てくる。）

小山　あゝこれ、何にもいらぬ、本の薬にたつた一杯呑むのぢや。

お市　兎も角もお薬のことでござりますから、お猪口はよして、お茶碗に致しませう。（ト茶碗を取つて庄左衛門の前へ出し、）さあ是でお一つお上りなされませ。

小山　これはあまり大杯ぢや。

お市　まあよろしうございますわいなあ、(ト小山田ぐつと呑んで、)

小山　あゝ、いゝ心持だ。

お雪　さう直にはきゝますまいが、少しはよろしうございまするか。

小山　人には合藥のあるもので、少しは落着いた。

お市　たんと落着くやうに、もう一つおあがりなされませ。

小山　然らばもう半盞。(ト又お市酌なする。)おつとゝゝゝ、こぼれる〳〵。

お市　お藥だからこぼれるのは緣起がようございますわね。(ト庄左衞門またぐつと呑んで、)

小山　あゝ喉を通る内の、うまさ〳〵。

お市　二つではお獻が惡うございますから、かけ付三杯となされませ。

小山　それでは、もう是で納杯に致さう。(ト又お市酌なして庄左衞門呑み、)

お市　せめて旦那ありとこになさい。

ト お雪に目くばせする、お雪うなづいて酒の燗なする。

小山　いやもういかぬ〳〵。

お市　おやまあ、是ばつかり殘して未練らしい、私がお合をするからお上んなさいよ。

ト是よりお市自身も呑みながら捨ぜりふにて酒をすゝめる。庄左衛門うか〳〵と段々呑み、酔ひし思入にて、

小山　此の内儀の口まへにのせられて、こりや大分酩酊致した。

お市　何でござりますねえ、酩酊だの大橋だのと、〽嘘を佃田の色の海。（ト ちよつと浄るりを語る。）

小山　はゝゝ、いや面白い〳〵。（ト庄左衛門たわいなき體。此時七つの鐘鳴る、庄左衛門聞耳立て、）や、今打つのは何時だ。

お市　ありやあ七つの鐘でござりますから、日暮迄お遊びなさいよ。

小山　いや〳〵七つであらば、参らねばならぬ。

ト言ひさま立上り、よろ〳〵としてどうとなる、お雪驚き、駈けよつて介抱なし、

お雪　あゝもし、おあぶなうござりまする、どうぞなされましたかいな。

小山　久しぶりで空腹へ呑んだせゐか、大層に酔つた、此分ではなか〳〵あるかれぬ、とろ〳〵と致せば直に酔がさめるから、迷惑ながら少しの内、爰へ寝かして置いてくりやれ。

お雪　何迷惑なことがござりませう、さあ〳〵御ゆつくりお休みなされませ。

ト戸棚へ夜具を出しに行く。

お市　もし旦那、段々雪が大降になつて來ましたから、今夜はこちらへお泊りとなされてはいかゞでござりまする。

小山　どう致して、左樣なことは出來ぬ、是非五つ迄に參らねばならぬ所があれば、暮合迄寢かしてくりやれ。（ト此内お雪蒲團を敷き、）

お雪　まあ何はともあれ、お蒲團の上へおいでなされませいなあ。（ト庄左衞門の手をとる。）

小山　是はとんだ厄介になる。

お雪　どう致しまして。

小山　あゝ何だか目がくら〳〵と致して、いつにない醉ひやうだ。

ト言ひながら蒲團の上へ寐る、お雪捨ぜりふにて枕をさせ搔卷をかける。

お市　あなたお醉ざましに、お茶を一ぱい濃く入れませうか。もし旦那々々、おや、もうおよつておしまひなすつたよ。

お雪　そつとしてお置き申す方がようござんせうわいなあ。それはさうとして、御用の多いのにいろいろとお遣ひ立て申しまして、お氣の毒さまな、大きに有難うござりました。

お市　おや〳〵、いろ〳〵といふのは嬉しいねえ、私やあ色といふ字は大好きさ。

お雪　いやな伯母さんでござんすなあ。（ト恥かしきこなし、なまめいた合方になり、）

お市　あれまあ、お酒も呑まないのに、顔を眞つ赤にしてさ、野暮な子だねえ。今時の娘は、其樣事をいつて居ると、人が馬鹿だと言ふよ。私が又親ならばお前位な器量の娘を持つて居ると、直に旦那でも取らして左團扇で暮らすけれども、此方のおつかさんなんぞは堅過ぎて、ちつとも其樣話しにはおのりでないけれども、お前私の言ふことを聞いて、（ト庄左衞門の方へちよつとこなしあつて、）それ、此旦那などは、先刻ちよつと見た所が、れこもよつぽどある樣子、いゝお客らしいから、水を向けて御覽よ。

お雪　水とはお醉ひざましに、お冷を上げるのかえ。

お市　ほんに、うぶも程があるわね、水をお向けといふのは、足でもさすつて上げながら、ずる〳〵べつたり。

お雪　どうしてまあ其やうなことが。（トぢつとうつむく。）

お市　是は恥かしい事も、こはい事も、むづかしい事も、何にもありはしないわね、小ぢれつたい。わたしがゐるから遠慮するのだらう、お雪さんおつかさんが歸つたら又來ませう、どれ、お開きにしませうよ。（トお雪をつきやるやうにして鄰へはひる、跡にお雪思入あつて、）

お雪　あのまあお鄰の伯母さんとしたことが、私をとらへてあのやうな仇口をいはしやんすれど、あなたの思惑どうして其樣、

ト庄左衞門の寐顏を見て、うつとり思入、合方きつぱりとなり、そつと行つて門口のかきがねをかけ、戸棚の中より鏡を出しちよつと鬢のほつれを直し、こは〳〵庄左衞門の傍へゆく、

ちと、おみ足でも摩りませうか。

ト恥かしき思入にて小聲で言ふ、庄左衞門他愛なく寐入居る故、あたりを見廻しもぢ〳〵しながらそつとかいまきの中へ手を入れ、さする思入あつて、

よくまあおよつて。

ト庄左衞門の顏をぢつと見て色合の思入、此時鄰よりお市出て戸の透間より内を見て、

お市　えゝ畜生め。

ト大きく言ふ、此聲にお雪びつくりして起直るを木の頭、此模樣よろしく、合方寺鐘にて、

ひやうし　幕

五幕目

幕六ッ時　番町浪宅の場
蛇山無住寺の場

【役名】――高田郡三郎、近藤源四郎、小汐田又之丞、千崎彌五郎、判人勘六、里親つんぼ傳助、湊屋の抱へお浪、其他。】

（番場町浪宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間障子屋體、正面暖簾口、上手一間の押入戸棚、張交の襖、下の方鼠壁、いつもの所門口、此外雪のふりし板塀、總て本所番場町小汐田浪宅の體。爰に長屋のかゝあおくら、やつし装、前垂襷がけにて七輪へ薬土瓶をかけ、薬を煎じてゐる、下手に序幕の判人勘六立かゝり居る、此見得さんげ〳〵の唄にて幕あく。とおくら七輪をあふぎながら、

くら　もし〳〵、何の用かは知らないが、病人のあるこちらの内、まあ靜にしておくんなさいな。

勘六　いや靜にやあなりにくい、こつちの内の又之丞どんに、聞かにやあならねえ事があつて、態々出掛けて來たのだ。ちつとも早く逢はせて下せえ。

くら　早く〳〵と言つたとて、今言ふ通りこちらは病人、今すや〳〵と寐てござるから、起してあげる迄待つておくれ。

勘六　藥を煎じて居るからは、こなたは雇ひのをばさんだなっ
くら　いゝえ私やあ鄰に居る者だが、一人者のこちらの內、病人で不自由勝故、鄰りづからでお世話をするが、さうしてお前はどこからおいでだえ。
勘六　私やあ品川の湊屋から、子供の事につき出掛けて來た、制人勘六といふものさ。
くら　はゝあそんならこちの內のおかみさんが、勤奉公に行つて居なさる、湊屋の內からおいでのかえ。
勘六　さあ其女の事について、急に逢はにやあならねえのだ、ちつとも早く逢はせて下せえ。
くら　今取次いで上げるから、ちつとの間待つて居なさい。

ト おくら立上ろ、此時上手障子屋體にて、

小汐　其取次には及びませぬ、只今それへ參るでござらう。

ト 合方になり、上手障子屋體より小汐田又之丞、着流し五十日かづら、病後眼病みの體にて出る。

勘六　起きて居るなら居るやうに、早く爰へ出ればいゝに。（ト双方よろしく住ひ）
小汐　これは〳〵勘六どの、ようこそおいでくだされた、病後の勞れにとろ〳〵と、まどろみ居つたる故、失敬は御免下され。只今あれにて承れば、なにか火急の御用とやら。して、其御用事は如何やうの儀でござるな。

勘六　さあ用といふのは外でもない、こなたの判で勤めに來た、湊屋のお浪さんが、今朝明方に駈落した故、湊屋の内は亂さわぎ、それでわざ〳〵出掛けて來たのさ。

小汐　何といはれる、すりや、あのおなみが駈落せしとか。（トびつくり思入、合方きつばりとなり）

お六　これさそんなにとぼけちやあいかねえ、兄のつもりで賣りなすつたが、聞けばこなたの女房で、浪人の身のたつきに迫り、話し合で賣つたとやら、外の子供と譯が違つて浮氣をした噂も聞かず、いゝ人のある樣子もなければ、足といふのはこつちの内だ、大方こつそり逃げて來て、何處ぞに隱れて居ることは、年中稼業にしてゐるだけ、蛇の道はへび、毒蟲の穴をさがして突當てたのだ、かういふ世界のことだから、年季をますの仕置をするのと、やかましい事は言はねえからあの子を器用に爰へ出して、わしに渡してくんなせえ。（トおくら是を聞いて居て）

くら　そんなら今朝の明方に、品川を駈落して。（ト又之丞も思入あつて）

小汐　さては昨日緣切の、離別の狀がとゞきし故。

勘六　えゝ。（ト聞咎める、又之丞氣をかへて）

小汐　はて不屆なるかれが行、勤の身にてありながら、御主人の目をかすめ、駈落を致せしとは、以ての外にござる故、疾にも是へ參りなば、お人を請ける迄も無し、此方より送り屆けてお詫を致す

でござらうが、彼が駈落せしと、承るは今が始めて、夢にも知らぬ儀でござれば、何卒外を御詮議下され、又そこ許がお歸りありし跡へ彼めが來りなば、異見を加へ早速に、御主人方へお返し申さん。扨々それは御苦勞千萬、お氣の毒に。（ト言ふを冠せて、）

勘六　だまれ〳〵、えゝ默りやあがれ。其の氣休めはよして貰はう。お爲ごかしで言拔けても、其手はくはねえ勘六さんだ、今此方が口ばしつたを、ちらりと聞いた地獄耳、心を鬼に惡法を書いて居ながら知らばツくれ、佛造つた挨拶も魂がそでねえから、うか〳〵しやべつた口うらに、昨日何かあの子の所へ、とゞけたと言ふぢやあねえか。

小汐　さあ、それは。

勘六　それ見たことか、夫婦なれ合ひ大膽にも、玉を釣出し知らばツくれ、この黑ツぽい判人の、眼をぬきにかゝるとは、見掛によらねえ太い奴だ。さあ玉をすなほに渡せばよし、四の五のとぬかしやあがれば、出る所へ出てしらちを付ける、おれと一緒にうしやあがれ。（ト立掛るゆゑ、）

小汐　さゝ其お疑ひは御尤もなれど、是には樣子あつてのこと、先々お下においで下され。（ト勘六をよろしくなだめ、）何を隱さう我方より、昨日一封認めて彼が方へ送りしは、夫婦の緣を切らうが爲遣はしましたる離別の狀、仔細と申すは拙者ことも、かく浪々にて長の疾病、藥用手當に差支へ

妻を苦界へ沈める程、時運拙なき身の上故、よしなき我に義理立なし、御主人へ不奉公せば却つて其身の爲ならず、長の病氣に貧苦を見兼ね、苦界へしづみくれたれば、我への操はそれにて立つ、只此上は其身の爲、末頼もしき客あらば、それにしたがひ身を任せ、すこしも早く苦界をのがれ、行末樂に致せよと、去狀そへし一封を、かれが方へ遣はせしが、もしやそれをば恨みに思ひ、今朝駈落致せしかと、口外せしもこちらの當推、古人の句にもある如く、けふは向うの岸に咲く、浮草の身のうき勤め、夜毎にかはる枕故、其去り狀を幸ひと、己が心に好きあうた間夫とやらを拵へおき、それと一緒に逃げたるものか、拙者に於ては夢にも存ぜぬ、仔細と申すは右の譯、まだ此上にも疑はしくば、見らるゝ通りの此あばら家、別に隱るゝ所もござらぬ、家搜しを召されてなりと、その疑念をお晴らし下され。

くら　ほんにそれが何よりめんばれ、わづかのせまい裏屋住居、天井とても張つてはなし、緣の下から戸棚のすみ〴〵、家搜しをなされたら居るか居ないか分らうわいなあ。（ト勘六思入あつて、）

勘六　いゝや止さうよ、家搜しをして見ろといふ罠にかゝつて居ねえ内を、精出して搜すやうな、そんな安い俺でもねえ、たとひ内に居ようが居めえが、いはゞ此方が判方なり、親元代りの賣主なれば、何處が何處迄掛り合、いよ〳〵玉が見えねえ日にやあ、身の代金をついた上、お定まりの法

があるが、そりやあこんたも承知であらうの。

小汐　そりやはや手前より賣主へ、償ひ方をせねばならぬが、見らるゝ通りの長の煩ひ、幽な煙も立兼ねて、妻を勤にやる程なれば、どうも當時の所では。

勘六　出來ねえと言ひなさるのか、そりやあ其方の得手勝手だ、たとひ知つても知らなくつても、賣つた女が駈落すりやあ、始末を付けるはこんたの役だ、それをとやかう言ふ日にやあ、いやでも出所へ持出して、白い黒いを分けにやあならねえ。おい鄰のをばさんとやら、爰の内の家主は何處だ。

くら　大家さんは知つて居るが、それを聞いてどうおしだ。

勘六　どうで地道の掛合ぢやあ急に話しは分らねえ、屆ける所へとゞけて置いて、てきぱきと掛合はにやあならねえ。

くら　大家さんなら鄰裏、番附長屋の井戸端を、ぐるりと廻つて三軒目、との六番を左に見て、横に曲つて突當りの腰障子から右へきれて、ずつと奥の格子作り、そこへ行つて聞きなさんせ。

勘六　いや大層こみ入つた長屋だが、いゝ鹽梅に知れゝばいゝが。（下門口へ出る。）

小汐　然らば判人勘六殿。

勘六　又之丞さん。

くら　をとゝひおいで。（ト門口をしめる。）

勘六　人をげぢ〳〵のやうにしやあがる。（ト花道へゆき、）お浪の逃げたを種にして、又之丞めを相手取り、元金をつかせて置き、又源四郎からたんまりと纏めた金をふんだくり、いゝ春を仕てえものだが、何にしても鄰裏の、家主が知れゝばいゝが。

　トさんげ〳〵になり花道へはひる。又之丞思入あつて、

小汐　お鄰のおかみさん、いろ〳〵お世話様になります。

くら　いえ、どう致しまして、ほんに〳〵ぎす〳〵と、すごみな事ばかり言ひまして、あんまり面が憎いから、鄰裏の家主を、わざと教へて遣りましたから、大方方々歩いて、まごつくでござりませうわいなあ。

小汐　申さば先は生業づく、どのやうに申さうとも、勤に遣りし女房が、駈落せしが此方の越度、あゝ困つたことが出來致した。

くら　それはさうと私は、油を買うて參りますが、何も買物はござりませぬか。

小汐　むゝ、油を買ひにござるなら、其ついでに身共が宅のも、一合買うて來て下され。

くら　はい〳〵畏りました、※[#「木＋造」]油さしは戸棚でござりますな。

小汐　御苦勞ついでにお出し下さい。

トおくら押入の戸棚を明け油さしを出す、又之丞煙草盆の抽斗より一朱を出し、

是で代をお拂ひ下され。

くら　畏りました。どれ行つて參じませう。（ト油さしを持ち門口へ出で、）つい忘れて居ましたが、お藥が煎じ上つて居ります、お跡でお上りなされませ。

小汐　いや、何から何迄御厄介。

くら　どれ、内へ寄つて行きませうか。（トおくら下手へはひろ、跡合方になり又之丞藥を呑む事あつて、）

小汐　鄰家の誼とおくらどの、一と方ならぬ厚い世話、忘れは置かぬ忝い。それに付けても我眼病、藥は呑めども效驗無く、豫て企つ大望も、いよ〳〵今宵と定まる故、跡の難儀を掛けまいと、きのふ便りを幸に、女房方へ離別の狀、差遣はしたが害となり、かれが主人を駈落せしとは、深き仔細をしらぬ故、我に恨みを言ふ心か、但し勤の其内に、言交したる者あつて、それと二人で逃けたるか。あゝ何に付けても彼が身に、かゝりや繫がる此身の難儀、はてさて困つたものぢやなあ。

ト思案の思入、竹になりたやの唄になり、花道より大鷲文吾、やつし裝着流し半天象股引尻端折り、草鞋がけにて煤掃竹をかつぎ出で來り、花道にて思入ありて、

文吾 鶴氅を着て徘徊すと、詩につらねたる雪中を、身には襤褸のそぼろをまとひ、竹や〳〵と呼びあるくも、最早今日限りと思へば、暮合早き冬の日も、はて待ちわびしきものぢやなあ。(ト舞臺へ來り、)又之丞さま、お宅でござりまするかな。(ト門口を明ける、是にて又之丞、文吾を見て、)

小汐 おゝ竹賣の文六殿か、まあ〳〵此方へはひらつしやれ。

文吾 左樣なればお詞に任せ、一服やつて參りませう。

ト竹を門口へ立掛け、草鞋を脱ぎ内へはひる、又之丞有あふ手桶を持行き、

小汐 是にて足を洗はつしやれ。

文吾 いえ〳〵、雪中なれば此通り、足は少しも汚れませぬゆゑ。

ト是にて又之丞門口の外へ思入あつて、ぴつしやり締め、

小汐 大鷲氏、まづ〳〵あれへ。

文吾 然らば御免下されい。(ト是より合方きつぱりとなり、双方よろしく住ひ、)

小汐 計略とは言ひながら、かく雪中をお厭ひなく、下賤に交り竹賣商人、嘸かしお寒いことでござら

う、まづ〳〵お手をおかざしなされい。（ト有合ふ火鉢を出す。）

文吾　お心遣ひ忝うござる。いやもう是も主君の御爲と思へば、さのみにも存じませぬて。

小汐　して、その許の御入來は、定めて今宵會合のお談じでござらうな。

文吾　さればさ、其儀もお談じ申すが、又其外にそこ許の、お耳に入れ度き儀がござつて。

小汐　して仰せらるゝ其仔細は。

文吾　又之丞殿お聞き下されい。（ト合方かはつて、）只今當所を通行なす故、御近邊に住ひ致す、八百屋元助方へ立寄りしに、かの方に同居なす高田郡三郎が儀に付いて、一つの椿事出來せし故。

小汐　して又、それは如何なる譯。

文吾　其仔細と申すは、貴殿も御存じ知らるゝ如く、郡三郎が兄たる元助が借宅なす地主といふは、足利の昵近内山官左衞門といへる者、かれに一人の娘あつて、それと高田と娶合さんと、出入の醫者なる雲齋を仲に立てゝ數度の言入れ、此儀に付いて兄元助當惑致せし仔細と申すは、豫てより郡三郎を養子に欲しき存念より、内山官左衞門といへる者、日頃よりして元助へ種々恩義をきせ置きて、のつ引させぬ無理所望、なれども高田は我々と、一味同士の列なれば、此儀をいツかな承引せず、深き心願ある故にと、兄に斷り申せしを、弟が心底知らざる故、以ての外に立腹なし

いかなる心願ある故と、問詰められて是非無くも、肉身分けし兄弟故、よもやと思ひ郡三郎、兄に大事を明せしを、流石下賤の口さが無く、内山方へまッかくと、我々共が企を口外せし故宮左衛門、猶々高田を懇望なし、萬一婚儀をいなむ時は、足利家へ申達なし、義黨の本意を空しくなさんと理を非にまげし無理難題、かゝる事に及びしも、大事を兄に口外せし、郡三郎が不覺故、自殺致して義黨の者へ、言譯なさんと致せしも、某頻りに押止め、一味の者へ言譯に切腹なして相果てなば、其身の言譯立つにもせよ、義黨の本意を空しくなさば、冥土へ趣き亡君へ申譯あるまじと說得致し參りしが、かゝる仕儀ゆゑ高田には今日の際と相成り、是非無く義黨の列を洩れ、不義士の中へはひつてござる、椿事と申すは斯の次第、替り易きは世の中の、習ひと世俗に申せ共、わづか流浪の內だにも、種々の事共出來なすは、うつれば替るものでござる。

小汐 すりやそれ故に高田には、徒黨の列を餘儀なく洩れ、不義士の列に加はりしとな、はて扨如何にも氣の毒千萬。それに付けても其許が、よくぞ自殺をお止め下され、かく御說得あればこそ、故無く事は納まれど、郡三郎が一存にて切腹なさば先方にても、婚儀破談を憤り、義黨の大事を申達なし、我々共が是迄に盡せし事も水の泡、はてさて悲哀な事でござる。

文吾 小汐田氏の仰せの通り、大事の前の小事故、かくは計らひ申せしかど、忠臣無二の郡三郎、嘸殘

念でありつらん。

小汐　其心中を思ふに付け、又殘念なは拙者の身の上、長らく瘧の病にて、浪々中のかんなんも、妻の節義に良藥調ひ、やう／＼全快致すと間も無く、又もや眼病。

文吾　や。

小汐　いやさ、難病の擧句にて、ほとんと當惑致し居りまする。

文吾　いやなに小汐田氏、お包みあれど其許には、鳥目でお惱みなさらうがな。

小汐　え、どうしてそれを。（ト びつくり思入。）

文吾　されば、只今郡三郎より承りし貴殿の御病氣、鳥目でお惱みなさると、存ぜし仔細は内山方より緣邊の儀に付き、元助方へ參りし者は矢張貴殿が配劑受けし、御案内なる鄰家の醫者にて、雲齋とやら申す者、彼が高田に語りしには、鳥目の病平癒なす、其良藥はありながら、世にも得難き年度の生れ、酉の年月日時揃ひし七歳未滿の、女子の生血を服する時は、忽ちに全快なす事疑ひなし、されども得難き品といひ、人命にかゝはる儀故、なか／＼以て調ひ難しと、先刻醫者の物語り。（ト是を聞きて又之丞思入あつて、）

小汐　すりやあの、酉の年月揃ひ、七歳未滿の女子の生血を服する時は、全快なすとな。

文吾　いかにも醫者の雲齋より、郡三郎が聞きしとやら。
小汐　それぞ幸ひ我實子、
文吾　え、
小汐　いやさ、我一心にて良藥調へ、今宵の本望達する迄には、全快致すでござらう程に、烏目の事は此の座ぎり、同士の者へ御他言は、何卒御容赦下されい。
文吾　其儀は委細承知致すが、たとひ百金二百金、高金の品なりとも金子に替る藥ならば、手に入ることもござらうが、世にも稀なる年度の生れ、得難き血潮を火急の事には。
小汐　そこを拙者の一心で、日頃信ずる神佛へ、祈願なしても良藥調へ、本望迄にはきつと全快、
文吾　あゝ思へば昨日兩國橋の上において、俳友たる晋子が吟も身に當る、水の流れと人の身は、
小汐　老少不定の習ひとて、病の器にいつ何時、花に嵐の愁があるか、
文吾　知れぬ浮世も煤竹の、ちりを拂つてあすからは、
小汐　汚名をきよむる年の瀨に、めぐみの雪も降り積り。
文吾　待たれし明日も今日となり、
小汐　寶の山へ入りながら、

文吾　貴殿がむなしき御病氣とは、
小汐　是も定まる宿業か。
文吾　何に付けても世の中は、
小汐　まゝにならざる。
兩人　事どもおやなあ。（ト宜しくあつて文吾氣をかへ）
文吾　思はぬ事にて長座致し、お邪魔のみ致してござるが、然らば成るたけ其許にも、良藥間違致されて、御全快をばお待ち申すぞ。
小汐　きつと今晚討入り迄には、本服の致すでござるが、して會合の其場所はな。
文吾　それぞ先日某が、俳師の體に拵へ、豫て約定致し置きし、東兩國尾上町なる 楠屋と申す茶屋迄、何卒御入來下されい。
小汐　委細承知仕る、然らば今宵かの方へ、參らば貴殿の俳友の、名に聞えある子葉どの。
文吾　又其許にも世にある折、俳吟ありし其時の、お名を其儘潮水どの。
小汐　先づそれ迄は我々は、
文吾　やつす姿も今一た時、

小汐　左樣ござらば大鷲氏。

文吾　是にてお暇仕る。（卜立上り、下手へ來り草鞋をはく、又之丞送り出で、）

小汐　くどうも申す樣なれども、我眼病を御他言は。（卜言ひかける。此時文吾草鞋をはいてしまひ、）

文吾　あいや、言はず語らず何事も、此場の事は此場限り。（卜門口へ出る、又之丞も思入あつて、）

小汐　そんなら是にて竹賣どの。

文吾　又之丞さま、おやかましうござりました。

卜件の竹をかつぎ、竹になりたやの唄にて文吾花道へはひる。又之丞跡を見送り思入あつて、門口をしめる、跡合方になり、

小汐　とかうする內最早夕景、暮六つ近く相成れば、鳥目の時刻も早しばし、今大鷲氏が詞にて、思ひ當るは此程より、雲齋老が我への話、鳥目の病を立所に、治する藥はありながら、世にも得難き祕法故と、言ひしは正しく酉の年月日時揃ひし女子の生血、幸なるかな我娘、年も七歳未滿にて天のあたへと思へども、女房きさを品川へ勤めにやる折娘をば、東葛西の在方へ、里に遣はし置きたるゆゑ、今より駕籠にて走るとも、遙に遠き邊土故、夜道をかけては知れがたし、はて何としたものぢやなあ。

ト又さんげ〳〵になり、花道より傳助、白髪かづらやつし裝、象股引草鞋がけ、田舍親父にて矢張やつし裝の娘の子供おしほを、十文字に脊負ひ、古びたる番傘を持ち出で來り、花道にて空を見て、

傳助　やれ〳〵草臥れた〳〵、又大降りのせぬ内と、足に任せて急いだが、腹の時計のあんばいでは、七つ半過ぎでもあらうか、いや、やう〳〵の事で番場へ來た。

しほ　おぢいさん、おんぶはいやぢや。歩かせて下されいなう。

傳助　えゝ此の餓鬼はおぶつてやれば歩かうと言ふし、根性の曲つた餓鬼だぞ。たゞさへ耳の遠い所な背中できやあ〳〵言はれるので、猶々耳が遠くなるわえ、もう向うが手前の家だが、必ず家へ歸つても、芋の粥ばかり喰はせたなどゝ、言附け口をきくときかねえぞ。

しほ　其樣な事はいはぬから、父さんに逢はせて下されいなう。

傳助　何だと、父さんに粟餅を買つて貰ふのだ、そりやあどうとも勝手にしろ。（ト右の合方にて門口へ來り。）はい、御免下さい。（ト門口を明ける、又之丞傳助を見て、）

小汐　や、こなたは里の傳助殿、娘を連れて丁度幸ひ、やれ〳〵、よくまあござつたなう。

ト嬉しきこなし、おしほ脊負はれてゐながら、

しほ　やあ、父さんぢや〳〵。（ト嬉しき思入。）

傳助　え〻やかましい。（トこづかうとして又之丞を見て心付き、）いえなに、是はおやかましうござります
さあ〳〵おしほや、おんりしな〳〵。
　　トお猫撫聲にて脊中よりおろす、おしほ又之丞の方へ駈行き、
しほ　父さん、逢ひたかつたわいなう。（ト縋る。）
小汐　お〻、よくまあ戻つて參つたなう。（ト此内傳助草鞋をとつて内へはひり、）
傳助　旦那さま、お寒いことでござります、つい〳〵手前にかまけまして、お尋ね申しも致しませぬが
　　お鹽梅はいかゞでござります。
小汐　今年は取分け寒さが強く冷えるせゐか、捗々しくまゐらぬので困りまする。
　　ト傳助聞きとれぬ思入にて、
傳助　いえもう、私はいつも達者でござりまする。
小汐　それは何よりよい事ぢやなう。
傳助　いやもう、よいお子とも〳〵、人樣のお子故に、大切にお育て申して、三度の御膳も四度づゝ、
　　うまい物でおあげ申しました。
小汐　それは御丹精に、よく可愛がつて下された。

傳助　いえ、欲をかわきは致しませぬ、きめ通りのお里扶持で、隨分お安いものでございますな。

ト是にて又之丞大きな聲にて、

小汐　いや、よく可愛がつて下された。

傳助　いえ、あんまりよくも參りませぬと申す譯は、内の婆アめが三日跡に喰合せでも惡かつたか、ころり往生致しましたが、死ぬる今際の際迄も、此お子の事を言ひつゞけ、たとひわづかの間でもかうして里に取つて見れば、我子のやうに思はれて、他人のやうには思はれぬ、私が死んでも此子をば、粗末にして下さるなと、そればつかりを言死にゝ、可愛や婆めは三日跡に、ころり往生いたしました。(トめそ〳〵泣き出す。)

小汐　やれ〳〵それは氣の毒千萬、嘸かし火急の病死にて、此方も力を落したであらう。

傳助　はい、今年が六十一、本卦がへりでござりまする、いやもう幾歳になつても連合に別れるのはよくないもの、婆が今際の頼み故、此お子を育てゝ上げたいが、何を言つても男の手一つ、此お子を育て兼ねますから、御迷惑ではござりませうが、木の實は元の親御さんへ、お返し申すでござりまする。

小汐　何の迷惑でござらうぞ、丁度幸ひ差當る娘の血潮が、いやさ、丁度むかひに遣はさうと、只今思

ひ居つたるところ、よくぞ連れてござつたなう。

傳助　里扶持の引殘りが、二朱ばかりござりまするが、婆めが死んだ香奠に、お貰ひ申して置きまする。

小汐　いや、御念の入つた其斷り、何はなくとも時分時ぢや、夜食でもたべて行かつしやれ。

傳助　いや、自分の餘德ではござりませぬ。皆な婆めが物入に遣ひました。

小汐　いやさ、夜の飯でも喰べて行かつしやれ。

傳助　いゑ夜道でも大事ござりませぬ、提灯を持つて參りました。左樣ならお暇いたしまする。

　　ト草鞋をはき表へ出て、

　やれ〳〵、是で厄介拂ひだ。（トやはりさんげ〳〵の唄にて、傳助花道へはひる。）

小汐　いや、あの親仁も餘程耳が遠いと見える、自分の言ふ事のみ申して、たうとう戾つて行き居つたわえ。

しほ　これ父さま、何卒是から何時迄も、内に置いて下さりませ。

小汐　おゝ、置いてやるとも〳〵、もう是からは何處へもやることではないぞよ。

しほ　うれしい〳〵。（ト悅ぶ故又之丞思入あつて、）

小汐　あ、何にも知らずに。（ト言掛けて氣をかへ、）これ娘、顔を見せやれ。

しほ　あい〳〵。（ト顔を上げて見せる、又之丞ぢつと見て、）

小汐　あ、親はなくとも子は育つと、少しの間見ぬ内に、よう成人をしやつたなう。（トかはつた合方になり、）其方は如何なる宿業にや、まだ當歳の其折は、それ相應に育てしも、物心つく頃になり御家騒動、是非無くも父が主家を流浪なし、貧しき暮しに衣類さへ心に任せぬそれのみか、生みの母にも憂き別れ、父が病氣に育てかね、知らぬ田舍へ里にやり、他人の手しほで嘸や嘸、憂い目辛い目をしたであらうが、其里親には死別れ、父の手許へ歸るやいな、直に其身も。

トホロリと思入あつて氣をかへ、

いやさ、其身にほしきものあらば、何なりと買うて遣はす、喰べたい物を言ふがよいぞや。

しほ　あい、私が好きなお團子を、どうぞ買うて下さりませ。

小汐　何ぢや、團子がほしいとな、然らば餡のついたのを、只今買うて遣はすぞよ。

しほ　いえ〳〵、餡のお團子よりお月さまへ上げるやうな、白い方がよいわいなあ。

ト又之丞思入あつて、

小汐　何にも知らぬ子心にも、虫が知らすか、いやさ、白い團子を買うて遣るぞや。

卜矢張さんげ〳〵にて、下手より以前のおくら、油さしと線香を一把持ち出來り、

くら　ほんに私としたことが、ちよつと裏へ買物に出ると、角の番屋で呼込まれて、追掛々々話しをされるので、お使ひが遲くなつたわいなあ、（卜門口を開け、）はい、油を買うて參りましたぞえ。

卜内へはひる。

小汐　是は大きに御苦勞でござつた。

くら　ついでに番太へ寄りましたら、慥お線香がない御樣子故、お釣の內で買うて來ましたぞえ。

卜それへ出す。

小汐　なに、線香を。（卜思入あつて氣をかへ、）何から何迄忝うござる。

くら　もう日の暮れるのに、間もござりますまい。序に行燈も出して置きますぞえ。

卜押入の戸棚より行燈を出しよき所に置く。

小汐　これ娘、お鄰のをばさまに御挨拶を致さぬか。

しほ　をばさん今日は。（卜辭儀をする、おくらおしほを見て、）

くら　おやまあ、何處のお子だと思つたら、おしほさんでござんしたか、大層大きくおなりだねえ、ほんに、私は見違へましたよ、さうしてまあおつかさんによく似て、どこもかしこも肌目こまかで

いゝ娘さんにおなりだねえ、何時まあお内へお歸りだえ。

小汐　里方の母親が病死致して手がない迚、只今里の親父殿が、送つて參つたところでござる。

くら　おや左樣でござりますかえ、もう此位におなりなされば、人手にかけることはござりませぬ、お内へ置いてお上げなさい。此のお子などは子がらはよし、もう五六年もお立ちなさると、それはそれは此のお子さんで、お父さんもお樂が出來ますわいなあ、ほゝゝゝ。

ト宜しく笑ふ、又之丞思入あつて、

小汐　其の五六年は扨おいて、明日とも言はず今宵の内に、

くら　え、

小汐　いやさ、今宵は内にてゆつくりと、抱いて寢かしてやりませう。

ト誂へ端唄の合方になり、花道より序幕の近藤源四郎着流し大小下駄がけにて出で來り花道にて、

源四　今朝明方に八つ山下で、おなみが駕籠へ乘るところを、俺がちらりと見附けた故、駕籠や二人と言合はせ玉は此方へ卷上げたが、其の時拾つた守袋、中にあつたる去狀を種に遣つて又之丞か、性根をさぐるこつちのもくろみ、慥かに向うの浪宅が、小汐田の住居だが、彼奴内に居ればいゝが。

ト右の合方にて舞臺へ來り、內を覗いて見て思入あつて、衣紋を繕ひしかつめらしくなり、

お賴み申す〳〵。

くら　はい〳〵、何方からおいでにござりまする。(ト門口をあける。)

源四　拙者は當家の小汐田氏と、古朋輩の者でござる、又之丞殿御在宅ならば、御面談を致し度く、態態參りし者でござる。何卒お取次ぎ下されい。

くら　おや、左樣でございますか。もし旦那え、古朋輩のお方とて何方やらおいでゞござります。

小汐　なに古朋輩の御仁とな。(ト門口の近藤を見て、)これは〳〵源四郎どの、見苦しき拙宅へ、ようこそ御入來下された。御覽の通りあばら家ながら、先づ〳〵是へお通り下されい。

源四　おゝ、又之丞殿お宅でござつたか、然らば御免下されい。

ト合方替つて內へはひり、よろしく住ふ。

小汐　おくらどの、憚りながらお茶をあげて下されい。

くら　はい〳〵畏りました。(ト茶を汲んで出すことなどよろしくあり。)

源四　いや〳〵必らずお構ひ下されな。

しほ　これ父さん、お團子はまだかいなあ。

小汐　えゝお客人の御入來なるに、行儀の悪い、たしなみ居らうぞ。

くら　そんなら何か、おしはさんはお團子が欲しいのかえ。

小汐　いや、お聞き下され、只今拙者が娘に、何ぞ欲しきものあらば、買うて遣はすと申したれば、團子が好き故買うてくれと、丁度ねだつて居る所、お客人の前をも憚らず、まことに子供といふものは、致方のないものでござる。

くら　それなれば先程の、油のおつりがござりますから、買うて來て上げませう。

しほ　をばさん一緒に行かうわいなあ。

小汐　一緒に參るはよろしいが、外で喰べては相成らぬぞ。

くら　それは私がついて居れば、お氣遣ひはござりませぬ。

トおしはを脊負ひ行掛るを、又之丞思入あつて、

小汐　あゝこれおくらどの、其お序に石原の、因果地藏へ參らせて下され。

くら　はい〳〵畏りました、そんならあなた御緩りと。どれ、行つて參りませう。

トおくらおしほを脊負ひ下手へはひる、此内始終源四郎は、おしほに目を付けて居る。

源四　いやなに又之丞どの、あの御息女は、お手前のでござるか。

小汐　あれは勤に遣はしましたる、女房きさと拙者が中へ、儲けましたる娘でござる。

源四　それぞ此方のよき囮。

小汐　えゝ、

源四　いやさ、おとなしやかなよいお子でござる。

小汐　して、近藤氏には何故に、かく見苦しき拙者が宅へ。

源四　さ、参りし仔細は其許より、義烈の長たる大星氏へ、身の詫事を願ひ度く、それで態々参つてござる。

小汐　とは又何故、如何なる仔細で。

源四　又之丞殿、お隠しあるな。（トずつけり言ふ。）

小汐　何といはるゝ。（ト合方きつぱりとなり、）

源四　お手前とて拙者とて、同じ鹽冶の浪士なれど、身の放埒に拙者めは、一味を省かれ不義士となれど、よく／＼思ひ廻して見れば、御主君鹽冶高貞公御切腹ありしより、御家改易家来はちり／＼多く離散の其中に、忠義を思ふ人々は、主君の鬱憤晴らさんと、敵討の企てにて、晝夜心を勞さるゝに、此源四郎はおめ／＼と、主君の御無念餘所になし、日夜淫酒に身を持崩し、爰やかしこ

と徘徊なすは、武士の本意にあらざると、先非後悔致せし故、改心なしておの／＼の、お手助を致さんとて、卽ち今日其許より、義黨の隊長大星氏へお執成を願はんと、態々參上致してござる。(ト是を聞き又之丞思入あつて)

小汐　いや、何事かと存じますれば、以ての外なる其お賴み、成程本國離散の砌は、主君の御恩を報ぜんと一味徒黨を結びしなれど、貴殿も御存じ知らるゝ如く力と賴む大星氏が、放埓惰弱の行ひ故同士の面々呆れ果て、一人放れ二人はなれ、心々に身退いたし、今では一味徒黨の者とて誰一人もござらねば、かくいふ拙者も其如く、疾より神文取返し一味の列を洩れたれば、今にも仕官の口あらば、何れへなりと主取なし、身の安泰を計る所存、敵討の企てなどゝは、思ひよらざることでござる。(ト取あげぬこなし、源四郎是を聞き思入あつて)

源四　すりや、いよ／＼お手前には、二君に仕へる御所存とな。

小汐　浪々なしても又之丞、武士の詞に二言はござらぬ。

源四　すりや、あのいよ／＼。

小汐　はて、いらぬ御念さ。(トきつぱりと言ふ。源四郎思入あつて又之丞の傍へぐつと詰めより)

源四　小汐田氏、いやさ、又之丞どの、ちえゝ見下げ果てたる此方はなあ。(ト合方きつぱりとなり)故

埒隋弱の拙者でも、改心なして亡君の仇を報ずる所存なるに、君の大恩打忘れ、二君に仕へる所存などゝは、言語に絶えたる人面獸心、かゝる所存のお手前と、同席なすも刀のけがれ、主君の名代某が、成敗なしてかう〳〵。（ト又之丞を引付け煙管にて打すゑる、）さあ、かうされるが口惜しくば、まことの武士の本心を、實は斯樣とお明しあるか。いやさ、是でも無念に思はれぬか。

ト散々に打擲なす、又之丞起き直りきつとなつて氣なかへ、

小汐　はて、假令如何やうめさるゝとも、別に貴殿へお明し申す、本心とてもござらねば、その御折檻無念にござらぬ。

源四　すりや、あの是でも、（ト思入あつて、）いや適れなる貴殿の魂、身持不埒の拙者故、もしや大事が洩れんかと、深くも本心お隱しあれど、主君の仇を報ぜんと竊に企てめさるゝ事、慥に見ぬく源四郎、なんと相違はござるまいがな。

小汐　なに、まだ此上に御疑念あるとは。

源四　しかも慥な證據がござる。

小汐　して又證據と仰せあるは。

源四　外でもござらぬ、是でござる。（ト懐中より序幕の去状を出して又之丞に見せる、又之丞手に取り見て）

小汐　こりやこれ昨日品川なる、妻へ送りし自筆の去状、是をどうして其許が。

源四　されば、かく言ふ源四郎も、實は是迄遊里へ入込み、身持惰弱に放埓なし、人に不義士と見せたるも、一味徒黨の其内に、もし變心もあらうかと、所存をさぐる一つの手だて、昨夜はからず品川なる、湊屋方へ參りし所、貴殿の妻たるお浪どの、此去状を拙者に見せ、涙にくれて居られしが、それにて思ひ當りたる、忠臣無二の貴殿の魂、故無く妻を離別なし、去状書いて送られしは、主君の仇を報じて後、跡へ難儀を掛けまじと、深き御所存あつての事と、此源四郎が見拔いた眼力、寸分違ひはござるまいがな。（トきつと言ふ、又之丞思入あつて、）

小汐　いや、左樣な所存に非ず、承れば女房も、今は勤の水に染み、よし無き噂を聞きし故、愛想が盡きて去りました。

源四　然らば本心其許には、おなみどのに愛想をつかし、

小汐　いかにも、離別を致してござる。（ト是を聞き源四郎につこりと思入あつて、）

源四　それで身共も一つの安堵。（ト件の去状を取つて懐中なす、又之丞心得ぬ思入にて、）

小汐　なに、御安堵なされしとは。

源四　何を隱さう源四郎、まだお手前の御家内が、苦界へしづまぬ其前より、ぞつこん心を掛けたれど主ある花に仕方無く手出しもせずにゐたる所、待てば甘露と品川へ、女郎に賣られた話しを聞き、是幸と通ひつめ、口說落して深い中、それなればこそかうやつて、貴殿の許より送つたる去狀を打ちあけて、身共に見せたが何より證據、愛想が盡きて去つたとあれば、今日よりは身共が引取り、持物になし世話を致す、よもや違背はござるまいがな。

ト是を聞き、又之丞びつくりなし、

小汐　むゝ、扨は女房おきさめは、全く苦界の水に染み、人もあらうにお手前と、深く語らひ駈落なし我に難儀を掛けしよな。思へば〳〵憎くい奴め。（ト無念の思入、源四郎せゝら笑ひ、）

源四　これさ〳〵又之丞、貴殿の方から愛想が盡き、離別の狀を出したる女房、今更となり未練らしく無念に思ふ事はあるまい。よし又さうでないにもせよ、おのが病氣の藥の代に、女房を苦界へしづめて置き、其上愛想が盡きたなどゝ、暇の狀を送るお手前、どれ程惚れた女房でも、こりや寢がへるのは尤もだ、さうもあらうか亡君より、受けたる恩を忘却なし、二君に仕へる所存とは見下げ果てたる腰ぬけ武士めが。（ト立上つて又之丞を足蹴にけかへす、是にて又之丞きつとなり）

小汐　こりや某を足下にかけて。

源四　おゝ、蹴たがどうした、踏んだがどうした、足蹴にされるが無念なら、敵を討つ所存があるか、そんな性根はあるめえがな。恩を知らざる犬侍、おのが女房を取られても、去狀出した上からは、一言半句もあるめえが、見りやあ見る程みじめなざまだ、へゝはゝむゝはゝゝゝ。どりやそろ／＼と歸らうか。

ト門口へ出て又之丞と顔見合せ、ぴつしやり門口をしめ、兩人氣味合ひの思入、唄になり、源四郎にっこりとこなしあつて花道へはひる。又之丞無念の思入にて、

小汐　ちえゝ不忠不義なる源四郎、彼が性根を知つたる故、深くも包む我本心、そこへ附入りさま／＼なる、我に無禮の打ち打擲、それのみならず女房迄、苦界の水に心を變じ、人非人めに靡びしか、言はうやう無き人でなしめが。（トきつとなつて心を取直し、）とさあ申すは、みんな愚癡の至り、何をいつても某が、妻を苦界にしづめしこそ、武士にあらざる一つの過り、只此上は大望の支度をなすが何より肝要、それに付けても眼病の、藥となる可き我娘、あゝ早く戻つて來ればよいが。

ト早き合方ばた／＼になり、花道より以前のおくら、はだしにて逸散に走り出來り、直に舞臺へ來り門口をあけ、

くら　旦那さま〳〵、大變が出來ました〳〵。

小汐　なに、大變が出來せしとは。

くら　今石原から戻りがけ、女夫石の此方の所で、摺れ違つたる浪人もの、頰被りにて面を隱し、おしほさんを引かゝへ、雲を霞と逃行きし故、やれ泥坊よ人攫ひと、跡を追つて參りましたが、此夕暮の暗紛れ、たうとう影を見失ひ、濟まぬことを致しました。

小汐　なに、すりやあの娘を、やゝゝゝ。（トどうとなる、此時暮六つの本釣鐘を打込み、又之丞心のせく思入にて、）浪人姿とあるからは、扨は近藤源四郎めか。して〳〵それは何れの方へ。

くら　石原通りを眞直に、お竹藏から割下水の方へ參りました。

小汐　すりや、割下水の方へ參りしとな。

くら　ほんに〳〵お氣の毒な、お長家の衆でも賴んで來よう。（ト下手へはひる。）

小汐　むゝ、なくて叶はぬ大事の娘。こりやかうしては。

ト大小を出す心にて、上手戸棚の所へ行かうとして行燈に突當り、たぢ〳〵と轉ぶ。此内始終本釣鐘を打込み、又之丞聞耳立てびつくりなして、

やゝ、娘が凶變に轉倒なし、耳へ入らざるあの鐘も、最早暮六つ烏目の時刻。（ト當惑のこなしに

て又きつとなり、）いゝや猶豫なす可き所にあらず、たとひ目かいは見えずとも、跡追掛けて取戻さん。

トさぐり／＼戸棚をあけ、大小を出して腰にたばさみ、心のせく思入にて、ツカ／＼と門口の方へ行き門口の柱へ行きあたり、又どうとなつて起上り、

えゝ、斯うもいすかに。（ト拳にて腕を打つを道具替りのしらせ、）なり行くものか。

ト無念の思入よろしく、時の鐘早き合方にて、道具廻る。

（無住寺の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面本堂阿彌陀如來佛檀の書割、此前に須彌壇、是へ打敷をかけ、此上の蠟燭建へ灯りを點しあり、左右二段の棚に位牌を大分竝べたる位牌棚の書割、上下折廻しの杉戸、前面一面雲に蓮華を書きし欄間、此道具總て古びたる荒寺のもやう宜しく、上手に以前の源四郎一升德利の酒を茶碗につぎ、手酌にて呑みながら、傍へ序幕のおなみを引付け居る、下手に序幕の駕かき○△の二人、焚火鉢へ卒塔婆を折りくべ、焚火をしてあたりゐる、此見得禪の勤めにて道具止る。と木魚入の合方になり、

源四　これおなみ、さりとはおぬしも分からぬものだ、去状迄書いて送り、愛想を盡した又之丞に義理

立をしてとやかう言ふから、當つて碎けろとおれが自身に出馬をして、又之丞に掛合へば、實は女房賣つたのも、外に可愛い女が出來、邪魔になるから病氣をかこつけ、藥の代と言拵へ、年一杯に苦界に賣つたが、親許だとか賣主だとか、肩書のある其内は、おぬしと緣が切れねえから、去狀書いて離緣をすれば、此方にいなやは少しもねえから、色にしようと女房にしようと、勝手次第にしてくれろと、又之丞の料簡迄聞糺して來た上からは、去られた亭主に義理を立て、とや斯うと言はうより、此源四郎の心に、したがふがいゝぢやあねえか。

○　さうとも〱、源旦那の言ふ通り、おのが女房を女郎に賣り、辛い勤めをさせて置いて、外におつな女を拵へ、去狀書いて離緣をするとは、あんまり實のねえ仕方だ、それにいくら義理を立つても、こりやあ無駄の輕業だ。

△　牛を馬に乘りかへて、源旦那にしたがへば、けふから爰の御新造樣、せゝつこましい宿場より、却つて呑氣な夫婦暮し、此明寺で樂々と、月日を送るが上分別、うんと言つて源旦那の、御新造になつた方が、おまへのためといふものだ。

ト此内お浪うつむいて居て、顏を上げ向うへ思入あつて、

お浪　えゝ恨めしいこちの人、そんなら私を苦界へ沈め、外に可愛い女を拵へ、私があつては邪魔故に

去狀書いて送りしとは、そりや情ないお前の心、なみ大抵のことではなし、子迄なしたる女房を去つておまへは濟むかいなあ。

源四　さあ濟むも濟まぬもかうなつては、いくら言つてもかへらぬことだ、心の腐つた又之丞に義理立てするはむだなこと、よし又亭主の又之丞が、おぬしの捻を戻すと言つても、一旦よこした此の去狀、おれが手にある上からは、金輪奈落濟ましやあしねえ。

ト懷より以前の去狀を出して見せるが、お浪合點の行かぬ思入あつて、

お浪　それがどうしてお前の手へ。

源四　はひつた譯は高輪で、思はず拾つた守り袋、中にあつたる去狀が、此の源四郎が手に入つたも、出雲の神がおぬしをば、おれが女房に持たせようと、ちやんと結んでくれたのだ、定まる緣とあきらめて、あの又之丞を思ひきりやれな。

お浪　いえ／＼なんと言はしやんしても、わたしや夫に去らるゝ覺えは、露いさゝかもござんせぬ、是には定めし譯ある事、主に逢うて樣子を聞き、私しや恨みが言ひたいわいなあ。

○　扨々お前も思ひ切りの悪い、先で愛想をつかして居りやあ、何を言つても無駄だと言ふに。

△　悪い事は言はねえから、うんと言つて源旦那に、暖めてもらひなせえ、冷てえ思ひをするだけ損

だ。

お浪　いゝえ〳〵わたしやどうあつても、主の胸を聞かぬ内は、外のお人に此の肌を任せることはならぬわいな。

源四　そんならおぬしはどうあつても、得心はしねえといふのか。

お浪　あい、お氣の毒だが源四郎さん、お前に此身は。

源四　や。

お浪　任せぬわいなあ。（トきつぱりと言ふ、是にて源四郎むつとして、）

源四　面白い、よくいつた。さう又おぬしが氣強く出りやあ、得心させる法があるのだ。かう熊や、今おれが連れて來た餓鬼を、爰へしよびき出せ。

○　あい〳〵、合點だ。

ト下手の杉戸を明ける、内に以前のおしほ、猿ぐつわ後手に縛られて居るを、駕籠や引出して來る、お浪是を見て、

お浪　やあ、其方は娘、どうして爰へ。（ト娘の傍へ行かうとするを、）

源四　えゝ寄りやあがるな。（トお浪を引きすゑる、是より誂への合方になり、源四郎有合ふ經机へ腰をかけ、）

あの餓鬼の側へ行き度くば、うんと言つて得心しろ。さもねえ内は金輪際餓鬼の側へは寄せねえぞ。さつき自身に出馬して又之丞から女房に、おぬしを貰つて歸りがけ、女房去つた證據には、女の子は女に付くと、昔からの定法に、此あまつちよも連れて行けと、厄介拂ひに押付けられて戻つたが、是からはあの餓鬼を、煮て喰はうと燒いて喰はうと此源四郎の好自由、おぬしが飽く迄おれを嫌へば、坊主が憎けりや袈裟迄と、佛の前で地獄責、いくら泣いてもわめいても、町を放れた本所の、合羽干場を背中にして、あたりは桑や茶畑に、人家も稀な一軒家、折々雪も古寺に夜の勤のしつぽりと、とけて往生する迄は、銅鑼鐃鉢のうつゝ責、又は河原の松葉えぶしで、責める道具は種々雜多、みぢめな思ひをしねえ内、器用な返事を聞かしてくりやれな。

ト宜しく言ふ、お浪愁ひのこなしあつて、

お浪　えゝ胴慾なこちの人、何科もない此子迄、人もあらうに非義非道な、源四郎づらに渡すとは、お前は氣でも違うたかいな。

源四　えゝ、とやかうと面倒だ、それ小びつちよをひつぱたけ。

○△　合點だ。

ト有合ふ卒塔婆にて兩人して、おしほを散々に打すゑる、是にておしほは猿轡の儘苦しむ事宜しく

お浪是を留めに行かうともがくを、源四郎おさへ付けて居る、とゞお浪堪りかねたるこなしにて、

お浪　あゝこれ、まあ〳〵待つて下さんせ。何科もない其子をば、折檻をしようより、其子の替りに私をば、折檻して下さんせ。

源四　べらぼうめ、おぬしを責めるはしつぽりと、得心させた上のこと、其前方にあのがきを、折檻するのが此方の山だ。加減をせずとひつぱたけ。

○△　合點だ。（ト又兩人にておしほをさん〴〵に打すゑる。）

お浪　えゝ年端も行かぬ其子をば、寄つてたかつて責めるとは、お前は鬼か蛇かいなあ。

○　いや、鬼でもなけりや、蛇でもねえ、八つ山下の辻駕籠で、はげ熊にねこ虎といふ、人に知られた駕籠かきだが、うめえ仕事が少ねえから、

△　こんな仕事の相棒に、肩を入れるもたんまりと、まとめた酒手がほしいから、源四郎旦那と三枚で、一ぽんつッぱる息杖の、悪い道をば承知でするのだ。

お浪　えゝこれ、苦患を助ける阿彌陀様も、現在後にありながら、こんな責苦に遭はうとは、いかなる因果か情ない、どうぞ仕やうはない事かいなあ。（トよろしく泣伏す、源四郎思入あつて、）

源四　さあどうだ、可愛い娘が助けたくば、うんと言つて得心するか、おぬしの心只一つで、鬼を出さ

うと佛を出さうと、爰が境に六道の、辻駕籠二人が見る前で、迷はず返事を聞かしてくりやれ。

ト是にてお浪いろ〳〵思入あつて、

お浪　成程お前の言ふ通り、それ程思つて下さんすを、とやかう言つたは私が過り、そでない夫に操を立て、憂い辛い目を仕ようより、此身を任せて責苦を脱れ、あの子の無事を見るのが嬉しさ、お前の心に從ふわいなあ。

○　こいつは風が、

△　變つて來たわえ。

源四　そんなら己の心にしたがひ、爰でしつぽり抱かれて寢るか。

お浪　あい、其代りにはあの子の責苦、どうぞ助けて下さんせいなあ。（トうつむいて泣く。）

源四　そりやあ助けねえでどうするものか、おぬしがおれの女房になれば、緣につながるおれの娘だ、可愛がつて育てゝやる。かう虎や、熊や、縛つた繩をといてやれ。

○　あい〳〵。（トおしほの猿轡と繩をといて、）やれ〳〵お前も可愛さうに、おつかあが惡いばつかりに、おめえ迄が痛いめをしたのだ。

ト是にておしほしく〳〵と泣きながら、お浪の傍へ行く。

しほ　かゝさん、此手が痛いわいなあ。

お浪　おゝ尤もぢや、嘸痛かつたであらうわいなう。（トおしほを抱しめて泣く、源四郎思入あつて、）

源四　さあ、かう物が極つたら、なんでも物は早いがいゝ、ちよつと爰で内祝言だ、おぬしが呑んで、己にさしやれ。（ト有合ふ筒茶わんを取つてさし出す。）

お浪　わたしや少しもいけぬ故、かはりにのんで下さんせ。

源四　そんならおれが名代に、どれ二三ばいかけ付けよう。（ト手酌にて酒を呑む。）

○　もし旦那え、かう直締が極つたら、

△　いつけん物をお願ひ申します。（ト酒手をねだる思入。）

源四　そりやおれも豫てのきめひき。（ト紙入より金を出して遣り。）それ、持つて行け。

兩人　こりや、大きに有難うござります。

○　かう虎、媒人は宵の内とやらで、あんまり長居は却つて野暮だ、そろ〳〵と出かけようか。

△　違えねえ、そんなら源旦那、しつぽり爰で。

兩人　お樂みなせえまし。

源四　はて、爰らが極樂往生づくめだ。

ト源四郎お浪を引寄せる。此模様風の音にて、道具廻る。

（元の浪宅の場）――本舞臺元の世話場の道具、二重よき所に行燈をともし、下手に千崎彌五郎ぶつさき野袴、大小にて住ひ、前に煙草盆を控へ居る、上手に以前の又之丞住ひ、此見得合方にて道具止る。

千崎　最早暮六つ過ぎし故、徒黨の人數皆一同、かの方へ會合致せば、小汐田氏にもお支度よくば、いざ御同伴仕らう。

小汐　日頃のよしみと千崎氏には、よくぞ拙者をお誘ひ下され、忝うはござれども、ちと跡々へ申し殘す要用の儀もござれば、自由がましき儀でござるが、一と足お先へお出で下され。

千崎　然らば一と足お先へ參れば、御用が濟めばお後より、かの方迄お出向きなされい。

小汐　直さま跡より參るでござらう。

千崎　心せきにござれば、是にてお暇仕る。

小汐　これは〳〵、お急ぎの事故お茶さへも進ぜ申さず、失禮御免下されい。

千崎　左樣ござらば小汐田氏。

小汐　千崎氏御苦勞に存じまする。

ト彌五郎門口へ出る、又之丞是を送らうとし彌五郎が前にありたる煙草盆につまづき、たぢ〳〵と轉ぶ故彌五郎此體を見て、

千崎　小汐田氏には、まさしくお目が。

小汐　あいや、お氣遣ひ下されな、兩眼ともに何ともござらぬ。

千崎　むゝ、すりやおかはりはござらぬとな。

小汐　いやもう、夜中ではござれども、蟻の這ふ迄分ります。

千崎　すりや其許が。

ト思入あつて刀をぬき又之丞の前へ白刃をさしつける、又之丞少しも心付かぬ故彌五郎こなしあつて、

千崎　是では今宵の。

小汐　や、

千崎　いやさ、今宵は雪もつもるでござらう。（ト鞘に納める。）

小汐　然らばお先へ、彌五郎どの。

千崎　貴殿のおいでを相待ち申す。

ト唄になり、彌五郎花道へはひる、是より床の淨瑠璃になり、

〽大望の今宵となれど勇み無き、鳥目のなやみ身の難儀、うき小汐田がかこちごと。

ト床の淨るりになり、又之丞思ひ入あつて、

小汐　あゝお羨しい彌五郎殿、貴殿はお目がすこやか故、嘸や心も勇まれて、會合の場へお出向きならんが、何を隱さう某は病後の惱みに鳥目にて、暮六つ時より盲目同然、まつかくと打明けなば、一味徒黨の人々に侮られんが無念さに、深く包み隱せども、討入場所へ至りなば不覺を取る事必定なれど、其討死は豫ての覺悟、それに付けても殘念なは、眼病平癒致す可き兩の年度の揃ひし娘、人手に預け置いたるも、折よく今日宅へ戻り、天のあたへと悅びしが、又候人に勾引され、追掛け行かんも盲目の、何れいづくと雲を當て、此又之丞が運命も、神や佛に見放され、かく迄武運に盡き果てたるか、口惜しやなあ。

〽齒を喰ひしばり難病の、身を悔みたる男泣き、折に降り出す白雪の、中をさまよふ親鳥が翼たよわき七つ子の、子鳥と共に妻鳥を、慕うて爰へよるの道、こけつまろびつ我家の門、それと見るより駈け入りて、

ト此内又之丞よろしく思入。雪おろしになり、花道より以前のお浪髪を亂し、おしほを連れ兩人ばた〳〵にて走り出で來り、直に本舞臺へ來て門口をあけ、内へはひり又之丞を見て、

お浪　こちの人か、むゝゝ。

〽心のゆるみさし込む癪、子はうろ〳〵とないじやくり、

ト お浪癪の差込むこなしにて、のツけに反つて倒るゝ、おしほはうろ〳〵とお浪にすがり、

しほ　これかゝさま、心をたしかに持たつしやいなう。

〽呼べどこたへも泣聲を、聞けば覺えの我娘、

小汐　さういふ聲は、娘でないか。

しほ　父さま、母さんが死んだわいなう。

小汐　えゝ、なに女房が參りしとな。（ト二重より下りようとして踏みはづし、轉び落ち、）して〳〵それは何れに。

〽見えぬ目ながら我子を杖、妻の身内を探り見て、

ト又之丞娘に敎へられ、お浪の傍へ來り、懷へ手を差入れ、さぐり見て、

こりや是癪に取りつめしか。これ娘、そこらに土瓶があるであらう、早う爰へ持つて來やれ。

しほ　あい〳〵。

ト有合ふ土瓶を持つて來る、此内始終床の合方にて又之丞土瓶の水を口より呑み、口うつしにてお浪に呑ませ、

小汐　これ女房、心を慥に持て、女房やアい、おきさやアい。

しほ　母さまいなう〳〵。

〽呼びいけられて心付き、（ト是にてお浪心付き又之丞を見て、）

お浪　此方の人か。

小汐　おゝ、女房心が付いたか。

お浪　これ此方の人、えゝお前はなあ〳〵。

〽跡いひさして女房が、恨み歎けば小汐田は、合點行かねど氣をしづめ、（ト思入あつて、）

小汐　これ女房、深き樣子を知らざれど、何か恨みのある樣子、仔細を申せ、どゞどうぢや。

〽言はれて涙の顔を上げ、（トお浪思入あつて、）

お浪　えゝ胴欲な此方の人、私を苦界へ沈めし跡で、お前は外に女子を拵へ、わしがあつては邪魔故に科もない身へ此樣な、何で去狀下さんした。（ト懷中より以前の去狀を出し、）去らるゝ覺えはござ

んせぬ故、お前に逢うた其上で、積る恨みが言ひたさに、苦界の中を忍び出て、爰やかしことさまよふ内、途中で悪い駕籠に乗り、源四郎の居る所とも、知らずに連れて行かれしは、名に聞いてさへおそろしい、蛇山の明寺にて、思はぬ難儀に逢ふのみか、何科もない此子迄、責折檻に遭うたのも、おまへが親子の縁を切り、あの源四郎に渡せし故、えゝ恨めしいおまへはなあ。

〽ありし次第も後や先、恨み歎くぞ道理なる、聞いて扨はと思ふにぞ、

小汐 何といやる、扨は近藤源四郎が、勾引したる娘をば我より自身に請取りしと、其方が手許へ連行きしか、それにて萬事分りしは、最前我家へ彼めが來り、其方と深くも馴染を重ね、二世の約束致したなれど、夫ある身に當惑せしが、昨日我より送りたる去狀がある上からは、誰憚からぬ二世の語らひ、慥に妻に貰ひしと、悪口なして歸りしは、合點行かずと思ふうち、娘が凶變途中にて、勾引したる浪人こそ、正しく彼奴と心はせけど、鳥目の病に是非なくも、跡追掛けて行く事ならず、無念にむねんを重ぬる内、計らず其方が是へ參り、あら方分りし今宵の樣子。さはさりながらこりや女房、いかに勤の習ひとて、人もあらうに不忠不義、放埒者の名を取りし、あの源四郎に身を任せ、身共が方よりひそかに送りし、去狀迄を源四郎に、手渡しなすとは、はてさて其方に似げ無き所存ぢやなう。

お浪 〽流石夫婦の愛着心、武夫ながら理をせめて妻を恨みの一言を、聞いてお浪は猶悔しく、

えゝ穢はしいどうしてまあ、あの源四郎に去狀を、私が何で見せませう、其去狀を見られし苦界を抜けて夜明方、八つ山下にて駕籠に乘る、其折落せし私が守り、あの源四郎に拾はれし故今日の難儀となつたれど、さう言はしやんすお前こそ、子迄なしたる夫婦中、何科もない私をば何で去る氣でござんすか、それが聞きたうござんすわいなあ。

〽問詰められて小汐田が、今は包むに詮術なく、

小汐 さゝ、其恨みは尤もなれど、其方に去狀遣はせしは、跡の難儀を掛けまいため。

お浪 むゝ、さうしてそれはどういふ譯で。

小汐 さ、深くも包む大望故、子迄なしたる中なれど、女子に肌はゆるされずと、是迄其方に言はざりしが、今こそあかす我大望、一と通り聞いてくりやれ。（ト床の合方になり、）豫て其方にも知る如く、御主君鹽冶高貞公御切腹の其日より、おのれ怨敵高野師直、討つて本意を遂せし上、主君の仇を報ぜんと、日夜心をくだきしも、最早今宵が高野の屋敷へ、討入る時節到來故、心はいさめど情なや、かく泰平に徒黨を結び、執事の館へ亂入なせば、我々共は御法破り、それにつながる其方や、我子に難儀を掛けまじと、それ故にこそ離別の狀認め送りし我心中、長の病氣のかん

がくも、手に手を盡しくれたる上、藥の代の其爲に、苦界へ沈みし其方に何で愛想が盡きようぞ、爰の道理を汲分けて、今より主人へ立歸り、勤大事に奉公なし、我亡き後は一遍の、回向をなしてくれるのが何よりまさる此身の菩提、必ず／＼愛想がつき、切なる心の其方を、離別致せし譯ならねば、疑念を晴らせこりや女房、忠義故ぢやとあきらめくれよ。

〽事を分けたる身の詫も、始めてあかす夫が本心、聞くに嬉しく女房も、覺悟極めてかたへなる、差添取つて我子の喉笛、ぐさとつらぬく氣丈の刃、苦む聲に仰天し、

ト此內又之丞思入よろしく、お浪是を聞き思入あつて、かたへに有合ふ又之丞の差添を取つて娘を刺殺す、おしほわつと苦しむ故又之丞びつくりなし、

小汐　おゝ、苦悶の聲はまさしく娘、扨は鳥目の良藥に用ふる事を知つたる故か。

お浪　さあ心を鬼に此子をば、差殺したも我夫の、跡へ心が殘らぬやう。

小汐　なんと。

お浪　先へ殺して私もともに。

〽言ふよりはやく女房が、自殺の體に又びつくり、

トお浪件の差ぞへを、喉へつき立て苦しむ故、又之丞びつくりなし、

小汐　やゝ、扨は大事をあかせし故、其方迄自殺させたるか、えゝ早まつた事致したなあ。

〽悔む夫が介抱に、手負は苦しき息をつき、

お浪　いえ／＼私が死ぬるのは、大事を聞いたるばかりでなく、不忠不義なる源四郎に、手ごめに遭つて無念にも。

小汐　身をけがされしか。

お浪　あい、恥かしい目にあひましたわいなあ。

小汐　やゝゝゝ。（ト是より條入の合方になり、）

お浪　勤めはすれど夫へ操、人に肌身は穢されじと、夜毎に替る枕にも、錠をおろして帶紐解かず、座敷ばかりの勤故、なじんで通ふ客もなく、裏や初會でたて通す、其下紐をとかさうと、附きつ纏ひつ源四郎が、夜毎々々に通へども、同じ鹽冶の御家來でも、人でなしの源四郎に、なんで枕をかはさうと、振りとほしたも二年越し、

〽張も意氣地も情なや、わるい駕籠やにだまされて、人家も稀な荒寺へ、連れて行かれて憂き難儀、

身を汚されし口惜しさ、死ぬる此身は覺悟なれど、可愛や此子は幾世の苦勞、里に預けし親にさ

へ別れて内へ戻りしと、これが話しに聞くからは、よく〳〵非運な生れ故、跡へ殘して行く時はよみぢの障りでござんす故、心を鬼に殺せども、思へば不便でござんすわいなあ。

へ可愛のものと恩愛の、妻がなげきに小汐田も、道理々々にしめからまれ、見えぬ目ながらはら〳〵〳〵と、落つる涙に雪とけて、川に水增す如くなり、かくては果てじと又之丞、氣を取直し涙を拂ひ、

ト又之丞お浪よろしく愁ひの思入あつて、又之丞氣をかへ、

小汐 ほゝう、其の歎きは尤もながら、娘が最期は犬死ならず、今宵と定まる討入も、途方に暮れし我眼病、其良藥に用ふるには、酉の年月日時揃ひし、七歲未滿の女子の生血、服する時は全快なすと、雲齋老が敎へに聞けば、未だ息ある內こそ幸ひ、血潮を服してためし見ん。

お浪 さういふ事なら、少しも早う。

へ有合ふ器へ我子の血潮、妻が絞りて差出せば、押頂いて服するにぞ、不思議や五臟惱亂なし、めんけんなしてどうと伏す、折に窺ふ判人勘六、門口より我鳴り込み、

ト此内お浪手負ながら這ひよつて、有合ふ筒茶わんへ娘の死骸の血潮を絞り、又之丞に差出す、又之丞さぐり取つておし頂き、一と口呑む、是にて風の音にて又之丞悶絶する、爰へ下手より幕あきの助

六出て門口に窺ひ居て、此時内へはひり、

勘六　やあ大事の玉を内へ引込み、疵ものにした又之丞、代官所へそびいて行き、身の代金のいゝ、しらちを付ける、きり〳〵とうしやあがれ。

〽小腕取つて引立つる、其手をとつてづでんどう、我に返りし又之丞、すつくと立つたる其の有さま。

ト勘六又之丞を引立てる、又之丞心付き、ちよつと立ちまはつて勘六を投退けきつとなる、お浪此體を見て、

お浪　やあ、お前はお目が見えまするか。

小汐　まことに月の晴れたる如く、兩眼ともに明らかなるわ。

お浪　是といふも娘故、

小汐　歎きの中のよろこびも、

お浪　母にまさりし我子の手柄、

小汐　持つ可きものは、

兩人　我子ぢやなあ。

〽夫婦が中に我子の死骸、抱き上げたる悲歎の涙、哀れ催ほすばかりなり、又も降り出す白雪に、小汐田心勇み立ち、

小汐　娘が蔭にて良藥調ひ、眼病平癒なすからは、是より徒黨の義士諸共、主君の仇を報ずる手番ひ、いで會合の支度をいたさん。

お浪　それにて私も心を殘さず、嬉しう成佛致しまする。

小汐　おゝ、此世の縁は薄くとも、未來はかならず夫婦の印、

〽去狀取つて寸々に、引さき捨つる後より、

ト又之丞落散りある件の去狀を取つて、引きさき捨てる、勘六は心付きうしろに窺ひ居て、

勘六　扨こそ〳〵、人の噂に違ひなく、鹽冶浪士の敵討、訴人をするから待つて居ろ。

〽駈行く所を引戻し、

ト勘六門口の方へ行き掛るを、又之丞引戻してぐつと引付ける、此内お浪は苦悶の思入にて、

お浪　もはや此身はあの世の門出、

小汐　我は是より此世の門出、

勘六　其の血祭りは眞平御免だ。

トふりほどいて逃に掛るを、又之丞ちよつと立廻つて、一ト刀あびせる。勘六立身にて苦しむ、此時雪おろしはげしく、お浪斷末魔の思入、又之丞此體を見て、

小汐　泡と消え行く。(ト勘六を見事に切倒すを木の頭)しら雪ぢやなあ。

ト刀の糊紅を拭ふ。お浪よろしく落入る。此の仕組おろし迷兒の鳴物にてよろしく、

ひやうし幕

ト雪おろしにてつなぎ、直に引返す。

六幕目

夜五ツ時　唐土太眞殿の場

高邸小林宅の場

(役名――玄宗皇帝、哥舒官、小林平八、清水大學、下官能瓶頭、同平長芋。揚貴妃、貴妃の侍童紫燕女、同紀清女、其他。)

(太眞殿の場)――本舞臺三間の間高足の唐屋體、向ふ金欄卷の柱、眞中好みの瓦燈口、左右彩色畫の金張り付、軒に化粧殿としるせし結構なる額を懸け、上下に無盡燈を照し、此内錦の緞張を卷きおろ

し、上の方石疊の築地塀、此内に芭蕉、紅葉、櫻、海棠などの植込み、日覆より櫻の釣枝、下の方同じく築地塀の上誂への段幕を張り、舞臺前岩組の張物に、紅白牡丹の盛り、總て楊貴妃化粧殿の體、誂へあつてよろしく唐樂にて幕明く。と直に下手より、〇髭のある唐人下官能瓶頭の拵へにて、火の廻りとしるせし弓張提灯を提げ出で來り、上手より△髭なしの下官平長芋にて、拍子木を持ち打ちながら出て双方宜しく行合ひ、

〇 火の廻りバア。

△ いや御苦勞々々、能瓶頭には、日本風の提灯でござるの。

〇 見やれ器用に出來て居るではござらぬか、しかし平長芋には、まだ當所の風土を辨へぬが、無提灯で歩くとやかましいぞや。

△ 其事も聞いて居るが、此庭は晝より夜の方が明るいではござらぬか、然し又何で玄宗皇帝様が、無提灯では惡いの何のと、日本風を初めさしつたことであらう。

〇 されば聞きやれ、おてかけが三千人美し揃ひがあつても、又斯うでもねえと捜した所が、貴妃といふ美人が、楊家の深窓に育てられて。

△ なに、羊羹としんこで育てられた、あゝ餅屋の娘か。

○はて、楊家といふ大身の祕藏娘故、荒い風にも當てず、大切に育てた器量よし、其噂が親王の耳へはひつた故、直に入内を仰付けられて、一膳喰つた所がうまいわ。

△羊羹としんこだから。

○まぜつかへさずと聞きやれ、三千人の中で楊貴妃殿ばかりを寵愛さつしやる。

△待つてくれ、三千人の上に一人殖えたから三千一人だな。

○ところで親玉が、うつゝを拔かして肝腎の政事とやらは其方退け、晝夜ひつ付き通しでまつり事を渡してござる故、彼奴が言ふ目が出る、見やれ、櫻海棠の咲いてるなかに、紅葉山茶花が見たいと言へば、四百餘州を驅け步かせ、四季咲の花を取寄せて、楊貴妃殿の機嫌を取るに、まだも榮耀がし足りなくつて、貴妃殿が日本の事を信仰故、何もかも日本の風をやられるとのこと。

△はゝあそれで分つた、藝なし猿のこちとらの樣なものを、大勢抱へ込ましつたは、おれは又見世物にでも出すか、生膽でも取られるのかと思つた。そしておぬしが持つて居る書物も、日本風に卷いてあるが、そりやなんだ。

○聞きやれ、言繼でも行屆かぬと、王城の地は元より、四百餘州へ日本風を學べと、此通り觸書にして廻さつしやるのだ。（ト懷中より觸書を出して渡す。下官取つて、）

△どれ〳〵、成程、こりやあみんな日本の字だ。

○おらあ此節横文字を習つて居るが、日本字は一ツぱも讀めねえから、よんで聞かせて下せえ。

△成程、をかしな書きやうだ。（ト觸書を取り、拍子木を持ちかへる。）

○東西々々。

△淨瑠璃名題、（トよろしく太夫連名役人觸れある。）

○いよ〳〵此所日本淨瑠璃、始まり其爲口上バア〳〵。

ト木を打つ、是をきつかけに鳴物打ちあげ、下手の幕を切つて落す、兩人はつゝと上手へはひる。築地塀の上に清元連中居並び、直に前彈になり、

〽漢宮萬里の春の花、長生驪山の紅葉時、一と目に詠める全景は、遠つ昔の阿房宮も、思ひくらべて思ひの竹の、しらべ床しき想夫戀、

トラッパを吹込み、跡三味線入り誂への唐樂になり、ブランケン（毛布）を掛けし床几を直し、上手に玄宗皇帝唐冠装束、下手に楊貴妃楊貴妃の拵へ、何れも畫面の裝、錺り付の笛を連吹きにして居る、上手の女の童軍配團扇の長柄を持ち、下手に同じく女の童香爐を臺にのせ、何れも舞臺眞中へせりあげる、是を一時に緞帳をしぼり〳〵と巻きあげる。

唄淨るり 〽花の春の金玉は花風樂に柳花苑、柳花苑の鶯はおなじ曲の囀り、月の前の調べは夜寒を告ぐる秋風、雲井に渡る雁金の琴柱に落つる聲々、

ト宜しくあつてほぐれる、風の音、なまめいたる合方になり、上下の牡丹に金銀のつがひの蝶、さし金にて舞ふこと、楊貴妃是に目を付ける。

クドキ 〽あれ虫さへも、つがひはなれぬ露の蝶、ぬれ〳〵染し其夜半は、月の夜遊にかぎりなき、玉を欺く宮人の、中にしよんぼり恥しい、お側へ召され袖の内、後にとばかり打付に、思ひます穂の絲薄、つれなの君と一と筋に、恨みかこつぞやるせなき、

ト此時女の童兩人こなしあつて前へ出て、

〽ひぞり給ふを女の童、心を汲んで浮れ立つ、

〽浮立つや春は霞に梅の花、八重に一と重に櫻の梢、匂ひふくみて皆咲きそろふ、枝を折りたやこがれてほしや、秋は曼荼羅朱蓮の花に、狂ひ亂るゝ錦絲鳥、ひらり〳〵女夫睦みてしをらしや、

ト兩人よろしくあつて納まる、玄宗皇帝前へ出て、

〽そも初秋の七日の夜、牽牛織女に誓ひを立て、言交したる言の葉は、

〽それを忘るゝ事かいな、嬉しと思ふ明暮に、二星を念じ願はくは、天にあらば比翼鳥、〽地にまたあらば連理木、其かね言を我も又、忘れねばこそ打解けて、四百餘州も一と所へ夜晝となきいとしさに、ひつたり抱き月の梅、はなれがた無く見えにけり、〽心解くれば打連れて、はや寢殿の戌の刻と、たはれ給へばおもはゆく、はかなき女の身だしなみ、化粧直して跡よりと、袖をかざせばほゝ笑みて、帳臺深く入り給ふ、

ト玄宗こなしあつて、二重へ上りふり返り、顏見合せて奥へはひる、此時童の兩人鏡臺櫛笥を取揃へよき所へ直すこと、

〽櫛笥鏡臺取揃へ、はこぶ童をお側へと、指圖に兩人は打連れて、君のお跡を慕ひ行く、

ト此内童兩人、よろしくこなしあつて奥へはひる、楊貴妃は跡を見送り、鏡に向ひ顏を直すこと、

メリヤスがゝり〽嬉しさを昔は袖に筒井筒、うつす鏡に、〽こはいかに、

ト下手よりばた〳〵になり、哥舒官割髪亂髮劔を拔き持ち、窺ひ出る、貴妃此姿の鏡へうつり見えるこなしよろしく、驚く思入あつて、

〽君の御前を遠ざけし、哥舒官つるぎ隱し持ち、只一と突と引すゆる、はらひのくれど豪氣の早業、后は庭にまろび落ち、

ト ちよつと立廻りあつて、

貴妃　やあ哥舒官どのには何故に。

哥舒　おゝ我君后の色香に迷ひ、朝政次第に怠り給へば、四海の大事、命は貰つた。

貴妃　そりや情ない、あれえ。

哥舒　やあ、聲立てな。

〽又引すゆるを拂ひのけ、階登れば追詰めて、髻引付け十分に、さしも浮世の夢の蝶、醒めて跡なく、

ト大ドロ／＼きほひ三重になり、哥舒官楊貴妃をしたゝかに突きつらぬく、此時三方の綴帳を卷きおろし、淨瑠璃臺をあふり返し、廊下の書割の張物になり、二重奥へ引込み、上手より二間の常足を引出し、此上手一間杉戸出這入りあり、右の鳴物にて道具納る。と合方になり、下手よりお霜、家中腰元の装にて八寸の膳を持ち、お君同じく腰元装にて臺附の飯櫃を持ち出來り、

しも　旦那さまは御殿から、いつもお下り遊ばすと、直に御夕飯を召上りますゆゑ、お伺ひ申しましたら、しばらく待てとおつしやりましたが、最早五つ餘程過ぎ。

きみ　あまり御夕飯が遅なはりますゆゑ、お伺ひ申して見ませう。

しも　それがようござりまする。（ト兩人膳部を下へ置き、障子屋體の傍へ來て、內へ思入あつて、）

きみ　旦那さまは假寐を遊ばし、お夢を御覽なされしか。

しも　うなされておいでなさるゝ御樣子。

きみ　お起し申上げませう。

兩人　旦那さま〳〵。

ト是にて障子を引拔く、向う三尺の床の間、刀掛に兩腰をかけ、上手に居爐裏鑵子をかけ、柄杓こぼしなど茶道具をよろしく竝べ、下手腰張の茶壁、よき所に短檠をてらし、爰に小林平八着流し好みの拵へにて、謠の本箱に寄り添ひ、謠本を額に當て眠り居る見得、うしろ差がねの蝶を遣ひ、薄ドロ〳〵にて、夢におそはれし心にて、つか〳〵と本を持つた儘舞臺へおりる、お霜手早く褥を取つて眞中へ敷く。

平八　扨は今のは。（ト思入、）

しも　お夢を御覽、

兩人　遊ばしましたか。

平八　むゝ、（ト思入。）思掛なき唐土の、玄宗貴妃をあり〳〵と、

きみ　すりや唐土の、
兩人　お夢をば。
平八　むゝ、いや〳〵楊貴妃の詩の文作、感吟なしてついとろ〳〵。むゝ、是も心氣の勞れであつたか。
しも　御夕飯を召上りませぬか、常より餘程、
きみ　遲うなりましてござりまする。
平八　あゝ左樣か、然し夕刻より腹痛にて、小々氣分が惡い故、後に致さう、次へもて。
兩人　え。
平八　えゝさ、持てと申すに。（トきつと言ふ。）
兩人　へい。（ト合方生殺しにて、兩人膳部を持ち奧へはひる。跡やはり合方、平八思入あつて）
平八　鹽冶恩顧の浪士共が、復讐のきざしある故、御本家にてお案じあつて、卽ち麻布のお下屋敷に要害堅固の御座所が出來、御わたましある可き所、御寵愛のお蘭どのが、兎角に主君を引留め、此程より二度三度、御わたましの延引せしも、正しくかれが計らひなり、醫師宗庵が周旋なれど、其身許も分明ならず、もしや鹽冶浪人の由緣の者にて間者となり、時日を延ばすは徒黨の人數、着到なすを待つ爲なるか、用心惡しき此所、君の長居は御身の大事、それ故某さへぎつて、御

諫言申せしかど、彼が色香に迷はせられ、更に御採用無き故に、其根をたつて葉を枯らさんと、臍をかためし思ひ寝に、お蘭どのに生寫しなる、色で迷はす楊貴妃を、馬嵬にあらぬ庭先にて我哥舒官の姿となり、一刀をもつてつらぬきしは、只一睡の夢でありしか、はて殘念なことぢやなあ。（ト平八よろしく思入、下手よりおきみ出て、）

きみ　はツ、申し上げます。清水大學樣がお出でござります。

平八　むゝ、大學殿がござつたとか、是へお通し申せ。

きみ　はツ。

平八　煎茶の支度いたせ。

きみ　畏りました。（トおきみ下手へはひる、平八思入あつて、）

平八　御わたましの事に付、昨夜某御本家より、亥の刻過ぎに歸りし所、往來まれな窓下に、四五人の武士屯なすは、合點行かずと思ひし故、門番所の小窓より灯りを遠ざけ透見なせしに、やゝ門前に佇みて、屋敷の内を窺ふは、正しく鹽冶の浪士共、油斷ならざる時節故、御わたましをすゝむれど、お蘭殿の止めによつて、お定めありし十九日に延引なせしが其内に、御家に變がなければよいが、血氣に逸る若者は、高の知れたる浪人共と、侮り居れどさにあらず、山鹿流の兵學に

名高き大星由良之助、いかなる計策あらんも知れず、油斷ならざる事ぢやなあ。

ト ちつと思入、此内下手より清水大學袴一本ざし、刀を提げ出で來り、下手を窺ひ、

大學　いや、其の御心配は御無用にござる。

平八　や、誰かと思へば清水氏。（ト褥を取りにかゝるを、）

大學　あいや、雪中お寒うござる、其まゝ〳〵。

平八　しからば御免下され。（ト合方きつばりとなる、大學下手へ住ひ刀を後へおく、）早速ながら、只今心配致すなと、そこ許が仰せられしは。

大學　貴殿が豫々おあんじなさるゝ、夫の大星由良之助は、臆病未練の侍故、御心配をお留め申した。

平八　なに、由良之助が臆病とは。

大學　豫て後室瑤泉院へ間者に入置く當家の足輕、半左衛門が娘おうめ、かれが知らせし密事の一通、是を篤と御覽なされい。（ト懷中よりおうめより受取りし密書を出し渡す。）

平八　拜見致すでござる。（ト密書を開き見る。）

大學　なんと大星由良之助は、臆病者ではござらぬか。

平八　むう、（ト讀終りて大學にかへし、）武邊に掛けては大身の家老に恥ぢぬ由良之助、大小捨て町人に

なると申すは心得ず、正しく是は計略ならん。

大學　それは貴殿の力負け、さやうな料簡無き事は、今日拙者見屆け申した。

平八　すりや、何方にてッ

大學　藥泉院の屋敷外にて、思ひがけなく出ツくはし、是幸ひと口論仕掛け、かれが心底見出さうと、種々惡口なしたれど、犬突ばひに手を突いて、ゆるしてくれと詫びる故、土足に掛けて踏みにじり、其上痰をはきかけたが、手出し致さぬ臆病者、なか／＼もつて敵などを討つ可き所存はござらぬから、決して恐るゝ事はござらぬ、それ故貴殿の御心配、御無用なりとお止め申した。

平八　すりや、其許が土足に掛けられ、其上痰を掛けられても、手出し致さぬ大星が、心の底は計られず、猶々もつて油斷がならぬ。

大學　それが貴殿の力負け、浮浪人でも大小をたばさむ者が土足に掛けられ、手出しをせぬは命が惜しさ、臆病者の大星を、何故恐れ召さるゝのだ。

平八　されば、某恐るゝのは、諸藝に達せし由良之助、既に山鹿流の兵學は當時天下に並ぶ者無く、弓馬槍劍武の道は、何れも極意を極めし大星、土足に掛けられ堪へ忍ぶは、正しく心に大望ある故、それぢやによつて、枕を高くは寐られませぬ。

大學　さりとは貴殿も臆病な、何をかれが致さうぞ、よし又主人の敵などゝ、徒黨なして參らうとも、喰ふや喰はずの鹽冶浪人、何程の事あらん、近頃以て廣言ながら、神影流の一流を極めし拙者が此腕で、皆殺しにしてくれん、必ずともにおあんじ無く、枕を高くお休みなされい。

ト腕をまくり見せる、平八思入あつて、

平八　それは千萬忝い、貴殿がお防ぎ下さらば、それを頼みに某は、枕を高く臥せるでござる。

ト此時下手より以前のおきみ、茶盆へ急須茶碗茶臺、ふた附の湯呑を載せ持出で來り、下手へ控へ茶碗へ茶を注ぎ、茶臺へのせ大學の前へ持行き、

きみ　お茶を召しあがりませ。（ト出す大學取つて、）

大學　これは〳〵忝い、能い香でござるわい。

ト此内おきみ蓋附の湯呑を平八の前へ出す、大學茶の香をかぎながらぐつとのんで、

あつゝゝ――、（トあつき思入にて、茶碗をはふり出す。）

きみ　お召へかゝりはいたしませぬか。

ト手拭で疊を拭ふ、大學は火傷をせし思入、平八は湯呑を手に取りあげ、

平八　火傷をなされは致さぬか。

大學　いや、さしての事もござらぬて。（ト指を吹いてゐる。平八茶を一と口呑んで、）

平八　湯茶は必ず熱きもの。

大學　や、

平八　其御油斷では。（ト湯呑の蓋をしやんとするを木の頭。）感心いたした。

ト平八せゝら笑ふ、大學いま／＼しき思入、謠の稽古張扇の音にてよろしく、

ひやうし　幕

七幕目

夜四ッ時　割下水小橋の場
東兩國楠屋の場

〔役名――大鷲文吾、小汐田又之丞、近藤源四郎、千崎彌五郎、楠屋十兵衛、楠屋のかつぎ五助、其他。〕

（割下水の場）――本舞臺三間の間、上下高足の二重、石垣の蹴込み、眞中に誂への土橋、後ろ南割下水を畫心に見たる雪の夜の遠見、左右藪疊、舞臺前上下屋敷の練塀にて見切り、平舞臺一面に浪布を敷き、二重より花道の下り際、開帳場の上り口、舞臺花道とも一面雪布を敷き、日覆より雪持の松の

釣枝、總て本所南割下水雪降り、夜の模樣よろしく。爰に前幕の近藤源四郎、着流し尻端折り、大小にて安下駄を穿き、番傘をさし立掛り居る、駕籠かきはげ熊、同くねこ虎の駕籠かき草鞋尻端折りにて、矢張り番傘を相合傘にさし、立掛り居る。此見得雪おろし、狸ばやしにて幕明く。

熊　もし旦那え、此まあ雪の降りますのに、只せえ寂しい本所のあの蛇山の明寺から、

虎　女の餓鬼まで一緒に連れ出し、もうかれこれ四つだといふに、何處へまあ逃げましたらう。

源四　一杯機嫌でぐつすりと、俺が寢たのを幸ひに、彼女が逃げた其先は、晝間仕懸けた北番場の、亭主の家と勘付いちやあ居るが、若しも夜道の事だから、そこらにうろついちやあ居ねえか、手分けをして搜してくれ。

熊　そりやあ承知でござりますが、まだ呑代にも有付かねえ内、お前さんに逃げられちやあ、わつちどもの立つ目がねえ。

虎　さうとも〳〵、手分けをして搜して上げますから、お約束の呑代を、爰でお貰ひ申したいものだ。

源四　べらぼうめ、俺も近藤源四郎だ、手前達に無駄骨を折らせて、逃げ隠れをする樣な、其樣卑怯な事はしねえ、錢や金にびりつかねえで、女の在處を搜してくれ。

熊　そりやあさうでもござりませうが、此寒いのに酒なしぢやあ、雪の中は凌げません。
虎　最初からお約束だ、そんなことを言はねえで、一杯づゝ呑ませておくんなせえ。
源四　まだ愚圖々々いつて居るか、いやいめえましい奴だ。（ト懐より金を二分出し、）さあ是れで呑むがいゝ。
熊　そりやあ有難うござります。（ト手に取り見て、）もし、こりやあたつた二分でござりますね。
源四　さうよ、一人前に一分づゝあつたら、一杯づゝ呑めるだらう。
熊　もし、これぢやあ約束が違ひませう、纏めた酒手を遣るといつて、
虎　たつた二分でお拂ひ箱とは、あんまり酷い相場違ひだ。
源四　はて、女せえ逃げなけりあ、どんなにでも酒手を出すが、玉を逃してしまつちやあ、二分遣るのもをしい位だ。
熊　それぢやアあの娘の在處が知れたら、纏めた酒手をおくんなせえ。
源四　そりやあ俺の胸にあるから、骨を折つて捜してくれ。
熊　さういふことなら少しも早く、お浪さんを連れて來て、
虎　褒美の金に有附きてえ。

兩人　さあ、出掛けようぢやあねえか。

ト右の鳴物にて、兩人は連立つて上手へはひる。源四郎思入あつて、

源四　とかうする內四つでもあらうか、夜の更けねえ內又之丞が浪宅へ押懸けて、一と談判やらかさうか。

ト舞臺を下りて花道へかゝる。此時上手の數疊を押し分け、前幕の又之丞着込み大小切緒の草鞋、上へ紙合羽を羽織り、塗笠を持ち出で、

又之　あいや源四郎どの、拙者が宅までおいでに及ばぬ、又之丞は是に居る。

ト前に出る、源四郎振り返り見て、

源四　おゝ、又之丞どの其處にござつたか。そりやあ丁度幸だ、どれ其處へ行つて談じようか。

ト是にて源四郎舞臺へ歸り、入替つて上手になる。

又之　して、拙者方へ何故に、御入來なさるゝ御所存だな。

源四　外でもござらぬ、今晩より身共が女房に致したる、お浪の在處が知れぬゆゑ、それでわざ〳〵此方の宅へ。

又之　いかにも浪は我家へ來り、汝に手籠めに遭うたるを、深くも恥らひ無念に思ひ、自殺致して相果

てたるわ。

源四　そんならお浪は、むゝ。（ト思入。）

又之　さすれば汝は妻の仇、爰で逢うたは優曇華の、花の手向けに佛の導き脱れぬ所と觀念なせ。

トきつとなる、源四郎思入あつて、

源四　これ〳〵又之丞、血迷つて何をいふのだ、愛想の盡きた女房ゆゑ、去狀書いてさつたといふから、去つたものなら貰はうと、さつきあれ程規定をして、俺が女房にしたお浪、兎や角う言はれる覺えはねえわい。

又之　其の去狀も女房より、再び我手に戻つたれば、汝が手にはあるまいがな。

ト是にて源四郎懷をさぐり見て、

源四　そんなら先刻お浪めが、去狀迄を持つてうせたか。（ト思入。）

又之　かくなる上は源四郎、最早脱れぬ妻の仇、覺悟極めて勝負を致せ。

トきつとなる、是れより誂への合方になり、

源四　いや、洒落くせえ覺悟呼はり、同じ赤穗の藩中だが、意氣地の無さに貧に迫り、喰ふや喰はずの瘦浪人、その日の煙も細腕で、此源四郎が討てるものか、國を出てから配分の金で榮耀をした果

が、一家親類強談で、借込む金で遊里へ通ひ、仕度い三昧して來た替り、膽も太けりや骨も太い己等が其身の錆刀で、斬れるものなら斬つて見ろ。

又之　放埒惰弱に身を持崩し、よしや筋骨太るとも、金鐵ならぬ汝が五體、忠義を磨く又之丞が、刀の切味見せてくれん。爰は處も割下水、心濁りし近藤が、底の見えすく惡巧み、今さし汐に小汐田が、淸き流れに生茂る、よしあし別けて妻の仇、やはか討たいで置くべきぞ。

源四　何を小癪な。

ト是より雪おろしはげしく、源四郎は番傘、又之丞は紙合羽を刎ね除け、刀を抜き、兩人ちよつと立廻つて左右に別れ、きつと見得。是より狸囃子、砧入りの合方になり、兩人土橋を遣ひ、面白き立廻り十分あつて、源四郎番傘を打落され、刀を抜いて立廻り、トヾ手負になり、よろしく立廻つて脇腹へ突込まれ、源四郎立身にて苦しむ、又之丞、源四郎の脇腹を抉りながらきつとなつて、

又之　妻の仇たる源四郎、今こそ思ひ知つたるか。

ト足をかけて止めをさす、ばた／＼になり、上手より前幕の彌五郎、着込み大小、切緒の草鞋、上へ紙合羽を着し、塗笠を冠り、手丸の提灯を持ち出來り、思はず又之丞に行當り、ぴつくりしてきつとなつて、

彌五　やあ、見れば人をばあやめし奴、此界隈を徘徊なす、正しく汝は物取ならん、いで一刀に斬下げくれん。

ト刀の柄へ手を掛けるを、又之丞きつと留めて、

又之　盗賊とのお目違ひは、御尤もにはござれども、全く以て左にあらず、何をか包まん某は。（ト言ひながら、彌五郎と顏見合せ、）や、貴殿は千崎彌五郎どの。

彌五　さいふ貴殿は小汐田氏。

又之　思ひがけない。

兩人　是はしたり。（ト兩人思入あつて、彌五郎、又之丞の樣子を見て、）

彌五　扨は先刻其許には、御眼病の御樣子なりしが、早や御本復めされしよな。

又之　お聞き下され、某も病後の惱み鳥目にて、實は今宵の討入も、ほとんと當惑致せし處、一人の娘が年度の產れに、我が眼病の藥となり、忽ち癒える此の兩眼。

彌五　それは何より大慶至極。先刻拙者其許を、お誘ひ申しに立寄りしが、御眼病の御樣子ゆゑ、會合いたす彼の方まで、御歩行とても御難儀ならんと、お迎ひに參りし所、計らず是にてお出合ひ申し、此上もなきよき手つがひ。

又之　いつに變らぬ貴殿の御厚志、千萬忝う存じまする。
彌五　して、其許には何故に、是なるものを殺められしぞ。
又之　此奴は不義士の列に入りし、人非人の源四郎、某妻が此奴めに辱めを受けたるとて、自殺致して相果てたれば、妻の仇たる源四郎、討取つたるは妻への手向け。
彌五　すりや、其許の御家内には、敵なき御最期召されしとな、其に付けても心地よき、源四郎めが此有樣、して此奴めが死骸わな。
又之　人目にかゝらぬ其内に、是なる流れへ水葬禮。
彌五　適れ御明智、片時も早く。
又之　いふにや及ぶ、まツこの通り。
ト源四郎の死骸を土橋より蹴落す、是にて水の音、水烟ぱつと立つ、又之丞以前脱ぎ捨たる紙合羽を手に取上げ、水中をきつと見て、
あゝ、惡の報いはたちまちに。（ト此時鈎鐘の四ツを打込む、彌五郎思入あつて）
彌五　めぐる時刻も丁度四つ。
又之　然らば直樣。（ト紙合羽を引かけるを道具替りの知らせ）

又之　御同伴致さう。
　　ト此模様本釣鐘、水の音にて道具廻る。

（楠屋の場）――本舞臺三間の間、少し跡へ下げて中足の二重かまちの蹴込、雪の積りし瓦葺の庇、上手前へ張り出して、一間の格子窓、腰通り板羽目、下手同じく格子窓、是へ、うどん、そば切りといふ行燈をかけ、此下手雪の積りし黒塀、正面紺地へ白く、楠屋と染拔きたる暖簾口、此上手まひら戸の中仕切のある戸棚、下の方板羽目、上手よき所に帳場格子などよろしく、二重の前へ幅の廣き床几二脚ほど並べ、舞臺花道とも一面に雪布を敷き、總て向ふ兩國楠屋の見世掛りよろしく、帳場格子の内に楠屋十兵衞そばやの亭主、羽織着流し、紺の前垂をしめ、帳合をして居る。此の見得雪おろし、四つの拍子木にて道具留る。

十兵　今打つたのはもう四つだが、三次も五助も何をして居るか、今にお客人が大勢あるのに、早く歸つてくれりやあいゝが。
　　トばた〳〵になり、花道より五助印半纏、股引、尻端折り、そばやの擔ぎにて下駄を手に持ち、跣足にて走り來り、直に舞臺へ來り、

五助　もし親方、大變だ、早く用心なさい〳〵。
十兵　手前は五助、用心しろとは。
五助　今割下水を通りますと、侍と侍が、ちよん〳〵切合つて居りました。
十兵　其奴あ飛んだ話だが物取か、意趣斬りか。
五助　何だか樣子は分りませんが、一人の侍が手疵を負つて、危つかしい樣子でござりましたが、もう今頃はやられましたらう。もし親方、早く見世をおしまひなさい。
十兵　馬鹿をいへ、割下水であつた事を、何も其樣に騷ぐにやあ及ばねえ、さうして貴樣は何の用で、割下水の方まで行つたのだ。
五助　いやもう惡い事は出來ないもので、垢離場の馴染が雪が降るので、吉田町に引込んで居るから、横網まで行つた序に、顏を見せに行つた處、今の一件に出逢ひましたが、人を殺した侍が、ひよつと此方へ來た時は、掛り合ひでござります、もう四つを打ちましたから、早く見世をおしまひなさい。
十兵　そりやあ不斷ならば雪も降るし、今方四つも鳴つたから、見世をしめて寐てしまふが、此間からのお約束で、今夜は俳諧の開き歸りのお客さまが此見世へ大勢連れで來る積りだ。蕎麥の仕込み

もしてあるし、前びろからのお約束だから、四つを打つても仕舞はれねえ。

五助　さういふことなら今の内に、早く來てくれゝばいゝが、今侍が斬られたのを、思ひ出してもぞつとします。（トがた〳〵顫へて居る。）

十兵　いや臆病な奴だなあ。

ト雪おろし合方になり、花道より大鷲文吾、袴大小下駄にて、風呂敷包みを斜に背負ひ、蛇の目の傘さし出來り、花道にて思入あつて、

文吾　はて風情ある景色かな、つら〳〵思へば我々が、此年月の艱難も、憂き事積るさがなりしが、埋もれし名も世に出でゝ、雪にすゝぐの聲あれば實に會稽のさいさきぢや。（ト思入あつて氣をかへ、）只今打ちしは四つ時ゆゑ、大望までは今一時、豫て約定致してあれば、あれなる楠屋の見世へ參り、同士の者を待合はさん。あ、ます〳〵今宵は積るわえ。（ト矢張合方にて舞臺へ來り、）御亭主、お見世でござるかな。（トずつと上手へ來る、五助、文吾を見て、）

五助　そりやこそ侍がやつて來た。（トぶる〳〵顫へる故、）

文吾　拙者が是へ參りしとて、何を其樣に驚くのぢや。（ト十兵衞前へ出て、）

十兵　これは斯樣でござります。只今使に出しました處、割下水の邊にて何か怖いものを見たと申し、

て、それでびく〳〵致して居ります。

文吾　いや左樣でござるか、こりや若い者、何も怖いことはない、咽喉が乾いてならぬから、湯を一杯呑ませてくりやれ。

五助　そりやこそ咽喉が乾くといへば、矢張り人を。

文吾　何と申す。

五助　いえ、此方のことでござります。（ト五助暖簾口へはひる、文吾床几へかけ）

文吾　いやなに御亭主、いまだ連中の人々は、一人も見えませぬかな。

十兵　へい、先刻お一人いらつしやいましたが、何方もお見えなされぬゆゑ、又出直して來ると仰つて、お歸りでござりました。

文吾　おゝ左樣でござるか、只今四つを打つたるゆゑ、もう追々に參るでござらう、差支へのなきやうお頼み申す。

十兵　いえもう、支度は先刻より、ちやんと致してござりますれば、すはと申せば何人前でも、即吟でさし上げまする。

文吾　いや、即吟とは面白いな。

十兵　卽吟と申しますれば、旦那樣に折入つて、お願ひがござりまする。

文吾　なに、折入つて賴みがあるとは。

十兵　へい、外の事でもござりませぬが、旦那樣方も今晩は、俳諧のお戻りだと申す事でござりますが私も不斷から、雜俳へ加はりまして、少々づゝもはんべりまするが、今度參つたちらしの題にほとんど困つて居りまするが、御風流のお力で、前句附の御卽吟をば、一句お願ひ申しまする。

文吾　扨は當家の御亭主には、前句附をなさるゝとか、それはよきお樂みでござる。

十兵　いやもう、下手の横好とやらで、雜俳仲間の是でも世話人、笠萬、呉風、芋輔、一聲、點者はみんな心安く、小梅に居りまする笑呂などは、友達でござりまして、見世へちらしを張出しましては、取次を致しますが、跡月の開卷に酷いめに打たれましたから、今度は敵討が致したいと、いろ／＼氣を揉んで居りまする、どうか手柄を致しまするやう、一句お願ひ申しまする。

文吾　なに、敵討が致したいとな。（ト思入。）

十兵　へい、どうか恥辱が雪ぎたうござりまする。

文吾　して、その題は何といふ題ぢや。

十兵　へい、此度の前句の題は「なんのその」と申す題でござります。

文吾　むゝ、「なんのその」はて勇ましい前句ぢやなう。

ト につたりと思入、爰へ暖簾口より五助盆へ茶碗を載せ持つて出で、

五助　へい、お湯を持つて參りました。

ト氣味惡さうに差出す、文吾茶碗を取りながら、考へることあつて、

文吾　「なんのその」（ト思はず大きくいふを、五助びつくりなし、）

五助　そりや始まつた。（ト狼狽へて暖簾口へかけ込む、文吾こなしあつて、）

文吾　御亭主、硯をお貸し下され。

十兵　へい／＼、畏りました。（ト掛硯を出し、）あゝこれ、硯の水が凍つてしまひました。

文吾　あいや、幸爰に湯がござる。（ト茶碗の湯を硯へ注ぎ、墨をすり懷紙を出して、さら／＼と認め、）
御亭主、是はどうぢやな。（トさし出す、十兵衞取つて見て、）

十兵　なんと申す句でござりまするな。

文吾　「なんのその、巖をも通す桑の弓」。（ト是を聞き十兵衞小膝をうち、）

十兵　いや、面白い附でござりまするな。是ではきつと敵討の本望が遂げられます。

文吾　敵が首尾よく討てようかな。

十兵　討てますとも、討てますとも、大丈夫請合でござりまする。〈ト是を聞き文吾悦ばしき思入にて、〉

文吾　はて、さいさきのよい。

十兵　えゝ。

文吾　いやさ、幸のよき題ぢやてなう。

　　ト雪おろし合方になり、下手より以前の又之丞、彌五郎出來り、文吾を見て、〉

兩人　子葉どの、お早いこと。〈ト文吾兩人を見て、〉

文吾　これは潮水どの、竹雄どの、先刻よりおいでをば、お待ち申して居りました。

　　ト是にて兩人床几へかけ、

又之　嘸かし左樣と存じましたが、計らざる椿事にて、思はぬ遲參、御容赦下されい。

彌五　して子葉どの御一人にて、未だ連中は相見えませぬかな。

文吾　拙者の是へ參らぬ先、先刻一人見えられしさうなが、連中が居らざるゆゑ、出直して參ると申して歸られたと申すこと、何は然れ御亭主には、蕎麥を是へ出して下されい。

十兵　へい〳〵、承知しました。〈ト奥へ向ひ、〉こりや五助、お三人前お出し申せ。

五助　はい〳〵畏りました。

ト暖簾口より五助、廣蓋へ蕎麥の蒸籠を載せ持ち出で來り、三人の中へ怖々ながら出す事よろしく、
文吾件の蕎麥を見て、

文吾　こりや、打ち立ての樣子ぢやな。

十兵　へい、只今打ちましたばかりでござりまする。

彌五　小汐田氏にも割下水にて。（ト思はずいふを、五助聞いて、）

五助　そりやこそ、いよ〳〵割下水だ。（ト驚いて暖簾口へ逃込む、是にて十兵衞も少し氣味惡き思入にて、）

十兵　そんならもしや割下水の。

又之　え〵。

十兵　いえ、お代りを持つて參りませう。（ト暖簾口へはひる、文吾あたりへ思入あつて、）

文吾　御兩所方へ密々にて、御覽に入れる此の一封、何卒御内見下されい。

ト懷中より女の文を出して見せる、又之丞取つて彌五郎と兩人にて開き見て、

又之　こりやこれ女の手跡にて、今宵の首尾を細々と、同士のものへ知らせの文面。

彌五　これをどうして其許には。

文吾　只今拙者かの方の、物見下を通行なせしに、蘭女どのより内々にて、送り越されし其の密書。

又之　まことに是れぞ我々が、時に取つての六韜三略。
文吾　譲る兵書も櫻井に、武名を殘す楠の、
又之　文字も暖簾に楠屋とは、
彌五　はて珍しき家名でござる。
　　　ト彌五郎、十兵衞が置いて行きし、前句附の端書へ目をつけ、
　　是に何やら書いたるものが。（ト取つてさし出す。）
文吾　それは唯今此家の主人が、前句附の題を出し、附けて呉れいと頼みしゆゑ、好める道に取あへず
　　楠屋の文字を石になぞらへ、一句致した拙者の卽吟。
又之　どれ、お見せ下されい。（ト又之丞取つて見て、）上の五文字は前句の題にて、「なんのその」と申す
　　下へ、「巖をも通す桑の弓。」
　　　ト讀む、彌五郎思入あつて、
彌五　「なんのその巖をも通す桑の弓」（ト讀む。文吾兩人に向ひ、）
文吾　御兩所、附けは如何でござるな。（ト是にて又之丞思入あつて、）
又之　まことに是れぞ五七五の、首尾とゝのひし此一句。

彌五　是れでは今度の敵討も。

ト思はず大きくいふ、よき程に暖簾口より以前の十兵衞出かゝり居て、此時前へ出て、

十兵　へい、勝に違ひはござりませぬ。（ト是にて、又之丞、彌五郎びつくりして、）

兩人　扨は密事を。（ト立上るを、）

文吾　あいや、彼が申すは。（ト兩人に腰をかけさせる木の頭）餘の儀でござる。

ト三人氣味合の思入、火の廻りの割竹の音、合方にてよろしく、

ひやうし　幕

八幕目

夜九ッ時

飯田町裏屋の場
九段牛ヶ淵の場
内山宅切腹の場

〔役名〕　高田郡三郎、小山田庄左衞門、八百屋元助、内山官左衞門、燗酒屋勘助、辻番の足輕權平、官左衞門娘お組、兵右衞門娘お雪、お雪の母おむつ、勘助女房お市其他。〕

（飯田町裏屋の場）――本舞臺夕七つ時の飯田町の世話場。よき所に二枚折屛風を立て此蔭に搔巻を掛け、小山田庄左衞門お雪寐てゐる。此見得雪おろし四つ竹の合方にて幕明く。と右の合方にて、かん酒屋女房お市、鄰の内より出で來る、雪ちら〳〵ふる。

お市　お丶又大層降つて來た、内の人はどうしたか、もう歸つて來さうなものだ、内の人が歸つて來たら一杯やつて寢ようと思つて、暮れると直に床を取り、辻番を入れて待つて居る内、ついとろ〳〵と寐てしまつたが、何も盜られやあしなかつたか。（卜門口から内を覗き、）え丶まあ、此間前垂無盡で當つたので、一昨日買つた本桐の下駄を、たつた一度履いて盜られてしまつた。ほんに油斷も隙もなりやあしない。お雪さん、おつかさんはまだお歸りでないかえ。

卜門口を叩く、是にてお雪起上り、

お雪　まだおつかさんは、歸りませぬわいなあ。

お市　もう歸つて來なさりさうなものだ。

お雪　お内のをぢさんは、お歸りなさんしたか。

お市　あの人もまだ歸りませんよ。

お雪　だいぶ遲うござんすな。

お市　又こんなむだを言つて、裏から何ぞ盗られやしないか。

　ト合方にてお市下手の門口へはひる、此時小山田庄左衛門目を覺し思入あつて、

小山　おゝ、いつの間にか日が暮れたな。

お雪　はい、暮れましてござります。

小山　熟酔なして寐忘れしが、暮れては直に行かねばならぬ、灯を早く付けてくりやれ。

お雪　はい／＼、只今つけますわいなあ。

　ト火打箱を探り取り、火を打ち附木へうつし、隅にある角行燈へ灯りを附ける、此内庄左衛門起上り帯を探り取りしめる、行燈へ灯を付けて兩人顔見合せ、間のわるき思入、誂の合方になり、

小山　もう何時だな。

お雪　さあ、何時でござりますか、つい私もとろ／＼と、おみあしをさすりながら。

小山　それでは其方も寐たと見えるな。

お雪　はい、しかもあなたと御一緒に。

小山　え。

　トぎつくり思入あつてお雪を見る、お雪恥かしき思入にて袖にて顔を隠す、庄左衛門扨はと思入あつて

小山　扨は心氣の勞れにて、思はぬ夢と思ひしが、酒興の上に前後を忘れ、
お雪　おみあしさする其手をば、引きよせられし嬉しさに、
小山　夢と思ひし戲れも、
お雪　まことゝなりし二世の緣、
小山　いかなる神が結びしか、
お雪　どうぞ見捨て下さりまするな。（ト庄左衞門に縋りつく、庄左衞門當惑の思入にて）
小山　これは飛んだことをいたした。
ト頭を押へてほつと思入、雪おろし合方にて、花道より母親おむつ傘をさし安提灯を提げ出來り、
むつ　思ひの外遲うなり、嘸娘が案じて居よう、小山田樣がござるなら、事無く濟んだ入譯を、おはなし申しお禮が言ひたい。（ト此せりふを言ひながら舞臺へ來り、）娘、今歸つたわいなう。
ト是にてお雪飛のき、門口へ來り、
お雪　おゝ母さん、お歸りなさんしたか、嘸お寒うござんしたらう。
むつ　いや〳〵内に居る程に、歩くは寒いものではない。
ト捨ぜりふにて足をぬぐひ内へはひろ。お雪傘提灯を片付ける、此内庄左衞門うつむきゐる。

お雪　さうしてあちらは、どうでござんした。

むつ　知つての通りの主人故、金はいらぬ娘をかへせと、取つてもつかぬ挨拶故、どうしようかと思つた所へ、丁度折よく町用掛りの地守さまがお出なされ、給金かへさば濟ましてやれと、お取扱ひ下すつたので、やう／＼そなたの埒があき、證文取つて歸つたれば、もう／＼案じることはない。

お雪　それは有難うござりまする、身儘になつて内に居れば、是からお前のお世話も出來、又其内には力になるお方が出來まいものでもない。（トちよつと庄左衛門へ思入あつて、）こんな嬉しいことはない。

むつ　是といふのも小山田さまのお情故、なんとお禮を申さうやら。

兩人　えゝ有難うござりまする。（ト兩人辭儀をなす。）

小山　何の些細なあの金子、禮を言ふには及ばぬが、心がゝりは今宵の時刻、何時なるかこなたは知らぬか。

むつ　はて、麹町に居ります内、四つの拍子木を聞きましたから、もう九つ近うござりませうか。

小山　え。（トびつくりなし、）最早九つ近いとか、こりや斯うしては居られぬわえ。

ト刀を持ち立掛かる。此の時九つの頭を打ちこむ。

お雪　丁度折よく聞える鐘、もしや四つではござりませぬか。

むつ　数をかぞへて御覧じませ。（ト是迄に捨鐘を打ちきる。）

小山　おゝ、今打ちしは、ありや捨がね。

お雪　是から先を。（ト九つの鐘を、お雪一い二うと指を折りかぞへ九つ打ちきる。）打ちきる数は。

小山　南無三九つ、思はぬ事にて遅刻なせしか。（ト刀を差し、赤合羽を取つて門口へ出るをお雪袖にすがり、）

お雪　いかなる御用か知らねども、血相かへて、こりや何處へ。

むつ　まあ／＼お待ちくださりませ。

小山　いや、猶豫ならざる一世の大事。

兩人　それぢやというて。

小山　えゝ留めだて致すな。

ト庄左衛門振拂つて紙合羽を引掛け、きつとなり、寺がねにて、逸散に花道へはひる。

お雪　あゝもし、待つて下さりませ。（トつか／＼と行き花道にて轉ぶ、おむつ門口から、）

むつ　娘、怪我をしはせぬか。（トお雪是に構はず花道へ追かけてはひる、早き合方にて、）えゝこれあぶな

い、待たぬかいの。（ト駈出さうとして門口の敷居へ躓き、ばつたり倒れ、）あいた〻〻。
ト此時鄰から以前のお市出來り、
お市　こりやあぶない、轉びなすつたのか。
むつ　お〻お市さん、内の娘が〳〵。
お市　おゆきさんがどうしたのだ。
むつ　最前ござつた小山田さまと。
お市　お〻あのお侍と逃げたのか、何のあの子もおいそれな、たつた一度で逃げるとは。
むつ　いえ〳〵さうぢやないわいの。（ト立ちあがらうとしてどうとなり、）あいた〻〻。
お市　何だかさつぱり分らない、急かずとゆつくり。
トおむつの背中を叩く、是を道具替りの知らせ、
むつ　あいた〻〻。
お市　話してお聞かせ。
ト背中をさする、此見得雪おろし合方にて道具廻る。

（牛ヶ淵の場）――本舞臺三間の間常足の二重、草土手の蹴込み、上下雪の積りし樹木の張物にて見きり、二重の前一面に御堀の波布を敷き、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、後下手よりはすに柵矢來、うしろ樹木の書割、上手曲つて丸く御堀に土手松の這ひ出し、漏斗の遠見、總て牛ヶ淵邊の體、一杯に雪布を敷き、よろしく誂への合方、雪おろし調練の鳴物にて道具止る、と雪おろし誂への合方、右の鳴物を冠せ、花道より以前の庄左衛門走り出で來る、跡よりお雪追掛け來り、すがり付くを振拂ふ。此内雪しきりに降る。庄左衛門赤合羽をぬぐ、是にてお雪赤合羽を持つた儘どうとなる小山田舞臺へ來る、お雪合羽を持つた儘追掛け來て合羽を捨てすがりつく。庄左衛門突きのけ行かうとして息の切れるこなし。お雪も息がきれ口のきけぬ思入にてすがり留める。此内雪を遣ひ兩人體をくづし面白き立廻りよろしくあつて、とゞ庄左衛門振拂ふ。お雪はたぢ／＼となるを蹴る。お雪ウムと下手へ倒れる。庄左衛門もどうとなり、かづらも亂れ息の切れる思入にて、雪を取つて口へ入れ喉をうるほし、ほつと思入。誂への合方雪おろし、雪しきりに降る。庄左衛門思入あつて、

小山　あゝあやまつた／＼、今朝高輪泉岳寺で、大星殿や原どのが、酒は性根を亂す故、其身を守りつつしめと、御異見ありしが有難く、身にしみ渡る雪風の、寒さに惣身も冷えこゞえ、きれた草鞋の覺えなく、式臺かりて履直す、辻に居つたる權平に、もつきり酒を勸められ、唾の出る程に呑

みたさも、爰ぞと思ひ辛抱せしが、癪のなやみに藥とて、たつた一杯呑んだが因果、二杯三杯四五杯と、罪を重ねし茶碗酒、つひには前後も白川夜舟、夢現とも辨へず、是なる娘と一つ夜着、わりなく枕交せしは、我身で我身に愛想が盡き、遲刻ながらも駈付けて、言譯なさんと思ひしが爰から道は弓と弦、いくら矢たけに逸つても、ねらひし的の外れたる上は、此場において切腹なし、不覺を取りし言譯なさん。

ト合方きつぱりとなる、庄左衞門上手へ赤合羽を敷き、其上にて肌をぬぎ身拵へなし差添を取上げ拔かうとする、此時お雪心付き、庄左衞門を見てびつくりなし、

お雪　や、こりや何故に死なしやんすのぢや。（トすがり留める。）

小山　さあ朋輩共に約束せし、其刻限におくれし故、死なねば此身の武士が立たぬ。

お雪　其刻限に後れしも、元はといへば我身故、死なで叶はぬことならば、私もともに死にませう。

小山　志しは忝いが、其方は母のある身の上、我と共々死ぬならば、母の歎きはいかばかり、夢かうつゝの契でも、枕かはせば我女房、死んだる跡を弔ひくりやれ。

お雪　いえ／＼私も共々に、どうぞ殺して下さりませ。

小山　いゝやそなたは殺されぬ、此場で某相果てなば、女に魂奪はれしと、不忠の上に物笑ひ、我

手にかけては殺されぬ。

お雪　いえ〳〵死なねばなりませぬ。

小山　達つて申さば最期の邪魔、手出しせぬやう縛めようか。

お雪　さあ、それは。

小山　思ひ止つて回向をなすか。

お雪　さあ、

小山　手出しをするか。

お雪　さあ、

小山　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

小山　死する命を生きのばゝり、死後の追善致してくりやれ。

お雪　とはいへどうも。

小山　もう此上は是非に及ばぬ。（ト留めるお雪を振拂ひ、ちよつと立廻つて膝に敷き、下緒を取つて手をしばる。）

お雪　どうでも一緒に死なねばならぬ、早う殺して下さんせいなあ。

小山　えゝ面倒なッ（ト手拭にて猿轡をかけ、）ちつとも早く。

と差添を抜き、腹へ突立てようとする、此時上手にて、

權平　あゝ醉つた〳〵、べらぼうに醉つた。

ト是にて庄左衞門お雪へ赤合羽をかけ、差添を後へ隱し、袖にて顏をかくす、上手より權平ひよろ〳〵と出で來り、

あゝ醉つた〳〵。さつき貰つた一分の金で、一人でごんぺいやつたらば、足はひよろ〳〵氣は浮浮、こんな面白い事はねえ。

ト ひよろ〳〵と花道へ行く。庄左衞門跡を見送り窺ひ居る。權平手を叩きながら都々逸をうたふ。

野暮な屋敷の大小捨てゝ、腰も身輕な町住居。こりや〳〵。あゝいゝ心持だ。

ト ひよろ〳〵と花道へはひる。庄左衞門跡を見送り、腹へ突立てようとして、死兼る思入二三度あつて、

小山　今權平が我と知らず、唄ひし唱歌は此場の辻占、徒黨の者へ義理を立て、爰で命を捨てた所が、徒黨を洩れゝば本の犬死、手前勝手を言ふやうだが、今此おれが死んだなら、娘も跡で死ぬだらう、さすれば色故大事を捨て、死んだなぞといはれては命を捨て物笑ひ、とても人に笑はれるなら、死なぬ方が徳用だ、一味の者の諸拂ひに、大星殿から預かつた、金の殘りも百四五十、是を

元手にしたならば、樂に浮世が暮されよう。(ト財布の金を出し思入。) こりやうつかりと死なれぬわえ。

ト庄左衞門變心の思入、此時赤合羽をはれのけ、お雪の猿ぐつわ落ちて、

お雪　そんなら死ぬるお覺悟を、思ひ留つて下さりまするか。

小山　むゝ。(トお雪下緒を解いて、) 今辻占に聞いた小唄の、野暮な屋敷の大小捨てゝ、(ト言ひながら、大小を下緒にて結び、前の濠へ打込む、どんと水音。水の花ばつと立つ。)

お雪　やゝ、こりや何故に大小を。

小山　さあ、腰も身輕に今日からは、おぬしを女房に町家の住ひ。

お雪　そりやあの、ほんまに。

小山　商法立てゝ暮すが當世。

お雪　えゝ嬉しうござんす。

トお雪庄左衞門にすがる、此時下手より燗酒屋勘助荷をかつぎ出で來り、よき所にて、

勘助　おでんかん酒、(ト呼ぶ。)

小山　おゝ、いゝ所へかん酒や。

勘助　や、あなたはさつきの旦那さま。

お雪　おまへは鄰の勘助さん。

勘助　旦那、一杯上げませうか。

小山　おゝ、熱くしてくりやれ。

勘助　畏りました。

ト合方にて、勘助荷の中より一升德利を出し、朝顏の茶碗へ注いで盆にのせて出す、庄左衞門ぐつと一息にのみ、胸につかへむせる、お雪背中をさする、庄左衞門ぢつと思入あつて、

小山　とはいへ一味の朋友が、嘸や不義士と。

お雪　えゝ、（ト庄左衞門ホロリと思入あつて氣をかへ、）

小山　まゝよ。（トお雪を引よせ、左の手で抱きしめるを木のかしら。）もう一ぺえくれ。

ト右の手で茶碗を出す、勘助ハイと德利を取つて立掛る、庄左衞門お雪をぢつと見て、色に迷ひし思入れ
おゆきは嬉しきこなしにて縋りつく。此模様よろしく「九つ半でござい」といふ時廻りの聲にて、

ひやうし　幕

ト雪おろしにてつなぎ、直に引つかへす。

（內山宅の場）――本舞臺下の方四尺程の屋根附の門、潛り戶、柱に內山官左衞門といふ表札、是より上手一面に黑塀、後三間の手摺附の二階家、上手三尺の戶袋、向う上手一間の床の間、鶴龜の掛物、續いて違ひ棚、地袋戶棚、此下一間の襖二枚明立て、前側一面に手摺附、門冠りに見越しの松上の方雀形の六枚屛風立廻し、內に絹夜具枕二つ、此傍に丸行燈銚子杯臺を置き、總て組屋敷宅の體、舞臺花道とも雪布、屋體を前へ出して宜しく飾り、雪おろし、床の三重にて幕明く。

〽降り積る雪に照りそふ月の影、空も心も雲晴れて、結ぶ妹背の祝言も、他人交ずの內祝ひ、杯すんで床入に、嬉しさこはさ恥かしさ、うぢつくお組が氣を汲んで、慣れしお賤がお杉役、

ト此內襖をあけ、お組振袖しごき好みの拵へ、お賤中働の女中の拵へにて、お組の手を取り出て來り、下手にて、

しづ　ほんに町家の者がよく申しました、案じるより產むが易いと、おこがれなされた高田樣と、今日御婚禮にならうとは、思ひがけないことでござりまするなあ。

お組　それ故私やもしひよつと、夢ではないかと今もつて、ほんまのやうには思はれぬわいな。

しづ　是こそ申すも旦那さまの、お計らひでござりまするからは、聟さまとお睦まじう、はやくお子さまをお產みなされて、愛らしいお初孫のお顏を、お目に掛けるのが旦那さまへ、何よりの御孝行でござります。

お組　常々早う聟を取り、孫を見たいとおつしやつた故、さうなつたらば父さまが、嘸お喜びであらうわいな。（ト恥かしき思入にて、）私一人で行くのかいの。

しづ　ゑゝも、困つたお孃さまでござりますなあ。

〽物に慣れたる介添の賤が屛風を押しひらけば、内には高田がとつおいつ、心ならざる祝言に、さしうつむいて居たりける。

まだあなたは、御寢なりませぬか。

郡三　お組殿が參るのを、最前から待つてをつた。

しづ　さやうでござりましたか。さあ〳〵お孃さま、貴方のおいでをお待兼ね、早うお傍へおいでなされませいな。

〽お組はおしづに突きやられ、はつと赧らむ顏そむけ、灯影を厭ひおもはゆげに、

トおしづお組を郡三郞の傍へ突きやる、お組郡三郞に行當り、嬉しき思入にて、もじ〳〵とこなしあ

つて、

お組 不束者でござります故、所詮お氣には入りますまいが、是から何卒幾久しく、お目掛けられて下さりませ。

郡三 何が扨縁あつて、斯く婚姻を取結べば、盡未來迄わが女房。

お組 そりや御眞實でござりまするか。

郡三 文字に書いても侍はうらおもて無き者なれば、何しに虚言を申さうぞ、此世はおろか先の世迄も。

お組 妻になされて下さりますか。

郡三 さはさりながら飛花落葉、老少不定の世の中に。（トうれひの思入。）

お組 え。

郡三 さあ。死すとも一蓮托生なるぞ。

お組 えゝお嬉しうぞんじまする。（トお組嬉しき思入にて膝にすがる。）

しづ それ御覧じませお孃さま、案じるよりは、（トお組の顔を見る、お組につこりして、）

お組 なんにも言はぬわいの。

しづ　早うおやすみなされませ。

〽氣轉氣輕に首尾見合せ、かたへの屛風建廻し、ほつと一息次の間より、樣子窺ふ官左衞門、

ト　おしづ下手へ來る、下手の襖を明け、官左衞門袴一本差にて出來り、

官左　おしづ。
しづ　旦那さま。
官左　首尾はどうぢや。
しづ　お聟さまも御機嫌よろしく、今お孃さまと御一緒に、お休みなされてござります。
官左　すりや聟殿には機嫌もよく、娘と共に寐たと申すか。やれ〳〵それで安堵致した。
しづ　今朝からのお心遣ひ、嘸お勞れなされましたらう、私が起きて居りますから、貴方はお休みなされませ。
官左　いやもう、無理往生の祝言故、どうかと案じ居つたるが、二人一緒に寐たとは嬉しい、其方も嘸かし草臥れたであらう、身共は起きて居る程に、かまはず先へ寐たがよい。
しづ　いえ〳〵私は、またお臺所を片付けねばなりませぬ故、貴方お休みなされませ。

宮左 いや寐ようと思へど年寄は、嬉しいに付け悲しいに付け、目がさえて寐られぬわえ。

〽心嬉しく悦ぶ折から、風のまに〳〵打ひゞく、太鼓の音に耳そばだて、

ト宮左衛門嬉しき思入、此時かすめて風の音、花道の揚幕にて樂太鼓のどん〳〵を打つ、宮左衛門聞耳立て思入あつて、

おしづ、あの太鼓は何であらうな。

しづ 淨心寺のお開帳へ、夜參りではござりませぬか。

宮左 いや〳〵法華宗の太鼓ではない、世間もひつそと子の刻過、腹にひゞくは武邊の太鼓。

しづ それならお組で調練の、夜稽古でがなござりませう。

宮左 いかさま、左樣な事であらう。

しづ まあ〳〵お部屋へいらつしやりませ。

宮左 むゝ、炬燵へ參つて讀書なさうか。

〽腹にこたへる太鼓の響、心ならねど宮左衛門、おしづが勸めに打ちつれてともに下家へ、

ト宮左衛門太鼓の音に心を殘して、下手の襖を明けはひる、おしづ屛風の内へ思入あつて、同じく下手へはひる。

〽入る影を疾しや遲しと郡三郎、屛風の内より拔足さし足、角の柱にとりついて目ざす方角打見やり、

ト此内郡三郎屛風の内よりさしぞへを持ち、忍び足にて出て來り、二階の手摺へ足を踏かけ、角の柱へ取付き、向うを見て床の合方になり、

郡三　寒風はげしく降積みし、雪も凍りてさえ渡る、月下にひゞくあの太鼓、最早敵地へ討入りて、大星氏が味方を指揮なす、山鹿流の陣太鼓、一棟高き無縁寺の、裏手に當つて火影の見えるは、正しく敵高野の屋敷、徒黨の人數はわづかなれど、必死を極めし忠臣義士、天のめぐみに本望を、遂ぐるは夜半をよも過ぎじ。

〽最早舅が注進なし、足利どのゝ討手來るとも、敵を討ちし跡ならば、味方の者の妨げならず、既に先刻自殺なさんと、覺悟極めし一命を、今宵にせまる討入りの、妨させじと生きながらへ、聟入なせしも郡三郎、味方の爲とはいひながら神明掛けて誓ひたる、誓紙を反故になすのみか、列を洩れたる不義士の汚名、すゝぐは雪の此の高樓、

〽諸肌ぬいで拔きはなす、刃は軒のつらゝより、光するどき業物を、弓手の脇へがばと突立

て、引廻さんとなす折しも、屛風押しのけ駈け出るお組、それと見るよりすがりつき、
　ト此内郡三郎よろしく思入あつて肌をぬぎ、さしぞへを左の脇腹へ突立てる。此時屛風の内よりお組
　出で是を見てびつくりなし、走りよつて刃を持ちし手にすがり付き、

お組　こりや何故の御生害、こりやまあ、どうしよう何としようぞいなあ。（トよろしく愁ひのこなし。）

〽止むる娘の聲聞き付け、常事ならじと官左衛門、おしづと共に走り出で、
　トお組、郡三郎へすがり留める、ばた／＼になり、下手より官左衛門おしづ出來り、此體を見てびつ
　くりなし、

官左　やゝ、こりや聟殿には名を惜しみ、身の言譯に一命捨てしか。

しづ　早まつた事なされましたなあ。

〽いへば手負は威儀あらため、（ト郡三郎思入あつて、）

郡三　いや切腹なすは豫ての覺悟、早まつた死は致さぬぞ。

お組　豫て覺悟とおつしやるは、どういふ事か其譯を、お聞かせなされてくださりませ。

〽すがり歎けば吐息をつき、（ト竹笛入の合方になり、郡三郎思入あつて、）

郡三　事あたらしく言はずとも、其方も定めし聞いたであらう、亡君の恨みを報ぜんと、大星殿を始と

して、徒黨を結びし四十餘人、數ならねども某も列に加はる義黨の人、既に今宵討入と、事極まりし期に臨み、兄元助が一大事を、迂濶に口外なせし故、舅殿より足利家へ申達されなば去年より、思ひ〳〵に姿をやつし、附けねらひたる味方の辛苦も、水の泡故列を洩れ、

〽不義士の汚名身に負ひて、聟入なせし郡三郎、敵地へ味方が討入れば、冥土の魁いさぎよく、切腹なさんと豫ての覺悟、さはしらずしてお組が悅び、三々九度の杯も、此世の別れと呑む苦しさ、心ならずも床入なし、子の刻過ぎて打ちたるは、山鹿流の陣太鼓にて、討入なしたる正しき合圖に、是迄なりと、身の言譯に此自殺、よしなき我を聟に取り、お組を始め舅殿、御苦勞掛けるも前生からの、約束事とおゆるし下され。

〽義を立通す高田が自殺、扨はさうかと取すがる、お組が心くみわけて、おしづも共に泣伏せば、官左衞門は齒がみをなし、

官左　今更言つて返らねど、世にも稀なる郡三郎に、あたら命を捨てさせしも、此官左衞門がなせし業義理ある娘が日頃の願ひ、叶へて遣りたいばつかりに、包み隱す一大事を申達なすと此方を脅し今宵をすごさず聟入させ、忠義を捨てさすのみならず、不義士の汚名身に負はせ、切腹させし舅が無慈悲、忠義一途な聟どのへ、顏を合はすも面目ない、親が手を下け詫びねばならぬ、返す〳〵

も殘念至極。ゆるして下され、これ聟殿。

〽殘念至極と官左衞門、拳を握りはら／＼と、悔み涙にくれければ、泣入る娘も顏を上げ、

ト官左衞門よろしく述懷の思入れ、お組思入あつて、

お組　これといふのも此のくみが、郡三郎さまにこがれ／＼故、子の可愛さに父さまが、申達なすとおつしやつて、無理に私の聟がねに、お貰ひなされて下された、其お情が仇となり、夫に命捨てさせて、親に歎を掛けるのも、元はといへば私故、お詫は此身が誰よりも、先へいはねばなりませぬ。どうぞ許して下さりませ。（ト辭儀をなし、）申譯には此場にて。

〽此身も共にと言ひさして、父のさし添手に掛くれば、是はとおしづが抱きとめ、

トお組思入あつて官左衞門のさし添へ手を掛けるをおしづ留めて、

しづ　死なうとお覺悟なされしは、御尤もではござりますが、あなたがお命捨てたとて、お聟さまのお命が助かる事でもござりませねば、死なずと仕樣がござりませう、まあ／＼待つて下さりませ。

〽まあ／＼待つてと止むれば、手負も苦しき息をつき、

郡三　其志しは忝いが、本望遂げても遂げいでも、徒黨の者は一命を、捨つるは豫て身の覺悟、益無き我へ義理立てに、そなたが死なば子を思ふ、舅殿の心へそむく、たとひ一日半日でも夫婦と

なるは定まる緣、死する命をながらへて、我亡き跡を弔ひくりやれ。

しづ　あれ、御やさしい聟さまの、あのお詞に隨うて、死ぬるお命生きのばゝり、七日〱の御回向を御念頃になされませ。

お組　いえ〱たとひ何とおつしやつても、死なねば女子の操が立たぬ。〽是が町家の娘なら、生きながらへて居られうが、たらはぬながらも武士のたね、夫を殺して此儘に、どうまあ生きて居られうぞ。どうぞ放してくりやいなう。（トよろしくあつて、）

宮左　おゝ夫へ女子の操を立て、死なうといふは武士の娘、適れ健氣な所存ながら、そちが命を捨てさせまいと、無理所望せし郡三郎、其聟故にそちを殺さば、實の親たる先代の宮左衛門殿へ言譯なし、たつて自殺致し度くば、我も共々切腹なさうか。

お組　さあそれは。

宮左　思ひとまるか。

お組　さあ、

宮左　切腹なさうか。

お組　さあ、

官左　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

官左　思ひ留るであらうがな。

お組　いえ〳〵、親のお詞でも、こればつかりは、

〽こればつかりはゆるしてと、いふに手負は聞兼ねて、

ト此内お組官左衞門よろしく思入あつて、郡三郎きつとなり、

郡三　我子を思ふ慈悲心の、親の詞を用ゐずば、我も夫婦の緣を切らうか。

お組　さあそれは、

郡三　死ぬる命をながらへて、義理ある親に苦勞を掛けず、我亡き跡を弔ふが、死ぬるにまさる女子の操、早まつた死を致すまいぞ。

お組　すりや死ぬるにも死なれませぬか、はあゝゝ。(ト泣伏す。)

〽思ひせまつてとつおいつ、迷ふ心を取直し、持つたる刃にふッつりと、みどりの黑髮切りおとせば、

ト お組思入あつて、さしぞへをぬき、髪の毛をふッつりときる。

しづ　あゝ、こりや何故にお嬢さまには。

お組　夫婦の縁を切るといふ、お詞故に是非なくも、生ながらへる上からは、ふたゝび夫を持たぬ氣に切つて捨てたる此の黑髪、身は墨染に姿をかへ、後世を弔ふ心故、尼になされて下さりませ。

宮左　誰しも惜しむ黑髪を、ふッつり切りし娘が貞節、望に任せて尼となさん。

お組　すりや、おゆるしなされて下さりまするか、有難うござりまする。

ト 兩手を合せて伏拜めば、宮左衞門は歎息なし、

宮左　返す〴〵も世に稀なる、忠臣義士の聟を殺し、貞心孝女の娘を尼になすも、是みな我誤り、宮左衞門もよい年で、思案はなきかと同役に、思はるゝのが面目ない、今日迄上の勤めにも、人に非難を言はれざる宮左衞門が明日からは、後指を指さるゝ悔しさ、我胸中を三人とも、推量してくれいやい。

ト 今は日頃の我も折れて、淚にくるれば人々も、愁ひにしづむ其折から、此家を目がけ駈來る元助、

ト 宮左衞門よろしく思入、どん〳〵ばた〳〵になり花道より元助、肌ぬぎ繩だすきにて蜜柑籠を小脇

に抱へ出で來る、跡より中間丸助菖蒲革股立にて六尺棒を持ち出來り、
〽跡を追來る高野の家來、汝は鹽冶にかたんの者、覺悟ひろげと棒おつとり、打つて掛るを
身をかはし、突のけ蹴のけ馳せ來り、
ト花道にてちよつと立廻り、舞臺へ來り二階を見あげ、

元助 郡三郎は何れに居る、未だ一命捨てざるか。
〽呼はる聲に高樓より、手負は下を見おろして、
ト元助は丸助を投げのける、郡三郎手負の思入にて柱へ取付き、手摺へ踏かけ下を見て、

郡三 左いふは兄の元助どのか。

元助 最早自殺いたせしか。

郡三 おゝ、身の言ひわけに切腹なしたり。

官左 合點行かざる元助殿、聟が自殺を知つたは如何に。

元助 最前弟が聟入に、跡へ殘せし書置にて、自殺致すを存じました。

官左 存じ居つたら其時に、何故止めてはくれざるぞ。

お組 血すぢの兄御でありながら、

しづ　さりとはつれない元助どの。

元助　さあ、止めようと存ぜしかど、思ひ詰めたる鐵石心、とまらぬ事を知つたる故、其書置を所持なして、大星樣へまつかうと、弟が忠義の大略を、御物語いたしたり。

郡三　むゝ、よくぞ語つて下すつた、それにて思ひ置くことなし。して〳〵敵地の樣子は如何に。

〽いふに元助小躍なし、

ト大小入りの合方になり、元助思入あつて、

元助　入江町の九つを聞いて直さま駈付け見れば、まだ討入りの其前故、こなたの書置お渡し申し、跡へ下つて待つ折柄、大星さまが打立てる大鼓を合圖に裏表、

丸助　何を、（トかゝるを立廻つて、）

元助　門をかけやで打ちこはし、どつと喚いて込入れば、狼狽へ騷ぐ家中の者、

官左　おゝ不意の夜討に度を失ひ、さこそ狼狽いたせしならん。

郡三　して付人はさゝへずや。

元助　さればそれより御殿を目掛け、切入る所に打つて出し、小林平八清水大學、味方もあぐむ必死の働。（ト元助、丸助を相手に立廻つて投げのけ、蜜柑籠をとつて、）爰ぞ我等が高名と、氣轉紀の國みか

んの息つぎ、皮は卽座の目つぶしに、敵を目がけて打付け〳〵、思はぬ手柄をいたしたり。

郡三 して〳〵敵は仕留めしか。

元助 未だ敵の行方知れず、右往左往に戰ふ最中、されども忠義の一心に、やがて敵の首をとり、〳〵勝鬨上るは瞬く内、氣遣ひあるなと元助が、汗を流して物語れば、手負はにつこと打笑みて、

ト此内元助丸助を相手に立廻りよろしくあつて、皮は卽座の目つぶしに打付け〳〵といふ件、蜜柑籠より蜜柑を出し土間へばら〳〵となげる事、よろしくあつて郡三郎快き思入にて、

郡三 いまだ師直討ちとらずば、是より敵地へおもむきて、花々しき働なさん。

官左 すりや聟殿には、是より敵地へ。

元助 しかし急所のその深手。

郡三 五體は爰に終るとも、一心凝りし我魂魄、敵地へおもむき一と働き。（トきつとなる。）

官左 ほゝお勇ましき其の一言、死するもくつせぬ大丈夫。

ト此時時計のぜんまいの音して、半時を大きく一つ打つ、是にて郡三郎苦痛の思入れ。

郡三 最早近づく此身の知死期。

お組　そんならこれが。
元助　此世の別れ。（ト上を見あげ愁ひの思入れ。）
郡三　いでや、敵地へおもむかん。
〽腹一文字に引廻せば、不思議や虚空へ飛行く魂魄、最期の念ぞ、
ト郡三郎手摺へふみかけ立身にて引廻す。よき程に仕かけにて腹ばつくりとなり、血しほ流れ、うつとりとなる、官左衛門鯉口をくつろげ、しやんと鍔音をさせる、是にて郡三郎きつとなり、杜卷にて向うをきつと見る。ドロ〳〵にて誂への人魂相引にて向うへ引いて取る、官左衛門惜しきものだといふ思入、お組おしづはすがり泣く。平舞臺の元助は丸助と立廻り、上を見あげ皆々引ばりよろしく。三重ドロ〳〵にて、

幕

九幕目

夜八ッ時　高野邸討入の場
明七ッ時　炭部屋本望の場

〔役名――小林平八、高の師直、大星由良之助、清水大學、竹林唯七、千崎彌五郎、原郷右衛門、堀部

彌兵衛、門番半左衛門、矢間重太郎。高野の妾お蘭の方、實は山岡覺兵衛女おせつ、大星力彌、茶道春齋等。」

（討入の場）――本舞臺三間の間上手屋根附の門、下手冠木門、兩方とも誂への名札あり、上下間とも黑塀、見越の松の樹木、うしろ張物にて長屋の屋根を見せ、上の方大臣柱より屋敷長屋白窓の前側下の方下座の前黑塀にて見切り、總て雪の積りし道具、舞臺花道とも雪布を敷き、總て高野屋敷内の體。どん／＼ばた／＼にて、幕あく。と右の鳴物にて、思ひ／＼に家中の仕出し、「夜討だ／＼」と入違ひ上下へはひる。矢張右の鳴物にて下手より家中女房おまめ懷姙の拵へ、細帶にて腹を結へ、下女お草行燈を提げ、手をとり若黨馬九郎白髮かづら、袴一本差しにおまめの腹を押へながら出來り、

くさ　もし御新造さま、どこへ逃げたらようござりませう。

まめ　何處へ逃げてよいか、私にも知れぬわいの。

馬九　なんでも逃げねばいけませぬ、無常門の脇の塀を外して、お鄰り屋敷へにげませう。

まめ　先達てから小林さまが、鹽冶浪士が徒黨を結んで、敵討に來ようも知れぬと、御用心をなされたが、お妾のお蘭どのに、殿さまがうつゝをぬかし、御本家のお下屋敷へお引きうつりなさらぬゆゑ、たうとうこんな事になつた。

くさ　あのまあちよん／＼切合ひます、音をお聞きなされませ、こはいことではござりませぬか。
馬九　しかし女と年寄は、逃せ／＼といふ聲が、聞えますからまだしも仕合せ。
くさ　夜討の者に出合はぬ內、少しも早く逃げませう。（トお草手を取つてせり立てる。）
まめ　あゝこれ、其樣にせきやつても、足がすくんで逃げられぬわいの。
馬九　そりや御懷姙のせゐでござりませうが、いつ御臨月でござります。
まめ　いつ所ぢやない、今月ぢや。
馬九　それは大變、此騷ぎに、もしお生れはなされますまいか。
まめ　どうやら蟲のかぶりやうが、生れようかも知れぬわいなう。
くさ　氣をしつかりとお持ちなされませ、今生れるとおつしやつても、前町へとりあげ婆ァを呼びに行くこともなりませぬ。
馬九　ぢゝいは居れど間にあはず、あす迄御辛抱なされませ。
まめ　幾ら辛抱したうても、出物はれ物所嫌はず。あゝもう、どうか生れさうだ／＼。（ト下に居る。）
くさ　なんぼ所嫌はずとて、外でお產は出來ませぬ。
馬九　お湯を沸すに都合もよければ、お廏迄おいでなされませ。

ト手を取つて引立てる、おまめ腹を押へて。

まめ　あゝこれ、其様に引張つてくれるな。もう直に生れさうだわいの。

兩人　もそつと我慢をなされませ。

ト馬九郎手を引き、おくさ腰を抱き上手へ行掛ける、此時上手より磯貝重三、中垣傳藏、角野十平次雁木四天、素網大小わらぢ襷鉢巻にて槍を持ち出で來り、

磯貝　こりや〳〵、待て〳〵。（ト立かゝり留める、と三人びつくりなして下に居る。）

三人　どうぞおゆるし下されませ。

磯貝　其方達は家中のものか。

まめ　はい、私は御當家で馬役を勤めまする、手築大之丞が妻、おまめと申しますもの。

くさ　又私はおくさと申します、別當の娘でござります。

角野　して附添ひ居る其方は。

馬九　へい〳〵、私事は馬九郎と申します、譜代の親仁でござります。

まめ　どうぞお情に命ばかりは。

三人　お助けなされて下さりませ。

中垣　氣遣ひ致すな、汝等が決して命はとらぬから、

磯貝　師直殿の隱れがを存じ居らば、をしへくれよ。

馬九　何れへお逃げなされたか、一向に存じませぬ。

中垣　一つ屋敷に居りながら、何存ぜぬ事があらう、隱し立を致すが最後、不便ながらも命はないぞ

　　ト槍を突付ける、三人びつくりしふるへながら、

まめ　いえ〳〵、ほんまに存じませぬ、知つてさへ居りますなら、親であらうが主人であらうが、

くさ　此身の命にやかへられませぬ、決して隱しは致しませぬから、

馬九　どうぞお助け下されませ。

角野　まだ〳〵左樣なことを申すか。

中垣　是非に及ばぬ此上は、片ッ端から芋刺だぞ。（ト又立掛るを、）

まめ　あゝこれ、必ずはやまつた事なされますな。（トおまめ腹の痛む思入にて、）あゝ苦しや、もう生れさうだ〳〵。

くさ　それは大變でございます。

磯貝　こりや〳〵、いかゞ致したのだ。

馬九 今月が臨月で、今生れます所でござります。
磯貝 すりやそれなる女が臨月とか。
角野 往來にて嘸かし難儀であらう、早く宿所へ召連れまゐれ。
馬九 へい〳〵、有難うござります。
くさ さあ〳〵御新造樣、お歩きなされませ。
まめ もうどうやら出かゝつて來たやうで、歩く事がならぬわいの。
中垣 こりや〳〵親仁、おぶつて連れ參れ。
馬九 どう致して私に。
中垣 詞をかへすか、芋ざしだぞ。（ト槍をさし付ける。）
馬九 あゝおぶひます〳〵。
まめ あゝくるしや〳〵。（ト馬九郎におぶさる。）
馬九 貴方より私がくるしや〳〵。（トおまめを背負つて上の方へはひり、ばつたり轉ぶ、赤子笛）
くさ そりやこそ產れた。（ト跡から追掛けてはひる、三人あたりへ思入、どん〳〵にて）
中垣 いかに御兩所、今に敵のしれざるは、豫てしつらふ拔道へ、落うせたに相違ない。

磯貝　此上は、天井床下迄を詮議なし、七つ迄に知れざれば、豫て申合せし如く。

角野　一つ所にいさぎよく死ぬるは味方の覺悟ながら、神明まことを照し給へば、しれざる事はよもあらじ、

中垣　今一應家敷のくま〴〵、

角野　草を分けて詮議なさん。（ト磯貝向うへ思入あつて、）

磯貝　あれ〳〵御兩所御覽なされい、向うの方よりいどみ戰ひ、是へござるは千崎氏。

中垣　負けずおとらず切合ふは、腕前すぐれし者と見ゆる。

角野　是へ參らば左右より、はさみうちに致してくれん。

磯貝　御兩所ござれ。

ト三人上手へはひる、誂への合方どん〳〵ばた〳〵にて、花道より淸水大學尻端折り、肌ぬぎ襷鉢卷にて刀をふりあげ、千崎彌五郎、雁木の四天素網草鞋、大小襷鉢卷にて大學に槍をさし付けながら出來り、花道にてちよつと立廻り舞臺へ來り、花々しく立廻つて兩人きつと見得、

千崎　やあ、最前より見る所、衆に勝れし汝の腕前、定めし名ある者ならん、斯く言ふ我は鹽冶浪人千崎彌五郎と申す者、汝を討取り手柄となせば、其名をなのつて勝負なせ。

大學　やあ小癪なる其の一言、名乘るも益なき事ながら、一刀の其下に討つて捨てる鹽冶浪人、冥土の土產に言つて聞かせる、豫て鹽冶浪人ども、主人を敵とねらふ風聞、もし討入らば其時は、死人の山を築かんと、待設けたる某は、神影流の一流極めし、淸水大學正作なるわ。
千崎　扨は汝は大學よな、死人の山をきづくとあらば、生けてはおかぬ覺悟なせ。
大學　覺悟呼はり傍痛い、討たるゝものなら討つて見よ。
千崎　いふにや及ぶ。
大學　何を小癪な。

トどん〳〵誂への合方にて淸水、千崎兩人立廻りよろしくある、此時以前の磯貝、中垣、角野出で千崎共四人槍にて突いてかゝる、淸水是を相手にはげしき立廻りあつて、淸水四人に突いてかゝられあしらひかれてたぢ〳〵と跡へ下り、上手の門へおし付けられ、扉うしろへひらいて淸水內へはひる、四人つゞいてはひらうとする途端、扉ぴつしやり締る、四人殘念なる思入。

千崎　音に聞えし淸水大學、討ちもらせし上からは、いざ此塀を乘りこして。(と立かゝるを)
磯貝　あいやお待ちなされい千崎氏、たとひ名高き者にもせよ、かれは枝葉の淸水大學、
中垣　味方の者が去年より、寢食忘れて付けねらふ敵といふは只一人、

角野　今に合圖の知らせなきは、行方しれぬと覺えたり。
千崎　討ちもらせしは殘念ながら、もはや八つに程近し、猶豫致す所にあらず。
磯貝　やしきのすみ／＼、
四人　詮議なさん。

ト囁き合ひ、上下へはひる、矢張右の合方にて上手の門を明け清水顔を出す、中垣槍を突きかける、又びつしやりしめる、中垣下に居て窺ふ、下手門をあけ清水顔を出す、磯貝槍を突ッかけて、又是にて内へはひり、門の戸をしめる、中垣、磯貝、塀際へ身をよせる、眞中の見越の松へ清水出て向うを見込む、兩人槍を突出す、清水刀をくはへ槍の柄にすがりひらりと舞臺へ飛下り、立廻つて兩人の槍を卷落す、中垣、磯貝つか／＼と行き組付く、清水兩人を相手に雪を遣ひ立廻り、角野下手へ出て雪を取つて目つぶしに打ち、三人あやふくなる所へ千崎出て槍を突掛け、早き合方にてはげしき立廻りあつて、千崎槍にて清水を突く、是にてたぢ／＼と跡へ下り正面の塀へ寄掛る所を、千崎塀迄突通す、清水もがくを中垣槍を取て又塀へ突込む、清水口惜しき思入にて、

大學　ちえゝ高の知れたる浪人めらと、見侮つて不覺を取りしか、思へば／＼口惜しい。
千崎　はて心地よき、（ト槍をこぢあげ、）

千崎　事共ぢやなあ。
ト清入槍の柄をとらへ、無念の思入れ、皆々ひつぱりよろしくどん〳〵にて道具廻る。

（廣間の場）――本舞臺一面の平舞臺。向う銀地に桐の紋散しの襖、上下折廻し同じく紋ぢらしの襖、所所誂への蠟燭をさし、よき所に大衝立、花道の揚幕へ杉戸を出し、總て高野屋敷廣間の體。どん〳〵にて道具留る。とどん〳〵、合方ばた〳〵にて、花道より袴もゝ立の侍四人、拔身にて逃げて出て來る、跡より矢間重太郎雁木の四天素綱大小襷鉢巻草鞋、義士の拵へにて誂への槍を持ち追掛け出で來り、花道にてちよつと立廻り、舞臺へ來り、四人を相手によろしく立廻つて、上の方へ追込む此時八つの時計鳴る。重太郎思入あつて、

重太　今打つ時計は最早八つ、七つ迄に敵の在所、知れざる時は去年より、積る苦心も水の泡、今宵の雪ともろ共に、はか無く消ゆる義黨の面々、死ぬるも生きるも今一時、奥へ踏込み詮議なさん。
ト思入あつて槍を搔込み行かうとする、此時奥より茶道春齋、後鉢巻肌ぬぎ襷にて刀を持ち出で來り、重太郎の前へ立ふさがり、

春齋　やあ夜討に入りし鹽冶浪人、奥の間へは通さぬぞ。（ト手を開いて留める、重太郎見て、）

重太　留立て致すを何者と、見れば年端も行かぬ小坊主、汝如きの命はとらぬ、妨げ致さず早く逃げよ。

春齋　いや〳〵何で逃げようぞ、今宵夜詰の當番にて、御殿に詰めし上からは、命限り敵をふせぎ、叶はぬ時は死ぬ覺悟。

重太　はて適れなる所存ながら、まだ年行かぬ其方が、逃げのびたりとも恥辱にならず、怪我せぬ内に逃げよ〳〵。

春齋　我をいたはり逃げよとは、お情厚きお詞ながら、主人の大事を餘所になし、卑怯未練に逃げませうぞ。

重太　おゝ逃げぬと申すは感心なれど、我々今宵討入つて、ねらふ敵は師直殿、外に恨むる者なければ刃向ふ者は是非に及ばず、味方の邪魔故打つて捨つれど、逃げる者には目はかけぬ、逃げよと申さばとく〳〵逃げよ。

春齋　たとひ何やう仰しやつても、逃げては武士の名義が立たぬ、達て逃げよと仰しやれば、お手向ひを致しますから、我をば討つてお通りなされい。

重太　實に尤もなる一言ながら、汝を討つて通られるか。

春齋　しからば跡へお歸りなさるか。

重太　何故跡へ歸られうぞ。

春齋　お歸りなくば勝負致さん。（ト切つて掛るを槍にて受留め、）

重太　はて、適れな心ぢやなあ。

ト兩人立廻り助けようとあしらふ。春齋附入る故是非無く刀を卷落す。春齋取らうとしてあやまつて脇腹を突き、どうとなる。

やゝ、こりや手を負はせしか。

春齋　最早さゝゆる事叶はぬ、何れへなりと。（ト奥へ行けといふ思入。）

重太　命を捨て我を通す、大人も及ばぬ茶道が振舞、成人なさば一廉の名高き武士になる可きを、殘念なこと致したり。（トうれひの思入、春齋苦しきこなし。）長く苦痛をさするも不便、いつそのことに。（ト春齋へとゞめを刺し氣をかへ、）思はぬ事にて暫時のひま入り。

ト後へ侍一人出で、

侍　浪士め覺悟。（ト切つて掛るを身をかはし一と突につく。）

重太　片時も早く。（ト槍を引き見事にぽんとかへる、）おゝさうだ。

ト槍をかいこんで奥へはひる。やはりどん〳〵ばた〳〵にて向うより小林平八郎稽古着、まち高袴、上へ模様もの丶女小袖を引かけ、大小血に染みし白布にて足を結へ、拔身にて出て來り、花道にて跡先へ思入あつて、

平八　鹽冶浪士が復讐のきざしある事察せし故、數度御諫言申せしが、素性知れざるお蘭に溺れ、只一言もお用ゐなく、既に十三日のお引移り延引せし故亂入され、首尾よく豫ての拔道より、君公落ちのび給ひしか、心許無き今宵の危急、今更いつて返らねど、とくにもお蘭を殺害なさば、か丶る事にもなるまじきを、殘念な事致したり、是より御殿に踏み留まり、刀の目釘のつゞくだけ、防戰なして討死なさん。（ト此時上手にてばた〳〵と人音する故、平八思入あつて、）人音するは浪士共か、小蔭へ忍んで打つて捨てん。

ト思入あつて下手大衝立の蔭へ隱れる。ばた〳〵になり茶道竹齋着流し一本差、お蘭着流し袱紗帶姿の拵へ、是を竹齋手を取り出來る、お蘭ふり拂つて、

お蘭　こりや竹齋殿には其樣に、何を狼狽なさんすのぢや。

竹齋　是がうろたへずに居られませうか、鹽冶浪人が討入つて女子供の容赦無く、見えがゝりに殺します、早くお逃げなされませ。

お蘭　私は兎もあれ御前さまの、お行方が知れませぬが、御別條はござりませぬか。

竹齋　其儀はお案じなされまするな、決して御別條はござりませぬ。

お蘭　それでは首尾よく何れへか、お立退きなされましたか。

竹齋　豫て鹽冶浪人が敵討の取沙汰ある故、我々共油斷無く、用意致し居つたれど、次第にそれもうすらぎて油斷なせしは味方の誤り、はからず今宵討入られ、狼狽騒ぎて思はぬ不覺、しかし辰巳の拔道へ、御前樣には落延び給ひ、いか程彼等がさがすとも、滅多に知れる氣遣ひなし。

お蘭　すりや兼々の望みも叶はず。

竹齋　何とおつしやります。

お蘭　さあ、兼々御用意遊ばせし、其拔道より落延び給ふは、御運のつよい御前さま、何よりお嬉しうございますわいなあ。（トお蘭思入。）

竹齋　御前樣に御別條なければ、あなたもお怪我なされぬ内、早くお逃げなされませ。

お蘭　女子供に怪我さすなと、徒黨を制す鹽冶浪人、刃向ひ立さへ致さねば怪我する事もあるまいから私は御殿を逃げぬわいの。

竹齋　左樣ではござりませうが、有樣は私がかういふ騒ぎを幸ひに、あなたと二人で手に手をとり、道

行が致したいのぢや。さあ〳〵、早うお逃げなされ〳〵。(トせり立てる。)

お蘭 何やう其方が言やつても、私は御殿を放れぬから、其方は早う逃げたがよい。

竹齋 私一人で逃げませうなら、疾に裏の犬くゞりから、前町へ逃出します、道行が致したい故、兎やかうと申すのぢや。

お蘭 えゝ時もあらうに此中で、てんがうしやると許さぬぞ。(トきつとなる。)

竹齋 軍の中でも女を犯すは、名將勇士に儘ある事、古きためしに我も習つて。

ト竹齋お蘭に抱付くを、ふり拂つて手をねぢあげ、

お蘭 又しても〳〵、手出ししやると生けては置かぬぞ。(ト突きはなす、竹齋起上り)

竹齋 あいた〳〵、女に似合はぬ今の手の内、我喰物にはむづかしい、怪我せぬ内に犬くゞりから。

お蘭 四つ這にして逃げたがよい。

竹齋 とはいへ此儘。(ト側へ來る。)

お蘭 又てんがうをしやるのか。

竹齋 どれ、尻尾を卷いて逃出しませう。

ト竹齋思入あつて下手へはひる、お蘭ぢつと思入あつて、

お蘭　扨は敵は運強くも、拔道より逃げのびしか。（ト合方になり、）去年殿樣御最期より、大星さまを初めとし、敵を討たんと徒黨を結び、夫山岡覺兵衞も其人數に加はりしが、不幸にして病死なし息を引取る際迄も、本望遂げぬが無念なと、言はれし故にどうぞして、夫の替りに忠義を立て度く傳手を求めて高野家へ操を捨てゝ妾奉公、首尾よく屋敷の樣子を探り、千崎殿が前町に、小間物渡世をなさるゝ故、櫛簪の註文と、人目を忍んで内通なし、今宵も他出なき事を、大鷲殿へお知らせ申し、手引なしたる甲斐もなく、八つの時計も過ぎたるに、今に敵の知れぬと言ふは神も佛もないことか、親にわかれ子に別れ、幾世の艱難苦勞せし、忠義の程を思しめし、何卒本望遂げるやう、力を添へてたびたまへ。

ト お蘭よろしく思入あつて手を合せて拜む、以前より衝立の蔭に平八窺ひ居て、扨はといふ思入、お蘭思はずふりかへり、平八と顏見合せびつくりなし。

お蘭　や、平八さまか。

平八　よくも鹽冶の浪人めらを、屋敷へ手引致したな。

お蘭　そんなら、今の樣子をば。

平八　殘らず小蔭で聞いて居た。

お蘭　聞かれし上は。(トお蘭隱し持つたる懷劔を拔掛けるを、平八要を取つて引倒し、)

平八　疾より汝は曲者と、推量なせしが案に違はず、鹽冶の家來であつたよな。

お蘭　いかにも女子の操を破り、現在敵の妾となり、屋敷の樣子を告げ知らせ、浪士の手引致せしは、推量通り鹽冶の家來、山岡覺兵衞の妻なるぞ。(ト平八無念の思入にて、)

平八　知らぬ事は是非なけれど、正しく鹽冶の間者なりと、推量せし故我君へ、再三お諫め申したれど御採用無きばかりに、浪士共を手引されしか。上杉公の御下館へお引移りの延引も、汝に迷はせ給ふ故、疾に汝を殺害しなば、君の御身も御安泰、打捨て置きしは平八が、是一生の身の誤り、千萬悔いても返らぬこと、今となつては汝が五體を、八つ裂にしてもあきたらぬ。えゝ殘念な事致したり。(ト平八お蘭をむごく突はなす、お蘭思入あつて、)

お蘭　欺かれしが口惜しくば、此身を殺して腹を癒られよ、屋敷の樣子委しく認め、手引なしたる上からは、元より死ぬる覺悟の此身、命はさら〳〵惜しみはせぬ、殺して恨みを晴らして下され。

平八　言ふにや及ぶ某が、間者と知つて打捨て置き、かゝる大事になつたる悔しさ、なぶり殺しにしてくれん。

お蘭　間者に入りしもお主へ忠義、武士の道を辨へなば、なぶり殺しに殺さずとも、只一と討に殺して

下され。

平八　いゝや、身をひしびしほに切り刻まねば、主人をだませし腹が癒ぬ。

お蘭　僞り騙るもお主の爲、忠義の道を辨へずば、こなたもとも〴〵冥土の道連れ。

　　　トお蘭短刀をかまへる。

平八　えゝ、おのれらが手にあふ平八ならず、及ばぬ事だわ。

お蘭　何を小癪な。

　　　ト誂への早めたる合方、どん〳〵にてお蘭短刀で拂はうさする平八足で留め、平八刀を拔きふり上げる、お蘭短刀を差つけ、兩人立廻る、お蘭短刀を打落され鼻紙を取つて平八に打付ける、是にて鼻紙ぱつと散り平八切兼れるをお蘭衝立の蔭へ隱れ、是を小楯に兩人立廻り、トゞお蘭あやふくなる、ばた〳〵になり花道より竹林唯七、雁木四天素網大小草鞋、拔身にて走り出で來り、花道にて此體を見てツカ〳〵と舞臺へ來り、

唯七　やあ、おせつどのではないか。

お蘭　さういふ聲は唯七殿か。

唯七　こやつ身共が手柄に貰つた。

平八　邪魔立て致すな。

ト拂ひのけて兩人きつと見得、大小の鳴物になり、はげしき立廻りよろしくあり、お蘭簪ぬいてエイと手裏劔に打つ、平八額へ當りし心にて、あつと言つて額を押へ、油紅にて疵附く、是より平八受太刀になり、兩人立廻りながら上手へはひる。跡にお蘭思入あつて、

お蘭　武術勝れし小林ゆゑ、唯七殿にお怪我無きやう、眉間へ打ちし手裏劍の、手疵にどうやらよわりし樣子、首尾よく平八討果せ、唯七殿の手柄になるやう、何卒したいものぢやわいなあ。

トお蘭きづかふ思入れ、奥より以前の重太郎師直を尋ぬる思入にて槍を下げて出て來る、お蘭上手へ行かうとする、重太郎槍の石突で裾をとめ、

重太　こりや〳〵女、師直殿の行方を知らぬか。

お蘭　えゝ、さういふ聲は、矢間どのか。

重太　おゝこなたは山岡覺兵衛殿の、御内室にてあつたるか。

お蘭　行方をお尋ねなさるゝは、未だ敵が知れませぬか。

重太　豫て此方の知らせ故、二重壁を打こぼち、上り縁の近道を隈無くさがせしが、何れへ隠れ忍びしか、今に敵の在所知れず、大星殿御親子初め、我々共に至る迄、七つ迄に討得ずば、是迄浪士の

者共が、千辛萬苦も水の泡、此場を去らず一同に、切腹致す所存でござる。

お蘭　すりや敵の知れざる其時は、一味の方は同じ座に、御切腹をなさるゝとか、今宵は茶の湯の催しに、他出無き事知つたる故、お知らせ申せし甲斐も無く、御本望を遂げ給はず、もし御生害になつたらば、悔しいことでござりまする。（ト悔しき思入）

重太　死するは豫ての覺悟故、さら〳〵命はをしまねど、斯討入つて本望とげず、切腹なさば末代迄、恥辱となるが殘念至極。（ト同じく無念の思入）

お蘭　今宵は雪に心をゆるし、一つ臥床にあつたる故、どなたかおいでなされたら、お手引なさんと思ふ内、夜詰の者がうろたへて燈火消して闇となり、其間に隱れ忍びし故、爰ぞと思ふくま〴〵を共々尋ねさがせしが、知れぬはまたも此外に、隱れ忍ぶ所があつてか。

重太　わづかな屋敷の四方より、手わけをなして討入りたれば、地中に道があらば知らず、家中に逃げる通路はなきに、何れへ其身を隱せしか。

お蘭　最早今宵も八つ時過ぎ、七つといふても程近し、もう半時が生死の境。

重太　いかなる事で天道が、まことを照し給はぬか、主君の仇を報ぜんと、義を結びたる徒黨のもの。

お蘭　長々浪々なす内に、夫の爲に身を責れば、又妻故に死する者あり。

重太　親に別れ子にわかれ、四十餘人が艱難に、袖を濡らさぬ日とてもなく。
お蘭　君のおうらみ晴らさんと。
重太　思ふ心を神佛の。
お蘭　お助けなきはよく〳〵に。
重太　武運に盡きし鹽冶浪人。
お蘭　世にもはかない。
兩人　身の上ぢやなあ。（ト兩人よろしく思入、此時樂太鼓にて引上の太鼓を打つ。）
重太　あの太鼓は大星氏が、人數を集める合圖の太鼓。
お蘭　人數をおまとめなさるゝは、敵をお討ちなされしか。
重太　但しは七つ近き故切腹をなす知らせなるか。
お蘭　もしも行方が知れざれば、最早辰巳の拔道と、茶道が言ひし詞のはし、爰にて辰巳に當る方を、
御詮議なされて御覽じませ。
重太　それぞ何よりよき手懸り、
お蘭　とはいへそれも知れざる時は、

重太　是今生のお暇乞。
お蘭　お名殘惜しくも、
重太　お別れ申す。
ト重太郎氣をかへ、きつとなり、早き合方、右のどん〳〵にて槍をかい込み逸散に花道へはひろ、お蘭思入あつて、
お蘭　ても勇ましき矢間氏、首尾よう敵をおさがし下され。（ト向うへ思入、後へ以前の竹齋出で）
竹齋　よくも辰巳の拔道を、浪士へ注進さつしやつたな。
お蘭　其拔道を知らせしも、お主の敵が討ちたい故。
竹齋　鹽冶の家來と聞くからは、色氣を捨て、生けては置かれぬ。（ト切つて掛るを立ちまはつて、）
お蘭　よい所へ血祭り坊主、おのれが命は貰うたぞ。
竹齋　小癪なことを。
ト大小入りにどん〳〵を冠せ、をかしみの立廻りよろしくあつて、お蘭見事首を打落す、竹齋衝立の前へ倒れる、仕掛にて切首衝立の上へ出る、お蘭是を見て脇差の血をふるふ、此見得よろしくどんどんにて道具廻る。

（庭中の場）――本舞臺三間の間眞中に九尺程の石橋、此左右池の心、柵にて見切り、一面に水布を張り上下雪の積りし樹木にて見切り、日覆より松の釣枝、向う打ぬき灯入り、奥庭の遠見、舞臺花道とも雪布を敷き、よろしくどん〳〵にて道具止る。と誂への合方、どん〳〵ばた〳〵にて花道より以前の平八、唯七切結び立廻りながら出來り、直に舞臺へ來り、石橋を遣ひ立廻りよろしくあつて雪にすべり、上下へどうとなり、雪にこたえる思入れ、兩人息をつき又刀を取つて立上り、竹笛入の合方になり、石橋を遣ひいろ〳〵あつて、ト唯七雪にすべり池の中へ落ちる、どんと水音なし、水の花ぱつと散る、平八橋の上より池の中を見込み思入あつて、

平八　雪にすべつて水中へ、落ちた浪士は濡鼠、屍も凍る八寒の、地獄落しに逢つたも同然、上り來らば忽ちに、此平八が只一と打ち。

ト水の音して池より唯七、水入かづらになり、顏を出す、平八見て、

おのれ浪士め、覺悟せよ。

ト平八刀を振り上げきつと見得、此時上手より織部彌次兵衞、雁木の四天素網注附大小草鞋、義士の拵へにて短き槍を持ち出で來り、

彌次　汝は小林平八ならずや、池中に落ちしを討取るは、近頃以て卑怯なり。
平八　むゝ、卑怯呼はり奇怪至極、おのれも鹽冶の浪士よな。
彌次　見忘れたるか某は、鹽冶の舊臣織部彌次兵衞。
平八　いつぞや柳生の道場で、出逢ひし織部彌次兵衞なるか。
彌次　爰で出合ふは會稽の、
平八　此大雪に年寄の、入らぬ腕立止しにいたせ。
彌次　年はとつても覺えの槍先。
平八　なんと。
彌次　うけられるなら受けて見よ。
平八　言ふにや及ぶ。

ト又誂への合方どん〳〵にて平八、彌次兵衞立廻り。此内下手池の中より唯七刀をくはへ。下手へ上り、刀を雪へさし四天をしぼりきつと見得、平八、彌次兵衞橋の上にて一時の見得、大小入りの鳴物に替り唯七、平八へ切つてかゝる。是にて平八さし添をぬき兩刀にて立廻り、三人からんでよろしくあつて、彌次兵衞息の切れる思入、唯七は凍える思入、早野宗右衞門、中垣傳藏拔身にて出で平八へか

かろ、是を相手に平八花道へ行き立廻り、唯七花道へ行き又立廻つて舞臺へくる、彌次兵衛、始終隙を窺ふ思入にて槍を持ち、あちこちと廻り平八の足を突く、平八たぢ〳〵となる所を唯七脇腹へ突込む、平八刀を落し立身にてくるしむ、唯七刀をぬく、平八立つた儘居る、彌次兵衛槍にて足をかく、平八ばつたり倒るゝ、唯七乘つかゝりとゞめをさす、彌次兵衛紐の附きし扇をひらき、

彌次　ほゝう、あつぱれ。

ト扇がうとして雪にすべり、槍をつくを木のかしら、唯七ほつと思入、彌次兵衛扇にてあふぐ、どんどんカケリにて

幕

トどん〳〵にてつなぎ、直に引きかへす。

(炭部屋の場)――本舞臺上の方に九尺の炭部屋、前側戸を立てあり、雪の積りし平屋根、下の方丸物の車井戸、繩釣瓶、上下黒塀にて見切り、向う舞臺前に稻荷の宮、土藏、掃除門の書割、奥深に飾り、雪の積りし松の釣枝よろしく、どん〳〵にて幕あく。と矢張どん〳〵にて可笑みの仕出し上下より出で、入違ひにはひろ、と床の淨瑠璃になる。

〽右往左往に家中の者共狼狽へ騷ぐ其中へ、雪を蹴立て逃來る小者、やれ待て暫しと聲を

掛け、追ひ來る矢間重太郎、

トどん／＼ばた／＼にて、若黨幸內袴一本差にて逃げて出で來り、花道へばつたり轉ぶ、ばた／＼にて前幕の重太郎槍をかい込み出來り、幸內起上り逃げようとするを、

重太　こりや／＼逃げるに及ばぬ、汝等如きの命はとらぬぞ。

幸內　なに命はお取りなされませぬとか、それは有難うござりまする。

重太　其替り高野殿の在所を其方存じをらば、包み隱さず敎へてくりやれ。

幸內　存じてさへ居りますなら、お敎へ申しますけれど、まつたく拙者は存じませぬ。

重太　すりや眞以て存ぜぬとか。

幸內　命に拘はりまする故、何しに嘘をつきませう。

重太　しからば當家で辰巳に當るは、何れなるか存じをるか。

幸內　向うの井戸を御殿にて、辰巳の井戸と申しまする。

重太　すりや、あれなる井戸が辰巳とな。

幸內　どうぞお助け下さりませ。

重太　おゝ助け遣はす、早くゆけ。

幸內　え丶有難うございまする。

〽命助かり嬉しさに、足もしどろに立歸る、矢間は井筒を目當に來り、

ト幸內嬉しき思入にて花道へ引かへしはひる。重太郎は舞臺へ來り思入あつて、

重太　井筒は辰巳が吉方と、豫て聞いたる方位の敎へ、扨はあれなる土藏の內か、但しは是なる雜小屋なるか、二重壁の廊下より、爰へ落ちしに疑ひなし。

〽心に肯きためらふ所へ、息をばかりに駈來る唯七、はつたと行合ひ聲を掛け、

ト重太郎思案の思入、ばた〱にて前幕の唯七出て來り重太郎へ行當り双方びつくりして跡へ下り、

唯七　山、

重太　川。（トしらせに付き灯入の月出で、）

唯七　矢間氏か。

重太　竹林殿か。

唯七　して、敵の行方は、いかに。

〽あたり窺ひ囁けば、

ト重太郎、唯七に囁く。

唯七　むゝ、すりや辰巳にあたる此所に。
重太　隱れ忍ぶと覺えたり。（ト此時本釣鐘の七つを打つ。）
唯七　やゝ、あの鐘は。
重太　ありや、淺草寺の七つの鐘。
唯七　最早夜あけにわづか一時。
重太　此半時が生死の境。（ト炭部屋へ思入、此時内にてばつたりと音する。）
重太　内にて、今の物音は。
唯七　此の雜小屋にうたがひなし。

〽勇み進んで雜小屋の、戸をこぢはなせば南無三と、躍り出でたる高野の家來、有無をも言はず切りかゝれば、心得たりと竹林が、拔く手も見せず切倒す、矢間は槍を打ちしごき、積みかさねたる炭俵の、間を突けば手ごたへなし、穗先を見れば血しほのしたゝり、

ト此内文句の通り唯七戸を引はなす、内より袴もゝ立の侍拔身にて出で、切つてかゝる、唯七拔合せ立まはつて切倒す、重太郎は槍をしごいて炭俵の間を突き、穗先を見て思入。

重太　穗先に血潮のしたゝるは、俵の蔭に忍ぶ者あり。

唯七　いで、此所へ引出しくれん、
〽かたへの俵をはねのければ、隠れがたなく投出す雜木、唯七焦つて飛んで入り、敵と白髪の師直が、衿がみ取つて引出し、
ト唯七積重ねたる炭俵を取りのける、此時内より薪を投り出す、唯七是を拂ひのけ内へ入る、師直茶の着附、白の下着好みの拵へにて短刀をさし、唯七に引立てられて出で來る、師直拂ひのけきつと思入、重太郎見て、
重太　此雜小屋に忍びし其方、尋ねる敵にひとしき年齡、
唯七　御身が高野師直殿か。
師直　いゝや、尋ぬる敵にあらず。
兩人　して、其方は何者なるぞ。
師直　扶持放されの鹽冶浪人、汝等如きに名乘らうや。
重太　名乘らぬ上は助け置かれぬ。
唯七　討つて捨てるぞ、覺悟なせ。
師直　覺悟呼はり傍いたい。

兩人　何をこしやくな。

〽切つてかゝれば拔合せ・上段下段丁々〳〵、打合ふ刃音こだまにひゞき、いどみあらそふ三人が、蹴立つる雪は散亂なし、岩打つ浪に異ならず、受けつ流しつ戰ひしが、矢間が鋭き切先に、肩口切られてたぢろぐ所を、水もたまらず唯七が、首討落せば取りあげて、

ト重太郎、唯七切つてかゝる、師直拔合せ三人立廻りよろしくあつて、重太郎一と刀切る、是にて師直どうとなり、下に居る、唯七後からえゝと首を落す、誂への切首出る重太郎取上見て、

重太　年恰好は似たれども、つひに面を見ざる我々、正しく敵と言ひがたし。

ト此内唯七死體の衣類を見て、

唯七　下着に白を着せしは、家中の者とも思はれず、もしや是が師直どのか。

重太　面に付きし血しほを洗ひ、存ぜし者に目利させん。

〽幸ひ是に車井戸、水汲み上げて打洗ひ、

ト兩人水を汲み首を洗ひ、とくと見て、

唯七　額に去年の古疵あれば、師直殿に疑ひなけれど、

重太　我々共は覺えぬ面體、目利なければ知れがたし。

唯七　何にもせよ、大星殿へ。

重太　此場の樣子をお知らせ申さん。

〽用意の呼子吹きたつれば、豫ての合圖大星父子、一味の武士も諸共に、笛をしるべに馳せ集り、

ト重太郎呼子を吹く、小鼓のあしらひになり上手より大星由良之助、打裂羽織野袴大小草鞋、同じく力彌やはり野袴ぶつさきの拵へ、跡より大勢黑四天鷹木大小草鞋義士の拵へ磯貝重三誂への太鼓を持ち、皆々槍刀を持ち附添ひ出來り、

由良　今吹立つる合圖の呼子に、陽の調子を發せしは、味方の吉事と覺えたり。

力彌　たづぬる怨敵師直殿の、行方知れしか。

重太　いかにも、只今我々兩人、山岡殿の妻女お節殿の敎により、計らず討ちたる此の首級。

唯七　額に古き疵あるは師直殿と思へども、しかと面體存ぜねば、

兩人　いざ、お目利下さるべし。

〽首さし出せば、打見やり、

ト唯七切首を出す、由良之助是を見て、

由良　何さま眉間に疵あれば、師直殿と思へども、某とても國詰故、武州侯の面をしらず、
力彌　是に集る義黨の方々、見知りし方はござらぬか。
磯貝　我々共も存じ申さぬ。
由良　しからば最前搦め置きし、門番人を是へ呼出し、首級の目利致させん。
力彌　左樣ござらば門番人を。
中垣　我々參つて召連參らん。

〽折しもこなたに聲あつて、

ト下手より、

千崎　其足輕は拙者めが、只今それへ。

〽言ふ聲諸共千崎が、半左衞門を伴ひ出で、

ト下手より前幕の千崎彌五郞、菖蒲革足輕裝の半左衞門へ、繩を掛け引立て出來り、

門番人半左衞門、召連れましてござりまする。（ト下手へ引据る。）
由良　竹林殿にはあの者に、其の首級を見せられよ。
唯七　はい、畏つてござりまする。（ト唯七件の首を取上げ、）額に疵ある此首級、師直殿と思へども、眞

僞わかたず目利致せ。

ト言ふにおづ〳〵打見れば、まがふ方無き主君の首級、はつとばかりにはら〳〵と、落つる涙に人々も、扨はと推量なしにける、

ト半左衞門首を見てよろしくうれひの思入、みな〳〵も扨はといふこなし。

半左　えゝお情ないお姿におなりなされましたなあ。（ト半左衞門涙を拭ひよろしく思入。）

重太　すりや、此の首級は、

三人　師直どのとな。

半左　何をお隱し申しませう、旦那さまにござりまする。

三人　しかと左樣か。

半左　いかやう包み隱しましても、隱されませぬ眉間の古疵。（ト床の合方になり、）今更言つて返らねど、去年三月殿中にて、刃傷に及ばれし、其許故に鹽冶殿が御切腹なされし時、跡へ恨みの殘らぬやう、御生害遊ばすが御家の爲と奧樣が、再應お諫めなされしかど、お用ゐ無き故奧樣には、是が病の元となり、お里へお歸りなされし儘祿の高下は扨置いて、武士は命を捨るが肝要、死する時に死なざれば死にまさる恥ありと、あの折君にも潔く御生害遊ばしたら、此御恥辱はござりま

すまいに、お命惜しみ給ふなら、何故小林殿の勸めにまかせ、御本家樣のお下館へ、お引移りなされませぬ、要害堅固の所と聞けば、大星殿が采を取るとも、討入る事は叶ふまじきに、君が我强いばつかりに數多の家來に命を捨てさせ、末代までの惡名を殘し給ふが半左衛門口惜しうござります。

〽忠義一途に首級へ向ひ、悔し涙に降積る、雪も流るゝばかりなり、

ト半左衛門身悶えなし、宜しく思入、由良之助是へ目を付け思入あつて、

由良　誠心面にあらはるゝ、半左衛門が一言にて、師直殿の首級なること、慥に知れて大慶至極。

力彌　矢間、竹林御兩所には、類稀なる今宵のお手柄、

磯貝　去年三月十五日より、

中垣　敵とねらふ師直殿を、

近松　此場において討ちとられ、

杉森　是にて日頃の恨も晴れ、

角野　嘸や亡君尊靈にも、

早野　草葉の蔭にて、

皆々　お悦び、
重太　是と言ふのも山岡が、妻女の知らせに手づるを得、
唯七　はからず是にて討取る首級、
千崎　思へば是迄我々が、艱難辛苦も師直殿故、
唯七　一分だめしに切刻んでも、憎しと思ふ恨みは晴れぬ。いつそのことに足下にかけて、
〽血氣の竹林立ちかゝり、足下に掛けんとなす所を、
ト唯七立ちかゝり首を足下にかけんとする。
由良　やれ粗忽なり竹林氏、無禮の振舞召さるゝな。
唯七　でも此儘に、
由良　立騒がずと、お下にござれい。
〽詞に是非無く控ふれば、良金威儀を改めて、
師直殿の首級とあらば、同座なすさへ恐れあり。
〽有合ふ俵に打ちのせて、身をへりくだり手をつかへ、
ト由良之助懐中より紫の袱紗を出し、上手にある炭俵へ敷き、是へ首を載せ下手に住ふ、竹笛入床

の合方になり、

力彌　我々共は鹽冶の臣たる、浪人共にござりまする。恐れ多くも今日只今、君の尊顔拜し奉り、是につらなる浪士一同、大慶至極に、

皆々　存じ奉りまする。

由良　申すもかひなき事ながら、其許といひ亡主と言ひ、いかなる前世の宿業にや、斯なり行き給ふ事我々共の身に取つて歎いても猶餘りあり、尤も御遺恨ある事は、ほゞ承り及びしが、在國故に某は委しき事柄存じ申さず、亡主にもよく〳〵忍び難きことあればこそ、大切なる御役目をも顧みず、家の滅亡家臣の難儀、思召されず殿中にて、既に刃傷に及び給ひしが、御運強くも其許には御別條無く御存命、主君は直に罪科の切腹、

〽其御無念はいかばかり、

つひに鹽冶の家滅亡、本國赤穗を開城なし、知邊を便りて離散なす、臣等が歎きを憚りながら御推量下されい、不具戴天の君の仇、臣下の身として打捨て難く、止む事を得ず徒黨を結び、我々陪臣の身をもつて、恐れ多くも武州侯の、御邸宅へ亂入なし、不禮の段は幾重にも、御高免下されい。

〽頭を下げて良金が、禮儀を亂さぬ一言に、力彌を始め並居る義士、皆一同に平伏なす、半左衞門は感心なし、

ト由良之助宜しく思入あつて首へ向ひ平伏なす、是にて皆々一緒に辭儀をなす。半左衞門思入あつて、

半左　むゝ驚き入つたる大星氏、かゝる中にも禮儀を亂さず、君へ對して不禮の詫、是では天の助にて敵を討たれし筈なるぞ、人は知らず半左衞門、貴殿を恨みに存じませぬ。

由良　ほゝう忝き其一言、良金徒には思はぬぞ。

半左　恐れ入りましてござりまする。（ト由良之助繩目を解けといふ思入、力彌心得）

力彌　千崎氏には、繩目を早く。

千崎　心得ました。

〽はッと心得繩目をとく、折から馳せ來る郷右衞門、

ト千崎、半左衞門の繩をとく、此時下手へ原郷右衞門雁木の打裂羽織大小草鞋にて出で來り、

重太　おゝ原氏か、待兼ねし。

皆々　何れにおいでなされしぞ。

原　師直殿の御首級給はりしと聞きし故、手引なしたる山岡が妻女に斯くと告げし所、御本望遂げ給

へば、最早用無き我身の上と、刃に伏して健氣な最期、見るに忍びず取片附け、思はず遲滯致したり。

由良　流石は山岡覺兵衛が、妻ほどあつてけなげな最期。

力彌　男子も及ばぬ、

皆々　事でござる。（ト鷄の聲する、皆々思入あつて、）

重太　最早時刻も七つ半、

唯七　夜明けぬ內に當所を引上げ、

原　泉岳寺に赴きて、

力彌　師直殿の此首級、

由良　御廟所へお手向け申上げ、上の御沙汰を相待たん。

半左　そんなら是が、

力彌　此世の別れ。

由良　とくと名殘を惜しまれよ。

半左　お心がらとはいひながら、

〽跡言ひさして泣伏せば、愁ひをよそに良金が、

ト唯七首を出す、半左衛門愁ひの思入よろしくあつて、

由良　何れも勝鬨、

皆々　えい〳〵おう。

ト引張りよろしく。

由良　先づ今日はこれぎり。

ト目出度打出し

十二時忠臣藏（終り）

三題噺魚屋茶碗

身投々々といふ聲に船へたすけし道具屋與兵衛がいとも哀れな身上噺虚か誠か白紙へ素性を包む五十圓二つに分けしうはゞみ久太が慾の深みへと打込まれたる大川端然もその夜は闇にお露は難儀を救はれて嬉しき夢の夢路をば辿るお信と友藏が言譯さへも夏の雨涙にしめる卯の花垣岸田が持參の結納に贈りし樽の柳原まむしと渾名のごろつきがゆする手切の千圓も大安賣りの四割引六百圓に七三郎が思案に暮れる門口へ折義員が離縁狀名前を聞いて次郎吉が養父が受けし大恩に身を捨鐘の美倉橋爰に親子が名乘合ふ大和錦の守袋古き趣向を綴り直して

『魚屋の茶碗』は二度に綴られて、三幕の世話物になつたものである。明治三年五月（作者五十五歲の時）守田座に始めて書卸した時には『時鳥水響音』といふ名題で序幕の兩國船中の場と、西河岸との二場だけであつたが、明治十五年五月、（作者六十七歲の時）本郷春木座に於て、書卸しの時次郎吉を演じた五世菊五郎が再演するに際して、後の二幕を書添へて完結せしめたものである。然し、舞臺上で成功したのは、前回に出來た序幕だけで、其後の復演に於ても、その部分だけが上場される。此の作には、文久年間に流行した三題噺と聯關した挿話がある。詳しいことは默阿彌傳に述べておいたが、ある實見談から想を構へて、最初に三題噺として作り、後それを骨子として脚色上演するに至つたものである。序幕兩國の西河岸に於けるまむしの次郎吉とうはゞみ久太との所謂江戸前とも稱すべきスッキリとした掛合ひは、好劇家に印象深いものとして取沙汰されてゐる。尙序幕に於て惠まれた金子は、最初の時は二十五兩であつたが二回目の時には五十圓となつてゐた。

　最初の時の役割は尾上菊五郎（道具屋手代與兵衞實はまむしの次郎吉）、中村仲藏（船頭うはゞみ久太）澤村訥升（花垣七三郎）、市川左團次（花垣の下男友藏）等で、後增補の時には、尾上菊五郎（まむしの次郎吉）、尾上松助（船頭うはゞみ久太）、市川權十郎（花垣七三郎）、市川八百藏（花垣の下男友藏）、澤村門之助（花垣の下女お信）等であつた。

　挿繪にしたのは稿下當時の繪草紙の一部分である。

大正十四年八月　　　　校訂者



時鳥水響音（魚屋の茶碗――三幕）

序幕

兩國船中の場
同西河岸の場

【役名――茶道具屋手代與兵衞實は蝮の次郎吉、船頭蜂久太、花垣下部友藏、鳶の者龜の子與吉、茶の宗匠東白、船頭おしやべり源次、同無口の喜之助、巾着切隼千五郎、同どら猫九郎藏、百姓田五六、同金十、橋番人惣次、花垣七三郎、岸田義員。七三郎妹お露等。】

（兩國廣小路の場）――本舞臺三間の間煉瓦造り電信局の表口、上手駒寄せ、上の方材木にて見切り、後斜に兩國橋向う川岸を見たる遠見、總て兩國廣小路の體。百姓田五六、金十風呂敷包みを背負ひ、在郷者のこしらへ、千五郎着流し三尺帶藁草履巾着切のこしらへにて、田五六に捉へられ居る、これを九郎藏着流し前垂、町人のこしらへにて留めてゐる、寄席の鳴物にて幕明く。

田五　いやおのれは〱太い奴だ、盗んだ物を出しをらぬか。

千五　出せといつたつて、お前方の物を、何も盗んだ覺えはねえ。

田五　なに、ないことがあるものか、今藝者の通つたのをうつかり立つて見て居る所を、われが紙入を拔きをつた。

九郎　そりやあお前方人違ひだ、此の兩國から淺草は巾着切の稼ぎ場で、うよ〳〵爰らを歩いて居るから、此男だと思ひなさらうが、外の者に違ひねえ。

千五　わつちの身裝が惡いから掏摸だと思ひなさらうが、わつちア堅氣な職人だ、貧乏こそして居るが人の物を取るなど〻、そんな卑劣な男ぢやあねえ。

金十　いや〳〵取らないとは言はさない、田五六どの〻懐へ手を入れて取つたを、わしが側で見て居ました。

千五　それぢやあどうでも紙入を、わつちが取つたと言ひなさるのだね。

金十　取つた證據は此の金十、それを取らねえと言はつしやるなら、裸になつて見さつせえ。

千五　なに、裸になつて見せろ。

金十　よもや裸にやあなられめえ。

千五　なに、ならねえでどうするものだ。

田五　田舍者だと思はつしやると、當事が違ひますぜ、憚りながら一年中雜穀を商ひに東京へ來て、泊つて居れば、御當地の者も同じことだ。

金十　其のわしらが、巾着切に目を拔かれたといはれては、在所の者に話しもならねえ。

九郎　それぢやあお前方は田舍の衆かえ、おらあ東京の衆かと思つた、見るから拔目のねえ人達、何で此の男が取るものだ、巾着切でもする者は熊鷹のやうな目付だが、見なさる通りあやしい目付、人間違ひに違ひない。（ト此内九郎藏、千五郎の袖の内から、拔いた紙入を取る、）

田五　見た所ではぼんやりと、間拔な顏の男だが、人は見掛によらぬもの。

金十　かういふ奴が太えものだ、何でも取つたに違ひない。

九郎　さう疑ひなさるなら、素ッ裸にして、體中改めて見なさるがいゝ。

千五　わつちが持つて居やしたら、どんな目にでも逢ひやせうが、持つて居ねえ其時ア、盜人といふ肩書を附けられた其替り、橋の上からどんぶりと川へ打ち込むからさう思へ。

田五　えゝ、紙入を取られた上、川へぶち込まれてたまるべえか。

金十　そんな間拔が水戸街道の、百姓にあるものか。（ト此内千五郎三尺を解き裸になり、着物を取つて、）

千五　さあ、おれが盜んだか盜まねえか、此の着物をふるつて見なせえ。

田五　おゝ、振つて見ねえでどうするものだ。（ト皆々捨ぜりふにて田五六千五郎の着物の袂をふるひ見て、）やあ、こりや何處へこかしたか。

金十　慥に取つたに違ひないが。

千五　どうだ、あつたか。
兩人　む〻。（ト千五郎着物を引取り手早く着る。）
九郎　何と此男が、取りやあしまいね。
兩人　さあ。
千五　よく盜人にしやあがつたな。（ト千五郎田五六の横ツ面をなぐる。）
田五　あいた〻〻〻。（ト顏を抱へる。）
九郎　え〻、手荒いことをしやあがるな。
　ト留める振にて、田五六の背負つて居る風呂敷包みを引つたくり、逸散に花道へ逃げてはひる。
千五　泥坊々々。（ト跡を追掛け逸散に花道へはひる。）
金十　そんなら今のも、相掏摸だつたか。
田五　いや、油斷のならねえことだ。（ト惣次着附の上へ紺半纏番人のこしらへにて六尺棒を持ち出で、）
惣次　これ〳〵、お前方は何を取られなすつた。
田五　紙入を取られました上に、背負つて居ました風呂敷包みを相掏摸に取られました。
惣次　そりやあとんだことだつた、大事なものではひつて居たかね。

田五　いえ、泥坊がけんのんだから、鹽町物の紙入に、小札が一枚あつたばかり。
金十　又背負つて居た風呂敷包みは皮包の握り飯、晝辨當でござります。
惣次　それぢやあ取られなさつても、左のみのものでなくつてよかつた、大事な物を持つた時は、決して爰いらを歩きなさんな、今も若い男だがとゝやとか魚屋といふ、茶の湯の茶碗を引ッさらはれて、主人の家へ歸られないと、うろ〳〵して居ました。
金十　其の取られた人は奉公人かね。
惣次　茶道具屋の若い衆と、いふやうな風だつた。
田五　同病相憐れむとかいつて、身につまされて氣の毒なことだ。
金十　こんな所に長居は恐れ、早く馬喰町へ歸りませう。（下行掛ける、番人落ちてゐる財布を拾ひ）
惣次　もし、この財布はお前方のではないかね。
田五　いえ、わしらのではござらぬ。
惣次　それぢやあ大方巾着切が、逃げる拍子に落したのだらう。
金十　いゝ氣味でござりましたな。
田五　紙入を取られた替り、わしがそれを貰ひませうか。

惣次　拾ひ物は派出所へ訴へなければならないから、お前方にやあ上げられない。
金十　さうして其の財布には、幾らばかりありますな。
惣次　三十錢ばかりありさうだ。
川左　それを貰へば、紙入を取られても儲かるに。
金十　えゝ、愚癡なことを言ひなさんな。
惣次　どれ、派出所へ訴へようか。
田五　あゝ、わしが拾へばよかつた。

ト此時以前の千五郎出で、財布を引つたくり、逸散に花道へ逃げてはひる。

惣次　えゝ、又取られたか。
三人　泥坊〳〵。

トばた〳〵、寄席の鳴物にて花道へ追掛けてはひる。よき程に知らせに附き、上手の道具を引いて取り、波の音になり、雨落より波手摺を出し、淺黄幕を切つて落す。

（兩國川の場）――本舞臺向う一面低き波手摺、後奥深に新柳町の書割下手に出這入の棧橋、舞臺一杯に波布を敷き、日覆より誂へ灯入りの月を下し、總て兩國川の體。舞臺上寄りに丸物の屋根船陸

子を建て、艫の方に與吉蔦の者のこしらへにて煙草を呑み居る、源次喜之助船頭にて、七輪へ鐵瓶を掛け煽ぎ居る、誂への端唄かすめて波の音にて道具留る。

源次　さつき曇つて來た時分は、上潮南でうねりが高く、お孃さんがお怖からうと、お案じ申して居ましたが。

與吉　どうか一降りかゝりさうだつたが、いゝ鹽梅に切上つた。

喜之　お歸り時分にすつかりと、風が凪げてしまつたのは、いゝ都合でござります。

與吉　それに今夜は月はよし、水の上も穩に、時鳥でも鳴きさうだ。

源次　今しがた、辨天の方へ鳴きながら行きましたぜ。

與吉　そいつあさつぱり知らなんだ。

喜之　風流氣のねえ者は、たゞ時鳥といふばかりだ。（ト此時時鳥笛になるに思入あつて）それ、時鳥が鳴きやすぜ。

與吉　もし旦那、お聞きなさいましたか。（ト船の內にて）

七三　おゝ、聞いた〳〵。

與吉　とんだ道成寺の坊主だ。（ト又時鳥笛。）

東白　もし、月が上りましたから、障子を取りませう。

ト誂へ荻江の時鳥の唄になり、船の障子を引いて取る。内に七三郎羽織着流し金時計を掛け、豪商のこしらへ、上手にお露同じく妹のこしらへ、下手に東白坊主鬘、羽織着流し、茶の宗匠のこしらへ、茶箱を側へ置き控へ居る、此の内右の唄一くさりあつて、

七三　丁度折よく鄰の船で、今唄ふのは荻江で出來た時鳥といふ意氣な唄、慥にあれは家元だ。

お露　露友さんは節がよいので、面白うございますね。

東白　天二物を與へずといふに、文句が出來て節附が出來て、唄ふのが上手といふは、ちつと褒め過ぎるやうだけれど、實に天下の稀物だ。

七三　それに以前の旦那氣が、少しもなくつて調子がいゝから、何處へ行つても受けがよく、先づ當時の流行ものだ。

お露　いつか芝居で見ましたが、露友さんのお上さんは、好い器量でございますね。

東白　器量のいゝばかりで澤山でございますのに、人並勝れて三味線がよく、あゝいふ女房を持つといふは、よい月日の下に生れた人だ。

七三　いや、そんなに愚癡をこぼさずとも、宗匠の御内室もなか／＼負けぬいゝ器量、殊に茶人に茶人

だけ、風韻があつて又別だ。
與吉　もし旦那、わつちやあ宗匠の御新造にまだお目にぶら下りませぬが、お祭りの提灯を見るやうな御新造でござりますか。
七三　藪から棒に、また與吉が分らないことを言ひかけるよ。
お露　お祭りの提灯とは、どういふ譯でござんすえ。
與吉　ふうりんがあつてい丶とおつしやるからさ。
東白　いや、まだお目にぶら下らないと、ちよつと筋を賣つて置いて、風鈴は面白いな。
七三　然し今おれが言つたのは、風鈴ではない風韻だ。
與吉　其の風韻といふは、何のことでござります。
源次　頭、ふういんを知らねえのか。
與吉　え丶手前達に聞きやあしねえ、默つて居ろえ。
源次　それだつて、ふういんを知らねえもの。
喜之　豪氣に知つた風をするが、お前ふういんを知つて居るのか。
源次　知らなくつてどうするものだ、ふういんといふは黄色い水を吐くのだ。

喜之　そりやあ溜飲だ。
源次　それぢやあ本郷の佐藤さまか。
與吉　ありや、病院だ。
源次　按摩がもむのは。
喜之　導引だ。
七三　これさ、もういゝ加減にしねえのか、下手な豆藏を見るやうだ。
東白　成程おしやべり源次とはよく言つた、無い名は人が附けないものだ。
源次　おしやべりだとおつしやるなら、此間の事を言ひますぜ。
東白　おッと、船中では左樣なことは申さぬ事にて候。
七三　何ぞ面白い話しかな。
源次　此間宗匠が、助平根性を出しまして。
東白　えゝ目先きの利かぬ、どうしたものだ、旦那樣ばかりならよいけれど、今日は大事な御法事でお妹御さまのお露さまを、お連れなすつてのお寺參り、大精進に腥いそんな話しはしねえものだ。

源次　なに、腥いことがござりませう、乾物のやうな女でござりましたぜ。
東白　これさ、もういゝ加減にしないのか。
與吉　そりやあ兩國の三八さんや、東泉さんが一緒だらうね。
源次　よく知つて居なさるね。
與吉　おいらもあの時行つて居た。
東白　いや、惡いことは出來ぬものだ。（ト七三郎思入あつて、）
七三　おゝ、兩國といへば、常磐へさつき遣つた、友藏はもう歸りさうなものではないか。
お露　大方裏のお師匠さんの所へ、寄つてゞも居りませうわいな。
東白　船頭が久太だから、旦那の株で常磐の家で一杯やつて居りませう。
與吉　おゝ噂をしたら向うから、嚔をしながら來なさいます。
東白　嚔をするとは細いな。
喜之　こゝらは圓朝の話しで行きます。
源次　兩國で話しを持ち切つて居ますね。
ト流行唄、波の音にて、花道から丸物の小船に、友藏紺木綿の着附同じ脚絆供のこしらへ、うはゞみ

の久太着流し、三尺帶船頭好みのこしらへにて、櫓を押して出來り、花道にて捨セリフあつて、舞臺下手へ來り、屋根船の下へ船をつけて、

友藏　旦那さま、嘸お待遠でございましたらう、常磐の主人が居りませぬので、暇取りましてございます。

久太　それに先程のお手紙で向う川岸へ廻りましたから、大きに遲くなりましてございます。

七三　おゝ、御苦勞々々、横網へやつたのをさつぱり忘れて居た、常磐は承知かな。

友藏　へい、委細承知いたしましたと申しましてございます。

お露　もしお兄イ樣、明日はどなた樣のお客さまでございます。

七三　以前お出入の華族方が小名木澤の別莊へ、牡丹を見に入らつしやるゆゑ、それで常磐へ頼んだのだ。

東白　お出入のお屋敷樣では、明日はお取持で御窮屈でございますな。

七三　明日は一日袴がけでお相手をせねばならぬが、お茶の好きなお方もあれば、圍ひで一服差上げたいから、用がなくば一泊して明日早く小名木澤へ一緒に行つて貰ひたいものだ。

東白　畏りましてございます、明日は約束もございませぬから、御一緒に上りませう。

與吉　お屋敷のお客様ぢやあ、又明日呑めますね。
源次　此間もお寮から船へ乘らうとした所、どろんけんで踏み外し、どんぶり落ちて身投げ同樣。
喜之　すんでの事に土左衛門と、改名披露をなされる所だ。
源次　然し宗匠は坊さんだから、土左衛門はをかしいな。
與吉　土左坊はどうだね。
東白　えゝ、又尻馬に出るか。
久太　いや、土左坊に尻馬は句が附いて居ますね。
友藏　其の土左衛門で思ひ出しましたが、今藤岡で可愛さうな身投げの話しを聞きました。
與吉　そりやあどんな話しか聞きたいものだ。
友藏　昨夜暮れてまだ間もなく、女の身投げがありまして、女だ〳〵といふ聲に船に遊んで居た若い衆が、浮上るところを引揚げて助けてやつたさうでござりますが、年の頃は十七八で小綺麗な女でどういふ譯で身を投げたかと聞きましたら、親に別れ身寄の家へ引取られて行つたところ夫婦とも鬼のやうな奴で、まだ其上に三途川の婆アのやうなお袋があつて、旦那を取れ〳〵と責められるのが辛いゆゑ、身を投げて冥土に居る親の所へ參りますと、哀れな話しに助けた者が、二十錢

づつ出しッこをして、千住在に居るといふ伯母の所へ、人を附けて送らして遣つたさうでござります。

七三　それはいゝ功徳をして遣つたな。

東白　旦那取りをするのがいやさに、身を投げて死なうとは、以前はいゝ衆の娘と見える。

お露　可愛さうなことでござりますな。

久太　まだ〳〵そんなことではござりませぬ。

東白　もつと哀れなのがありますかな。

久太　差し代つて申し上げませう。（ト久太前へ出で、思入あつて、）此間のことでござりますが、年の頃三十ばかりな女、病擧句か瘦せ衰へ、髪を亂して裾の切れたぼろッこの袷を着て、四つばかりな男の子を十文字に引ッちよひ、橋臺の團子を五本買つて欄干へ寄掛り、その團子を子が喰ふうちほろりほろりと涙をこぼし、川を見て居ましたが、やがて其の子がおつかアやお湯が吞みたいと言ひますと、今たんと吞ましてやると背負つたまゝ川の中へ、どんぶりと飛込みましたが、折あしく下げ潮で、どこへ行つたかそれッきり、死骸も浮ばずにしまひました。

七三　そりやあ情ない話しだな、さういふ所へ行合せたら、親子とも助けて遣らうに、定めて亭主に死

なれたとか、捨てられたとかしたのであらう、金ゆゑ命を捨てるとは、可愛さうなことだな。

お露　死なうと覺悟をして居ながら、子の可愛さにお團子を喰べさせて居る親心、どのやうでござりませうわいな。（トお露泣く、七三郎も涙を拭ひ、）

七三　今お露が言ふ通り、此の世の別れに子に團子を喰はせて死ぬとは哀れな話し、思はず知らず涙がこぼれた。（ト愁ひの思入、此時どんと水音して、下の方で大勢の聲にて、）

大勢　身投げだ〳〵。

友藏　それ、又身投げだ。

七三　どうか助けて遣りたいものだ。

久太　上潮でござりますから、爰らへ今に浮きませう。

七三　浮いたらみんなで上げてやつてくれ。

皆々　畏りました。

ト波の音になり、下手、船の前波布の間より波の花パッと散り、切穴より次郎吉水入り、好みの縞の袷、博多帶、商人の手代のこしらへにて、ずつぷり濡れて天窓を出す。

與吉　それ、そこへ浮いた。（ト友藏次郎吉の襟上を捉へ、）

友藏　しめた〳〵、助けました。
次郎　あゝもし、生きて居られぬ譯のあるもの、どうぞ放して下さりませ。
友藏　どうして〳〵、つかまへたら放しやあしねえ。
次郎　いえ、お留めなされて下さりませぬが、却つてお慈悲でござりますれば、此の儘見脱し下さりませ。
久太　旦那樣が助けろとお聲掛りだ、見逃せやあしねえ。
友藏　まあ〳〵こつちへ上んなせえ。（ト友藏久太無理に次郎吉を船へ引揚げる。）
次郎　あゝ、見逃して下さりますればよろしうござりますに。
友藏　詰らねえことを言はねえで、まあしつかりと氣を持ちなせえ。（ト次郎吉しよんぼりと坐り居る。）
源次　かう、見りやあまだ年若い二十代の若い衆だが、此の結構な世を捨てゝ、橋からどんぶり飛込むなあ、よく〳〵なことだらう。
與吉　然し旦那樣が斯うやつて、お助けなされた上からは、どうか話しが附きませう。
喜之　死ぬのはいつでも死ねるから、まあ氣を取直しなさるがいゝ。
久太　何にしろ、水を呑みなすつたらう、わつちが吐して上げよう。

次郎　有難うござりますが、左のみ呑みもいたしませぬ。
久太　なに、素人が飛込んで呑まねえことがあるものか。
　　ト此内七三郎、お露、東白、次郎吉へ目を付け思入あつて、
東白　もし旦那、御覧じませ、いゝ男ぢやあござりませぬか。
七三　むゝ、商人衆の手代のやうだが、しまつた形の物ごしから、利口さうな物言ひまで、お露誰かに
似て居るな。
お露　はい、梅幸に似て居りますわいな。
七三　違えねえ、菊五郎に横顔などはそつくりだ。
東白　お嬢さまは御贔屓だけ、直にお目に付きましたな。
お露　さうではなけれど。（ト恥かしき思入）
東白　兎も角も羨ましい、女の惚れさうないゝ男だ。
　　トお露見惚れる思入、此の内久太、友蔵、次郎吉の介抱をしてやる、次郎吉思入あつて、
次郎　此のやうに皆様がお止めなされて下さりますは、有難うござりますが、死なねばならぬ譯あつて
身を投げましてござりますれば、どうぞ此の儘私を、お見逃しなされて下さりませ。

ト是れを聞き七三郎前へ出で、

七三　成程若い身の上で死なうと覺悟しなさるのは、よく／＼迫つたことであらうが、何を隱さうわたしも今日は、親の年忌で法事を勤め、今菩提所から歸りがけ。知らぬ先きは兎も角も目に掛つて船へ引揚げ、どう見殺しになりませう、一河の流れの兩國で測らず止めるも他生の縁、力に及ぶことならば命を助けて上げたいから、まあ一通り死ぬ譯を、わたしに話して聞かせなせえ。

ト次郎吉默つて俯向き居る。

友藏　お慈悲深い旦那樣の、折よく爰へお出でなされて、此の船へ助けられたはお前の命のあるところだ。

久太　どんなことか知らねえが、金づくならば旦那樣がどうかして下さらう。

友藏　まあ一通り死ぬ譯を、

久太　爰でお話し申しなせえ。（ト次郎吉顏を上げ、）

次郎　見ず知らずの私を、左程までにおつしやつて下さりまするお詞に、死なうと覺悟いたしました仔細をお話し申しまする。

七三　どういふ譯か有體に、早く聞かしてくんなせえ。（ト誂への合方になり、次郎吉思入あつて、）

次郎 何をお隱し申しませう、私は數寄屋川岸の遠州屋宗兵衞と申しまする、茶道具屋の若い者、與兵衞と申しますものでござりますが、今日小梅においでなさる、さる御大家の御隱居樣へ、魚屋の茶碗を持つて參る其の途すがら、御倉橋の手前にて三人連の士族に出逢、避けるふ態と突當り、慮外者めと打擲なし、擧句に茶碗の包みをさらひ横町へ逃げ込しを、跡から追掛けましたれど勝手知れざる所ゆゑ遂に姿を見失ひ、主人へ歸つて言譯なく、とつおいつ川端を思案にくれて歩きましたが、どうも言譯のいたしやうなく、死んで言ひ譯いたさうと、覺悟を極めて兩國から、身を投げましてござりまする。

七三 それぢやあお前は數寄屋川岸の、遠州屋の若い衆か、幾らの物か知らないが、大概知れた魚屋の茶碗、命を捨てゝ言譯せずとも、かう〳〵いふ災難で取られましたと言ひなすつたら、主人だつても取られた物を償へとも言ひますまい、お前の口から言ひにくければ、懇意な人でも頼みなすつて、なぜ言譯をしなさらないのだ。

次郎 さあ、其の言譯も主人へ對し、いたし憎い譯あつて、それゆゑ餘儀なく覺悟を極め、身を投げましてござりまする。

七三 其の言譯のならぬといふは、どういふ譯があつてのこと。

友藏　とてものことに打明けて、旦那へお話しなさりませ。

次郎　長々しいことでござりますが、主人へ言譯のなりませぬは今お話し申したお得意へ、去年の八月上つた時、八百善へ行つて夜食を喰ふから一緒に行けとおつしやるゆゑ、お供いたして參つた所丁度俄の替り目時分、一二本見物するから仲の町まで行つてくれと手を取つてお放しなされず、是非なく又々仲の町まで、お供いたして參りましたが、兎やかうするうち五ツ過ぎ、お暇をいたしましたれば、是れから家へは二里たらず物騷ゆゑ案じられゝば、今夜は泊つて明朝早く家へ歸れとおつしやりますゆゑ、有難うはござりまするが主人は至つて物堅く、一晩でも奉公人が明けることがござりませねば、是非お暇いたしますとたつてお斷り申しましたれど、御酒の上でお聞き入れなく、明日おれが手紙を附けて歸してやるから、それを持つて大手を振つて家へ歸れ、堅い顏はして居れど主人も昔は遊び好き、一晩ぐらゐ明けたとて野暮に小言をいふものかと、側をお放しなされませず、是非なく其の晩泊りまして、翌朝早くお手紙をお貰ひ申して歸りましたが敷居も高く門口からこは〴〵内へはひりましたら、主人が見世に居りまして、おゝ今歸つたか御苦勞々々まあ〳〵こつちへ來るがよいと居間へ私を連れて參り、昨夜は旦那と御一緒に北廓へお供をして行つたかと出した手紙をざつと見て、御酒の上の惡いお方、嘸迷惑をしたであらう、

勸め酒はうまくないもの。おれも度々お供をして覺えがあるが、持越して迎ひ酒を呑まぬうちは胸持の惡いものだ、手前が歸つたら呑ませようと、今朝深川の肴屋がふつこのいゝのを持つて來たから、うじほに拵へて待つて居た。早くお燗をつけて來いと勿體ない主人の扱ひ。（ト思入あつて）小言を言はれますよりも却つて切なり迎ひ酒、胸へ痞えて呑めませぬを、やう〳〵一つ呑みまして、此身の詫びをいたしましたら、なに茶道具屋といふ者は先づ半分は幇間、遊びながら金儲けをするのが德の榮耀生業、必ず小言は言はないが、然し手前も年季も明け禮奉公の三年も、もう一年で濟む體、僅な所ゆゑ此後はどなたがお勸めなさらうとも、其の場を體よく切拔けて歸つてくれといふ譯は、此間もお袋が機嫌きゝに來た時に、親仁が死んで忰のみ杖と思つて居ますれば、來年御年が明けましたら、どうか小さな床見世でも出させたうござりますから、何分お願ひ申しますと、くれ〴〵もおれへの賴み、決してそれは案じなさんな、年が明けたら力となつて、立派に見世を出してやらうと言つたらほた〳〵悅んで、杖を忘れて行く程に嬉しがつて歸つたから、もう一年か半年ゆゑ辛抱して勤めてくれ、幾歳になつてもあの中へ這入ると心の替るもの、一度はいゝ二度はいゝと三度が四度と度重なり、內外の者の目に掛り世間の噂になる時は據なく宿へでも下げねばならぬ、さうしたならば十三から年季に出したお袋が、待ちに

待つた甲斐もなく、其の歎きは如何ばかり、又かけ構ひのない人の口、あすこの家にはもう僅一年か半年で、少しの事を越度にして暇を出したと言はれては、俺も世間へみつともない、禮奉公の三年も、もう僅一年ゆゑ爰の道理を聞き分けて、親と主人の心を思ひ暇を遣るまで一晩でも、家を明けてくれるなと事を分けた主人の異見、あゝ勿體ないとそれからは、何處へ使ひに參つても、常より早く家へ歸り、奉公大事に致しましたが、一度が末代一晩でも明けたことがござりますれば、喧嘩仕掛けで魚屋の茶碗を、取られましたと申しましても、これが小僧の身ではなし、誰もまことゝ思ひませぬ、得意廻りと僞つて晝遊びにでも參りました、其の穴埋めに魚屋の茶碗を質にでも置きましたかと、疑ひを受けまするが心苦しく、覺悟を極め命を捨て、潔白な身の言譯をいたす心で、身を投げましてござりまする。

ト次郎吉よろしく思入あつて言ふ、皆々も是れを聞き、氣の毒だといふこなし、七三郎も思入あつて、

七三　一部始終の話しを聞けば、まんざら無理でもないけれど、死なうといふのは惡い料簡、お前の取られた魚屋の茶碗、いくらするか知らないがわたしも土ツころを取扱ひ、爰に宗匠も居なさるが大概知れた茶碗の相場、僅な金で又とない命を捨てようなどゝいふ、惡い心はよしにしなさい。

次郎　へい、有難うござります。（ト俯向きゐる。）

七三　さうしてお前が盗まれた、魚屋の茶碗はどの位だね。
次郎　へい、今お話し申しました御隱居樣へ、五十圓に御相談をいたしました。
七三　それぢやあ家へ五十圓、持つて行つたら死なずとも、言譯がならうぢやあないか。
次郎　金を持つて歸りましても、又と少ない代物を取られては濟みませぬが、先づ死なずとも申し譯がなりませうかと存じます。
友藏　それで言譯がなることなら、なぜ其の金を都合して、言譯をしなさらねえのだ。
次郎　さあ、其の金子が出來ますれば、命を捨てはいたしませぬが、貧しい暮しの母親に相談相手の親類も其日に困る者ばかり、これが三圓か五圓ならどうか都合も出來ますれど、高の知れた奉公人五十圓といふ金を誰も貸し手がござりませず、是非なく死なうと覺悟を極め、美倉橋の水茶屋で書置を認めまして、先刻打たれた其の時に綻びかゝつた羽織を幸ひ、若松町に居りまする母の所へ尋ねて參り、柳橋まで用があつて參りましたが、今そこの黑塀の釘へ引掛け、羽織の袖を綻ばしたから、歸りまでに繕つて下さいましと書置を袂へ入れて頼みましたが、親子の別れにつくづくと、見れば苦勞をいたしましたか去年にまさる頭の白髮、役に立たねど便りに思ふ此の身が死んだら跡々で、其の歎きはいかばかりと心は付けど仕方なく、死ぬる覺悟に餘所ながら暇乞をい

たしましたが、自然と顏の色に出ていつもの蟲が起つたら灸をすゑてやらうかと、今死ぬとも親は知らず、行末思ふ心の內、濟まぬと知りつゝそこ〳〵に、母の家を出ましたが、嘸今頃は袂から書置が出て死ぬのが知れ、泣きの涙でござりませう、思ひ出せば七つの年親仁に別れて十三まで母の手しほで成人なし、奉公に出て十二年、年季も明けて三年のお禮勤めも二年濟み、もう一年で宿へ歸るを、待つ甲斐もなく先立つ不幸、助かりましたを存じませねば死んだと思つて私を嘸や恨んで居りませう、濟まぬことをばいたしました。

東白　おゝ尤だ〳〵、十人並に勝れたこなた、死ぬと知つたら母親がその歎きはどのやうぞ、他人でさへも身につまされ、是れが我が子であつたらばと、思へば胸が一杯に、涙がこぼれてなりませぬ。

ト東白すゝり泣きに泣く、與吉も目をこすりながら、

與吉　向う見ずのわつちらでせえ、何だかをかしな氣になつて、哀れッぽくなりました。

源次　芝居を見ても淨瑠璃をきいても、理につまされゝば泣くのが人情。

喜之　悲しい時に泣かねえのは、情知らずでござります。（ト皆々愁ひの思入、お露こなしあつて、）

お露　もしお兄ィ様、今の話しの樣子では死なねばならぬことながら、どうか命の助かるやう、殺しと

もない、さあ、親御の歎きが思ひやられ、その年寄がいとしいゆゑ、救うて上げて下さりませいな、

ト次郎吉に惚れた思入にて言ふ。

七三　そりやあおぬしが言はずとも、今日は死なれた母親の七回忌の忌日ゆゑ、鳥や鰻を逃がしたが、何より功徳な人一人、助けなくつてどうするものだ。

友藏　それぢやあ旦那は茶碗の金を、出してお助けなされまするか。

七三　高の知れた五十圓、金に命は替へられぬ。

お露　そんならほんまに、あのお方を。

七三　おれが目に掛つたら、どんなことでも殺しはしない。

お露　それでわたしも。

七三　え。

お露　さあ、それが何よりよい追善、お嬉しうございますわいな。

東白　梅幸に似た若い衆が、助りましてお孃樣は、さぞお嬉しうございませう。

與吉　又そんなことを言ひなさるか、それだからいやがられるのだ。

ト此内七三郎側にある革文庫の中より五十圓包みを出し、

七三　さあ、與兵衞さんとやら、持合した五十圓、これをお前に上げるから、主人の方を此の金で言譯なしなさるがいゝ、友藏これを上げてくれろ。（ト出す、友藏とつて、）

友藏　さあ旦那樣のお志し、有難くお貰ひなさい。（ト次郎吉の前へ置く、次郎吉思入あつて、）

次郎　有難うはござりますが、今も申す貧しい暮し、五十圓といふ金を只今お借り申しても、お返し申す當がなければ父もや其の時死ぬ苦しみ、いつそのこと此の儘に、お見逃しなされて下さりませ。

七三　そりやあお前、惡くどい、かたくなといふものだ、五十圓は愚なこと七十圓が百圓でも、命にはかへられぬ、又返すにも及ばない、今お前に此の金を進ぜたところが、別にこつちの障りになるといふでもなし、親の忌日の施しにお前に金を進ぜるのだ、惡いことは言はないから、此の五十圓の金を持つて、ちつとも早く母親に無事な顏を見せなせえ。

久太　さあ／＼、旦那樣が下さるお金、辭退をせずとお貰ひ申して、ちつとも早くお袋に、安心をさせなせえ。

友藏　どんなに案じて居るか知れねえ。（ト次郎吉思入あつて、）

次郎　左樣ならお詞に隨ひまして此の金を、お貰ひ申しますでござりまする。（ト手に取り押戴き、）えゝ、有難うござりまする。旦那樣のお慈悲をば、母が聞いたら悅びませう、又主人へも有體に今宵の

始終を話しまして、お禮に出ますでござりますが、憚りながら旦那樣のお宅は何れで、お名前は何と仰せられまする。

七三　いや、其の禮には決して及ばぬ、又町所姓名はわたしも道具は好きの道、其内お前の店へ行き改めて話しませう、先づそれまでは名も知らぬ、佛事歸りの其の人から、貰つた積りで居て下さい。

次郎　いえ〳〵、それではどうも心に。

友藏　あもし〳〵、そりやあお前くどいといふもの、旦那樣があゝおつしやるなら、何にも言はず其金を、お貰ひ申すがいゝぢやあないか。

久太　ぐづ〳〵して居る其内に、跡に殘つたお袋が一途にお前が死んだと思ひ共々死なうなどゝいふ心を出すめえものでもねえ、跡の祭りにならねえ先き、お貰ひ申して行きなせえ。

次郎　成程お前のおつしやる通り、さういふことのあるまいとも申されませねばお惠みの、此の金子をお貰ひ申して、無事な顏を母に見せ、安心をいたさせませう。

七三　おゝ、それが何より孝行だ。

次郎　何とお禮を申しませうやら、命の綱の五十圓、（ト金を取つて、）旦那樣、お孃樣、生涯御恩は忘れ

ませぬ、（ト辭儀をなし、）もし皆さま、有難うございまする。（ト皆々へ辭儀をなす。）

七三　若松町へ行くのなら、爰から上るが道順だが、棧橋があるか知らぬ。

源次　丁度此の川岸にございます。

喜之　爰から直にお出でなさい。

次郎　左樣なれば仰せに任せ、お暇いたしまする。（ト金を懷へ入れ立上る。）

友藏　おゝ、づぶ濡れで冷たからう。

次郎　これから宿へ參りますれば、着替を着かへて歸りまする。

久太　お前、履物はあるめえな。

次郎　はい、さつき雪駄は橋の上へ、脱ぎ捨てましてございまする。

久太　此の上草履を上げようから、是れをはいて行きなせえ。（ト千本の藁草履を出す。）

次郎　これは〳〵有難うございまする。

ト草履を頂き思入あつて、棧橋へ一足に投げ、船から跨がうとするとたん、波の音を打込む。

久太　あゝ危ねえ、落ちなさんな。

次郎　なに、大丈夫でございます。

ト左りの方の裾をまくり棧橋の草履を突掛ける、波の音、佃になり、次郎吉逸散に下手へはひる。此の裾をまくる時、足の彫物見えるを、友藏見附け、

友藏　や、今の男は茶道具屋の、若い者だといひましたが、

七三　どうぞしたのか。

友藏　船から上る其時に、ぐるりとまくつた尻のさき、彫物が見えました。

與吉　やあ、それぢやあ今のは、

與吉 源次 喜之　術りであつたか。

東白　それ、誰ぞ追掛けねえか。

久太　わつちが追掛けて行きますから、誰も行くにやあ及びませぬ。

トやはり佃にて、久太跡を追つて逸散に下手へはひる。

七三　あゝこれ、追掛けるには及ばぬのに。

源次　久太が行けば大丈夫、逃すことぢやあござりませぬ。

與吉　何にしろ、今の男に彫物があるとは知らなんだ。

喜之　どう見ても道具屋か、小間物屋の若い者。

東白　物の言ひやう取りまはし、衒などゝは見えなんだ。
お露　何で今のあのお人に、彫物などがありませう、友藏そちがうろたへて、見違へたのであらうわいの。
友藏　いえ〳〵彫物がござりました、人より大きな目玉をもつて、何で見違へをいたしませう。
七三　むゝ、すりや友藏が言ふ通り、彫物があつたに違ひない。
お露　え、そんならほんまに。
東白　身投げと見せたは、
皆々　衒りであつたか。
お露　その恐ろしい、心にわたしや。
七三　え。
お露　いえさ、心の内は知らねども、見た所では其のやうな、悪いことをする人とも、思はれぬのは優しい姿。
與吉　あれが堅氣な人ならば、お孃さまのお聟さまに丁度いゝ年頃だ。
東白　えゝ詰らぬことを言ひなさんな、花垣樣のお孃さまへ衒りを聟にされるものか。

源次　そりやあ宗匠のおつしやる通り、どうで身投げの眞似をして、ゆすり衒りをするからは、

喜之　親は何だか知らねえが、ろくな奴の子ぢやァあるめえ。

七三　いや、親は立派な奥坊主、飛ぶ鳥落ちる勢ひに、お城で名さへ高村の、

友藏　え、そんなら旦那は、

皆々　衒りの素性を、

七三　さ、知つたでもなし知らぬでもなし、人の噂に大名にも勝つた暮しの若旦那が、如何に時世とい

ひながら、衒つた金の其の數も人の命の五十圓、長い浮世を短夜に、（ト時の鐘を打込む、）お、、

あの鐘は、もう九つか。

ト此内お露は次郎吉に心の殘る思入あつて、小緣へ手を掛け、向うへ思入、又時鳥笛にて、

友藏　あゝもし、お危なうござります、何を御覽なされますのだ。

お露　さあ、わたしや今の時鳥を。（ト乘り出るを七三郎留めて、）

七三　あゝこれ、鳴く音はいゝが忌はしい、死出へ導く田長鳥。

お露　それぢやというて。

七三　はて、出世前には、（トお露を下へ坐らせるを道具替りの知らせ、）見ないものだ。

ト波の音、端唄になり、これへ冠せて、

ト立上り棹をさす、喜之助は友蔵の船へ乗り櫓を押す、此の模様よろしく道具廻る。

源次　取梶だよ。

(大川端西川岸の場)――本舞臺前へ出して一面に常足の二重、石垣の裾へ波の書割の蹴込み、雨落より波手摺を出し、此の間波布を敷き、よき所に誂への切穴、後一面に練塀後へ下げて物見の張物上手斜に屋敷町の片遠見、下手葭簀を巻き、床几を積上げ、片附けたる出茶屋、二重に腰を掛ける捨石三ツ程竝べ、練塀の内より見越しの松、日覆より同じく釣枝、總て大川端西川岸の體。爰に以前の次郎吉捨石へ足を踏みかけ、着物の水をしぼり居る、波の音、端唄にて道具留る。と次郎吉思入あつて、

次郎　四月になつてもまだ寒く、布子の脱けねえ悪い時候に、長い間濡れて居たので、毛穴がたつてぞくぞくするが、又風でも引かにやあいゝ、早く歸つて湯へ飛込み、一ぺえやつて生きかへらう。

ト水をしぼり居る、此の時上手にて、

久太　おい〱、次郎さん〱。(ト呼ぶ。)

次郎　誰かおれを呼ぶやうだが。(ト上手へ思入、波の音ばた〱にて、上手より以前の久太尻端折りにて、出來り)

久太　おい次郎さん、ちよつと待つてくんねえ。

次郎 待てといふのは誰だ。

久太 次郎さん、お前、忘れたか。

次郎 誰だつたか、さつぱり忘れた。

久太 五年あと本所の、權次ン賭場に燻つて居た、おらアうはゞみの久太だ。（ト次郎吉思入あつて、）

次郎 むゝ、壺振りをして居たうはゞみの久太か、あれッきり見なんだな。

久太 なけなしの金を二三十耗つた擧句が足だらけで、手を出すことも出來ねえから、體の惡いを幸ひに親分手合に路用ゥ貰つて、湯治といやあ大仰だが行當りばつたりに、草津へ行つたが仕合せと性に合つたか丈夫になつて、出羽奥州から越後をかけ北國筋を廻つて來たが、産れ所程いゝとこはどこへ行つてもありやあしねえ、いやだと思つたら一日でも、旅他國にやあ居られねえから、先月こつちへ歸つて來たが、何時がいつまで遊び人でごろ附いて居るも詰らねえから、堅氣になつて小船乘り、そこら爰らへ脇櫓に雇はれ、ひ、ひ、ひごうな暮しをして居やす。

ト これを聞き次郎吉思入あつて、

次郎 むゝ、さういはれて氣が付いたが、お前今橋臺の川岸に乘つちやあ居なかつたか。

久太 おゝ、お前を川から引揚げた、小船におらあ乘つて居た。

次郎　えゝ。

ト次郎吉びつくりする、時の鐘、誂への合方、かすめて屋體囃子を冠せ、

久太　其のお前のびつくりより、おらあどんなにびつくりしたらう。（ト久太川端の石へ腰を掛ける、これにて次郎吉腰を掛け兩人思入あつて、）身投げ／＼といふ聲に、屋形に居たお客様が助けてやれといふ途端、小縁の際へ浮み上つたを、供の男が船へ引揚げ、おれも共々介抱しながら、顔を見りやあ覺えのある、お坊主上りの蝮の次郎吉、身裝も替つた商人風に、こいつあ仕事と思つたから、知らねえ振りで後に居たが、どんな目利に踏ましても僞物と見えねえ茶道具屋、魚屋の茶碗を取られたところから、主人へ濟まず身を投げる、覺悟で親の所へ行き、羽織の袂へ書置を入れて置くなどゝいふ、さもありさうな人情噺、ほろりと涙をこぼさせるのは實に嘘とは思はれねえ、斯うも器用にいくものかと唾を呑んで聞いて居たが、たうとうしまひが五十圓衒りとつたお前の肚胸おらあほんにびつくりした。（トこれを聞き、次郎吉も思入あつて、）

次郎　どこにどういふ知つた人が、居ようかも知れねえのを、知らねえつもりでどんぶりと、船を目當に身投げの衒り、まむしと人にやあ言はれるが跡先見ずの盲目蛇、ゆすり衒りはするものゝ、肚胸も据らぬ根性の太さも違ふ蟒のお前に一口きかれたら、ぶち殺されめえものでもねえとん。

だゞぢを組む所、よく默つて居てくれたな。

久太　そりやあおれも惡いことぢやあ沖を越したと言ひてえが、高の知れた小船乘り、脇櫓をいれて押借か、ぶつたくりが精一杯、お前程にやあいかねえが、出羽奥州から越後をかけ危ふい船にも乘つて來たから、人の仕事の邪魔はしねえ、さつき旦那の袖を引き、お前の衒りを見出したところが、手前のお蔭で助かつたとくれる渡りは二分か一兩、知らねえ顏をして居たのはおれにもちつと所存があつてよ、所でお前が上る時、ぐるりとまくつた尻ッぺたに尻尾を出した九尾の彫物、ソレ衒りだから追掛けろと頭の息子が飛び出すを、おれが留めて追掛けて來たのは、折角衒つた其金を、無駄にさせめえばかりよ、是れから歸つて追掛けましたが、どこへ行つたか知れませぬと言やあそれで濟む話だ。

次郎　そいつあ地獄で佛だつた、お前が來ねえで外の奴でも追掛けてゞも來る日にやあ、叩きなぐつて追散らすか、事に寄りやあ命づく、どんな怪我をしめえものでもねえ。

久太　其の間違をさせめえと、おれが跡を追掛けて來たのは、お前にちつと賴みがあるのだ。

次郎　なに、おれに賴みとは。

久太　五年振りであつたお前に、こんなことを言ひ度くもねえが、遊んで居りやあ五兩や七兩衣嚢へ入

れて置くこともあるが、堅氣になつて心を入替へ脇櫓位に雇はれちやあ、更衣に袷を一枚着ることが出來ねえのだ、しみツたれた話しだが、九尺店でも持ちてえから、五十兩の其の内を十兩貸してくんねえな。

次郎　今街つた此の金を、十兩貸してくれといふのか。（ト金を出して見せる。）

久太　達つてとも言はねえが、さつき街りとおれが言やあ、一分か一兩貰ふのだが、默つて居たなあお前から、纏めて十兩借りてえからだ。（トこれを聞き次郎吉せゝら笑ひ、濡れた財布をしぼり此中へ金を入れ懐へ入れる。）次郎さん、氣の毒だが貸してくんねえな、默つて居るのは貸せねえのかえ、苦勞人のやうにもねえ、さつきおれが喋つたら、其の金は手にやあ入りやあしめえ、半分貸せと言つたつて貸さにやあならねえ義理づくだ、器用に十兩貸してくんねえ。これ程いふに默つて居るなあ、貸せねえといふのだな。（ト次郎吉素知らぬ顔で裾へ溜つた水をしぼつて居る、久太むつとして、）痺れを切らして貸されにやあ、たつてそれを借りようとは言はねえ。（ト久太ずつと立つて思入あつて、）街りの道具に持出した、其の魚屋の茶碗よりひゞの入つたお前の體、粉繕ひに繕つても箱書附か肩書に、まむしの次郎と名の高い極めの附いた兇狀持、どういふ話しの手續きでこいつが割れて又元の、土となるめえものでもねえから、街つた金の二重箱、命を大事にしまつて置きね

え。（トよろしく思入あつて、）次郎さん、其の内逢ひませう。

ト尻を端折りながら上手へ行きかけるを、次郎吉袖を捉へ、

次郎　これさ、待ちねえな。

久太　えゝ、何を引ツ張るのだ。（ト振拂ふ。）

次郎　何もさう氣を短く、急かずともいゝぢやあねえか、誰も貸さねえと言やあしめえし。

ト久太思入あつて、

久太　それぢやあ貸してくんなさるか。

次郎　貸さねえでどうするものだ。お前に衒りと言はれたら、どんぶり川へ飛込んで濡手で泡の五十兩おれが手へへえらねえ、假令貸せと言はねえたつて、お前を素手ぢやあ歸されねえ。（ト財布から紙幣の包を出し、）紙がねえ、一枚くんねえ。

久太　これでいゝかえ。

ト懐から四つ折の半紙を一枚出す、次郎吉とつて五圓札を五枚紙に包み、

次郎　十圓ばかりの端た金は何の足しにもならねえから、二つに分けて廿五圓、是れを遣るから取つて置きねえ。（ト出す、久太包みを取つて、）

久太　成程お前はいゝ惡黨だ、十圓と言つたら五圓か三圓、くれるだらうと思つて居たけちな料簡に引替へて、五十圓を二つに分け半分おれにくれるとは、流石は以前が以前だけ切放れのいゝくれツ振りだ。(ト此時月を引上げ、次郎吉財布の中へ札を入れ、ばつたりと落す、久太これを聞いて、)や、今の音は。

次郎　殘りを入れた財布を落した。

久太　なに、財布を落したえ。

ト久太取らうと探り寄るを次郎吉拂ひ退ける。時の鐘、忍び三重模樣にて、探り合ひのやうな立廻りになり、兩人よろしくあつて、久太財布を拾ひ星明りに透し見て、

たしかに、是れが。

次郎　拾つたか。

久太　いや、財布だと思つたら、石だ。(ト財布を懷へ入れる、次郎吉透し見て、)

次郎　橫着者め。

ト久太の脇腹を突く、久太ウンと苦しみ、立すくみになる、次郎吉件の財布と以前の金を取返し、財布へ入れ、につたりと思入、久太息の絕えしこなしにてひよろ〳〵として次郎吉に行當る。次郎吉そ

のまゝ押へて鼻へ手をやる。此の途端本釣鐘を打込み、
ト久太を川へ打込む、どんと水の音、水の花パッと立つ、次郎吉水中を見込み、きつと見得、誂への
合方にて、

むゝ、くたばつたか。

僅な金で人一人殺す心もなかつたが、おれを小僧と見くびつて、一呑みにするうはゞみ久太、きざな毒氣を吹かけられ、癪にさはつてならねえが、力づくぢやあ及ばぬ故、衒つた金を山分けに心を許させ肋の當身、骨を折らずに意趣返し、こゝが素早いまむしの次郎吉、すねに疵持つ兇状に、紺の脚絆は恐れるが、斯うとねらつてかゝつたら、金を取らねえことはねえ。

ト本釣鐘、思入あつて、

何にしろ、冷てえから、早く着物を着替へよう。

ト右の合方にて上手へ行かうとする。此の時上手より岸田義員羽織、袴、下駄、手にステツキを持ち出來り、兩人避け合ふはずみに行當る。義員拂ひのけて、突く、これにて次郎吉上手へとん〳〵と行き片手を突く、義員振返り見て行きかける。次郎吉癪に障りし思入にて、つか〳〵と行き腰を捉へて引戻す、たぢ〳〵と戻り振拂つて入替り、義員は上手、次郎吉は下手にて、兩人きつと見得、是れより誂への鳴物になり、ダンマリ模様の立廻り、此の時上手より友藏小さな弓張提灯を持ち出來り此

の中へ提灯を差出すを次郎吉打落す。友藏びつくりして叺煙草入を落す、次郎吉の足へ是れが觸り取上げる、友藏拾はれしと思ひ、次郎吉の懷から守り袋を引出す、次郎吉煙草入を捨て、是れを取らうとする、義貞割つて出てステッキで打つ、友藏守り袋を落し、あわてゝ煙草入を取上げる、義貞は錦の光りを見て守り袋を取上げる、次郎吉も光りを見て取らうとするをステッキで突く、次郎吉身を躱して尻を端折りきつと見得、友藏は下手にて、義貞にくるまる、是れを見合つて木の頭、義貞は守りをすかして見る、次郎吉は是れを窺ふ、友藏は顏を出し、ホッと思入、此の見得よろしく波の音佃にて、

ひやうし幕

二幕目

下谷坂本入口の場
忍ヶ岡新坂道の場

（役名——蝮の次郎吉、花垣の下男友藏、人力車惡玉善吉、同じぶくり藤次、同けんのみ權太、よたんぼ太藏。花垣の下女お信、七三郎妹お露等。）

（下谷坂本入口の場）本舞臺一面の平舞臺、向う小高き土手、此の前大下水、土手の向うに松の立木五六本、日覆より同じく釣枝、後上野信濃坂邊りを見たる夜の遠見、上の方長屋の横下見切り、下の方箱番屋、總て上野坂本通り夜の體、爰に二人乘りの人力車を置き、車夫善吉紺の筒ツぽ半纏縹色の半股引にて車へ腰を掛け、明りを附けし提灯を前へ置き煙草を呑み居る、傍に藤次、權太、太藏三人共半纏半股引、毛布を引掛け、車夫の拵へにて立掛り居る。この見得寄席の人寄せの鳴物にて幕明く。

藤次　今夜は北風が吹くせゐか、坂本の寄席の囃子が、大層近く聞えるな。

善吉　それに出物が西洋手品の歸天齋正一だから、囃子を聞いても面白さうだ。

權太　西洋手品もいくらもあるが、人のしねえ事をするから、何處へ出ても歸天齋の、客の來ねえことはねえ。

太藏　客といやあおら達も、酒を呑んで休んだが、手前はこゝに網を張つていゝ客でも掛つたか。

善吉　さつき二人連れの掠鳥を、連雀町まで合乘りで八錢といふ安値で乘せ込み、例の宿屋へ引込んで八十錢だと言ひ掛り、惡玉仲間の宿引が仲へはひり、六十錢取つて來た。

藤次　そいつあ旨え仕事をしたな。

善吉　所がそれから歸りがけ、筋違へ來て一杯やると、友達が押込んで、たうとう財布の底をふるひ、

又呑代に爰へ來て、客待ちをして居るのだ。

藤次　手前を始めおら達も、旅を喰ひ詰め上州から此頃こつちへ出て來たが、まともに車を引いて居ちやあ、旨え酒が呑めねえな。

權太　長い錢を取らねえから、久しく千住へも行かねえ、一晩位は行きてえものだ。

太藏　二日醉ひで天窓が重く、車の揖の上らねえほど、たらふく酒を呑みてえな。

善吉　歸天齋の手づまのやうに、一番人の目を晦ます、いゝ仕事はあるめえか。

藤次　おゝ、其日を晦ます仕事があるから、手前も合乘りに乘つてくれ。

善吉　どんな事か知らねえが、錢になるならおれも乘つて、呑直しをしてえものだ。

藤次　其の仕事の種廻しに、おら達がして貰ひてえのは、今爰に十七八ないゝ所の娘が來るが、供は女と男が一人。

太藏　頼みは、旨く車をすゝめ、其娘を乘せてくれりやあ、供の男へ喧嘩を吹つ掛け、三人寄つて叩きしめろ。

藤次　其間に手前は構はずに、娘を山へ引き上げりやあ、跡は言はずと紋切形、人通りのねえ山中で。

太藏　朝題目に夕念佛、ぐる／＼廻りの百萬遍、願以此功德に旅へ賣るのだ。

權太　珠數に緣ある惡玉善吉。
太藏　一番乘つて貰ひてえ。
善吉　そんな仕事も久しくしねえが、行く先き／＼へ足を出し、長く爰にも居られねえから、仕事は跣足でするけれど、草鞋を履かうと思ふ所、行掛けの駄賃に遣ッ附けよう。
藤次　それぢやあ旨くすゝめ込み、娘を車へ乘せてくれ。
善吉　どうかおれが口先きで、瞞着して乘せ込まう。（ト權太上手を見て）
權太　おゝ、今いふ娘が向うへ來たぜ。
善吉　おゝ、二人連の、あの娘か。
權太　こつちは木陰に隱れて居て。
太藏　娘を車へ乘せたらば。
藤次　喧嘩仕掛て叩きなぐらう。
善吉　さあ／＼、早く隱れろ／＼。

ト時の鐘、合方にて藤次、權太、太藏三人は下手へはひる、善吉は立掛り居る、よき程に上手より前幕のお露、裾模樣の振袖、嫁入り前の暇乞のこしらへ、友藏紺の着附、脚絆草履下男のこしらへ、風

呂敷包みを持ち、附添ひ出來り、上手にて、

お露　これ友藏、爰は何といふ所ぢやぞいの。

友藏　爰は坂本の入口で、是れを眞つ直ぐに參りますと、山下へ出ますのでござります。

お露　何だか淋しい所ゆゑ、早う山下へ行きたいわいの。

友藏　お信どんに札の辻ではぐれましてござりますから、見合せて居りましたが、未だ跡から見えませぬは、ひよつと道を間違へて、金杉の方へ行きはしませぬか。

お露　それとも忘れものでもあつて、後へ返つたかも知れぬわいの。

友藏　根岸へ一人で歸りましたら、容易に道は知れますまい。（ト此時善吉小腰を屈め前へ出て、）

善吉　もし、目鏡の方へ歸り車でござりますが、お召しなすつて下さりませ。

友藏　目鏡の方へ歸るのか。

善吉　へい、左樣でござります。

友藏　もしお孃さま、日が暮れましてござりますから、お供いたすも氣遣ひゆゑ、車へお召しなされませ。

お露　車へ乗るもよいけれど、わたし一人先きへ行くのは。

友藏　いえ、それはお氣遣ひなされますな、私が後押をいたして、お供いたしてまゐります。

お露　先きへ行つたら跡へ殘つた、信が一人で困らうわいの。
友藏　それは困りもいたしませうが、何處に居るか知れませねば、構はずお出でなされませ。
お露　それでも跡へ殘して行くのは。
善吉　あとにお連れがござりますなら、ゆる〳〵曳いて參りませう。
友藏　して、柳原までいくらで行く。
善吉　歸り車でござりますから、幾らでもよろしうござります。思召しだけ下さりませ。
友藏　それぢやあ却つて困るから、幾らとか言つて下さい。
善吉　左樣なら柳原まで、三錢お貰ひ申しませう。
友藏　何ぼ歸り車でも三錢は安過ぎる、五錢遣るから氣を附けて下さい。
善吉　それは有難うござります。さあお孃さま、お召しなされませ。
ト合方きつぱりとなる、捨ゼリフにて友藏お露を車に乘せ、善吉の車の梶をあげる。
友藏　どれ、後押をしませうか。（ト車の後へ廻る、此時以前の三人出來り、）
藤次　やあ、此野郞は此間おれに喧嘩を仕掛けた奴、いゝ所で逢つた、待ちやあがれ。
ト友藏を引戻す、振拂つて、

友藏　そりやあ人違ひでございませう、お前方と喧嘩をした覺えはございませぬ。

藤次　なに、ねえ事があるものか、三枚橋で突當り、おれが財布を拔かうとした、此の野郎は晝挊ぎだ。

權太　何、此の野郎は晝挊ぎだ、そんな奴なら構ふことはねえ。

太藏　思入れ爰で叩きしめ、動けねえやうにしてやらう。（ト三人で友藏を引倒し打つて掛るを留めながら、）

友藏　何でそんな事をわしがしませう。

藤次　するもしねえもあるものか。（ト蹴たり踏んだりする。此内お露は車の上にて氣を揉み、）

お露　これ車屋さん、留めてやつて下さいまし。

善吉　お怪我があつてはなりませぬ、構はずお逃げなされませ。（ト善吉は花道へ車を曳いて行く。）

お露　あれ、友藏に別れては。（ト言ふを構はず、）

善吉　默つておいでなされませ。

トばた／＼になり、善吉は逸散に花道へ車を曳いてはひる。友藏はこれを知らず。

友藏　此身に覺えもないことを、言ひ掛けなして打擲なすは、こりやこなた衆は物取りだな。

藤次　いや、盜人たけ／＼しいとはうぬがことだ、おれが財布を拔かうとした、巾着切の橫着野郎め。

權太　身分は賤しい車夫だが、人の物は手拭一本盜んだことのねえものだ。

太藏　よくも堅氣なおら達に、盜人の名を附けやあがつたな。

ト三人してさいなむ、友藏四邊を見て、車のなきにびつくりして、

友藏　やゝ、こりや、いつの間にかお孃さまを、乘せた車が見えないが、何處へ曳いて行つたことだか。

ト向うへ思入、三人友藏を取卷き、

藤次　娘を乘せたあの車は、爰らに見馴れぬ奴だから、何處へ行つたか知れやあしねえ。

權太　ちよつと見るから一癖ある狼者と知らねえで、娘を乘せたは手前のあやまり。

太藏　器量も優れた別品だから、大方旅へ連れて行つて、娼妓にするに違えねえ。

友藏　さう聞いては斯うして居られぬ。(ト行かうとするを酷く引倒し)

藤次　いくら手前がもがいても、行先き知れねえ宵闇に、

權太　何處を目當に尋ねる考へだか、

太藏　無駄なことだ、よしにしろ。(ト三人して蹴倒す、友藏起上つて)

友藏　假令行先き知れずとも、爰に斯うして居られようか。

藤次　居られようが居られめえが、惡名付けた上からは、めつたに手前を、

三人　遣るものか。(ト行かうとするを三人邪魔をする。)

友藏　えゝ、邪魔をするのはおのれらも、今の車夫めと一つ穴だな。

藤次　まだ〳〵そんなことを吐かすか、狐狸に劣らねえ、人を化す獸だが。

權太　旅稼ぎの車夫と、一つ穴と言はれちやあ、小癪に障つて料簡ならねえ。

太藏　動けぬやうに叩きしめ、溝の水を呑まして遣らう。

友藏　何で手籠めに逢ふものか。

藤次　それ、遣ッ附けろ。

權太
太藏　合點だ。

ト寄席の鳴物を借り三人打つて掛り、友藏行かうとするを支へる立廻りよろしくあつて、トゞ藤次友藏の脇腹を蹴る、これにてウンと悶絶なし、ばつたり倒れる。三人見て。

藤次　やあ、こいつァどうかごねたやうだ。（とびつくりする。）

權太　掛り合にならねえ内、

太藏　ちつとも早く、山へ逃げよう。

藤次　えゝ、びく〳〵するにやあ及ばねえ。

ト時の鐘、合方にて三人下手へ足早にはひる。ばた〳〵にて上手より下女お信、着流しお露の蝙蝠傘

を持ち出來り、上手にて、

お信　友藏どのがお供ゆゑ、案じることはなけれども、嘸途中にてわたくしをお待ちなされてゞござりませう、取急いで櫛を落し、ちよつと跡へ戻つた間に、お見失ひ申したが、今まで後の事はない先きへおいでなされましたらう。どれ、少しも早く行きませう。（ト足早になり、友藏に躓く、これにて友藏うんと心付く、）これはどなたでござりまする。心急きにてつい躓き、御免なされて下さりませ。

ト友藏思入あつて、

友藏　えゝ、車夫めがお孃さまを何處へ連れて行き居つたか。（ト口惜しき思入、此の聲にお信透し見て、）

お信　や、さういふは友藏どのか。

友藏　おゝ、お信どのか。（ト胸を押へ苦しむ思入、お信介抱して、）

お信　お前はどうかしなすつたか、氣をしつかり持ちなさんせ。（ト友藏お信を見て、）

友藏　あゝ、お信どの、遲かつた〳〵。

お信　なに、遲かつたとは。（ト合方になり、）

友藏　前栽場の曲り角でこなたの影が見えなくなつたが、待つて居られずお孃さまの、お供をなして爰

まで來たが、宵闇ゆゑに道は闇し一方ならぬ大事のお身に、車にお乘せ申さうと、思ふ折柄目鏡橋へ歸り車をすゝめられ、是れ幸ひとお乘せ申し、後押をして曳出す所へ、人力車夫が三人來てわしに遺恨があると言つて、惡者どもが打つて掛り亂暴なすを止める内、お孃さまを乘せた車が何れへ行つたか行方知れず。

お信　え、すりやお孃さまを乘せた車が、何れへ行つたか知れぬとか、えゝゝゝ。

トお信おどろいて下に居る。

友藏　わしへ無法に打つて掛つた、其車夫の三人も同じ仲間と思ふゆゑ、引ッ捉へて交番所へ連れて行かうと思ふうち、脾腹を蹴られて氣絶なし、倒れた其間に逃げてしまひ、何處を目當に追つ掛けようか、行先き知れぬ此の宵闇、せめてこなたが一緒にて、お孃さまと合乘りにお側にあつた事ならば、又お力にならうもの、今更言つても返らぬが、まことに悔しいことをした。

お信　おゝ嘸悔しいことでござんせう、わたしがお供に後れたのは、日が暮れたゆゑ無用心と櫛を探れば無いゆゑに、さては道へ落したかとちよつと跡へ戻る間にお孃さまを見失ひ、常の氣質に心が急き、右へ出るのを左りへ間違へ、二町ばかり行き過ぎて、山下通りは後の方と聞いてびつくり取つて返し、急いだなれど夜道ゆゑ、思はず後れて此の災難、こりや何うしたらようござりませ

う。

友藏　けふお親類へお暇乞に新に出來たお振袖、目立つお裝が害となり、車夫どもにお孃さまを勾引されし上からは、何うも斯うも仕樣はない、女ならば知らぬこと、男のおれがお供して何と言譯が出來ようぞ。

お信　些細な櫛に心が引かれ、後へ戻つてお供をせず、濟まぬことをいたしました、お孃さまもお年頃に、岸田さまのお媒人で駿河臺の香村樣へ御縁談もあらかた極り、今日根岸の御親類笹川さまへお出でになつたも、お暇乞やらお禮やら、最早主あるお孃さま、今夜これぎりお行方が知れぬ時は旦那樣や、岸田樣がどの位御迷惑をなさるか知れぬ、こりやひよんな事になりましたなあ。

　　ト お信泣く、友藏思入あつて、

友藏　其の申し譯は命を捨て、わしがするから内へ歸り、此の趣きを旦那樣へ、どうぞお話し申して下さい。

お信　いえ〳〵、お前ばかりの科ではない、わたしがお供をせぬのがあやまり、お前が死ねば共々に、わたしも死なねばならぬけれど、其の言譯は友藏どの、暫く待つて下さりませ。

友藏　なに、死ぬのを暫く待てといふのは。

お信　さあ旦那樣への言譯に、死なうといふは尤なれど、其の車夫が惡者の仲間でなくばお孃さまをお連れ申して行つたであらう、兎にも角にも死ぬのを延べ、一先づ家の近所へ行き篤と樣子を聞いた上、お歸りがないことならば、其時こそは申譯にわたしも一緒に死にませう、今お前がこゝで死に、お孃さまが御無事であつたら、ほんの犬死になりますぞえ。

友藏　むゝ。（ト思ひ入れ。）

お信　さあ急く所ではない程に、心を靜めて友藏どの、一先づ近所へ歸りなさんせ。

友藏　成程こなたの言ふも尤、お孃さまが御無事なら、爰で死ぬのは犬死だが、元より共謀でした事なれば、所詮お連れ申しはしまい。

お信　さあそれも日頃信心なす、神や佛のお助けがあるまいともいはれませぬ。

友藏　それぢやあこなたの詞に隨ひ、一先づ近所へ立歸り、篤とお内の樣子を聞き、其の上の事に仕よう。

お信　それではわたしの言ふ事を、聞分けて下さんすか。

友藏　むゝ、異見について今死ぬのは、暫く思ひ止まらう。

お信　さういふことなら、少しも早く。

友藏　兎にも角にも此の邊を一遍お尋ね申して行かう。（ト立上らうとして、）あいたゝゝゝゝ。

ト體の痛む思入にて、下にゐる。

お信　お前どうぞしなさんしたのか。

友藏　惡者めらに打たれたので、そこらこゝらが痛んでならぬ。

お信　何處ぞ疵でもござんすか。

友藏　なに、疵は左のみなことではない。

お信　そんなら友藏どの。

友藏　どれ、お尋ね申さうか。（ト此時寄席の打出しの太鼓を打つ。）

お信　や、あの太鼓は。

友藏　大方寄席の、（ト立上るを道具替りの知らせ、）はねであらう。

ト右打出しの太鼓にて、兩人身支度する、此の模樣よろしく道具廻る。

（御靈屋脇の場）　本舞臺一面の平舞臺、向う大きな一對の石燈籠を數本竝べ　此の後古き柵矢來藪疊杉の大樹の林、日覆より同じく釣枝、上の方樹木の張物で見切り、下の方古き柵矢來、總て忍ケ岡御靈屋脇の體。爰に以前のお露を乘せし車　夫善吉、車を下へ置き提灯を持ち立掛り居る、此の

見得時の鐘、凄味の合方にて道具止る。

お露　もし車夫さん、爰は氣味の惡い所ゆゑ、早く賑かな山下へ連れて行つて下さいまし。

善吉　今お前さんのお供さんが、爰へ尋ねて來ますから、少しお待ちなされませ。

お露　爰で待たずと山下で、待合して下さいまし、生憎今夜は雨氣にて星さへ見えぬくら闇に、人通りのない森の中、わたしや怖うてならぬわいな。

善吉　何もこはいことはござりませぬ、晝と違つて日が暮れたら誰も通る者はなく、時々出るのは人を化しに狐や狸が出るばかり。

お露　え、そんなものが此處へ出ますか。（トびつくりする。）

善吉　それ、そこへ出ました。

お露　あれえ。（ト驚いて車より飛び下りる。）

善吉　怖くばわたしにしつかりと、取附いておいでなされませ。（ト善吉娘を押へながら上手を見て、）えゝ何をして居るか、早く來りやあいゝに。

ト時の鐘、合方、風の音になり、上手より三人出來り、善吉を見て、

藤次　そこに居るのは、善吉か。

善吉　おゝ三人か、待つて居た。
權太　さうだらうと思つたから、
太藏　是れでもよつほど急いで來たのだ。
善吉　さうして供の野郎はどうした。
藤次　喧嘩仕掛けで三人か、引摺り倒して叩きしめ、むしやぶり附くを蹴倒すはずみ、
權太　脾腹をひどく打つたと見え、うんといつてぶツ倒れ、
太藏　手足も藻掻かずそれぎりに、可愛や野郎はくたばつた。
善吉　それぢやあ藤次が蹴殺したか。
藤次　殺す氣もなかつたけれど、時のはずみで殺生をした。
善吉　そいつあ酷いことをしたな。（ト是を聞きお露おどろき）
お露　えゝ、それでは最前友藏を、お前方が殺せしとか。
藤次　おゝ、供の野郎はおれが殺した。
お露　えゝゝゝゝ。（トどうと下に居る、一つ鉦凄味の合方になり）
藤次　そんなにびつくりしなさんな、決してお前は殺しやあしねえ、是れから四人でかはるがはるに、

權太　お前の手を取り足を取り、可愛がつて上げるから、

太藏　ぴく〳〵せずとおとなしく、言ふなり次第になつて居ねえ。

お露　それではわたしをお前方が、

善吉　たゞで存分慰む氣で、車に乘せて連れて來たのだ。（ト毛布を眞中へ敷き、）まあ、此の上へ乘んなせえ。（ト顫へてゐるお露をだいて毛布の上へ坐らせる、お露四邊を見て、）

お露　あゝこれ、誰ぞ助けて下さりませ、お巡査さまのお出ではないか。お巡査さま〳〵。

善吉　えゝやかましい、靜にしねえ、いくらお前がわめいても晝さへ人の通らぬ裏道。

藤次　日が暮れたらば塒をば、取りそこなつた烏の外、聲の聞えぬ此の山中。

權太　雨氣に曇る鐘の音を、數とりにしてしつぽりと、爰で四人が抱いて寐るのだ。

太藏　かう見込まれたら仕方がねえ、逃げも隱れも出來ねえから、おいら達の自由になんねえ。

ト お露の手を取るを振拂ひ、

お露　えゝ何でお前方の自由にならうぞ。（ト逃げに掛るを引戻し、四人取卷いて、）

善吉　じたばたすりやあ縛り上げ、存分四人で慰んだ、

藤次　其の上酒の呑代に、身ぐるみ剝いで殺してしまふぞ。（トきつと言ふ。）

お露　え〻。（ト顫へ居るを、權太猫撫で聲をして、）

權太　お前が素直に自由になりやあ、手荒いことをするものか。

太藏　命が惜しくばおいら達の、言ふなり次第、

權太
太藏　自由になんねえ。（ト傍へ摺寄る、お露は顫えながら、）

お露　あ〻、誰ぞ助けて下さりませ。（ト向うへ思入、）

善吉　どうで素直にうんとは言ふめえ。

藤次　手短かに、遣ッ附けろ。

權太
太藏　合點だ。

ト風の音烈しく、合方早めて四人押へ附けるを、一生懸命に振拂ひ逃げ出すを帶をとらへ引戻す、此の内花道より次郎吉縞の半纏、尻はしをり低き駒下駄にて、鶯坂三川屋といふ小田原提灯を提げ出て來る、此の内始終お露は助けてくれ〱といふ、次郎吉是を聞いて、

次郎　や、是の山中で助けてくれと、いふのは正しく女の泣聲、無法なことでもされるのか、こりや聞き流しにならねえわえ。（トつか〱と舞臺へ來る、此體を見て、）やあ、こいつ等何をするのだ。

トいふ聲を聞いてお露は嬉しき思入にて、

お露　どうぞ助けて下さりませ。（ト言つた儘打伏しになる、四人は次郎吉を見て、）

善吉　やあ、見る影もねえ小野郎め。

藤次　何を仕ようとこつちの勝手だ。

權太　何でこゝへ飛び込んで、

太藏　仕事の邪魔をしやあがるのだ。

次郎　さういふわいらは人力車夫、人通りのねえ山中へ夜更に車を曳込んで、娘を手籠にするのだな。

善吉　そりやあ言はずと知れたことだ、大もがきで此の山中へ曳込んで來て、

藤次　爰で四人で慰むのだ。

權太　とんだ車の後押に、

太藏　出しやばる邪魔な小野郎め。

善吉　口を利かせず、たゝんでしまへ。

三人　合點だ。

ト此内次郎吉は木の枝へ提灯を掛け、風の音、一つ鉦の入りし合方になり、三人次郎吉に掛るをなぐりつけ、善吉有合ふ枯枝の木片を取り、打つてかゝる、次郎吉身を躱し、直に其の枝を引きとり善吉

の天窓を毆ろ、これにてどうと下に居ろ、次郎吉きつとなつて、

次郎　今日お袋の命日に苦勞を掛けた恩返し、芋坂下の寺へ行き墓場で唱へた題目の、その法華經の鶯谷、歸り道ゆゑ玉の湯へ一風呂はひつて連が出來、十時過ぎまで三金で呑んだ擧句にぶら〳〵と、山を突ッ切る御靈屋脇、うぬらが慰む此娘を助けて遣るも後生の種、どいつが中で音頭取りだか、念佛講の百萬遍、片ッ端から交番所へ、珠數繫ぎにそびいて行くぞ。

善吉　しやらッくせえことを、

四人　吐かしやあがるな。

ト右の鳴物にて四人次郎吉に組附くを、枯枝にてなぐり、烈しき立廻り、善吉人力車を突掛ける、是れを柳に立廻りよろしくあつて、トゞ三人花道へ逃げて行く、次郎吉つか〳〵と花道附際まで追掛けて行く。此の間に善吉は車をひき、上手へ逃げてはひる。次郎吉向うを見て、

次郎　えゝ口程にもねえ弱い奴等だ。（ト跡へ返り枯枝を捨て、木に掛けし提灯を取りお露の側へ來て、）姐さん嘸お前こはかつたらう。（トお露打伏しになりしまゝ、）

お露　どうぞ堪忍して下さりませ。

次郎　惡い奴等は追ひ散したから、もう案じるには及ばねえ。

お露　それでは今の車夫は、

次郎　みんな逃げて行つてしまつた。（ト時の鐘、風の音にて提灯の明り消える、）南無三、蠟燭がなくなつた。（トこれにて窓蓋をおろし暗くなり、お露顔を上げ、）

お露　どんな憂き目に逢ふことかと生きた心はございませず、口の内にて神さまをお願ひ申して居りましたが、それではあなたが私を、お助けなされて下さりましたか。

次郎　おゝ、鶯谷の三金でうか〳〵吞んで遅くなり、貸提灯を連にしてぶら〳〵爰へ來た所、誰か助けてくれといふ女の聲が耳へ入り、今日お袋の命日に何も後生と飛込んで、今の奴等を毆り倒しお前を助けて上げたのだ。

お露　思ひがけないお前さまが、爰へお出でなされましてお助けなされて下さりましたは、心の内でお願ひ申した神々さまのお導き、何とお禮を申しませうか、詞に申し盡されませぬわいな。

次郎　高の知れた車夫を追ひ散らしたまでのこと、何の禮に及ぶものか、さうしてお前の家はどこだか、わつちが送つて上げようから、氣を慥に持ちなせえ。

お露　それはまあ御親切に有難うござりますわいな。

次郎　何にしろ蠟燭がなくなつたので眞ツ闇だが、どうやら空も切れ上り、雲間に星が見えて來たが、

早く月が出りやあいゝ。（ト風の音になり日覆より灯入りの月をおろす、）今の風に雲が晴れ、月が出たので明るくなつた、して姐さん、お前の家は。

お露　はい、私は柳原の岩本町でござります。

ト お露顔を上げる、月の明りに次郎吉顔を見る。此の時窓蓋を上げる。

次郎　や、さういふお前は。（ト お露も次郎吉を見て、）

お露　ほんに、いつぞや兩國で。

次郎　おれがどんぶりやつた時、屋形船に居た娘御か。

お露　木の間の闇にお顔は見えねど、よく似た聲と思ひましたが、やはり其の夜のお方であつたか。

次郎　思ひがけなく今夜こゝで、

お露　お目に掛るも不思議な御縁。

次郎　見ず知らずの此のおれに、五十圓といふ金を惠んでくれた大家の娘御、供も連れずにたゞ一人、今の奴等に此の山へどうして連れて來られたのだ。

お露　根岸に縁家がござりまして、それへ參つた歸りがけ庚申塚で灯りがつき、暗き夜道を召連れし女子が途中で見えなくなり、跡は一人の男のみゆゑ車を雇つて私を乘せる所へ惡者が、附添ふ男

に喧嘩を仕掛け打ちつ叩いつ亂暴をする間に車を曳出して行先き知れぬ山へ引込み、跡から先きの三人が參りまして私の、身を汚さうといたしますゆゑ、聲を立つれど往來はなく恥しい目に逢ふことゝ涙にくれて居りましたが、思ひがけないお前さまに助けられたが身の仕合せ、まことに嬉しうござりますわいな。

次郎　そりやあとんだ目に逢ひなすつた、嘸獨でこはかつたらう、もう案じるには及ばねえ、お前の兄御に五十圓惠んで貰つた恩返し、家まで一緒に行つて上げるが、山通しは淋しいから屛風坂から下谷へ來て車に乘せて送つて上げよう、然し此裝でも行かれねえから家まで一緒に來てくんなせえ。

お露　お家はどちらでござります。

次郎　わつちが家は新開町の向柳原二丁目だが、お前一緒に來てくんなさるか。

お露　お前さんと御一緒なら、どちらなりと參りまする。

次郎　お孃さんに似合はねえ、程のいゝことを言ひなさる。（トお露恥かしき思入にて、）

お露　實はわたしは、あの時から。

次郎　え。（ト思入。）

お露　お前さんに、もう一度お目にかゝりたうござりました。

次郎 何でわつちに逢ひたいのだえ。

お露 さあ、それは。（ト次郎吉を見て恥かしきこなしにて顔を隠す、次郎吉思入あつて、）

次郎 此の御靈屋の近所には狐や狸が居るといふが、こんな娘にこんなことを、言はれる株は持たねえが、化されたのぢやあねえか知らぬ。（ト眉毛へ唾を附ける。）

お露 あれ、氣味の惡い、其のやうなことを。（ト次郎吉に縋る、其の手を取つて撫て見る、）何をなされまする。

次郎 毛が生えて居るかと思つて。

お露 えゝも、わたしや狐ぢやござりませぬ。

次郎 いや、こんな狐なら化されてえ。

お露 それはまことでござりますか。

次郎 何の嘘をつくものだ。

お露 えゝ嬉しうござりまする。

ト嬉しき思入。次郎吉そつと思入、此の途端時の鐘。氣をかへて、

次郎 梢を落す夜風より、今の詞が身にしみて、行先き迷ふ戀の闇、

お露　茂る若葉に影くらき、森の木の間にさす月を、よすがに辿る二人連れ、
次郎　餘所から見たら道行と、浮名まうけに人の目を、
お露　忍ヶ岡の山つゞき、
次郎　更けて往來も夏の夜に、
お露　春の名殘りか鐘の音も、
次郎　おぼろに霞むしのばずの、
お露　池に蛙の鳴くころは、
次郎　今にも知れぬ雨の知らせか、
お露　降らぬ其間に、
次郎　いや、お前ゆゑなら、（ト次郎吉立上る、お露袖へすがり、兩人顏見合せにつこり笑ふな木の頭）濡れてもいゝ。

ト合方風の音次郎吉空を見上げる。お露は嬉しき思入よろしく、

ト飴賣の太鼓にてつなぎ、直に引返す。

ひやうし　幕

三幕目

岩本町花垣宅の場
向柳原裏長屋の場
美倉橋北川岸の場

〔役名〕――蝮の次郎吉實は高村秀賀悴秀甫、岸田義員、船頭蟒久太、花垣の下男友藏、巾着切隼の千五郎、同どら猫九郎藏、人力車惡玉善吉、同じぶくり藤次、同けんのみ權太、同よたんぼ太藏、花垣手代仙八、同宗助、酒屋の御用德助、鳶の者龜の子與吉、花垣七三郎。花垣の妹お露、下女お信、雇婆お虎等。〕

（花垣宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向う紺の暖簾口、上手帳箪笥を仕込みし戸棚、諸縣出納簿と記せしけんどんの箱を二つ並べ、下手諸縣の狀差し、公債證書賣買簿と記せし帳を掛け、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方後へ下げて土藏の張物、前駒寄せ、此の前に丸物の井戸總て柳原邊公債證書賣買取扱所の體。上手に手代仙八、宗助着流し前垂にて住ひ、下手に鳶の者與吉出入りの職人○△□の三人、何れも着附の上に花垣の印半纏にて控へ居る。此の見得合方飴賣の太鼓にて幕明く。

○　旦那樣を始めとして、

△　お見世の衆もとんだことで、

□　さぞ御心配でございませう。

仙八　お前方もいそがしい所を、昨夜から立通しで。

宗助　大きに御苦勞でございました。

○　いえもう不斷御恩になりまする、お店のことでございますから、幾日暇を費しましても決して厭ひはございませぬ。

△　妾らが御恩送りゆゑ、昨夜から今日へかけ御親類は申すに及ばず、所々方々心當りを、

□　殘るとこなく搜しましたが、何處へおいでなされましたか、少しも目串が附かぬので、お行方が知れませぬ。

與吉　お孃さまお一人なら、お堅いやうでも此の道は、別なことゆゑ男でもあつてのことかと思ひますが、友藏どんやお信どんが、お附き申して二人とも、見えぬといふは不思議なことだ。

○　開化の人は一口に、迷ひの種とけなしますが、

△　昔からあるものなれば、占ひにでも方角を、

□　見て貰つたら當りが附き、搜す便りになりませう。

仙八　そりやいふまでもない、今朝早く當時銀座で名の高い本國堂へ見せに遣つたら、三人とも災難で

滯つては居るけれど、

宗助　決して命に別條なく、後方までには便りがあるか、又は直に歸つて來るか、必ず今日は知れようと、請合つてよこされた。

與吉　本國堂が請合つたら、きつと知れるに違ひない、早く吉左右を聞きたいものだ。

○　いつたい昨日お孃さまは、どちらへお出でなされましたな。

仙八　お前方も知つての通り、神田川の岸田樣がお媒人で、お孃さまは駿河臺の香村樣へ此間御縁が極り、

宗助　近々お出でなされるに附き、根岸の御縁家笹川樣へお暇乞やらお禮やらに、昨日お出でなされたのだ。

與吉　昨夜おいらが笹川樣へお聞き申しに行つたらば、日暮にお歸りなされたと申すことゆゑ、若し途中で何ぞ間違ひでもあつたことか、何にしろ供に行つた二人もそれぎり歸らねえのは、どうしたことか譯が分らぬ。

○　本國堂の占ひで、知れるといふを力にして。

△　もう一遍私共は根岸の方から、上野近所を。

□　手分けをいたしてお孃さまを、お尋ね申して參りませう。
仙八　何ぞ途中にありはしないか、
宗助　所々で樣子を聞いて下さい。
三人　畏りましてござりまする。
與吉　それぢやあみんな御苦勞ながら、
○　噂を聞いて、
三人　參りませう。（ト右の鳴物にて三人花道へはひる。）
仙八　どうぞ早くお孃さまの、お行方が知れゝばよいが、差當つて困つたのは、今日香村樣の御結納を
宗助　岸田樣が御持參ゆゑ、何と言譯したものと、旦那樣がさつきから御心配なされてだ。
與吉　旦那樣の御心配をなさるのは御尤だ、是れがほつと出の椋鳥か、山出し下女なら仕方がねえが、友藏どんやお信どんが、どんなことがあらうとも、早くお知らせ申せばいゝに、氣の利かねえことだなあ。
ト合方になり、下手より前幕の友藏、お信しを〳〵と出來り、門口にて、
お信　友藏どの、お前先きへはひりなさんせ。

友藏　いや、おれはお内へ面目ないから、お前先きへはひつて下さい。
お信　いえ〳〵、わたしや後からはひります。
與吉　表でがや〳〵話しをするのは、どうやら二人の聲のやうだ。（ト門口を明け見て、）おゝ、友藏どんにお信どんか。
仙八　なに、二人が歸つて來た。
宗助　何處を今まで歩いて居たか、
與吉　早く内へはひりなせえ。
ト與吉兩人を引張り込む、兩人天窓を下げ、しほ〳〵と下手に居る。
仙八　二人が歸つて來たことを、旦那樣へお知らせ申しませう。（ト此時奧にて、）
七三　いや、知らせには及ばぬぞ。
ト合方になり、奧より七三郎羽織着流しにて出來り、二重眞中へ住ふ。
友藏　旦那樣、申し譯も、
兩人　ござりませぬ。（ト兩人ひれ伏す、七三郎見て、）
七三　見れば妹を召連れず、申譯がないといふのは。

友藏　とんだことをいたしました。
七三　如何なることか仔細を申せ。
友藏　これお信どの、先づお前から昨夜の事を、先きへお話し申して下さい。
お信　いえ、わたしよりお前が先きへ。
七三　益なきことを爭はずと、
與吉　旦那樣もお待兼ね、早く仔細を言ひなせえ。（ト合方きつぱりとなり）
お信　何をお隱し申しませう、昨日お供いたしました笹川さまで、お手厚い御馳走ゆゑに手間取りて、六時頃にお暇いたし札の辻へ出ます前で、道が暗うなつたればそゝくさ者に氣も急かれ、つい挿して居る櫛を落し、尋ねに後へ戻るうち、友藏どのがお供して參りますのを見失ひ、右へ曲るを左りへ曲り、二三町呼びながら參りまして道を聞き、びつくりいたして取つて返し、お尋ね申しましたれど、お孃さまにお目にかゝらず、其の儘お內へ歸られませねば、坂本邊を幾度となくお尋ね申して居りました。（トお信泣く〳〵、友藏おづ〳〵顏を上げ、）
友藏　又私はお供して上野の際まで參りましたが、宵闇ゆゑに道は暗く不用心ゆゑ車を雇ひ、お孃さまをお乘せ申し、お側を放れず後押なし車を曳出す其所へ、車夫體の者が三人參り、無法無體に

私へ遺恨があると打つて掛り、亂暴なすを支へる内お孃さまをお乘せ申した、車は何れへ參つたか、其の混雜にお行方知れず、南無三寶こいつらが巧みの罠に掛つたか、警察署へ引立て詮議をなさんと思へども多勢に無勢情なや脾腹を蹴られて悶絶なし、暫く倒れて居るうちにお信どのが跡より參り、介抱なしてくれましたので、命は危ふく助りましたが、其の三人も逃げてしまひお孃さまを失つては申譯なき次第ゆゑ、死なうと覺悟いたしましたを、お信どのに止められ、昨夜夜通しこゝかしことお尋ね申しましたれど、手掛りとてもござりませねば、お供いたせし身の越度、是れまで厚きお惠みを受けたる御恩も送らずに、御難儀を掛けまする申譯は、只今これにていたしまする。御免なされて下さりませ。(トよろしく思入あつて、つか〱と門へ出る。)

七三 それ、留めてくれ。

與吉 はツ。(ト直に門口へ出る。)

友藏 南無阿彌陀佛。(ト井戸へ飛込まうとするを與吉留めて、)

與吉 何でそんなことをするのだ。

友藏 命を捨てねば旦那樣へ、申譯がござりませぬ。どうぞ放して下さりませ。

與吉 どうしてお前が放せるものだ。

ト　吉友藏を内へ突込む、友藏又出ようとするを手代二人にて留める、此間にお信門口へ出る。

お信　南無阿彌陀佛。（ト井戸へ飛込まうとするを與吉留めて、）

與吉　えゝ、お前までが同じやうに、無分別なことをするのか。

お信　お孃さまのお側に居ぬのが、友藏どのよりわたしの越度、死なねばどうも濟みませぬ。

與吉　そりやさうでもあらうけれど、旦那がお止めなさるのだ、まあ〳〵内へはひりなせえ。（トお信を無理に内へ突込み、下手へ向つて、）これ、何も見るものぢやねえ、早く爰を通りなせえ、

ト内へはひり門口をしめる、友藏お信は下手にひれ伏して居る。七三郎思入あつて。

七三　これ友藏、お信、こゝへ來い。

友藏お信　はい。（ト顏を上げずに居る。）

七三　はて、爰へ來いといふに。

友藏お信　はゝい。（ト誂への合方になり、おづ〳〵前へ出る。）

七三　今そち達の話しを聞けば、不調法とは言ひながらまことに是非もないことだ、常から主人を大事に思ひ律義な心に言譯なく、死なうといふも尤もだが、妹が行方の知れぬのも昨夜からのことなれば今にも歸つて來ようも知れず、よし歸らぬとて降りかゝる災難なれば仕方がない、たゞ差當

つて難儀といふは岸田樣の御媒介にて駿河臺の香村氏より今日結納が來る約束、如何はせんととつおいつ思案に暮れるその中へ、そち達に身を投げられたら又もや難儀を増すのみか、世間へ恥をかゝねばならぬ。切なきおれが心を察し、主人の爲を思ふなら死なうと迫る念を斷ち、共々力になつてくれ、それが何より忠義ぢやぞ。（ト思入にて言ふ、兩人は有難涙にくれて泣き居る。）

與吉　旦那樣があのやうに、ことを分けておつしやるから、お内のお爲を思ふなら短氣なことをしなさんな。

仙八　一季半季の者ではなし、長年勤めたお前方、

宗八　御恩を思はゞ旦那樣へ、御苦勞掛けぬやうにしなさい。（ト兩人顔を上げ、）

友藏　生きて居つては御主人へ申譯なき不調法を、致しましたをお叱りなく、御教諭下さる勿體なさ。

お信　何と申してよからうやら、有難涙にくれまして、申し上げやうがござりませぬ。

七三　今もおれがいふ通り、行方の知れぬも僅か一夜、身の言譯にそち達が命を捨てた其跡へ妹が無事で歸つて來たら、犬死になるのみならず、おれが寐覺の惡いことはどの位だか知れはせぬ、必ず死なうなどゝいふ不料簡を出さないで、奉公大事に二人とも、おれが力になつてくりやれ。

友藏　はあ有難い其のお詞、何とお禮を申しませうか、

お信　詞に申し盡されませぬ。

七三　昨夜から寐ないとあれば、定めて疲れたことであらう、奥へ行つて氣を落着け、ゆつくり休息したがよい。

兩人　有難うござりまする。

與吉　さあ、旦那樣の仰せに隨ひ、

仙八　奥へ行つて、

仙八
宗助　休息しなさい。

友藏　頭を始めお前方も、よく親切にして下され。

お信　跡でお禮を申しまする。

七三　さあ／＼、早く奥へ行きやれ。

友藏　左樣なればお詞に、

お信　隨ひますで、

兩人　ござりまする。（ト合方にて友藏お信しな／＼と奥へはひる。）

七三　得心はしたけれど、氣の立つて居る二人ゆゑ、奥で心を附けてくりやれ。

仙八
宗助　畏りましてござりまする。（トやはり合方にて仙八宗助奥へはひり、七三郎思入あつて、）

七三　今二人の者の話しでは、人力車夫の巧みに乘り可愛やお露は勾引され、如何なる憂き目に逢ひ居るか、大方末は旅へでも連れて行かれることであらう。

與吉　けいづ買と同樣に勾引しを合點で、娘を買込む貸座敷や曖昧茶屋が道中には、幾らもあると云ひますから、今朝早く道中筋へ家の奴等を立たせました。

七三　よく心付いて遣つてくれた、歸つて來たら禮を仕よう。

與吉　なに、禮などが入りますものか。爰らで御用をたさなけりやあ、日頃の御恩が返されませぬ。

ト合方きつぱりとなり、花道より岸田義員羽織襠高袴、黑帽子、駒下駄、跡より車夫三平紺印附の半纏、同じく股引、足袋にて袱紗包みの目錄を持ち出來る。續いて紺看板の中間二人油單を掛けし結納の釣臺を擔ぎ來り、花道にて、

義員　こりや三平、あれへ參つて案內いたせ。

三平　畏りましてござりまする、（ト門口へ來り、）頼まう〳〵。（ト與吉門口を明け、）

與吉　はい、何處からお出でなされました。

三平　岸田義員でござる、お取次下され。

與吉　はい〳〵、旦那お聞きなされましたか。

七三　最早御入來なされしか。（ト出迎へ、義員を見て、）甚だ取散しございますが、是れへお通り下さりませ。

義員　然らば御免下され。

ト合方きつぱりとなり、義員目錄包みを持ち會釋して上手へ通り住ふ、供の者は門の外に控へゐる。

七三　まだお間がございませうかと存じましたが、お早い御入來、御苦勞千萬にございまする。

義員　善は急げと刻限より少々早く參つてござる。（ト義員改つて、）扨て今日は吉辰にて、香村氏より御緣女へ結納を送られまする、目錄通り御受納下され。

ト目錄書を白木の臺へ載せて出す、此の時釣臺より白木の臺へ帶代の包み、家內喜樽、鯣、苧、扇子など何れも臺附にて、下手へ出す、奥より仙八、宗助出てこれを受取り、七三郞の前へ並べる。

七三　御丁寧なる御結納、目錄通り幾久しく、受納いたすでござりまする。（ト辭儀なし、）申し附けし品是れへ。

仙八
宗助　畏りましてござります。

ト奥へはひり、直に仙八は受取書を載せ白木の臺へのせ持ち出て、七三郞の前へ置く、宗助は盃に祝

儀を載せ持ち出て、

宗助　態とお祝ひ申します。(ト祝儀を渡す。)

供三人　有難うござります。

七三　豫てお打合せいたせしゆゑ、受納書は認め置きました。(ト義員の前へ出す、)

義員　正に祝納いたしてござる。

七三　今般の儀に就いては、岸田樣の萬事の御配慮、有難う存じまする。

義員　お育ち柄とは申しながら、おしとやかなお妹御、手跡は元より歌俳諧香茶の湯、絲竹の道、殊更裁縫の業に精しく、凡そ婦女子のなす事は一として出來ざることなし、類稀なる御緣女ゆゑ、かね〲何れへかよき方へ、御周旋いたさうと思ふ折柄、僕が局長香村氏は維新前舊幕府の旗本ゆゑ、自然いまだに舊習殘り開化を嫌ふ譯ではなけれど、學校などへ袴を附け男子に等しき粧ひなし、漢語を用ふる婦女を好まず、又子息も和漢洋學に日夜勉強いたされゝど、嘗て書生の風儀なく最も物堅き性質にて、娼妓藝妓を妻となすは士たる者の恥づべきこと、堅き育ちの娘をば娶りたしと聞きしゆゑ、それ幸ひと話せしに殊の外なる悦びにて、急速緣談整ひて卽ち今日御結納御取極めに相成つて、媒介いたせし僕に於ても、大慶至極にござりまする。

ト義員悦ぶ、七三郎じゆつなき思入。

七三　左様に仰せられましては實に恐縮いたしまする、兩親共に早く世を去り、我が手許にて人と成れば、教育とても行屆かず不束至極の妹をば御媒介下されて、お物堅き香村氏へ差上げますることに至り、兄の身にとり如何ばかり、有難い儀にござりまする、嘸や冥土で兩親も、安心いたすでござりませう。

義員　實に先方の望む所に申分なきお妹御ゆゑ、思はぬ僕が手柄となり、家内なども殊の外御縁を悦び居りまする。

七三　香村氏を初めとしてあなた方まで、其のやうにお悦び下さりまして、まことに以て私身に取り（ト思入あつて、）申し上げやうもござりませぬ。

義員　此程上りし其時にはお妹御には、御風邪にて、お目に掛らず歸りましたが、今日御都合よろしくば、ちよつとお目に掛りたうござる。（トこれにて皆々顔見合せ、ハツト思入。）

七三　いや折惡しく妹は、昨夕根岸の親類へ遣はしましてござりますが、夜前一泊いたしまして、未だ歸宅いたしませぬ。

義員　お留守とあれば是非もなし、又々御當日のお打合せに參上いたせば、其砌りお目に掛るでござり

まする。

七三　態と一獻差上げまする心得でござりますれど、差掛り今日は少々取込みがござりますれば、後日まで祝ひ延し、是れにて御免を蒙りまする。

義員　元より僕は酒を喫せず、お杯のない方が、何より御馳走でござる。

七三　左樣なれば、失敬ながら、

義員　最早お開きにいたしまする。（ト辭儀をなし、門口へ來る、）

三平　私共へ御祝儀を、下さりましてござりまする。

義員　御丁寧に供の者まで。

七三　お禮で痛み入りまする。（ト義員外へ出て、）

義員　どりや參らうか。

ト唄になり、義員先きに三平中間釣臺を擔ぎ花道へはひる、跡を見送り、七三郎思入あつて、

七三　香村氏より送られし此の結納も、妹の行方の知れぬ其時は、再び先きへ戻さにやならぬ、どうか左樣ならぬやう、早く行方が知りたいものだ。

仙八　本國堂で今日中に、必ず沙汰があると申した、其の判斷に違ひなく、

宗助　既にお信と友藏が戻りましてござりますれば、今にお行方が知れませう。

與吉　旦那樣には昨夜から、嘸お疲れでござりませう、唯今の内お奧にて、少しお休みなされませ。

七三　妹の事が心に掛り、枕につくも寐られぬが、暫時休息いたさうか。

仙八 宗助　此の御結納は片附けませうか。

七三　奧の一間へやつてくりやれ。

仙八 宗助　畏りました。

七三　早く便りを聞きたいものぢや。

ト誂への端唄になり、七三郎思入あつてはひる。仙八、宗助結納の品を奧へ運ぶ。此唄を借り、花道より次郎吉羽織着流し駒下駄にて出來る、跡より酒屋の御用聞き柿染の着附、紺の前垂草履にて、三ツ割の樽を肩へ掛け出來り、花道にて、

次郎　これ若い衆、公債證書の賣買をする、花垣七三郎といふのは何處だ。

若者　花垣樣は、つい向うの格子造りの家でござります。

次郎　おらあ向うへ公債證書を質に置きに來たのだが、定めて金があるだらうな。

若者　ある所ぢやあござりませぬ、あの横町から折廻し二十間が我が地面で、其外所々に抱へ地があつ

て、公債證書の利ばかりも何千圓といふ金が、年々はひると申します。

次郎　そいつあ羨しい身上だな。

若者　先づ此の町内で一と云つて、二のない家でございます。

次郎　ちよつと外から見たとこでも、しつかり金がありさうだ。（ト舞臺へ來り門口から、）はい御免下さりませ、花垣七三郎様はこちらでございますか。

仙八　はい、七三郎は手前でございますか、どちらからお出でなされました。

次郎　向柳原から參りましたが、旦那様はお宅でございますか。

仙八　はい、宅に居りますでございます、先づこちらへお入りなされませ。

次郎　左様なら、御免下さりませ。（ト合方きつばりとなる、次郎吉内へはひる。）若い衆、そこへ置いていつてくんな。

若者　はい／＼、畏りました。（ト樽を下へ置く。）

次郎　大きに御苦勞だつた。

若者　いえ、どういたしまして。（ト花道へ行く、此内茶煙草盆を出す、若い者花道へ行き、）今の人は花垣様の内の様子を、委しく聞いたが、何處の人だか顔附は、新富でした強盗の島藏によく似て居るが

若しや泥ぢやあないか知らぬ。

ト合方にて足早に花道へはひる。此内與吉は次郎吉を見て、兩國の衒りに似て居るといふ思入。

宗助　して、あなた樣は、どなた樣で何の御用でござりまする。

次郎　私は次郎吉と申しまして、旦那樣にお目に掛れば、分ります者でござりまする。

宗助　唯お名前ばかりではちと分りかねますが、御苗字は何とおつしやります。

次郎　苗字を申しました所が、御存じはござりますまいから、此間兩國で魚屋の茶碗で、五十圓お惠みを受けました、若い者でござりますとおつしやつて下さりませ。

ト是れを聞き、與吉扨はといふ思入あつて、

與吉　や、それぢやあいつか身を投げた。

次郎　へい、道具屋の衒りでござります。

仙八
宗助　やあ。（トおどろく。）

與吉　今來た時に似た顏と、思つたなれど身裝は違ひ、めつたなことも言はれねえから、默つて樣子を見て居つたが、それぢやあいよ／＼衒りであつか。

次郎　不圖したことから出來心で、旦那樣を衒りましたが、濟まないこと〻改心なし、今日お詫びに參

りました、どうぞ御面倒でも、旦那樣に、お目通りを願ひます。

與吉　どんなことか知らねえが、こちらのお店も昨夜からお取込があつて御混雜だから、用があるならおれが聞かう。

次郎　お前さんのお詞に背いては濟みませぬが、旦那樣へぢき〴〵にお話しがしたうござります。

與吉　お取込みゆゑ旦那に代つて、抱へのおれが聞かうといふのにおれにやあ話しが出來ねえのか。

次郎　さういふ譯ではござりませぬが、お目に掛るも面目ない、恥を忍んで參つたれば、御面倒でも若し頭、どうぞこちらの旦那樣に、お逢はせなされて下さりませ。

與吉　其の取次はおれにやあ出來ねえ。

次郎　左樣ならば、お前さん方、お取次下さりませ。

仙八　いや、わたしらにも、

兩人　出來ませぬ。

次郎　それぢやあ折角參りましたが、旦那のお目に掛られませぬか。（ト奥にて）

七三　此家の主人七三郎、今それへ行つて逢ひませう。

ト誂への合方になり、奥より以前の七三郎出來り眞中へ住ふ。

次郎　お取込みの中へ心なしに、御無理なことを願ひましたが、ようこそお逢ひ下さいました。

七三　今奥で承はれば、何か手前に面會してお話しがござるよし、それ故これへ出ましたが、仔細は如何なる事でござる。

次郎　外の事でもござりませぬが、此間兩國で魚屋の茶碗を枷にして五十圓衒りました、次郎吉と申す私は破落戸でござります。其の事につき旦那樣へ、お詫びに出ましてござります。

七三　何、その詫びにござつたとは。（ト合方きつぱりとなり、次郎吉思入あつて、）

次郎　是れまで衒つた其金は皆吉原と根津へ運び、酒色に遣つてしまひましたが、泳ぎを知つて居りながらあの折少し水を呑み、氣分が惡く五六日家にばかり居りましたが、地主が大のかたまり門徒で、法事があつてお座を立て、長屋一同説教を聽聞しろと行事から、觸れが廻つて仕方なく、天窓數に參りましたが、當時東門跡で其名も高い中講義川崎顯成といふ説教師が、惡事をすれば忽ち報ふ因果の道理を説き諭し、既に先頃佃島で説教を聞き改心なし、我が工業の其の金を盜んだ先きへそれ〲に返した囚人がござりましたを、馬鹿なことをと貶しましたが、説教を聞き私も初めて人の道を知り、ふッつり心を改めて是れから肩へ棒を當て、外役に出た心になつて、生業をいたす心。それゆゑ先頃兩國であなたを衒つた五十圓、今日までも手を附けず其の儘持つて

居りましたが、此の世を去つた親達が止めましたと見えまする、只今お詫びに出ましたは先非後悔いたしまして、金をお返し申しますから何卒お許し下さりませ。

ト懐より紙に包みし五十圓を出し、手を突いて詫びる、七三郎思入あつて、

七五 むゝ、すりや有名な川崎様の説教を聞き悔悟なし、さつぱり改心したといふは、それは何よりよいことだ、所謂四海兄弟ゆゑ一人たりとも悪心を善に返すは悦ばしい、何にいたせ此の金は仔細があつて上げた金、改心さへしなされば返しなさるには及ばない、何か是れから商法をしなさるならば資本のうちへ、五十圓は加へて下さい。

次郎 お情厚き其のお詞、涙の出るほど思召しは有難うござりますが、是れは衒つた金ゆゑに、あなたへお返し申さねば悪事を止めた私の、どうも心が濟みませねば、先づお請取り下さりませ。

ト金包みを七三郎の前へ出す。

七三 さういふことなら心の濟むやう、一先づ是れはわたしの方へ、請取つて置きませう。

ト七三郎金を受取り、帳箪笥へ入れる、次郎吉は酒樽を出し、

次郎 これは粗末でござりますが、ほんのお禮のしるしばかりにお目に掛けますでござります。

七三 それは餘計なことであつた。こんな心配には及ばぬものを。

次郎　改心なした身祝ひゆゑ、どうかお納め下さりませ。
七三　折角の思召しゆゑ、それではお貰ひ申しまする。
次郎　それは有難うござりまする。
與吉　説教を聞いて心を改め、衒つた金を返しに來るとは、實にこりやあ新聞ものだ。
仙八　一旦苦勞をした人が、締るとたゞの人よりも、却つて堅くなるものだ。
宗助　今承はれば親御達も、此世にないと言ひなさるが嘸やあの世で悦んで居なさるだらう。
次郎　今の心が十年先きに、付きましたらば親達に、苦勞も掛けず死にましても行く所へ行かれませうに、惜しいことをいたしました。
與吉　そりやあお前ばかりぢやあねえ、誰でも親が死んでから心が付いて後悔するのだ、それだから孝行のしたい時には親がなしと、名代の狂句がありました。
七三　何にしろお前もまだ年若だから、今ッから心が付けば仕合せだ。
次郎　それに附けても五十圓お返し申しましたので、科はお許し下さりますか。
七三　まんざらお前も見ず知らずの、いやさ、見ず知らずの人にもせよ、改心するとあるからは、あの日のことはあれかぎり、出逢つた所が大川ゆゑ、水に流してしまひます。

次郎　其のお詞で私も日本晴がいたしました。（ト次郎吉思入あつて、）まだ此の土地は初めてゆゑ御町内はいふに及ばず、何れも樣の御贔屓をお願ひ申す口添へを。（ト見物へちよつと辭儀をして。）お馴染の深い旦那からお願ひ申す其の前方、別にお願ひがございますが、お聞きなされて下さりますか。

七三　どんな頼みか知らないが、聞かれることなら聞きませう。

次郎　改心いたせば私も堅氣な稼業をいたす心、然し何をいたしますにもたゞ一人では不都合ゆゑ、女房を持ちたうございますが、それに就て旦那樣へお願ひがございます。

與吉　旦那へ願ひは何事かと、思つて居たら女房のことかえ、大方お家の中働きお信どんでも貰ひたいのか。

仙八　お信どんはわたしらも、疾うから覘つて居たところ。

宗助　何處でお前、逢ひなすつたか、とんだ者を見初めたな。

次郎　どんな女か知らねえが、中働きや飯炊を女房に貰ひに來やアしねえ、わつちが旦那にお頼みは、そんな安いものぢやあねえ。

七三　して、こなたの頼みといふは。

次郎　お妹御のお露さんを、お貰ひ申したうござります。
七三　何と。
次郎　どうぞ女房に下さいまし。
仙八　いや、とんだことを、
兩人　言ひ出したな。（ト與吉前へ出て、）
與吉　かう、お前は氣でも違つたのか、此の町内で一二といはるゝ居附地主のお孃さんを、ゆすり衒りをして歩く破落戸に遣られるものか、いゝ加減に馬鹿を言へ。
次郎　そりやあお前が言はねえでも乞食同樣な身分だから、只ぢやあのめ〳〵來やあしねえが、貰ふ筋があつて貰ひに來たのだ。
七三　なに、貰ふ筋があるといふは。
與吉　どういふ筋が、
三人　あつて來たのだ。
次郎　自分の口から自惚らしく、言ふのも面目ねえ譯だが、昨夜こつちのお孃さんが、わつちの女房になりてえと、駈込んで來なすつた。

七三　え、すりや妹が、こなたの家へ。（トびつくりなす。）

與吉　こりや、嘘らしい、

三人　話しだなあ。（ト三人呆れし思入、奥より以前のお信友藏出來り、）

友藏　樣子は奥で聞きましたが、是れで思ひ當つたは、昨夜無法に坂本で人力車夫が喧嘩を仕掛け、どさくさ紛れの隙を見て、お孃さんを引きあげたは、斯ういふ企みを仕よう爲め、こなたが仕組んだ仕事であつたか。

お信　お前の家が何處ぢややら、遂に聞いたこともないのに、世間知らずのお孃さまが、お前の所へ駈込んで、お出でなさらう筈がない。

友藏　こりや車夫めらを語らつて、引き揚げたに違ひない。

次郎　をかしなことをこなたは言ふが、人力車を語らつて引き揚げたとは、何を證據にそんなことをいふのだか、おらあ少しも知らねえことだ。

友藏　いや、是れが堅氣な人ならば、其の言譯も聞かうけれど、ゆすり衒りをするこなた、知らねえことがあるものか。

與吉　こりや、友藏どんの言ふ通り、側でおれが聞いて居ても、辻車の惡玉を手先きに遣つてお孃さん

を、内へ連れ込み色戀で、昨夜駈込んで來たといふのは、講釋でいふ髪結の新三もどきに違えねえ。

ト此時下手より以前の義員出で内を窺ひ、門口にたゝずみ居る、次郎吉思入あつて、

次郎　こりやあ頭にも似合はねえ、ちつと目利が違ひやすぜ、ゆすり衒りや或る時は、盛り場拵ぎに鋏は遣ふが、そんな小刀細工はしねえ、嘘かまことか當人に聞いて見りやあ分ることだ、昨夜夜更けてたゞ一人わつちの家へ來なすつたから、どうした事と樣子を聞けば、身投げの衒りをした折に惚れて女房になりたさゆゑ、家を脱けて來たと言はれ、生れて初めてこんなことを女の口から言はれたので、ぞつと惣身に染み渡る風に忘れた引窓や、戸口をしめて差向ひ、肴に五合買つた酒の殘りの冷酒で三々九度、內祝言の床入も損料蒲團に小掻卷、待女郎にも介添にもたつた一人の裏長屋、がたつく根太に行燈の燈火がゆりこみくら闇と、なつたも幸ひ恥しがるお孃としつぽり新枕、假令たつた一晩でも肌を合した上からは、わつちの女房に貰はにやお破落戸仲間へ顏が立たねえ。否でもあらうがもし旦那、どうぞ女房におくんなせえ。

ト此內義員思入あつて下手へはひる。

七三　色は思案の外なれば、堅いと思つた妹がお前の家へ駈込んで、行つたことかは知らないが、た

だ片口では證據にならぬ、篤と妹に逢うた上、所存の程を聞かざれば、有無の返事はいたされぬ。

次郎　そりやあさうでありませうが、わつちのやうな破落戸に生涯その身を任せてえと、駈込んで來たお孃さん、其の心根が可愛いから是非ともわつちが女房に貰ひ、是れから先きはあなたと兄弟、此の町内で一二と言はるゝ居附地主を兄に持ちやあ、明日が日惡事が露顯して、假令懲役に行かうとも、差入物に困りやあしねえ。

友藏　よくも〳〵其樣なふて〳〵しいことが言はれたものだ、華族樣のお姬樣といつても恥ぢぬお育ち柄、ちよつと出るにも小僧に女、一人歩きをなさらないお孃さまがこなたの家へ、お出でなされる譯がない。

お信　こりやお前の言ふ通り、喧嘩仕掛けの車夫が一つ穴の惡者で連れて行つたに違ひない、こなたの家はどこだか知らぬが、お孃さまにお目にかゝり、樣子をお聞き申さねば、まことの事が知れませぬ。

仙八　成程こりやあ、お孃さまに、お目にかゝつてお聞き申せば、忽ち嘘が知れるであらう。

宗助　さうしてこなたの家は何處だ。

次郎　おれが家は鼻の先き、向柳原二丁目で、何番地だか忘れたが、あすこで蝮の次郎吉と蕎麥屋か酒屋で聞きなさりやあ、裏長屋だがぢき知れやす。たゞ今ッから案じられるは、五荷と七荷の荷が來たら、夫婦の者の寢所がねえ、然しその時は立派な家を、定めて拵へて下さるだらう。

仙八　いや、蟲のいゝことを、

仙八
宗助　いふ人だ。

次郎　さつき上げた三つ割は心の内の家内喜樽、結納代りに持つて來たのだ、あれをしるしにわつちが女房に、下さるといふ旦那の返事を、どうぞ聞かして下さいまし。

七三　親なき後は兄は親、わしが心に叶はねば假令當人が望まうとも、容易に妹は手放さぬ。

次郎　わつちの身分が惡いから遣れねえと言ひなさりやあ、元より旋毛の曲つた生れ、そこは男の意地づくで、命にかけても女房に貰はねえぢやあ顏が立たねえ。

與吉　立つも立たねえも入るものか、高の知れたごろん坊、身分違ひに遣らねえと旦那が言やあそれまでだ、おれもお店の半纏を貰つてゐりやあ手前達の、脅しを聞いちやあ居られねえ。遣れねえと言やあどうする氣だ。

次郎　くれねえと言やあどうするものだ、嫁にくれざあ聟に來て、長く厄介になる積りだ。

與吉　そんな得手勝手を吐かしやあがれば、もう料簡がならねえぞ。
次郎　料簡がならざあおれを突き出せ、殊によつたら巡査の手に掛る積りで支度をして來た、さあ突き出すなら早く突き出せ。
與吉　おゝ、突き出さねえでどうするものだ。（ト與吉立ち掛るを、）
七三　これさ與吉、靜にしろ、口で言つても分ることだ、手出しをするにやあ及ばない。
與吉　それだと言つてあいつらの、脅しを聞いちやあ居られねえ。
七三　大きな聲をする時は、世間へ聞えて恥の恥、まあ靜にしたがいゝ。
ト與吉悔しき思入、友藏留めて、
友藏　旦那がお留めなさるから、腹も立たうが待ちなさい。
與吉　えゝ、小癪に障ることだなあ。
七三　萬事はおれの胸にあるから、與吉は暫く奥へ行け。
與吉　でも、此の場をば。
仙八　はてまあ、奥へ。
兩人　行きなさい。

ト仙八、宗助、與吉を引張つて奥へはひる、次郎吉跡を見てせゝら笑ふ、七三郎思入あつて、

七三　いや次郎吉どのとやら、お前も形のないことをまさか言つても來なさるまいが、妹に逢つて所存を聞き、其の上有無の返事をしませう、何れ後方お尋ね申せば、それまで此の儘待つて下さい。

次郎　今即答に出來ねえのも、成程是れも尤だ、後まで返事を待ちませう。

七三　それぢやあ待つて下さるか。

次郎　仰しやる通り待ちますから、いゝ返事をしておくんなせえ。

友藏　何れ其の時旦那様の、わしがお供をして行くが、お孃さまにお目に掛れば、こしらへごとが顯はれよう。

お信　今の内にお返し申せば、世間を兼ねる御氣質ゆゑ、此の儘内證で濟みませうに。

友藏　強いことを言はないで、お返し申す心はないか。

次郎　えゝ餘計なことを言ひなさんな、衒つた金の五十圓を返して綺麗な體になり、女房に貰ひに來た次郎吉、くれぬとありやあ千圓の手切を取らにやあ料簡しねえ、そこらは旦那も公債證書や米相場に明るいお方、お胸にあるに違えねえ、お前方が餘計な苦勞を側からするにやあ及ばねえ。

ト言ひながら立上る。

友藏　誰がこなたに手切れなどを。
七三　これさ、靜にいたさぬか、世間へ聞えてみつともない。
次郎　それぢやあ旦那、後方までに、
七三　きつと尋ねて行きませう。
次郎　どれ、いゝ御返事を待ちませうか。
ト謡への端唄になり、次郎吉思入あつて花道へはひる。下手より義員出で次郎吉の跡を見送る、七三郎も門を明け、跡を見ようとして義員と顏見合せ、ハツと思入。
七三　や、岸田様、
義員　花垣殿、
七三　して、あなた様には、
義員　先刻是れへ參つてござる。
七三　えゝ、すりや最前から此の場の様子を。
友藏　門にてお聞き、
お信　なされましたか。

義員　如何にも。

七三　何は兎もあれ、先づ〱これへ。

義員　許し召され。（ト合方になり、義員ずつと上へ通り住ふ、七三郎下手へ住ひ、）

七三　門にて樣子を御存じとござりますれば、改めて委細は申し上げませぬが、面目次第もござりませぬ。（ト面目なき思ひ入）

義員　只今となり千悔なすとも、返らぬことではござれども、此の義員が目違ひにて斯かるみだらなお露どのと存ぜざるゆゑ局長へ、媒介なせし僕が過り、よしなきことをいたしてござる。

七三　まことに以てあなたへ對し、申譯なき今日の仕儀、幼少よりすなほにて父母の敎へを堅く守り、操正しき妹がかゝる所業をいたせしは、奸智に長けし惡者が企みし事と存じますれど、色情のみは譬にも申す思案の外ゆゑ、無き事としかと申上げ難し、兎にも角にも妹に逢はねば虛かまことか分らず、是れより參つて糺さんと思ふ所へ計らずも御入來あつて御耳に入り、今は包むに包まれず、恐縮いたしてござりまする。

義員　先刻當家へ參りてより歸る途中で街の風聞、承はれば昨晩より、お露どのには行方知れず、勾引に逢ひたりとも又言交せし男あつて家出せしとも種々の取沙汰、心ならねば取つて返し仔細を聞

かんと存ぜしが、混雜ゆゑに門へ立ち、暫く樣子を窺ひしが、興の覺めたるお露どの、既に此程見合も濟み今日結納の參ることはかねて承知いたされんに、昨夜言交せし男の方へ逃げ行きしとは言語同斷、斯かる所存と存ぜざれば此の媒介をなせし折、當今の世に稀な御緣女とお露どのを餘り褒め過ぎ、今更何とも局長へ申譯なき僕が粗忽、先方にても結納まで送る事になりしゆゑ親戚初め懇意の方へそれ〴〵吹聽ありたれば、香村の家の瑕瑾となりて如何にも氣の毒千萬なり是れ皆僕が媒介より事こゝに至りたれば再び面を合されず、辭職いたさにや相ならぬ、それも是非なきことなれど、餘りといへば粗忽なりと、同僚の者に笑はるゝが遺憾至極でござる。

ト腹の立つ思入にてきつと言ふ。

七三 岸田樣へ此の樣な恥辱をお掛け申すのも、妹露が不埒ゆゑ、一つ家に居りながらそれを今まで知らざるは、兄たるものゝ身のぬかり、虛實は是れより妹を引留め置きし次郎吉が宅へ參つて實否を糺し、後刻委細を申し上げん、何卒それまで香村氏へ御內分になし下され、お待ちなされて下さりませ。

ト義員默つて居るゆゑ、

お信 私共が口出しをいたしまするは恐れ入れど、お露さまに限りまして斯樣なことはなき事と存じ

ますのは此の年月、長くお側に居りますれど、遂に一度氣振にも左樣なことはござりませねば、只今主人が申す通り惡者共の企みごとゝ憚りながら存じまする。

友藏、是れより先きへ私も、主人の供をいたしまして參りますれば共々に、心を付けて企みを見出しお露さまの身の曇りを、晴らしますれば旦那樣、何卒御猶豫下さりますやう、偏にお願ひ、

兩人　申し上げます。(ト兩人ひれ伏して頼む、義員思入あつて、)

義員　むゝ、主從共に達ての頼み、暫時の猶豫はいたさうが、夫の好事門を出ず惡事千里を走るの譬へ早くも局長香村氏へ此の一條が漏れ聞え、問はれしならば其の時は、何と答へん術もなし、是れのみ僕が心がゝり仕儀によりなば局長へ、恥辱を與へし言譯に、切腹なさねば義が立たぬ。

七三　すりや、あなた樣には、申し譯に、御切腹をなされますとか。

義員　いや仕官の身ゆゑ私に、一命捨てるは不本意なれど、事に臨まば是非がない。

七三　是れより手前が先きへ參り、妹露を取戻し、實否を糺さば惡者等が、企みし事にて汚名は晴れ十に八九はあなた樣の御迷惑になりますまい。

義員　とはいへ、さきにも申されし、戀は思案の外なれば萬一是れが實事なれば、

七三　その時こそは申譯に、妹は生して置きませぬ。

友藏　えゝ、そりや旦那樣には、

お信　お露さまを。

七三　手を持ち添へても言譯に、妹に自殺いたさせまする。（ト義員感心の思入あつて、）

義員　むゝ、流石は武家と交際深く、平民ながら士氣ある貴殿、篤と實否を糺されよ。

七三　何かは後刻申し上げん。

義員　いや、申すまでもなけれども相手は一癖ありげな者、心を付けて掛合はれよ。

七三　惡者なれど其の以前は、彼れも幕府の、

義員　や。

七三　いやさ、博徒なれども天下の大法、仁義は心得居りませう。

義員　左樣ござらば花垣氏。

七三　岸田樣。（ト義員門口へ出で、）

義員　貴殿の吉左右、相待ち申す。（ト唄になり、義員思入あつて花道へはひる。）

友藏　すりや旦那樣には是れより直に、蝮とやらいふ惡者の、宅へお出でなされまするか。

七三　如何にも參つて妹に、逢はねば實事が相分らぬ。

お信　見るから凄い人なれば、お出でなさればどのやうなことを仕ようも知れませねば、誰か代りに行く者がありさうなものでござります。（ト此時與吉出來り、）

與吉　そりやあ誰より旦那の代りに、わつちが先きへ行きませう。

友藏　成程これは頭より、

お信　外に行手はござりますまい。

七三　いや、常の事なら遣るけれど、一筋繩で行かぬ次郎吉、與吉が行かば喧嘩となり、却つて事の破れとならう。

與吉　いえ。どうで素手ぢやあいかねえ奴、四の五の言やあ一六勝負に、若い者を連れて行つて、叩きしめて遣る氣だ。

七三　さうなる時には枝葉がさき、ぱつと世間の噂になれば、恥に恥をかゝねばならぬ。

友藏　とあつて、わしが行つた所が、言ふことは聞きますまい。

お信　誰ぞ行手はござりませぬか。

ト此以前下手より、序幕の久太着流し三尺帶草履にて出來り、門口に窺ひ居て、此時門口を明けて、

久太　樣子はあらまし聞きましたが、旦那の代りにわつちが行き、取返して參りませう。

七三　おゝ、誰かと思へば脇櫓の久太か。

與吉　お前は此間兩國で、衒りの跡を追掛けて行つたきり見えなんだが、あれから何處へ行つたのだ

久太　直に跡を追掛けましたが、滅法足の早い奴で、何處へ行つたか見失ひ、大橋際まで行きましたが途中で逢つた友達と一杯やつた酒機嫌、ひよろ／＼歩きで石に躓き、どんぶり川へおつこちて、既に土左衛門となる所、いくら醉つても覺えた泳ぎに浮み上つて助かりましたが、船へ歸るも面目ないから、あれぎりどろんといたしました。

與吉　それは危ねえことであつた。

七三　何は兎もあれ蝮といふ、異名を取つた次郎吉が、連れて行つた妹を取返しに行くといふのは、何ぞ手心があつてのことか。

久太　そりやあお案じなさいまするな、きつと手心のあるといふのは、あいつが船から上る時尻をまくつて出た彫物、九尾の狐で思ひ出したは、七年跡に本所の權次が賭場に二人共燻つて居た博奕友達、互ひに其の頃貧こけて損料蒲團を引張つて寐たことのある蝮の次郎吉、わつちが行つて話しをすりやあ、否應なしにお孃さんを、取返して參ります。

與吉　元より金に仕ようといふ企みから出た仕事だが、さう手輕く取返せるかえ。

久太　そりやあ、あいつがふむしでも、急所をわつちが押へりやあ、ぎうの音も出させやあしねえ。然したゞも可愛さうだ、十と十五は呑代を、あいつに遣つておくんなせえ。

友藏　それで行けば安いものだ。

お信　少しも早くお孃さんを。

久太　後方お連れ申します。（ト此内七三郎帳箪笥から二十五圓を出し、紙に包み、）

七三　それでは、是でよいやうに。（ト出す、久太開き見て、）

久太　こりやあ廿五圓ございますね。

七三　いくらなりとも骨折り次第、殘りは返すに及ばねえ。

久太　そりや、有難うござります。

與吉　安請合ひで旨く行くかえ。

久太　腕に覺えのあることだ。

友藏　さういふことなら、

お信　何分よろしく。（ト久太門へ出て、）

久太　どれ行つて來ませうか。（ト合方にて久太花道へはひる。）

七三　衒つた金の五十圓を、返したからは十や十五で、所詮承知はしまいと思へど、それともどういふ仲合だか、久太で先きの瀬踏みをさせ、術よく妹を返せばよし、返さぬ時はおれが行つて。

與吉　それでは後詰は、

友藏
お信　旦那様が、

七三　先づ取り返す積りだが、

與吉　あなたでいかぬ、

友藏　その時は、

七三　お上のお手を。（トうなづくを道具替りの知らせ、）借りずばなるまい。

トよろしく思入、合方にて、此道具廻る。

（次郎吉内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、向う上手一間押入戸棚、眞中一間障子出這入り、下手一間鼠壁、是れへ立派な神棚を取附け、榊神酒徳利を飾りある、上の方一間障子屋體、いつもの所門口、下の方踏地口、淨瑠璃臺を黒塀にて見切り、向柳原貸長屋の體。爰に以前の次郎吉好みの着附に着替へ、大きな膳へ肴を載せ酒を呑み居る、下手に序幕の巾着切千九郎、九郎藏、着流し三尺帶にて酒の

相手をして居る、雇婆お虎、箱火鉢へ鐵瓶を掛け、酒の燗をして居る、此見得船玉の唄にて道具止る。

千五　時に兄貴、昨夜お前が連れて來た娘ッ子は、めつぽふ美しいといふことだ。

九郎　以前なら、仲の町へぶッつけ出せる玉ださうだが、早く顔を見てえものだ。

次郎　どうで是れから内へ置いて、おれが女房にするのだから、近附きにじにやあならねえが、何ないつでもお孃さん、昨夜人力車夫に取巻かし、氣を揉んだせるか血の道で、今奥に寐て居るから、納つたら逢はせよう。

千五　ちよつと三次の話しに聞いたが、鶴さへ淋しい御靈屋脇、折よく兄貴が來たからいゝが、來ねえ日にやあ四人の奴等に仕てえことをされる所、嘸怖かつたことだらう、血の道の起るは尤だ。

九郎　いや血の道ならば大坂町の高木といふ藥種屋で賣る、清婦湯を呑ませなせえ、わつちの内の下齒などは年中あれを呑みやすが、大層きくといふことだ。

次郎　此のおつかあに聞いたから、さつき清婦湯を買ひに遣つて如在なく呑まして置いた。

お虎　なに、藥ゝ何もいりはしない、お孃さんのは昨夜の疲れだ。

千五　はゝあ、それぢやア少しは弄まれたのか。

お虎　なに、上野ぢやあない昨夜内で、まだ〻の肌を知らない極おぼこなお孃さんを。跡は言はずと御推もじさ。

千五　おつかあ、お前も以前から、皺だらけでもあるめえから、

九郎　昔の事を思ひ出して、嚥氣が悪かつたことだらう。

次郎　かう、お喋べりに税が出ねえといつて、いゝ加減に喋べられねえか。

お虎　それでも今日はぼんやりと、お喋べりでもしないと睡くなるから。

千五　どういへば斷ういふと、口の減らねえ婆アさんだ。

九郎　そりやあこゝが受賃に、早く猪口を貰ひてえ。

お虎　お前方にや猪口よりか、茶碗の方がよからうぜ。（トお虎茶碗を取つて出す。）

九郎　程のいゝのは、お前に限るぜ。

千五　もう二十年若けりやあ、おれが人夫にはひるけれど。

お虎　ほんとにお前が其の氣なら、馬喰町の平尾で賣る、小町水を下へ附けて、小町白粉をこて〳〵塗るが、

次郎　其の面を眞白に塗られた日にやあ化物だ。

お虎　そんなに惡くお言ひでない、野玉のあつた時分にやあ、兩國で評判だつた。

千五　因果者の見世物でか。

お虎　いゝ加減にまぜておくれよ。（ト背中を叩く、此はずみに徳利をひつくり返す。）

九郎　それ、徳利がひつくりかへつた。

千五　えゝ、勿體ねえことをするぢやあねえか。

ト疊へこぼれし酒を甜める。右の合方にて花道より以前の久太出來り、花道で思入あつて、直に門口へ來り。

久太　頼まう／＼。

千五　此の裏に醫者樣はねえが、

九郎　何處の家と間違へたか。

久太　頼まう／＼。

次郎　いけやかましい奴ぢやあねえか。

千五　何處をお前は尋ねるのだ。（ト門口へ來て久太を見て、）や誰かと思つたら、蟒の久太だ。

次郎　なに、久太が來た。

九郎　何でこんなに賴まうなどゝ、大業なことをいふのだ。

久太　是れでも昔は天下の御家人、お成先のお供ぢやあ大小差したことがあるから、今日は昔の格で來たのだ。

千五　まあ兎も角もこつちへ來ねえ。

久太　然らば許しやれ。（ト武家の思入にて內へはひる。）

お虎　大たばなことを言ふ人だね。

千五　こいつあ狐でも憑いたのか。

九郎　いや、睾丸が大きいから狸だらう。

久太　えゝ、やかましい默つて居ろ。（トよき所に住ひ、）これ次郎吉、此間は大川端で、よくも酷い目に逢はしたな。

次郎　なに、酷い目に逢はしたとは。

久太　脾腹を打つて息を止め、殺す心か大川へぶち込まれたが仕合せと、流されるうち氣が付いて、大橋際へ上つたが、すんでに土左となる所だ。

次郎　何でおれがぶち込むものか、手前が石に躓いて、轉ぶはずみに落ちたのだ。

久太　しらばッくれたことを言ひなさんな。

次郎　言ふも言はぬもあるものか、何を證據にそんなことを手前は言ふか知らねえが、おらあ少しも知らねえ事だ。

久太　なに、知らねえ事があるものか。

次郎　假令知つても證據がなけりやあ、何處が何處までおらあ知らねえ。

久太　知らざあそりやあ知らねえでいゝが、今日おれが出て來たのは、ちつとお前に頼みがあるが、いやでも聞いて貰はにやあならねえ。（ト次郎吉思入あつて、）

次郎　むゝ、手前がおれに頼みといふは、昨夜内へ駈込んで來た、花垣七三郎の妹を、取返しに來たのだらうな。

久太　まだ手の筋は見せねえが、すつかり頼みを當てられた。知つての通り湊屋の出入り場先きのお孃さん、不斷旦那のお世話になるから、據なく頼まれて、お前の所へ出て來たのだ、どういふ筋か知らねえが、狂言書のことだから定めて一場の眼目があつての仕組であらうけれど、その腹稿をお藏にして、たんとのことは出來ねえが、少しは酒の呑代を持つて來たから昔馴染の、誼を以てよい役者に、なられるやうにお孃さんを、おれに渡してくんなせえ。

次郎　かう、手前は此間川へ落ち、愚に返つたか知らねえが、詰らねえことをいふぢやあねえか、よく講釋師が譬にいふ、窮鳥懐に入る時は獵人も是れを捕らずと、高の知れたごろん坊のおれを目當に此家へ駈込んで來た娘ッ子、其の志しが嬉しいから昨夜直に内祝言、これから長屋へ弘めをして今日からおれが女房だ、折角手前の頼みだが、是ればかりは聞かれねえ。

久太　そりやあ極り文句だが、是れが知らねえものぢやあなし、以前をいやあ權次の賭場に燻つて居たことのある、いはゞ兄弟同樣に一つ鍋の物を喰つた破落戸仲間の蟒久太、今日娘ッ子を連れて歸りやあ、おれも旦那に幅が利くから、一番男にしてくんねえ。其代り少なからうが十圓爰へ持つて來た、是れを取つて置いてくんねえ。（ト十圓紙に包みしを出す、次郎吉せゝら笑ひ）

次郎　手前の目玉は人魂より後へ引込んで居るせゐか、目先きの見えねえ奴だな、手柄らしく持つて來た土産の金はたつた十圓、以前でいやあ一兩だ、端た金で娘をば、連れに來たのは押しが強い、引込んだ目の見えるやう、顏でも洗つて出直して來い。（ト久太むつとして、）

久太　それぢやあ金が、不足だといふのか。

千五　これ〳〵久太、そりやあ手前の方が惡い、酒代といつて十圓の金を土産に持つて來るのは、一樽二兩した時分だ。

九郎　何でも當時は十層倍、少くも百圓の金を持つて來ねえとは、そりやあそつちが氣が利かねえ。

お虎　ほんに親分のいふ通り、お前顔でも洗つてお出でな、今汲んだ水があるよ。

久太　そりやあ手前達が言はねえでも、百圓持つて來ることは百も承知して居るが、おれにやあたゞでも娘をば、渡していゝから貰ひに來たのだ。

次郎　たゞでもいゝとは、何を手前が、仕置いたことがあつて言ふのだ

ト誂への合方になり、久太思入あつて、

久太　空ッとぼけりやあ浚ひ直すが、魚屋の茶碗を盜まれて言譯なさに身を投げたと、三題噺をそつくりと古い趣向も口まへよく、旦那を衒つた五十圓、手前が素直に娘ッ子を、渡してしまへばそれに免じて、何も言はずにしまふ氣だが、返さなけりやあ探索方へ衒りの次第を言ひ附けて、又何十日か佃へ遣り、手前に麥を搗してやるぞ。

次郎　これ、衒りとは誰のことた、娘を女房にするからは、若木町で一二といふ居附地主と兄弟に、ゆすり衒りの垢を落し、綺麗な體になつた上、末長く附合ふ氣で衒り取つた五十圓へ結納代り禮を兼ね、然も三つ割の樽を添へ、さつき返してしまつたから、何處へなりとも訴人をしろ。

久太　え、それぢやあ衒つた五十圓を、手前は返してしまつたとか。（トびつくりする。）

次郎　七所借りで五十圓金を拵へて返したのも、手切となりやあ千圓の金を取るのは何でもねえ、十や二十の目腐れ金、見るのもいやだ、持つてかへれ。（ト札包を取つて久太に打ち附ける。）

久太　いやなら止しにするがいゝ、達て遣らうと言やあしねえ。（ト札を取り懐へ入れる。）

次郎　大方手前は衒りを枷におれを脅して駈込んだ、娘を連れて行く氣だらうが、金を返しやあそれまでだ、よしんば金を返さずに衒りの廉を訴人されても、一旦あの折二十五圓分前とりやあ同類だ、おれが一年苦役をすりやあ一等減じて百日間、奥山へ出る獅子同樣鎖繋ぎで引出され、毎日土を擔ぐのも、相手が強けりや突き廻され、高吼しにやあならねえぜ。

久太　博奕と喧嘩で一年の半年佃で暮すおれだ、憚りながら潮風で鍛へこんだ體だから、突き廻されることもねえ、行くなら何時でも一緒に行かう、そんなことはどうでもいゝが、態々貰ひに來た娘どうでも返してくれねえのか。

次郎　手前におれが脅されて娘を此の儘返しちやあ、是れまで賣つた顏がすたらあ。どんなことでも返さねえから、無駄なことを言はねえで、指を銜へて早く歸れ。

久太　返さねえけりやあそれまでだ、おれが腕つくで連れて行くぞ。（ト久太立ち掛らうとするを、）

次郎　しやらつくせえことを言やあがるな。（ト有合ふ箸箱で久太の天窓をなぐる。）

久太　あいたゝゝゝゝ、(ト額を押へ、油紅を付け、久太指の血を見て、) こりやお疵を付けやあがつたな。

ト立ち掛らうとするを、千九郎抱き止め。

千五　手前が早く歸らねえから。

九郎　こんな疵をでかすのだ。

お虎　たとひにも言ふ弟子と師匠、叶はないから早くお歸り。

久太　いゝやおらあ歸らねえ、さあ殺すなら殺してくれ。(ト久太立ち掛るを兩人宥めて、)

千五　高が娘の貰ひ引き、誰が手前を殺すものか、そんなせりふは素人の所へ行つたら威しに言ふがいいが、

九郎　兄貴に向つて、そんな事は、釋迦に說法、無駄なことだ。

久太　それだと言つて此の儘に。

千五　喧嘩は留手があるのが花だ。

九郎　いゝ加減に歸るがいゝ。

久太　歸らねえとは言はねえが、おれも以前は幕府の御家人、身分違ひの士族をば、あんまり安くしやあがるから。

千五　そりやあ此節米をはじめ、諸式が安くなつたから、

九郎　お前も安くされるのだ、時の相場だ、仕方がねえ。

久太　手前達が止めるから、今日は此の儘歸つて遣るが、又出直すから待つて居ろ。

次郎　新女房が出來たから、のろい奴だが何處へも行かねえ、いつでもいゝから勝手に來い。

久太　おゝ、來ねえでどうするものだ。（ト澁々門口へ出る、）

千五　ぐづ〳〵せずと、

兩人　一昨日來ねえ。（ト門口をしめる。）

久太　どいつもこいつも覺えて居ろ。（トきつと思入、右の合方にて久太花道へはひる。）

お虎　可愛さうに額をぶつきり、よつぽど疵が付いたやうだ。

次郎　大川端であの野郎を、川へぶち込む其の時に、實の親の形見だといふ獅子の目貫の入つて居る、大和錦の守袋を、どさくさ紛れに落したが、あの野郎がどめやあしねえか、何にしろ蟒といふ名に似合はねえ弱い奴だ。

千五　然し一寸の蟲にも五分の魂。

九郎　又仕返しに來ようも知れねえ。

お虎　それはさうとお孃さんが、奥に一人でお出でだつたが、（ト上手の障子を明け、）お疲れが直りましたら、こつちへお出でなされませ。（ト合方になり、上手屋體より前幕のお露を連れて出る。）
お露　もう久太は歸りましたか。
次郎　おゝ、お前は久太を知つて居たな。
お虎　さぞ、怖かつたでございませう。
お露　いまだに體が顫へます。
次郎　そんなことぢやあ破落戸の、おれが女房になれねえぜ。
お露　是れから段々馴れましたら、怖いことでもございますまい。

ト次郎吉の側へ住ふ、千五郎九郎藏じろ／＼見て、

千五　成程これは別品だ、此のお孃さんと内祝言ぢやあ、
九郎　壁鄰りで貰ひ泣きを、したのは無理なことぢやあねえ。
お虎　あれ、靜におし、聞えるわな。（ト兩人は膝小僧を出し窮屈に坐り、）
千五　お初にお目に掛りまする、わつちは隼の千五郎、此の野郎はどら猫九郎藏、
九郎　兄貴のお世話になりますから、何分お賴み、

兩人 申します。
お露 はい・幾久しく、お心易うお願ひ申し上げまする。（ト辭儀をする。）
千五 どうかわつちも末始終、こんな目に逢ふやうに、
九郎 あやかる爲に、もう一ぺえ熱いのを頂戴仕よう。
ト捨ぜりふにて又酒を呑む。合方きつぱりとなり、花道より以前の七三郎、跡より友藏供をして出來り花道にて、
七三 これ友藏、次郎吉の宅は向うか。
友藏 唯今途中で出逢ひました、久太が敎へてくれましたは、向うの家でござります。
七三 初めからあれの手際には、行くまいと思つてをつた。
友藏 中々向うが役者が上、及ばぬことでござります。
七三 友藏そちは先きへ參り、念の爲め聞いてくりやれ。
友藏 畏りましてござります。（ト舞臺へ來り、）へい、御免下さりませ、次郎吉さんのお宅はこちらでございますか。
お虎 はい、こちらでござります。（トお露是れを聞き、）

お露　や、あの聲は、慥に友藏。

次郎　それぢやあ早く奥へ行きねえ。（トお露上手障子屋體へはひる。七三郎思入あつて、門口を明け、）

七三　花垣七三郎でござります。（ト次郎吉飛んで出て、）

次郎　是れは旦那、おいでなされませ、お宅と違つて汚ない裏家、先づ是れへお出で下さりませ。

七三　いえ、是れでよろしうござります。（ト舞臺眞中へ住ふ。）

お虎　もしお供さん、こゝへおはひりなされませ。

友藏　御免下さりませ。（ト下手へはひり住ふ。）

次郎　これ、手前達は今の内、一廻りまはつて來ねえか。

千五　夜るは込むから暮れねえ内、

九郎　一風呂はひつて來ませう。（ト會釋をして兩人門口へ出、思入あつて下手へはひる。）

次郎　これ、早くお茶を上げねえか。

お虎　生憎酒のお燗をして、お湯が臭くなりました。

次郎　それぢやあ新規にするがいゝ。

七三　必ず構つて下さるな。

お虎　先づ一服お上りなさりませ。（ト煙草盆を出す。）

次郎　ちよつとお人を下さいますれば、こちらから參りますのに、態々是れまでお出で下され、まことに恐れ入ります。

七三　お約束ゆゑ先刻の、御返事に參りました。

次郎　よくお出で下さりました、早速ながら私がお願ひ通り、妹御を女房に下さいますか。

七三　折角のお賴みなれど、どうも妹は上げられませぬ。

次郎　そりや何ゆゑに。（ト誂への合方になり、）

七三　定めし露よりお話しをいたしたことでござりませうが、先達よりさる方の媒介によつて緣談整ひ既に今日先方より結納のしるし參り、申さば主ある身の上に、表沙汰になる時は妹は不義をなせし者、されば先方へ對しまして、只今妹は上げられませぬ。

次郎　昨夜の今日に、まだそんな話しも何も聞かないから、有るか無いかは知らねえが、わつちの女房になりてえと駈込んで來た上からは、どうでも女房に貰はにやあ、世間へ對してみつともねえ、是非お貰ひ申したい。

七三　是れが平民同士なら、斯ういふ譯と先方へ、話し合ひで結納を返して破談にいたしまするが、何

をいふにも先方は、官位も高き局長にて、又媒介せし其の仁もやはり仕官の身の上なれば、假令何やう頼むともよも承諾はいたされまい、中へはひつて此の兄が一人難儀をいたしますれば、そこを察して次郎吉殿、たゞ何事も是れまでの縁と思うて妹を、思ひ切つて下さるまいか。

ト友藏前へ出で、

友藏　唯今申しまする通り、主人が一人難儀いたせば、そこを思召しまして、お返しなされて下さらば波風立たず納ります、どうかお聞き届け下さりませ。（ト次郎吉思入あつて、）

次郎　貰ふ先方が平民なら、達て困るとおつしやるなら話し合ひにしませうが、假令どんな位があるとも、其の官權で押されちやあ、出來る我慢も出來ねえのが持つて生れた曲つた根性、お前さんにやあ氣の毒だが、此の頃流行の民權黨、負けるが嫌ひの片意地主義、ごろん坊の自由の權で、返されねえと言つたらば、どうしなさる料簡だ。

七三　返されぬと言はれゝば、是非に及ばず公裁を、願つてお上の力にて妹を取戻し、まさか命も取られねば髪をおろさせ尼となし、それを規模に先方へ申譯をなす心、さすれば世間へぱつとして諸新聞へ出る時は、手前は是非もなけれども、御身分のある先方のお名を出すのが如何にも氣の毒、それゆゑ態々此の事を頼みに參つた七三郎、どうか無事に納まるやう、料簡なされて下さり

ませ。

次郎　達てお前の頼みといひ、こつちもことは好まぬが、無事に料簡しろといふのは。

友藏　外のことでもござりませぬが、主人の頼みをお聞き下され、只今お返し下さらば、お禮といたして何程かお肴料を差上げますから、此の後兎やかうないやうになされましては下さりませぬか。

次郎　それ程お困りなさるなら、わつちは料簡しませうが、あの子が何と言ひますか。

七三　それは何やう申さうとも、兄が斯程に難儀いたすを、申し聞かせましたらば、よもや否とは申しますまい。

次郎　昨夜女房に仕ようならうと、堅い約束した者を、家へ歸すは不人情だが、お前さんの心を察し金と轉んで、いやさ、轉ばぬ先きの杖とやら、駄目を押して置きますが、あの子さへ得心なら、わつちは料簡いたしませう。

七三　早速承知して下すつて、有難うござります。

次郎　然しこの居廻りは言ふに及ばず、下谷淺草本所かけ、博奕仲間の友達がみんな知つて居りますから、斯ういふ事で女房にせず、先へ娘を返したと言ふにやあそれ〴〵酒でも呑まし、器用にするが破落戸附合、纏めた金が入りますが幾ら手當を下さいます。

三七　幾ら上げてよいことやら、そんなことは不得手な私。

友藏　お前さんから其の高を、切出しては下さりませぬか。

次郎　ざつくばらりにさう言ひなさりやあ、わつちの方から切出さう、以前ならば百兩といふのが極りのせりふだが、當時諸式の高直に元八文か十文ではひれた湯錢が一錢五厘、其割合にも取れねえが、先づ十層倍で千圓だ。

友藏　え、あの大枚千圓。（トびつくりする、）

次郎　是れが至當の相場だが、去年の暮から物の下落に、呉服類が四割方直下げになつたといふことだから、わつちも手切の大安賣、四割引で六百圓見切物で負けませう。きざな凄味を言はねえのがそれが今日の景物だ。

七三　お前が見切つて四割下げを又直切るのは商人氣質、いくらに附けてよいことかわしに目利は出來ないが、差し詰め知らず半分直三百圓上げませう、是れで負けて下さりませ。

ト懷より紙に包みし三百圓を出す。

次郎　柳原の古着市でも贋物ならば知らねえこと、地性の知れた代物ぢやあ、假令曲つた横縞でも半分直ぢやあ手は打てねえ、いはゞ夫婦は裏表放れぬ中を引解に、放して賣るのは直が高い、ちよつ

と一晩着たなりに寢皺が袖へ附いたのみ、汚れけのねえうぶだから、言ひ直でなけりやあ賣られねえ。
友藏　安く賣らぬと言ひなさるも、無理ではないが賣手と買手、こつちは安く買ひたいのだ。
次郎　四割引いた上からは、六百圓が一圓缺けても負けることは出來ねえから、いやならよしねえ賣らない分だ。（トきつといふ、ばた〳〵にて上手屋體より、以前のお露走り出で、）
お露　兄さん、堪忍して下さいまし。（ト下手へ泣き伏す、七三郎見て、）
七三　お〻お露か、よく無事で居た。（ト嬉しき思入あつて氣を替へ、）よくも〳〵此兄に、そちは苦勞を掛けたよな。（ト涙を拭ひきつと思入、）
お虎　親方。わたしは今の内、湯へはひつて參りませう。
次郎　お〻、ゆつくりと行つて來ねえ。
お虎　そこに如在はありませんよ。（ト合方にてお虎下手へはひる、友藏お露の側へ寄り、）
友藏　昨日あなたを坂本で車にお乘せ申した時、喧嘩を仕掛けた惡者等が、爰へ連れて參りましたか。
お露　いえ〳〵、さういふことではない。
七三　はて、隱さずと有體に、昨日の仔細を言つて聞かせろ。

お露　わたしを乘せた車屋が上野の山へ曳き上げて、往來途絶えた御靈屋脇の淋しい所へ連れて行き、喧嘩を仕掛けた三人が跡からそこへ尋ね來て、既にわたしは四人の者に、恥かしい目に逢ふ所、

次郎　跡はわつちがお話し申さう、四人の惡漢が手取り足取り弄まうとする所へ、折よくわつちが根岸から新坂越して通り掛り、それと見るより飛び込んで四人の奴等を追ひ散らし、此子を無事に助けし時雲間の月によく／＼見れば、いつぞや船で逢つた娘御、不思議な緣と合乘りの車で家へ歸る途中、わつちの口から言ひ難いが、船で逢つた其時から心があつたと聞いたので、跡先き見ずに家へ留め昨夜直ぐに內祝言、女房になると駈込んで來たといふのは僞りだが、言ひ交したはまことだから、お前さんがくんなさりやあ、生涯わつちの女房にする氣だ。

友藏　それでは昨夜の車夫が人なき所へ連れて行き、無法な事をする所をお前が助けて下すつたのか。

次郎　斯ういふ中ゆゑ此子をば、返す心はないけれど、いやと言はれぬ餘儀ない賴み、わつちは得心しましたから、よく言ひ聞かして下さいまし。

友藏　今の話しを承はれば、お孃さんは疾うからして、惚れておいでなされたのか。

お露　さあ、恥かしいがあの時から、心で惚れて居りましたわいな。

七三　すりやお露には船中にて出逢ひし時より次郎吉殿に、心で惚れて居つたとか。

ト七三郎友藏歎息の思入、お露恥かしきこなしにて合方になり、

お露　あゝいふ殿御を持ちたいと、思へどいづくのお方やら知れねばくよく〳〵思ふのみ、岸田樣のお媒人で駿河臺の緣談も、幼い時から兄さんの養育受ければいやと言はれず、心で泣いてお返事をしたのも昨夜思はずも、難儀を助けて下すつた、お人が思ふお方にて日頃の望みが叶ひしゆゑ、どうぞ先きを斷つて無理なことだが、次郎さんの、所へ遣つて下さいまし。もし、お願ひでござります。

ト手を合して拜む、七三郎呆れし思入。

七三　如何に世間見ずの娘とて、結納受けぬ先きならば、仕樣模樣もあらうけれど最早今更仕方がない娘子供の色戀は世間にもあることなれば、左程に思ふことならばおれにそれが言ひにくゝば、側に附添ふお信にでも、なぜ其のことを言はないのだ。

友藏　早くそれを仰しやつたら、駿河臺へも旦那樣が御相談をなされまいに、さうしたことならあなたの難儀を昨夜救つて下すつた、いはゞ恩あるお方ゆゑよしや身分は違つても、御夫婦になられませうに、惜しいことをなされました。

ト此以前よき程に、下手より以前のお信出來り、門口に窺ひ居て、

お信　これ友藏どの、わたしに一言お孃さまへ、申さして下さりませ。（ト内へはひる。）

七三　おゝお信か、何しに來た。

お信　お案じ申しまするゆゑ、旦那樣のお跡を慕ひ、見え隱れに參りまして、最前からの此場の御樣子承はつてござりまする。（トお露の側へ來り、）もしお孃さま、えゝお恨みでござりまする。（ト合方きつぱりとなり、）あなたに限つて此のやうなみだらなことがあらうとは、夢更存じませぬゆゑ、さつきもさつき私が立派に申しましたのが、今更面目ござりませぬ。外の者と違ひまして十二の年にお小間使に上つて長年勤めし私、おつか樣がお逝れから及ばずながらお世話いたし、あなたの方にもお隔てなくおねだり物のある時は、何がほしいかれがほしいとお兄樣のお氣が兼ね皆私へ仰しやりますに、なぜ隱しては下さりました、疾にも左樣おつしやつたら旦那樣へお詫し申し、御緣組にはなりますまいに、實に悔しうござりまする。

七三　是れが結納の來ぬ先きなら、何とか申して先方へ程よく緣談斷れど、今日結納受けたれば今更斷ることが出來ぬ、先方にても此の事を親類方から懇意の方へ、それ〴〵吹聽あつたれば、貰ふ娘に不埒があつて、結びし緣が調はぬと申さば家の瑕瑾なり、又媒人の岸田殿は申し入れしが局長ゆゑ、面目なしと身を恥ぢて辭職いたすと申さるゝ、是れ皆そちが心一つ、それを聞き居る此兄

が心の内は如何ばかり、それのみならず冥土にて兄の教諭が惡いゆゑと、亡き兩親が恨んでござらう、何が不足で此のやうに、おれに難儀を掛けるのだ。

　トお露泣き居る、次郎吉もこれを聞きぢつと思入。

お露　申し譯なき私のいたづら、どうぞお腹の癒るやうに、打擲なとして下さりませ。

七三　そちを打擲なしたりとて、我が腹の癒るにもあらず、此事世間の噂となり家の恥辱となるとても血を分けし兄妹ゆゑ、是非もないことなれど、よしなき緣の媒介なされ、岸田樣が御辭職をなされるが如何にもお氣の毒、武士なら腹でも切らざれば、此の言譯はならぬわい。

　トきつといふ、此の以前下手より義員出で、門口に窺ひ居て、

義員　いや、其の御心配には及ばぬぞ。（ト門口を明けて內へはひる。）

七三　さうおつしやるは、

友藏
お信　岸田樣。

義員　許しめされ。（ト下手へ住ひ、）只今貴宅へ參りし所、こなたへおいでありしと聞き、是れへ尋ね參りしは一旦結びし緣談も近頃不開化なことながら、相性惡く止むを得ずお露どのを離緣に及ぶ、先刻送りし結納の受納證へ離緣狀を添へて只今返却いたす。

ト懐中より受取書と離縁狀を出し、七三郎の前へ出す。

七三　すりや、妹露は、御離緣とな。

義員　先刻僕が申せし通り、早く、此事駿河臺の香村氏の耳に入り、迎ひの者に取敢ず參邸なせば媒介の、不行屆をお談じあつて、以ての外の御立腹ゆゑ、實に立場を失ひしが御老母樣のお執成しをよき機にして早々に、離緣狀を持參いたした。

七三　其御苦勞を掛けますが、如何にも申し上げやうなく、恐れ入つてござりまする。

ト此内次郎吉思入あつて、

次郎　失禮ながら伺ひまするが、今おつしやつた香村樣は、維新以前舊幕の、お旗本ではござりませぬか。

義員　如何にも其頃七千石の、封祿たまはる幕府の旗本。

次郎　すりや香村樣の御惣領、吉之丞樣へお露どのゝ、御緣が極りましたのか。

義員　如何にも今日結納を、送りし甲斐なく破談になりしぞ。（ト次郎吉後悔の思入にて、）

次郎　こいつあ飛んだことをした。

義員
七三　何と。

次郎　いや、以前は慥飛坂に、お屋敷がござりましたな。（ト七三郎思入あつて、）

七三　香村氏より離緣狀を、下さる上は次郎吉殿、最早憚ることなければ、妹はこなたの女房にさつしやれ。

次郎　すりやお妹御を下さりまするか。

七三　世間の聞え、表向き遣はす譯には行かねども、妹が好んで參るなら、決して止めはいたしませぬ。

お露　それでは是れぎり兄さまは。

七三　兄と思ふな、出入りはさせぬぞ。

お露　はあゝ。（ト泣き伏す。）

友藏　斯うなるからは最前の、手切の金は渡すに及ばぬ。

七三　妹を捨つれば三百圓、又もや我が手へ返る金。（ト以前の金を懷へ入れる。）

義員　離緣狀を貴殿へ渡せば、我が媒人の役目も是れまで、不念の詫びに局長へ、辭職の願ひを差出さん。

七三　其の儀は暫くお待ち下され。

義員　お止めあるは、如何なる儀か。
七三　爰は他家ゆゑ、途中まで、
友藏　私共も諸ともに、
お信　お供いたすでござります。（ト皆々立上る、お露七三郎の袖に縋り、）
お露　身のいたづらに是非もなけれど、どうぞ兄さん、以前のやうに。
七三　香村様へ對しても、そちは音信不通だぞ。（トきつと言ふ。）
お露　はあゝ。（ト泣くを次郎吉止めて、）
次郎　今更言つても仕方がねえ、我が身の錆だ、默つて居ねえ。
　ト七三郎お露を見て、ほろりと思入あつて氣を替へ、
七三　いざ、岸田様
義員　御同伴いたすでござる。
　ト唄になり、義員先きに七三郎友藏花道へはひる。此内お信はお露を宥めて居て後れし思入、ばたばたにて花道へ走りはひる。次郎吉門口へ行き向うをきつと見込む。本釣鐘を打込みぢつと思入あつて門口をしめ吐息をつき。

次郎　これお露、お前と飛んだ縁を結んだ。

お露　え丶。（ト おどろく、又本釣鐘。）

次郎　斯ういふ事とは夢更知らず、昨夜枕を交したが、此の縁談のあることを一言いつてくれたらば、お前に疵は附けめえもの。

お露　それはどういふ譯あつて。（ト 誂への合方になり。）

次郎　岸田様が媒人で、今日結納を送られた駿河臺の香村様は、おれが親父が一方ならぬ、大恩受けたお方なるぞ。

お露　え丶。

次郎　包み隠さず身の素性を今明かして聞せるが、元このおれは捨兒にて、當歳よりして育てられし養父といふは舊幕のお數寄屋坊主の高村秀賀、常に大酒を好みしゆゑ殿中に於て粗相をなし、既に斷絶になる所、其頃香村主殿様はお側役をお勤めにて、茶道を深くお好みなされお相手なせしが徳となり、お執成しにて家も立ち、僅か二十日の閉門蒙り無事に濟みしは上なき大恩、されば子孫の末までも必ず忘却いたすなと、父が末期の遺言も身の放埒に忘れてしまひ、久しく音信不通ゆゑ、御惣領の吉之丞様へ御縁極まるそなたと知らず、昨夜枕を交したのは取りも直さず不義密

通、當歲よりして育てられたる養父が受けたる大恩を、仇で返せし身の大罪、何樣口で言譯なすとも是れまで不埒な次郎吉ゆゑ、誰も眞と思はねば、命を捨てねばならぬわえ。

お露　すりや御恩ある香村さまゆゑ、お前は命を捨てなさんすか。

次郎　身の言譯に死なねばならぬが、先づ其先に今爰で、そなたと二世の緣を切らねば、香村樣へ對して濟まぬ。

お露　今兄さんに捨てられても、お前を便りに思つて居たに、結びし緣を切られては、賴みの綱も切れ果てゝ、こりやもうわたしも、いつそのこと。

ト思入あつてつか／＼と表へ行かうとする、次郎吉止めて、

次郎　これ、血相替へて何處へ行くのだ。

お露　わたしや身を投げ死にまする。

次郎　それぢやあおぬしも死ぬ覺悟か、おれは是れまで種々雜多、惡事をなした身の果てゆゑ、死ぬのも天の罰と思やあ悔む所はないけれど、何科もない身を以て死なうといふは惡い料簡、跡へ殘つて此のおれが問ひ弔ひをしてくりやれ。

お露　いえ／＼何で存へませう、お前が死ぬなら共々に、死んで彼の世で添ひたうござります。

次郎　すりや、どうあつても死ぬといふか。

お露　あいなあ。

次郎　さういふことなら仕方がねえ、一緒に死ぬから、まあ待ちやれ。

お露　そんならわたしも諸共に。

次郎　死ぬのも恩ある香村樣、又二つには頼まれた、親の詞を忘れた言譯、日の暮れたのを幸ひに。

（ト此時時鳥笛になり、）折も折とて、空に鳴く、

お露　冥土の鳥と諸共に、

次郎　一先づ爰を立ち退いて、

お露　死出の旅路へ、

次郎　赴かん。

ト是れをきつかけにて、下手の黒塀を打返し、爰に淸元連中居並び前彈きなしに、淨瑠璃になる。

〽靑葉吹く晝の南も夕東風に、替る卯月の曇り勝ち、袖に涙の乾く間も、夏の茂りの木下闇。

ト本釣鐘、此の內次郎吉お露身支度なし、草履にて外へ出で、思入。

〽闇き冥土へ導くか、空に一聲時鳥、今死ぬる身も二つの聲を松浦屋敷七曲り、二人手に手を

鳥越の宮居を跡に三筋町、新堀川も引潮に緣の淺瀨の水落ちて、もやひし船も明日待たで今日を限りに消えて行く、名殘りの霜の果敢なくも、彼の世へ急ぐ美倉橋、

ト此內次郎吉花道にて跡を見返り、お露の振袖の袂を持ちて、大あゆびより東の假花道を渡り、舞臺へ來る、此內知せなしに道具廻る。

（美倉橋袂の場）――本舞臺一面の平舞臺、上寄りに美倉橋を見せ、上の方戸をしめし床見世にて見切り、下の方淨瑠璃臺を殘し向う柳原土手跡柳の立木、此後町家の書割り、よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て美倉橋北の袂の體。よろしく道具納まると、次郎吉お露は舞臺へ來り思入、淨瑠璃の切合方になり。

次郎　如何なる前世の惡緣か、枕交すもたゞ一夜、一日違ひで大恩ある香村樣へ御恥辱與へ、申譯なき身の大罪。

お露　わたしも早く兩親に別れし後は兄さんの、お世話になりし御恩も送らず、御苦勞掛けし不孝者。

次郎　其の言譯に今爰で、二人諸共命を捨て、

お露　明日は浮世の口の端に、掛るもみんな約束事、

次郎　死ぬる所も西方の、
お露　彌陀の御國の美倉ばし、
次郎　弘誓の船の川端に、
お露　浮き名を流すうたかたの、
次郎　泡と消え行く、
兩人　身の果敢なさ。
〽今更いふも愚癡ながら、
ト此時後へ前幕の車夫四人、紺の半纏縹色の半股引にて出來り。
善吉　昨夜の仕返し、
四人　覺悟しろ。
次郎　何を、（トきつとなり、口說模樣）
〽親は何れの誰なるか、神田の神の御社へ捨てられし身に白にぎて、神の御國の名を忍ぶ大和錦の巾着に、後藤が作の二疋獅子、片々の目貫は形見ぞと養ひ親の話しをば、聞くに付けても懷しく尋ねし甲斐も情なや、大川端で取落し、逢ふことならぬ身の不運、

ト此内四人次郎吉立廻りよろしく、よき程に懐より短刀を出し、是を抜いて切つて掛かる是れに恐れて四人下手へ逃げてはひる、次郎吉追掛けようとするをお露止める、次郎吉思入あつて、

お露　又もや、今の惡者が、顏も知らざる實親に、逢はぬは心殘りなれど、これも今更返らぬ愚癡。

次郎　取つて返さぬ其内に、

お露　少しも早う、

次郎　覺悟しやれ。

〽用意の短刀取直す、折から後に聲あつて、

ト次郎吉お露の胸許を取り、突かうとする、此時上手にて、

義員　やれ待て悴、早まるな。

ト以前の義員出るを見て、

次郎　や、あなたはさつきの岸田樣、わしを悴と言はるゝは。

義員　二十七年其の先きに、捨てたる我は親なるぞ。

次郎　えゝゝゝゝ。（トびつくりする。）

義員　我壯年の其折に、とある女にまうけし其方、親の手前を憚りて神田の社へ捨てたるが、絶えて行方の知れざるに、計らず此程大川端で拾ひし守は巾着を直せし覺えの大和錦、中には片々の獅子の目貫、さては達者で居ることかと思ふ折柄其方の、面差似たるはもしやと思ひ、取つて返せし途中にて、不思議に出逢ふ親子の對面。

次郎　すりや、親人樣でござりましたか。

議員　證據は片々の、此の目貫。

ト序幕で拾ひし守袋と、紙入より獅子の目貫を出して見せる。

次郎　まことにこれで一對揃ふ、

義員　後藤が作の親子獅子。

ト此時後へ久太出刃庖刀を持ち出で、

久太　さつきの返報。

ト切つて掛るを、ちよつと立廻つて引附ける、此時下手より以出の七三郎友藏出で、

七三　やれ久太粗忽すな、お露と娶合す上からは、七三郎の弟なり。

友藏　手向ひしては、濟まないぞ。

久太　それでは手出しはならねえか、額へ受けたる疵だけ損か。
七三　それぞ最前渡したる、二十五圓が療治代、
久太　えゝ有難うございまする。
義員　まつたお露次郎吉が、身の言譯に一命を捨てるといふも尤もながら、これにて兩人相果てなば明日は街の噂となりて、香村氏へ重ぬる恥辱。
七三　死ぬる命を存らへて兩人共に髮をおろし、姿を替へて旅行いたせ。
次郎　成程これも御尤、仰せに隨ひ、
お露　これより直に、
七三　其の出立の餞別せん。
ト最前の三百圓を出す、次郎吉受取りて、
次郎　こりや最前の三百圓、
久太　殘る方なき、
友藏　お計らひ、
次郎　ちえゝ有難い。

〽卯の花くだし長雨も、晴れて恵みの日の影に、開く牡丹の富貴草、盛り久しく。

ト此内以前の四人、それをとかゝるを、立廻つて引張の見得。

先づ今日はこれぎり、

ト目出度打出し

魚屋の茶碗（終り）

増補桃山譚

古歌舞伎十八番の内
關羽假装白浪鬧挑戰

夫は市川
是は石川
新歌舞伎十八番

濱の眞砂の御最屓願ふ　大領久吉名護屋着陣
附り　釆女送園菊　みさをたゞしき雁の玉章
幷ニ　聚樂送淀君　すがたやさしき秋の七草

色におぼろゝ秀次公が酒池肉林の歡樂も深き心の有磯海夫と悟つて高景が船に准へし諫言を水になさゞる高野の寺入り是も宿世の約束か退れ難なき天災に誰も伏見の大地震君諸共に政所宿直遲しと松の丸をりよくこゝへ清正がかけ附けきたる功にめで御詫をねがふ幸藏主徳川前田がとりもちに石田小西をとりひしぐ主計頭がいくさ問答

「桃山譚」は明治二年八月市村座に稿下された、作者五十四歳の時である。「駒迎三升入杯觴」といふ大名題の下に、中幕として挿入され、「新歌舞伎十八番の内、市川海老藏遺稿の正本、桃山譚」として上演されたのであつた。此の時には、加藤邸から桃山御殿に至る地震の場以下だけであつたが、越して明治六年九月村山座に復演せられた時、加茂社頭より聚樂の秀次屋形に至るまでを添加し、「増補桃山譚」なる名題ができたのである。扉に掲げたる「語り」は、後者の上演に際して作られたものを移したのである。九世團十郎が得意の物として、又新歌舞伎十八番の最初の物として、又活歴風の作物の先驅として、注意すべき作であると言つてよい。清正の述懷に涙を誘はしめたことはよく傳へられてゐるが、増補の方の秀次亂行の場も好評であつたといふ。

　役割は前者にありては河原崎權之助（加藤主計頭正清）、關三十郎（眞柴大領久吉）、尾上菊次郎（尼幸藏主）、岩井紫若（久吉の室花園御前）等。又増補の方の際には、河原崎三升（關帝の靈像實は石川五右衞門、豐臣秀次、加藤主計頭清正）、中村宗十郎（小早川隆景、豐臣秀吉公）、市川門之助（淀の方、尼幸藏主）、關三十郎（田中兵部之介、石田三成）、坂東家橘（德川氏康）、中村重藏（鈴木新助、小西行長）、中村歌六（北の政所）、中村時藏（不破伴作、前田利家）、市川女寅（東庵娘お光）等であつた。權之助、三升は何れも九世團十郎の前名である。

　口繪にしたのは國周筆の大首錦繪で、挿繪にしたのは九世團十郎が清正に扮した舞臺寫眞である。

大正十四年八月　　校訂者



増補桃山譚（新歌舞伎十八番の內地震加藤――四幕）

序幕

加茂堤の場
鞍馬川の場

〔役名〕――田中兵部之介、料理人鈴木新助、不破伴作、庄屋畑右衛門、山田三九郎、岩崎大蔵、黒谷丈五郎、百井運八。醫者笹井娘お元、新助の母おさみ、其他。〕

（加茂堤の場）――本舞臺上の方屋根附の高札場、下の方葭簀張りの出茶屋、眞中へ床几二脚並べ、後方加茂社の遠見の書割、總て加茂堤の模樣。こゝに庄屋の打扮の畑右衛門なり、百姓豊作、萬作、出來作の三人鍬、箒を持ち立つてゐる、この見得大拍子にて幕明く。

畑右　皆も御苦勞々々、いやもうこの頃のやうに路を度々なほすことはないわえ、殊に今日は又氣早の大將秀次樣のお鷹野故、假令少しの粗相があつても、是非を糺さず直にお手討、こんな怖いことはないぞや。

豐作　さあ、それ故今朝から往來の高低をなほし、塵芥を掃除して、なりたけ粗相のないやうにいたします。

萬作　いやもう、この萬作なぞは酒の上が悪い故、何でもお髙野の濟むまでは、酒斷でござりまする。

出來　わしらの酒は呑みさへせねばよいが、困るのはこの衆の子供等、粗相でもせねばよいと皆案じてをりますわえ。

畑右　おゝさうぢや〳〵、今も隣り村で五歳になる子がお供先を切つたので、斬られたといふ噂、命がけのことぢやによつて、よく氣を附けるがよいぞや。

豐作　それに當時太閤樣は、肥前の名護屋へ御進發で、誰も頭の押手がない故、我儘氣儘は爲放題、

萬作　先づ酒が好き女が好き、將軍樣だからよいけれど、われ〳〵なら永くは保たないわえ。

出來　おのれの田へ水を引くのぢやあねえが、酒で身上も潰すまいが、あゝ女にかゝつた日にやあ、なんぼ將軍樣でも正月は短からうぜ。

畑右　短からうが長からうが、美しい女があれば誰彼なしに引上げて、親子同胞の別ちもなく自由にするとは、勿體ないが畜生だと言ひますぞや。

豐作　人の手本になるその人が、

萬作　そんなみだらなことをさつしやつたら、

出來　この世の中に畜生が、

三人　澤山できて困りませう。

ト この以前よきほどに、上手より山田、岩崎、黒谷、百井等四人の侍、打割野牛羽、股引、大小鷹野の打扮にて出で來り、窺ひゐて、

四人　やい〳〵、畜生とは誰がことだ。（ト庄屋、百姓等三人びつくりして、）

畑右　これは〳〵異なことがお耳に留まりました唯今畜生と申しましたは、斯様でござります、雌犬が澤山子を生みましたと、申しましたのでござります。

山田　いや〳〵さうでない、我君秀次公を畜生と申したに相違あるまい。

岩崎　取るに足らざる百姓どもは扱おき、一ヶ村でも束ねをいたすその方が、

黒谷　我々どもが聞くとも知らず、一つになつて我君を、

百井　畜生なりと蔑なす一言、その分にはいたさぬぞ。

ト きつといふ、百姓三人は顫へながら下手へ控へる。畑右衛門こなしあつて、

畑右　どういたしまして、なか〳〵左様な事を申すどころではござりませぬ、一つ間違へば立所に命を取らるゝ怖い殿様、何しに左様な事を申しませう。

山田　えゝまだ〳〵申すか、唯今目前その方始め、畜生と申したではないか。

畑右　それはまつたく恐れ多いことではござりまするが、秀次樣は世界に二とないよい女を、幾人となくお妾になされますれば、羨しい畜生めと申しましたのでござりまする。
豊作　ほんの話の出放題、なか／＼もつて將軍樣を、
萬作　畜生だなどと申して御覽じろ、わたくしどもに罸があたります。
出來　以來はきつと氣を附けて話しをいたしますれば、今日のところは、
畑右　お聞流しのほどを、偏にお願ひ、
四人　申しまする。
山田　假令何であらうとも、畜生と申して濟まうと思ふか。
四人　へい／＼、まことに恐れ入りましてござります。
畑右　どうかお慈悲に、お聞きなされぬ積りにお願ひ申しまする。
ト庄屋、百姓等よろしく詫びる、侍四人は顏見合せ思入あつて、
山田　然らば今日はさし許す、以後はきつと愼みやれ。
四人　へい／＼、畏りましてござります。
岩崎　こりや／＼庄屋、我々ども最前より殊の外咽喉がかわいてならぬが、何ぞ飮むものを一つくりや

れ。
豐作　飲むものとおつしやりますは、水がよろしうございますか、お湯がよろしうございますか。
黑谷　やい〳〵、その方どもが何を存じて、氣の利かぬ奴ぢや。
百井　こりや庄屋、その方我々が飲むものを心得たか。
　　　トこなしあつて言ふ、畑右衞門うなづいて、
畑右　へい〳〵、わたくし心得ましてございまする。
　　　ト出來作に囁く、出來作うなづき下手へ入る。
侍　飲むものを、早く持て、早く持て、(ト四人急きたてる。)
畑右　へい〳〵、唯今差上げまする。
　　　ト直に下手より一升樽と茶碗を持つて出來作出來り、畑右衞門へ出す。
生憎水も湯もこの邊にございませねば、どうかこれを召上つて下さりませ。(ト山田の前へ出す。)
山田　いや、心利いた奴ぢやわ、これでなくては一村の束ねをいたす庄屋役は勤まらぬ。さあ〳〵用事はない、勝手に引取りやれ。
畑右　へい〳〵有難うございまする。(ト先に立ち百姓三人附いて花道へ行き、思入あつて) 何のことだ、

百姓　とう／＼一升飲まれてしまつた。
三人　お庄屋樣、とんだ災難でござりました。
畑右　馬鹿を言へ、手前達が畜生だといつたから、尻尾をおさへられたのだ。おれが買ふのぢやあねえぞ。
三人　それぢやあ、わし共が買つた酒かえ。
畑右　知れたことだ、然し、これがほんの病犬に喰ひ附かれたやうなものだ。
三人　いゝ畜生だ。（トこの中侍四人は酒盛をしてゐて、これを聞き、）
四人　何と申す、
畑右　いえ、わんとも申しはいたしませぬ。
　　　ト大拍子になり四人は口を押へて花道へ入る。舞臺の四人こなしあつて、
山田　先刻から一杯やりたいところ、あの庄屋を脅しつけ、先づ酒にありついたと申すもの、さゝ、一つお上りなされい。（トめい／＼茶碗を廻し飲むことよろしくあつて、）それに附けても我君秀次公が、日頃に替り荒々しき御行跡、少しの科もお許しなく、人を斬らねばお心持が惡いといふは、困つたことではござらぬか。

岩崎　さればさ、これと申すも太閤樣の御愛妾淀の御方に、拾君が出來てより、さすがの名將なれど迷ふは恩愛、天下を拾君にお讓りなされたい思召し、

黑谷　淀の方は尙のこと、こゝへ又佞奸の石田三成、增田右衞門尉などが讒言なし、御親子の御仲が惡しくなり、よく下々でもあることだが、所謂自棄酒が始まりで、

百井　女狂ひに身上をつぶすといふは往々あること、所詮この御行跡では二代の將軍はむづかしい、我我どもの身代も長持はござるまいから、一日でもかうしてゐる中好きな酒でも飮むが得と申すもの、

山田　左樣々々、とてものことに美しい酌を一人ほしいものでござる。

岩崎　こりや貴殿の言はるゝ如く、肴は氣取り酌は髱。

黑谷　肴もなし髱もなし、酒ばかりでは興がござらぬ。

百井　はて、お急きなさるな、又よい獲物もあるでござらう。

山田　いや、氣の永い話でござる。

四人　はゝゝゝゝ。

ト大拍子になり、花道より醫者笹井市庵娘お元、振袖島田鬘家中娘の裝にて、日傘をさし出來り、後

より友達娘おかつ、おたき出來り、花道にて、

かつ　もしお元樣、もうつい向うが明神樣故、まあゆつくりと行かしやんせいなあ。

お元　これはしたりおかつ樣、今日はお百度を上げるのぢや故、早う行つて下さんせいなあ。

たき　いえ〳〵、お百度ばかりぢやござんすまい、彼のお方にお逢ひなさんすので御座んせう。

お元　（恥しき思入にて、）そのやうなことおつしやらずと、早う行つて下さんせいなあ。

ト　お元先に立ち、後より兩人舞臺へ來る、侍四人お元を見て、

山田　それへござつたは、お醫者の甫庵老が娘御、お元どのではござらぬか。

岩崎　これは〳〵、お連は村井、渡邊殿の娘御達、

黑谷　よい所へお越しなされた。

百井　さ、さ、これへ〳〵、

ト　お元惡い人達に出逢つたといふこなし、山田無理にお元を床几へかけさせる、これにておかつおたきを三人にて一人宛はさみ床几へかける。お元心の急く思入にて、

お元　これは〳〵、どなた樣にもお鷹野と見え、御苦勞樣にござりまする。けふは母樣が御病氣故明神樣へお百度を上げにまゐりました。又おめもじいたしますれば、今日は御免なされて下さりませ。

ト行きにかゝるを山田留めて、

山田　これはしたり、先づお待ちなさい、何とおつしやる母御が御病氣とな、それは定めし御心配な儀でござる。かやういたさう、お百度とあれば我々がお助け申さう、ぢやによつて先づ御ゆるりとなされい。（ト無理に押へる。）

お元　それはまあ有難うはござりまするが、だん〳〵日も短かうなりますれば、なあ皆さん。

かつ　ほんにさうでござんす、女子ばかりでござんす故、母御樣もお案じなされば、少しも早うおまゐりして。

たき　早う戻つてまた出なほし、ゆるりとお話し申しませう、さあお元樣。

ト三人又行きにかゝるを各自留めて、

岩崎　これは又如何いたしたものだ。實は我々最前よりこの處で、一獻催せしところ、

黑谷　酌を賴む者がござらぬ故、如何いたさうと存ぜしところ、

百井　よい折柄のことなれば、せめて我々の杯を、一獻づゝお受け下されい。

四人　平にお賴み申す、お賴み申す。

ト三人の前へ茶碗を出す、お元氣の急くこなしにて、

お元　左様でもございませうが、御酒は少しも頂戴いたしませねば、どうぞお許しなされて下さりませ。

山田　すりや、どうあつてもこの杯はお受け下さらぬか。よろしうござる、決して無理にとは申さぬ、その代りお元どの、聞いてお貰ひ申す儀がござるて。

トお元扨はといふ思入にて逃げようとするを、

はて、何も怖いことではござらぬ。先達も申入れたる如く、我々どもが無二の朋友不破伴作殿が其許に首ツたけ、是非女房に申受けたいと親御へも申入れたが、聟を取る娘故やられぬとのこと、こりや御尤もの儀なれど、そこが開けぬと申すもの、假令親御が不承知でも、御當人同志が出來さへすれば、この道ばかりは別なもの、其許さへ御得心なら、我々お取持ちの仕ろ、さうびんしやんなさらずと、色よい返事をお聞かせ下され。

お元　さあ、御親切に有難うはございますれど、假令何とおつしやつても、親の許さぬ縁組は、わたしやどうも結ばれませぬ。

かつ　殊にそれなるお元様は、

たき　疾うから鈴木新助様と、

お元　あゝもし。（ト押へる、岩崎これを聞きて）

岩崎　その新助と譯のあるのも存じてゐるが、新助は高が料理人、伴作殿はお侍の出頭、同じ家來でも鼈とお月樣、ちつと古いが兎と猫ほど違ふわえ。

黑谷　先づ第一伴作殿の奧方にならるれば、お元どのゝ身體へ箔がつくから、こゝは一番迷はずに肌を脫いでおいでなさい。

石井　先方で耳を長くして待つてゐる中手を拍てば、吾々共にも卯の花の花を持たすといふものだ。

山田　何でも當時は襟卷の世の中故、目色のいゝ方へおかゝりなされて、身重にでもなつて御覽じろ、それこそ相場を狂はせますわ、アノ、こゝな畜生め。

トお元の脊をたゝく。この時下手より以前の百姓豐作出かゝりゐて、これを聞き、

豐作　畜生とは誰がことだ。（ト大きく言ふ、山田びつくりし、皆々も立ち上り見て、）

山田　えゝ、びつくりいたすわえ。

岩崎　そちや最前の村の者、

黑谷　何故あつて、この無禮、

百井　それへなほれ、手は見せぬぞ。（トきつと言ふを、豐作留めて、）

豐作　あゝもし／＼お待ちなされませ、わたくしは木村樣からの急のお使ひでござります。

山田　なに、木村氏より、

四人　火急の用とは、

豊作　何やら仔細は存じませぬが、殿様より急ぎのお召故、直においでなさるやう、わたくしはあなた方のお迎ひでござりまする。（ト、これを聞き、四人はびつくりして、）

山田　我君の急お召しとあれば、大變々々、

岩崎　延引なせば首道具、

黒谷　こゝもをしいが、命もをしい、

百井　こりやかうしてはゐられますまい。

豊作　さあ／＼、お早くおいでなさりませ。

山田　えゝ唯今まゐるところだ。百姓、

四人　供いたせ。

ト早き大拍子になり山田先に三人、豊作も附いて下手へ入る。お元、おかつ、おたき三人殘り、嬉しき思入あつて、

お元　思ひがけない殿様より急のお召しは、この身の幸ひ、

かつ　差詰つたる今の仕儀、どうなることゝ思ひしに、
たき　案じるよりも易々と、今日の難儀を脱れしも、
お元　これもやつぱり明神様の、皆御利益、
三人　えゝ有難うござります。

ト三人手を合せ拜む、この時後へ鈴木新助袴大小にて出で、

新助　いや、その利益は明神様ではない、おれぢや。
お元　や、お前は新助樣、
かつ　そんなら今の、
たき　お使は、
新助　思はず此の場へ來合せて、難儀の樣子見た故に、百姓衆を頼んで四人を他所へやつたれば、もう案じることはないぞや。
お元　よい所へ來て下さんした。いろ〳〵積るお前に話が、

ト新助の側へ寄らうとして恥しきこなし、おかつ、おたきこの樣を見て、

かつ　もしお元さん、新助さんに話しがあるなら、ゆつくりこゝでお話しなさんせ。

たき　其の中二人で明神樣へ、お百度を上げてゐませうわいな。
お元　もしお二人さん、何にも言はぬ。（ト手を合せるを、）
かつ　あゝもし、（トおたきの手を取り、）
兩人　どれ、行てまゐりませう。
　ト兩人上手へ入る、新助お元兩人顔見合せ思入あつて床几へかける。
お元　もし新助さん、今の樣子を聞いたとあれば、詳しう言ふにも及びませぬが、あの意地惡な伴作がわたしを貰ふと母さんへ度々よこす相談に、女子ばかりと侮つて、是非女房にせねばならぬと、人を頼んで無理ばつかり、言譯さへも泣く涙、悲しい中にもお前をば二世の夫と思ふ故、假令傍から水さすとも外へ咲く氣はないほどに、よい思案して下さんせいな。
新助　差しあたつてよい思案も出ぬけれど、これまでお前が眞實に言うて下さる志し、忘れはおかぬ然ながら、偶としたことで言交したれど、この新助は身分も輕きお料理人、伴作樣はお羽振りよき當時御近習頭故、伴作樣へ行つたはうがお前の仕合せ、わしが事は無き往時と思ひなほし、伴作樣の女房におなりなさるが、先づ第一母御へ御孝行と、此の新助は思ひまする。
お元　えゝ憎らしい新助さん、親への孝は聞えてゐれど、あの伴作と夫婦になる位なら、かうした苦勞

はせぬわいな。(ト新助の膝を抓る。)
新助　あいたゝゝゝ。それぢやというて此のわしも、急に思案もござらぬ故、
お元　さういふことならようござんす、わしやどうあつてもお前を除け、外の夫は持たぬ故、逹て厭だと言はしやんすりや、死ぬより外はござんせぬわいな。
新助　これはしたり、短氣なことは言はぬもの、
お元　そんならどうぞよい思案を、
新助　それぢやというて、今こゝで、
お元　こりやもういつそ、(ト新助の刀へ手をかける。)
新助　あゝこれ、必ずともにめつたなことを、
お元　それとも外によい思案が、
新助　さあ、それは、
お元　さあ、
新助　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。

桃山譯

お元　もし新助さん、これほど思ふわたしが心、ちつとは不便と思ふなら、お前も男ぢやござんせぬ。どうぞよい思案して下さんせいな。

新助　（持てあつかひし思入にて）なるほど、思案を定めませう。

お元　えゝ、

新助　身分も輕きお料理人を、それほどまでに思うて下さるお志し忘れぬ證據は殿樣の、假令御不興受くるとも、他國へ行つて夫婦となり、どんなしがない暮しでも、

お元　添ひ遂げて下さんすか。

新助　念には及ばぬ、

お元　えゝ嬉しうござんす。（ト新助に寄添ふ、新助思入あつて）

新助　さはさりながら行く先々、この身につれて此方にまで難儀をかくるが氣の毒故、今のやうに言うたのぢやわいなう。

お元　あれ、又入らぬその遠慮、お前がさういふ心なら、何處の果へ行つたとて、

新助　人に人鬼はないとやら、知邊を使つて共稼ぎ、

お元　住めば都といふからは、結句氣樂な差向ひ、

新助　わしは手慣れし庖刀の刃よりも薄き世渡りに、

お元　飯も炊いたり賃仕事、

新助　慣れぬ水仕に錆びがちの、

お元　針より細き煙りをば、

新助　油断あらば砥も稼いだら、

お元　暮せぬことも、

兩人　あるまいわいな。

ト兩人寄添ふ、この以前よりよき程に上手より不破伴作野牛纏、股引、打割羽織、大小、鷹野の打扮にて出かゝりゐて、この時、

伴作　不義者見つけた、そこ一寸も動くまいぞ。

トきつと言ふ。これにて兩人びつくりする、とこゝへ以前の四人の侍上手より出來り、

新助　や、伴作樣にはいつの間に。

山川　やあ、だまらう、此奴不義はお家の堅い掟と、存ぜぬことはよもあるまい。

岩崎　されば命は覺悟の前、伴作樣のお目にかゝりし上からは、

黒谷　袋の鼠か籠の鳥、逃ぐるとて逃がしはせぬぞ。
百井　鷹野の獲物に我々が、今この所で成敗なし、
山田　君へ土産に仕らん、覺悟極めし、
四人　それへなほれ。（トきつといふ、伴作思入あつて、）
伴作　こりやお元よく承はれ、このほどより某が數度の縁談申入るれど、生涯男は持たぬなどゝ品よく虚言を申し飾り、今この始末は何事だ。斯く申すと某が何か意地の惡いやうなれど、拙者とても未だ無妻のことなれば、何も好んで憎まれたいこともないが、通りかゝつて眼に入れば不義をそのまゝ見捨てちやおかれぬ。こりや新助、不義をなしても濟むと思ふか、罪を犯せしその者は手討になすが君の御掟。これなる四人が證人故、この場に於て打捨てる、兩人共に覺悟いたせ。（トきつと言ふ、新助思入あつて、）
新助　不義を犯せし我々兩人、もとより命は覺悟の前、
お元　わたしも好いた新助さんと、二人一緒に死ぬのなら、こんな嬉しいことはござんせぬ。
新助　未練は少しもござらぬ故、
お元　お手にかけて、

兩人　下さりませ。(ト兩人覺悟の思入、伴作腹の立つこなしにて、)

伴作　よい覺悟だ、望みの通り成敗なさん。

ト刀を拔いて振上げる、この時花道の揚幕にて、田中兵部之介の聲にて、

田中　あいや、その御成敗、暫くお待ち下されい。

敵役四人　あの聲は、

ト大拍子になり花道より田中兵部之介野半纏股引打割羽織、大小、鷹野の打扮にて出來り、花道に留る、皆々見て、

山田　誰かと思へば、貴殿は田中。

四人　兵部之介殿、

伴作　不義を働く兩人を、成敗なすに田中殿には、何故留め召されしぞ。

田中　お留め申せしその仔細、それへまゐつて演說いたさん。(ト舞臺へ來り床几へかける。)

伴作　(詰寄りて、)して、その仔細は、

四人　如何でござる。

田中　拙者がお留め申せしは、これなる二人は不義でない故、

伴作　何と、

田中　御存じなき故不審な尤も、死去致されし甫庵どの、豫々約束なしたる仲、即ち媒人は斯く言ふ兵部、甫庵どの存命なれば疾にも婚姻さすべき兩人、延引なせしは忌中故、

伴作　すりや兩人は許嫁とか、然し、これまで聞かぬ話し、

田中　拙者よりして其許へ、お話し申せばそのまゝにはいたされぬ。

伴作　とは又何故、

田中　主ある娘のこれなるお元へ、戀慕なしたる伴作殿、其許こそ即ち不義、

伴作　や、

田中　さ、そこを存じて何事も申さぬ故に其許にも、此の場はこのまゝお濟ましなされい。

伴作　でも、現在二人のこの場の不義を、

田中　達て詮議をめさるなら、先づ其許から詮議なさうか。

伴作　ぢやと申して拙者めが、

田中　然らばこのまゝお濟ましなさるか。

伴作　さあ、それは、

田中 詮議なさうか、
伴作 さあ、それは、
田中 さあ、
伴作 さあ、
兩人 さあ〱〱。
田中 これはしたり伴作殿、人の非を打つ其許が不義になつては御身のさはり、唯何事も今日はこのまにおくがよからうかと、憚りながら存じまする。
伴作 然らばどうなと勝手にめされ。（ト刀を鞘へをさめ、思入あつて、）兵部殿がお越しなくば、不義の成敗一か八、眞二つにいたしたなら、もう今頃は三途の川、死出の山路の旅立ちも極樂ならぬ地獄道、六道あたりでさまよつて、泣の涙の八つあたり、明るい所から暗がりの十萬億土へやらうもの、命冥加な奴等だわえ。
ト忌々しいといふ思入、新助お元は嬉しきこなし、侍四人はこれを見て、
山田 何といづれも御覽じたか、お料理人と醫者の娘が夫婦になれば、療治と料理がごつたになり、
岩崎 煮物の加減も一倍半、せんじ詰つた擧句の果が、

黒谷　殿の御不興蒙むつて、二人が脈もあがつたり、
百井　今からそこらが見えるやうだ、思へば笑止千萬な、
山田　左様でござる。
四人　はゝゝゝ。（ト伴作田中へこなしあつて、）
伴作　何はともあれ某は、殿の御用も繁ければ、
田中　お構ひなくとも伴作殿、
伴作　左様ござらば兵部殿、
田中　後刻御前で、
兩人　御意得ませう。

ト大拍子になり、伴作先に四人も附添ひ上手へ入る。田中これを見送る、新助、お元は悦ぶこなし、以前のおかつ、おたき出來りて、

兩女　お元様、嘸お嬉しうござりませう。
お元　そんなら今の様子をば、
かつ　どうなることゝ最前から、

たき　お案じ申してをりました。

新助　これと申すも兵部様の、皆お情、

お元　何んとお禮を申さうやら、

かつ
たき　有難うござりまする。

田中　その禮には及ばぬこと、さりながら御身へ執心かけたる伴作故、又もや障りをなさんも知れぬ。事なき中に少しも早う、この娘等と同道にて、

お元　何から何まで厚いお情、そんなら一緒に新助様、

新助　あいや、拙者ことは後に殘り、兵部様へ何かのお禮、

かつ　ほんにそれ〳〵、連立つては人目に立てば、

たき　わたくしどもと御一緒に、

お元　それぢやというて、このまゝに、

兩女　はてまあ、おいでなされませ。

ト唄になりおかつおたきお元の手を取り、無理に連れて花道へ入る、新助田中へこなしあつて、

新助　お目を掠めし不義の大罪、既に命は風前の燈火よりも危き拙者、憎い奴とも思召さず、却つて厚

き御仁情、身に取りまして何程か有難う存じ奉りまする。(ト兩手をつき禮を言ふ。)

田中　何んの〳〵、日頃よりあの伴作君のお覺えよきを笠に、不義を言立て其許を、戀の遺恨に作作が討ち兼ねまじき樣子故、許嫁と僞つて御身が命助けたり。

新助　これが眞實の命の親、何んとお禮を申さうやら、此末とも我々へお目かけられて下さりませう。

田中　その儀も委細承知いたす。それに就き其許へ命の親の某が賴み入れたき事こそあれ、何んと聞いては下さるまいか。

新助　これはまた改まつたそのお言葉、假令何樣のお賴みにても、仔細は聞かず何なりと、

田中　聞いてくりやるか。

新助　命に替へて、(ト小柄を拔きて金打なし、)斯くの通り。

田中　したり、その心底を見る上は、(ト四邊を見廻す。)

新助　して、わたくしへお賴みとは、

田中　その賴みは外ならず、(ト小聲になり、)秀次公の御膳部へ、毒を仕込んでくれまいか。

新助　えゝ、(トびつくりして、)そりや何故に我君へ、(ト大きく言ふ。)

田中　これ、(ト押へて、兩人立上り四邊を見廻し、田中思入あつて、)その驚きは尤も至極豫て御身も知る

如く、殿下のお世嗣秀次公日に增し惡逆募らせたまひ、數度御諫言を申せども更にお用ゐなき故に、既に山口玄蕃などは、未然を察し身を退き、佞人讒者を愛したまひ、太閤殿下を討滅し天下を掌握いたさんと、思し立つたる秀次公、今然ある事の發しなば再び四海は闇となり、天下の騷動眼のあたり、秀次公一人の御心より下萬民の難儀となれば、勿體なき事ながらお命斷つより外はなし、御身毒殺いたしくれなばこれ太閤へ第一忠義、何卒拙者がこの賴み、承引いたしくれまいか。（ト思入あつて言ふ。新助もこなしあつて、）

新助　命の親の兵部樣、外の事なら否はなけれど、正しく主君の秀次公を、何とて毒害いたされう。

田中　忠義一途の其方故、さう思ふは尤もながら、汝が親の新左衞門も以前太閤の御家來にて、某などと同樣に秀次公へ附渡り、さすれば御恩の厚きは秀次公より太閤ならずや、その太閤の御身にかかるを外に見て、打捨ておくは不忠の第一、それとも達つて承引なくば是非に及ばぬ、汝は生かして返されぬぞ。

新助　假令命を取らるゝとも、新助如きの輕き身は更に惜しみはいたさぬが、秀次公が御謀叛にて太閤殿下を弑すと聞いては、そのまゝには打捨て難し、

田中　そこを思はゞ我に黨なし、君の膳部へ一藥を、

新助　どうして主君へ勿體ない。

田中　得心なくば御身と某、刺違へて相果てん。

新助　拙者はともあれ、あなたにまで、

田中　一人ならず二人まで、犬死いたすは諸人の嘲り。

新助　それぢやと申して、

田中　然らば得心いたしてくれるか。

新助　さあ、それは、

田中　犬死さすか。

新助　さあ、

田中　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

田中　こりや新助よツく承はれ、臣としてその主を大切に思ふはこりや人倫の常なれど、天下の爲めにならざる主をば天下の爲めに除くとも、血筋を以て國家を治め、泰平謳ふ時到らば、不忠が却つて忠義となる、魯鈍ならざる汝故、性根をすゑて返答しやれ、どゞどうぢや。

トきつと言ふ、この中新助いろ〳〵こなしあつて、とゞ是非なき思入あつて、

新助　是非に及ばぬ、いかにもお賴み仕果せませう。（ト思ひきつて言ふ。）

田中　すりや、得心なして一藥を、

新助　濟まぬことゝは思へども、天下のお爲め二つには、仁情厚きあなた樣に、犬死させるは本意ならず、折を見合せ膳部の中へ毒を仕込んで秀次公へ、差上げまするでござりませう。

田中　出來す〳〵、その一言を聞く上は、（ト四邊へこなしあつて、懷中より毒藥を出し、）この一藥にて必ずともに、心得たか。

ト新助に藥包みを渡す、新助受取つて、

新助　そこはぬからぬ料理役、口頃お好みなされたる、魚類に交へてたつた一口、

田中　喰せば忽ち、希代の妙藥、

新助　やがて效驗は、

田中　汝が働き、

新助　御氣遣ひめされるな。

田中　出來した新助、

新助　兵部樣、

田中　しかと申附けたぞよ。

新助　畏つてござりまする。

ト唄になり、新助花道へ行き、困る事を頼まれたといふこなしあつて氣を替へ、足早に花道へ入る。
田中後を見送りにつたりと思入あつて、

田中　家中も多き其の中で、役儀は低き料理方、小祿なれど眞魚箸と庖刀取つては人に勝れ、心利いたる鈴木新助、その腕前を豫てより某見込んでおいた故、不義の露顯に俎の鯉に等しき生作り、既に危い二人が命助けてやりしを種になし、彼に頼みし我獻立、首尾よく鹽梅調ふ時は、一時に羽をのす、我立身、はて心地よき、

ト思はず床几へ腰をかけるを道具替りのしらせ。

鷹野ぢやわえ。

ト大拍子になり、この道具廻る。

（鞍馬川の場）――本舞臺三間の間常足の二重岩の蹴込み、向う一面岩組の間より湖水を見たる書

割、二重に振よき松の立木、上下岩の張物にて見切り、この次、下手は蘆原、總て鞍間山の下川端の模樣浪の音にて道具留る。と、花道より新助母おさみ老たる打扮にて珠數を持つて出來り、花道にて、

さみ　浮世は夢の一昔と、連添ふ夫は此の世を去り、跡に殘つた年寄りの女子の愚癡を繰る珠數の玉も淚の寺參り、賴む回向も悴の新助、まだ年若のこと故に案じられるは秀次樣。常から氣早の大將にて動ともすれば科なき者をお手討になさる故、どうぞ悴の身の上に何事もないやうにと、明神樣へお願ひ申さん、あゝ苦勞の絶えぬことぢやなあ。

ト舞臺へ來る、風の音ばかりになり、上手より差金の鳩飛んで來る、その後より差金の鷹追ひかけ來るをおさみ見て小石を取つて鷹に打附ける、これにて鷹逃げて入る、鳩はおさみの手元へ來るを見て、

鳥類の其の中でも、鳩は弓矢のつかはしめ、殊に今日は夫の命日、寺參りの戻りといひ、よい功徳をしました。さあ〳〵早う逃げて行きや。(ト鳩を逃がす、鳩は上手へ飛んで行く。)森の彼方へ飛行きしは、明神樣の鳩なるか、あの嬉しさうに飛んで行くことわいな。(ト悅ぶこなし。此の時どんと本鐵砲の音して、おさみにあたる。)はあゝ、

ト言つて倒れる、浪の音ばかりになり、下手より以前の庄屋畑右衞門に豐作、萬作、出來作等の百姓附きて出來り、

畑右　また鐵砲が鳴つたぞ、

二人　誰ぞ撃たれはせぬか。

畑右　氣を附けろ〳〵。

ト皆々舞臺へ來り、おさみを見て、

皆々　そりやこそ、中つたぞ〳〵。

畑右　やれ可愛さうに、年寄りの女の婆さんが、（ト抱起す。）こりや、皆も呼んでやれ〳〵。

三人　おゝい、年寄りの女の婆さん、やァい〳〵。

ト種々介抱する、おさみ肩を撃たれしこなしにて息を吹返すを見て、

畑右　おゝ氣が附きましたか、やれ〳〵可愛さうに、然し急所はよけた、これ、氣をたしかに、

三人　持たつしやれ〳〵。

畑右　こりや、汝等はかくしてゐてはならぬ。横濱鈍宅さんの所へ行つて、わしがさう言つたといつて藥を取つて來さつしやい、早く〳〵。

豐作　へい〳〵畏りました、そんならお前さんがさう言つたといつて、藥を取つてまゐりませう。

萬作　庄屋樣が藥をよこせといつたら、大方大黄ばかり盛るであらう。

出來　現金に藥禮を持つて行かねば、やつぱり閻魔のお帳面か。
畑右　え丶、何をぐづ〳〵と言つてゐるのだ、早く行け〳〵。
三人　へい〳〵、どれ行つて來よう。
　　　ト百姓三人下手へ入る。風の音早き合方になり、上手より以前の新助出來り、おさみを見てびつくりして駈寄り、
新助　こりや母人には、如何なされましたぞ。
畑右　これはよい所でござつた、そんならお前の母御でござるか、やれ〳〵氣の毒なことでござる。
新助　いかにも拙者が母でござるが、何故かゝるお怪我をなされました。
さみ　おゝ悴か、よう來てくれた、今日寺參りして戻り道、此の川邊で今し方鷹に追はれし鳩を助け、放してやつたがその鳩を撃たうとしたる鐵砲なるか、肩を撃たれてこの苦しみ、
新助　して、何者の仕業なるぞ。
畑右　撃つたはたしかに秀次樣、今朝から村でも三人まで、皆鐵砲で撃たれました。
新助　そりや又何んの科あつて、
畑右　何んの科もないものを唯慰みに撃たつしやります。こんな險難な事はないが、わしは役目が庄屋

だけ鐵砲には撃たれませぬが、さつき思はず侍衆に酒を一升飲まれました。

新助　すりや何の科なき者を、あまりといへば無道の我君、（ト思入あつて言ふ。）

さみ　さう思やるは尤もなれど、わしが言ふことこれ新助、よう聞いて下されや。かういふ事もあらうかと、明暮そなたの身の上が案じられてならぬ故、どうぞお手討にならぬやう、今日も神樣佛樣へお願ひ申しに行つたのぢやが、もうこの母は先のない身體故命もをしいことはないが、如何なる前世の宿業にや、この過ちは何事なるぞ、そなたはこれよりお暇願ひ、浪人なして末長う、親の亡き跡頼みまする、命あつての物種なるぞ。

ト苦しき思入にて言ふ、新助愁ひの思入あつて、

新助　扨は鷹に追はれし鳩を、助けられしを憎しと思召してのことなるか、鳥類に替へ人命を斷つといふのは無慈悲な御處置、やがて二代の將軍と仰がれたまふ御身にて、この御所業は何事ぞ、えゝ情ないことぢやなあ。

ト悔む思入、おさみ苦しむ、畑右衛門共々に介抱する。と、ばた〳〵になり、下手より以前の四人の侍お元を引立て出來る、新助お元を見て、

こりや、お元どのには、何故に、

山田　何故とは知れたこと、秀次公お鷹野の途次、運よくこれなるお元どの、
岩崎　君の御目にとまりし故、有無を言はせず引立て行き、
黒谷　今宵よりして秀次公のお妾なれば、指でもさゝば命がないぞ。
百井　これから直にお館で、我君が御自由になさるのだ。
四人　えゝ仕合せな女だなあ。こゝな畜生め、
と四人はお元を捉へる、この中へ畑右衛門入つて、
畑右　畜生とは誰がことだ。(ト大きくいふに四人びつくりして、)
山田　汝やア先刻の庄屋でないか。
侍三人　えゝ、控へてをらう。(トきつと言ふ。畑右衛門是非なく控へろ。)
お元　もし新助さん、ひよんなことになつたわいなあ。
ト泣伏す、おさみ顔を上げて、
さみ　常々倅とわりなき仲も聞いてゐたが、そんならお前は、
お元　新助さんと末々は、夫婦になるを樂しみに、思うた甲斐も情ない、
新助　殿の御目に留りしは、その身の出世と言ひながら、

さみ　お部屋になるは、この世から。

お元　地獄へ落ちる心の切なさ、

新助　それも主命是非なけれど、

さみ　現在主あるこの娘

お元　あまりといへば、（ト立ちかゝるを、）

侍四人　こまごと言はずと、うせう〳〵。

トお元を無理に引立てる、新助留めようとする、おさみ苦しむ故畑右衞門新助を此方へ連れて來る、この中侍四人はお元を引立て上手へ入る。

さみ　えゝ親といひ娘といひ、ても情ない事ぢやなあ。（ト恨めしき思入にてがつくりとなる。）

新助　こりや母人には、息絶えたか、ほい、（トどうとなる。）

畑右　さりとては氣の毒千萬、どりや戸板でも持つて來よう。（ト下手へ入る。本釣鐘）

新助　（思入あつて、）道ならぬとは知りながら、最前思はず助かりし命の親の兵部樣か、わりなき頼みにせん方なく、得心なして請合ひしが、如何なさんととつおいつ、思案にくれる入相の鐘も哀れな知死期時、何科もない母人が、無慚の最期その上に、言交したるお元どの、恨み重なる秀次公

（トきつと思入あつて、）道に背けど天下の爲め、
ト件の薬包みを思はず手に持ち、殺さうといふ思入、この時二重上手の蘆原より以前の田中兵部之介、下手の蘆原より不破伴作窺ひ、出かゝりゐて、顔を見合せうなづくを木の頭、浪の音、水鳥笛になり、水鳥上へ舞揚る。三人これを見上げて、引張りの見得、浪の音カケリ水鳥笛にて、よろしく

ひやうし幕

二幕目

鷹ヶ峯麓の場
同關帝廟の場

〔役名――石川五右衛門、足柄金藏、小早川隆景。大領の妾淀の方、其他。〕

（鷹ヶ峯麓の場。――本舞臺三間の間一面の山幕、上下岩組の張物、下の方に山城國鷹ヶ峯麓道といふ榜示杭。上手に石田の家來岩木典藏鎧小手胸當達附、草鞋大小にて、上へ蓑を羽織り竹笠を持ち立つてをり、これに水汲陣笠の軍兵二人附添ひ、下手に百姓田五作、畦六、くれ藏蓑笠にて、田五作は谷間村と記せる弓張提灯を持ち控へてゐる。この見得山おろしにて幕明く。

田五　わたくしどもは當所の百姓、怪しい者ではござりませぬ。

畦六　もし御胡亂に思召すなら、大庄屋までまゐりまして、
くね　申し開きをいたしますが、ならう事ならこのまゝに、
三人　お見免しなされて下さりませ。
典藏　百姓とあれば許してくれるが、我々どもは此の山の出口々々に見張りをいたせば、もしも怪しき者あらば、固めの場所まで知してくりやれ。
田五　それはよろしうござりますが、さうして斯樣に此の口の出口々々をお固めなさるは、何のお爲めでござりまする。
畦六　この界隈を幾度となく歩きまするわたくし共さへ、少しも樣子を存じませぬ故、
くね　また戰でも始まることかと心配いたしてをりますから、とてものことにその譯を、
三人　お聞かせなされて下さりませ。
典藏　深くも祕する儀なれども、その方共にも心得の爲め申聞かせておく間、必ずともに他言はならぬぞ。
田五　いえもう、決して他言はいたしませぬから、お聞かせなされて、
三人　下さりませ。（ト これにて典藏は革床几にかゝり、）

典藏　仔細といふは、四海の主太閤殿下の寵妾淀の方樣が、御願望にて當山の毘沙門堂へ毎夜々々の御參籠、當時殿下の御實子たる拾君を儲けたまひ、御大切の淀君故、御參籠の途中に於て過などのなきやうに、非常を守る我々ども、それ故山の隈々へ手分けをなして警固いたせば、怪しきものと見たならば、固めの場所へ知せてよからう。

田五　はゝあそれで分かつた世間の噂、道理こそ毎夜々々此の山の毘沙門堂へ、美しい高位の女中が參詣すると、獵人仲間が昨日も立場の茶屋での話し、

畦六　女の好きなわし等故、こんなことを言ひふらして夜山に登る道連を、こしらへるのかと疑つたが、くねさうして見れば嘘でもなく、やつぱり眞實に淀君樣が、御參詣をなさるとは、いや珍らしい話だなあ。

典藏　あゝこれ〳〵、淀の方と申すことは深くも祕してある儀故、必ず他言は相成らぬぞ。

田五　左樣なればその事を、人々に言うては、

三人　なりませぬか。

典藏　ならぬとも〳〵、もしこの事を巷にて風說いたす者あれば、その方どもの口より漏れ、事の露顯と存じをれば、きつと咎めを申附けるぞ。

田五　左樣なればこの事は、決して他言は、
三人　いたしませぬ。
典藏　それ聞いて先づは安堵、然らば怪しき者ならば、固めの場所へ注進いたせ。
三人　承知いたしてござりまする。
典藏　（立上りて）幸ひ雨も小止みになれば、どりや一廻り廻つて來ようか。
　ト軍兵二人を連れ典藏は上手へ入る、百姓三人は跡に殘りて、
田五　いや、すんでのことに屯まで引張られて行く所を、よいお役人に出逢つたので、仕合せといふものぢや。
畦六　さうぢやとも〳〵、然しどういふお願掛けか知らぬが、淀の方樣といつては飛ぶ鳥も落ちる當時の勢ひ、
くね　その大切のお身を以て、往來稀な此の山へ夜夜半御參詣とは、合點の行かぬことではないか。
田五　此の鷹ケ峯はその以前、平等院の舊地故、黄檗宗の餘風が殘り、未だに峯の關帝廟苔むしてゐるけれど、彫物などは立派なことだ。
畦六　その關帝廟の關羽の像は、鎌倉時代の彫刻師運慶とやらの細工故、何百年の月日は立てど、まる

で生きてゐる人同樣、それ故近頃施主があつて、冠り物から裝束まで、皆眞物になつたので、猶更生きてゐるやうだ。

くね　聞けば毎晩此の山へその關帝が拔出るとやら、大方人の噂であらうと思つてゐたら、毘沙門堂へ高位なお方の參詣が、眞實と聞いては出るかも知れぬ。

田五　月待日待に源空寺へ說教を聞きに行つて、小耳にはさんで知つてゐるが、吳道子の龍や金岡が描いた馬が拔出た例もあれば、名人上手の書いた物や彫つた物には、魂が入り、拔けて出るに違ひない。

畦六　ときに、夜道もどつとせぬが、泣く子と地頭の言附で、隣り村まで行かねばならぬ。

くね　又廻り方に目附つて、身許の調べを喰はぬうち、

田五　ちつとも早く、出かけべい、

畦六　さあ〳〵ござれ〳〵。

ト山おろしにて百姓三人下の方へ入る。とばた〳〵にて花道より此村の家來森運平忍びの裝にて竹笠を持ち出來り、直に舞臺へ來て四邊へ思入あつて、

運平　今宵の雨を幸ひと、淀の方の警固にて山の口々間道まで、忍び〳〵に石田の家來が見張の屯をし

てゐる故、彼等が目つまにかゝらぬやう、先づこゝまでは來おほせたが、これから先が鷹ケ峯、どうか首尾よく五右衛門の手下の者に逢ひたいものだ。

ト上の方へ行きかけろ、此の時上手より足柄金藏達附山刀草鞋にて、ほくそ頭巾を冠り出來り、兩人行合ひ、互ひにすかし見て、

金藏　そこへござるは、運平樣か。

運平　さういふ聲は、足柄金藏、

金藏　やれ〳〵、よい所でお目にかゝりました。

ト　これにて兩人四邊へ思入あつて、

運平　そちが頭の五右衛門には、この山の關帝廟に忍びをるとの知らせ故、今宵の雨に御主人の內意を受けてまゐりし運平、して石川が此の山に忍びをるには仔細あつてか。

金藏　その仔細と申しますは、此の間より淀の方毘沙門堂へ夜な〳〵參詣、噂を聞けば殿下のお後嗣秀次公を人知れず、亡き者にせんその爲めに關帝廟の傍なる、蛇體杉へ祈誓をかけ、呪詛調伏をするとやら、その實正をたゞした上、先づ秀吉の手始めに淀の方から討取る所存で、彼處に忍ぶ頭の五右衛門、仔細は斯樣でござりまする。

運平　なるほど〳〵、主人もさうとは推察あれど、高が女の淀の方、今討取るにも及ばぬこと、殊更石田三成が淀の方に同意なれば、數百人の人數にてこの山林の隈々まで忍びの警固をいたしをればもし仕損じて望みを失ひ、桃山御殿も油斷なく用心嚴しくなる時は、假令五右衛門いかほどに忍びの術を得たればとて、殿下を弑する事は難し、大事の前の小事故、淀の方はそのまゝに打捨ておいて殿中へ忍びおほせて秀吉公を、

金藏　あこれ、その名をめつたに、（ト押へろこれにて聲をひそめて、）

運平　いや、これは手前が粗相であつた。

金藏　何は兎もあれ運平樣には、頭の忍ぶ關帝廟まで、

運平　いや〳〵手下のそちに逢ふ上は、關帝廟までまゐるに及ばぬ、（ト懷中より密書を出し、）この密書をば五右衛門へ、ひそかに手渡しいたしてくりやれ、（ト金藏に渡す。）

金藏　何かは知らずこの御書面、頭へ渡すでござりませう。

ト密書を懷中する、この前方に上手より以前の岩木典藏出かゝりゐて前へ出で、

典藏　扨は石川五右衛門に疾より黨する此村主從、桃山御殿へ忍び込ませ、秀吉公を弑する手だて、こりやいゝことを聞出したわえ。（トきつと言ふ、これにて兩人びつくりして、）

金藏　思ひがけなく横合より、飛出すおのれは、石田の組下、

運平　大事を聞いたる上からは、最早生けてはおかれぬわい。

典藏　左いふ汝の一命から先へ根腐る瑞相も、邊りは鷲の目鷹ヶ峯、此處に彼處に屯なし網を張つたるその中へ、宵の塒にさまよひしか、うか／＼舞込む目なし鳥、脱れぬ處と覺悟なせ。

運平　やあ、しやらくさきその雜言、取るにも足らぬ掠鳥が、假令如何ほど群がるとも、千里に羽を延す大鵬の翼に等しき我腕前、鋭き嘴の刃にて、たゞ一突きにいたしてくれん。

金藏　其の大鵬や熊鷹の眼をくらます世渡りは、夜を稼ぎの憎まれ者、梟といふ名を取つた小股すくひの足柄が後に附いてゐるからは、假令相手が網を張り群がりかゝつて來ようとも、鏖しだから覺悟しろ。

典藏　その雜言は後でのこと、いでその儀なら汝から先へ、

ト刀を拔き切つてかゝる、兩人後へ飛びしさりて、

兩人　何をこしやくな。

トこれより禪の勤めになり三人刀を拔き合ひ立廻り、とゞ運平典藏の腰を捉へて、

運平　こゝ構はずと、少しも早く、

金藏　合點だ。

ト金藏は密書を持つて上手へ入る、典藏きつとなつて、

典藏　あれをやつては、(ト上手へ行きかけるを、よろしく支へて、)

運平　ところをかうして、

ト これより早き鳴物になり、兩人立廻り十分にあつて、とゞ合打になり差違へてどうと倒れる、これにて兩人の死骸を後へ消し、山幕を切つて落す。

(關帝廟の場)――本舞臺上寄りに二間常足の二重、石垣の蹴込み、この上に古びたる關帝廟、正面唐戸、左右瓦燈口の窓、唐花の彫物、瓦屋根、軒口に關帝廟といふ額をかけ、兩棲古びたる板羽目、上の方岩の張物、下の方に大空洞のある杉の大樹、この下一面杉林、後方黒幕、よき所に蛇體杉といふ立札、總て宇治鷹ケ峯關帝廟の體。山おろしにて道具をさまる。と鳴物打上げ大薩摩になる。

大ザツマ　〽それ平安の都より巽にあたる宇治の里、山又山に連りて、木影小暗き鷹ケ峯、軒端傾く關帝の古廟もこゝに幾歳を、經るや時雨に色まさる木々の紅葉の錦時、實末廣き眺めかな。

ト大薩摩の切にて、迫上げの鳴物になり、小早川隆景前茶筌上下、大小、足駄にて蛇の目の傘をさし、密書を持ち、以前の足柄金藏を踏へてよろしく迫上がり、きつと見得。隆景は空より降來る雁を見上

げ、こなしあつて、

隆景　今青雲の時到りて、多年の志願成就なし、君命受けて隆景が朝鮮國より歸朝なし、實に有難きこのお目見得、（ト辭儀をなし、）故郷ならねど身の曠に飾る錦の袂さへ、我拙きをはぢもみぢ、唯色増る御最屓のお取立を願はんと、日頃念ずる當山の毘沙門天へ參詣なす、路次に音を聞く蘇武が雁、測らず手に入るこの文は、善か惡かは白浪の、名宛の密書は詮議の種、

ト振解いてかゝるを立廻つて引附け、

はて、時に取つての吉瑞ぢやなあ。

ト投げ退けきつと見得、これにて雁は舞上る。金藏起上りて、

金藏　密書をこつちへ、

ト密書を奪ひ取り逃げにかゝるを、隆景よろしく立廻り、金藏を上手へ突きやる、これにて金藏上手の關帝廟の前へ行き密書を持ちしまゝ扉へ行當る、とこの時、正面の扉を内より破り、片手を出して件の密書を掴む、金藏是をやるまいとする機に正面の扉ばら〳〵と壞れ、内より石川五右衛門頭巾附髮唐裝束にて、片肌脱ぎかけ、下唐鎧古（歌舞伎）十八番の關羽の畫面の打扮、青龍刀を持ちつかつかと出で、金藏を二重より蹴返し、青龍刀をとんと突いてきつと見得。隆景この體を見て下手にてきつと見得。これより唐樂入りの鳴物になり、兩人ちよつと探り合ひの立廻り、これへ金藏からみよ

ろしくあつて、よきほどに五右衛門眞中にて頭巾を取つて投ると大百日になり、金藏後から組付くと衣裳引拔になり、四天、扱帶一本差しの打扮になる。隆景は下駄を脫ぎ、肩衣を脫ぎかけ上手にてきつと見得。これと一時に下手の杉の空洞より淀の方下髮白の着附、上へ能衣裳の壺織り、錦の鐵杖を持ちいで、三人引張りの見得、これよりだんまりの鳴物になり、隆景五右衛門の懷より密書を引出し、これをかせに三人立廻りよろしくあつて、密書は隆景懷へ入れる。五右衛門拔いて切つてかかるを、隆景も拔合せ兩人立廻りあつて、とゞ上手に五右衛門刀を擔ぎ、眞中に隆景刀をさし附け、下手に淀の方窺ふ。三方見合つて木の頭、これと一時に後の黑幕を切つて落し、毘沙門堂奥の院を見たる灯入りの遠見、引張りの見得よろしく、山おろしカケリにて、

ひやうし幕

三幕目　聚樂館の場

〔役名――羽柴秀次、小早川隆景、田中兵部之介、鈴木新助、山田三九郎、岩崎大藏、黑谷丈五郎、百井運八、不破伴作。甫庵娘お元、其他。〕

（聚樂御殿の場）――本舞臺四間通し高足の二重、正面金襖、上の方網代塀、下の方後へ下げて枝折門、左右網代塀、松の立木、總て聚樂御殿の體。こゝに山田、岩崎、黑谷、百井の四人の侍、上下

大小にて立つてゐる、この見得管絃にて幕明く。

山田　いかに方々、豫々申す事なれど、貴賤上下のへだてなく子に迷ふのが親心、既に先立つ淀の方拾君を儲けたまひ、我子に天下を嗣がし度く、御猶子たる秀次公を亡きものにせん密の企て、

岩崎　それに荷擔の石田三成、淀の方ともろ共に太閤殿下へ讒言なす故、自然と御親子御不和になり、これでは行く〳〵御世繼は、御幼稚なれど御實子故、拾君へ御家督をお讓りあるは是れ必定、

黒谷　それ故早くも殿下より御附人の木村常陸密計あるを察せし故、秀次公へ御謀叛すゝめ、殿下を始め淀の方を亡きものにせん計略も、お側に英雄附從ひ、迂濶に施すことかなはず、いかゞはせんと思ふ折柄、

百井　忍びの術に勝れたる石川五右衛門といふ盜賊、常陸殿が知る人にて味方に招き頼みしところ、早速五右衛門諾ひて、伏見の城へ忍び入り、なんなく殿下の寢所まで、窺ひ寄りしに測らずも、

山田　かの今川家より傳來せし、凶事を知らせの千鳥の香爐、頻りに音をば發せし故、忽ち宿直の侍集り、十重二十重に圍まれて、さすが名うての五右衛門もなんなくその場で召捕られ、

岩崎　盜賊の身で忍び入り、金銀衣服に目をかけず、殿下を討たんとなしたるは、深き企みのある事ならん、何者に頼まれしかその頼み手を白狀せよと、火水の拷問なしたれど、大丈夫なる五右衛門

故、

黒谷　常陸殿より頼まれし一大事は言ふに及ばず、手下一人白狀いたさず唯一人にて罪を負ひ、三條川原で釜入りの刑に逢うて死したる故、我々共に煙もかゝらず、やうやく安心いたしてござる。

百井　然しながら、隠す事ほど顯はれ易き世の習ひ、味方の中にも油斷のならぬは、善惡分からぬ田中兵部、合體なせし體なれど、石田に荷擔なす樣子、

山田　それ故猶豫いたさずに、近々發する所存故、より〳〵集むる諸家の浪士、

岩崎　當節加藤清正始め、名だゝる大名大明へ出張なせしはこれ幸ひ、

黒谷　その虚を測つて攻め入らば、味方の勝利疑ひなし、

百井　首尾よく成就なす時は、常陸殿には執權職、

山田　又我々は國取り大名、

岩崎　五人扶持より萬石取り、

黒谷　一足飛びの立身故、

百井　早く本望遂げたいものだ。

ト この時花道揚幕の内にて、『我君のお歸り』と呼ぶ。

山田　君には今日高雄山へ、雨に色づく紅葉を。
岩崎　御遊覽に入らせられたが、
黒谷　思ひのほかにお早き御歸館、
百井　いざ、お出迎ひ、
四人　仕らん。
呼ビ　お歸り、

ト出の鳴物になり、花道より秀次棒茶筅小さ刀にて出で、續いて袱紗にて秀次の刀を持てる小姓、上下大小にて紅葉の枝を持ちたる不破伴作、腰元四人附添ひ出來り花道へ留る、舞臺の四人の侍迎へる。

秀次　まことや遠山錦繡の粧ひをなす秋の暮、櫨やぬるでに色增り、流れの水も紅に染る高雄の紅葉の盛り、飽かぬ眺めであつたな。
伴作　仰せの如く山上に敷きつらねたる毛氈の色恥かしきからくれなゐ、殊にはお供の我々は御酒下されの無禮講に、誰も紅葉の顏の色、
腰一　その恥かしさも打ち忘れ、お許し受けて鬼わたし、

腰二　楓の木の間あちこちと、隠れ遊びの面白さ、
腰三　春と違うて暮れ易さ、
腰四　秋の日足の短かきを、
小姓　誰しも恨む紅葉狩り。
伴作　君のお供で、拙者を始め、
腰一　よい樂しみを、
腰元四人　いたしました。
山田　紅葉は暮れるを愛づる故、
岩崎　まだ御歸館と存ぜざりしに、
黒谷　思ひがけなき、お早さ、
四人　御歸館、
秀次　夕日の影に照りまさる、その風景を眺めんと思ひしかども俄の雲だち、雨催ひ故歸館せしぞ。
伴作　何は兎もあれ我君には、
腰元四人　いざ先づあれへ、

秀次　おゝ、皆來やれ。

皆々　はあゝ。

ト皆々舞臺へ來る、これにて腰元二重へ褥を敷き秀次これへ住ふ。小姓後に控へ、平舞臺上手に伴作下手に四人の侍控へ、腰元は二重後に居並ぶ。

秀次　先年立田の紅葉をば見に參つたことがあつたが、夫のからくれなゐに水くゞるとはと、在五の君が詠ぜし如く、深山をおとす風につれ、流れの水へ散るさまは、又一段であつたわえ。

伴作　然し高雄は寺院故、物靜にて風流な所があるかと思はれまする。

秀次　こりや伴作が申す通り、詩歌連俳をなす者は、閑靜な地を好む故高雄を賞美なすであらう。

山田　いや、わたくし共は紅葉は扨置、月雪花の眺めでも。

岩崎　詩を作り歌を詠む、心に風雅がござりませねば、

黑谷　淋しい所より賑やかな所で御酒を頂戴なし、

百井　顏も眞赤に花紅葉、醉つたところが何より樂しみ、

腰一　又皆樣の御酒のお噂、

腰二　今に御前のお流れを、

腰三　御頂戴なさるゝのに、

腰四　さもしいことをおつしやりますな。

秀次　いや、皆の者が申すも尤も、予も酒がほしうなつた、酒宴の用意申附けたか。

山田　はつ、先刻御酒のお肴は、料理方から新助へ申附けおきましたれば、出來いたしをりませう。

秀次　用意よくば持參いたせ。

腰元四人　畏りました。

ト管絃になり腰元皆々奥へ入り、朱塗りの臺へ銀の鉢を載せ、これへ鯛の燒物、蒔繪の硯蓋へ見事に積みし三つ銚子、杯を持ち出來り前へ並べる、秀次見て、

秀次　むゝこれは至つて見事な鯛ぢやな。

伴作　定めて鳴門を越したる魚と見えまする。

山田　頭も鰭もそのまゝに、形をくづさぬ料理の爲方、

岩崎　お硯蓋は取分けて、念の入つた積合せ、

黑谷　當時庖刀執とらしては、鈴木につゞくものはない、

百井　まことに見事なことでござる。

秀次　褒美を取らせん、これへと申せ。

黑谷　はつ、（ト下手へ向ひ、）お料理方鈴木新助、君のお召し急いでこれへ。

ト下手にて『はあゝ』と返答し、合方にて下手より鈴木新助袴一本差しにて出來り、下手へ手をつかへて、

鈴木新助、罷り出でましてござりまする。

秀次　おゝ新助、今日の肴は見事な出來ぢや。

新助　はつ、不束な庖丁を御賞美にあづかりまして、冥加至極にござりまする。

秀次　新助に褒美を取らせい。

山田　畏つてござりまする。後刻御目錄を下さるぞ。

新助　はゝ、有難う存じ奉りまする。（ト辭儀をなす。）

岩崎　いざ我君にはお杯をお取上げ遊ばしませ。

秀次　（杯を取上げ、）腰元ども酌いたせ。

腰元　はあゝ。（ト酌をする、秀次呑んで、）

秀次　どりや新助が手際の料理、賞翫なさうか。

ト箸を取らうとする、この時件の肴の上へ蠅の落ちし心にて、ぱつたりと音する。これにて秀次思入あつて肴へきつと目を附ける。皆々これに氣附かぬこなし、

こりや腰元ども、肴を下げい。

腰元　はあゝ。(ト立ちかゝるを、)

伴作　あいや暫く、お待ち遊ばせ、唯今御意にかなひしお肴、

山田　お箸もお取り遊ばさずに、

岩崎　このまゝ下げいと仰せあるは、

黑谷　我々一圓、

百井　合點がまゐりませぬ。

秀次　その不審尤もながら、あまり見事な手際故箸を取らぬその前に、新助そちに尋ね問ふべき儀もあれば、近う參れ。

新助　はゝ、(ト少し前へ出て、)して、お尋ねと仰せられまするは、

秀次　その儀はな、いや、口でまだ〳〵申すより、肴の上に羽を閉ぢて、狂ひ落ちたるこの蠅蝨、

新助　えゝ、

秀次　そちか料つたこの肴、飛來る蠅の羽を縮め、落ちしは正しく毒ある樣子、

皆々　やあ、

秀次　いや、迂濶に箸は取られぬわえ。

新助　こは恐れ入つたるその御諚、何故あつて左樣なことが、

山田　左樣なことはない筈だが、

岩崎　眼前蠅の證を見れば、

黑谷　こりやこのまゝには捨ておかれず、

百井　吟味いたさにや、

四人　相成らぬ。

新助　蠅は何故落ちたるか再應吟味を遂げたるお肴、何しに左樣なことがござらう、御疑念お晴らし下さりませう。

作作　再應吟味を遂げしとあれば、毒味は誰がいたせしぞ。

新助　さあ、その毒味は、

四人　鬼役は誰なるぞ。

新助　さあ、それは、
秀次　いや、毒味の者を聞くに及ばぬ、今改めて予が前で、新助其方毒味いたせ。
新助　え、（ト思入。）
作作　とく／＼毒味、
四人　いたさぬか。（ト新助これまでといふ思入あつて、）
新助　唯今お毒味いたしまする。（ト覺悟をなし箸を取りにかゝるを、）
秀次　いや、新助待て、
新助　はつ、
秀次　毒味のしては外にあり、
作作　してお毒味をいたすものは、
秀次　予が目に留り此の程より妾になさんと館へ呼寄せ、日夜申聞すれど伽をなさゞる甫庵が娘、これへ呼出し毒味させよ。
新助　え、（トぢつと思入。）
黒谷
百井　委細畏まつてござりまする。

ト黒谷、百井下手門の内へ入る、新助これまでといふ思入あつて、

新助　この身に覺えはなけれども、お疑ひを受けたる上は、この場に於てわたくしが、

ト毒味をしようとするを、

秀次　それ、新助を引きすゑい。

山田　はつ。我君の御意だ。

山田
岩崎　控へさつせい。

新助　ではござれども、

兩人　えゝ控へをらう。（トきつと言ふ。）

新助　はあゝ。（ト新助下にゐてハアと俯向きゐる、この時下手にて、）

黒谷　さあ、きり／＼と歩まぬか。

ト門の内より市庵娘お元、振袖髪の亂れし好みの打扮、これを兩人にて中へはさみ、出來りて、

下にをらう。

トお元は下にゐる、新助この聲に顏を上げ、お元と顏見合せ、

お元　や、新助さんか。

新助　あ、これ、（ト眼で押へる。）
お元　お前に逢ひたうござんしたわいな。
ト側へ寄らうとするを伴作引きすゑて、
伴作　こりやヤイお元、これなる肴はその方が言交したる新助が料理いたした肴なれど、合點の行かぬ事ある故、その方この場で毒味いたせ。
お元　そりや何故に、わたくしに、
伴作　何故とは知れたこと、君の御目に留りしは此上もない身の出世、直にお受けをなすべきを舌を酸くして勸むれど、得心せぬ故譬にいふ可愛さあまつて憎さが百倍、それ故毒味をさせるのだ。
お元　すりや我君のお心に、隨はぬ故この毒味を、
伴作　飛來る蠅が羽を縮め、落ちたはまさしく毒ある證、毒味なしたら血を吐いて、七轉八倒死ぬのは必定、
お元　えゝ、（トびつくりなす。）
伴作　命がをしくば我君に、その身を任すか返事をしやれ。
お元　不束な身をそれほどに思召して下さりますは、冥加にあまる事ながら、願ひある身にこればかり

は、

伴作　ならずば命を捨てる氣で、此の場で肴の毒味をするか。

お元　さあ、それは、

伴作　それとも君のお伽をするか。

お元　さあ、

伴作　毒味をするか、

お元　さあ、

伴作　さあ、

兩人　さあ／＼／＼。

伴作　さあ、君へ色よい返事がならずば、此の場に於て毒味いたせ。

ト取箸へ肴を突きさし、お元の前へ出す、お元是非なき思入にて、

お元　假令何とおつしやつても、君へお返事ならざれば、このお毒味をいたしませう。

ト肴を取りにかゝるを、

新助　あゝこれ、めつたにそれを、

伴作　留めるは毒を仕込んだか。
新助　まつたくもつて、
伴作　さなくば留めるに及ばぬことを。
新助　ではござれども、
四人　えゝ控へをらう。（ト新助を引附ける。）
伴作　さあ、毒味いたすか。
お元　はあゝ。（ト泣伏す。）
秀次　予が心に従はずば、口を割つて毒味させよ。
伴作　はつ、（トお元を引附ける。）
お元　そんなら、どうでも、
伴作　君の仰せだ。（トお元の口を割り肴を入れろ、新助これを見て。）
新助　南無三、それを、
秀次　それ、新助を縛り上げい。
四人　はつ。

ト四人立かゝり新助を縛る、この中伴作はお元に肴の通りしを見て突放す。これにてお元毒の廻りし思入にて、アツと血を吐く、皆々見て、

伴作　扨こそ毒を、

四人　仕込みをつたか。

新助　むう。

ト ちつと思入、お元苦しきこなし、合方替つて、

お元　あゝ苦しや〳〵、口を割つて入れられし肴の毒の滴りが喉へ通れば忽ちに五體を絞る此苦しみ、君の仰せを背きしも言交したる男がある故、親の許せし戀ならねど、二人の男に身を任せぬと操を立つる女子の情、人の手本になりたまふ御身を以て無慈悲にも女子の操を捨てぬのを憎い奴ぢやと思召しだか、毒味をさせて殺すとは、あまりといへばお情ない。

伴作　その言交せし男といふは、卽ちこれなる鈴木新助、誰に頼まれ致せしか、我君樣を殺さんと毒を仕込みし大罪人、今又そちに其の毒を呑まして殺すは外ならず、掟を背きし不義の成敗、言交したる新助も頼みし者も詮議なし、今に後から殺してやるわえ。

お元　えゝ恨めしいその言葉、察するところこのほどより、戀の遺恨をさしはさみ、毒を仕込んで新助

どのを罪に落して殺さんとは、こなたの巧みであらうがな。

伴作　遺恨に思はゞ廻り遠い毒薬などを仕込まうか、たゞ一刀で殺してしまふわ、この伴作より新助めが、君を戀の敵と思ひ、仕込んだ毒に違ひない。

お元　いえ〳〵何で新助どのが、

伴作　然らば此の場で新助を、拷問なして頼みし者を、

秀次　白狀さすなら新助より、それなる元を拷問なせ。

伴作　いかさま、これはよい御趣向。こりや新助、何者に頼まれたかその頼み手を白狀しろ。

新助　白狀しろと言はれても、元より誰にも頼まれねば、申す事がござりませぬ。

伴作　どうで通常では白狀せまい、お元が苦痛を見物しろ。（ト割竹でお元を喰はす。）

お元　あれえ〳〵。（ト苦しむを新助見て、）

新助　毒薬に弱るお元を打たずとも、この新助を打つて下され。

伴作　所を打つが此方の手段、不便と思はゞ白狀しろ。（ト打つ、お元苦しみを怺へろ。）

お元　どうで命のないわたし、早う殺して下さんせいな。

伴作　さあ、この苦みをさせるより、早く白狀してしまへ。

新助　ぢやというて、

伴作　言はずばかうして、かう／＼／＼。（ト散々に打つ、お元よろしく思入あつて、）

お元　えゝ、あまりといへば無慈悲な事、

伴作　えゝ、やかましい、

ト脇腹を打つ、これにてお元うんといつて、よろしく思入あつて落入る。伴作お元を引起し顔を見て、

伴作　おゝ、こりやくたばつたか。

新助　すりやお元どのには、

伴作　汝が仕込んだ毒で死んだわ。

新助　ほい、（ト俯向きゐる。）

腰一　こりやお元どのには、

四人　果敢ない最期。

秀次（杯を取上げ、）腰元ども、酌いたせ。

腰一　はゝい、（ト顫へ／＼銚子を持ち、酒を注ぐ。）

秀次　元が死せし上からは、新助めを拷問なせ。

伴作　はつ、畏まつてござりまする。

秀次　それを肴にもう一獻、千種替つて酌いたせ。

腰二　はゝい、（ト同じく顫へ〳〵酌をする。）

伴作　どりや、伴作が腕限り、骨をひしいで白狀させん。

ト割竹を振上げる、ばた〳〵になり下手より田中兵部之介、上下大小にてつか〳〵と出來り伴作を留めて、

田中　伴作殿お待ち下され。

伴作　や、貴殿は田中兵部殿、

秀次　予が申附けし拷問を、何故あつて留めしぞ。

田中　はつ、お留め申すは餘の儀にあらず、それなる鈴木新助が詮議を、何卒拙者めに仰せつけられ下さりませう。

秀次　（思入あつて）おゝ、望みとあらば申附けん。

伴作　すりや、この場の詮議を、

秀次　田中兵部に讓り遣はせ。

伴作　はつ。さあ、この割竹で詮議をめされ。（ト割竹を渡す。）

田中　承知いたした。

伴作　然らばこれにて貴殿の御詮議、

四人　見物いたすでござりまする。

ト田中割竹を持つて新助の側へ來り、

田中　こりや鈴木新助、唯今詰所で承はつたが、日頃役目を精勤なす心に引替へ、何故にかゝる事を仕出せしぞ、定めてこれには深い仔細が、いやさ、仔細包まず白状いたせ。

新作　（田中を見て思入あつて、）唯今も申せしが、拙者に遺恨のある者が罪を負はせんその爲めにいたせし事か存じませぬが、今日までも御扶持にて命をつなぐこの新助、何故お主へ勿體ない、毒害なぞをいたしませう。

田中　こりやさうなくてはかなはぬ事、大恩蒙る御主人を、毒害なさう謂がない、こりや新助に遺恨ある、（ト伴作へ思入あつて、）餘人の所業でござりませう。

山田　そりやおめがねが違ひました、甫庵が娘はこの程より、

岩崎　このお館へ召寄せられ、我君樣のお寐間のお伽、

黒谷　それにこれなる新助は、豫て密通いたせし仲故、
百井　戀の遺恨にお肴へ毒を入れしに相違ござらぬ。
田中　その御疑念はさることながら、お主を毒害いたしませうか。
秀次　やあ、又しても庇ひだて。伴作替つて詮議いたせ。
伴作　はつ、畏まつてござります。
田中　いや、一旦仰せを受けたる上は、どこがどこまで拙者めが詮議いたすでござりまする。
秀次　然らば打ちすゑ、白狀させい。
田中　はつ、仰せに任せて、
秀次　何を猶豫、とく／＼打たぬか。
田中　はつ、
伴作　打たずば身共が替りませうか。
田中　いゝや。拙者が仕遂げまする。
山田　然らば早く、
四人　打ちすゑめされい。

トきつと言ふ。田中割竹を持ち、新助の側へ立ち、きつとなつて、

田中　さあ新助、所詮かなはぬ此の場の仕儀、最早包みかくさずに、な、有體に白狀いたせ。

新助　如何樣お問ひなされても、申す事はござりませぬ。

田中　無いと申せば、まツ斷うなして、（ト新助を思入あつて打ちすゑる。）

新助　假令この場で責殺されても、命の親の、いやさ、今は親なきこの新助、命惜しみはいたしませぬ
打殺して下さりませ。

田中　言ふにや及ぶ。さあ、有體に白狀せぬか／＼。（ト思入あつて打つ。）

秀次　やあ手ぬるい／＼、伴作代つて打ちすゑい。

伴作　はつ、心得ました、（ト割竹を引取る。）

田中　いや、拙者めが、

伴作　君の上意だ、控へめされい、（ト割竹を持ちて立ちかゝり、）さあ、有體に白狀せぬか。（ト打つ。）

新助　いや、白狀する覺えはない。

伴作　覺えないとぬかすからは、かう／＼／＼／＼、（ト新助を散々に打ちすゑる。）これでも白狀いたさぬ
か。

ト割竹で眉間を打つ、これにて新助あつと言つて額糊紅になり無念の思入あつて、

新助　斯く拷問に逢ふ上は、所詮存命かなはぬ新助、今ぞこの世の置土産に恨みの根ざしを言つて聞かせん、

作作　何んと、（ト少し凄き合方になり、）

新助　いかにもこれなる肴の中へ、密に毒を仕込んだのは、このほど鷹野の其の折柄、何科もなき我母を君が手づから鐵砲で、撃止められしが遺恨の因、主家來故是非なくも其の場はそのまゝ濟ませども、親を討たれし我無念、斯くまで惡行募りたまはゞ、終には御父太閤殿下を亡き者にせん思し立ちあらんことも測られず、お命絶つは天下の爲めと毒を仕込みしこの新助、十が九つ仕果せしも事成らずして捉へられしは、道に背きしこれ天罰、一命この場で捨つるとも一念此土にとゞまつて、きつとお恨み申しまする。

秀次　やあ、主に向つて憎き雜言、作作早く息の根留めよ。

作作　はつ、

田中　すりや忠義厚き新助を、この場に於て、

作作　主命なれば是非に及ばぬ。

ト作作刀を拔き新助の胸へ突立てる、新助苦しき思入、田中は不便なといふこなし、腰元はこれを見て、あれえと皆々奥へ逃げて入る。

新助　お心任せに惡行めされ、二年と御身は保つまじ、冥土でお待ち申しまする。

作作　こしやくな事を、

ト咽喉をゑぐる、これにて新助苦しみ、落入る。

秀次　それ、死骸を片附けい。

四人　はあゝ、（ト四人して新助の死骸を下手へ入れる。）

秀次　我が言葉を用ひずして、毒を用ひし新助めが拷問を等閑にせし田中兵部、予が目通りはかなはぬぞ。

田中　すりや拙者めが今の拷問、君の御意にかなはずして、お目通りを遠ざけられ、出仕をお留めなさるゝとか。

秀次　今の詮議ばかりでなく、やゝともすれば諫言なし、予が遊興の妨げなす故、疾より目通り遠ざけんと、思ひをつたる所なるわ。

田中　お言葉返すは失禮ながら、御諫言申上ぐるも御身　事と思ふが故、日夜淫酒に耽りたまひ、さし

たる科のあらざる者を、斯くの如くに呵責なし、一命お斷ちなさるゝは、あまりといへば無道の御處置、最早名護屋表より殿下御凱陣に相成れば、いかなる御沙汰あらんも知れず、それ故お諫め申しまする。

伴作　やあ、又しても〳〵、人もなげなる忠臣顔、

山田　君の御不興蒙むる上は、

岩崎　御前にかなはぬ田中兵部、

黒谷　疾く〳〵この場を退散めされ。

百井　猶豫いたさば引立て申すぞ。

田中　御不興蒙なる上からは、拙者勝手に退出いたす、お手を借りるに及び申さぬ。

秀次　やあ、予が目ざはりぢや、引立てい。

山田　はつ、兵部どの、

四人　お立ちなされい。（ト立ちかゝり、引立てにかゝるを田中振拂ふ。）

岩崎　やあ、手向ひめさるか。

四人　上意なるぞ。（ト引立てにかゝろ、と此の時花道の揚幕にて、小早川隆景の聲にて）

隆景　あいやいづれもお待ちなされい。

黒谷　君の上意で引立てるを、

百井　待てと聲かけ。

四人　留めしは、

隆景　朝鮮國より歸朝せし小早川隆景なり、

ト太鼓謠になり、花道より上下大小にて出來り、秀次を見て花道よき所へ下にゐて辭儀をなす。

作作　上意を待てと留めしは、誰人なりと思ひしに、思ひがけなき、

四人　小早川殿、

隆景　君の御機嫌伺はんと、これへ參上いたせしところ、御殿に於て高聲は唯事ならずと襖越し、聲をかけしは拙者が粗忽、まつぴら御免下さりませう。

秀次　珍らしや小早川、遠慮いたさず、とく／＼これへ。

隆景　はつ、

作作　君のお召し、

四人　急いで御前へ、

隆景　然らば御免下さりませ。（ト舞臺へ來り、眞中より下手へ住ひ、）朝鮮國へ出張なし、久々御機嫌伺ひませぬが、いつに替らぬうるはしき尊顔を拜し奉り、恐悦至極にござりまする。

秀次　おゝ、その方も堅固で重疊、

隆景　はつ、有難う存じ奉りまする。

田中　隆景殿には朝鮮國へ御出張なされしに、以前に替らぬ御容態、

隆景　兵部殿にも御壯健にて、

兩人　御同慶に存じまする。

伴作　して隆景殿には、我君の御不興蒙むる田中兵部、

山田　我々どもが引立つるを、

岩崎　何故お留め、

四人　なされしぞ。

隆景　委細の樣子は存ぜねど、日頃忠義の聞えある田中氏故隆景が、見るに忍びずお留め申した。

四人　すりや、それ故に、

隆景　いかなることにて御不興を蒙むられしか存ぜねど、日頃の忠義を思召され、拙者がお詫び仕れば

何卒お許し下されい。

秀次　いや、假令忠義の聞えあるとも、予が意にかなはぬ田中兵部、汝が詫をいたすとも、このまゝには許されぬ。

隆景　このまゝ兵部を許されぬと、仰せらるるは憚りながら、御我儘かと存ぜられまする。

秀次　何と申す、(トきつと言ふ。)

隆景　秀次公にはこのほどより、淫酒の二つになづみたまひ、以ての外の御不行跡故、賢臣屢々お諫め申せど、御聞入れなく御不興蒙むり、山口玄蕃を初めとして多人數退身いたせし由承はりしが、かほどまでとは存ぜざりしが、最前よりのこの場の樣子、見聞いたして某も、實はおどろき入つてござる。

秀次　この秀次が不行跡とは、近頃以て奇怪なり、汝は父の家臣なれど我へ對つて過當の粗言、今一言申して見よ。

隆景　いや、一言はおろか數百言申上ぐる所存にて、推參なせし小早川、篤と御諫言申さにやなりませぬ。

秀次　おゝ申すことがあるならば、これにて秀次承はらんが、一旦目通り遠ざけし我家來の田中兵部

この席へはかなはぬぞ。

隆景 そこを何卒御許容あつて、

秀次 いゝや二言と言はぬが予の性質、とつとゝこの場を立去りをらう。

伴作 御不興蒙むる兵部殿、きり〳〵この場を、

四人 お立ちなされい。

田中 拙者この場に永居いたさば、却て君のお氣に逆らひ、御癇癖募らせたまへば、一先づ退出いたすでござる。

隆景 然らば、拙者にお任せあつて、兵部殿には退出めされ。

田中 何分ともにお詫びをよろしく、

隆景 承知いたした。(ト兩人顏見合せ思入。)

秀次 やあ、何を猶豫、とく〳〵立たぬか。

田中 はつ。

伴作 御前にかなはぬ、

四人 お立ちなされ。

田中　はあゝ。

ト唄になり、秀次へ辭儀をなし隆景へ思入あつて下手へ入る。秀次思入あつて、

秀次　さあ隆景、予に申す事あらば、篤とこれにて承らん。

隆景　日夜淫酒に亂れたまふ君のお心鎭められ、唯今拙者が申す事お聞分け下さりませう。

秀次　何と、

隆景　既に太閤殿下には朝鮮國征伐に、肥前國名護屋表へ御進發あらせられ、朝廷守護は申すに及ばず四海の政事を預りたまふ大切なる御留守居、常に優りて仁義を垂れ、政事正しくあるべきに、今日は吉野明日は立田と御遊山なさるゝ途中にて、お目に留りし容色よき女子は、假令主ある者とても許したまはず妾となし、御意を背けば是非を論ぜず、お手討に遊はす由、以ての外の事なから、御壯年より衆に勝れ聰明英智の君なれば、斯様の事はよもあるまじ、これぞまつたく石田等が讒言なりと思ひのほか、言語に絶えし御行跡、それに引替へ太閤殿下は肥前へ下る船路の途中、海上荒き九州灘、風波はげしきその時は、今にも船の覆へり、鮫や鯨の餌食になるかと、人々覺悟いたせしも、御高運なる我君故、九死をのがれ一生を得たまひしかど、船中のその御艱難はいかばかり、安く枕に就くものはたゞの一人ござりませぬ。その御艱難を思召さば御慎しみなくて

はかなはぬ、然るに仁義を施したまはず、斯く亂行をなしたまひ、上を學ぶ下々故、匹夫下郎に至るまで荒々しき所業をなさば、終には亂を引出し、いかなる變のあらんも知れず、既に加藤清正殿は平生通行なすにさへ、戰場へ赴く如く、鎧兜を身に着し、少しも油斷あらざれば臣下の者も主を見習ひ、皆甲冑に身を固め、他に優りしはその主の常の行ひよき故なり、何卒君にも主計頭を見習はせたまひて、平生の御行跡を改められ、御神妙の御沙汰をば願はしう存じまする。

　トよろしく思入にて言ふ、秀次きつと思入あつて、

秀次　今其の方が諫言は道理にあたれど用ゐられぬ、父太閤御高運にて卑賤より身を起したれば、その威を恐れ誰一人頭を上ぐる者なきが、我は二代の悲しさに、仁を施し物事を忽緒にする其の時は誰一人隨ふ者なし、それより仁より勇を揮ひ、人をなづくる我所存、亂行とのみ言ひなすは、所謂讒者の所業なり、それらの差別は小早川存ぜぬ事はあるまじきに、田中同樣一向きに、予が暴行とのみ申すは、隆景汝に似合はぬぞ。

隆景　仁を捨て勇を揮ふと仰せあるのも道理ながら、そは四海も穩ならず、所謂二十八天下諸國に一國一城の強將多き時の事かと存じ申す。今豐臣の家風になびき既に御進發の御留守中、都は更なり東の果にも、謀叛を企つ者なき治世に、仁を施したまはずに勇のみ揮はせたまふのは、まだ御

料簡がお若うござる。

秀次　やあ、返す〴〵も隆景には、我へ對して無禮の諫言、假令汝が申すこと善きにもせよ、秀次が癇に障れば用ゐられぬぞ。

隆景　それぞ卽ち御亂行、御不興受くるを心得て御諫言申すのは、戰場に於て御馬前の討死よりもまさりし忠義、是非を論じて御諫め申す兵部殿を遠さけたまひ、惡しき事も善しといふ佞人讒者を愛したまふは、恐れながらあまりにおろかしき御事かと存じまする。

伴作　やあ、最前から口を閉ぢ、御身が言葉を聞いてをれば、耳にさはりし當こすり、近頃奇怪至極でござる。

隆景　耳にさはらば各々も口をつぐんでござらずと、何故御諫言を申さぬぞ。

伴作　御諫言を申すのは、何より易きことながら、御癇癖の我君故強ひて申さば御身にさはり、御病氣でも出る時は、忠義が却つて不忠となる故、そこを測つて申さぬのだ。

山田　殊には君の御心に、

岩崎　逆らふ時はその場にて、

黑谷　直に自ら御手討、

百井　めつたな事は申されぬ。
隆景　されば戰場の討死にも優ると申すはこゝの事、假令其の場で御手にかゝり、果敢なき最期いたすとも、お諫め申すが臣下の忠義、何故一命を捨てぬのぢや。
皆々　さあ、それは、
隆景　但し、命がをしうござるか。
皆々　さあ、
隆景　命を捨つるか、
皆々　さあ、
隆景　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
隆景　言はうやうなき不忠者めが、（トきつと言ひ、）かゝる鼠輩を用ひたまはず、兵部めもこのまゝに、お許しあるが君の御爲め、
秀次　その方何樣諫言なすとも、一旦斯うと思ひし事は、後へ返らぬ予が性質、いつかな諫言用ゐねばとく〳〵この場を退出いたせ。

隆景　こはお情なき御仰せ、斯まで荒き御心にならせたまふも讒者の所業、忠臣賢者を斥けたまひ、日夜に募る淫酒の亂行、度重なれば殿下にも、よもこのまゝにはなさるまじ、拙者の申上ぐる事お用ゐなくば、小早川いつかなこの場は退き申さぬ。

秀次　やあ、用ゐぬ／＼ゆゑに無益の強諫、達て申さば手は見せぬぞ。

隆景　御癇癖にさはりなば、拙者一命をしまねば、お手討になされませ。

秀次　すりや手討になつても、この場を去らぬか。

隆景　いつかな此の場は立去りませぬ。

秀次　憎き隆景、覺悟なせ。（ト刀を持ち立ちかゝる。）

隆景　いざ、御存分になされませ。

秀次　言ふにや及ぶ。（ト拔きかけるを、）

隆景　いかに無道の君たりとも、この隆景は討たれますまい。

秀次　何と、

隆景　此度君のお召しにより、朝鮮國より歸朝の砌り、戰功によつて有難くも御差料の小鍛冶の一刀、まふつた五三の桐の御紋服、拜領せし故今日の晴着に着せしこの隆景、今お手討になしたまひ、血

汐を以て御紋服を、けがしたまふ御所存なるか。
秀次　むう、（ト隆景を見て詰りし思入。）
隆景　御短慮思ひとゞまりたまふか、
秀次　さあ、それは、
隆景　但し御親子の禮を失ひ、御紋服をけがしたまふか。
秀次　さあ、
隆景　御改心めさるゝか。
秀次　さあ、
隆景　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵、
隆景　御返答はいかゞでござる。（トきつと思入。秀次思入あつて）
秀次　やあ、我を侮る憎き隆景、誰そあるか、衣服を剝ぎ取れ。
四人　はつ、心得ました。
作作　唯今衣服を剝ぎ取りて、君に替つて某が小早川を討果せば、君には一先づ奥殿へ、

秀次　おゝ出來した伴作、不覺を取るな。

伴作　心得ました。

秀次　返す〴〵も憎き奴めが、

　トきつと思入、早き唄にてついと奥へ入る。この中四人肩衣を取り下緒の襷をかけ、

伴作　何れも、衣服を剝ぎ取りめされ。

四人　心得ました、（ト四人隆景にかゝるを突廻して、）

隆景　朝鮮國より歸朝の砌、戰功によつて我君より拜領なせし御紋服、汝等如きに渡さうや。

四人　何をこしやくな。

　ト大小入りの鳴物になり、隆景へ四人かゝるを相手に立廻りよろしくあつて、四人當てられ一時に轉る、伴作刀を拔きかけるを隆景刀の鐺で留め、引張りの見得。早舞にてこの道具廻る。

（奥殿の場）――本舞臺三間の間中足の二重、正面銀襖上の方一間塗骨障子屋體、下の方後へ下げて網代塀、紅葉の立木、總て奥殿の體。やはり早舞にて道具留る。とばた〳〵にて下手より隆景出來るを、四人取圍み、立廻りながら出來る。

山田　御紋服を剝ぎ取れと、

岩崎　仰せつかりし隆景どの、

黒谷　御前へかなはぬ、

四人　退りめされい。

隆景　いゝや退らぬ、直々に申上げねば相成らぬ。

山田　すりや、又ぞろや。

四人　御諫言を。

隆景　三度はおろか百度千度、お聞入れのあるまでは、御諫言を申さにやおかぬ。

四人　何をこしやくな。

ト又四人かゝるを隆景左右へ投げのけろ、この時奥にて、

秀次　やあ、者共引け。

四人　はつ。

ト正面の襖を明ける、奥より秀次手槍を持ち、つか〳〵と出で。

秀次　秀次自身に成敗いたす、言ひ甲斐なきその方どもは、有つて益なし、次へ立て。

四人　はつ。

秀次　えゝ立てと申すに。

四人　はあゝ。（ト四人は下手へ入る。秀次槍をしごいて）

秀次　隆景命を貰うたぞ。

隆景　お望みならば差上げませう。

秀次　覺悟いたせ。

ト突いてかゝる、隆景身を躱し扇にて兩人氣味合ひの立廻りあつて、とゞ秀次烈しく突きかけるを隆景槍のさきを提へ、秀次の顔をぢつと見て思入あつて、

隆景　最前より秀次公の御相貌を窺ふに、斯く御亂行に似もやらず、天庭かけて御血色に唯一點の曇りなきは、まこと淫酒に御心亂したまふと思はれず、

秀次　何と、

隆景　（四邊を窺ひて）幸ひ四邊に人もなし、この隆景に御本心、お明かしなされて、（ト槍の先を放し、）下さりませ。

ト手を突き辭儀をなす、秀次槍をとんと突いてうなづく、この時上手の障子を少し明けて田中兵部窺

秀次　中村式部山口玄蕃、忠臣賢者と言はるゝ者も、我放埓をまことゝ思ふに、其方一人如何して、我をまことゝ思はぬぞ。

隆景　それぞ隆景その往時、武術修行に廻國せし折、攝州摩耶山の山中にて、さる道人に出逢うて一夜を明かせし事ありしが、測らずその折觀相の祕事口傳を授かりて、人の善惡を試し見るに、十が九つ違ふことなし、然るに明智の秀次公が、斯く御亂行は心得ず御尊顏を拜さんと、それ故推參いたせしに、案に違はず御相貌に變りなきは、御心中に計策ありと覺えたり。

ト この中田中兵部は障子をしめる、秀次思入あつて、

秀次　觀相なして心中を推量なせし上からは、今ぞ包みし本心を、

隆景　拙者にお明かし下さりますか。

秀次　むゝ、

ト うなづき槍を取りなほし上手の障子屋體を貫く、あつと聲して障子へざつと血煙立つ。

隆景　これは、

ト 心得ぬ思入、秀次槍を引く、これにて障子倒れて、内より田中兵部脇腹を突かれし思入にて、た

ぢたぢとして平舞臺へ出る。

田中　こりや秀次公には何故に、拙者を槍にて貫かれしぞ。

秀次　おゝ何故とは田中兵部、科はその身に覺えあらん、國家を亂す大罪人めが。

田中　なに、此の兵部を大罪人とは。

秀次　表は忠臣無二と見せ、內心石田へ荷擔なし、淀の方へ媚びへつらひ、この秀次を失ひて立身出世なさん企み。

降景　豫て賢者の聞えある兵部どのに奸惡の相形あるは、合點行かずと心に疑ひをつたるが、扨は本心石田に隨ひ、國家を亂す佞臣なりしか。

田中　忠義に厚きこの兵部を、國家を亂す罪人とは、これも淫酒に心亂れ、善惡邪正が分からぬか。

秀次　まだもその身の先非を知らずば、先づ差當る汝が企み、これにて秀次言聞かさん、冥府の土產に承はれ。

田中　なんと。

秀次　そも〱手醫者の甫庵を語らひ、密に毒藥調合させ、新助元が不義の密會、露顯なせしを汝が助け、恩義をかけて味方に附け、毒の仕込みを彼れに賴み、猶も心に勵みの附くやう、新助が母な

にがしを鐵砲を以て撃殺し、我いたづらになせしと僞はり、甫庵が調合なしたる毒にて、我を害せん汝が企み、早くもそれと察せし故、慾に迷つて調合せし甫庵を密に討つて捨て、つながる緣の娘元、又新助を殺害せしも、この毒殺に關係せし罪ある者の成敗にて、無道と見せて無道にあらず、

隆景　扨は新助甫庵が娘も、犯せし罪のある故の、御成敗にてあつたるか。

秀次　それのみならず秀次が、補佐と賴みし木村常陸、豫て謀叛の兆あつて、より〳〵我へも勸むる故些細な越度を申し立て、蟄居させしも天下の爲め。

隆景　これにて思ひあたりしは、このほど宇治の平等院にて我手に入りし常陸が密書、君御同意と思ひしが、扨は常陸が叛逆よな。

秀次　これまで多く手討になせしも、過半常陸に荷擔の者にて、謀叛の根を斷つ我成敗。

　　トこれを聞き、田中兵部無念の思入にて、

田中　ちえゝ殘念や口惜しや、計る〳〵と思ひのほか却つて我身が計られて、手盛りを喰ひし我無念、かゝる企みのある事を露いさゝか知らずして、まこと淫酒に魂奪はれ、うつけなりと思ひしも凡眼故に見えざりしか、今更言つて返らねど、心付かぬは我過り、思へば〳〵口をしやなあ。

トよろしく思入、隆景も思入あって、

隆景　して又君には何故あつて、天下の政事をおろそかに、日夜淫酒になつみたまひ、身に惡名を取りたまふか、これにも深き御所存あらん。

秀次　おゝそれとても承知の上にて、人にうとまれ父上の御不興受けて、豐臣の家督をこのほど儲けたまひし、弟秀頼へ讓らん爲め、

隆景　何と仰せられまする。（ト笙の入りし合方になりて、）

秀次　父太閤の愛妾たる淀の方に出生ありし弟秀頼はまことの正統、御血のあまりに父上も殊の外なる御祕藏にて、秀次なくば豐臣の家を讓らん思召し、淀の方は猶のこと、我子を以て世に立てんと諸寺諸山へ祈誓をかけ、兎に角我が邪魔になる故、種々父上へ讒言ある故、自然と親子の仲疎く秀次家督なす時は必ず亂の基となる。それを知りつゝ世を嗣ぐも本意ならざることなれば、辭退なさんと思へども、猶子となせし秀次を隱居させて秀頼に、將軍職を讓らんと仰せあらば、加藤を始め腹心の者得心すまじ、左ある時にはおだやかならず、その虚に乘じて叛逆を企つ者あるは必定、事おだやかにをさめるには、淫酒に耽り惡行なし、父上初め臣下の者に此の身は疎み果てられ世に捨てられても、拾君と持囃さるゝ秀頼が、二代の武將となる時は、即ち天下平穩にて

豐臣の家は萬代不易、よしや秀次暴主と言はれ末世に惡名殘すとも、天下の爲めには替へがたし、今日まで包みかくせし密事、隆景汝が誠忠に我心中を明し聞かす、近頃愚なことながら、六十餘州の主人になるべき身が墨染に染めなして、果敢なく終る我が不祥、篤と推量致してくりやれ。

ト秀次よろしく思入あつて涙を拭ふ、隆景も共に涙を拭ひて、

隆景　聰明叡智の秀次公がこのほどよりの御身持、深き御所存ある事と存ぜし故に隆景が、推參なせし甲斐あつて、御本心を承はりまことにおどろき入つてござる。天下の無事を思召し、御身に惡名受けたまふ秀次公の御胸中、お察し申して思はずも、落涙いたしてござりまする。

トよろしく思入、この内田中兵部俯向きゐて、この時顏を上げ、後悔なせし思入にて。

田中　あゝ過つたり〳〵、斯る名智の賢君を、おのが立身出世を思ひ失はんとせし我が愚さ、唯今これにて御心中冥土の土産に承はり、田中兵部がこれまでの惡心忽ち發起なし、心の鬼の角も折れ、申譯なき身の積惡、まだしも唯今我君のお槍先にかゝりしは、御成敗を受けたも同然、とてものことにこの首を竹鋸で切落し、三條川原へおさらし下され。(ト思入にて言ふ。)

秀次　ほゝお、惡に強きは善にもと、我が心中を承はり改心なせしはさすがに兵部、如何なる大罪犯すとも、罪を憎んでその人を憎まずとは君子のをしへ、やがて斯く言ふ秀次も同じ冥土へ赴けば、

三途の川に待合せ、死出の旅路の供いたせ。

田中　身の大罪も憎みたまはず、死出の旅路の御供な、お許しなされて下さるとは、冥加にあまる身の大慶、ちえゝ有難うござりまする。さはさりながら斯ほどまで、御仁惠深き君の御先途見送らざるは殘念至極、

隆景　氣遣ひめさるな、兵部殿、跡に控へし某が、君の御先途見屆け申さん。

田中　それにて拙者も安堵いたした、いでや冥土の魁なさん、早おさらば。（ト落入る。）

隆景　ても勇ましき最期の赤心、某感心いたしてござる、何にもいたせ、秀次公のその御本心を伺ふ上は、この趣を申達なし、再び無事の御取計ひ、及ばずながら仕らん。

秀次　いや、唯今明せし本心を、必ず漏すこと勿れ、天下平穩のその爲めに惡行なせし秀次が、身の赤心も水の泡、我はこれより高野へ登り、謹愼なして父上の御處置を彼の地で待つ所存、

隆景　ではござれども、このまゝに高野へ寺入りしたまふは、餘りと言へば本意なき事、何卒都に今暫らく、

秀次　いゝや、元より死する覺悟にて惡行なせしこの秀次、達て申さば自殺なさうか。

隆景　さあ、それは、

秀次　我が寺入りを留めぬか。

隆景　さあ、

秀次　自殺なさうか、

隆景　さあ、

秀次　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

秀次　必ずともに留むるな。

隆景　はつ。（ト秀次思入あつて、）

秀次　やあ〳〵伴作、何れにをる、高野へ登る用意はよきや。

伴作　（下手にて、）はあゝ。（ト伴作達附大小にて出來り、）仰せに任せ御輿萬端、用意いたしてござりまする。

隆景　や、こりや伴作殿には、

伴作　拙者を始め我君の、お側に仕ふる者共には、木村に隨ふ者もあり田中にへつらふ者あつて、荷擔と見せしも隱し目附、皆我君の御計略、

隆景　隆景感服いたしてござる。

トこの時花道の揚幕にて、遠寄せを打つ、皆々思入あつて、

秀次　はて心得ぬ、遠音にひゞく貝鐘太鼓、

隆景　正しく人數を集むる樣子、謀叛を企つ者あつてか。

伴作　いゝや、謀叛の輩にあらず、豫て石田が計略にて、秀次公を捕虜にせんと、聚樂の御殿を取卷く人數、

隆景　假令石田が下知により、數千人にて取卷くとも、隆景殿仕らん。

伴作　路次は斯くいふ伴作始め、近習の者が守護なせば、

隆景　お心靜に御登山あれ。

秀次　然らばこれより、高野の山へ、

隆景　いでこの上は片時も早く、

伴作　何れも御輿、

皆々　はあゝ。

ト下手より以前の四人の侍達附大小にて、この外袴股立の供廻り大勢輿を擔ぎ出て、下手へ居並

ぶ、秀次平舞臺へ下りろ、伴作金剛草履をなほす、隆景思入あつて、

隆景　淫酒にお心亂したまふも、天下平穏ならんことを、思召しての御不行跡、

伴作　御身に惡名負ひたまひ、御痛はしくも御代を捨て、高野山にて御謹愼、

ト本釣鐘を打込み、秀次思入あつて、

秀次　一度上なき關白の位に陞りし甲斐もなく、我身の秋に紅葉と共に散行く高野山。（ト本釣鐘鳴る。）

あゝ、今日が館の見納めなるか。

ト四邊を見廻し、名殘りをしき思入。

隆景　思へば果敢なき御別れ、

秀次　隆景、

隆景　秀次公、（ト兩人顏を見合せ、愁の思入あつて、）

秀次　堅固で暮せ、

隆景　はつ、（ト辭儀をなす。）

伴作　君のお立ち、

皆々　はあゝ。

ト本釣鐘、秀次下手へ行くを隆景袖を控へる、秀次振返り兩人名殘りを惜しむ思入、秀次袖を拂ふを木の頭、秀次顔を背ける、隆景見上げ、皆々引張りよろしく、愁ひ三重へ太鼓の時の太鼓を冠せて、

幕

四幕目、大詰

加藤邸玄關先の場
桃山城内庭中の場
同中門外警固の場
同城内大廣間の場

（新歌舞伎十八番の内、市川海老藏遺稿の正本、「桃山譚」）

（役名――加藤主計頭清正、豐臣太閤秀吉、徳川家康、前田利家、石田三成、佐藤清兵衛、木村又藏、政所花園御前、尼孝藏主、淀君、其他。）

（加藤邸玄關の場）――本舞臺三間の間破風造りの玄關、正面常足の二重、左右塗緣、杉戸、正面に蛇の目紋散しの襖、二重の前は張出して式臺、上の方一間中窓白壁、腰通り板羽目、下の方一間同じく後へ下げてやはり巾窓腰羽目。この道具所々地震にて壁落ち柱倒れし飾り附。こゝに夜詰の侍○△□◎の四人袴一本差しにて疊を持ちて立つてゐる、薄どろ〳〵、早鐘、物のこはれる音にて幕

明く。
ト地震の搖り來りし思入にて、四人疊を投り出し、うつぶせになる、鳴物少し靜かになりて、皆々起上り、
四人 まんざいらく〳〵。
○ なんと何れも、けしからぬ地震ではござらぬか、俄に家を搖り動かし、いまだに止まぬあの震動、
△ まことに前代未聞の事、年代記で見るのみにて、眼前出逢ふは今が初めて。
□ 御殿は別條ござらぬが、壁は殘らず震ひ落し、お座敷内に山が出來、往來もならぬ仕儀、
◎ 一度ならず兩三度かう震はれては命がたまらぬ。なんでも壓に打たれぬやう、庭へ出るに如くはない。
○ まだ此の上にどのやうな搖り返しが來ようも知れぬ、必ず油斷はできませぬぞ。
△ 何でも物の倒れぬ所へ、疊を敷いて鎭まるまで、蟄してゐるより仕方はない。
□ 御前を始め詰合の御近習衆も、奥庭へ逃げられたれば、別條なき筈、
◎ それに又信心なす法華經の功力でも、當家の怪我はござらぬ〳〵。
（ かゝる變のある兆か、今宵は宵より空色惡く、九ツ過ぎより一天赤く、殊には井戸の水あふれ、

△　常事ならずと打擧り、衆評はいたせしが、天文博士にあらざれば、

□　大地震とは夢更知らず、狼狽へさわぐ我々共、

○　あれ〳〵、又もや家鳴り震動いたすは、搖返しがまゐると見える、何れも油斷しめさるな。

三人　心得てござる。

四人　まんざいらく〳〵。

ト又早舞、どろ〳〵にてがら〳〵と崩れる音烈しく、四人俯伏せになる、玄關の破風、拉ぎになり、左右ともこはれ、後黑幕になる、ばた〳〵になり花道より加藤の臣四人何れも鎧下、胸當、小手、臑當、附太刀にて鐵の棒を持ち出來り、花道にて、

臣一　あれ見られよ方々、御玄關の柱が倒れ、破風がそのまゝ落ちたるからは、御殿も大方つぶれしならん。

臣二　主君は何れに御座あるか、御身の上心許なし、

臣三　もしや屋根の下ならば、命限り腕限り、

臣四　倒れし家を鐵挺にて撥ね起して、お助け申さん。

臣一　片時も早く、いづれもござれ。（ト皆々本舞臺へ來り、以前の四人を見て）

臣二　これ〳〵何れも、御主君には別條もござらぬか。
四人　如何でござる〳〵。
○等
四人　まんざいらく〳〵。
臣三　これ〳〵、最早地震はしづまりましたぞ。
臣四　心をたしかに持たつしやれ。(ト搖起す、これにて以前の四人起上りて)
○　これは〳〵仮田氏を始め、各々方、
△　いづれも方には、お怪我もなきか。
臣一　いや、我々は兎も角も、御主君にはいかゞめされしぞ。
□　かゝる騒動の中なれば、
◎　御主君の御樣子も、
○等
四人　一向に存じませぬ。
臣二　言ひ甲斐なき人々かな。
臣三　いでこの上は、御寝所へ罷り越し。
臣四　君の御安否、

皆々　おたづね申さん。（ト奥にて加藤清正の聲にて。）

清正　いや、氣遣ひいたすな、別條ないぞ。

臣一　や、あのお聲は御主君なるか、

臣二　まさしく屋根の下なる樣子、

清正　唯今それへまゐるであらう。

ト　ばた／＼烈しき音にて、屋根の破風をばら／＼と壞し、内より加藤清正髭鬘、鎧下、直垂、小手、脛當にて、馬手ざしを口に銜へ、鎧と太刀を抱へ出來る。

臣一　こりや御主君には、

臣二　御安泰にて、

皆々　ましませしか。

ト　これにて清正思入あつて、

清正　雷鳴地震は天地の不思議、陰陽逆する氣によつて天に轟き地に動ずと、故老の話に聞及ぶ、寶德文正の大地震も、斯くやと思ふ今宵の天變、主君の御身氣遣はしく、桃山御殿へ出仕なさんと思ふ折柄その方どもには、よくも駈附けまゐりしぞ。

臣一　唯今物見の築山より、東西南北見渡せしに、
臣二　月まだ殘る眞夜半なれど、地中を震ひし土煙り、
臣三　月を覆うて闇夜の如く、更に文色も分からざりしが、
臣四　所々の篝火によく見れば、東寺清水八坂の塔、
臣一　家の棟高き神社佛閣、市中もよほど破損の樣子、
清正　むゝ、扨は邊りの神社佛閣震災故に破損せしとか、氣遣はしきは桃山御殿、それ、（ト屋根へ上り物見なして、）晝にもまさる所々の火の手に、遙に望む桃山の築地も倒れ營中は悉く破損の有樣、いよ／＼以て我君の御身の上、危し／＼。今御不審を蒙むつて、お目通りを遠ざけられ、謹愼の清正なれど、これより直に御殿へ立越え、君の御安否伺はん。
臣一　すりや、御主君には。
四人　桃山御殿へ、
清正　おゝ、誰かある、奥へまゐり大政所より拜領の、蛭卷の長刀持参いたせ。
○　畏まつてござりまする。（ト上手へはひる。）
清正　まつた飯田、坂本、齋藤、常木始めとして、小具足に身を固め、鐵挺を持参なすやう、長屋々々

へ供觸いたせ。

臣三・臣四　畏まつてござりまする。（ト兩人は下手へ入る。）

清正　えゝ寸の間も心急く、早く長刀を持參せぬか。

○　はあゝ。

ト上手より侍○長刀を持つて出來る。清正は鎧を着にかゝる。

臣一　すりや我君には、鎧にて、

臣二　御前へ御出仕、

兩人　なされまするか。

清正　おゝ君の御身氣遣はし、そち達も供いたせ。

兩人　御供いたすでござりまする。（トこの時下手にて、加藤の臣佐藤、木村の聲にて、）

佐藤　あいや、その御登城、暫く、

兩人　おとゞまり下さりませ。

清正　何と、

ト下手より佐藤清兵衛、木村又藏の兩人、やはり鎧下小手臑當、附太刀にて出來る

清正　やあ、誰かと思へば我愛臣、佐藤清兵衛、木村又藏、

臣一　何故君の御出仕を、

臣二　御兩所には、

皆々　おとゞめありしか。

佐藤　おとゞめ申すはお爲め故、

清正　何と、

佐藤　武者ノ小路は言ふに及ばす、桃山御殿も破損せし故、太閤の御身氣遣はしく、これより御殿へ御出仕あるは、御尤もにござりますれど、この度君の御不審蒙りお目通りを禁ぜられしも、正しく石田小西等が佞辯を以て讒言せし故、

木村　未だ御赦免なき中に、押して御出仕ある時は、又もや彼等が奸計にて、いかなるお咎め蒙らんも計り難き此の時節、桃山御殿へ御出仕は、

佐藤　おとゞまり遊ばすこと、然るべしと、

兩人　存じまする。

清正　そち達が留むるも實に尤もながら、平日と事替り聞きも及ばぬ大地震、君の御身心許なし、假令

御不審の筋あつて御勘氣蒙むる身にもせよ、出仕なして御安否を伺はぬは不忠の至り、押してこれより出仕なせば、その方共も供いたせ。

佐藤　誠忠無二の御主君故、左ほどに思召したまふは、まことの道にござりますれど、佞人讒者蔓る世の中、

木村　今宵押しての御出仕は、下世話に申す石を抱いて淵にのぞむの譬の如く、いかなる越度にならんも知れず、

佐藤　御出仕の儀は遮つて、

木村　我々兩人お留め申す。

清正　假令何樣留むるとも、押して登城いたさねば心濟まぬは幼年より、君のお側で人と成り、大恩受けしこの清正、登城なして御安否を伺はねば、心が濟まぬ。

佐藤　ではござりませうが御出仕あらば、御勘氣の身を以て推參なすは太閤を、蔑にいたすなどゝ、

木村　佞人讒者の舌頭にて、罪に罪を重ぬる道理、平におとゞまり、

兩人　下さりませう。

清正　いや／＼、清正思ひとまらぬ、是非とも登城いたさにやならぬ。

兩人　そこを何卒、

清正　まだ〳〵申すか、控へをらう。（トきつと言ふ。）

兩人　はつ、（ト辭儀をなす。）

清正　御勘氣の身を顧みず、推參なせしが越度となつて、まだ此の上に罪を重ね一命を召さるゝなら、武門を守りの弓矢神、正八幡は言ふに及ばず我日本は神國なるに、助くる神のなき道理、神明誠を照したまへば、何とて此の身にお咎めあらん、まつた誠を照さずば此のまゝ蟄しをつたりとも、五年この方朝鮮にて千辛萬苦も水の泡に切腹仰せ附けられん、兎にも角にも清正が一命かけての今宵の登城、必ずともに留むるな。

トきつと言ふ、兩人ハツと平伏なす。

臣一　斯くまで忠義の思召し、神明納受ましませば、よもお咎めはござるまい。

臣二　御兩所にも支度めされ、君の御供いたされよ。

佐藤　斯くまで深き思召しを存ぜずして、御諫言申せしは、

木村　恐入つたる身の過り、いで此の上は一命かけ、お供いたすで、

兩人　ござりまする。

清正　（うなづきて、）然らば汝等も服を改め、桃山御殿へ後より續け、

兩人　はつ、

ト兩人下手へ入る、と直に引違へて下臣の三四出來り、

臣三　仰せの如く常木始め、各々身輕にいでたちて、

臣四　隊伍亂さず列を正し、表御門に控へをりまする。

清正　用意よくばこれより直に、桃山御殿へ推參なさん。

臣一　然し、道路は市中の者ども、

臣二　恐怖なして立ちさわげば、

臣二　わづかな道の桃山まで、

臣四　容易に往來なり難し、

清正　假令家の棟折り重なり、道の妨げなすとても、君を思ふ忠義の一心、

臣一　然らばこれより、

皆々　桃山御殿へ、

ト花道へ行く。この時又大どろ〳〵にて上手の窓ばら〳〵と壞れる。

○あれ〳〵又も、

皆々　搖り返し、

清正　なに、これしきに、（ト長刀をとんと突き、後を見返り、きつと見得あつて、）者共續け。

皆々　はあゝ、

ト大小入りの時の太鼓を冠せ、清正先に六人後へ附添ひ、花道へ入る。これにて道具廻る。

（伏見城中奧庭の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面結構なる金屏風、左右白桐の紋附の幕張り、後方奧庭夜の遠見、諸所に松の立木、左右に桐の紋附の高張提灯六本ほど立てあり、總て伏見城中奧庭の體。平舞臺一面に高麗縁の疊を敷き、上手に三疊ほど重れ、この上に太閤秀吉棒茶筌、白の着附、小さ刀にて褥の上に住ひ、側に小姓袴一本差しにて秀吉の刀を持ち、上手に政所裲襠衣裳の打扮、下手に淀君同じき打扮、後方に局大勢控へ、下手よき所に幸藏主切髮尼の打扮にて控へ、この見得、中の舞にて道具留る。

幸藏　扨も〳〵凄じい、大地震でござりましたな。

政所　二度三度の搖返しに、心も心ならざりしが、

淀君　やう〳〵少し鎭まりて、人心地になりましたわいな。

秀吉　今朝天文博士より天變ありとの訴へながら、一天に雲なき快晴故合點行かずと思ふ中、暴風吹いて村雲だち、夜に入つて赤氣を帶びしに、博士の教はこゝなりと豫て覺悟はいたせしが、存外なるこの地震、嘸政所を始め女房達、恐怖致せしことであらう。

政所　御意の如くわらはを始め、俄に家鳴り震動なし、御殿も一時に崩るゝばかり、搖り動きしに打ちおどろき、

淀君　庭へ出でよと我君のお聲を力にやう〳〵と、歩路を辿る思ひにて、手に手を取つて廣庭へ、逃げのびましてござりまするが、

局一　通りし後にて壁が落ち、又はへだての築地が倒れ、

局二　危い難を免れて、我君樣を始めとして、

局三　何れも樣にお怪我のないのは、

局四　日頃信心なし奉る、

局五　神や佛の御加護にて、

局六　御安泰にましますのは、

皆々　お目出度う存じまする。

秀吉　おゝ、多人數のこと故に、死亡の者もあるかは知らねど、さしあたり此の席に列る者に怪我なきは、予に於て滿足なるぞ。

幸藏　これと申すも我君樣の類ひ稀なる御武運に、數ならぬわたくし共まで、その御餘光で怪我もなう逃げのびましてござりまする。

秀吉　宿直の者は如何せしか、誰もこゝへはまゐらぬか。

幸藏　それも俄の天變に、いづれへまゐつてをることやら、

政所　男體せし者とては、お側に隨ふ小姓のみ、

淀君　女中ばかりで我君の御守護をなすは、心許なし、

幸藏　今泰平とは申しながら、かゝる折には油斷ならず、

政所　誰ぞ出仕いたせばよいが、

秀吉　いまだ誰も出仕せぬか。

幸藏　御奉行衆を始めとして諸役人共、誰一人御出仕はござりませぬ。

政所　かゝる折には誰よりか力量勝れし淸正が、お側にをつたことならば、心丈夫でよからうに、君の御不審蒙むりて朝鮮國より歸りてより、お目見得かなはぬ勘氣の身の上、

淀君　いかなる科のあるかは知らねど、一方ならぬ御家來故、そのお咎めをお許しあつて、以前の通りの御家來になし下さりませうなら、お嬉しう存じまする。

幸藏　政所樣淀樣のお言葉に附きまして、御訴訟申上げまするは、天下無雙の英雄も君の御勘氣蒙むつて、力なく／＼蟄居なし、明暮御免あるやうにと、七字の旗を床へかけ寢食をも打忘れ、日に數千遍の題目唱へ、見るも哀れな有樣を誰言ふとなく人の噂、御立腹にもござりませうか、まだ虎之助の時分よりお側に仕へし清正殿、何卒御免下さりますやう。

局一　數なりませぬわたくしどもまで、清正殿の御勘氣の御免、

皆々　偏にお願ひ申し上げまする。（ト思入。秀吉こなしあつて、）

秀吉　政所を始めとして、幸藏主が詫言故許してやり度きものなれど、我名代に遣はせし小西行長を蔑なすのみか、許しもなきに豐臣の姓を名乘りし不屆き奴、このまゝに許しおかば小姓上りの清正故、贔屓偏頗の沙汰とや言はん、人心に關はればこの度ばかりは許されぬ。

政所　すりや何樣にお詫なしても、

淀君　肥後が御勘氣を、

幸藏　お許しはござりませぬか。

秀吉　おゝ近々に彼を呼出し、不審の廉を問糺し、申譯なきに於ては、切腹申付くる所存ぢや。

皆々　えゝ、

秀吉　今日まで猶豫なすは、幼年より側近う召使ひし清正故、この秀吉が情ぢや、彼が事は重ねて申すな、勘氣は許されぬぞ。

幸藏　あゝ是非もない儀で、

皆々　ござりますわいな。（ト本意なき思入。又どろ〳〵になる。）

局一　又もや地震の搖返し、

幸藏　何れも君の御守護めされ。

皆々　畏まりました。

ト皆々秀吉を守護なす、どろ〳〵打上げ床の淨瑠璃になる。

〽又もや烈しき搖返しに、君を守護なす女中方、時しもこゝへ加藤清正、手の者引連れ駈來り、

トばた〳〵にて花道より、以前の清正長刀をかい込みて先に立ち、後に佐藤、木村、家臣四人出來り、清正花道に留り、

清正　幸藏主は在さぬか、幸藏主々々、

〽大音聲に呼はれば、何人なるかと幸藏主は、幕をかゝけて此方へ立出で、

幸藏　わらはを呼びしは何者なるか、

〽何者なるやと幸藏主、幕をかゝけて歩み出で、

ト幸藏主思入あつて、幕より外へ出來り、

幸藏　わらはを呼ぶは、何人なるぞ。

清正　加藤肥後守清正でござる。

幸藏　なに、清正どのとな。

〽おどろきながら側へ寄り、

ト花道へ來り清正を見て、

おゝ、清正殿でござつたか、扨々久々逢ひませなんだが、先づ御健勝にござりまして、

清正　幸藏主にもお替りなく、

幸藏　お悦び申しまする。（ト嬉しき思入。）

〽言ひつゝ顏を打ちまもり、

清正　あゝ五年この方朝鮮にていかい御苦勞なされしか、替らぬと申せども、以前に替る清正どの、思はず涙が出ますわいの。（ト涙を拭ふ。）

清正　幼い時より馴染とて、忝なきその言葉、種々申したいこともござれど、それは扨置今宵の地震。君には御安泰にましますか。

幸藏　お案じなされまするな、御安泰にござりまする。

清正　それは何より忝ない、（ト花道へ向ひ、）者共悅べ、御無事なるぞ。

佐藤　大慶至極に。

皆々　存じ奉りまする。

清正　して〳〵、何れに御座あるぞ。

幸藏　卽ちあれなるお幕の内に、君を始め政所樣、淀樣もおいでなされまする。

清正　そりや、あれなるお幕の内へ、お立退きなされしとか。

幸藏　何にいたせ、五奉行始め、いまだ誰も登城なきに、よくも早くまゐられしぞ。

清正　すりや石田三成もまだ登城いたさぬとか、御勘氣蒙つて謹愼の身の上ながら、前代未聞の大地震、君の御身氣遣はしく、もしや御殿が崩れなば、引起さんその爲めに、あれ見られよ家來共に

鐵の棒を持參させ、召連れてまゐつたり、よろしく君へお執成し其許よりお頼み申す。

〽頭を下げてぞ頼みける。（ト清正手をつき思入、幸藏主も思入あつて、）

幸藏　唯今お取次いたすほどに、暫くそれにお控へなされ。政所樣へ申上げまする。

〽言捨て幕の内へ入り、

政所　何事なるぞ。

幸藏　君の御不審蒙りて、蟄居仰せ附けられし肥後の城主加藤清正、いまだ御免の御沙汰なけれど、この大地震に取りあへず君の御身をお案じ申し、もし御殿向崩れなば、引起さんと屈竟の家來共に悉々鐵の棒を所持いたさせ、唯今駈附けまゐられましたが、如何取計らひませうや、お伺ひ申上げまする。

〽言ふに悦ぶ政所、淀君始め力を得、

ト女形皆々嬉しき思入、秀吉もこれを聞き思入あつて顏をそむけて知らぬ思入。

政所　なに、清正がまゐりしとか、忠義一途な心故誰彼に先立ちて、よくも早く參りしぞ。

淀君　力量勝れし肥後守がまゐりしとは、何よりぞ。

局一　殊には名だゝる家の子に、鐵の棒を持たせしとは、
局二　心利いたる清正どの、
局三　もう〳〵誰がまゐらずとも、
局四　お氣遣ひは、
皆々　ござりませぬわいな。

〽悅び勇む局達、秀吉公も幕越しに見れば忠臣清正に、心の中に悅びたまひ、

ト女形皆々嬉しき思入。秀吉も幕越しに見て、よく來たといふ思入あつて氣を替へ、

秀吉　謹愼の身を顧ず、押して登城は不屆き至極、この地震を幸ひに其の身の詫にうせをつたか。（トきつと言ひ、思入あつて）さすがは忠義の、
政所淀君　え、
秀吉　（思入あつて氣を替へ）いやさ、中門の固めはなきか、誰が許して通せしぞ。
幸藏　五奉行初め諸役人、誰も登城いたしませねば、
秀吉　中門の固めはなきか。
幸藏　左樣にござりまする。

秀吉　むゝ、

政所　囲めなき故清正が、これまで參りましたのも、君の御身を大切に思ふが故のことなれば、何事も忠義に愛で、

淀君　今宵駈附けまゐりしを、一つの功にお目通りを、お許し下さりまするやう、

皆々　お願ひ申上げまする。

〽言葉を揃へ詫びければ、秀吉公も愛臣に許し度きをば氣色を替へ、（ト態ときつとなり、）

秀吉　いや／＼、許すこと相成らぬ、予を蔑にせし清正故、目通りかなはぬ、追ひ返せ。

政所　すりや折角參りし清正を、

秀吉　えゝ、追返せと申すに、（トきつと言ふ。）

政所　はつ、（ト幸藏主に向ひ、）君の御機嫌惡しければ、下城なすやう申しやいの。

幸藏　畏まりました。

〽立たんとなせば、

秀吉　こりや／＼幸藏主、その方よきに、（ト幸藏主へ思入あつて、）いやさ、予が目通りはならぬと申せ。

幸藏　はつ、

〽御意を心得幸藏主、御前を立つて此方へ來り、（ト花道へ來て、）
噯待久しうござつたらう。

清正　御前の首尾は如何でござるな。

幸藏　御勘氣の身の上ながら君を大事に思召し、御登城ありし趣を御前へ御披露いたせしところ、政所樣淀樣の殊の外なるお悅び、君には未だお言葉なけれど、お悅びの御樣子なれば、先づ〳〵御安心なされませ。

清正　すりや我君にはお心解けず、お言葉下されぬとか。

幸藏　左樣にござりまする。

清正　さほどまでに清正を、お憎しみなされまするか。（ト口をしき思入）

佐藤　これと申すも佞人の、石田小西が讒言故、

木村　五ケ年この方朝鮮にて、艱難辛苦なされたる、

臣一　忠臣無二の主人をば、

臣二　身に覺えなき御不審にて、

臣三　御勘氣あるは情なし、

臣四　いで、この上は我々が、

佐藤　直々上へ、

皆々　お願ひ申さん。(ト立ちかゝるを、)

清正　やれ、かしましい、靜まらぬか、陪臣の身を以て上へ直訴は失敬至極。

佐藤　でも、このまゝに、

皆々　いたしては、

清正　はて、そち達は席を下り、中門際に控へゐよ。

皆々　ぢやと申して、

清正　えゝ、主の言葉を用ゐぬか。

皆々　むゝ、

清正　控へいと申せば、控へぬか。(トきつと言ふ。)

皆々　はあゝ、

〽はつとばかりに郎黨は主の言葉に是非なくも、皆一同に引返す。

トこれにて皆々是非なく花道へ入る。

〽跡に清正といきをつき、

清正 思ふこと言はざるは胸苦しく候故、御身に申す此の身の述懐、一通り聞いて下され。

ト序の舞の合方、笛ばかりにて、清正思入あつて、

そも〳〵五ケ年以前三月上旬、小西行長かくいふ清正、朝鮮國へ征伐の先陣仰附られ、肥前名護屋表より一時に出帆いたせしところ、豫て某に遺恨ありて釜山海の先を取り、又王城へ攻入るにも、我を偽はり先陣なし、再度恥辱を取つたれど、始終の勝こそ勝なれと、行長大明の大軍に怯ぢ恐れて敗走なせし、後に某踏みとゞまり、僅な勢で數ケ度の血戰、もうこれまでと死を極め討死なさんと思ひしは、幾度といふ數を知らず、唯日本の恥辱を思ひ、五年の間朝鮮にて、

〽雨に濡れ、雪に凍え、或は野に伏し山に伏し、

まつた、蔚山に立籠り、數日の防戰兵糧盡きし其の時は、獸肉を以て飢を凌ぎ、艱難辛苦いたせしは、言葉を以て申さずとも、痩せ衰へし清正がこの顔にて推量下され、

〽鬼をもひしぐ清正が、雨の眼に涙を浮め、

かゝる難戰苦戰をなせしも、朝鮮國を滅せとある主君の命を貫いて、我が日本の勇氣をば海外へ輝かさんと、忠義一途な清正を、臆病未練な小西に替へ御勘當とは情なし、近頃女々しきことな

がら、

〽三歳の折親に別れ、御前に於て人となり、十三歳の初陣に敵の首を取つたる時、出かしをつた虎之助、予を親と思へ子と思ふと有難きお言葉に、それより數度の戰場に、後を見せしことなき故、御感服のお墨附幾枚となく頂戴なし、家の寶に所持なす某、その往時を思召さば、少しぐらゐの越度があつても、御宥免あるべき筈を、佞人共の讒言にて、御勘當とは情なく、三度の食も咽喉へ通らず、寐ても寐られぬ苦しさに、嬰兒の折より泣かざる清正、初めて涙を覺えしぞ。

〽拳を握り清正が悔し涙ぞ哀れなる、尼は實にもと袖しぼる幕の内にも洩れ聞いて、太閤始め政所共に涙に暮れたまふ、尼はやう〳〵涙を拂ひ、

ト　この中清正よろしく悔しき思入にて言ふ、幸藏主尤もだといふこなしにて泣き居る。舞臺にても秀吉不便だといふ思入にて顔をそむけ、涙を隱す、政所淀君局等皆々泣きゐる、幸藏主思入あつて、

幸藏　そのお歎きは御尤も、讒言故のお咎めなれば、嘸口をしうございませう、聞くわたくしさへこの如く袖をぬらしてござりまする。左りながら我君も我子の如く思召す清正殿のことなれば、遠からずお心解け、御免になるに違ひない、それに又政所樣淀樣が、今宵早速參られしその功を幸ひ

にお執成し遊ばせば、少しの中の御辛抱、必ず口頭の一徹に、短氣をお出しなさるゝな、惡い事は申しませぬぞ。ほゝゝゝ、今天下無雙の英雄なれど、まだ附紐のある時からお馴染のわたし故、子供のやうに思はれて、つい粗相を申しますわいの、ほゝゝゝ、失禮御免下されませ。

〽猛き心をやはらぐる尼の言葉に清正も、氣を取りなほし打ちうなづき、

清正 此の上ともに我執成し、政所樣淀樣へ、其許から願うて下され。何は兎もあれこの大變、未だ夜明に程もあり、夜中御門に固めのなきは、譬にもいふ油斷大敵、今泰平といひながらこの虚に乘じ野心の者が、忍びこむまいものにもあらず、それがし中門の固めをいたさうと存ずるが如何でござらうな。

幸藏 御尤もなるその仰せ、お伺ひ申すでござりませう。

〽又もや幕の内へ入り、政所へ打向ひ、

唯今清正が申せし事、お聞き取り遊ばしましたか。

政所 聞くも哀れな長物語り、あらましこれで聞いたわいの。

幸藏 夜中と申しこの騷動、御中門の固めをば致さうと申されますが、如何いたしませう。

政所 おゝ、中門の固めいたさうとは、よう心附いたことではある、誰も登城せねば、固めのないは不

用心。

淀君　清正が固めいたせば、千萬人に勝れし力量、何者が參らうとも心丈夫でござりますなあ。

政所　我君樣、固めを申附けませうや、お伺ひ申上げまする。

秀吉　（うなづきながら、）勘當なせし清正に、予は固めを申附けぬ、それらの事は問ふに及ばず、そち達が勝手にいたせ。

〽籠る情のおゆるしと政所は悅びたまひ、

政所　我君はお言葉なけれど自が氣遣ひ故、御門の固めいたすやう、申附けてたもいの。

幸藏　畏りましてござりまする。

〽幸藏主はとつかはと、元の所へ立出でゝ、

唯今お伺ひ申せしところ、君にはお言葉なけれども頷かせたまひし上、政所樣御承知なれば、お固めをなされませ。

清正　いやそれは千萬忝けない、御許容ある上からは、中門の固めいたすでござらう。

〽清正は突立ちあがり、（ト嬉しき思入にて立上り、花道へ向ひ、）

やあ〳〵、それに控へし家來共、清正中門の固めいたせば、皆々前後の警固いたせ。

皆々（揚幕の内にて）はあゝ。

清正　左樣ござらば幸藏主どの、

幸藏　心置きなう、

清正　どりや警固いたさうか。

〽勇み進んで長刀かいこみ、鬼神も恐るゝ勢ひにて、御門をさして急ぎ行く。

ト清正長刀をかいこみ、花道へ入る。

〽後を見送る女中方秀吉公も幕越しに、延上りて見送りたまへば、

トこの中政所淀君始め腰元皆々幕を揚げ清正を見送る、秀吉立上り、幕の上より延上りて見送る。

政所　御前樣々々、（ト呼ぶも秀吉やはり見送りゐる。）

淀君政所　御前樣、（ト大きく言ふ。）

秀吉　おゝ、何ぢや、

政所　清正を御覽、

兩人　遊ばしましたか。（ト秀吉思入あつて）

秀吉　我に背きし不屆き奴、憎しとは思へども、朝鮮國より歸朝の後目通りを遠ざけし故、彼れが面を

見ざりしが、頬は痩せ鬚は延び、替り果てたる、（トホロリと思入あつて、）いや、替り果てたる不忠者めが、

政所　〽口に憎しと御意あれど、御不便あまる眼に涙、それと見たまひ政所、今清正が幸藏主へ、五年この方朝鮮にて種々さま〴〵な難儀をなせし、聞くも哀れな物語り、

淀君　千萬人に勝れし身が、涙をこぼすはよく〳〵に悲しい事と清正の、心の中が思ひやられ、共に袖をば濡らしました。

幸藏　猛きお方の落涙は取分け哀れに存じまする。それに就きまして御前様へお願ひ申上げまするは、今宵の騒ぎに駈附けし清正どのゝ忠義に免じ、朝鮮にての不調法を何卒お許したまはるやう、この儀願はしう存じまする。

秀吉　外ならぬ幸藏主が詫言、聞入れぬにはあらねども、假初の粗相と違ひ、彼れは軍令を背きし奴、さう容易くは許されぬわえ。

幸藏　御尤もなる君の仰せ、遮つて申上ぐるは恐多き事ながら、清正どのは幼きより君に仕へて忠義厚く、次第に戰功現はして我君の思召しに叶ひ、今一城の主となり、そのお惠みを束の間も忘れぬことは日頃からわたくしへの物語り、夢いさゝかも別心なきは、よう存じてをりまする。古の例

にも、忠臣を遠ざけてつひにその國亡びしは往々あることゝやら、數なりませぬこの尼が申すまではござりませねど、よき御家來は天下のお寶、忠臣の聞えある清正どの讒者の雲に覆はれて蟄しやるはいたはしく、歎かはしきこと故に、何卒お心解けますれば有難う存じまする。

秀吉　再三の願ひなれど、其の儀はどうも、

幸藏　ではござりませうなれど、あはれ虎之助の往時を思し分けさせられ、只管御勘氣御免の儀を願はしう存じまする。

政所　事情を分けたる幸藏主がお詫言、お憎しみもござりませうなれど、以前盡せし忠義に愛で、何卒お心やはらげられ、

淀君　御勘氣御免下さりますやう、わたくしどもゝ共々に、

皆々　お願ひ申上げまする。

〽女儀は言葉もやはらかく、執成しなせば太閤も不便なれども武の表、わざと色眼に見せたまはず、(ト秀吉思入あつて、)

秀吉　朝鮮國にて清正が、自儘の働きいたせしも、我手許にて育ちし故主從の禮を失ひ、我意に募りし不屆き奴、それ故勘當いたせしからは、予が不審の申譯相立たば許しくれるが、さもない中は許

されぬッ（トきつと言て、思入あつて、）よし又今宵駈附けしを、一つの功に許すにせよ、虎之助の時分と違ひ、今一國の城主たる加藤肥後守清正が女の詫で濟んだと申さば、諸大名への聞えも惡しく、家康か利家でも詫をせずば、恥辱であらう。

〽御座を立たんとしたまへば、

政所　あゝもし、仰せの通りわたくしどもがお詫なしては後日の恥辱、唯お心さへ解けますれば、

淀君　表向きにてお詫を願ひ、

幸藏　やがて目出度うお目通り、

秀吉　それも天下の大法故、道が立たねば許さぬ清正、

政所　汚名に暗きその道も、

淀君　忠義の道の顯はれて、

幸藏　直なる道にたよりなば、

三人　その時こそは、

秀吉　あいや、天下の道に、（ト道具替りの知らせ、）依怙はないわえ。

〽實にも勇々しき、

ト三重にてこの道具廻る。

（中門口の場）═本舞臺眞中に二間の城門、筋鐵入りの扉、左右の石垣崩れ、下に左右の石垣の石落ちてあり、後方黒幕、松の立木、こゝに加藤清正の家臣四人棒を持ち石に腰かけ控へてゐる、時の太鼓三重にて道具留る。

〽礎堅き城門の屋根の瓦もあちこちに、燃え立つ火の手を篝火となし、加藤の家來は中門口に人や來ると待つところへ、石田三成徒歩にて家來引連れ入來り、

ト時の太鼓を冠せ、花道より石田三成烏帽子素袍股立附太刀小さ刀にて出來る、家臣運平上下大小にて、足輕二人と共に附添ひ出來り、花道にて、

三成 はて心得ぬ、何者が我より先に出仕なせしか、中門を固めをるとは心憎き奴ではある。先へ參つて開門させよ。

運平 畏まつてござりまする。

〽三成こなたへ佇めば、家來は先へ駈拔けて、

御番衆々々、御開門下されい。

臣一　いや、夜中と申しかゝる時節、開門はいたされぬ。

運平　いや、苦しうござらぬ、御開門下されい。

臣二　唯今出仕は何者なるか、その姓名を、

四人　名乘りめされ。

〽言ふに石田は怺へ兼ぬ、

三成　やあ、名を名乘れとは無禮至極、我を知らぬは何奴なるか、石田治部少輔三成なるぞ。

運平　疾く〳〵開門いたされい。

〽石田と聞いて木村を始め屈竟の者立出て、

ト上手石垣の崩れより、佐藤、木村の二人出來りて、

佐藤　いやなに方々、迂濶に開門いたされな、地震の搖つたは夜半過ぎ、

木村　最早東が白みしからは、一時あまりも經ちたるに、今時分のめ〳〵と、よもや治部はまゐるまい

臣一　なるほど御兩所の仰せの通り、まことの治部ではござるまい。

臣二　察するところ此の虛を量り、臆病者の名を衒り。

臣三　野心ある者が忍び込まんも測り難し。

臣四　篤と實否をたゞさねば、この中門は、
皆々　通されぬ。
〽なじりかければ急き立ちて、
三成　やあ、最前より我に向ひ、何故斯樣に惡口申すぞ、今天下に於て三成を治部などゝ下賤同樣呼ばはるは、何奴なるか名を名乘れ、その分にはいたさぬぞ。
〽言はせも果てず、
ト上手石垣の上へ以前の清正立出で、
清正　問はずとも名乘り聞かさん、臆病未練な耳に聞き、おどろいて眼を廻すな。
木村　今宵この所の當番は、太閤の命を受けたる、肥後國熊本の城主、
清正　加藤肥後守清正なるぞ。
〽幕をかゝげて出でたるは、百千の雷も一度にとゞろく如くなり、
トこの中よきほどに清正門の内より出ろ、後より鎧下の侍二人附添ひ出ろ。
斯く石垣まで崩るゝほどの、前代未聞の大地震、某一に駈附けて、この所の固めをなすに、何奴などゝは奇怪至極、

佐藤　其の方よりこの方で、その分には、

皆々　いたさぬぞ。

三成　やあ、返す〲も憎き雜言、朝鮮國より歸朝の後、御不審の廉々あつて蟄居仰せ附けられし、御勘當の淸正が、謂れなく出仕なし、何故斯樣な振舞ひいたすぞ。

淸正　いや謂れなき事にあらず、近代まれな地震故、もし御殿に變あらば君をお助け申さんと、取る物も取りあへず速に出仕せしは、淸正が一世の忠義、

木村　太閤の御身の上に御別條なければこそ、今頃のめ〲ござつても、石田で候の治部で候のと、大きな顏をさつしやるが、變があつたらどうさつしやる。

三成　さあ、それは、

佐藤　それでも天下の役人の、

木村　役が濟まうと、

皆々　思はつしやるか。

三成　むゝ、

淸正　君命によつてこの所を淸正が固めをるのだ、遲刻の上にとやかうと、言立いたすは不屆き至極、

臣一　押してこゝを通るに於ては、
臣二　君命背くも同じこと。
皆々　その分にはいたさぬぞ。
運平　（前へ出て）やあ、最前から押默つて控へをれば、主人をば蔑にする無禮者、いで、某が、
〽口には言へど手はぶる／＼、主に負けざる臆病者、
三成　こりや／＼運平、控へぬか。
運平　でも、このまゝでは、
清正　何をこしやくな、
〽はつたと睨む清正が眼の光りにひつくり返り、歯の根も合はず顫へゐる。
三成　假令固めを仰せ附けられ當所の番をいたすにせよ、石田を通さぬ謂はなし、開門をして通さぬか、
清正　いや、通すこと罷りならぬ。
三成　すりや、どうあつても、
皆々　腕づくならば通してくれう。
三成　何を、

〽三成刀へ手をかけて、既にかうよと見えたる所へ、

ト三成刀へ手をかける、運平は顫へながら止せと留める。三成始め皆々立ちかゝる、この時花道揚幕の內にて、家康と利家兩人の聲にて、

兩人　やあ〳〵御兩所、暫く〳〵。

〽一聲かけて、

トばた〳〵になり、花道より德川家康、前田利家烏帽子大紋、小さ刀、附太刀にて、上下の侍二人附添ひ、出來りて、

家康　御兩所の今の爭論、德川駿河守、

利家　斯くいふ利家お預り申す、おしづまり、

兩人　下されい。

三成　これは〳〵三老職の德川殿、前田殿、

清正　絕えて久しき御兩所方、まづ〳〵これへ、

兩人　然らば御免、

〽一禮なしてしづ〳〵と此方に通り、威儀を繕ひ、

ト家康、利家舞臺へ來り、眞中へ入り思入あつて、

家康　加藤氏には我君の御不審あつて歸朝故、いまだ面會いたさゞりしが、

利家　衆に勝れし豪傑故、五ヶ年この方朝鮮に出張ありしが以前に替らず、

清正　各々方にも御健勝にて、

兩人　祝着至極に。

三人　存じまする。

家康　それは扨置きこの場の爭論、唯今あれより承はりしが、假令君命なればとて、當時五奉行の石田殿開門なくば其許の、いやさ、其許の御不念には我々がいたさぬほどに、開門あつて然るべし、

利家　もし又上よりお咎めあらば、駿河殿の仰せの如く、我々兩人引受けて、貴殿の越度に決していたさぬ。御疑念なくと清正殿、開門なしてお通しなされい。

〽石田を留めなば勘當のお詫の邪魔と兩人が、言はず語らぬ言葉を察し、

ト兩人よろしく思入、清正も領きて、

清正　御兩所のお言葉なくば、開門はいたさねど、徳川殿前田殿には清正願ひの筋もあれば、開門なして通すでござらう。

家康　すりや、我々共兩人が言葉を用ゐて、清正殿には、
利家　開門なして下さるとか、近頃以て忝けなし、
〽言ふに清正家來に向ひ、
清正　こりや家來共、役目の怠りなきやうに、よく改めて通すがよい。
皆々　心得ましてござりまする。
佐藤　以後お面を覺ゆる爲め、篤と改めまするでござる。
木村　豫て噂に聞及ぶが、石田殿は肉落ちて、
臣一　骨太にして色白く、
臣二　大將どころかそは〳〵と、
臣三　臆病らしく見えるとあるが、
臣四　なるほど人の言ふ通り、
佐藤　臆病さうでござるわい。
皆々　むゝはゝゝゝゝ、
〽嘲弄なせば三成怺へず。（ト三成きつとなりて、）

三成　御兩所の御挨拶に控へをればよいことゝ、清正のみか家來まで人もなけなるその雜言、聞捨てにはいたさぬぞ。

家康　おいや三成殿お待ちなされい、御立腹は御尤もながら、何事も今宵の大變、人氣も立つてをることなれば、たゞ穩便に此の場は此のまゝ、

利家　我々どもにお預け下され、片時も早く御登城あつて、君の御機嫌伺はれよ。

三成　でも、このまゝには刀の手前。

家康　御料簡のならぬのも、今宵の地震に一の登城、君命受けしお固めなれば、

利家　役目に免じ我々に、お任せあつて御登城めされ。

三成　料簡ならぬ所なれど、御兩所にお任せ申し、いかにも登城いたすでござらう。

清正　それ家來ども、開門いたせ。

皆々　臆病者の通行なるぞ。

大勢　はあゝ。

三成　何を、(トきつとなるを家康留めて、)

家康　はて、何事も我々に。(ト思入。)

三成　左様ござらば御兩所、
利家　いざ、御同道、
兩人　いたすでござらう。
〽事を好まぬ計ひに、是非なく石田も打連れて、御門の内へぞ入りにける。
ト家康先に石田、前田に家來附添ひ、城門へ入る。
〽後に清正ぞく〳〵悦び、
ト清正皆々後見送り思入あつて、
清正　扨々よい心持であつた。
佐藤　德川殿と前田殿がござらずば、心のまゝ惡口なして腹を立て、
木村　手出しをなさば讒言せし、意趣晴らしに我々が、
臣一　筋骨拔かうもの、殘念なことでござつた。
臣二　然し、彼は佞奸故、
臣三　又もや君へ如何樣な、
臣四　讒言なさんも測られず、

佐藤　必ず御油斷なされまするな。

〽氣遣ふ後へ幸藏主、（ト後石垣の上へ幸藏主立出でゝ）

幸藏　いや、その氣遣ひには及ばぬわいの。

清正　や、さいふ御身は幸藏主、

佐藤　氣遣ひのないと仰せらるゝは、

幸藏　君のお心が解けました。

清正　なに、お心が解けしとか、して〳〵それはまことの事か。

〽小躍りなして悦べば、

幸藏　政所樣と淀樣が、今宵早速斷附けられしその功を申上げ、我君樣へお詫びなし、先づお心は解けたれど、清正とも言はるゝ者が、政所の詫言で勘氣がゆりては後日の恥辱と、表向徳川樣のお詫にて御前へお召しになり、御不審の廉々をおたづねなされしその上にて、お許しなさるゝ思召し今にお使者が參らうほどに、お悦びなされませ。

清正　すりや、政所樣淀樣のお執成しにて、清正が御勘氣御免下さるとか、

皆々　御主君樣、

清正　皆の者、
佐藤　大慶至極に。
皆々　存じ奉りまする。
幸藏　然し御不審の廉々は、君より直にお尋ねあれば、申譯の立つやうにお覺悟をなされませ。
清正　忝なきお心添へ、その御不審は朝鮮にて、小西を堺の町人と誹謗せしと二つには、お許しもなき豐臣の姓を名乘りし御咎め、御前に於て直々に申開きいたすでござらう。
幸藏　その申譯さへ立ちますれば、以前に替らぬ御愛臣、
清正　これと申すも昔馴染、幸藏主の執成し故、
佐藤　家臣一同、
皆々　御禮申す。

〽一禮述ぶれば幸藏主、

幸藏　何のお禮に及びませう、元より小西が讒言故御不興蒙る清正殿、お心解けしは忠義の功、斯うなうてはなりませぬわいの。
清正　五年この方朝鮮にて、艱難辛苦の甲斐もなく、君の御不興蒙りしは、我が信仰なす法華經の高

祖の御難に異ならず。

幸藏　土の牢にもまさりたる蟄居の御身に日の目も見ず、空に月日も龍の口、

清正　その敷革の首の座と、すでに極りし清正も、

幸藏　政所のお執成しにて、日輪こゝに下りし如く、

清正　身の憂き雲も晴れわたり、

幸藏　又もや忠義の輝くは、

清正　由井ケ濱邊に打寄する、

幸藏　なみ〳〵ならぬ法華經の、

清正　これも功力で、

兩人　ありしよなあ。

トこの時以前の運平出る。鷄笛になる。

清正　最早鷄鳴、

幸藏　君の御前へ、少しも早く、

清正　左樣ござらば幸藏主、

幸藏　さ、御案內いたしませう。

ト運平鐵砲を打ちかけようとする、清正心附き、運平を睨み倒す、運平ぽんと轉るを木の頭。

清正　むゝはゝゝゝ。

ト道具幕を引き、道具出來次第この道具幕を切つて落す。

（城中大廣間の場）——本舞臺五間通し常足の二重、黑塗の襖欄間、同じく塗り框、正面金襖の紋散らし、舞臺前へ御簾附の大欄間をおろし、花道の揚幕同じく紋散らしの襖の出入り、兩棧敷打返して紋散らしの欄間に替り、總て城中上段の間大廣間の體。正面に以前の秀吉、高麗緣の二疊臺へ住ひ、太刀を持てる小姓後に控へ、平舞臺上手に以前の德川家康、石田三成、下手に前田利家、外侍六人烏帽子素袍にて控へ、三重へ管絃を冠せて道具納る。

〽東雲の朝日輝く殿中の上段の間に秀吉公、左右に列ぶ大小名、袖をつらねて控へゐる。

秀吉　（思入あつて）いかに駿河、今曉夜半の大地震、さすがの予もおどろきて女儕と諸共に廣庭へ立退きしが、身にいさゝかの怪我なきは、いまだ運命盡きぬと見える。

家康　恐れながら我君は、實に朝日の登るが如く、御昇進まし〳〵て今一天下を握りたまふ、比類なき御高運。

利家　これまで數度の戰爭に、雨霰と射る矢の中をのがれたまひし我君故、お怪我のあらう筈はなし、
三成　然し、天災は免れ難きに、お怪我のなきは大慶至極、
家康　まことに城中こゝかしこ、倒れ傾く其の中に、これなる君の御座の間のみ、いさゝか破損の樣子もなく、
利家　御身に別條あらざるは、これ全く君の御武德、
三成　臣等一統、
皆々　恐悅申上げ奉る。

へ一同祝し奉れば、太閤御機嫌斜ならず、

秀吉　そのきざみ搖返しの未だ止まざるその所へ、宙を飛んで駈附けしは、我目通りを遠ざけし肥後の城主加藤清正、朝鮮國にて不屆きせし故憎き奴ではあるなれど、駈附けしは一つの功、豫て駿河前田より寬仁の嘆願あれば、唯今これへ呼出し、不審の條々尋ね問ひ、申譯相立たば勘當許し遣はさん。
家康　はゝ、有難きその御諚、清正事は幼年よりお手許にて人となり、一方ならぬ御愛臣、
利家　殊には清正十三歲の初陣よりして、戰場にて數度拔群の手柄あれば、それらの功を思召され、

侍一　御不審の申譯、

侍二　相立ちしその上は、

侍三　寛仁の御沙汰にて、

侍四、御勘氣御免下さらば、

侍一　一同いかばかりか、

侍二　有難く、

皆々　存じ奉りまする。

〽諸侯一同寛仁を願へば石田三成が、

三成　清正事は御愛臣、今宵の地震に馳附けしを一つの功に御助命あるは、寛仁の御沙汰ながら、もし御不審のその廉々申譯相立たねば、上を僞る大罪人、それでも御助命遊ばしますか。

秀吉　そりやその方が申さずとも、我不審の申譯相立たねば、清正とて何條そのまゝ助けおかん、天下の政事に依怙はない、彼れに切腹申附けん。

三成　切腹とはよきお捌き、それぞ曇らぬ政事のかゞみ、

家康　然し清正御不審の申譯相立たば、科の次第を訴へし石田殿にも素知らぬ振ではをられますまい。

三成　むゝ、（トぎつくり思入。）
利家　申譯相立たば、上を僞る三成殿、貴殿は切腹めさるであらうな。
三成　や、
家康　よもや卑怯に其許も一命惜しみはなされまい。
三成　さあ、
利家　但し切腹めされぬか、
家康　さあ、
兩人　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
利家　當時君のお覺え目出度き三成殿、
家康　貴殿が一命惜しまれては、天下の政事にもどりませう。
三成　むゝ、
〽理の當然に三成は、言句も出ず控へゐる。
ト三成ぢつと控へる、秀吉思入あつて、

秀吉　何は兎もあれ不審の清正、我が目通りへ呼び出せ。

侍一　畏つてござりまする。（ト前へ出で、花道へ向ひ、）それに控へし肥後の城主、加藤肥後守清正殿、君のお召し急いでこれへ、

〽呼びつぐ聲ともろともに、（ト花道の揚幕にて、）

清正　畏まつてござりまする。

〽萬夫不當の英雄も身の御不審にしを〳〵と、素袍の袖をかき合せ、御前遙に平伏なし、

ト花道より清正、鎧の上へ褐色の素袍を着、馬手ざしのみにて出で、花道すつと下に住ひて、

火急のお召しに昨夜のまゝ、衣服をも改めず失禮の段、幾重にも御宥免下さりませう。

家康　いやなに清正殿、我君の御召しなれば、

利家　遠慮めされずお進みなされい。

清正　でも御勘氣の拙者故、

侍一　あいや、君のお召し、

皆々　急いでこれへ、

清正　はあゝ。

秀吉　苦しうない、近うまゐれ。

清正　はつ、

〽上意に清正しづ／＼と、御前間近く控ふれば、太閤つく／＼見やりたまひ、

ト清正舞臺へ來り、下手へ控へる。

秀吉　主計頭、面を上げい。

清正　はつ、

〽はつと答へて清正が頭を上ぐれば秀吉公、やつれ果てたる相貌に、御不便あまる御落涙、暫し言葉もなかりしが、

ト秀吉清正を見て、よろしく愁ひの思入あつて、

秀吉　こりや清正、扨々そちは幾歳になつても、幼い時の心失せず、その往時虎之助と申し我小姓を勤めし折も、今一國の主となり朝鮮征伐の大將を勤める折も同じ事、朋輩と爭論いたし、何故小西行長を堺の町の町人と、惡口なして日本に人なきやうに申せしぞ、これ汝へ不審の第一。まつた大明への返答に許しもなきに豐臣の清正とは記せしぞ。汝よく承はれ、豐臣の姓を許せしは秀家、秀康、秀俊の三人の他天が下に許せしものかつてなし、誰が許して朝鮮にて豐臣と書きたるぞ、

これ幼年のその折より我側にをつたる故、主を主と思はぬ故か、この二ヶ條は如何なるぞ。

〽わざと言葉もあらけなく、問ひかけたまへば肥後守、

清正　いかにも小西行長を町人と申せしも、又お許しもなき豐臣の姓を附けしも、清正が申譯ござれども、君へ直々申上げんも、御勘氣の身に恐れあり、この儀は如何仕りませうぞ。（と家康へ思入。）

家康　其の儀は少しも遠慮に及ばず、直々申上げられよ。

三成　いや、御直答は恐れあり、何事も此の場では申上げぬが其の身の爲め、

利家　いや〳〵、御直答にて苦しからず、片時も早く演說めされ。

清正　はつ、有難う存じ奉る。

侍二　猶豫いたさず、清正殿、とく〳〵、

侍々　申上げられよ。

清正　はつ、唯今申上ぐるでござる。

〽申上げんと座を進み、

そも〳〵文祿元年三月上旬、朝鮮國征伐せよと我君の命を蒙むり、小西行長斯く言ふ清正其他從ふ大小名、追手を受けて肥前より、數艘の軍船出帆なせしに、暴風烈しき夜に紛れ、約を變じ

て拔駈けの小西が爲めに口をしや、釜山海を乘り損じ、

〽南無三寶と吹きかへす風に逆らひ船夫ども、艪を押立てゝえい／＼／＼、籠川港へ亂入なし、

慶尙道にて小西に出逢ひ、彼れが手段と知らずして、順路と聞いて進みしも、

〽渡るに難き早瀨の大河、翼なければ躊躇ふ中、逆卷く水へ飛入つて拔手を切つて泳ぎ附き向うの岸に繫いだる船を奪つて渡れども、

二日のおくれに王城を又候小西に先陣され、不意を討たれてちり／″＼に、

〽國王李昖は義州へ落ち、順和餘海兩王子は法嶺國へ落ちしと聞き、

せめてはこれを生捕つて手柄になさんと後追ひかけ、兩王子をなんなく生捕り、君の仰せはなけれども兀食恰まで攻め入つて、勝ち誇つたるその折柄、

〽落城なせし朝鮮の加勢に潮の湧く如く、大提督李如松が四十萬の大軍に、臆病未練の小西行長、敗走なして我先と磯の千鳥の群立つ如く、むら／＼ぱつと崩れ立ち、

或ひは討たれ、

〽或ひは逃げ、

朝鮮國に殘りしは、斯く申す清正が麾下に從ふ者ばかり。

〽其の時明より使者來りて、我が生捕りし兩王子、幷に朝鮮一の美女孟神女を此方へこのまゝ渡さば一命助け、數千艘の船で以て日本へ送るべし、

〽又この命を背くに於ては四十萬の大軍にて、波の哀れや大洋のみくづになさんと日の本に人もなげなる憎き廣言、

秀吉　してその時大明の、使者へは何と答へしぞ。

清正　さん候、その時に我臆病を働きなば、これ日の本の名折れ故返答の書を認め、女童は兎も角も兩王子は日本へ伺ひし上ならでは渡すこと相成らず、まつた大明へ討手に行き敗走なしたる行長は元堺の町人にして至つて臆病未練なれど、かの地理を知つたる故敵地へ踏込む案内者、彼れは軍の大將ならず、まこと討手の大將は、斯くいふ加藤清正なり、

〽四十萬騎の軍勢を我れに向けなば切崩し、大明までも攻入つて、支那四百餘州を滅亡せしめ、一時に灰燼になすべしと、

君の御威光海外へ輝かさんその爲めに、斯くの如くに認めたり。

〽斯くの如くと清正が、ありし次第を物語れば、人々實にもと感心なし、
トこの内清正物語やうの振よろしくある。

家康　してその美女は大明の、使者へ返し遣はせしか。

清正　美女は卽ち門外にて、某穂長の槍を以て芋ざしに突貫き、大明人に見せしかば、舌をふるつて恐怖なし、それよりして清正を鬼上官と尊稱なし、凡そ朝鮮大明にて、我を恐れぬもの一人もなし。

三成　して又君より許しのなきに、豐臣の姓を附けたるは。

清正　この清正三歳の折、父彈正に死別れ、それより君がお側にてやう〳〵人となつたるより、加藤の苗字を存ぜしばかり、氏も系圖も知らざる故返答の書に差支へ、豐臣の清正と許しもなきに書記せしは、日本勢の總大將と、明朝へ申せし故、此の身を人の恐るゝやう、君の御威光借りたるも、彼の地を征伐なさん爲め。

利家　して〳〵その後の合戰は。

清正　されば、それより短兵急に傳奏館を攻落し、安南府城に十萬餘騎立籠りをつたるを、其の夜の中に落城させ、明朝隨一の猛將なる麻義將軍を討取つて、逃殘りたる者共をば、早瀬の川へ追落し、晉州城にて要害の濠を碎いて先頭なし、牧使王僧鱗を討取り、又安康にて大明の劉廷と一戰なし、

凡五年が其の間、日夜山野の起臥に、雨露霜雪に身を打たれ、斯くまで窶れ衰へし艱難辛苦も水の泡、小西如き臆病者を御不便に思召し、誠忠盡す清正を憎みたまふはお情なしと、恐れながら我君を、お恨み申してござりまする。

〽強勇無双の清正が悲歎の涙に秀吉公、列居る諸侯も一同に感ぜぬ者ぞなかりける。

ト清正よろしく思入。

家康　ほゝお、今に初めぬ清正殿の、比類なき手柄の段々、

利家　小西殿を町人と言ひしも、異國へ對する日本の晴、

侍一　誹謗せしも眞に尤も、

侍二　我々感心、

六人　いたしてござる。

〽太閤御機嫌うるはしく、

秀吉　まつた豊臣と名乘りしも、申譯相立つ上は、一旦の勘氣を許し、五年が間朝鮮にて苦戰なしたる恩賞に、今日より改めて、豊臣の姓を許し遣はす。

清正　すりや御勘氣御免の其の上に、拙者めに豊臣の姓を下したまはるとか、有難う存じ奉りまする。

三成　御連枝の外お許しなきに、何故あつて清正に、
秀吉　おゝ、連枝に等しき緣者故、
三成　なに、御緣者とは、
秀吉　ほゝお、不審な尤も、清正が母なるものは大政所と從妹故、我には近き間なり、豐臣を讓つても苦しからざる緣者の清正、
家康　かゝる御緣のあることは、唯今まで知らざりしが、
利家　何にいたせ清正どのには、御勘氣御免のその上に、豐臣の姓を賜はつて、
三成　嘸大慶に、
皆々　ござりませう。
〽言ふに清正勇み立ち、
清正　今日は如何なる吉日か、身の憂き雲も吹き晴れて、日本晴れがいたしてござる。
秀吉　唯今勘氣を許せし上は、和睦破れし朝鮮へ、汝再び討手に向ひ、我が存念を果してくれよ。
清正　はゝ、仰せにや及ぶべき、(トのりになり、)五年この方彼の地にをり、山川田野の地理に明るく、假令明朝百萬の大軍なりとも討滅し、鬚唐人の耳を切り、君へ土産に奉り、目出度く凱陣仕ら

ん。

〽勇み立つたる淸正が言葉の如く、耳塚の古跡を後に殘しけり。

ト淸正よろしくあつてをさまる。

秀吉　ほゝお勇ましやく、發途を祝ふ杯持て、

腰元　（奥にて）畏りました。

ト奥より幕明に在りし腰元四人、土器を載せし三方、長柄の銚子、干肴を載せし三方を持ち出來り、秀吉の前へおく。秀吉土器を取上げ、

秀吉　誰そあるか、肴いたせ。

淀君　（奥にて）はあゝ。

ト下座の今やうの唄鳴物になり、正面の襖を引抜く、と彼方漏斗の遠見、下手より淀君金烏帽子狩衣金の幣束附太刀、男舞の裝にて出で、舞になり、

〽御代も榮え行く男山々々、名高き神にまるらせん。〽實にや誓ひもかけ高きこの如月の神祭り、はかる神慮ぞ有難き、千代の御聲を、〽松風の更け行く月の夜神樂に、

この内秀吉と淸正土器の遣り取りよろしくあつて、

秀吉　こりや、鳴物待て、

ト　これにて鳴物ぱつたりと止み、淀君控へる、秀吉太刀を取つて、

首途の餞別、（ト差出す。）

清正　はゝ、有難く頂戴仕りまする。

三成　えゝ返す〴〵も、（ト立ちかゝらうとするを、）

家康　あゝこれ、

利家　御前でござるぞ。

三成　むゝ、

秀吉　直樣出陣、

清正　はつ、

秀吉　待て〳〵

清正　はつ、

秀吉　やがて目出度く、歸國を待つぞよ。

ト　又唄になり、清正花道へ行き辭儀をなす、淀君段切を舞ふ。

〽唄へや〳〵日影さす神のしらゆかり、返す〴〵も千代の聲々、唄ふとかや。

ト秀吉は家康、利家へ思入あつて悦ぶ、三成は口をしき思入。この模樣よろしく、右の段切の鳴物にて、

幕

ト幕外にて清正立上り、刀を頂き脇へ抱へ、きつと見得。誂への鳴物になり、よろしく花道へ入る。知せに附き打込み、後シヤギリ。

増補桃山譚（終り）

出來穐月花雪聚

信濃なる逢初川の農民に盡きぬ名殘の身の植田後に見なして雪の下元吉四郎左近兄弟裏をかいたる苦肉の密計忠孝みさをの中に立つ高衡の妻の玉葛が父への訴人書き送るふびん最期にくつせぬ親新左衛門が注進に勝利まつたき鎌倉がた其の名高野の麓なる九度山村に佐々木の閑居治にゐて亂を忘れざる世界を的に張りぬきの大砲四つ目結の旗さしもの亦も揚げたる味方の勝鬨

天運
循環
時政
望辛
實生
金當

「眞田雪村」は明治四年八月、守田座に書卸された。作者五十六歳の時のことである。九代目團十郎がまだ河原崎權之助と稱してゐた頃の作であるが、活歷劇の一つといつてよいもの、九度山村閑居の場は、新歌舞伎十八番の内に算へられてゐる。此作は當時の廢藩置縣を當込んだものであつて、德川幕府を大阪方に、上田の開城を江戶の開城に擬したものであつた。殊に序幕の上田開城の場の百姓と高綱との哀別の場は、此時代の士民に多大の感動を與へたものだといふ。佐々木高綱を眞田雪村と變更すると「作全體の人名に變動を及ぼす虞があるから、原作のまゝにしておいた。但し現今上演せらるゝ際には眞田雪村として、九度山の場などは演ぜられる。二幕目の第二場、團十郎の時政と仲藏の古郡との幕切れに始めて木無しの幕を試みたといふことが傳へられてゐる。

書卸し當時の役者は、河原崎權之助(佐々木高綱、北條時政)中村翫雀(元吉四郎、安達掃部之介)、岩井紫若(高綱妻篝火、北條の奧方操の方、左近姉朝顏、市川左團次(松田左近、土肥彌五郎、佐太郞)、中村仲藏(古郡新左衞門、庄屋佐五兵衞)、河原崎國太郞(元吉妻玉葛、北條の息女花園姬)、市川子團次(松田主水)、中村鶴藏(橫須賀平太)等であつた。

挿繪にしたのは、明治十五年三月春木座にて團十郎によつて上演された時の繪草紙である。

大正十四年八月

校訂者



幸村
大助
紀の川

出來穐月花雪聚（眞田幸村――四幕）

序幕

鶴ヶ岡八幡の場
同　別當所の場
佐々木開城の場

【役名――佐々木四郎高綱、松田左近朝光、谷村小藤次、松田主水朝春、大庭三郎景久、横須賀平太、新田の太郎作、山岸の勘太、樋の口の權左衞門、畔畑の作十、黑澤藤馬、横井彌九郎、熊田伴吉、牛崎軍八、神主長井由留美、古郡新左衞門俊家、庄屋佐五兵衞、元吉四郎廣繼。高綱妻篝火、元吉妻玉葛、高綱一子大太郎等。】

（鶴ヶ岡八幡宮の場）――本舞臺三間高足の二重石垣の蹴込み、眞中石の階段、此上に石の玉垣、向う本社の書割、上下植込み、此前へ三つ鱗の紋附きたる幕を張り、よき所に銀杏の大樹、日覆より同じく釣枝、爰に床几を二脚並べ、黑澤藤馬、横井彌九郎、熊田伴吉、牛崎軍八、何れも上下衣裳大小にて立掛り居る、此見得大拍子にて幕明く。

藤馬　何と何れも、此度比企の判官能員竊に謀逆の徒黨を結び、當時四海の後見たる北條殿を亡さんと軍の用意なしたる趣き、早くも鎌倉へ漏れ聞え、直さま討手を差向けられ、既に戰爭に及びし所。

彌九　北條殿の鋒先きに賴員忽ち敗軍なし、一味徒黨の大小名亡び失せしも數知れず、佐々木の四郎高綱は、信州上田に籠城して鎌倉方の多勢を喰止め、防戰なしたる不思議の手配り。

伴吾　實に今の世の孔明と名に聞えたる彼れが軍術、僅の人數立籠る上田の城は鐵石同樣、猶大軍を差向けて微塵になさんと時政公、軍勢催促したまふ折柄。

軍八　佐々木の兄なる盛綱が、北條殿への命乞ひに、寛仁大度の御處置を以て、敵對なしたる罪を赦し助命の御沙汰に高綱は、悄々と開城なし、退散いたすと承はる。

藤馬　佐々木々々と人毎に怖ぢ恐れたる高綱も、討死せずに立退くは流石に命が惜しいやら、何は格別鎌倉方の、勝利となつて大慶至極。

彌九　それに附き時政公、八幡宮の冥助を感じ、今日ツた當社に於て神をいさめの奉幣祈念。

伴吾　まつた別當所の客殿にて、大小名の武術上覽、今日こそ我々も、日頃手練の腕前を、各々方に見せ申さん。

軍八　然し熊田氏などは、武術よりは婦人の方が御鍛錬と承はる。

藤馬　何さま拙者なども、劍道より女の方が好物なれど、兎角婦人に緣がござらぬ。

ト此中彌九郎向うを見て、

彌九　や、噂をすれば影とやら、あれ〳〵向うより、おでやかなる婦人が見えまする。

ト皆々向うを見て、

伴吾　成程これは勝れた器量、どうか見たやうな婦人でござる。

軍八　おゝ其筈、あれこそは老臣古郡新左衛門が娘の玉葛。

藤馬　鎌倉中で評判の、彼れが姿に日頃から、大庭の三郎景久殿が、執心されたも無理はござらぬ。

彌九　所が景久殿を忌み嫌ひ、先達て元吉四郎が妻となりしと承はつたが、扨々四郎は仕合せ者。

四人　成程美しい者でござる。

ト四人床几に掛り思入、三味線入り大拍子になり、花道より玉葛年若き奥方のこしらへ○△腰元にて附添ひ出來り　花道にて、

玉葛　急ぐともなく來て見れば、爰は鶴ケ岡の段かづら、弓矢を守る御社へ、夫元吉四郎殿の武運を祈りの今日の參詣。

○　女子ばかりのお供連れに、外珍らしい私共。

△　お館とは事替り、眺めに飽かぬ此景色、

兩人　氣も晴れ〳〵といたしまする。（ト花道より、大庭三郎景久上下衣裳大小にて出來り、）

景久　それへござるは、元吉殿の御內室玉葛どの、八幡宮へ御參詣なら、御同道いたすでござらう。
玉葛　これは〳〵景久樣、左樣なればあなたにも。
景久　北條殿のお先供にて、只今參詣いたす所、何は然れあれなる本社へ。
玉葛　左樣なれば御一緒に。
景久　さゝ、お越しなされ。（ト右鳴物にて舞臺へ來る、皆々見て、）
藤馬　景久殿、
四人　只今參詣めされしか。
景久　これは〳〵各々方には、早朝よりのお詰合、御苦勞千萬に存ずる。
彌九　して〳〵君の、
四人　御社參は。
景久　されば、時政公にも程なく御參詣の時刻でござれば、各々方には暫時これにて御休息、拙者事も是れにてお待受け仕らん。（ト景久床几に掛る、玉葛思入あつて、）
玉葛　私は父樣に用事もあれば、失禮ながら。（ト行き掛けるを景久留めて、）
景久　あいやお待ちなされ、成程御親父新左衞門殿、今日是れへお越しなれど、用事があるといふは僞

り、其許はお連合の元吉殿の顔が見たく、參詣に假託て、是れまでお出でなされたのでござらう。

玉葛 何のまあ、其やうな事があつてよいものでござりませう。今日は君の御社參、夫に用事があればとて女子の身で晴の御場所へ、何で逢ひに參りませう。

景久 いや／＼言譯めさるゝな、何ぼしらを切られても、まだ緣附いて間のない其許、

藤馬 屋敷にござる其時も、言はずと知れたちん／＼鴨、

彌九 其樂みに慊らず、お供先きまで跡を追ひ、

作吾 片時離れぬ夫婦仲とは、扨々お羨しい儀でござる。

軍八 然し元吉四郎殿は、未だ參詣めされねば、是れでお待ちなされたがよい。（ト玉葛思入あつて、）

玉葛 左樣なら夫廣繼は、まだ參詣はいたしませぬか。

藤馬 未だ當社へお越しなければ、奉幣祈念の時刻も延引。

玉葛 すりやそれゆゑに、心に掛る事ぢやなあ。

ト玉葛案じるこなし、ばた／＼になり、上手より長井由留美烏帽子狩衣神主にて出來り、

神主 はツ、只今神前に於て、奉幣祈念の用意萬端整ひましたれば、何れも御拜禮あつて然るべう存じまする。

藤馬　用意整ふ上からは、元吉殿になり代り、

彌九　我々拜禮仕らん。

景久　御苦勞ながら各々方、

四人　左樣ござれば景久殿、

景久　何かは後刻、

神主　いざ御案內仕りませう。

トやはり大拍子にて、神主案內して敵役四人上手へはひる。腰元思入あつて、

○　もうし奧さま、殿樣には此處へ、疾うにお出でと思ひの外、

△　まだ御社參のないといふは、合點の行かぬ事でござりまする。

玉葛　是れには何ぞ樣子のある事、もしや途中に御用でも出來たのか、ちよつと樣子を。

ト玉葛行掛けるを、

景久　いや〳〵玉葛どの、四郎殿は君のお供で、頓て是れへお出でがござらう。先づ〳〵爰で御休息なされい。

玉葛　それでも、どうやら氣に掛る。

景久　はて、此景久が申し入れたい儀もござれば、さゝ、是れへお掛けなされい。

玉葛　いえ〳〵、道まで様子を聞きに。（ト又行き掛けるを、）

景久　はてまあ、下にござれと申すに。（ト玉葛餘儀なく床几に掛る、合方になり景久思入あつて、）これ玉葛どの、其許はお連合をそれ程までに思はつしやるが、可愛や鮑の片思ひで、先きへ心が屆きませぬぞ、第一元吉殿は我々より少々ばかり男が好いので、爰や彼處の婦人が惚れ、引手數多と承はる、それに又生れ附いて氣の多い好色もの、さればこそ常々から男は好いが悪性者と、鎌倉中で噂とり〴〵、今日參詣の遲いのも大方今頃はどこぞへ立寄り、穴ツ這入りをしてござるであらう。いやもう彼のやうな悪行者に貞節を盡したとて、末の遂げぬ腐れ緣、いつぞや身共が縁談を申し入れた其時に、うんと御承知あつたなら、ちつと男は不の字なれど、片時御身の側を離れず可愛がつて置くものを、とんだ所へ縁組して可惜ところへ疵を附け、他で見る目も傷々しい、然し今でも遲い事はない、暇さへ取つてござつたら、直に引取り宿の妻、牛に馬を乘替へる料簡はござらぬか。これさ〳〵、玉葛どの、如何でござる〳〵。（ト景久しなだれ掛るを、）

玉葛　あゝこれ景久さま、何の御用かと存じますれば、女ばかりと侮つて言ひたい儘の夫の讒訴、あんまり呆れた今のお詞、聞く耳はござりませぬ、嫁入りせぬ内とは違ひ、今では元吉四郎が妻、必

ずてんがうなされまするな。

景久　いやてんがうでない、大眞實、こなたが得心さつしやれば、親御にも打明けて円郎を突出し身共が女房、結納替りにちよつと爰で。

玉葛　それぢやというて夫のある身を。

景久　假令夫があらうとも、一度位は大事あるまい。これさ、玉葛どのどうでござる〳〵。

ト大拍子早めて、玉葛逃げるを景久追廻す、腰元これを留める。此時上手より古郡新左衛門少し更けたるこしらへ、上下衣裳大小にて出て、此中へ割つてはひる。景久玉葛と心得、新左衛門を捉へ顔を見て、

や、此方は新左衛門殿。

新左　大庭氏、何をしめさる。

景久　さあ、あの是れは、おゝそれ〳〵、劍道試合の前方に、ちよつと一本參らうと存じて。

玉葛　いえ〳〵さうではござりませぬ。

○　こちの奥さまに、兎やかうと、

△　いやらしい事の有りたけ、

景久　え丶喧しい、只今のは某が、腕試しをいたしたのぢや。

新左　それはよいお心掛け、お望みなら拙者が手の內、お振舞ひ申さうか。

景久　いや〳〵、餘程疲れたれば、別當所にて暫時休息。

新左　然らば勝手にお越しなされい。（ト景久思入あつて）

景久　然し折角うまい所へ、邪魔が這入つて、

新左　如何いたした。

景久　いやなに、後刻御意得申さう。（ト大拍子になり、景久玉葛へ思入あつて上手へはひる、）

玉葛　申し父上、よい所へ來て下さりましたなあ。

新左　はてさて、たはけた奴もあればあるもの。さゝ、娘これへ掛けやれ。（ト兩人床几へ掛り、合方になり、）して娘そちは、何用あつて是れへ參つた。

玉葛　さあ、今日鶴ケ岡の境內で、武藝の試合があると聞き、夫元吉四郎殿どうぞ立合に勝を取り、立派な手柄あるやうに八幡樣の御利益を、心の內にお願ひ申して、只今參詣に參りましたわいな。

新左　何さま夫が一世の晴、妻が身では兎や角と案じるもこりや尤も、然し廣繼が日頃の嗜み、鎌倉中に勝れし腕前、假令何人と立合はうとも、後れを取るべき謂れなければ、心配いたすに及ばぬこ

と、今のやうなたはけもあれば斯様な所に長居は無用、少しも早く参詣して、屋敷へ歸宅いたしたがよい。

玉葛　成程御社参の當日に、女子は恐れ多けれど、夫を始め御家中の今日を晴なるお手合せを、拜見したい此身の願ひ、お邪魔ながら其御場所へ、どうぞお連れなされて下さりませ。

新左　すりや今日の立合に、夫四郎の手柄の程を、そちは見たいと申すのか。

玉葛　さあ、女子の入らぬ事ながら、常には見られぬお手合せ、斯ういふ折に拜見いたすも、話しの種と思ふゆゑ。

新左　成程そちも武士の娘、幼少より小太刀の一手も、教へ置きし事ゆゑに、劍道試合を見たいと申すはこりや尤もなる願ひ。よいく\、身共が許す程に、心置きなく拜見いたせ。

玉葛　すりや、お許しなされて下さりますか。

新左　然しお席へは憚りあれば、客殿の次の間より、襖越しに餘所ながら。

玉葛　殿方の立合を、拜見いたすも修行の爲。

新左　身共も丁度用事もあれば、是れより直に別當所へ。

玉葛　お連れなされて下さりまするか。

新左　然らば娘、斯う來やれ。

ト唄になり、新左衞門先きに玉葛腰元附いて上手へはひる、知せに附き大拍子にて道具廻る。

（別當所客殿の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う金地へ千羽鶴の襖、上下折廻し同じ襖、日覆より同じ模樣の大欄間をおろし、舞臺一面に薄縁を敷詰め、道具替りと一時に花道へ薄縁を敷き、揚幕へ杉戸を取附け、總て鶴ヶ岡別當所客殿の模樣、爰に以前の景久、伴吾、軍八よろしく住ひ、以前の彌九郎袴襷、松田主水同じく袴襷にて兩人竹刀を持ち構へ居る。此見得白囃子にて道具留る。

彌九　いざ、

主水　いざ、

兩人　いざ〳〵〳〵。

ト兩人立上り、三味線入り白囃子にて、竹刀打の立廻りよろしくあつて、トヾ主水彌九郎を散々に打ちすゑる。

彌九　參つた〳〵。（ト控へる。）

主水　何れも勝負は、見えましたかな。（ト主水襷を取り、下手へ控へる。景久思入あつて、）

景久　あいや主水殿、横井氏一人に勝を取つても、まだ外に武術の達人は幾らもある、手柄の甲乙分ら

ぬうち、其廣言は取置きめされ。

伴吾　貴殿は未だ御存じないか、是れなら大庭景久殿は、凡そ鎌倉廣しといへども、並ぶ者なき手練の腕前。

軍八　お手前如きが立向へば、五體が縮んで手足も利かず、猫に逢うたる鼠同樣。

景久　今に拙者が立合うて、覺えの腕前見せ申さん、其時引けを取らるゝなよ。

主水　はて、今日の立合は、言はゞ我々が一世の晴、誰彼の差別なく、叶はぬまでも腕限りにお相手をいたす所存、景久殿とお手合せは、拙者も望む所でござる。

景久　おゝ神妙なる志し、今に打据ゑて進ぜる程に、覺悟して待つてござれ。（ト此時下手襖の内にて、）

藤馬　うせう〳〵。（ト合方になり、下手より以前の藤馬、玉葛を引立て、腰元附いて出來り、）えゝ、覺悟召され。（ト引据ゑる、景久見て、）

景久　黑澤殿、玉葛どのを如何めさるゝ。

藤馬　只今御兩所のお手合せ、襖の蔭より玉葛どのが一部始終を見物なし、横井氏が打負けたりとて腰元共と諸共に、目引き袖引き笑ひ罵り、言はうやうなき無禮の振舞、それゆゑ是れまで召連れ參つた。

玉葛　あゝもし、どうしてまあ其やうな。（ト言ひ掛けるを、）

藤馬　えゝ、今となつて言譯しても、勝負の批判いたしたのは、身共が慥に承はつたぞ。

ト此内彌九郎立腹の思入にて、

彌九　黑澤氏何と仰せられる、然らば拙者が打負けしを、玉葛どのが嘲弄せしとな。

伴吾　腕前磨く今日の立合、物見遊山も同樣に、見物するさへ失禮至極。

軍八　其上女の分際で、修行の善惡勝負の批判。

彌九　惡口されては此彌九郎、武士道が相立ち申さぬ。何と景久殿、左樣ではござらぬか。

景久　如何にも橫井氏のお詞は、こりや尤もなる儀。婦女子の身にて憎き振舞、此分にては捨置き難し。こりや玉葛どの、何と言譯はござるまいがな。

玉葛　あゝもし、景久樣、成程物蔭から覗きましたは、不調法でござりますが、全く以て私共は負けた勝つたのお噂を、申した覺えはござりませぬ。

○　お上の御沙汰がござりましたら、私共が今日の科人、

△　奥さまには露程も、不調法はござりませぬ。（ト腰元も共々に詫びる、景久かぶりを振つて、）

景久　えゝざわ／＼と喧しい、主人を庇うて言譯しても、無禮の罪は遁れぬ所、其方達も同罪ぢやぞ。

主水　あいや景久殿、最前より玉葛どのが詞を盡して申譯、事の元を糺す時は、高が婦人の跡先見ず、襖越しに見物したとて、君の御前といふではなし、其立腹には及ばぬ事。

景久　はて、貴殿までが同じやうに、幾ら執成しめされても、玉葛どのにはさつきの遺恨。

玉葛　え。

景久　いやさ、以後の見せしめ此場に於て、景久試合の相手をいたし、女の腕前試してくれう。

ト景久竹刀を持つて立上る。

藤馬　成程人の武術を見て、批判いたす上からは、大方腕に覺えもござらう。

彌九　嘲弄された意趣晴らしに、景久殿の力を借りて、纖弱い五體を粉微塵。

伴吾　然し今日の立合に、女の相手は珍らしい。

軍八　いざ玉葛どの。

四人　支度めされい。

ト敵役四人無理無體に、玉葛を捨ぜりふにて前へ引出す、玉葛迷惑なる思入にて、

玉葛　あゝもし皆さま、そりや御無體でござりまする、どうして女子の私が。

景久　相手にならずば最前の、拙者が詞を得心めさるか。

玉葛　さあそれは。

景久　但しは此場で立合ひめさるか。

玉葛　さあ、

景久　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

景久　はて、身共が頼みをつい應と、得心あれば丸く納まる、是れ程思ふ心中男、何と憎うはござるまいがな。（ト景久竹刀を持つた儘玉葛を捉へるを振拂ひ、）

玉葛　又してもあんまりなてんがう。

景久　何であらうと、こりやもう堪らぬ。（ト又捉へるを玉葛竹刀を奪ひ取り拂ひ退ける。此機會に思はず景久の眉間を竹刀にて打つ、景久眉間を押へて、）やゝ、手向ひなすは相手になる氣か。

玉葛　いえ〳〵お手向ひはいたしませぬが、女子を捉へて御無體ゆゑ、避ける機會に思はぬ粗相、お許しなされて下さりませ。

景久　いや〳〵料簡罷りならぬ、竹刀で打たれた戀路の遺恨、可愛さ餘つて憎さが百倍、もう此上は。

ト景久手早く外の竹刀を取つて、突然に打つて掛る、玉葛是れを支へ、左右に別れてきつと見得、是

れより誂への鳴物になり、兩人竹刀打の立廻りよろしくあつて、ト玉葛景久の手を打つ、是れにて、景久竹刀を落し手の痛む思入、玉葛疊みかけて打たうとする、此時ばた〳〵になり、花道より元吉四郎上下衣裳大小にて、走り出來り、花道より聲を掛け、

四郎　粗忽な女、控へ居らう。（トいへども玉葛又打たうとするゆゑ、）はてさて、控へいと申すに。

ト是れにて玉葛竹刀を置いて控へる。景久も手の痛みを怺へて控へる。此内四郎はつか〳〵と舞臺へ來て仕ふ。

主水　元吉殿には、只今社參、

皆々　めされしか。（ト合方になり、四郎思入あつて、）

四郎　これは〳〵、主水殿を始めとして何れもには、疾より御社參、某事も只今是れへ參り、妻が粗忽の振舞は逐一見聞仕つる。こりや玉葛、當時出頭の大庭殿へ對し、無禮なるお手向ひ、婦女子の身にあるまじき言語道斷のいたし方、以後は必ず嗜み居らうぞ。

玉葛　さあ我が夫のお詞なれど、最前より二度三度、わたしを捉へて餘りの御無禮、據なくお相手に。

ト言ひ掛けるを制して、

四郎　こりや〳〵今となつて無益の言譯、假令景久殿が立合を望まれても、辭退いたすが女の道、それ

をおのれが心の儘に、相手になつて物の見事、いやさ、物の道理も辨へず、奉幣祈念の席を騒がし無禮を働く憎き振舞、ぢつと堪して控へ居らう。

ト四郎場所が悪いから控へろといふ思入、主水前へ出て、

主水　いやなに廣繼殿、貴殿といひ奥方まで、天晴武術は御鍛錬と、兄の左近が常々お噂、其詞に違ひなく思ふに増したる玉葛どの、只今の立合に、太刀筋亂れぬお手の内、餘人は知らず此主水は、竊に感心いたしてござる。

景久　あいや松田氏、只今の手合せは未だ勝負の附きしにあらねば、勝り劣りの論は無益、今少しく立合ひなば此景久が腕前を、お目に掛けんもの、中折れがして殘念至極、いやなに元吉殿、貴殿御内室の身をかばひ、試合をお止めなされたからは、玉葛どの、名代に、各々方を相手になし、此場に於て立合ひめされ。

四郎　はて、望みとあらば及ばずながら、お相手もいたすべきが、疎かならぬ奉幣祈念の役目を蒙むる元吉四郎、時政公のお許しなきに、勝負をいたすも何とやら。

藤馬　いや／＼元吉殿、未だ我が君のお入りはなけれど、此處にて銘々が、最前よりの腕試し。

源九　何れも武道の心掛けに、立合ひ闘む眞ッ最中、

伴吾　貴殿のおいでは是れ幸ひ、とてもの事に我々四人、

軍八　一度に掛つてお相手いたさん。

四郎　左程までに仰せられるを、たつて否むにあらざれど、未熟不鍛錬の拙者ゆゑ、此お相手は思ひも寄らず。（ト此內玉葛傍らから試合をしろといふ思入。四郎これを制して、）はて、只今申す通り、時政公への聞えもあれば、立合の儀は相成り申さぬ。（ト玉葛へ掛けていふ。敵役皆々顔見合せ、）

景久　すりや我が君の。

四人　お許しなきゆゑ。

四郎　此儀はひたすら御免下され。（ト此前方、以前の新左衛門に近習二人附添ひ、奥より出掛り居て、）

新左　あいや、其立合新左衛門がお許し申す。（ト四郎見て、）

四郎　すりや、立合をお許しあるとな。

新左　娘玉葛が粗忽を戒め、其上試合を辭退なすは、日頃より神妙なるお手前の氣質ながら、各々方の望みの手合せ、相手にならぬ其時は、臆病者と人の嘲けり、そこを思うて新左衛門が、時政公に成代り今こそ許す此場の立合。

主水　御免の御沙汰ある上は、

四郎　此場に於て各々方。
藤馬　然らば見事立合ひめさるか。
四郎　及ばずながらお相手に。
四人　どりや、腕前を見せてくれん。（ト双方立掛ろ、此時花道の揚幕にて）
左近　あいや、何れもお待ちなされい。
皆々　何と。（ト誂へ合方になり、花道より松田左近、上下衣裳大小にて出來り、花道にて）
左近　其立合ひ、暫くお控へ下されい。
新左　貴殿は松田左近殿。
景久　何ゆゑ試合を、
皆々　お止めありしぞ。
左近　さ、お止め申せし其仔細、それへ參つて演說いたさん。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、下手へ住ひ）只今あれにて承はれば、元吉氏を相手に取り、各々方の劍道試合、腕に覺えの廣繼殿、假令十人百人の人數を以て仕掛けるとも、其許のお手の内では、取るに足らざる事ながら、折節拙者も參り合せ見るに忍びず共々に、勝負を願ふ此場の立合ひ、

四郎　すりや、拙者めに力を添へ。
左近　御加勢申すは朋友の、誼を思ふ左近が寸志。
景久　すりや廣繼殿諸共に、各々方の相手になるとか。
左近　如何にもお相手仕つる。（ト新左衛門思入あつて、
新左　はて、誠なる志し、此上は御兩所にて、力を揃へ勝負の掛引。
彌九　相手が殖えれば我々も、張合があつて面白い。
景久　何れも、必ずぬかりめさるな。
四人　心得ました。
新左　双方共に、支度めされい。
皆々　はツ。

ト白囃子になり、支度にかゝる。玉葛は四郎に手傳ひ、主水は左近に手傳ひ、敵役四人共皆々肩衣をはね襷を掛ける、此内近習、上と下へ竹刀を三本づゝよろしく二組に並べる、是れにて左近は上の方にて藤馬伴吾是れへ掛り、四郎は下の方にて、彌九郎軍入是れへ掛り、双方よろしく思入あつて、

敵四人　いざ、
左近
四郎　いざ、
皆々　いざ〳〵〳〵。
ト立上りきつと見得、是れより誂へ大小の鳴物になり、双方二組にて竹刀打の立廻り、此内相手の敵役入替つて掛る事などあつて、ト・ごつちやになり、左近四郎にて敵役を散々に打据ゑる。

四人　まゐつた〳〵。
ト跡へ下る、是れにて四郎左近も控へる、玉葛主水よい氣味だといふ思入、新左衛門感心の思入にて
新左　おゝ、勝負は見えた、御兩所天晴々々、新左衛門感心の仕ツた。
左近　はッ、拙き武術の我々共。
四郎　御賞美あつて其お詞、
兩人　はゝッ、恐れ入りましてござりまする。（ト左近四郎襷を取つて控へる。景久口惜しき思入にて、）
景久　はて、勝負は時の運なるに、親類緣者聟舅、それに繋がる朋友まで、味方贔屓の褒め詞、側で聞くさへ苦々しい。
藤馬　それには引替へ我々は、思ふ存分肩腰打たれ、今更なんと西洋のチン〳〵ビヤの悲哀な立合。

彌九　今だに身體がフラソコの、牛の乳でも呑んだなら、少しは痛みが去る事か。

伴吾　シヤボンで拔けぬ惡名を、鳶合羽で包んでも、

軍八　とう／＼ランプの明るみへ、引出されたる一世の恥辱。

四人　思へば／＼忌々しい。（ト皆々口惜しき思入、新左衞門こなしあつて、）

新左　こりや娘、最早そちが望みも叶ひ、是れで安心いたしたか。

玉葛　はい、此やうな嬉しい事はござりませぬ。

新左　其喜びは道理々々、又もや障りのない内に、少しも早く歸宅いたせ。

玉葛　はい。（ト玉葛思入あつてうぢ／＼するを、）

四郎　舅殿の仰せ、はや立て。

玉葛　それでもわたしや。（ト立ち兼ぬるを、）

四郎　はてさて、歸宅しやれと申すに。

玉葛　はあい。（ト唄になり、玉葛四郎へこなしあつて立上り、畏元附て花道へはひる。新左衞門思入あつて、）

新左　扨御兩所の御手の內、まつた最前主水殿の手練の程も承はる、それに附き時政公より、下し賜はる品こそあり。（ト奥へ向ひ、）やあ／＼。申し附けたる品持參いたせ。（ト奥にて、）

近習　はあ、。

ト合方になり、近習三人、誂へ足附の扇箱を持出で、四郎、左近、主水の前へ銘々に直す、三人思入あつて、

三人　すりや、我々へ此品を。

新左　時政公より扇子の御褒美、御披見めされ。

三人　はゝッ。（と一時に蓋を取る、何れも箱の内より墨附出る、三人心得ぬこなしにて開き見て、）

四郎　こりやこれ、扇子と思ひの外、

左近　一萬石の、

三人　御墨附。

新左　扇によそへし知行の御加增、開く武運も末廣の、行末長く頂戴めされ。

左近　でも、將軍家の御沙汰もなきに、

四郎　分に過ぎたる知行高祿。

主水　拜領の儀は、

二人　何とも以て、

新左　そこが天下の御後見、北條殿の威勢に任して、

三人　はて心ならざる御賜

新左　受納されぬと仰せあるか。

三人　全く以て、

新左　然らば何れも頂戴めされ。

三人　はゝッ、有難く頂戴仕ッてござりまする。

ト三人是非なく墨附を押戴く。ばた／＼になり、下手より由留美の神主、誂への箱を三方へ載せたるを持ち出で來り、

神主　はッ申し上げます、當社の神木銀杏の下より、掘り出したる怪しき此箱、御詮議の筋もあらんかと持參仕ッてござりまする。

新左　合點行かざる其一箱、是れへ持て。

神主　はッ。

ト右の箱を新左衞門の前へ置き奥へはひる。此箱釘附けにて蓋の明かぬ心、新左衞門脇差の鐺にて箱を打つ、仕掛けにてばら／＼と毀れて、中より藁にて作りし人形へ五寸釘を打ちたると、外に一通の

願文出ろ、

新左　此人形に呪詛の鐵釘、怪しき一通讀み上げめされい。

景久　はッ、（ト願文を受取り開いて、）「當時日の本に威勢蔓る北條時政を失ひ、御幼年の將軍家御安泰の基を開く我々が宿願、何卒神明の冥助を以て、時政の一命を斷ちたまはるべき事、依て祈念斯くの如し、謹上再拜願主敬白。」（ト讀上げる。）

皆々　やゝゝゝ。（トびつくりする。）

新左　扨こそ調伏の其願文、先君の御遺言にて、天が下の御後見たる、時政公を嫉む族、今坂本に御在城の頼家公に心を寄せ、逆意を含むは由々しき大事、此上は鎌倉の大小名を詮議なし、徒黨の者を糺すが肝要、先づ差當る此座の人々、叛逆野心の覺えなくば、其潔白をお立てなされい。

景久　こは改つたる其お詞、餘人は知らず某は時政公の御推擧にて、立身登庸なしたる身の上。

四郎　我々とても其如く、時政公の幕下に屬し、

左近　恩義を蒙むる鎌倉在勤、

主水　弓矢八幡も照覽あれ、

藤馬　野心などゝは、

皆々　思ひも寄らず。
新左　すりや神明を誓ひに立て。
景久　僞りならぬ、
皆々　心の潔白。
新左　はて頼もしき各々方、斯かる事もあらんかと、豫て用意の此一卷、（ト新左衞門懷中より一卷を出し）此神文へ姓名認め、何れも此場で血判めされい。
敵役
皆々　心得ました。
ト是れより弓八幡の謠になり、景久一卷を受取り、有合ふ硯にて敵役の姓名を順に認め、其跡へ立役三人の名を認めて、おのれから先きへ小柄を拔き血判して、藤馬へ廻す、是れより敵役皆々順に血判して一卷を新左衞門へ出す、新左衞門手に取り見てうなづき、
新左　此上は廣繼殿より、松田氏御兄弟へ。（ト一卷を出す、立役三人受取り一卷の神文を開き見て）
四郎　こりや北條殿の軍勢催促、
左近　合點の行かぬ此神文、
主水　血判なさば、

三人　後日の大事。（ト當惑の思入。）

新左　扨は御身達三人は、時政公へ弓引く心か。

三人　全く以て。

新左　左なくば此場で血判めさるか。

三人　さあそれは、

新左　さあ、

三人　さあ、

四人　さあ〳〵〳〵。

新左　御返答が承はりたい。（ト是れにて左近思入あつて、）

左近　此上は是非に及ばぬ、いざ廣繼殿。（ト血判しろといふ思入。）

四郎　あいや、そこ許御兄弟は兎も角も、拙者は承引仕らぬ。

左近　はて時政公の仰せを背かば即座のお咎め、只何事も後日の思案、いやさ、思案を定めて血判めされ。（ト是非がないから血判しろといふ思入。四郎やう〳〵呑込み、）

四郎　左様ござらば、仰せに任せ。（ト四郎小柄を拔いて血判する、左近主水も血判して、）

三人　いざ、お改め下されい。（ト一卷を新左衛門へ出す、新左衛門見て、しめたといふ思入にて、）

新左　血判慥に落手いたした。（ト一卷を懐中して、）斯く北條家の威風を慕ひ、各々合體ある上は、君にも嘸かし御滿悅。

景久　味方一同心を協せ、試合の遺恨も此場限り、

新左　元より社參に事寄せて、神文進める奉幣祈念。

三人　して調伏の人形は。

新左　諸人を試す身共が計略。

四郎　斯かる手段と思ひしゆゑ、一旦辭退したれども、

左近　引くに引かれぬ手詰の血判、

主水　すりや我々を、

三人　味方に附け、

新左　坂本城へ、

敵
皆々　寄手の手配り、

三人　やゝ、聞捨てならぬ一大事。（ト三人刀を持つて立上らうとするを、）

新左　あゝこれ、世の盛衰は。（ト新左衛門三人を押へるを木の頭、）是非がござらぬ。

ト皆々引張りよろしく、本行の太鼓の入りし早き謠ひにて道具廻る。

（上田開城の場）――本舞臺一面の平舞臺、土手板へ稲を澤山に取附けたるを三段に並べ、此向うへ淺黄幕を釣込み、上下植込みにて見切り、稲の上に鳥おどしの鳴子案山子などよろしく、上寄りに、「從是北佐々木高綱領地」と記せし廣大なる榜示杭、根許の所へ埒を結ひ、尤も仕掛物色々誂へある事。下手に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て信州上田佐々木領の模樣、上手に横須賀平太野袴ぶつ裂き羽織、大小にて床几に掛り、中間二人柿の脚絆旅裝にて控へ、下手に太郎作、勘太、權左衛門、作十百姓のこしらへにて控へ居る。此見得時の太鼓にて道具留る。と合方風の音になり、

平太　こりや〳〵其方共は當所の百姓ぢやな。

太郎　へい〳〵、私共は上田領二十七ケ村の内で、草分の百姓でござります。恐れながら新田の太郎作と申しまする。

勘太　へい、私は山岸の勘太と申しまする。

權左　樋の口の權左衛門でござります。

作十　畦畑の作十でござりまする。

太郎　今日は農業を休みまして、

四人　是れに控へ居りまする。

平太　むゝ、扨は此横須賀平太の出迎ひをいたすのぢやな。こりやさう有りさうな事、其方共ばかりでなく、只今是れへ參る道々百姓大勢屯いたすも、此度鎌倉北條家の仰せを蒙り、佐々木の四郎高綱が上田の城を受取りの爲、上使に立ちし身共を敬ひ、村々より路次の警衛、農業を差置いて出張いたすは大儀々々。

太郎　あゝもしお侍さま、私共が此やうに、屯して居りますのは、さういふ譯ではござりませぬ。

平太　なに、身共を警護いたすのではないと申すか、して何ゆゑに相詰め居るぞ。

勘太　へい途中へ出張つて居りますのは、外でもござりませぬ、是れまで長々御恩になりし、御領主の高綱樣が、お城を開いて此土地を、お立退きある今度の椿事。

權左　所の者は途方に暮れて、羽根をもがれた山鳩か、かい掘に逢つた鮒同樣、

作十　お名殘り惜しいが一杯で、鋤鍬かつぐ力も拔け、言ひ合さねど村々一同、

太郎　御領主樣をお見送りに、

四人　殘らず出ましてござりまする。（ト平太思入あつて）

平太　なに、領主の佐々木へ暇乞に百姓共が屯するとな。むゝ、扨は此平太が通行には構はぬのか。はて如何に賤しい土民でも餘りと申せば辨へなき奴等。これよく承はれ、北條家は天か下の御後見、其御内たる身共に對し、無禮あらば許さぬぞ。

太郎　あゝもし、其やうにお腹をお立てなさいますな、北條樣の御威勢が、どれ程強いか存じませぬがわしらが目からはたゞの親仁。

勘太　御領主樣には海山ほど、是れまで御恩を受けましたが、鎌倉から鐚一文貰うた覺えはございませぬ。

權左　恩を思へば此土地で、掛構ひのない他人向き、假令御上使でもお役人でも、出迎ひ所か澁茶一杯進ぜます謂れがない。

作十　兎角わしらが仲間では、廣い世界に御領主の、佐々木樣の其外に、

四人　有難い者はございませぬ。　ト是れを聞き平太立腹の思入にて、

平太　いや此奴等は土ツぽじりの分際にて、法外なる儀を申し居る、うぬ縛り首にいたしても慊らぬ奴等なれど、役目を蒙むる旅先きゆゑ、今日の所は許しくれる、頓て上田の城を預り、北條殿の威勢を以て心の儘に政事を行ひ、うぬら一々今に憂き目を見せてくれう、其時必ずほざくなよ。

太郎　へい／＼、先づ最初から憂き目を見せると、名乗り掛けての御政事なら、

勘太　大方年貢の取立も、定めて無慈悲な事でござりませう。

權左　それに附けても佐々木様に、お別れ申すが情ない。

作十　これ皆の衆、是非もない事でござるなう。（ト四人しをれし思入）

平太　はて愚癡未練なる百姓共、領主々々とわれ達が、持重いたす佐々木めは、時政公に敵對いたし、大軍にて攻め立てられ、既に落城なすべき所、兄盛綱が命乞にて一命ばかりはやう／＼助かり、上方筋へ引つ込むとは、言はうやうなき腰拔武士、最早知行を取上げたれば、領主といふも今日限り、見れば是れなる榜示杭に、佐々木高綱領地とあるを、其儘置くは上への恐れ、なぜ棒杭を取捨てぬ。

太郎　へい、假令御領主は替つても、佐々木様のお名前を、殘して置きたい當所の願ひ、それゆゑ未だ取捨てませぬ。

平太　えゝ、馬鹿つくすにも程がある、われ達が取捨てずば、只今身共が拔き捨てくれん。

勘太　左様なら、あなたのお力で、其榜示杭が、

四人　拔けますかな。

平太　はて、これしきの柱一本、抜き捨てるに何の手間ひま、汝等それにて見物いたせ。(ト平太羽織を脱ぎて中間に渡し、下緒にて襷をかけ、)唐土の樊噲にもをさ〳〵劣らぬ平太が大力、どりや腕前を見せてくれん。(ト平太件の榜示杭へ両手を掛け、えいと引けども動かぬ思入)こりやどうぢや。

四人　もし、抜けましたかな。

平太　いや〳〵、只今のは腕試しをいたしたのぢや、今度は見事抜いて見せう。(ト又両手を掛けゆすぶつて引けども矢張り抜けぬ思入)えゝ、死太い棒杭。

四人　まだ抜けませぬか。

平太　やかましい、只今庄屋方へ罷り越し、鋤鍬を持参なし、土を掘つて抜いて見せう。

四人　それでは首尾よく抜けませう。

平太　とは言ふものゝ、小胸の悪い榜示杭。

ト平太片足を揚げ、榜示杭へ掛け、草履のまゝ踏み躙る、仕掛にて高綱の二字へ草履の跡つく、皆々これを見て、

太郎　こりや御領主の、

四人　お名前を、

平太　土足に掛けしは平太が業と、汝等佐々木へ言傳せよ。（ト平太襷を取り羽織を着て、）益なき事に暫時の暇入り、庄屋方にて是れより休息。（ト言ひながら花道附際へ來て、）又われ達の田地へも、棹入れなすから覺悟いたせ。

勘太　すりや、あの田地を。

四人　はてさて無慈悲な。

平太　何がどうした。

四人　いやなに、左樣なればお役人さま。

平太　家來參れ。（ト時の太鼓になり、平太中間附いて花道へはひる。跡四人立上り、）

太郎　何と皆の衆、餘りといへば情を知らぬあの侍、

勘太　御領主樣のお名前を、土足に穢した其上に、

權左　先祖の代から所持して居る、田地へ棹を入れられては、百姓の顋が釣しあがる。

作十　お慈悲深い高綱樣が餘所へござつてあのやうな、無慈悲な人が地頭になるとは、

四人　さて〳〵、是非もない事でござるなう。（ト此時後にて、）

大勢　さあ〳〵ござれ〳〵。

ト上下より一、二、三、四、五等百姓大勢、思ひ〳〵のこしらへにて、荒繩の襷鉢卷などよろしく、銘々竹槍縫ぐるみなどを持ち出來り、

一　これ〳〵四人の衆、何かの樣子は殘らず聞いて居ましたぞよ。

二　あのやうな非道な奴に、是れから支配をされては迷惑、

三　いつその事大勢寄つて、あの侍をぶち殺し、

四　それから直に鎌倉へ、名乘つて出ようと、皆の相談、

五　どうで佐々木樣が餘所へござれば、賴み少ないわしらが身の上、

六　入らぬ命と覺悟して、支度して出て來ました。

皆々　こなた衆も一緒にござれ。（トわや〳〵いふ、以前の四人是れを聞いて）

權左　成程わしらもさつきから、怺へ兼ねて居た所、

作十　さういふ事なら、

四人　是れから一緒に。

一　そんなら直に跡追つかけ、

二　用水端へ追ひ詰めて、

三　大勢かゝつて弄り殺し。

四　さあ、是れを持つて行かつしやれ。

ト竹槍を太郎作始め四人へ渡す、四人は是れを持ち、捨ぜりふわや〳〵あつて、

四人　そんなら皆の衆、

皆々　さあ、氣を揃へて遣つ附けろ〳〵。

ト右の四人先きに皆々足早に花道へ掛る。此時ばた〳〵になり、花道より佐五兵衛羽織着流し、少し老けたる庄屋のこしらへにて走り出來り、花道にて皆々を留め、

佐五　これ〳〵皆の衆、待つた〳〵。（ト皆々見て、）

太郎　や、こなたは庄屋さま、是れにはちつと譯のある事、

勘太　どうぞ爰を、

皆々　通して下され。

佐五　はて、樣子は殘らず向うの土橋で見て居ました。何をいふにも相手は侍、手向ひしては濟まぬぞまあ〳〵あれへ戻らつしやれ。

權左　いゝや侍でも役人でも、もう斯うなつたら百年目、遣る所まで遣らねばならぬ。

皆々　そこ退いて、通して下され。
佐五　さうでもあらうがわしが頼みぢや、聞き分けて引いて下され。
作十　假令庄屋さまの言ふ事でも、
皆々　こればつかりは聞かれぬ〳〵。
佐五　それ程こなた衆が行きたくば、わしを殺して行かつしやれ。
皆々　どうしてこなたを、めつさうな。
佐五　そんなら引いて下さるか。
皆々　それだと言つて、
佐五　わしが詞は、聞かれませぬか。
皆々　さあ、
佐五　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。
佐五　これ皆の衆、二十七ヶ村の束ねをする、此庄屋の頼みぢや程に、どうぞあれまで戻つて下され。（ト是れにて皆々顔見合せ、どう仕ようといふ思入）さゝ、引いて下され〳〵。（ト佐五兵衞頻りに宥めて

皆々を押戻し舞臺へ來て、ほつと息をつき、捨石に腰を掛けて、）これ皆の衆、わしが詞を聞き分けて、よう戻つて下された。あゝ百姓ながら戰國に、育つた者は義心も強く、氣性勝れしこなた衆ゆゑ、跡へ引かぬは尤ぢやが、短氣は損氣と浮世の譬、まあ此庄屋のいふ事を、とつくりと聞いて下され。（ト合方になり、）横須賀平太といふ侍は、北條樣の腹心にて、城受取りに上使の役目、何かに附けて當所の者を憎まつしやる其譯は、御領主の高綱樣、軍慮に賢きのみならず、元より仁義の聞え高く、東國大半歸服なせば、此樣子では高綱が六十餘州へ羽を伸す兆しと、時政公の嫉みから、上田の城へ押寄せしも、却つて引揚げの道を失ひ詮方盡きて盛綱樣へ、和談のお頼みありしに依り、到頭今度の御開城、坊主が憎けりや袈裟までと、取るにも足らぬ百姓へ平太殿の無理難題も、北條樣の皆言附け、それをこなた衆が根に持つて血氣に逸る竹槍三昧、相手を仕留めた其上で、お仕置き受けるは覺悟であらうが、一人の命に大勢の命を捨てるは大きなたはけ、其上一揆徒黨の憎しみ、詰る所は御領主へ難儀の掛るは知れた事、只何事も高綱樣の、御身が大事と思ふなら、必ず短氣な心を出さず鎌倉の下知を守り、悔しい事も辛抱して、佐々木のお家本領安堵の時節を待つたがよいわいなう。

ト此内皆々とんだ事をしたといふ思入あつて、顏見合せ天窓を搔き、鉢卷襷を取り、竹槍縫ぐるみを

後の方へ隠すことよろしくあつて、以前の四人間の惡さうに前へ出で、

太郎　成程、庄屋さまは庄屋さまだけ、聞けば聞くほど尤もな御異見、

勘太　道樂寺さまの御談義より、遙に勝つた長文句、

權左　畠に雨がしつとりと、底の底まで浸み渡り、

作十　鋤鍬とらぬ法もあれ、其お詞は、

四人　背きませぬ。（ト佐五兵衛思入あつて、）

佐五　はて數ならぬわしが詞を、さう聞き分けて下されば、此庄屋も嬉しうござる。（ト大勢に向ひ、）聞かるゝ通り四人の衆は得心ぢやが、して皆の衆は、どうでござるな。

五　いやもう、常々から世話になる庄屋さまの言はつしやること、

六　何でわしらが背きませう、

皆々　殘らず得心でござるわいなう。

佐五　そんなら聞き分けて下さるか、それでこそ此庄屋が、骨折甲斐もあるといふもの。

太郎　然し庄屋さまがござらずば、

勘太　とんだ騷動になる所、

權左　折よく道で出會して、
作十　留つて見れば跡での仕合せ、
皆々　ひやいな事でござつたなう。（ト佐五兵衛思入あつて、）
佐五　それはさうと皆の衆が農業休んで屯するも、御領主の佐々木様が思ひ掛けない御開城に、今日御出立のお暇乞、わしも共々お目に掛り、品に寄つたら先き／＼まで、お供をして行く料簡、最う程なく御通行であらう程に、爰に待つてござらつしやれ。
太郎　さうぢや／＼何でも長年お世話になつた、其お禮を澤山言はねば、
皆々　ならぬわいの。（ト此内○の百姓上手の方を見て、）
○　あれ／＼、向うへ見えるは、御領主樣ぢや／＼。
佐五　どれ／＼、（ト立上り上手を見て、）おゝ成程、御領主樣ぢや。あれ見さつしやれ、大勢の御家來も思ひ／＼に退散なし、昨日に替つてお情ない、奥さまと若さま、誰やらお供にたつた一人、あゝ嘸御不自由な事であらう。
皆々　ほんに、おいたはしい事でござるなう。
佐五　それ／＼、爰へおいでぢや／＼、跡の方へ下つてござれ。

ト佐五兵衛皆々ずつと下手の方へ控へさせ、おのれも下手へ控へて思入。誂への合方になり、上手より佐々木四郎高綱、野袴ぶつ裂き大小陣笠やうの笠を冠り、子役の大太郎同じこしらへにて菅笠を冠り、奥方篝火旅装緋張りの笠を手に持ち、杖を突き、谷村小藤次、胸當達附一本差し、兩掛けの旅荷物へおのれの笠を附け、是れをかつぎ出て來る。佐五兵衛始め皆々は下手に平伏して居る。高綱是れを見て心得ぬ思入にて、篝火始め三人に控へろといふこなし。是れにて三人控へる。高綱皆々に向ひ、

高綱　多人數の者共、心得ぬ振舞、こりや汝等は領内の者か。（ト言へど皆々默つて平伏して居るゆゑ、）いやさ、道路にひれ伏し罷りあるは、何等の譯ぢや仔細を申せ。ト是れにて佐五兵衛顔を上げ、

佐五　恐れながら私達は、御領内の庄屋佐五兵衛と申す者、その外二十七ヶ村の百姓共、御開城のお暇乞、則ちお見送りとして、是れに控へ居りまする。（ト高綱思入あつて、笠を取り、）

高綱　なに、庄屋佐五兵衛とな、左様申せば覺えある、鷹野の節にそちが宅へ、毎度小休みいたしたる篠原村の佐五兵衛であつたか。

佐五　御意の通りでござりまする。

高綱　其方を始め二十七ヶ村の者共、扨は開城の暇乞に參りしとな。ほゝお、高綱過分なるぞ。

佐五　はゝはッ、冥加に餘る其お詞、

皆々　有難う存じまする。

ト此内小藤次雨掛をおろし、上寄りに高綱、篝火、大太郎も是れへ腰をかけ、篝火思入あつて、

篝火　左樣なら皆の者が、あなたへのお暇乞に此やうに打揃うて態々是れまで參りしか、てもしをらしい志し。

小藤　當時諸國の戰爭に、人の心も穩かならず、斯く薄情の世の中に、殿の御恩を忘却せず、厚き心の百姓共、はて、感じ入つたる儀でござる。（ト高綱思入あつて、）

高綱　こりや、皆の者近う。

佐五
皆々　はゝツ。（ト合方になり、）

高綱　扨これまでは數年の間、我が領國の田土を耕し山野を開き水利をきはめ、米穀數多を貢ぎして養ひくれし其功し、詞には盡し難し、然るに高綱仔細あつて、北條殿の制度を受け上田の本城を明渡し、今日只今當所を立去り、紀州九度山に知邊あれば、彼の地へ落着き土民となり、武門の道を餘所に見て、生命保つ我が所存、其方共は今日より、鎌倉方へ附屬の民、移れば替る信濃路に、佐々木の雪のむら消えて、常磐の松の平けき仁政、願うてもなき幸ひと下知に從ひ汝等も、猶耕作に力を盡し、國の榮えをなすならば、我が悅びも此上なし、返す〴〵も是れまでの、其方共が

佐五　志し、必ず忘れは置かぬぞよ。（ト是れを聞き佐五兵衛顔を上げ、）

あゝ勿體ない其お詞、百姓共が御領主へ御年貢を收納いたすのは、珍らしからぬ土民の勤め、長年お國に住み慣れておのれは元より妻子まで、無事に月日を送りましたは、御領主様の皆お蔭、命の親と申すのも恐れ多い御恩の數々、神佛より尊く思ひ、朝夕拜んで居りましたに、降つて湧いたる今度の椿事、御恩になりし御領主様に、お別れ申すは其昔、親に別れた悲しみより百倍増したる心の內。なか／＼鎌倉の御支配などを、受ける心底はござりませぬ。此上のお願ひには、成らう事なら御旅行先きへ、私始め皆の者を、お連れなされて下さるやう、お願ひ申し上げまする。

ト高綱これを聞き、思入あつて、

高綱　はて、別れを惜しむ其歎き、某が身に取つて、過分なる事ながら、領主は則ち國の預り、知行もおのれが物ならず、止む事を得ず高綱が開城なすは時節到來、某武門の家に生れて、父の教へに幼年より只軍術に心を委ね、甲斐に其身を寄せしより是れまで數度の戰場に、拙き計策圖に當り、勝利を得たるも數知れず、御大將の賞美あつて分に過ぎたる祿をたまはり、まつたおのれの力を以て近國を切隨へ、遂に上田に在城して、追々兵を召抱へ、まだ此上に敵あらばと待構へたる折

柄に、鎌倉方より討手の人數、しや小賢しと手配りなし暫く敵を惱ませしが、聰明叡智の北條時政、我が鋒先を挫かん爲、兄盛綱を使者として、是非を辯ずる和談の望み、百萬の大軍も物の數とはせざれども兄の一字に刃も鈍り、鎌倉勢を見遁して退身なすべき條約は、なまじ弓矢を取ればこそ、うゐさの人の嫉みぞと、思ひ定めし今度の開城、一人たりとも當所の者を、供の中には召連れ難し。必ず共に其やうな未練なる儀を申すまいぞ。（ト佐五兵衛これを聞き、

佐五　左樣なら私共が、お供の願ひは叶ひませぬか。

高綱　今領國を失なへば、高綱は無祿の遊民、多人數の者召抱へ、扶助いたすべき力もなく、殊更鎌倉への聞えもあれば、必ず供には連れ難し。

佐五　せめてお供が叶はずば、今二三日この上田へ、お止め申して置きたけれど、北條樣への恐れあれば、それも叶はぬ本意ないお別れ。これ、皆の衆。

皆々　庄屋さま。

佐五　悲しい事に、

皆々　なりましたなあ。

ト佐五兵衛手拭を顏へ當て、泣く。百姓皆々泣伏す、高綱篝火も思入あつて、

篝火　聞けば聞くほど皆の者が、淺からぬ志し、わらはとても今の今まで、斯うなる事とは夢にも知らず、上田のお城に住み馴れて軍と聞けば我が夫の、御勝利を神に祈り、軈て大太郎も初陣と、兜へ結ぶ總角さへ、人手には掛けさせず、行末思ふ樂しみも、打つて替りし御開城、跡へ心を引く杖に旅路の憂さも我が身より、夫や我が子の身を思ひ、先立つものは涙ばかり。これ佐五兵衞、推量してたもいなう。

ト泣く。

佐五　お道理でござりまする。昨日までも今日までも結構な御殿の內で、荒い風にも當らぬ御身が、御介抱する者もなく輕々しい御道中、常にはろく／＼お顏さへ、拜まれぬ程の御領主樣が、御出立の際になつて馴れ／＼しい其お詞に、お名殘り惜しいはまた百倍、勿體ない事ながら、死に別れより生き別れと、浮世の譬も思ひ當り、お跡に殘つた此土地で、農業する氣もござりませぬ。

高綱　其歎きは然る事ながら、我人ともに今日の、住所は定まるものならず、大聖孔子も時に合はねば魯國を去つて周に移る、況んや不肖の高綱が、案山子に等しき弓矢を捨て、他鄕へ移るは惜しむに足らず、一命だにあるならば、萬里の波濤を隔つとも、再び逢はれぬ事はないぞよ。

小藤　何さま殿樣の仰せの通り、遠國他鄕の果なりとも一旦の誼を忘れず、常に水魚の情あれば志し

は通じる習ひ。

大太　紀州へ參つた其上で、皆が尋ねてくれましたら、父上も母上も嘸お悦びでござりませう。

篝火　ほんに大太郎の言やる通り、これ佐五兵衛、九度山とやらいふ所は、わらはも知らぬ里ながら、高野の麓と聞くからは、御山へ參詣がてら必ず訪ねてたもいなう。（ト是れにて佐五兵衛涙を拭ひ、）

佐五　若殿樣の思召しといひ、奧樣の有難い其お詞、それに附けても佐五兵衛が、とりわけお禮を申し上げねばならぬと申す其譯は、不束な娘どもも是れまでお側にお宮仕へ、御開城ゆゑ是非もなく、お暇たまはりしと、結構なるお召物やお手道具まで頂戴して、涙と共に宿許へ下りましたは昨日の夕方、跡の跡まで思召して不相應なる品々を、頂戴したのは仕合せなれど、お別れ申すが悲しいと、婆あを相手にお噂を申し暮らして居ります。

篝火　そんならそれ程別れを惜しみ、わらはを思うてたもるかいなう。

佐五　さあそれも日頃のお慈悲ゆゑ、親子が受けたる是れまでの、御恩を送る時節もなく、お供も叶はぬ御旅行に、紀州と聞けば餘程の道、此秋の取入れさへいたしますれば、九度山へ、必ずお尋ね申しまする。

篝火　わらはも待つて居りますわいなう。（ト此内高綱以前の榜示杭の方を見て、）

高綱　事に紛れて最前より、それと心も附かざりしが、我が物顔に高綱の、領地と記せし榜示杭、跡の聞えも片腹痛し、當所を立退く上からは、此姓名も今日限り。

小藤　明日よりは北條殿の印を爰へ建てんこと、我々までも殘念至極。して此杭に土足の跡、こりや何者の仕業なるぞ。

太郎　へい／＼、それは最前、鎌倉方の横須賀平太といふお侍、

勘太　最早佐々木が領地でなければ、榜示杭を拔き捨てると、

權左　いろ／＼惡口いたした上、泥草履にて踏み躪り、

作十　御覽の通り榜示杭へ、跡を附けて行かれました。（ト小藤次これを聞き、）

小藤　すりや横須賀平太めが、遠くは行くまい、それ。（ト行きかけるを、）

高綱　こりや小藤次、きつさうして何れへ參る。

小藤　平太を捉へて無禮の返報。

高綱　はて、最早領國上地なせば、此姓名に恥辱はないぞ。

小藤　それぢやと申して、

高綱　はてまあ、控へて居やれと申すに。

小藤　はツ。（ト控へる、高綱思入あつて、）

高綱　いやなに、佐五兵衛、平太とやらが榜示杭を抜き捨てんと言ひしは尤も、某當所を立去らば此姓名を直さま取捨て、其外田畑山林領内殘らず改め受け、必ず粗相のなきやうに、鎌倉方へ渡してくりやれ。

佐五　其儀は此佐五兵衛が一々水帳に引き合して、渡しまするでござりまする。（ト土手板の稲を見渡して、）とはいふものゝ、此やうに、早稲も晩稲も出來のよさ、引續いての凶作も、死ぬる子は眉目よしと今年に限つて此豐年、最う僅かで取入れして、御年貢納めの俵詰と樂しんだ甲斐もなく、思ひ掛けない鎌倉へ納めるやうになつたのは、どういふ風の吹き廻しか、これ皆の衆、あゝ殘念な事でござるなう。

太郎　成程、庄屋さまの言はつしやる通り、

皆々　殘念ぢや／＼、殘念でござるわいなう、はあゝ。

ト皆々聲を揚げて泣く、是れにて佐五兵衛も泣伏す、高綱不便だといふこなし、篝火小藤次共々涙を浮めて思入、此内佐五兵衛泣く／＼稲の穗を一房取つて扇の上へ載せ、

佐五　恐れながら御領主樣、せめて是れなる一房は私始め皆の者が、心ばかりの初穗米、年毎お藏へ積

入れし其御年貢に引替へて、片手に足らぬ品ながら、御出立のお荷物へ、お添へなされて下さらば有難う存じまする。（ト件の稻を高綱の前へ出す、高綱見て、）

高綱 すりや此稻を某へ、（ト手に取つて見て、）誠や烏に反哺の孝ありと、恩義を忘れぬ此一房、百萬石の米穀にも、遙かに勝る貢物。奥見やれ、何と感心な儀ではないか。（ト篝火に見せろ、篝火見て、）

篝火 ほんに見事な實入りの稻、門出を祝ふ餞別とは、てもしをらしい志し。

高綱 こりや佐五兵衛、高綱過分に思ふぞよ。

佐五 は、ッ、賤しき土民の我々へ御領主樣の其お詞、恐れ入つてござりまする。

ト高綱稻を小藤次へ渡す、小藤次雨掛へ是れを挿す。風の音知らせに附き、正面の淺黄幕切つて落す、向う奥深に稻田の上へ鳴子を掛け渡したる遠見を三段に仕込み、遙か奥に上田の城の書割、皆々立上り是れを見込んで、

高綱 雨催ひにて山霧深く、今までそれと見えざりしが、

篝火 深山おろしの秋風に、いつか夕日の空晴れて、

小藤 一目に見渡す上田の御城。

高綱 もはや是れが、

三人　見納めなるか。(ト大太郎も共々思入。)

佐五　其お詞を聞くに附け、お名殘り惜しきは、

皆々　御領主樣。

高綱　はて、何時までいうても名殘りは盡きぬ。あ、愛別離苦の。(ト言ひ掛ける時本釣鐘、高綱氣を替へ、)とかういふうち最早夕景、どりや退散いたさうか。

佐五
皆々　そんなら、是れが。

ト佐五兵衛皆々高綱の顏を見上げ、名殘りを惜しむ思入、高綱も不便だといふこなしあつて、ト花道へ行く、篝火大太郎附添ひ、小藤次兩掛をかつぎ花道へ行く、皆々是れを見送る、此内本釣鐘よき時分上手より、以前の平太つか〳〵と出で、

平太　高綱はまだ退散せぬか。(ト是れにて高綱立留り、見て、)

高綱　扨は貴殿が聞き及ぶ、城受取りの横須賀氏。

平太　最前恥辱を取つたれば、今こそ腕前見せてくれん。(ト刀を拔き、)えい。

ト榜示杭を切る、仕掛にて眞中より斜に切れて倒れる、皆々見て、

佐五　こりや、御領主樣のお名前を、

平太　横須賀平太切捨て申した。
高綱　はて天晴なるお手の内。
小藤　むゝ。（ト手早く兩掛を下に置き、立ち掛るを、高綱これと制して、）
高綱　高綱感心。（ト小藤次又息込むを高綱留める。舞臺は百姓皆々平太に立掛るを、佐五兵衛これを留める。双方見合つて木の頭。）いたしてござる。

ト高綱小藤次を留める、佐五兵衛百姓を留める、平太は上手に立身、篝火は大太郎をかばふ。此見得よろしく、本釣鐘の寺鐘にて、

幕

ト幕外送り三重になり、高綱先きへ行けといふ思入、篝火大太郎小藤次兩掛をかつぎ附添ひて花道へはひる。跡より高綱鷹揚に花道へはひる。留めの木にて、シヤギリ。

二幕目

元吉四郎邸の場
北條時政館の場
同返し　松田左近邸の場

〔役名――北條相模守時政、松田左近朝光、同主水朝春、足輕宅助、元吉の腰元野菊、同若黨毛内、古郡新左衛門俊家、元吉四郎廣繼。廣繼室玉葛、同老母伏屋、松田の乳人柵、元吉の腰元初霜、同朝露等。〕

（元吉屋敷庭先の場）――本舞臺三間の間高足の二重、上手一間塗骨の障子屋體、此前に紅葉の臺幹木、下の方に松の立木、此後網代塀、正面銀襖、日覆より松の釣枝、總て元吉屋敷庭先の體。爰に毛内老けたる若黨袴裝にて二重に住ひ、平舞臺に○△紺看板の中間にて水手桶箒などを持ち、庭掃除をして居る。烏笛、風の音にて下手の松へ烏大分群がり居る。此模樣調べにて幕明く。と毛内烏を見て、

毛内　え丶忌はしい烏鳴き、あれ〳〵又大層に寄つて來居つたわえ。（ト氣の揉める思入）

○　もし〳〵毛内さま、苦しがりが日なしでも借りたやうに、烏々と氣を揉んでおいでなさるが、何も珍らしい事ではなし、

△　さうとも〳〵、烏がかあ〳〵鳶がとろ丶、雀がちう〳〵鳴きますのは、こりやあ昔から極つた事

でござります。

毛内　いや手前達は夢中で居るゆゑ何も心は附くまいが、同じ烏の鳴聲でも吉事を告げる悦び烏と、凶事を告げる烏啼きとは、餘程啼きやうが違ふものぢや。あれ〳〵あれなる松の木へ、群がり集る烏啼きは、正しく凶事の烏鳴き、はてさて心に掛るわえ。（ト是れにて中間思入あつて、）

○　成程さう聞いて見ると、何だかをかしな烏鳴き、此頃世間の噂には、頼朝樣がお逝れになつて、北條樣が威勢を振ひ六十餘州を手の内へ、握らうといふ目論見で、諸大名を手懐けるといふ專ら評判。

△　さうなる時は頼朝樣の、御惣領頼家樣が、埋れ木になる事だから、譜代の家來が承知しまいし、又頼家樣の御母公宇治の方樣もござるからは、こいつあ一悶着出來るかも知れねえ。

毛内　何にしろ氣になつてならぬ、貴樣達も手傳つて、あの烏を追つてくれ。

○　へい〳〵よろしうござります、蛙の面へ水といふが、烏の面へ水でも掛けて、追ひ散らして遣りませう。

△　おれは又此箒で、二度と再び來ねえやうに、這ふ〳〵の目に逢はせてやらう。え丶、畜生め、しいしい。

ト中間兩人烏を追ひ廻しながら、下手へはひる、烏逃げて又上手の紅葉の枝へ來て、やかましく啼くゆゑ、毛内耳を押へて、

毛内　あれまだあすこで啼いて居る、耳の遠いおれにさへやかましく聞えるから、嘸御病氣でいらつしやる御母公樣のお耳に這入り、さぞおやかましい事であらう。えゝ畜生め、しい／＼。

ト庭へ下りて石を拾ひ、烏に打附ける思入。此時上手より野菊腰元裝にて庭下駄をはき出來り、出合ひ頭に毛内あやまつて野菊の天窓へ石を打附ける。

野菊　あゝ痛い／＼。こりやまあ、目から火が出るわいなあ。

毛内　おゝ、これはお腰元の野菊どの。つい粗相ぢや、許さつしやい。

野菊　えゝもう此聾爺め、何の遺恨で此やうな、美しい顏へ瘤をこしらへ、わたしを疵者に仕居つたのぢや。

毛内　是れはしたり意趣も遺恨もありはせぬが、今烏を追散らさうと、礫を打つた手が狂うて、こなたの顏へ當つたのぢや、不斷こなたが憎れ口をきくから、烏の代りに痛い目するも、こりやあ佛法でいふ因緣といふものぢや、勘辨さつしやい／＼。

野菊　えゝもう、人に石を打つ附けておいて因緣もないものだ。此意趣返しはこなたの天窓、藥罐へ漏

りをこしらへるから、さう思つて居るがよい。（ト石を拾つて打ち附けにかゝる。）

毛内　え丶、そんな事をされて堪るものか。

ト毛内は下手へ逃げてはひる。合方になり、上手の障子屋體より序幕の玉葛打掛けにて出ろ、是れへ初霜、朝露の腰元兩人附添ひ出で、

初霜　野菊どの、奥樣のお出でゞございまする。

朝露　まあお鎭まりなされませ。（ト是れにて野菊びつくりして下手へ來り、）

野菊　これは〳〵奥樣には、お庭の花壇を御遊覽でございまするか。（ト玉葛よろしく住ひ、）

玉葛　いや〳〵左樣な譯ではない、母上樣の御機嫌を伺ひに參りしが、長い間の御病氣に、心ならざる烏鳴き、若しもの事でもありはせぬかと、案じられてならぬわいなう。

初霜　それに又御前樣には、北條家よりお歸り遊ばし、お顔の色も常ならず、奥樣はじめ私共へおつしやる事さへ荒々しく、

朝露　すぐにお居間へお入り遊ばし、一間へ人を通すなと嚴しく仰せ附けられしは、こりや常事ではござりますまいな。

玉葛　そち達の言やる通り、北條家の館にてお氣の濟まぬ事でもありしか、常に替りし御前の御樣子、

又自らが父上は、時政公のお覺え目出度く、古郡新左衞門といふ御老臣、變つた事でもあるなれば、父上より自らへ御內意もある筈を、何の御沙汰もないからは、案じる事でもあるまいが、何に附けても常々よりお癇の強い御前ゆゑ、心が置かれてならぬわいなう。

ト よろしく思入れ ばた〳〵になり、下手より以前の毛內走り出來り、下手へ手をつかへ、

毛內　はツ、奧樣へ申し上げます、松田左近樣竝びに御舍弟主水樣、御兄弟御同道にて、殿樣へ直々に御面談がなされたいとて、只今御入來でござります。

玉葛　それは又困つた事、御不快ゆゑに失禮ながら、今日は御意得難いと、なぜお斷りは申さぬのぢやぞいなう。

野菊　ほんに氣の利かぬ毛內どの、ちと嗜んだがよいわいなあ。

毛內　いえ其儀は先刻殿樣が、御癇癖の御樣子ゆゑ、私も心得まして御不快ぢやと申しましたら、いや御不快とあるならば、お枕許でも苦しうない、是非御面談がなされたいと、押してお通りなされますゆゑ、餘儀なく書院へお二方を、お通し申しましてござりまする。

玉葛　それは嘸かし火急の御用、御前へ此由申し上げん。（ト立上る、此時又風の音にて下手の松へ烏大分群つて鳴くゆゑ、）又も群れ來るあの烏。

ト是れにて皆々烏を見て案じる思入、野菊捨石をそつと拾つて、毛内の天窓へ打附ける、

毛内　あゝ痛い、何をさつしやる。

野菊　つい烏と間違へたわいなあ。

毛内　いや飛んだいゝし返しだ。（ト天窓へ唾を附ける、玉葛思入あつて、）

玉葛　あ、心に掛る事ぢやなあ。

ト案じるこなしよろしく、野菊は有合ふ箒にて烏を追散らす。此模樣風の音、時計にて道具廻る。

（元吉屋敷書院の場）＝本舞臺三間の間平舞臺、上下折廻し銀張りの襖、正面上手へ寄せて九尺の床の間、塗框、爰に大きなる花溜へ菊の花大分に挿してあり、其次一面銀襖釘隱しの長押附き、總て元吉屋敷書院の體。爰に序幕の左近上下大小にて住ひ、主水同じく上下大小にて住ひ、前に茶煙草盆菓子などよろしく並べ、此模樣時計の音にて道具留る。

左近　あの時計は申の上刻、當家の主人廣繼殿に、片時も早く面會したいが、はてさて手間取る事ではある。

主水　取次の者の申すには、不快なりと申せども、北條家にて先刻まで、列座いたせし廣繼殿、不快な

りとは合點が參らぬ。（ト下手より毛內出て手をつかへ、）

毛內　是れは／＼御兩所樣には、嘸かし御退屈にござりませう、只今奧へ申し入れましたれば、粗末ながら今一服、お茶なと召上り下さりませう。

左近　あ、いや／＼、其心配には決して及ばぬ、御主人元吉四郎殿如何なる御急病かは存ぜぬが、今日北條の館にて御意得申した我々共、日頃水魚の交りいたす拙者に逢はれぬ事はあるまじ。

主水　まつた御本病にござるなら、御別懇にいたす我々、御病床へ參りお見舞申さん、いざ御案內下されい。

毛內　いえ左樣ではござりませうが、只今申し入れましたれば、暫時御猶豫を願ひまする。

ト是れにて左近心の急く思入にて、

左近　やあ兎や角と猶豫はならぬ、奧へ參つて面會いたさん。

主水　いざ、御同伴仕つらん。（ト兩人刀を持ち立ちかゝる、此時奧にて、）

四郎　あいや、お出でには及ばぬ、四郎廣繼、只今それへ參るでござる。

ト本調子の合方にて、正面の襖を左右へ明け、序幕の四郎羽織着流し大小にて出て、少し下手へ住ふ、

是れにて兩人よろしく住ひ、

左近　貴殿は元吉四郎殿。承はれば御不快のよし、
主水　御病中をも顧みず、押して推參いたせし段、
左近　偏に御容赦、
兩人　下されい。
四郎　これは〳〵御兩所には痛み入つたる御挨拶、北條の館より先刻歸宅いたしてより、俄に持病差起り、我が一間へ引籠り打伏して居つたるゆゑ、お出迎ひも仕らず、失敬の段御容赦下されい。
左近　それは嘸かし御難儀ならん、お心惡しい所をば、押して面會願ひしも、捨置き難き大事のゆゑ。
主水　かく兄弟が打連れ立ち、入來いたせし其仔細は。（ト言ひ掛けるを、）
四郎　あいや、如何なる事の御談示なるか、只今篤と承はらん。こりや〳〵毛内、松田氏には御酒家なれば、酒宴の用意申し附けい。
毛内　はツ、畏つてござりまする。（ト毛内下手へはひる。）
左近　あいや廣繼殿、御酒どころではござらねば、其用意には及び申さぬ。
主水　お持成の儀は、御無用になし下されい。
四郎　あいや必ずお心置かれな、御密談と存ぜしゆゑ、態と用事を申し附け、彼をば次ぎへ遠ざけたれ

ば、今は憚る事もなし、御入來ありし御用の趣き、仰せ聞けられ下されい。

ト是れにて左近小膝を打ち、

左近　いや天晴御明智。如何にも貴殿が御推察の如く、他聞を憚る一大事、御密談をばいたさん爲。

四郎　してお談示の趣きはな。

左近　某演說いたすでござらう。（ト合方きつぱりとなり、兩人四郎の左右へ住ひ、）貴殿も知らるゝ如く、當鎌倉の大小名今朝北條の館へ招かれ、銘々列座いたせし所、老臣たる新左衞門出座いたして申するに、先君他界の其跡目は實朝公にて相續と退引きさせぬ連判狀、斯かる手段と知らずして先達て鶴ケ岡にて、貴殿と我々三人へ一萬石づゝ加增の後、思ひ掛けなく時政を呪詛調伏の汚名を受け、惡名雪がん其爲に、諸侯一統連判狀へ血判いたせしが、今々思へば時政が深き巧みの掛罠に陷りしとは知りながら、當時天下の後見たる威勢盛んの時政ゆゑ、諸侯の歷々隨身なし、其意に任せる場合ゆゑ、餘儀なく我々兄弟も承引はいたせしかど、其時貴殿の立振舞、御得心の御樣子は言はねど面に顯はれて、賴家公の世になさん御胸中と推察いたし、歸宅いたすと其儘に、兄弟連立ち參つてござる。

何卒貴殿の御心中、我々二人へ、

兩人　お明し下され。

四郎　なに、拙者が心中明せとは。

左近　されば後見北條時政、先君の御恩を忘れ、御順當の御家督たる頼家公を押籠めおき、實朝公を世に立つるは六十餘州を掌に掌握なさん彼が企み、早くも悟り其許には、其場に時政居り合さば刃傷にも及ぶべき今日の御樣子は、我々兄弟に御同意なれば、其許と心を合せ、謀叛の棟梁時政を討つて捨てんと存ずるゆゑ、入來いたして斯くの仕合せ。

主水　異議に及ぼす廣繼殿、いざ御所存をお明し下され。

ト双方より詰掛ける、四郎天晴といふ思入あつて、態と氣を替へ、

四郎　こは何事かと存ずれば、思ひも寄らぬ御仰せ、當時天下の後見たる威勢盛んの北條時政、それゆゑ諸國の大小名媚び諂らふ世の中なれば、假令先君頼朝公のお胤とは申せども、頼家公には御若年、左すれば萬事時政殿、釆配を乞はねばならざる時節、其北條に睨まれなば、本領安堵は成難し、刃傷に及ばんなどゝは思ひも寄らぬお目違ひ、拙者に於て左樣な所存、兎の毛でついた程もござらぬ、斯かる危きお談示なれば、何卒お省き下されい。

ト一向に取合はぬこなし、是にて左近きつとなり、

左近　むゝ、扨は貴殿は時政が、權威に恐れ先君の、御高恩を忘却なし、天下を望む時政に、隨身召さるゝ御所存よな。

四郎　如何にも、領地が大事ゆゑお髯の塵を取る所存、是れが所謂臨機應變、時世につれるが德でござる。

ト是れにて主水きつとなり、

主水　ちえゝ、それとは存ぜず日頃より、兄弟の因みを結び、御別懇の其許ゆゑ我々共と御同意ならんと、大事を明せしが今での後悔、見下げ果てたる御所存ぢやなあ。

トきつと詰寄る、左近思入あつて、

左近　あはゝゝゝ、いやなに廣繼殿、大事を計る其許ゆゑ、飽くまで本心お包みあれど、我々共は時政が、間者に參りし者ならず、御本心をばお明し下され。

四郎　なに、まだ此上に本心とは。

左近　はて今日諸侯の列座の中、時政の館も恐れず、疊を蹴立てゝ歸られしは、天晴丈夫な貴殿の魂、武士は斯くこそ有りたきものと是れなる弟と申し合せ、合體なさんと參りし我々、それを飽くまで御疑念あるは、ちとお恨みに存じ申す。

四郎　むゝ、それゆゑに御両所には、心得違ひを召されしよな、實は廣縁の席にて、俄に持病差起り堪へ難なく存ぜしゆゑ、失敬をも顧みず疊を蹴立てゝ歸宅いたした。まつた北條時政を恨まぬ證據は妻なる者は、北條家の老臣たる新左衞門が娘なれば、縁の繋がる主人も同然、それゆゑまこと隨身なし、舅殿が推擧にて立身出世いたす心底、是れが何より證據でござる。

ト是れを聞き左近思入あつて

左近　すりや御内室の縁あるゆゑ、まこと北條時政へ隨身めさるゝ御所存とな。

主水　それに相違はござらぬかな。（ト双方より詰寄る。）

四郎　身不肖ながら元吉四郎、何の虚言を申さうぞ。

左近
主水　すりや、あのいよ〳〵。

四郎　はて、諄いことを。（トきつと言ふ。是れにて兩人顔見合せ、ほろりと思入あつて、）

左近　えゝ、如何に時世と言ひながら、貴殿ばかりは其やうな諂らひ心はあるまじと、思ひ込んだが我が誤り。大事を明せし上からは、生けては置かれぬ。それ弟。

主水　心得申した、廣縁覺悟。（ト兩人刀の柄へ手を掛け、拔きかけるを四郎持ちたる扇子にてきつと留め。）

四郎　すりや、企ての漏るゝを恐れ、日頃水魚の拙者を討ち、本望を遂げんとは、はて天晴なる御心底。

左近　やあ、此期に及んで入らぬ追從。

主水　叶はぬ所と覺悟いたせ。（ト兩人拔連れて双方より切つて掛る、四郎扇子にてちよつと立廻つて、）

四郎　あいや全く追從ならず、斯く御心底を見る上は、只今本心お明し申さん。

兩人　何と。

四郎　先づ／＼お下においで下され。

ト兩人を無理に下にすゑさせる。是れにて兩人刀を鞘に納め、双方より詰掛け、

左近　して又貴殿の、

兩人　御本心は。

四郎　はゝッ、計り難きは人心と、若しや北條時政が下知にて間者に來られしかと、疑ひしは拙者があやまり、今は何をか包み申さん、此廣繼が心底を、只今取出し御覽に入れん。（ト懷より一通を出し、）認め置きし我が書置、是れにて篤と御內見下され。（ト左近に渡す、左近開き見て、）

左近　むゝ、扨こそ拙者が推量通り、逆意を企つ時政が根を絕つて葉を枯らし、先君の御恩を報ずる天晴の御心底。弟そちも內見しやれ。（ト主水に渡す、主水讀終り、）

主水　むゝ、是れでこそ誠の武夫、拙者に於ても一つの安堵、いで此上は持參の品を。

左近　貴殿と合體なす上は、異變いたさぬ誓ひの神文。

ト兩人懷中より神文を取出し、

主水　いざ、御落手下されい。（ト双方より差出す、四郎開き見て、）

四郎　御念の入りし誓ひの印、慥に落手仕つる。して時政を討取るには、如何めさるゝ御所存よな。

左近　されば明智の其許ゆゑ、如何なる計略あるかは知らねど、先づ拙者が存ずるには、幸ひ明くれば九月九日は重陽の式日なれば、目指す相手の時政が館へ祝儀に出仕なし、鎧通しの短劍を竊に隱し懷中なし、阿り諂ひ時政が、設けの席へ近寄つて、只一突きに刺殺し、返す刀で切腹なし本意を達する我が所存。（ト四郎扇子にて思はず小膝を打ち、）

四郎　ほゝお、忠義の心寸分違はず、拙者に於ても其如く、彼れに近附き刺殺し、直に自殺と存ぜしゆゑ、認め殘す其書置。

主水　言ひ合さねど兄上と廣繼殿は御同意なれば、是れぞ成就のよき吉瑞、承はつて拙者も祝着。

四郎　まだ〳〵談ずる儀もござれど、只今も申す如く拙者が妻は古郡新左衞門が娘なれば、大事の漏れんも計られねば、何かは明朝貴邸へ、參上いたし又候や、御密談の仕つらん。

左近　然らば必ず其許の、御入來をば相待ち申す。

主水　斯く御約定整ふ上は、最早お暇仕つる。（ト兩人立たうとする、四郎思入あつて、）

四郎　さりながら、若し天運拙くして、露顯に及び仕損じなば、

左近　其時こそは潔く、其場を去らず切腹なし、

主水　野邊に屍は晒すとも、主君の御爲何厭はん。

四郎　又は首尾よく仕果せなば、菊の節會を一期にして、

左近　露と消え行く武夫の、櫻に勝る忠義の黄菊、

主水　善惡邪正白菊の、

四郎　花を散らすか散らさぬは、

左近　人に漏らさぬ雨障子、

主水　菊の花壇の密談に、

四郎　明日待たるゝ、

三人　大望ちやなあ。

ト替つた合方になり、下手の襖を明け以前の野菊、初霜、朝露の腰元、銚子 杯 肴などを持ち出來り、よき所へ並べる、爰へ以前の玉葛出來り、下手へ手をつかへ。

玉葛　これは〳〵松田樣の御兄弟、お揃ひ遊ばし、ようこそ御入來、疾にも御挨拶申し上げる筈を、何かの事に取紛れ、失禮御免下さりませ。（ト丁寧に辭儀をする、是れにて三人氣を替へ）

左近　これは〳〵御內室には、御丁寧なる御挨拶、其後は打絕え御無沙汰のみ仕ッたが、いつも〳〵御健勝にて拙者に於ても恐悅に存ずる。して御母公の長の御病氣、御容體は如何でござるな。

玉葛　有難い其お尋ね、一兩日は取分けまして快い方でござりまするが、何を申すも年寄のこと、捗捗しうも參りませず、誠に心配いたし居ります。

主水　長い間の御介抱、嘸かしと御推察申します。

玉葛　有難う存じまする。

四郎　さ、何はなくとも御兩所には、御酒一獻お上り下されい。

左近　これは折角のお持成、忝うは存ずるが、只今も申す通り、ちと急用の儀がござれば、今日はお預けにいたし、近日ゆるりと御馳走にあづかりませう。

玉葛　左樣ではござりませうが、せめて一盞お杯なと、お取上げ下さりませ。

主水　それ程までに仰せあるを、御辭退いたすは失敬ながら、餘儀なき火急の用向き、平にお暇いたしたうござる。（ト四郎思入あつて）

四郎　何さまそれも御尤、松田氏には御内室を、昨年の春先立てられ、跡に殘りし嬰兒の御男子、又其許が今宵限りに、いやさ、子ゆゑの情は又格別、然らばお早く、御歸宅なされい。

左近　宅に殘せし忰めは、まだ當歳も同然ゆゑ、左のみにも存ぜねど御老病なる御母公を、お持ちなさる、廣繼殿の御心中の程推察いたせば御酒も喉へは、いやさ、後して馳走に相成るでござらう。

ト四郎左近氣味合の思入よろしく、玉葛は合點の行かぬこなしよろしくあつて、

玉葛　左樣なれば、何うあつても、御歸宅でござりまするか。

主水　平にお暇いたすでござる。

四郎　それ、皆のもの、お見送りいたせ。

腰元三人　畏りました。(ト立たうとするを、)

左近　あいや、それには及び申さぬ、御母公へよろしう願ひまする。

ト唄になり、左近先きに主水連立ち、三人の腰元附いて下手へはひる、玉葛こちらへ來り、

玉葛　いつも御酒家の松田樣、餘程火急の御用と見え、お杯もお取りなされず、御歸宅なされましたわいなあ。

四郎　松田氏にも明朝は、式日の御出仕なれば、定めて繁多と相見ゆる。いや、出仕と申せば今日は、

未明よりの出仕にて、まだ母上の御病床へ御機嫌伺はなんだ。どれ、今生のお暇乞に。

玉葛　え。

四郎　いやさ、御存生の其内に、暇があらば少しなりとも、御孝養をばせねばならぬ。

玉葛　ほんに左様でござりまする。お目覺めでござりまするか、そんならちよつと伺うて。

ト立上る、此時上手にて、

伏屋　いや參るには及ばぬ、今そこへ行かうわいの。（ト是れを聞き、）

四郎　なに、母上是れへお出でとな。

玉葛　どれ、お手を取つて上げませうか。

ト合方になり、玉葛上手の襖を明ける。内に伏屋病鉢卷、老母のこしらへにて立つて居る、是れを玉葛介抱して出る、

四郎　それ、誰そあるか、褥を持ちやれ。（ト下手にて、）

初霜
朝露　畏りました。

ト褥と脇息を持ち出で、上手よき所へ褥を敷く、伏屋此上へ住ふ、四郎前へ出で、

四郎　して今日の御容體は、如何お渡りなされまするな。

伏屋　いやもう、これなる嫁女が明暮に、よう介抱してくれまするゆゑ、追々と快氣に赴き、取分け今日は快いゆゑ、病の床を出で、母が氣晴し、忝うござるわいなう。

玉葛　不束なる私が心届かぬ御介抱、それ程までに思召しまするとは、有難う存じまする。

四郎　何は然れ、お快いとは拙者に於ても、大慶に存じまする。

伏屋　其快いに附き此母が、悴に言置く事もあれば、嫁女を始め腰元には、暫く次へ遠慮して下され。

玉葛　左樣なれば暫くお次へ、腰元共もわらはと一緒に。

腰元　畏りました。

　ト玉葛先きに腰元附いて下手へはひる。伏屋跡を見送り思入あつて、有合ふ杯を取上げ、

伏屋　これ悴、幸ひの此九獻、なみ〳〵と注いでたもいなう。（ト四郎心得ぬ思入にて、）

四郎　あいや母上、如何に御氣分よろしいとて、お健かの時とても、好みたまはぬ其御酒を。

伏屋　呑まいでならうか今生の、親子一世の別れぢやわいなう。

　トきつぱりと言つて愁ひの思入、四郎さてはといふこなしにて、

四郎　むゝ、すりや母上には、最早此世に。

伏屋　いや、わらはではない其方は、明日を限りに一命を、捨つる所存であらうがなう。

四郎　えゝ、すりや拙者が胸中を。（トびつくり思入）

伏屋　知らいでならうか、母ぢやわいなう。（ト合方替つて、）年老い朽ちて此母が、長の病氣に其方や、嫁女が厚き介抱に、惜しからねども命を延はり、病の床に臥しながらも、家の長久悴の武運、明暮祈る其中に、最前松田の兄弟衆打連立つてござつた樣子、常事ならずと思ひしゆゑ、隔ての襖へ身を寄せて、朧ながらも老の耳、慥に聞き取る密事の段々、明日の出仕を幸ひに、北條殿へ近寄つて、刺違へて死す血氣の一存、さうなる時は目前に、數代續きし我が家は斷絕するは知れたこと、斯かる大事を此母に包み隱すは恨めしい。そりやもう武門の習ひにて、家を捨つるも身を捨つるも、君へ忠義の爲なれば、わらはも元吉兵部が妻、次第によらば留めはせぬ。是れには深き譯あらん。如何なる仔細か此母に、所存を明して聞かしやいなう。

ト是れにて四郎是非なき思入にて形を改め、

四郎　はツ、お耳に入りし上からは、今は何をかお隱し申さん。此廣繼が家に替へ命に替へて時政を討たねばならぬ一通り、お聞きなされて下されい。（ト合方きつぱりとなり、）そも先將軍賴朝公御他界ありし其後は、御血統たる萬壽君賴家公はましませども、まだ御幼君なるがゆゑに、執權北條時政に天下の後見いたさせしに、日に增し彼が威を振ひ、既に諸國の大小名賴家公を差置いて、皆

北條へ媚び諂ひ、威勢盛んの所より鎌倉の天下を手の内に掌握なさん下心、今日北條時政が館へ諸侯を招き寄せ、實朝公を世に立てんと深き巧みの連判狀、其意に背かば面々の本領安堵ならざれば、逆意と知つて列侯は、一統承引いたせしかど、我が魂はいつかな〳〵、數代舊恩蒙りし鎌倉天下の滅亡を　餘所に見なして捨て置かれんや。幸ひなるかな明日ッた、菊の節會の祝儀に事寄せ、逆意の根ざし時政を只　刀に刺殺し、其場を去らず自殺なさんと、松田と深く密談なし、最早覺悟にござりますれど、只情なきは母上に先立つ不孝と此密事を、申し上げるに上げられず、せめては死後の申譯と認め置きし一通を、お床の下へ殘し置き、不孝の罪は彼の世からお詫びなさんと思ひしも、いつかお耳に漏れ聞え、お歎き掛ける勿體なさ。仔細は斯くの次第ゆゑ、武門の習ひと思召され、命のお暇下さるやう、偏に願ひ奉つる。

ト思入にていふ、此内よき程に下手の襖を明け、以前の玉葛これを聞いて居てびつくりなし、種々思入あつて、そつと襖をしめる。伏屋實に尤といふ思入あつて、

伏屋　はて天晴なるそちが心底、時世につれる人心と、逆意と知つて歷々が多く隨身する中に、然はなくそちは家に替へ、命に替へて時政を、討つて忠義を立てんとは、流石元吉兵部が悴、天晴出來した、出來したなう。

四郎　すりや母上にはお咎めなく、命のお暇たまはるとな。
伏屋　何の咎めてよいものぞ、武門の習ひ忠義の爲、家名を捨つるは譽れゆゑ、冥土にござる父上も嘸や悦びましまさん、見ん事北條時政を、討つて本意を遂げよや、廣綱。
四郎　はゝあ有難き其お詞、斯かるお許し蒙むる上は、猶も勇氣の彌優り、やはか逆意の時政を討果さいで置くべきか。（ト向うを見てきつと思入、伏屋愁ひのこなしあつて、態と氣を替へ、）
伏屋　おゝ勇ましゝさりながら、親子は一世の縁とやら、是れ今生の別れの杯、さゝ滿々とついでたも。
ト杯を取つて差出す、四郎思入あつて、
四郎　そりやはや一世のお別れゆゑ、お酌いたすでござりませうが、御病氣の上あまり大杯。
伏屋　はて、假令どれほど過さうとも、何の厭はん、やがて此身も。
四郎　や。
伏屋　さあ好みはせねど、目出度き杯、氣遣ひせずとつぎやいなう。（ト顏を背けて思入）
四郎　左樣なれば仰せに隨ひ、（ト銚子を取つて酌をなす、此時暮六つの時計鳴るゆゑ、）あの時計は最早暮六つ。（ト伏屋愁ひを隱すこなしあつて、）
伏屋　いつも病床に居る折には、淋しう思ふ暮六つも、心勇めば何とやら、ても心地よい、（トぐつと呑

んで、）さあ、目出度うそちへ。（ト杯を出すを四郎受け、伏屋酌をする、）

四郎　はッ、頂戴いたすでござりまする。（ト思入あつて一口呑み酒に咽せるゆゑ、）

伏屋　これはしたり、惜しみはしませぬ。（ト四郎の背中を擦らうとしてひよろ〳〵とするゆゑ、）

四郎　あもし、お危うござりまする。（ト勞はる、伏屋起直り、）

伏屋　ほんにわらはとした事が、一つの御酒で醉うたさうな。

四郎　誠に目出度い、む丶は丶丶丶。（ト愁ひを隱して笑ふ、此模樣よろしく時の鐘にて道具廻る。）

（奧方居間の場）――本舞臺四間通し中足の二重、本緣附、正面秋草を畫きし銀襖、ずつと上手一間の床の間、此次袋戸棚、此上違ひ棚、いつもの所枝折戸、此後透しのある風雅の板塀、上の方石の手水鉢、左右四つ目垣、是れへ菊の盛りを見せ、所々へ紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、總て元吉屋敷奧方居間の體。爰に以前の玉葛行燈の側にて文を書いて居る。此見得時の鐘にて道具留る。と時の鐘を打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽暮れて行く秋も半を腰越の、山を背にする奧御殿、庭の千草に鳴く蟲も、いと哀れに玉葛が、書く玉章のそこはかと、筆のたてども跡や先き、まとめ兼ねたる一卷の、墨さへにじむかこち言。（ト此内玉葛文を書き居て、筆を止め、思入あつて、）

玉葛　道に背くと知りながら、お主へ忠義親への孝行、是非に及ばず我が夫の思ひ立たれし大望を、訴人の文は書きたれど、嘸や跡にて自らが文より大事が漏れしと聞き、夫のお怒り母上の其お怨みはいかばかり、こりやもういつそ父上へ、お知らせ申すは止めにして、夫の本意を遂げさせまして、彼の世へ行つて父上へ、お詫び申さん。さうぢや／＼。

〽筆を止めて玉章は、巻き納めても女氣の、納め兼ねたる胸の内。

ト此内玉葛筆を下に置き、文を巻納め思入あつて、

さりながら如何に夫の爲ぢやとて、斯かる大事を知りながら、重き御恩の父上へお知らせ申さぬ其時は、不孝の罪の消え難く、殊に三世の御主君へ不忠の罪は免れず、操立つれば忠孝の道を捨てねばならぬ仕儀、忠と孝との二道を全うすれば我が夫や、姑御樣へ義理立たず、こりや何うしたらよからうなあ。

〽義理と操と忠孝の、四つに絡まる玉葛が、わつとばかりに泣きくづをれ、思案に暮れて居たりしが、やうやく涙おし拭ひ、（ト此内玉葛とつおいつのこなし宜しくあつて泣伏し、顔を上げ）

おゝさうぢや、假令訴人はすればとて、父上樣の忠義に替へ、夫の本領安堵を願ひ、又母上への申譯直身を捨て、お詫びをなさん、それが何より好い分別、片時も早う、おゝそれ／＼。

〽心定めて書さしの、又もや文を繰返し、書納めたる折柄に、ト玉葛再び文を取上げ書いてしまひ、側に有合ふ狀箱へ入れ、封をする事よろしく、此時奧より初霜の腰元出で、下手へ手をつかへ、

初霜　はッ、御用があると仰せられましたが、お使ひでゞもござりまするか。

玉葛〽いふに此方は淚を隱し、如何にも密事の使ひゆゑ、苦しうない、近う〳〵。

初霜　はッ。

〽何か囁き狀箱を、渡せば呑込み腰元が、（ト玉葛初霜に囁き、狀箱を渡す、初霜呑込んで、）左樣なれば此お文を、お里方の殿樣へ。

玉葛　他聞を憚る用事ゆゑ、父上樣へ直々に、お手渡しにしてたもひなう。

初霜　畏りましてござります。

〽いそ〳〵立つて行き掛くるを、

玉葛　あゝこれ、御門を出でなば駕籠にて急がせ、片時も早う行てたもや。

〽路次の手當と僅かなる、黃金取出し與ふれば、はッとばかりに押戴き、道を急いで出て行く。

ト玉葛手箱より金子を出し、紙に包みて初霜に遣る。初霜押戴き懷中して、二重より下りて足早に花道へはひる、

〽跡見送りて玉葛が、後の愁ひを思ひ遣り、又も涙にくれ居たる。

ト玉葛思入あつて愁ひのこなし、

〽斯かる歎きのあるぞとも、知らで主人の廣繼は、銚子たづさへ一間より、醉うたる振にて立出る。

ト正面の襖を明け、以前の四郎、着流しにて銚子と杯を兩手に持ち、酒に醉ひたるこなしにて出で、

四郎 えゝい、あゝよい心持に醉うたわえ、又是れからは奥方と、さいつ押へつ呑み直しぢや。こりや奥は何れに居る。玉葛はどれに居るぞ。

〽言ひつゝ此方を打見やり、

おゝ奥それに居つたか、居るなら居ると申せばよいに、何をそれにいたして居るのぢや、いや今宵は菊の宵節句ゆゑ、母上と差向ひにてちよと御祝儀を始めて見たが、譬に申す狆猫婆ァ母の酌ではうまくない、所でそちを尋ねて居つた。さ、是れにて一杯ついでくりやれ。

〽常に假氣なき熟醉も、深き心を汲み兼ねて、

玉葛　はい。

〽はいと返事はしながらも、差打向いて泣き居るにぞ。

ト此内玉葛よろしく愁ひのこなし、四郎是れを見て、

四郎　何かめそ〳〵泣いて居るな、何も泣くやうな事はないに。（ト思入あつて、）泣くのは若しや。（ト思入あつて氣を替へ、）えゝ、宵節句ぢやと申すに、機嫌の惡い、何を泣いて居るのぢや。

玉葛　さあ是れは。（ト思入あつて、）つひにない事、きや〳〵と持病の癪が差込みまして。

四郎　何ぢや癪が起りしとか、何の癪位は何でもない事、どれ身共が押して遣はさう。

〽よろめきながら立寄るを。

玉葛　あゝもし、それには及びませぬわいなあ。

四郎　えゝ又其やうな遠慮をいたすか、夫婦の中ぢや遠慮は入らぬ。身共が斯うして直して遣はす。

ト後より玉葛をぐつと抱く。

玉葛　あゝもし、其やうな事遊ばしまして、誰ぞ茲へ參りますと惡うござりますわいなあ。

四郎　なに構ふ事があるもので、假令誰が參らうとも、そちと身共が斯うして居るを、咎める者は一人

もない。さうして癪は、どゞ何うぢや〳〵。（ト玉葛の懷へ手を入れるゆゑ、）

玉葛　あゝもし、およし遊ばしませ。

〽差込む手先を振拂ふ、はずみに銚子打ちかへし。

ト四郎醉うたる振にて玉葛の懷へ手を入れるを、拂ふはずみに、傍の銚子を打返し酒の溢れし思入れにて、

それ御覽遊ばしませ、銚子の酒がこぼれましたわいなあ。（ト手拭にてふく事よろしく、）

四郎　あゝこれはしまうた。折角呑まうと持つて參つたに、みんな疊に呑ましてしまつた。こりや誰そ居らぬか。銚子を持て〳〵。（ト手を叩く、奧にて、）

野菊　畏りました。（ト襖を明けて、野菊の腰元銚子を持ち出來り、）斯樣な事もござりませうかと、控へのお銚子へ、御前樣の御意に入るやう、お熱くなくお溫くなく、私の心のやうな、程のよいのを持參いたしました。若し御前樣お杯をお取り遊ばせ、お酌をいたしませうわいな。

ト四郎の側へ差寄るを、

四郎　誰も尋ねもせぬ事を、ようつべこべと喋べる奴ぢや。そちが酌ではうまうない。これ奧、身共に酌をいたしてくりやれ。

野菊　さあ〳〵奥様、御前様のお好みゆゑ、ちやつとお酌をなされませいなあ。

〽すゝむる野菊、玉葛が酌は取れども胸迫り、ふるふ手許の心得ず、

ト野菊すゝめて玉葛銚子を持ち、愁ひを隠す思入にて、四郎に酌を仕ようとして手先顫へるゆゑ

四郎　これ奥、なぜ其やうに顫へるのぢや。

玉葛　え、これはあの、溢すまいと存じまして。

四郎　あゝそれで顫へるのか、氣遣ひない、ぐつとつぎやれ〳〵。（ト酌をさせ、）おつと、もうよい〳〵。（トぐつと呑み、）いや甘露々々、いやもう母上のお酌と違ひ、奥の酌では又一入。おゝ酌と申せば、そちが癪は納まつたかの。

玉葛　はい、やう〳〵納りましたわいなあ。

四郎　それは重疊、然らばそちも一獻過しやれ。（ト杯をさす、）

玉葛　有難う存じまする。（ト杯を取る。）

野菊　どれ、お酌をいたしませうか。（ト銚子を取つて酌を仕ようとする。玉葛こなしあつて、）

玉葛　いや、そなたの酌ではおいしくないわいなう。

野菊　左樣なら、あの奥様も。

玉葛　恐れながら御前のお酌で。

野菊　ほい、是れは大しくじり。（ト銚子を置いて後へ下る。）

四郎　何ぢや、身共が酌で呑みたいとか。いや、可愛い奴ぢや、どれ酌をして取らすであらう。

〽銚子を取つて杯へ、半につけど胸一杯、今が夫婦の別れかと、互ひに涙こぼるゝ思ひ。

ト此内兩人愁ひを隱す思入にて、四郎酌をする、玉葛一口呑んでむせる事などよろしくあつて、

玉葛　御前樣へ御返杯を。（トさす。）

四郎　いや、返杯とは面白い。（ト杯を取る。）

野菊　今度は是非とも私が。（ト前へ出る。）

四郎　いや、そちに酌は賴まぬと申すに。

野菊　ほい、又しくじつたか。（ト後へ下る、玉葛愁ひの思入にて酌をする、四郎玉葛の體を見て、）

四郎　こりや奧、どうやら今宵は浮かぬやうぢやが、何も一興此場の肴、いつも調ぶる爪琴を、何と一曲聞かせてはくれまいか。

玉葛　御前樣の御意ながら、氣合が惡うござりますれば、今宵ばかりは。

四郎　はて心惡しうはあらうなれど、此世の別れ、いやさ、此夜の長いにほとんど退屈、是非とも一曲

所望いたす。

野菊　ほんに左様でござりまする、お氣の鬱いだ時などは、琴三味線の合せもの、お聲をお出し遊ばすとお氣が晴れると申すもの、殊に御前様の御所望なれば、是非ともお調べ遊ばしませ。（ト奥へ向ひ、）もし、どなたぞお琴をお持ちなされませいなあ。（ト奥にて、）

朝露　畏りました。（ト朝露の腰元琴を持ち出て、よろしくそれへ直し控へる。）

四郎　さあ、これにて一曲所望いたす。

玉葛　左様なれば、此場にて。

四郎　早う聞かしてくりやいの。

〽夫の望みに是非なくも、心ならねど搔きならし、（ト琴の調子をしらべ、）

玉葛　調べ拙き不束は、お許しなされて下されませいな。（ト是れより誂へ琴唄の獨吟になる。）

唄〽詩の文字を和ぐ日の本へ、よそへていはゞ七尺の、よしや屏風は越ゆるとも、思ふ心はえ越え兼ねて、別れともなき後朝に、羅綾の袂止むれど、止り兼ねたる明けの鐘、

ト下座と打合せにてよろしくある、四郎此文句に愁ひの思入。

〽謠ふ唱歌に廣繼が、明日は此身のなき事も、知らで調ぶる不便さと、浮む涙に我が顔へ懐紙

を當てゝ泣き沈む。（ト四郎懷中より紙を取出し、顏へ當て泣伏す。玉葛琴を取退け）

此場のお貞を添へる爲、拙き調べをお聞きに入れ、却つて御前の御落淚、お許しなされて下さりませ。

〽詫びる詞に廣續は、歎きを酒に紛らして、（ト四郎思入あつて）

四郎　あはゝゝゝゝ、これは又如何な事、何で詫びるに及ばうぞ、今某が落淚せしはそちが唄ひしあの唱歌、見ぬ唐土の事ながら、身につまされて、さあ、身が妻たるそちが調べ、思はず知らず感にたえ、つい落淚をいたしたわえ。

玉葛　すりや、それゆゑに、御前樣には、あの御落淚を、

腰元兩人　遊ばしましたか。

〽廣續威儀を繕ひて、（ト是れより横笛の入りし床のメリヤスになり、四郎思入あつて）

四郎　只今奥が調べたる琴の唱歌に唄ひしは、七尺の屛風を越ゆるともよも越せじ、羅綾の袂は止むるとも止まらじとは、昔唐土秦始皇帝四百餘州を切り隨へ天下を治めたまひし時、荊軻秦舞陽といふ二人の者、主人の仇を報ぜんと僞つて降參なし、荊軻六國の書圖を書したる一卷を箱に納め、まつた同意の秦舞陽は唐土無双の銘劍を携へ、是れを始皇に獻ぜんと數十丈の王舘なる玉の階

連立登り、始皇帝に對面遂げ、かの二品の寶を捧ぐる、始皇帝喜悦の餘り兩人を近く招く、荊軻心中仕濟ましたりと件の畫圖を納めたる箱に隱せし劍を取出し、秦舞陽諸共に主の敵と切り掛くれば、始皇帝大に驚き後に建てし七尺の屏風を飛越し遁れたまふ、此折柄に秦舞陽も始皇帝が召されたる羅綾の袂むずと取り、引戻さんとなしたれど袂はちぎれ、皇帝を討ち漏らしたる無念さに、荊軻怒つて後より劍を投ぐれど狙ひは反れ、鐵柱にすつくと立つ。其内多人數集り來り、無慚や荊軻秦舞陽は終に落命せしと聞く。切なる忠義の兩人が盡せし事も空しくなり、嘸や無念でありつらんと、それらの事を思ひ遣り、落涙せしも身のたくらべ。（ト思入あつて氣を替へ）あはゝはゝ、見ぬ唐土の引事をくだ〳〵しく申すのも、是れもやつぱり酒興の上ぢや、嘸そち達も睡からう、身共も睡い、許せ〳〵。

〽杯臺を枕にし、前後他愛も長々と、睡る夫に玉葛は、明日の様子を聞くからに、よしなき唱歌唄ひしと、差しうつ向いて詞なし、腰元達は氣を配り、

ト四郎酔ひたるこなしにて、有合ふ杯臺を枕にして横になる、玉葛愁ひのこなし、野菊朝露前へ出で、

野菊　これはしたり御前様、お假寐を遊ばしまして、お風をめしてはなりませぬ。

朝露　御寢所へお越し遊ばし、お床へ御寢遊ばしませ。

兩人　御前樣々々。

〽搖起せども他愛なき、樣子に妻は二人を止め、

玉葛　あゝこれ待つた二人の者、御酒の上にて御機嫌よう、御寢なつた御樣子ゆゑ、無理にお起し申しては、却つてお氣に逆らふ道理、枕を仕替へ、夜着を掛け、そつくりとしておきやいなう。

野菊　ほんに左樣いたしませう。

朝露　どれ、お屛風など立てませうか。

〽腰元達がまめやかに、運ぶ枕や小搔卷、屛風も夢の蝶番、秋の夜風や厭ふらん。

ト此内野菊朝露の兩人奥より結構なる小搔卷黑塗の枕など運び、寢て居る上へ搔卷をそつと掛け、後へ屛風を建廻す事よろしく、是れにて朝露は奥へはひる、玉葛枕を取つて、

玉葛　どれ、お枕をさせませうか。

〽夫の寢顏を見るさへも、今宵限りと玉葛が、露の淚の一雫、落ちて目覺す主人の廣纖、

ト此内玉葛四郎の側へ行き、そつと枕を仕替へさせながら、寢顏を見てほろりと泣く、是れにて四郎目を覺し、

四郎　誰ぢや、奥か。

玉葛　はい。

四郎　そちも是れにて一緒に寢やれ。

玉葛　いえ、私は。（トこちらへ來ようとする、四郎起返つて、玉葛の手を捉へ）

四郎　はてさて、そちも初心らしい、夫婦の中に遠慮が入らうか、こつちへ寄りやと申すに。

ト無理に手を取り引寄せる、是れにて玉葛は恥かしきこなし、野菊は是れを見て氣の揉めるこなしにて、耳へ唾など附け逆せる思入、四郎野菊を見て、

それに居るは誰ぢや、野菊ではないか。

野菊　はい、左樣にござりまする。

四郎　その方も氣の利かぬ、ちつと粹を通したがよい。

野菊　左樣ならお枕を、最一つ持つて參りませう。

玉葛　いえ／＼それには及ばぬわいなう。

四郎　えゝやかましい、立てと申すに。

野菊　はアいゝゝゝゝ。（ト奥へはひる。四郎氣を替へ）

四郎　やう〳〵邪魔を拂ふたわえ。（ト玉葛こなしあつて、）

玉葛　御前樣、秋の末とは申しながら、冷かな事でござりますなあ。

四郎　それゆゑそちと斯うやつて、打ち語らふもこれが限り。

玉葛　え、。

四郎　いやさ、是れから汗にならねばならぬ。

ト早き唄にて、四郎玉葛の手を取り、屛風を建廻す、跡可笑味の合方になり、襖をそつと明け野菊出來り、

野菊　ほんに御前樣となされた事が、むづかしい唐の引事、堅い事を仰しやるかと思へば、つひにない奥さまをお捉へなされてお戯れ、あんな堅いお顏をなされて不斷は眞面目でおいでなされど、やつぱり女子がお好きと見える。ほんにもう戀は思案の外ぢやといふが、それに違ひはないわいなあ。

ト四邊を見廻し、屛風の内を窺ふこなし。時の鐘早き合方になり、人音するゆゑ野菊びつくりして奥へはひる。

〽折から爰へ立歸る腰元初霜差足なし、屛風の外より聲潜め、

ト下手より以前の初霜、狀箱を抱へ、足早に出來り、屏風の外より內を窺ひ。

初霜　若し奧さま、お目覺めでござりまするか。

ト呼ぶ是れにて屏風の內より玉葛しどけなき裝にて出で、屏風の內へ思入あつて、

玉葛　あゝこれ、靜にしやいなう。（ト初霜小聲になり、）

初霜　行つて參じましてござりまする。

玉葛　おゝ大儀であつた、して父上にお渡し申したかや。

初霜　はい、慥にお手渡しいたしまして、則ち是れに御返事が。

ト狀箱を出す、玉葛手水鉢にて手を洗ひ、狀箱を取つて封印を切り、中より狀を出し開き見て、

玉葛　嘸草臥れたであらう、部屋へ行つて休息しや。

初霜　有難う存じまする。

〽と追立てやり、跡には一人玉葛が、聲を忍びの溜め淚、わつとばかりに泣き沈み、とかういらへも無かりしが、心を定め顏を上げ、（ト初霜奧へはひる。玉葛泣伏して顏を上げ、）

玉葛　今更いうても返らぬこと、少しも早う、さうぢや〳〵。

〽淚ながらに傍なる、屏風の內を伏拜み、かねて覺悟の懷劍を、抜けば銳き氷の刃、喉へぐさ

と突貫き、あつと玉切る一聲を、寢耳に聞いて廣繼が、屛風引あけ立ち出て、見れば無慚や
玉葛が、自殺の體に打驚き、

ト此内玉葛よろしくこなしあつて、屛風の内を伏拜み、有合ふ手箱より懷劍を取出し喉へ突立て苦しむ、此物音に屛風の内より四郎出て、玉葛の體を見てびつくりなし、傍へ立寄り引起し、

四郎　やゝ、こりや玉葛には狂氣せしか、何ゆゑ自殺いたせしぞ。

〽手負は苦しき息をつぎ、

玉葛　わらはが自殺いたせしは、我が夫への申譯。

四郎　して〳〵それは如何なる仔細で。

玉葛　最前あなたが母上へ、密事をお明しなされしを小蔭に立聞きいたせしゆゑ、主君の大事に替難く。

四郎　やゝ、訴人なせしか。（ト急いて言ふ。）

玉葛　さあ父新左衞門へ知らせしゆゑ、命を捨ての申譯。

四郎　やゝゝゝ。

〽尻邊にどうと廣繼が、仰天なして面色替り、（ト四郎びつくりなしてどうとなり、）
すりや我々が隱謀を、立聞きなして告げたりとか。

〽手負をむずと引倒し、（ト四郎玉葛の襟上を取つて引倒し、

ちえゝ、七人の子はなすとも、女に肌を許すなと、世の戒めも身に當る、新左衛門が娘なれど、日頃の節義に心許し、母へ密事を明せしは此廣繼が身の誤り、餌かふ犬に手を喰はれしか、訴人なしたる上からは今に討手の來るは必定、我が妻ゆゑに合體の松田兄弟兩人に、犬死さすが殘念な、思へば無念口惜しや。

〽無念のあまり廣繼が、自殺なしたる玉葛が髻摑んで丁々々、打てど返らぬ身の切刃、口惜し涙起ちつ居つ、途方に暮れて居たりける、折から一間に聲あつて、

ト此内四郎玉葛を引附け、打擲する事よろしくあつて、向うを見詰めどうとなつて無念の思入。此時上手にて、

伏屋　あいや嫁女ばかりの科ではない、其言譯は此母が、それへ行つてしまひませうわいの。

四郎　何とおつしやる。

〽見返る奥の一間より、よろぼひ出づるは伏屋、側に落散る懐劍を、取るよと見えしが我が喉へ、むざと突立て覺悟の自殺、又も四郎は打驚き、

ト二重の上手より以前の伏屋出來り、落散りある玉葛の懐劍にて喉を突き、苦しむ思入。四郎是れ

を見てびつくりなし、

伏屋　やゝゝゝ、こりや母上まで何ゆゑに、お覺悟あつての生害なるぞ。

わらはが自殺はそちへの言譯、まあ一通り聞いてたも。（ト篠笛入りの合方になり。）先君右幕下賴朝公へ、譜代恩顧の人々は、賴家公を御代に立て御家の安全計らんと、思ひ立てるは是れ忠臣、又、北條家に舊恩ある譜代恩顧の人々は、實朝公の御代になし、鎌倉天下を奪はんと思ふは同じ忠義の道、假令夫婦の情ありとも實父へ孝行お主の爲、命に替て玉葛が訴人をしたは無理ならず、越度といふは此身が深くも包む大望を、根ほり葉ほり聞立てして、嫁女に立聞きされたるがそちが不運とわらはが淺慮、是れも定まる約束と、あきらめてくれ、こりや悴。

〽嫁をかばうて姑が、我が子に詫びる老婆心、聞く玉葛はあるにもあられず、

ト伏屋よろしく思入、玉葛顏を上げ、

玉葛　えゝ勿體ない姑御さま、斯かる不孝な私を憎い奴とも思召さず、罪を庇うて下さりまするが、善にもせよ惡にもせよ、夫に附くが女子の操、辨へぬではなけれども、假令大事を仕果せても夫の命と聞くからは、どうぞお命助けたく、わらはが手より訴人して、お年寄られた姑御樣、又二つには本領安堵に御家の無事を計らはんと父へ賴みの密事の文、是れ此通り父上より、御前樣や

母上の命は父が身に替へて、時政公へ願ひを上げ、御家の安全計らんと、然も自筆の此返書、露顯なしたる上からは、御身を愼みお命を、全うなされて下さりませ。

〽手負ながらに這ひ廻り、其身の罪を詫びるにぞ、元吉四郎は聲荒らげ、

ト玉葛以前の返書を出して四郎へ見せ、詫びる思入、四郎きつとなり、

四郎　やあ思ひ立ちたる我が大望、新左衞門が執成にておめ／＼命をながらへんや。いで此上は契約せし松田の屋敷へ馳せ參じ、露顯の次第を物語り、三人心を一になし、北條家よりの討手を引受け刀の目釘の續くだけ、花々しき働きなし討死なすが武士の本懷、いで／＼最期の支度をなさん。

〽勇み立つたる折柄に。（ト四郎大小を腰にさし立上る、此時幕明の中間〇窺ひ出て、）

〇　樣子は聞いた。

〽駈け行く所を引戻し。（ト〇行きに掛るを四郎引附け、）

四郎　首途の血祭り。（ト一刀浴びせる。此時本釣鐘を打込み、玉葛伏屋苦しきこなしにて、）

兩人　此身の知死期。

四郎　思へば果敢ない、（ト伏屋を見てほろりと愁ひの思入あつて、玉葛を見てきつとなり、）憎い奴めが。

ト〇を切倒す。

へにつたと睨んで

ト四郎は刀の血糊を拭ひきつと思入、玉葛、伏屋よろしく落入る。此模樣三重時の鐘にて道具廻る。

（北條家大廣間の場）══本舞臺四間通し常足の二重、黑塗の襷欄間同じく塗框、上下共折廻し金襖正面瓦燈口、左右同じく金襖一面に三つ鱗の紋散らし、日覆より同じく金地紋散らしの大欄間をおろし、花道揚幕の所杉戶出這入り、舞臺花道とも薄緣を敷詰め、諸所に雪洞を照しあり、總て北條家大廣間夜の模樣、早舞にて道具留る。とばた〳〵になり、花道より序幕の新左衞門大小にて袴股立の近習四人前後を取卷き、つか〳〵と出來り花道に止り、

近一　やあ假令御老臣なればとて、

近二　夜陰と申し御座の間近く、

近三　押して御出仕は叶ひませぬ。

近四　只今奥へ伺ふ間、

近一　いざお詰所に。

四人　お控へなされい。

新左　いゝや詰所に控へ申さぬ。お取次を待たずとも、君の大事に猶豫はならぬ、留め立ていたさず通

し召されい。

近一　いゝや其儀は罷りならぬ。

近二　後日にお咎めある時は、

近三　宿直なしたる臣等が越度、

近四　たつて出仕を召さるれば、

近一　御老臣とは、

四人　言はせ申さぬ。

新左　やあ數代恩顧の新左衞門、御家の法式辨へ居れど、猶豫ならざる火急の場合、お手前方の難儀に相成る迂濶の事を仕出さんや、たつて留立て召さるれば、御近臣とて容赦はならぬ、いざお手向ひな仕つらん。

近一　やあ無謀の振舞、それ何れも。

トやはり早舞にて近習四人新左衞門に組附くを、左右へ投げ退けつか〳〵と舞臺へ來る、是れを四人追駈け來つて、又組附くをちよつと立廻つて、新左衞門眞中に扇を構へきつと見得。此時奥にて、

時致　やあ〳〵仰々しい、者共控へい。

トこれにて四人はッと左右へ別れて下に居る。時計の音になり、正面の瓦燈口より時政、更けたる棒茶筅、白の着附御忌衣小さ刀好みのこしらへにて、子役の小姓一人刀を持ち、若い衆の近習褥脇息を持ち附添ひ出で、時政よろしく住ふ。新左衛門是れを見てはッと平伏なし息の切れる思入よろしく。時政新左衛門の體を見て、

誰そあるか、新左衛門に湯を與へい。（ト下手にて、）

茶道　はあゝ。（ト茶道一人茶碗を持ち出で、新左衛門の前へ持ち行き、）新左衛門殿、君のお指圖、お湯を下し置かれますぞ。（ト是れにて新左衛門頭を上げ、）

新左　はゝッ、有難く頂戴仕つりまする。（ト湯を呑む事よろしく、時政思入あつて、）

時政　只今奥にて承はれば、何か火急の變あるよし、して／＼何事の出仕なるぞ。

新左　はッ、斯かる夜陰に出仕を遂げ、館を騒がせ奉つるは恐れ入りたる事ながら、今宵一夜を過されぬ御一大事に候ゆゑ、止む事を得ず新左衛門、押して推參仕りましてござりまする。

時政　むゝ、さもありなん、予が片腕とも思ふ其方、よも常事にはあるまじ。して一大事の趣きは。

新左　はッ、他聞を憚る密事にござれば、恐れながらお人拂ひを、冀はしう存じまする。

時政　おゝ承知いたした、近習を始め茶道共次ぎへ立て。

近一　ではござりますれど、
皆々　夜陰と申して。（ト氣遣ふ思入。）
時政　いや苦しうない、立てと申すに。
皆々　はあゝ。（ト是非なく上下へ別れてはひろ。時政四邊を見廻し、）
時政　新左衞門近う。
新左　はッ。（トおづ〳〵と少し前へ出る。）
時政　いや、苦しうない、もそつと進め。
新左　はゝはッ。（ト前へ進み出て平伏なす、時政思入あつて、）
時政　他聞を憚る密事と申すは、如何なる仔細ぢや申し聞けい。
新左　はッ、火急の場合にござりますれば、口でまだ〳〵申し上げんより、不束には候へども、娘が方より遣はしましたる、君御大事の此密書、いざ御披見下さりませう。
ト懷中より以前の文を出し時政へ捧げる、時政手に取り開き見てびつくりなし、
時政　汝が娘玉葛は、元吉方へ嫁せしと聞きしが、扨は夫の隱謀を、一命捨て注進なせしか、はて天晴なる娘が心底、流石は忠臣汝が胤、彼れが自殺は時政が命に拘る守り神、仇には思はぬ過分に思

ふぞ。

トよろしく思入し

新左　こは冥加至極もなき御上意、右に附き我が君へ、願ひ上げ度き一儀と申すは、娘が訴人の功に依り何卒元吉廣繼が、一命お助け下さらば、此世を去りし娘が菩提、是れに過ぎたる事やあらじ、此儀偏に拙者めより、願ひ上げ奉つります。

時政　おゝ其方が願ひと申し、娘が菩提に相成る儀なれば、望みに任せ罪科を許し、助命の沙汰に及ぶべし、其儀に於ては安堵いたせ。

新左　はツ、早速の御承引、有難い仕合せに存じまする。

時政　さりながら斯かる大義を企つるには、一味荷擔の者共が多くあらんも計られず、是れなる密書に認めある、松田兄弟始めとして一味の者共殘らず召捕り、拷問に掛け白狀させよ。

新左　はツ、我が君の上意の如く、猶豫ならざる一儀にござれば、若し逃去らんも計られずと、松田が屋敷は十重廿重に、愚臣が家來に申し附け、遠卷きいたさせ置きますれば、君の上意を合圖となし、早速召捕り拷問にかけ、吟味いたすでござりませう。（ト時政感心の思入にて）

時政　むゝ、何時に替らぬ汝が忠節、行屆きのほど感服いたす。

新左　はッ、恐入り奉つりまする。（ト時政作の文を再び取上げ、思入あつて）
時政　只不便なは汝が娘、愛女なりと承はりしが非命の最期に嘸かしと、心中の程推察いたす。
　　　トほろりと思入、新左衞門思入あつて、
新左　こは有難き御懇の御意、近頃女々しき言上ながら、愚昧なる料簡にて一命に替へ我が君へ、御注進の申せしは、聊か彼女めが出來しましてござりまする。（トほろりと思入）
時政　おゝ出來したとも〳〵、彼女が注進いたさずば、予も一命の危ふかりしを、斯かる忠臣あるゆゑに忽ち隱謀露顯なせしは、我が運命の盡きざる所、頓て成就の期に至らば、厚く菩提を弔ひ得さすぞ。
新左　其御上意が如何ばかりか、家の面目愚臣が大慶、やがて四海は我が君の。
　　　ト是れにて時政につたりと思入あつて、
時政　此手に握るは瞬くうち、
新左　いや、御高運にござりまするな。
時政　はて、悦ばしい、（ト脇息へ凭れるを木の頭）事ぢやな。
　　　ト兩人氣味合の思入よろしく、時計の音にて、
ひやうし　幕

ト時の鐘にてつなぎ直に引返す。

(松田屋敷書齋の場)——本舞臺三間の間中足の二重本緣附き、上手一間塗骨障子屋體、正面に誂への結構なる佛檀、扉締切りあり。此上手一間地袋戸棚、此上に書物の箱などよろしく取並べ、下の方銀襖、上下柴垣、日覆より松の釣枝、總て松田屋敷書齋の模樣。前面一面障子建切り、爰に宅助足輕のこしらへ、菖蒲革の袴股立にて六尺棒を持ち立掛り、中間一人提灯を持ち、先きに立ち居る。此模樣中の舞にて幕明く。

宅助 火の廻り〳〵、八つでございく〳〵。(ト六尺棒にて地を叩く事よろしく)

中間 もし宅助さん、わしは此頃來た新參だから、近所の樣子は知らないが、あの太鼓は何だらう。

宅助 あれは隣屋敷の御隱居が大層に能が好きで、月のうちに二三度位は夜更も構はず謠曲をうたひ、囃子方なんぞを呼びあげて、能狂言を遣りながら酒盛りがあるさうだが、好きな道で面白いかは知らぬが、先づおれなどに言はせると、能などを舞ふよりは藝者でも呼び集めて、かつぽれでも踊る方が酒の座敷では面白からうが、いや物好きな人もあるものだ。

中間 いや、又わしなどは踊りたくも謠ひたくもないが、煮込みのおでんか湯豆腐で、ぐつと一杯盛つ切りたいばかり、別に慾張つた事はない。

宅助　其呑みたいのは貴樣達も此おれも同じ事だが、七つの時を廻らぬ内は、酒はあつても始められねえ。

中間　それぢやお酒があるのかえ。

宅助　實はさつきお上からお手當の御酒だといつて、二升ばかり下すつたが、宵ッから呑ませると醉つてしまつて困るから、呑みたいおれまで我慢をして、大部屋の隅へ忍ばせて置いたが、最う少しだから辛抱しろ。

中間　いやそりやあ殺生といふものだ、あるなら早く呑ませてくれ、酒は呑んでも呑まなくつても、勤める所はちやんと勤める。

宅助　はて、手前ばかりが勤める氣でも、下の部屋の岡平なんぞが、そこへ一枚飛込んで見ろ、只さへいゝろれつが廻らねえから、時廻りなどはそつち退けだ。

中間　そんならどうぞ内證で、冷酒で一杯呑まして下さい。

宅助　またあきらめが附かねえか、さけ〳〵意地の汚ねえ奴だ。（ト中間先きへ立つて）

中間　早くお酒に火の廻り。

宅助　意地の汚ねえ、八つでござい〳〵。

と兩人下手へ這入る。時の鐘打上げ、次第になり、下座にて夜討曾我の謠曲になる。

謠曲〽其名も高き富士ケ根の〳〵、御狩にいざや出うよ。

ト是れにて正面の障子を引拔く、内に前幕の左近袴着流しにて、短檠を照し見臺を前に控へ、讀書の體にて住ひ居て、

左近　好める道とは言ひながら、今夜も最早夜半過ぎ、只今八つの廻りなるに、未だ隣家の御隱居には謠曲を謳うてござる樣子、番數多き其中に、只今謳ふ謠曲のあの文句は夜討曾我、斯く我々兄弟が大望を企てんと、心を勞する其中へ、いや夜討曾我とは面白いなあ。（トよろしく思入、此時上手屋體の内にて、赤子笛聞えるゆゑ）今宵に限り我が悴、未だ小兒の身ながらも、乳母の添乳で寐兼ねる樣子、善惡共に明日は、一命捨てる某ゆゑ、親子一世の別れを惜しみ、蟲が知らせるものなるか、はて爭はれぬものぢやなあ。

ト合方になり、上手屋體より柵乳人のこしらへにて、抱兒を抱いて出來り、下手に住ひ、

柵　これは〳〵御前樣には、未だ御寢遊ばしませぬか。

左近　おゝ乳母か、身も臥せらうとは存ぜしが、隣家の謠ひが耳に附き、枕に附けど寐られぬゆゑ、是れにて書見をいたし居つたわえ。

柵　ほんに左樣でござりまするか、いやもう鼓や太鼓の音ゆゑか、若樣にも御寢ならず、遂になうおむづかり遊ばすので、ほとんと乳母も困りますわいなあ。

左近　おゝ左樣か、それは嘸かし困るであらう、どれ身共が抱いて遣はさう。（ト左近抱兒を抱取る、是れにて抱兒泣くゆゑ）おゝたがよく／＼。（トよろしくいぶり附ける、抱兒泣き止むゆゑ、左近抱兒をぢつと見て）あゝ、そちは如何なる宿業にや、我が嫡子と生れながら、藁の上より母に別れ、僅か二ケ年經たざるうち、又もや父に。

柵　えゝ。（ト聞咎める、左近氣を替へ）

左近　いやさ、そちが乳にて此やうに、おとなしう成人なせしが、果報拙き生れゆゑいとゞ不便が増してならぬわえ。（ト愁ひの思入、柵抱兒を見て）

柵　若し御前樣、今までおむづかりの若樣が、御前樣にお抱かれ遊ばすと、さつぱりお泣き止みなされまして、あれ、にこ／＼と餘念もなく、笑うておいで遊ばしますわいなあ。

左近　おゝ、笑うて居るか。（ト抱兒をあやしながら）父に抱かれて悦ばしいか、おゝさうか／＼。（ト又思入あつて）あ、明日の歎きも、いやさ、今日あつて明日なきが、有爲轉變の習ひなれど、無心の内は何事も知らで過行く後生樂、實に幼兒は佛ぢやなあ。（ト是れにて又赤兒笛になり）又泣き居るか

おゝたがよく〳〵。（トだましても泣き止まぬゆゑ）斯樣な折はどうも叶はぬ、こりや乳母、乳房でもおてがうてくりやれ。

柵　どれ、お出し遊ばしませ。（ト抱兒を抱取り、乳を含ませろ思入、是れにて泣止むゆゑ）やう〳〵お泣止みでござりますわいなあ。

左近　どうやら睡氣が附きし樣子、奥へ伴ひ、寐かしてくりやれ。

柵　畏りました、どれ添乳して上げませうか。

ト柵抱兒を抱き、上手屋體へはひろ。又謠曲になり、

〽名殘りを殘す我が宿の〳〵、垣根の雪は卯の花の。（ト左近是れを聞き思入あつて）

左近　あの謠ひにもある如く、名殘りを殘す我が宿の心掛りはあの悴、明日は世になき某と知らずに笑ふ不便さを、捨てゝ行く身も忠義の爲、思ひ立つたる大望を、首尾よく成就なす時は、悴は元より從類まで助け置かぬが必定ゆゑ、品に依つたら乳母諸共、今宵の内に何れへなりと、落して遣るが一つの安堵、こりや一思案いたさねばならぬわえ。

ト思案の思入、合方替つて襖を明け、奥より前幕の主水、やはり袴着流し大小にて出來り。

主水　兄上、是れに御出でなされましたか。

左近　おゝ弟、そちも未だ寐ねざりしか。

主水　臥せらうとは存ぜしが、只今打ちしは八つの時計、最早今宵も二時なれば、枕に附く間はござるまいと、御密談に參つてござりまする。

左近　いかさまそちが言へる如く、首尾よく本意を達しても、又は非運に仕損じても、兄弟共に一命は其場に於て捨てる覺悟、さすれば數代相續せし松田の家も今宵限り、幸ひ家來も臥せりし樣子、誰憚る者なければ、御先祖の御位牌へ御暇乞ひ仕らん。

主水　何さま左樣いたしませう。

ト誂へ本調子の合方になり、兩人立上り、正面の佛壇の扉を開けば、内に大振りなる定紋の附きし位牌大分にある事、其外佛具などよろしく飾りあり、兩人左右へ別れ、佛壇へ向ひ合掌なして、

左近　秋山院殿松露朝林大居士、抑々保元の亂より今元曆の治世まで、源家恩顧の家として七代續きし松田の家名、此朝光が代に至り空しく家を絶すこと御先祖へ對しては、甚だ不孝に候へども、主君の御爲二つには武門の意地と思召され、不孝の罪は御赦免あつて本意を遂げし其後に、冥土の鬼となる我々、父のまします其國へ迎へ取らせてたびたまへ。

主水　最早我々兄弟も、明日を最期と仕つれば、今生にての御回向も、今宵限りに候なり。

兩人 南無阿彌陀佛々々。（ト兩人よろしく、回向をなす。此時下座にて謠曲になり）

〽今までは其主を、守り佛の觀世音、此世の緣なきとても來世を助けたまへや。

ト是れを聞き主水思入あつて、

主水 むゝ、時に取つてのあの謠は、筐送りの夜討曾我。

左近 如何にも隣家で先刻より、深夜に謳ふ謠曲は、取りも直さず我々と、同じ思ひの曾我兄弟。

主水 十八年の時を經て、富士の裾野に荒人の、名をば揚羽の蝶千鳥。

左近 それは孝子の父の讐。

主水 これは忠義の君の讐。

左近 其勇猛を狩座に。

主水 富士より高き君恩を。

左近 報ずる時節、佛檀の。

主水 位牌に附し紋盡し。

左近 はて面白き、

兩人 幸先きぢやなあ。

〽既に此日の入相の、鐘もはや聲々に、諸行無常と告げ渡る。

ト兩人よろしく思入、此時花道の揚幕にて、竹法螺の音どん〳〵かすめて打つ。是れにて兩人顏見合せ、向うへ聞耳立て、

左近　はて心得ぬあの太鼓、斯かる夜陰に法螺の音は、正しく人數を集むる樣子。

主水　こりや常事でござらねば、遠見いたして參りませう。

左近　おゝ大事の前の小事ゆゑ、隨分共に心を附けよ。

主水　はツ、畏つてござりまする。然らば兄上。

左近　いそふれ弟。

主水　はツ。（ト二重より飛下り、袴の股立を取り、きつと見得。是れにて又謠ひになり。）

謠曲〽よせかけて打つ、白浪の音高く、鯨波を作つて騒ぎける。

ト右鳴物にて、主水一散に花道へはひる、是れにて段々烈しくなるゆゑ左近きつとなつて、

左近　次第々々に近附くは此近邊に捕者あつてか、又は我々兄弟が、大望露顯に及びしか、心ならざる事共ぢやなあ。

ト向うを見込み、案じる思入。ばた〳〵になり、花道より、以前の宅助一散に出來り　左近を見て、

宅助　御前樣、一大事でござりまする。(ト顚へながら下に居る)

左近　誰かと思へばそちや宅助、一大事とは氣遣はし、して／＼樣子は如何なるぞ。

ト急いて言ふ、宅助顚へながら、

宅助　何か樣子は存じませぬが、只今丁度八つ半い廻りに出掛ける表の方、追々近附く太鼓の音、迷兒にしては大袈裟と、御門の扉の隙間から覗いて見れば大騷動、ぴか／＼光る拔身の槍で凡そ人數は千人ばかり、此お屋敷の四方を取卷き、今にも中へ討入る樣子、こりや常事ではござりませぬが夢なら早く覺めてくれ。桑原々々萬歲樂。(トがた／＼顚へながら言ふ、左近思入あつて、)

左近　なに千人程の人數にて、屋敷の四方を取卷きしとな、して／＼人數は如何なる出立、紋所をば見屆けたるか。

宅助　紋は何でも眞黑出立、形は何でも三角でござりまする

左近　なに、三角の形と申すは。

宅助　へい、富士の山を見るやうに、ぴか／＼と光りまして。

ト顚へながら分らぬ事をいふゆゑ、左近じれ込む思入にて、

左近　え、其方では相分らぬ、今一應見屆け參れ。

宅助　どういたしまして、それには及びませぬ。（ト左近向うへ思入あつて）

左近　あゝこれ、弟は如何せしか、早く樣子が聞きたいものぢや。

（竽曲へ味方の勢はこれを見て〳〵。

ト向うを見込む、ばた〳〵になり、花道より以前の主水引返して走り出來り、

主水　兄上、ちえ、殘念にござりまする。（ト舞臺下手にて拳を握り、向うへ思入）

左近　なに、殘念とは心許なし、若しや我々兄弟が、大望露顯にあらざるや。

主水　如何にも只今物見いたせば、四方を圍む多人數は、皆北條の兵隊にて、軍慮に明るき古老の臣、新左衞門が大將にて、當所へ討手に向ひし樣子。（ト是れを聞き宅助びつくりなし）

宅助　こりや斯うしては居られぬわえ。（ト狼狽て下手へ這入る、左近きつと思入あつて）

左近　扨はいよ〳〵我々が陰謀露顯なしたるか、それに附けても新左衞門、當家へ討手に向ひしは、何とも以て心得ず。

主水　若しや舅の緣により、一味荷擔の元吉が、訴人なせしも計られず。

左近　元吉四郎に限りては、左樣な二心はあるまじと、口外せしが我が誤り

主水　今二時を過しなば、大望成就なすべきに。

左近　武運拙なき此露顯。
主水　是れも誰ゆゑ、廣繼ゆゑ。
左近　思へば無念。
兩人　口惜しやなあ。

ト兩人拳を握り向うへきつと思入、ばた〳〵になり奧より以前の柵抱兒を抱きて出來り。

柵　御前樣、樣子は奧にて承はりました。して若樣のお身の上は、如何いたして落延びませう。
左近　えゝ、此期に及んで如何ならうぞ、斯くなる上は是非に及ばぬ、未來は一蓮托生なるぞ。

トばた〳〵にて、又宅助出來り、

宅助　さあ柵どの、お逃げなされい、不斷こつそり夜遊びに出掛ける裏の藪傳ひ、直に後の山を越し逃げる方なら此方の得手もの、さあ〳〵早く支度だ〳〵。（トがた〳〵顫へてゐる、左近思入あつて）
左近　むゝ、三つ兒に淺瀨、然らば柵。
柵　左樣なれば御前樣。
主水　さゝ片時も早く落ちてくりやれ。（ト柵思入あつて）
柵　とはいへ是れが。

ト涙ながらに抱兒を左近に見せる、左近抱兒を見て愁ひの思入あつて、氣を替へ、

左近　早く行け。

柵　はツ。（ト行きに掛る、爰へ捕手一人窺ひ出て）

捕手　それを遣つては。（ト柵に掛るを左近立廻つてぐつと引附ける、宅助柵の手を取り）

宅助　さあ、斯う來さつしやい。（ト兩人下手へ這入る。左近主水是れを見送り、思入あつて）

主水　是れにて身共も、一つの安堵。

捕手　何を。

ト振り解いて掛るを左近の方へ遣る、左近ちよつと立廻つて捕手を見事に切下げる。是れを切つかけ、にどん〲烈しくなり、捕手大勢槍を持ち出來り、兩人を取卷き、

捕手大勢　動くな。（ト槍を突き附ける、兩人よろしく身構へ）

左近主水　こは何ゆゑの此亂暴。

○　やあ、何ゆゑとはしら〲しい、汝等兄弟惡事を企て、時政公を討たんとなせしも、

□　元吉四郎の内室より、北條家へ知らせしゆゑ、陰謀露顯いたしたれば、

○　遁れぬ所と、

皆々　覺悟いたせ。（ト是れを聞き左近無念の思入あつて）
左近　すりや元吉が訴人にて、陰謀露顯なしたるとか、斯くなる上は最早これまで、弟卑怯な振舞いたすな。
主水　言ふにや及ぶ朝春が、一世の働きお目に掛けん。
左近　ならば手柄に、
兩人　搦めて見よ。（ト兩人きつと見得）
皆々　何を小癪な。
謠曲〽あな物々しやおのれらよ、先に手並は知るらんものを、と、太刀取直し立ちたる氣色、褒めぬ人こそなかりけれ。
ト是れよりどん／＼烈しく、入亂れの立廻りになり、主水は大勢を追つて下手へはひる。是れを左近見送ろ、爰へ捕手兩人窺ひ寄つて、
捕手兩人　覺悟。（ト槍にて突いて掛るをちよつと立廻つてよろしく引附け、左近思入あつて）
左近　思へば今宵隣家にて、曾我の謠曲を謳ひしは此身に取つて本望の、幸先よしと悦びしが、打つて變りし夜討曾我。

捕手　何を。(ト振解いて掛るを又立廻つて)

兩人　皐月の末にあらねども、槍の穗先の烈しきは篠を束ねし敵の中、いで血の雨を。(ト兩人を見事に切り倒すを道具替りの知らせ)降らせてくれん。

トきつと見得、どん／＼にて道具廻る。

(松田屋敷奧庭の場)＝本舞臺一面の平舞臺上下網代塀、正面奧庭の遠見、富士と見たる築山、假家と見えたお茶屋などよろしく書割り、所々に紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、總て松田屋敷奧庭夜るの模樣、爰に主水大童襷掛け手疵を負ひたるこしらへにて、大勢の捕手を相手に立廻り搦んだる見得、どん／＼にて道具留る。と奧より謠への鳴物になり、主水大勢を相手に仕拔の立廻りあつて、トゞどん／＼にて皆々を花道へ追込みはひる。跡早笛になり、上手より左近大童になり、大勢の捕手を追つて出來り、大まくしの立廻りあつて大勢を左右へ切倒し、左近眞中にて刀を突いてほつと思入此時本釣鐘を打込み、左近息の切れる思入にて、刀の紅糊にて喉を潤す事あつて、

左近　雲霞の如き兵卒共、大半切つて捨てたれども、我も數ヶ所の手疵を負ひ、最早運命これまでなれば、最期を遂げんと思へども、この弟は如何せしぞ。(ト捕手一人窺ひ寄つて切つて掛るを立廻りながら)弟やアい、朝春やアい。(ト向うへ思入あつて呼ぶ。又捕手一人窺ひ寄つて、左右より切つて掛るを立廻

つて切倒し）呼べど答へのあらざるは、最早弟は最期を遂げしか、最う此上は。

ト左近覺悟の思入。ばた〳〵になり、下手より主水血刀を引提げ出來り、

主水　兄上、是れにおいでありしか。

左近　おゝ弟、そちも未だ存命なりしか。

主水　御覽の如く某も、數ヶ所の深手を負ひたれば討死とは存ぜしかど、最期を共にせんものと、あなたのお在所爰かしこ、尋ね慕うて斯くの仕合せ。

左近　おゝよくぞ慕うて參りしぞ、言合さねど某も、屍を一つにせんものと、そちの行方を尋ねて居つた。

主水　然らば後詰の來らぬうち。

左近　いで潔く。

兩人　最期を遂げん。（ト兩人刀を逆手に取直す、此時向う揚幕にて）

四郎　あいや、御兩所暫く。（ト聲を掛ける、是れにて兩人きつとなり）

左近
主水　やゝ、あの聲は。

トどん〳〵烈しく、花道より、ばた〳〵になり、前幕の四郎、やはり大童襷鉢巻凜々しきこしらへに

て捕手兩人を相手になし、切り結びながら出來り、花道にて兩人を見て、

四郎　朝光殿朝春殿、御最期暫くお待ち下され。

兩人　何と。

ト四郎立廻りながら舞臺へ來り、兩人を切倒す。左近主水、四郎を見てきつとなり、

左近　やあ、汝は元吉廣繼ならずや。

主水　訴人の返報、覺悟いたせ。（ト兩人双方より切つて掛る、四郎立廻つて双方をきつと留め）

四郎　逸まりめさるな御兄弟、密事の大望露顯なし、數多の捕手來りしは、舅の因みに某が訴人せしかと御疑念あらんが、全く以て左にあらず、先づ〳〵お刀お引き下され。（ト是れにて兩人刀を引く、四郎下に居て）先刻拙者が邸宅にて密談なせし一大事、母が漏れ聞きひそかの尋ね、一期の別れにまつかくと忠義の次第物語りしを、妻玉葛が立聞きなし父新左衞門へ告げしゆゑ大望露顯にこの討手、されば拙者が聟舅の因みによつて訴人せしかと、御疑念あるは是れ必定、せめてもの身の言譯、自殺なしたる玉葛が首級を持參いたしたり。（ト腰に結び附けし包みより前幕の玉葛の切首を出し）我も御兩所諸共に、最期を一つにせんものと、群がる敵を切り拔け〳〵、馳附け參りし此場の潔白、是れにて御疑念お晴らし下され。（トよろしく思入）

左近 むゝ、扨は貴殿の內室より、事の露顯なしたるか、斯くなり行くも武運の末、

主水 千悔なすとも是非もなし、最期を共にいたされよ。

四郎 すりや、御疑念は晴れましたか。

左近 貴殿の誠心存じ居れば、何しに疑ひ申さうぞ。

四郎 ちえゝ忝けない、其一言、

左近 いで此上は三人共、

三人 最期を共に。

ト左近眞中に、上手に四郎、下手に主水よろしく並び、刀を腹へ突立てる、其時上手にて、

新左 あいや各々、引廻すこと暫く待つた、古郡新左衛門俊家、申し聞かする事こそあり。

三人 やゝ何と。

ト大小の入りし合方になり、上手より前幕の新左衛門胸鎧好みのこしらへにて出る、跡より捕手四人附添ひ、以前の柵抱兒を抱きしまゝ腰繩にて出來り、新左衛門は上手床几にかゝる、捕手二人柵を引立て下手へ控へる、左近此體を見て、

左近 やゝ、落しやつたる乳母柵、倅諸共擒となりしか。

新左　其驚きは尤も至極、女童を新左衞門擒にいたす所存はなけれど、我が娘玉葛が訴人に依つて時政公、危き大難遁れたまへば、娘が訴人の功に依り聟廣繼へ助命の御沙汰、其甲斐もなく武道を磨き共に最期を遂げたる上は、早や元吉の家斷絶、まつた松田兄弟も露顯の上は改易なれど、幸ひ手に入る此小兒、新左衞門が守り育て、松田元吉兩家の家名取立てんが返答如何に。

左近　やあ愚なり新左衞門、大望露顯の上からは元より家名斷絶はかねて覺悟の我々三人、敵と目指せし時政が、臣下の汝に我が悴、守り立て貰ふ謂れなし。

四郎　ほゝお、よくぞ言はれし朝光殿、我が子の愛に溺れざる天晴丈夫の貴殿が魂。

主水　擒になせし其小兒、命を取れよ新左衞門。（ト此時　柵　前へ出で）

柵　あいや申し御前樣、敵へ擒となりし上は生きて詮ない和子樣ゆゑ、直に其場で刺違へ自殺をせんといたせし所、新左衞門樣の御内意には此和子を守り育て、賴家樣の臣下となし、お家の跡目を取立てんとお情厚きお詞に、ついほだされて此繩目。

新左　保元平治の亂れには彌平兵衞宗清に、源家の公達三人まで助けられたる例あれば、今某に此小兒一命を救はれしとて、後の恥辱といふにもあらず、斯かる例を會得なし、最期を遂げよ廣繼朝光。

四郎　はゝッ、斯くまで厚き情の詞、無足になすも本意ならねば、其意に任せ松田氏。

左近 然らばよしなに頼むは忰。

新左 心殘さず。

三人 いでや冥土へ。（ト是れにて三人一緒に引廻す事よろしく、此時赤子笛になり、新左衞門思入あつて）

新左 あゝ、蟲が知らすか。

柵 えゝ。（ト聞き咎める。新左衞門氣を替へ）

新左 勝鬨。（ト扇を開くを木の頭）勝鬨。

ト是れにてぢやん〳〵、後にてエイ〳〵オゝ、、の聲よろしく。四郎、左近、主水の三人は喉笛を掻き切り落入る。柵は抱兒をいぶり附ける。此模樣本釣鐘の送りにてよろしく

ひやうし 幕

三幕目

紀州紀の川の場

〔役名＝佐々木四郎高綱、土肥彌五郎兼近、谷村小藤次、獵人九郎作、横須賀平太景宗、日下部運平、百姓四人、安達掃部之助亘任。高綱妻篝火、同一子大太郎。〕

（紀州紀の川の場）＝本舞臺正面上手一間、下手二間、棕櫚伏せの高土手、眞中誂への土橋、下手土手の前に三間常足同じく棕櫚伏せの土手、土橋の下上手へ流れの浪布、上手蘆原にて見切り、下手藪疊

後紀の川の流れ在體の遠見。下手よき所に稻を掛けし松の立木。日覆より同じく釣枝、總て紀州紀の川の體。四人脚絆草鞋百姓裝にて、竹槍鐵砲を持ち立掛り居る、波の音竹法螺の音にて幕明く。

○　これ田五作、どういふ譯か譯も聞かず、喰ひ醉つて寐て居た所を、引張られて出て來たが、何で毎日鐵砲や竹槍を持つて歩くのだ。

△　さつきあれ程おら達が譯を話して聞かしたに、醉つて居て知らねえのか。

○　氣の毒だが最う一遍、どういふ譯か聞かして下せえ。

△　譯といふは外でもねえ、先達て信州から九度山村へ越して來て、以前眞田の與市とやらが、柄絲に打つたといふ、眞田の紐を内職に打つて居る痩浪人。

□　見た所は阿房に近く、利口に遠い浪人だが、元は信州上田の城主で、佐々木の四郎高綱といふ豪い人だといふ事だ。

◎　戰に掛けては鵯越を逆落しにした源氏の大將、義經公に勝るとも劣らぬ程の軍師とやら。

○　其佐々木とやら正木とやら、そんな事はどうでもいゝが、おら達が此やうに竹槍や鐵砲で、何の爲に歩くのか、其入譯が聞きたいのだ。

□　これもやつぱり今言つた、佐々木どのから起つた事だ。

○手前達も分らねえ、何時まで言つても同じ事だ、早く筋を聞かして下せえ。

△筋といふのは外でもねえ、御領主から竊のお觸れ、今言つた佐々木どのが眞田の紐を内職にかすかな暮しをして居るも、深い巧み事と、目串が附いて居るゆゑに。

□高野山の裏手から狒が里へ出て人を喰うてならぬゆゑ、鐵砲で打殺せとお觸れの出たは表向き。

◎今いふ佐々木を逃さぬやうに、出口々々を固めの人數、怪しい事でも嗅ぎ附けて、訴へ出ればしつかりと御褒美になる事だ。

○それで樣子がさらりと分つた、斯うして槍や鐵砲を擔いで歩くも今言つた、佐々木とやらを逃さぬ爲か。

△これさ大きな聲をするが、何處にどういふ人が居て、聞いて居まいものでもない。

△いや誰が聞いても大丈夫、其佐々木といふ人は己が家とは軒並び、不斷樣子を見て居るが中々軍師などゝいふ利口な所は少しもない、僅かな手間の紐を打ち、間がな隙がな釣に出て、近所で名代の怠け者、聞けば女房も出たとやら、又出したとやら噂あれど、恐れて餘所ながら見張りをするは無駄な事だ。

□それだやあ佐々木といふ人は、今ではたゞの人になり、戰などをするやうな、そんな氣遣ひは少

しもないか、

◎　さう聞く上は此やうに、出口を廻るも入らぬ事、角の酒屋で息つぎに、盛ッ切りを一杯遣らうか。

△　一杯位はいゝけれど、今日は見張りに御領主から、土肥樣と横須賀樣が爰等近所を廻つてござれば、どろんけんに醉でもすると、又お目玉を喰ねばならぬ。

○　少々澁を喰はうとも、酒ばかりは呑まずに居られぬ。

□　戰は眞平御免だが、酒ならおれも一の味方だ。

◎　さあ〳〵早く片足あげ、小ぜり合を初めよう。

△　あゝ、幾ら留めても多勢に無勢。

□　叶はぬ事と斷念めて、

○　野暮を言はずと味方に附きねえ。

△　仕方がねえ、降參仕ようか。（ト右の鳴物にて、わや〳〵と下手へはひる。時の鐘床の淨瑠璃になる）

〽秋雨に水嵩增る紀の川も、岸の柳の枝川へ水も二筋別れ道、千種の花に餘念なき和子を伴ひ

小藤次が、道の邊に佇みて、

ト此内波の音をあしらひ、上手橋の上へ小藤次一本差し草履にて、木綿絲を束にしたを肩に掛け、大

太郎同じくやつし裝、草履にて草花を持ち出來り、二重の上にて、

小藤　若し和子樣、此絲を持つて歸りませぬと、旦那樣の御内職眞田打が出來ませぬ、早くお歩きなさりませ。

大太　何其やうに急がずとも、父樣は紀の川へ釣に行くとおつしやつたから、家にはおいでなさるまい。

小藤　凡そ世の中に釣ほどな面白いものはないと、間がな隙がな竿をかたげ、此紀の川の川縁で釣ばかりしてござりますが、申さば益ない殺生ゆゑ、よい加減になさればよいが。

大太　幾らそちが言やつたとて、釣はお止めなさらぬから、決してお留め申さぬがよい。

小藤　斯ういふ時には奧樣がお側においでなされたら、少しはお止りなされませうが、鬱陶しいと禿の宿の佐五兵衞どのへ跡の月からお預けなされ、跡には是れなる和子樣と口不調法な小藤次ゆゑ、お留め申す事もならず、扨て困つた事ではある。（ト此内合方にて大太郎は下の二重へ下り、小石を拾ひ川へ打込み居る、小藤次是れを知らず）や、この和子樣は。

〽ぴつくりなして四邊を見廻し、（ト小藤次あたりへ思入あつて）

もう川端へかけ拔けて、惡戲をしてござりますか、やれ〳〵遣瀨のない事だ。（ト大太郎の側へ來り）何を惡戲をなされまする。

大太　此紀の川へ石を投げ込み、水の深さを計るのだ。

小藏　口功者な事おつしやつて、二町切りとか子供のいふ石投げでござりませう、さあ〳〵早くござりませ。

大太　もう一つ投げさしてくりやいの。

〽小石を川へ投げ込んで、淺深探る向うより、斯くとも知らぬ篝火が、親子の緣も淺瀨川、堤傳ひに歩み來て、

ト此内波の音、大太郎小石を拾ひ川へ投げ込む、小藤次捨ぜりふにて是れをせり立て居る、花道より篝火屋敷女房やつし好みのこしらへにて出來り、花道へ留り思入あつて、

篝火　今まで晴れし靑空も、見る間に曇る雨催ひ、替り易きが世の常か、思ひ掛けない心替りに、科ない此身に離別狀、幾度となくお詫びなせど聞き入れのない夫の片意地、只さへ秋は物憂きに、乾く間もなき袖の露、味氣なき身の行末ぢやなあ。

〽かこち涙にたどり來る、川邊に思はず行き逢ひて、

ト篝火よろしく思入、かすめし波の音にて舞臺へ來り、小藤次と顏見合せ、

そこに居やるは、小藤次か。

小藤　これは奥様でございますか。

篝火　よい所で逢うたわいの。

小藤　先づ〱是れへ、

〽身を謙り敬へば、大太郎は小藤次の、小蔭へ隠れ身を潜め、

ト小藤次篝火を上手へ通し辭儀をなす。大太郎篝火を見て顔を背け、小藤次の蔭へ隠れる。

して奥様には今日は、何れへお出でなされました。

篝火　身の不束に夫に去られ、佐五兵衛が所に居れど、片時忘るゝ隙もなく案じられてならぬゆゑ、大太郎の顔も見たし、夫の安否が聞きたさに、そなたを尋ねて行た所、二人とも留守ゆゑに本意ない思ひをしたわいの。

小藤　折角お出でなされましたに、絲を買ひに參りまして、お無駄をおさせ申しました。して旦那様はお家でございましたか。

篝火　御内職の眞田紐を組んでおいでなされたゆゑ、お目に掛らぬ其内に匆々歸つて來たわいの。

小藤　せめてわたしが居りましたら、隣家の婆の家を借り、お茶位は差上げませうに、殘念な事をいたしました。（ト篝火小藤次の後に隠れ居る、大太郎に目を附け）

篝火　これ小藤次、これ其處にゐるのは、大太郎ではないか。
小藤　へい左樣にござりまする、これ和子樣、なぜお隱れなされまする。
篝火　爰には誰も遠慮はない、母の側へ來やいの。
〽いふに戀しき母の側、行きたい所を後逡に下り、
ト大太郎篝火を見てつか／＼と行きたい思入あつて下手に控へ、
大太　いえ、お側へは參りませぬ。
篝火　なぜ、側へ來やらぬのぢや。（ト小藤次思入あつて）
小藤　僅かな內でも奧樣に、お別れなされてござつたので、和子樣には他人行儀におなりなされましたな。
大太　おゝ、他人行儀にならねばならぬ、父上樣の御意に叶はず、御離緣ありし母上樣、最う私とは他人ゆゑ、それでお側へ參りませぬ。
小藤　小さい折から御本が好きで、御學問をなされたゆゑ、高慢な事をおつしやります、お側へお出でなさるのがおいやなら、奧樣へ御挨拶をなされませ。
大太　いえ、お詞も掛けませぬ。

小藤　そりやなぜでござります。

大太　さあ御離縁になる上からは、譬にもいふ男の子は男に附くが世の習ひ、御恩は深き母上なれど父上には替へ難し、それゆゑお詞かけませぬ。

篝火　すりや離縁になりし母ゆゑに、そちは詞をかけぬとか。

大太　民百姓の子ならば知らず、元は一國一城の主人なりし佐々木の悴、道を立てねばなりませぬ。

〽立派に言へど目も潤み、顔を背ける大太郎に、母は樣子を見て取りて、

ト大太郎顔を背けよろしく思入

篝火　佐々木殿の胤ほどあつて、離縁になりし母ゆゑに詞を掛けぬと言やるのは、天晴なるそちが心、懐しかつたと言はるゝより、末頼もしく嬉しいわいの。

〽嬉し涙をおし拭ひ、（ト誂への合方、蟲の音になり、篝火思入あつて）

今更いふも繰言ながら、そも信州を立退いて、此紀の國の九度山に侘住居をなさるゝは、深き御所存あつての事と思ひの外に御所存なく、眞田紐を手細工に絲より細き煙りさへ、苦に仕たまはず明暮に、たゞ釣のみを樂しみと武道を忘れたまひしゆゑ、釣をお止め申せしがお氣に障つて此身の離縁、千度百度お詫びをなせどお聞き入れのないゆゑに、仕方なく〳〵佐五兵衛が、宅に

忍ぶも折あらばお詫びをなしてと思へども、お聞き入れのない時は、果敢ない別れを仕ようも知れぬ、男の子は男に附くが世の習ひといふ事ゆゑ、父に附くのは無理ならねば、よしや産みの恩ありとも必ず母に詞をかけるな、掛けてくれぬが嬉しいわいの。

〽流石は佐々木高綱が、妻ほどあつて悪びれず、泣かぬ涙ぞ哀れなる、大太郎も差しうつ向き兎かう答へも泣顔を、小藤次は差しのぞき。（トよろしく思入あつて）

小藤 若し和子様、奥様といひあなたといひ、天晴なとは言ひながら、餘りといへば侍氣質、奥様は兎も角も、まだお年も行かぬ身で思ひ切つた今のお詞、あなたは産みの母さまがお懐しうはござりませぬか。

〽始終を見兼ね小藤次が、大太郎を諫むれば、（ト小藤次思入にていふ。大太郎思入あつて）

大太 そりやそちが言はずとも、ませた事をいふやうぢやが、

〽空を翔ける鳥は元より、地を走る獣まで。

親は子を思ひ子は親を慕ふ、ましてや人の身の上に、親を慕はぬものがあらうか、それが慕はぬ心の内、推量してくりやいの。

〽推量してとうつぶけば、母は心を察しやり、

篝火　おゝ其一言で取縋り慕はるゝのも同じこと、まだ十五にもならぬそちが健氣な心に恥入りて、最う〱何も言ひませぬ、只此上は我が夫へ、折があらば二人して、此身の詫びをしてくりやれ。

小藤　その儀は仰しやりませずとも、佐五兵衛どのと申合せ、遠からぬ内お歸りあるやう、及ばずながらいたしませう。

篝火　よしなに執成し頼むわいの。（ト時の鐘、篝火思入あつて）思はぬ事に暇取りて、歸りが遲うなつたであらう、さあ〱早う歸りやいの。

小藤　道までお送り申したけれど、旦那樣がお一人ゆゑ、お許しなされて下さりませ。

篝火　多くの家來もあつたれど、國を立退く其時に、皆散り〲に離散なし、力と頼むはそなたのみ。

小藤　及ばずながら私共が、お執成しいたしますから、今少しの其間、御辛抱遊ばしませ。

篝火　おゝ、そちが吉左右待つて居るぞよ。

小藤　左樣なれば奥樣。

篝火　小藤次。

小藤　お別れ申しまする。さあ、和子樣參りませう。

〽いざと小藤次手を取れば、心殘れどしを〱と、詞交さで行き過ぐれば。

ト小藤次大太郎の手を取り、花道へ行く。篝火思入あつて、

篝火　これ大太郎。

大太　はい。（ト思はず返事をする）

小藤　ちよつとお側へ。（ト行けといふを）

大太　他人に用は、（ト振拂ひ）ないわいの。

〽袖振拂ひ大太郎、脇目もふらねば小藤次も、是非なく附添ひ別れ行く。

ト大太郎振返り見たきをぢつと怺へ花道へ行く。小藤次も是非なく、篝火へ思入あつて花道へ附添ひ這入る。

〽母は我が子の後影、のび上り〳〵、影見えるまで見送りて、

ト篝火跡を見送り、段々高二重の土手へ上り、

篝火　僅か十二か十三にて、大人も及ばぬ健氣さ、心憎い母でも親子の恩愛、振返らねばならぬのを跡へ未練を殘さぬは、流石は夫の胤ほどある、成人の後戰場の働きが思ひやらるゝ。あゝ末頼もしき、（ト向うへ思入あつて、土手から落ちようとして留り）事ぢやなあ。

〽心殘して篝火は、見返り〳〵立歸る。（ト是れへ波の音を冠せ、篝火上手土橋を渡りて這入る。）

〽折から爰へ狩人が、一杯機嫌に足許もしどろもどころに中間が、連立ち來たる田圃道。

ト波の音にて花道より、九郎作達附草鞋、狩人のこしらへにて鐵砲をかつぎ、運平紺看板中間装にて生醉の九郎作を捨ぜりふにて引張り出來り、舞臺へ來て、

運平　これ九郎作、大事の用を受込みながら、又づぶ六に醉つたのか。

九郎　なに、づぶ六に醉ふものか、たつた五合桝呑に、冷でやつて來たばかりだ。

運平　不斷なら好きな酒、幾ら呑んでもいゝけれど、今日醉はれちやあおれが濟まねえ。

九郎　手前も野暮な事をいふぜ、五合や一升呑んで、人に頼まれたことを仕損ふやうな、そんな九郎作ぢやあねえ、地狂言でした忠臣藏の師直がいふせりふぢやあねえが、酒は呑んでも呑まいでも勤める所はきつと勤める。(ト九郎作師直の思入)

運平　そのせりふに違えがなくば、やんやと一番遣つてくれろ、おれまで褒美になる事だ。

九郎　やんやと遣らねえで何うするものだ、一つ間違やあ命づく、どぢな事をするものか。

運平　何にしろ旦那樣が、逢ひ度いと仰しやるから、おれと一緒に行つてくれ。

九郎　逢ひ度えとおつしやるなら一緒に行かうが、何處においでなさるのだ。

運平　此先きの一里塚、庚申堂にござる筈だ。

九郎　最う相手めが出て來る時分、ちつとも早くお目に掛つて、頼まれた仕事に掛らう。

ト　ひよろ／＼とする。

運平　何だか手前はひよろ／＼と、けんのんな頼れ人だ。

九郎　案じるにやあ及ばねえ、おれが狙ひを附けたらば、二つ玉より大丈夫だ。

運平　勘平もどきで五十兩も、御褒美に有り附きてえ。

九郎　人に骨を折らして置いて、斧貞取らう（斧定九郎）とは蟲がいゝ。

運平　とんだ上方俄だ。

九郎　どれ、お目に掛つて來ようか。

〽鐵砲肩に兩人が、慾の深川の田圃道、打ち連れてこそ。

ト　波の音にて九郎作運平橋を渡り、上手へはひる。時の鐘

〽入江なる水の流れと人の身は、昨日に替る飛鳥川、深き智謀の高綱も、今は民家に紀の川の淺瀬の釣を身の樂み。

ト　かすめて波の音を冠せ、花道より高綱好みの鬘、着流し好みの短刀を差し、低き駒下駄を履き、釣竿を肩にかけ、魚籃を提げ出來り、花道へ留り、

高綱 實に光陰は矢の如しと手馴れし弓を打捨てゝ、浪々なせしも早や三歳、城地を上げて民家の住居に、世の雑說を聞くもうるさく、暇ある日は釣を垂れ魚に心奪はるゝも。辛苦を忘るゝ身の養生、今日は昨夜の雨あがり、小川の水が落ち込んで、思はぬ得物があらうも知れず、餘の釣人の參らぬ内魁けなさんも一つの計略、どりや川邊へ參つて陣を張らうか。

〽橋の袂を屯所と、來かゝる岸の木の根につまづき、思はず切れし木履の鼻緒。

ト高綱舞臺へ來り二重へ上り、躓き駒下駄の前鼻緒切れる、思入あつて、

川端の木の根に躓き、木履の鼻緒を踏切りしか、はて困つた事をいたした。

ト高綱鼻緒の切れしに困る思入にて、松に掛けたる藁を取り、よき所に下に居て鼻緒を立て居る。

上手橋の上より九郎作手拍子を打つて出來り、

〽兎やせん角と見廻す川端、松に掛けたる稻の藁、是れ幸ひと拔き取りて、鼻緒を立てるこなたより、一杯機嫌の狩人が、手拍子打つて出來り、

九郎 高野六十那智八十に、百までごろ寢の熊野比丘、よいと〳〵、（ト九郎作手拍子を打つて唄ひながら二重へ下りひよろ〳〵として高綱へ行當り、態とばつたり倒れ、）あいたゝゝゝゝ、何で往來端に居やあがるのだ、一里塚の賽の神か六地藏だと思つたら、耳ツくじりを極め込んで、扶持離れの浪人だな。

何で爰に居やあがつたのだ。

高綱　見らるゝ通り履物の鼻緒を切つて難儀いたし、藁にて假にすげようと、是れに屈み居つたゆゑ、躓かれて氣の毒千萬、どこぞ怪我でもさつしやつたか。（ト九郎作思入あつて、）

九郎　おゝ怪我をしたく／＼、われが差してる耳ツくじりで向う臑をひどく打つたが、そりやおそつちの出やう次第で料簡もしてやらうが、頭横柄な物の言ひやう、粗相をしたならしたやうに、なぜ手を突いて誤らねえ。

高綱　そりや此方より突當らば、手を突いても誤らうが、盲目ならば知らぬこと、兩眼見える身の上で突當りしはそつちの粗相、申さば是れは五分と五分、手を突いては誤まれぬ。

九郎　五分と五分と言はれちやあ、假令料簡なる事でも、最う一寸でも後へは引けねえ、舌三寸の言掛り二尺に足りねえ耳ツくじりで、五尺の體は切られめえ、それとも切るなら此腕から、すつぱりと切つてくれ。（ト九郎作片肌脫ぎ高綱の前へ腕を突出す。）

高綱　中々以て此刃物は、ほんの途中の犬脅し、人をあやめる料には指さぬ、元より事を好まねば手こそ突かぬが詫びをいたす。申さば時の出合ひ頭、不承であらうが許しくりやれ。

九郎　いやおれが手を突いて轉んだから、われも手を突いて誤らにやあ、曲つた蟲が許さねえ。

高綱　すりや何うあつても許さぬとか。

九郎　えゝ、ぐづ〱と面倒だ。

〽鼻緒すげる高綱が、木履を取つて立掛るを、止むるはずみ思はずも、土橋打越し投げ附くれば、藪のこなたに聲ありて、

ト此内高綱鼻緒をすげ居る、九郎作立掛り木履を引つたくり打つてかゝるを、止むるはずみ九郎作木履か上の方へ投げる、と上手にて、

彌五　やあ、何者なれば、投打ちいたす。

九郎　やゝ、あの聲は、

平太　狼藉者、動くまいぞ。

〽藪の小蔭を立出る、土肥の彌五郎引續き、直なる道も横須賀平太、家來引連れ出來り。

ト上手より野袴ぶつ裂羽織、大小、平太同じく野袴ぶつ裂羽織、大小、太緒の草履、運平木履を持ち出來り、高二重に留る、九郎作見て、

九郎　これは〱御大身樣、投打ちをいたしましたは、私ではござりませぬ。

彌五　して投打ちをいたせしは。

九郎　へい、是れに居ります、浪人者でござります。
平太　すりや其者が投打ちせしとか。
高綱　いや、拙者に於ては覺えござらぬ。
平太　でも其方が投打ちせしと、これなる者が申すでないか。
高綱　何やう彼れが申さうとも。
彌五　いや、誰彼と申さうより、投打ちなせし其木履、そりや何者の所持なるぞ。
運平　いやさ、此木履は其方のか。
〽覺えの木履を差し附くれば、（ト運平件の木履を出し高綱へ差し附ける、）
高綱　むゝ、此木履は。
九郎　此浪人が履いて居つた、證據は御覧なさるゝ通り。私めが履物は泥草鞋でござりまする。
平太　斯かる證據のある上は、木履は浪士の履物ならん。
運平　何と相違はあるまいが。
高綱　如何にも拙者が木履でござる。
九郎　して此木履が當りましたか。

運平　おらが旦那に當つたのだ。
高綱　すりや其木履が。
彌五　斯くいふ身共が肩へ當つた。
高綱　むゝ。（ト思入）
九郎　こいつは大變、大事だ。
運平　土民と違ひ浪士ゆゑ、こりや此儘には濟まされぬ。
九郎　いや、こりやとんだ事が出來たな。（ト彌五郎思入あつて）
彌五　御浪士ちよつとこれへ。
高綱　すりや拙者めに。
彌五　如何にも。
〽肩臂張つて立掛り、兩人顏を見合せて。（ト彌五郎常足の二重へ下り、高綱と顏見合せ）
御身は佐々木高綱殿。
高綱　左いふは土肥の兼近殿。
彌五　信州表開城以後。

高綱　絶えて面會せざりしが。

彌五　思ひ設けぬ。

兩人　此の出會。

彌五　いや久し振りで御意得たが。以前に替る高綱殿、斯く浪々召さるなら、なぜ鎌倉へ隨身めされぬ、貴殿の智謀を懇望ゆゑ、現在兄の盛綱殿より再三申し入れたれど、時政公が氣に入らぬか十萬石の墨附を手にも取らず押返し、慾を知らぬは何とやら、名を取らうより德の世の中、今でも心願へし隨身召さる料簡なら、時政公へ推擧なさん。

ト威儀を改め目禮なし、（ト誂への合方になり、彌五郎思入あつて）

平太　貴殿が本國離散の砌、城受取りに參りし某、萬更知らぬ人でもなし我々共に遠慮はござらぬ、尻尾を卷いて隨身さつせえ、失禮な事をいふやうだが、斯く浪々の身の上では、釣でもせずば腥さい肴を菜には喰はれまい、十萬石にありつけば二汁五菜の獻立で据膳が喰へるのに、それを嫌つて貧乏するは、大きな馬鹿ではござらぬか。

運平　是れは大きな話しの違ひ、佐々木の四郎高綱殿は、智者だ〱と聞きましたが、それぢやあ馬鹿でござりますか。

彌五　平太殿の言はるゝ通り、大きな馬鹿と存ずるゆゑ、此土肥の彌五郎などは風並のよい鎌倉へ疾より隨身なしたるゆゑ、時政公のお覺え目出度く、上見ぬ鷲の活計歡樂。

平太　羨ましくばいつ何時でも、我々共へ賴まつしやい、推擧いたして進ぜませう。

〽さも憎さげに罵るを、高綱は耳にも掛けず。（ト平太憎くいふ、高綱思入あつて、）

高綱　舊友の誼を以て御親切の仰せながら、本國信濃の城地を捨て、斯く民家に降りしも、多年學びし軍學を健忘同樣忘却なし、武道の役に立たざるゆゑ仕官を辭して土民となり、斯かる邊土の山家の住居、身には不自由いたすとも寐起きもおのが心の儘、苦勞のないが活計歡樂、生涯これで朽ち果つる所存でござれば各々を、羨ましいとも存じませぬ。

平太　其一言で二言と聞かず、所存はあるまい佐々木高綱、羊羹色の襤褸を纏ひ、破れ扇で歩かつせえ。

九郎　いや憚りながら御大身樣、お咎めありし木履の投打ち、こりや此儘でござりまするか。

〽詞の途切れに九郎作が。

平太　おゝ、疾より詮議なすべきを、餘事に紛れて猶豫いたした。

運平　して投打ちの納りは。

九郎　如何なさるゝ御所存か、見物事でござりまする。（ト彌五郎思入あつて、）

彌五　いふまでもない此處置は、兼近が胸にある。いやなに高綱殿、今某に打附けし此木履は如何めさる、。

高綱　此木履を如何するとは。

〽木履を取つて突き附くれば、（ト彌五郎木履を取つて高綱の目先きへ突き附ける）

彌五　はてさてこなたは覺えの惡い、此兼近に打附けたる、木履の詫びは如何するのだ。

高綱　それは是れなる狩人が。

彌五　まだ〳〵そんな事をいふか、假令誰が投げようとも、木履の主が身共の相手。

高綱　すりや何うあつても某を。

彌五　以前は水魚の交りせし古朋輩でも容赦はならぬ。

平太　時政公に隨はぬ、爰等が意趣の返し所。

運平　筋骨拔いてお遣りなさい。

彌五　筋骨拔くにも及ばぬが、品もあらうに泥木履を武士たる者が打附けられては、此儘には濟まされぬ。

高綱　元より拙者が其許へ打附けはいたさねど、木履の主ゆゑお詫び申す。舊友の誼兼近殿、偏に料簡

なし召され。

彌五　假令以前は友にもせよ、一分立たぬ其内は、此儘料簡なり惡い。

高綱　ではござらうが申さば粗相、斯くの通りお詫びいたす。（ト膝に手を突き天窓を下げて詫びる、）

平太　何ぢや、詫びる／＼と口ばかり、誠詫びる所存なら、兩手を突いて詫びさつせえ。

高綱　然らば貴殿の仰せの如く、兩手を突いてお詫びいたす。（ト高綱思入あつて兩手を突いて詫びる、）

運平　いや佐々木々々と鬼のやうに、人に言はれた高綱殿。

九郎　兩手を突いて詫びるとは、さりとは意氣地のねえ事だ。

兩人　はゝゝゝ。

〽弱身へ附込み嘲笑へば、（ト高綱何をといふ思入あつて氣を替へ、）

高綱　以前一國一城の主人なりし高綱も、今は誠の土民ゆゑ、意氣地なしと言はるゝとも各々方に及ばねば、兩手を突いてお詫びいたす。（ト高綱手を突いて詫び、）是れにて料簡なし下され。

彌五　さあ身共ばかりの事ならば、料簡しまいものでもないが、これ、是れを見られよ高綱殿。

〽泥にて汚れし羽織の紋、高綱にとつくと見せ、

ト彌五郎泥にて汚れし左りの前の三つ鱗の紋を見せ、

此三つ鱗の紋附きし羽織は則ち當時の主人、時政公より拜領物、此定紋へ木履の泥を附けられたゆゑ料簡ならぬ。

高綱　すりや其羽織は北條殿より、（ト思入あつて、）主人の紋を汚せしゆゑ、料簡ならぬと言はるゝか。

彌五　むゝ、生れ立ちから土民なら、蟲螻蛄同様取るに足らねば、此儘にしてくれうが、今は土民の蟲螻蛄でも以前が佐々木高綱ゆゑ、詫びばかりでは濟まされぬ。

平太　泥を塗つたる言譯は、兼近殿の存分に、此場で手籠めにならつせえ。

運平　それを毛や角ぎしや張れば、四邊に伏せ置く百姓共。

九郎　此九郎作も助鐵砲。

彌五　覺悟極めて返事をさつせえ。

〽手向ひなすかなさいるか、佐々木を探る敵の間者、高綱敏くもそれと察し、

ト彌五郎平太左右より高綱の樣子を窺ふ、高綱態と恐るゝ思入にて、

高綱　主人へ濟まぬとあるからは、如何にも貴殿の存分に、高綱手籠めにならうから、先づ無事に納めて下され。

彌五　すりや兼近が手籠めになるとか。

高綱　如何にも、貴殿の心任せ。

彌五　木履の泥を附けられし、其返報を此場にて。

高綱　や。

彌五　土足に掛けねば料簡ならぬ。

高綱　すりや某を土足に掛けて。（ト高綱きつとなる。）

彌五　何だ、目に角立てるは某が。土足に掛けるが不承知か。

高綱　む丶。

平太　今は土民の佐々木高綱、武士に向つて慮外をすれば、土足位は當り前。

彌五　但しは今にも坂本へ、隨身なして我々と、一戰いたす所存なるか。

高綱　全く以て。

平太　左なくば當時鎌倉の、お覺え目出度き彌五郎殿。

運平　土足に掛けても言分あるまい。

彌五　それとも以前の武士を捨てぬか。

高綱　む丶。

平太　土足に掛けても。
運平　言分ないか。
高綱　さあ、
彌五　相手になるか。
高綱　さあ、
彌五　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵
彌五　高綱返事は、なゝ何と。
高綱　むう。(トぢつと思入)
彌五　罰が當ると言はゞいへ、例へば脚が曲るとも土足に掛けねば汚されし、主人の紋へ身共が立たぬ、

〽傍若無人に兼近が、袴かなぐり足蹴に掛け、(ト彌五郎高綱の肩へ踏み掛け、)

以前は兎もあれ立別れ向う前になるからは、例へていはゞこなたは碁敵、然し戰の懸引は段の違つた盤上に互ひ先では及ばぬゆゑ、爰やかしこに井目の見張りをつけて相手となり、敵か味方か黒白の心知れざる高綱が、隱す妙手を見出さうと、囮に掛けし此の出會、悪く手出しをするが最

後、佐々木家の定紋たる四つ目殺しにしてくれるぞ。

〽卜彌五郎蹴返しきつと見得、高綱ぢつと思入あつて、

高綱 全く本城開城以後、土民となりし此高綱、手出しはいたさぬ、兼近殿、存分にいたされよ。

彌五 すりや土足に掛けても腹は立てぬか。

高綱 何しに立腹いたさうぞ。

平太 腹を立てずばとてもの事。

九郎 投打ちなせし此下駄で。（卜九郎作件の木履を出し打てといふ思入、彌五郎取つて、）

彌五 是れではよもや、

〽木履で頭をはたと打つ。（卜彌五郎木履で高綱を打つ、）

腹が立たうが。（卜木履を突き附ける。）

高綱 いつかな腹は立て申さぬ。

彌五 えゝ、張合のねえ、（卜又打つて、）事だなあ。

〽持ちたる木履を藪へ打込み、（卜彌五郎木履を下手へ投げ、平太へ思入あつて、）

横須賀殿、御覧じたか。

平太　む丶、佐々木々々と聞き怖したが、さりとは意氣地のない侍。

彌五　これで貴殿も御安堵ならん。

平太　誠に安堵いたしてござる。

九郎　最早これにて四方の固めも、

運平　これ餘計な事を言ふには及ばぬ。

〽兼近威儀を改めて、（ト彌五郎思入あつて、）

彌五　いやなに高綱殿、古朋輩も顧みず土足に掛けたも誰あらう、今に日本六十餘州を一手に握る時政公、其定紋が大切ゆゑ木履を以てこなたを打擲、嘸無念でござらうが長い物には卷かれろと昔からいふせりふ、及ばぬ事とあきらめて明日にも心飜へし時政公へ隨身なら、古朋輩の誼ゆゑいつでも身共が推擧なさん、必ず遠慮さつしやるな。（ト彌五郎愉く言ふ。）

平太　然しこんな腰拔けを、推擧いたさば、貴殿の越度。

運平　矢張り此儘一生涯、人の土足に掛けられて。

九郎　恥とも思はぬ士民が相應。

彌五　返す〲も斯ほどまで、（ト彌五郎高綱へちよつと立役の思入あつて、）は丶丶丶丶、見れば見るほど馬

鹿な面だ。

平太　左樣ござらば兼近殿。

彌五　橫須賀殿。

運平　最早日ざしも、

九郎　七つ下り。

平太　暮れざるうちに、

彌五　どりや歸宅いたさうか。

〽羽織の翼打ちひろげ、眼怒らし熊鷹の土肥の兼近橫須賀平太、打連立ちて立歸る。

ト波の音に小鼓をあしらひ、彌五郎、平太、運平花道へはひる。九郎作思入あつて下手へはひる。

高綱跡を見送り思入

〽跡に高綱塵打ち拂ひ、

高綱　扨々今日は思はざる古朋輩に出會つて危い命を取らるゝ所、土足には掛けられしが命助かり又好きな釣の出來るは悅ばしい、木履で頭を打たるゝ位は、何よりか安い事、いや、木履といへば片片の木履、兼近がどこへ投つたか、はて困つた事をいたしたわい。

〔四潑を尋ね高綱が、土橋の上より川岸を、見返る折しも藪陰より、
　ト高綱足を爪立て土橋の上へあがり、川中を見込む、此時下手藪の陰にて、

掃部　其木履これにあり。

高綱　何と。

〽聲を掛けしは何者と、躊躇土橋の小陰より、人體勝れし武夫が、木履を捧げ立ち出しは、下邳の土橋に張良と黄石公が出會も、斯くやと思ふばかりなり。
　ト高綱土橋の上に立身、下手藪の陰より安達掃部之助袴大小白緒の草履にて、以前の木履を懐中袱紗にのせ捧げ出で、兩人顔見合せ、ちつと思入あつて、

すりや其許が、失せし木履を。

掃部　只今これにて拾ひしゆゑ、大元帥へ奉つる。

高綱　なに、某を大元帥とは。〔ト誂へ笙の入りし合方になり〕

掃部　唐土下邳の土橋にて、彼の張良が出會し黄石公に勝るとも、劣らぬ叡智の高綱殿、貴殿の木履を某が手に取上げしは冥加至極。

高綱　こは恐れ入る其お詞黄石公などゝは思ひも寄らず、御身こそは四百餘州の大元帥と仰がれし、其

張良に劣らぬ骨柄、石公ならぬ某が木履を拾はれ面目なし。

掃部　なか／＼以て張良などゝは我が身に取つて過當の仰せ、誠に恐縮仕つる、何は兎もあれ此木履、先づ／＼お召しなされませ。

〽恭しげに木履を直し、身を謙りうやまへば、

ト掃部之助木履を上手へ直し、下手へ下つて辭儀をなす。高綱思入、右の合方になり、

高綱　黄石公の徳もなき不肖の身にて張良に、木履を直させ履かれようぞ、三拜なして頂戴いたす。

（ト高綱木履を取つて戴き、思入あつて是れを履き」）して又御身は鎌倉の御直參にてござるよな。

掃部　いや、拙者事は左にあらず、坂本方の身内にて、安達掃部之助良任と申す者。

高綱　扨は御身が聞き及ぶ、安達氏でござつたか。

掃部　疾より尊師に御意得たく、張良ならねど此土橋の、あたりに御待ち申してござる。

高綱　そりや何ゆゑか存ぜねど、そこと此處とは御談話ならぬ、何は兎もあれ先づ／＼是れへ。

掃部　尊師と仰ぐ高綱公、御同席は失敬至極。

高綱　然らば某それへ參らん。

〽靜々堤を下りければ、（ト高綱下の二重上手へ下りる。）

掃部　それでは却つて恐れ入る、先づ〱それに、（ト高綱を上手へ住はせ、）只今も申す如く、疾より尊師に御意得たく待ち設けたる甲斐あつて、思はぬ木履が便となり、斯く御面會仕り、身に取りまして大慶至極。

高綱　何徳もなき某を、安達氏には左程まで、何ゆゑお待ちなされしぞ。

掃部　御待ち申すは私ならぬ、今坂本の御城にござる、頼家公より竊のお頼み。

高綱　頼家公よりお頼みとは。

〽いふに良任あたりを見廻し。（ト掃部之助四邊へ思入あつて、又右の合方になり、）

掃部　其お頼みは餘の儀にあらず、頼朝公御他界の後頼み難なき表裏の世の中、大小名も日に増しに後見北條時政へ隨身なす者過半に及び、かしこは榮えこなたは衰へ頼み少なき折柄に、執權片岡造酒之頭高野山へ退身なし、明日にも謀逆の族あつて一戰に及ぶ事あらば、采配採つて士卒を遣ふ大元帥のあらざれば、何卒入城下されて頼家公の補佐となり、士卒の懸引下さるやう高綱殿へお願ひ申す。

〽砂に手を突き頼むにぞ、高綱は迷惑げに、

高綱　すりやお頼みと仰せあるは、此高綱に坂本へ、仕官せよとの儀でござるか。

掃部　如何にも、枉げて坂本へ御入城下さらば、十萬石の御墨付我が君より下し置かるゝ、御聞き濟み下さらば、君を始め宇治の方、臣下が悦び如何ばかりか、御承引下さるやう偏に願ひ奉つる。

高綱　以前と違ひ土民となり、武邊の役に立たざる高綱、十萬石に抱へんとは、身に餘りたる事ながら此儀は御免下されい。

掃部　すりや何ゆゑに、尊師には。

高綱　再び仕官の望みあれば、本國信濃に籠城なし名を後世に殘せども、すご〳〵と開城いたし城地を捨てゝ土民となりしは、命惜しさと二つには子孫の榮えを思ふがゆゑ、申さずともの事ながら武門にあれば義に依つて利なきと知つて一戰なし、一命捨てねばならぬゆゑ、子孫の榮え思ひも寄らず、當所へ退身いたせしも、命全う浮世を樂に、生涯おくる所存ゆゑ、仕官は御免下されい。

掃部　ではござらうが先君より、力と頼みし高綱殿、何卒入城下さるやう、是非とも此儀お願ひ申す。

高綱　假令何やう仰せあるとも、再び仕官の望みがなきゆゑ、城地を捨てゝ土民となり、斯かる邊土に住ひいたす、既に鎌倉北條殿より十萬石に抱へんと、兄盛綱を使者に立て、再三勸めに參られしが、仕官いたす所存なければ、是れも斷り申してござる。

掃部　御尤なる事ながら、そこを何卒若君の、御運の末を思召され。

高綱　まだ／＼左樣にお勸めあるか、くどくも申すが仕官いたす所存があれば、主人の御恩を忘却なし、北條家へ隨身なしたる土肥が土足に掛りはいたさぬ、以前に替り只今では、心までが土民となり、只長生きを願ひ居れば、是れにてお察し下されい。

掃部　すりや如何やうに願うても。

高綱　命が惜しうござるゆゑ、二言とお勸め下さるな。

〽鰾膠なき詞も高綱ゆゑ、仔細あらんと掃部之助。（ト掃部之助きつとなり氣を替へ思入あつて、）

掃部　左程までに仰せあるを達てとも申されまじ、今日は立歸れど御得心あるまでは、再三お勸め申さにや置かぬ。

〽いへど高綱耳にも掛けず、川邊に立寄り釣を垂れ、答なければ是非なくも。

ト此内高綱掃部之助に後を向け、釣竿の絲を解き餌をつけて針を下ろし釣をなして居る、掃部之助よろしく思入あつて、是非なきこなしにて、

あゝ强ひて申さば折角の、御遊興の釣の邪魔、今日は一先づ旅宿へ歸り、又改めて推參なさん。

〽日も西山に傾けば、心殘して掃部之助、裏道傳ひに立歸る。

ト本釣鐘、掃部之助立上り、よろしく思入あつて、花道へ行きかけ下手へはひる。

〽跡に高綱默然と、手を拱いて一心に、魚や掛ると水中を、見る間に暮るゝ鐘の聲。

ト此內かすめて波の音本釣鐘、高綱思入あつて、

高綱 今打ちしは入相なるか、譬にもいふ秋の日の暮あひ早き釣瓶落し、最前からの妨げに身の樂しみも無駄となり、鮒を一尾得ざりしに、夜食の菜と思うたる得物はなけれど大切な、命拾ひをせしが今日の得物、どれ足許の明るい內、そろ〱歸宅いたさうか。

〽おろせし絲を竿に卷き、魚籃を結び附け高綱は、雀色時黃昏におのが塒へ。

ト此內かすめて波の音竹笛をあしらひ、高綱釣竿へ絲を卷き魚籃を竿へ結び附け、是れを擔ぎ悠々と花道附際へ行く、知せなしに日覆より灯入りの月をおろし、

まだ暮れぬのに宵月の影もさやけき秋の末、そよぐ千種の風に連れ、野末に聞ゆる笛の音は、彼の牧童のすさみなるか、心耳を澄す事ぢやなあ。

ト誂への合方波の音竹笛の鳴物にて、高綱左りへ竿を擔ぎ花道中程より少し先きへ行く、ばつたりと音して高足の藪を押分け以前の九郞作、火繩の附きし鐵砲を持ち出で、よき程に腰を割り立身にて腰だめに構へ、狙ひを附け火蓋を切らうとする途端、高綱釣竿を右へかつぎかへて振返り、うんと遠當にする、九郞作、當てられし思入にて鐵砲を搔込み、片手で脇腹を押へ苦しみ鐵砲を逆にど

んと落す、火蓋切れし心にて九郎作喉を打抜き、糊紅になり立身にて血を吐き苦しむ。此時常足の二重上手藪を押分け以前の彌五郎、下手藪を押分け以前の掃部之助、兩人とも衣裳を着替へ片足踏出す、高綱はにつたりと思入あつて又左りへ竿をかつぐ、三方見合つて木の頭、高綱は悠々と竿を擔ぎ花道へはひる。掃部之助彌五郎は跡を見送る。九郎作は落入り倒るゝ。よろしく波の音カケりにて、花道へはひるを一杯に、

ひやうし　幕

四幕目　大詰

九度山村境の場
佐々木閑居の場

〔役名――佐々木四郎左衛門高綱、土肥彌五郎兼近、佐五兵衛悴佐太郎、谷村小藤次、横須賀平太、紙屑買九八、百姓四人、横須賀下部運平、酒賣佐五兵衛、安達掃部之助良任。高綱妻篝火、同一子大太郎等。〕

（九度山麓村境の場）＝本舞臺三間の間上下柵矢來、上の方に一間の番小屋、九度山と記せし高張提灯、竹槍を建て掛け、後左右に山を見たる切出しの遠見、松の立木、日覆より同じく釣枝、總て九度山の麓村境の體。下手に諸白と記したる荷ひ桶、蓋の上に茶碗を並べ柄杓附けてあり、天秤

棒後に立掛けあり、眞中へ筵を敷き、爰に四人前幕の百姓にて竹の皮包みの煮染を並べ、△杓子にて飯櫃の蓋を叩き、○手拍子を打ちながらかつぽれを唄つて居る、□後鉢卷片肌脫ぎにて踊つて居る。◎は桶の側にて柄杓で酒を呑んで居る。此模樣太鼓入りかつぽれの合方にて賑かに幕明く。

○「沖の闇いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船。」(トうたふ、)

△「甘茶でかつぽれ、鹽茶でかつぽれ」。(ト頻りに踊つて居る△◎を見て、)

□これ〳〵畔六、何ぼ酒賣が居ねえといつて、柄杓から呑むのはよしにしろ。

◎それでも茶碗で呑んぢやあまだるいから、畑七や田五八は甘茶でかつぽれだが、おらあ柄杓でかつぽるのだ。(ト頻りに酒を呑む、○見て、)

○えゝ此慾張り親仁め、好い年をして居ながら、酒といふと底拔けだ。

△そりやあ底が拔けて居る筈だ、疾から箍が弛んで居る。

□弛んだ位ならいゝけれど、まるで箍がはじけて居るのだ。

○違えねえ、はゝゝゝ。

△何にしろ此節は、刈込で忙しいのに、見張りの役を言ひつかり、こんな迷惑な事はない。

○然し捨てる神あれば助ける神と、四五日跡から此村へ、商ひに來る酒賣親仁は、珍らしい人では

ないか。

□　いや珍らしいの珍らしくねえのと、勘定はどうでもいゝから、酒を澤山吞んでくれと、慾を知らねえ商人だ。

◎　隣村へ用足しに親仁が行つて居るこそ幸ひ、歸つて來ねえ其内に、腹一杯やらかさうぢやあねえか。

△　やつぱりこりやあ畦六の方で、柄杓でかつぽれとやらかさう。

□　それがいゝ／＼、やあとやあ、よい／＼。

ト囃す、是れより太鼓入かつぽれの合方になり、○踊りながら、

○　「桶の古いのに柄杓が見ゆる、あれは諸白茶碗酒。」（ト唄ふ。）

三人「柄杓でかつぽれ、茶碗でかつぽれ。」

ト踊りながら替り／＼酒を吞み、トゞ醉ひたるこなしにて筵の上へ倒れ寐る、是れにて時の太鼓になり、花道より前幕の彌五郎野袴ぶつ裂羽織、大小にて出來り、跡より運平前幕の下部にて附添ひ出來り、花道にて舞臺を見て、

彌五　こりや運平、見れば向うの番小屋に、見張りに附けし百姓共が、一人も居らざる様子。

運平　お旦那の仰せの如く、役目を忘る憎い奴等。
彌五　あれへ參つて調べてくれん、運平參れ。
運平　はツ。（ト舞臺へ來り彌五郎寐て居る四人を見て、）
彌五　扨こそ酒に魂奪はれ、役目を忘る百姓共、それ、運平引起せ。
運平　はツ、やい百姓共起きろ〳〵。（トゆすぶり起す、△寐て居ながら、）
△　え〻、もう吞めねえから、堪忍してくれ〳〵。
運平　やあ何を寐言をぬかすのだ、土肥樣のお見廻りだわ。
△　何だ土瓶のお煮花だ、茶でも何でも吞めねえ〳〵。
運平　え〻、分らぬ奴だ。（ト△を突放し○の胸倉を取り、引起し、）こりや、お役人のお見廻りだわ。
○　何だ親子喧嘩だ、そんな事はおらあ知らねえ。
運平　え〻此奴も分らぬか。
彌五　こりや〳〵運平、性の附くやうに打据ゑい。
運平　はツ、（ト木刀を拔き、）さあ、どいつも此奴も起きねえか。（ト四人を木刀で打据ゑる。）
四人　あ、痛え〳〵、（ト四人起上り彌五郎に立掛らうとして、）やあ〻。（トびつくりなし後へ轉覆へる、）

運平　やあ、無禮な奴め、控へ居らう。
四人　へゝい。（ト醉の醒めしこなしにて下手へ蹲まる。）
彌五　こりや百姓共、これへ出い。
四人　へい。
彌五　えゝ、それへ出ろと申すに。
四人　へゝい。（ト顫へ〱前へ出る、合方になり。）
彌五　こりや百姓共よつく聞け、斯く我々まで晝夜を分たず、近郷近在見廻り歩くも、今坂本城内にて諸國に潛む浪人共を召抱へるは賴家公、竊に謀叛の兆しあるゆゑ、當九度山に閑居なす、佐々木なども坂本へ入城なさんも計られず、それゆゑ領主股野殿へ北條家より嚴命下り、出口々々へ見張りの手配り、又某は鎌倉より内意を受けし隱し目附、酒興に前後忘却なし、役目を怠る百姓共、股野殿へ屆けし上、わいらが仕置いたす程に、きつと蟄して罷り居らうぞ。
　トきつと言ふ、四人おづ〱前へ出て、
△　何やうお咎め蒙りましても、申譯はございませぬが、晝夜を分たず見廻りまする草臥休めについ一杯、呑みましたのが身の誤り。

○ 近年酒の高いので、つひぞ正氣を失ふほど、呑んだ事はござりませぬが、此頃爰等へ賣りに來る慾氣のない酒賣り親仁。

□ 代はいつでもよいと申し、快く貸しますゆゑ、つい一杯が二杯となり、其上親仁が用達しに、荷ひを預けて參りしゆゑ。

◎ 猫に鰹節上戸に德利、とう〳〵酒を呑み過し、寐る氣もなしにとろ〳〵と、坐睡りましてござりまする。

△ 地頭へ是れが知れましては、どんな仕置に逢はうも知れず。

○ 向後これに懲りまして、酒は一切呑みませねば、

□ 何卒お慈悲を持ちまして、

◎ 御宥免下さりますやう、

△ へい〳〵お願ひ、

四人 申し上げまする。(ト天窓を摺附けて詫びろ、運平これを聞き酒の呑みたき思入にて、)

運平 此節高い其酒を、接待同樣呑ませるなら、おれも一杯、(ト彌五郎を見て氣を替へ、)いつたい合點が行かぬわえ。

彌五　むゝ、して其親仁は何れへ參つた。

△　へい、隣村へ用事があつて、參りましてござりまする。

彌五　然らば汝等其親仁を、尋ねて是れへ連れ參れ、さうしたならば汝等が罪は某許してくれん。

四人　それは有難うござりまする。

運平　早く親仁を連れて參れ。

四人　畏りましてござりまする。（ト四人嬉しき思入にて下手へはひる。）

運平　此世智辛い世の中に、錢に構はず呑ませるとは、合點の行かぬ酒賣り親仁、こりや御詮議もので
ござりまする。

彌五　如何にもそちが申す如く、心得難き酒賣り親仁、間者ならんも計られず、篤と實否を糺すであらう。

ト下手にて、

四人　さあ〳〵爺さん、えゝ來なせえ〳〵。

トばた〳〵になり、下手より佐五兵衛序幕の親仁やつし裝、淺黄の股引草履がけ、酒賣りのこしらへ、是れを百姓四人にて引立て出來り。

△ へい〳〵お役人様、親仁を連れて、

四人 參りました。(ト佐五兵衞心得ぬ思入にて下手へ控へる、彌五郎佐五兵衞を見て、)

彌五 むゝ、酒賣りの親仁とは其方よな。

佐五 へい、左樣にござりまする、お役人樣には私に、何の御用でござりまする。

彌五 ちと尋ねたい事がある、して其方は何れの者ぢや。

佐五 へい、私は當國の禿の宿に住ひいたす、酒賣り親仁にござりまする。

彌五 して又そちが名は何と申す。

佐五 名は佐五兵衞と申しまして、世辭輕薄もござりませぬ正直者にござりまする。(ト辭儀をなす、)

彌五 して生國は何れなるぞ。

佐五 へい其生國は信、(と言ひかけて、)いいえ、志州鳥羽にござりまする。

彌五 なに、生國は志州とな。

佐五 左樣にござりまする。(ト彌五郎思入あつて、)

彌五 あの爰な僞り者めが。

佐五 いえ、僞りではござりませぬ。

彌五　やあ汝如何程陳じるとも、詞は國の手形にて、自然と出る國訛、志州といへど汝が詞は、疑ひもなき信州訛り。

佐五　えゝ。(トぎつくり思入。)

彌五　何と相違はあるまいがな。(トきつと言ふ、佐五兵衛俯向き居る。)

運平　やあ生國僞る胡散な親仁。

彌五　それ、彼れが懐中改めい。

運平　心得ました。(ト運平佐五兵衛の懐へ手を差入れる、佐五兵衛其手を押へ、)

佐五　あゝもし、何も私は胡散な者ではござりませぬ。

彌五　胡散でなくとも詮議がある。それ、百姓共取押へい。

四人　はッ。

ト四人立掛り、双方より佐五兵衛の兩手を持つて押附る。是れにて運平佐五兵衛の懐を改め腹卷の守りを引出し、

運平　懐中を改めましたが、財布の外に是れなる守り、外には何もござりませぬ。

彌五　それ、守りの中を改めい。

運平　はツ。（ト腹卷の中より紙包みを出し中を改め名前書を出し、）割印のある書附は、こりや人別の紙切手。

彌五　其切手これへ。（トはつと運平出す、彌五郎取つて見て、）信州上田在、篠原村百姓佐五兵衞。

運平　扨こそ親仁は信州生れ、僞りいふは怪しき奴。

彌五　外には何もあらざるか。

運平　はツ、（ト守りと一つにある仁王の目貫の片々を出し、）守りの内に仁王を彫りし目貫が片々ござりました。

彌五　なに仁王の目貫が。（ト思入あつて目貫を取上げ見て、）此目貫はそちが所持か。

佐五　へい、其目貫は先祖から、家代々の讓り物、一對揃つてござりましたが、故あつて片々を捨て、只今にてはそればかり。

彌五　むう、片々の目貫は捨てしとか。（ト彌五郎佐五兵衞に思入あつて、）世にも稀なる仁王の目貫、大切に所持いたせ。（ト佐五兵衞へ渡す。）

運平　どうやら怪しい酒賣り親仁、引括つて一詮議。（ト立ち掛るを、）

彌五　運平待て。

運平　でも怪しき奴ゆゑ。

彌五　はて待てと申さば、まあ／＼待ちやれ。（ト是れにて運平控へる、）こりや親仁、是れへ出い。（ト佐五兵衛おづ／＼前へ出て平伏する、）斯く慥なる名前書、守りの内より出る上は、包み隱さず有體に申せ。

佐五　斯かる證據のある上は、何をお隱し申しませう、私めが生國は信州上田にござりまする。

運平　白狀いたす上からは、いで下郎めが繩打つて。（ト又立掛る、）

彌五　いや、それには及ばぬ。

運平　すりや親仁めを此儘に。

彌五　はて高の知れたる百姓土民、見遁しやつても仔細はない。それ、名前書は返しやるぞ。

ト名前書を出す、運平取つて佐五兵衛へ渡す、百姓四人前へ出て、

○　扨々こなたは仕合せもの、お役人樣の御詮議に、生れた國を僞つては、

△　假令胡散でないにもせよ、繩目に掛つて引かれる所、

□　それを無難に遁れるとは、陰德あれば陽報とやら、

◎　わしらに酒を快く、たら腹呑ませた陰德ぢや。

△　これから後も酒の錢を、

○ 必ず取らうと。

四人 思はつしやるな。

佐五 いやもこなた衆の言はつしやる通り、曇り霞のないわしゆゑ、申譯は立つにもせよ、繩目を受けねばなりませぬ、そこを無難に遁れましたは、お役人樣のお情と陰德とやらでござりませう。此祝ひに是れまでの、貸しはさらりと消しませう。

△ さりとは此方は陰德好き、

○ いゝ心掛けの人でござる。（ト思入あつて、）

佐五 左樣なれば私に、もう御用はござりませぬか。

彌五 用はない、早く行け。

佐五 へい、有難うござりまする。（ト佐五兵衛は荷拵へする、百姓立掛り、）

△ 時に皆の衆、さらりと醉が覺めたれば、一廻り廻らうではないか。

□ おゝさうだ〳〵、見廻りの役目が大事だ。

◎ さあ〳〵早く、

四人 行きませう〳〵。（ト百姓四人竹槍を持ち足早に下手へはひる、佐五兵衛酒の荷をかつぎ、）

佐五　どれ、お暇いたしませうか。

ト謠への合方になり、佐五兵衛辭儀をして花道へ行く、彌五郎思入あつて、

彌五　親仁待て。（ト佐五兵衛態と聞えぬ振りにて行き掛るを、）いやさ、酒賣り親仁待て。

トきつと言ふ、是れにて佐五兵衛ぎつくりと思入あつて、荷をおろし下に居て、

佐五　へい、何ぞ御用でござりますか。（ト彌五郎、佐五兵衛の顏をぢつと見て、）

彌五　其方が生國は、

佐五　へい、只今申し上げました通り、信濃の國上田在、篠原村の百姓佐五兵衛と申しまする。

彌五　むゝ、信州の上田とあらば、以前佐々木の領分ぢやな。

佐五　え、（ト思入あつて、）左様にござりまする。（ト彌五郎思入あつて、）

彌五　むゝ、用はない行け〳〵。

佐五　へゝえ、（ト立上り荷をかつぎ、）危い所だ。（トぶろ〳〵として氣を替へ、）酒や諸白々々。

ト合方へ山颪を冠せ、佐五兵衛彌五郎へ思入あつて花道へはひる。彌五郎跡を見送り思はず前へ出て伸び上つて向うを見込む、運平合點の行かぬ思入。

彌五　今の親仁が年齡恰好、生れは信州上田在篠原村の百姓にて、家に傳はる仁王の目貫、片々捨てし

といふからは、正しく親仁は。

運平　やあ。（ト聞き咎める、彌五郎氣を替へ、）

彌五　佐々木の山緣で、（トうなづくを道具替りの知らせ、）あつたよなあ。

ト向うを見込み思入、運平何の事だといふ思入。此見得時の太鼓にて道具廻る。

（佐々木閑居の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間障子屋體、向う更紗の暖簾口、上手押入戸棚、下手鼠壁、二段の棚へ絲卷を並べたる書割、いつもの所藁葺の門口、下の方一間の下家三尺の中窓、三尺の繩暖簾、此下藪疊、總て九度山村佐々木閑居の體。爰に小藤次やつし裝にて絲卷へ絲を卷いて居る。下手に以前の四人の百姓煙草を呑み居る、此見得在鄕唄にて道具留る。

○　あゝ今日のやうに腹一杯、酒を呑んだ事はねえ。

△　何だといつて、茶碗や柄杓でぐい〳〵と、あふつたから好い心持になつた所。

□　お役人樣に叱られたので。

◎　すつかり醉が覺めてしまつた。

小藤　誰も彼もいゝ色だが、振舞酒でもあつたかな。

△　おゝ振舞酒とも〳〵、佐五兵衛といふ酒賣り親仁が、勘定は何時でもいゝ、呑み度い程呑めとい

ふので。

○　朝顏茶碗も面倒だと、桶から柄杓で續け呑み。

○　ぐつすり醉つて見張りも忘れ、筵の上へ臂枕、正體もなく寐て居た所。

◎　土肥の彌五郎樣とかいふ、隱し目附に見附けられ、目の出るほど叱られて。

△　其びつくりで醉もさめ、何だかをかしな心持。

○　もう一升も迎ひ酒に、大きなもので呑みたいものだ。

小藤　わしは下戸で一水も、喉へ入れた事はないが、さうも酒は呑みたいものか。

□　三度の飯を四度喰つても、酒は呑まずにやあ居られねえ。

◎　四度喰はれた此上に、酒を呑れて堪るものか。

小藤　成程これは堪らぬ話しだ。

ト小藤次絲を卷いて居る。合方になり、花道より九八紙屑買好みのこしらへにて、鐵砲笊を持ち秤を腰へさし出來り、

九八　屑い、屑はござい。（ト直に舞臺へ來り門口から覗き込み）屑屋でござい、屑はござりませぬか。

小藤　まだ屑は少しも溜らぬ。

九八 左樣なら何ぞ外に、お拂ひ物はござりませぬか。

小藤 何もないから其内來さつしやい。

九八 直をよくお貰ひ申しますが、何ぞお拂ひ下さりませ、若し何もござりませぬか。(トしつこく言ふ、)

小藤 えゝ、しつこい、無いといふに。(トきつといふ、此時奥にて、)

高綱 いや、拂うてやる物がある。暫くそれに待つて居やれ。

小藤 や、あのお聲は旦那樣。

九八 いや、それは有難うござります。

ト九八内へはひり、下手へ控へる。合方になり、奥より高綱好みの鬘やつし裝、刀を持つて出來り二重眞中へ住ふ。小藤次は二重下手。百姓四人は平舞臺上手へ住ひ、

△ 旦那樣。今日はお宅で、

四人 ござりましたか。

高綱 これは〳〵百姓衆、よく尋ねて來て下さつた、何はなくとも久し振り、一獻進上いたしたい、先づ〳〵ゆるりと話して下さい。

四人 それは有難うござりまする。

九八　若し旦那様、私は屑買でござりますが、お拂ひ物とおつしやいますは。

高綱　おゝ外でもない、此刀ぢや。（ト持ちたる刀を差し出す、九八取つて、）

九八　是れは結構なるお差料でございますが、どの位にお拂ひ下さりまする。

高綱　何程でもよい、買つて行きやれ。（ト是れを聞き九八しめたといふ思入、小藤次これを見て、）

小藤　あ若し旦那様、お内職をなされぬのでお差支へか存じませぬが、何ゆゑあつてお刀を、屑屋へお拂ひなされまする。

高綱　何ゆゑとは知れたこと、以前と違ひ今は平民、眞田紐を打つ者が刀を持つて益なき事、時がなあらば賣拂はうと疾から思ひ居つた所、只今奥にて承はれば是れにござる百姓衆、酒が所望の様子ゆゑ馳走なさんと思ひしが、折惡しく手許が薄く如何はせんと思ふ所へ、幸ひの紙屑買不用の刀を賣代なし酒を求めて百姓衆へ、一杯づゝ振舞ふのぢや。

○　成程これはよい御思案、以前に替つて平民とおなりなされば、刀は不用。

△　それを賣つて我々に迎ひ酒の御馳走とは、結構過ぎた思召し。

□　そんならいよ〳〵旦那様は、

◎　お武家はお止めでござりますか。

高綱　おゝ止めたとも〳〵、大小させばいつ何時命を捨てねばならぬか知れぬゆゑ、武士はふッつり思ひ切り、長生きをして樂しむ心、それゆゑ不用の此刀賣つて酒に替へるのぢや、よき程に求めてくりやれ。

小藤　いや旦那樣、そのお刀をお拂ひなさるは、先づお見合せ下さりませ。

高綱　なに、刀を賣るを見合せろとは。

小藤　さあ武士をお止めなされますれば、あつて益ない其お刀、お拂ひなさる思召なら、是非もない事ながら、しかといたした道具屋にお拂ひなされば知らぬこと、高の知れた紙屑買、いやさ、紙屑か何ぞのやうに、むざ〳〵お拂ひなさるのは、そりや御無用になされませ。（ト九八思入あつて）

九八　もし〳〵お詞の中でござりますが、素人衆の御料簡では紙屑屋などに賣る時は、譬にいふ二束三文に見倒すだらうと思召しませうが、中々そんな事はいたしませぬ、ほんの二朱か一分位の口錢を見込みまして、買つて參るのでござりますから、どうぞお拂ひなされて下さりませ。

高綱　一旦見せた此刀、決して外へは賣らぬ程に、目一杯直踏みをいたせ。

九八　左樣なら御免下さりませ。（ト合方きつぱりとなり、九八緣頭目貫を見て、中身を抜いて見る事よろしくあつて鞘へ納め）もし旦那樣、目一杯と申す所、千疋でござりますが、外樣でござりませぬから、三

両金でお貰ひ申しませう。

小藤　なに、其お刀が僅か三両。

九八　へい、一寸詰つて居りますと、随分直打もござりますが、實當節は長ものは、下落いたして居りまする。

小藤　それだと云つて三両では。

高綱　又口出しをいたし居るか。（ト小藤次を叱り、）三両にて苦しうない、そちに拂つて遣はさう。

九八　え、そんなら拂ひ下さりますか、それは有難うござりまする。

△　犬も歩けば棒に當ると、豪氣な物を掘り出したな。

○　然し、屑はございの紙屑屋が、三両といふ金はあるまい。

九八　見くびつた事を言ひなさるな、今日は質の流れを買ふので、四五両持つて來ましたから、直に金子を上げまする。

□　それでは旦那の御馳走の、

◎　酒がたら腹呑めるわえ。（ト此内九八財布から金を出し紙に載せ、）

九八　左様なら三両金、お受取り下さりませ。

ト高綱の前へ出す、此以前下手より以前の佐五兵衞荷を擔ぎ出來り、門口に窺ひ居て、此時、

佐五　いや、其お刀は親仁めが、賣らすことはなりませぬぞ。

九八　汝邪魔がはひつたか。（ト佐五兵衞内へはひる。高綱見て）

高綱　や、そちは佐五兵衞。

佐五　旦那樣。

小藤　そんなら樣子を。

佐五　殘らず門で聞きました。（ト下手へ住ふ。）

九八　どういふ事か知らないが、旦那樣が御承知でお賣りなさつた此刀、何でお前が留めなさるのだ。

佐五　假令旦那樣が御承知でも、賣らす事はなりませぬ。（ト百姓思入あつて、）

○　とんだ所へ酒屋の爺さん、此奴は話しもむづかしさうだ。

△　長居をしても御馳走の、酒は無駄になりさうだ。

□　お邪魔にならぬ其内に、

◎　わし等は早く歸りませう。（ト四人門口へ出て、）

ム　や、幸ひ爰に酒屋の荷ひ、

○ こいつを早く、

□ 合點だ。（ト□銜ひ桶の片々を擔ぎ四人下手へはひる、佐五兵衛高綱へ詰寄り、）

佐五 もし、旦那様。

高綱 又佐五兵衛がいつもの異見か。

佐五 言ひたい事もござりませぬが、聞いては言はずに居られませぬ。（ト讀への合方になり、）如何なる事のお入用にお遣ひなさるか存じませぬが、金捨への其刀を、僅かな金に紙屑屋にお拂ひなさる事ならば、なぜ此親仁に御相談をお掛けなされて下さりませぬ、是れぢやに依つてあなたをば虚氣虚氣と世間で言ひます、いや言ひますのも尤も、御舍兄盛綱様と御一緒に鎌倉へ御隨身なされますればお大名で居られますに、二君に仕へる心はないと、信州上田の城地を捨て、此九度山に幽なお暮し、感心なお心掛けに百姓づれの私も御恩送りとお跡を慕ひ、爰へ參つて朝夕のお世話をいたして居りますも、今に何か是れはといふ御計策があらうと思ひ、うか／＼待つたも三年越し、月日は送れど計策どころか、眞田の與市が其昔打始めた紐ぢやなど、僅かな賃の紐を打ち、間がな隙がな紀の川へ、釣にばかりお出でなされ、それも釣がお上手なら半生業になりませうが鮒つ子やだぼ沙魚の五ツや六ツ釣つた分には佃煮も出來ませぬ、それがなんたる樂みに毎日々々

川端で魚に釣られてござるといふは、太公望の氣取りか知らぬが、馬鹿の止りを書いてくれとさる畫師に頼んだれば、釣をして居る所を書いて見せたと申しますぞえ。

ト佐五兵衛よろしく思入にて叩き立てゝいふ、高綱塵を拂ひ耳やかましいといふ思入にて、上手へ退き絲巻の絲を巻き居る、佐五兵衛是れを知らず、

其位な事は申さいでも御存じでござりませう。（ト高綱が居ぬゆゑ又上手へ來り高綱に詰寄り）其釣を奥様が御身の毒ゆゑ御異見なされましたがお氣に障り、家風に合はぬ出て行けと去状添へてお出しなされ、既に御自害なさる所を、此親仁がお留め申し、御介抱して居る内も、まだ〳〵あなたの御本心どういふ深い御所存かと、（ト此内高綱うるさいといふ思入にて下手へ來り絲を巻いて居る、佐五兵衛是れを知らず）實の所は此親仁も、まだ疑うて居りましたが。（ト高綱を見て忌々しいといふ思入にて又下手へ來り）今日といふ今日私もあなたの虚氣を知りました。何處の國に武士の魂刀をお賣りなさるなどゝは、それが佐々木の御血統高綱様の御所行か、それも賣らでならぬ事なら賣り所もござりませうに、紙屑買に賣るといふがあるものでござりますか。（ト猛りたつて言ふ）

九八　いや、是れは御挨拶だ。（ト高綱うるさき思入にて）

高綱　えゝ、聞くも五月蠅そちが異見、もそつと靜かに言つてくりやれ。

佐五　いえ〳〵靜かにはなりませぬ。此位に申さねば、あなたのお耳にはひりませぬ。

高綱　然らばそれにて勝手に申せ、身共はこちらへ逃げるわえ。（ト高綱逃げる。）

佐五　お逃げなさればは共々に。（ト追ひ行く。）

高綱　これは五月蠅。

佐五　五月蠅といふは老の常だ。（ト高綱逃げるを追ひ歩く、小藤次見兼ねてこれを留め、）

小藤　是れはしたり佐五兵衞どの、まあ〳〵靜かにさつしやりませ。

佐五　いや〳〵靜かにはならぬ、必ず留めて下さるな。（ト小藤次を突退ける。）

九八　是れは爺さんどうしたものだ、此方の旦那が御所持の物を、勝手にお拂ひなさるのを、構ふことはないではないか。

佐五　いや構はずには居られませぬ、これ小藤次どの、どういふ金の入用で、刀をお賣りなさるのだ。

小藤　さあ今しがた爰に居た隣近所の百姓衆へ、酒を呑ませる其爲に刀をお賣りなさるゆゑ、私もお留め申したけれどお聞きなされず、此屑屋へお拂ひなされてござりまする。

佐五　餘儀ない事かと思うたら、振舞酒の其價に金拵への此刀を屑屋風情に賣らつしやるとは、馬鹿といはうか白癡といはうか呆れて物が言はれませぬ。（ト煙草盆を煙管で叩き立て、うつかりと雁首を口

へくはへ〵あつゝゝゝゝ、え、煙管までが馬鹿々々しい。
ト腹の立つ思入にて煙管を下へ打附ける、高綱これを見て、
高綱 それ見た事か、最前から憎まれ口を餘り利くゆゑ、煙管に灸をすゑられたのぢや。
九八 ちつと火傷で腫れ塞つたら口を利かなくつてようござりませう、こんなお喋べりな爺さんはねえ。
佐五 是れが喋べらずに居られるものか、百兩からの其刀を僅か二兩か三兩でお拂ひなさると承はつては、默つて見ては居られませぬ。
九八 然し幾ら喋べつても此刀は三兩で、旦那樣から買うたれば、こなたが留めても生業づく買はずには置かねえぜ。
高綱 成程、そちがいふ通り一旦約束せし上は、今更變替いたされまいが。
佐五 左樣なればお賣りなされ、利附けをいたして此親仁が、直に刀を買ひ戻しませう。
九八 おゝ、どうせ賣つちまふ代物、利附けがよければ賣りませう。
ト是れにて佐五兵衛、九八が出せし金を取つて、
佐五 先づ三兩の此金は直にこなたへ刀の代金、そこで利息を一分やりませう。
ト財布より一分出して遣る、

九八　何だ、利附といふのは、たつた一分か。

佐五　二朱遣らうと思つたが、一分やるのは奮發だのだ。

九八　途方もねえ事を言ひなせえな、捨賣りにしても五十、いやあ五兩も利附を寄越しなせえ。

佐五　いや三兩で買つた代物に、五兩取るとは慾の深い。

小藤　さつきこなたは二朱か一分口錢を見込んで買ふと、綺麗な口を利いたぢやねえか。

九八　さあそれは。

小藤　達て五兩取る氣なら、代官所へ連れて行かうか。

九八　さあ。

小藤　兎やかく言はずと一分貰つて、早く家へ歸るがいゝ。

九八　えゝ、詰らねえ目に逢ふものだ、此爺さんが出たばかり、うまい酒を呑み損なつた。

ト三兩と一分を財布へ入れる。

佐五　さう聞いては氣の毒だ。表に酒の桶があるから、たらふく呑んで行かつしやい。

九八　そいつあ何より有難い。(ト立上り、)どれ、埋草に呑んで行かう。

ト九八門口へ出て茶碗で酒を呑みながら、内の樣子を窺ひ居る。

高綱　佐五兵衛が來たばかり、百姓共が呑みたがる酒を振舞はずにしまつた。最早夕陽、奧へ行て夜延仕事の支度を仕ようか。(ト表から九八のぞく、佐五兵衛ちらりと見て、)

佐五　いや旦那様、奧へお出でなさるなら、最一つお聞き下さりませ。

高綱　又候、身共に異見をするのか。

佐五　さあ外の事でもござりませぬが、御離縁なされた奧様を、お返しなされて下さりませ。

高綱　何と申す。(ト訛への合方になり、)

佐五　お氣に障ると知りながら年寄役の憎まれ口、度々御異見いたすのもみんなお爲を思ふゆゑ、それも五月蠅思召すなら、最う御異見もいたすまい、釣にお出でなされても決してお留め申しますまい、其替りに奧様をお返しなされて下さりませ、是れがあなたを見限つてお出でなされたといふではなし、あなたの方から無理やりに、御離縁なされた事なれば、お許しさへ出ますれば、直にお連れ申しまする。

小藤　其儀ならば私も共々お願ひ申します、お心和げられ、お許しなされて下さりますやう。

佐五　偏にお願ひ、

兩人　申し上げまする。(ト兩人よろしく思入、)

高綱　折角の頼みなれど、家風に合はぬ妻ゆゑに、此詫びばかりはきかれぬぞ。

佐五　ではござりませうが、奥様を、

小藤　どうぞお返し下さりませ。（ト高綱思入あつて、）

高綱　一旦離縁なしたる妻、何やう詫びをいたすとも、返らぬ事は篝火も根の井の娘、幼少より書物の端も覗いて居れば、覆水盆に返らぬ事は、彼女も承知いたして居らう。

佐五　すりやどうあつても。

小藤　奥様は。

高綱　覆水盆に返らぬ旅路。

兩人　や。

高綱　いやさ、歸らば妻に、（ト立上り、）申し聞せよ。

ト唄になり、高綱刀を持ち思入あつて奥へはひる。佐五兵衛跡を追つかけようとする

佐五　どれ、奥へ行つて今一應。（ト小藤次留めて、）

小藤　幾ら言つても糠に釘、旦那へ異見は無駄なことだ。

佐五　それぢやと言つて、科もない、あの奥様を御離縁ありしは。

小藤　只紀の川で明暮に、釣が仕度いばかりのこと。

佐五　釣に見替へて奥樣を、お出しなされしお心は、

小藤　いよ〳〵虚氣に極まつた。

佐五　えゝ、言はうやうない、（ト悔しき思入にて、）むゝゝゝ。（ト喉に物のつかへし思入）

小藤　佐五兵衛どの、どうしたのだ。（ト背中を叩く、喉の直りし思入にて、）

佐五　やれ〳〵嬉しや、死ぬかと思つた。

小藤　何ぞ喉へつかへたのか。

佐五　悔し涙に入歯を呑込み、既に心中する所。

小藤　危い事でござつたの。

佐五　どれ、もう一應御異見せうか。

ト唄になり、佐五兵衛小藤次奥へはひる。此内九八門口より窺ひ居る。時の鐘になり、下手より前幕の運平の中間出來り、九八を見て、

運平　九八郎どの。

九八　これ。（ト時の鐘にて兩人囁き合ひ、九八は下手へはひる、運平は門口から家を窺ひ、）

運平　幸ひ誰も居ぬ様子、人影見えぬ日暮を幸ひ、忍んで様子を。むゝ、さうだ。

ト時の鐘合方にて門口を明け、差足にて暖簾口へ忍び込み、直にばた〳〵になり、運平出て見事にぼんと轉る、跡より小藤次出て、

小藤　此夕暮の闇きを窺ひ、奥へ入込む怪しき奴、いで引括つて詮議なさん。

運平　何を小癪な。（ト木刀にて打つて掛る、小藤次是れを相手に眞田の紐を遣ひ立廻りよろしくあつて、運平を當て件の眞田紐にて後手に括し上げ、門口にある佐五兵衛の酒の桶を持つて來り、運平に酒を入れ息を吹き返す所へ、柄杓で酒を呑せる、運平心附き、）南無三しまつた。（ト逃げに掛るを小藤次眞田の紐を手繰りくるくると引廻す、是れにて眼の廻る思入にて、）あゝ家が廻る〳〵、萬歳樂々々。

トあちこちと駈廻る、小藤次以前九八が忘れて行きし鐵砲笊を取り、

小藤　それ、廻らぬやうにいたして遣るわ。

ト運平の天窓へすつぽりと冠せる。是れにて運平縛られしまゝぴつたりと畏まる、小藤次拍手を打つ、此拍手に運平見事にぼんと轉るを道具替りの知らせ、小藤次紐の端を持ちきつと見得、此模様、時の鐘の送りにてよろしく道具廻る。

（「新歌舞伎十八番の内、佐々木閑居」の場）――本舞臺三間の間高足の二重、丸太柱丸太椽葺本

屋根、向う瓦燈口白張りの襖、上手一間地袋戸棚、此上に本箱、下手鼠壁、軒口に伊豫簾を下し、上の方岩組松の立木、日覆より同じく釣枝、下の方誂へ下げて銀張り清水の流れゐる岩組、此前に切破りの藪疊、いつもの所栗丸太の竹簀戸、此屋體後に毀れる仕掛、總て九度山佐々木閑居離家の體。山おろし床の三重にて幕明く。

〽紀の國に其名高野の山近く、里には遠き九度山村、浮世離れし茅屋に、閑を樂しむ高綱が、樣子窺ふ間者の武夫、土肥の彌五郎兼近が。

ト時の鐘かすめて山おろし谺にて、花道より以前の彌五郎逹付草鞋大小、白布で巻きし手槍を掻込み出來り、花道に留り、

彌五　北條殿の嚴命受け、佐々木が所行探らんと、種々遠計を回らせど、未だに善惡分らぬ高綱、今宵裏より下屋へ忍び、家内の樣子窺はん。何にもせよ、犬に入れし運平めは、如何にせしか。

〽合圖の礫打ち附くれば、それと心得立ち出る九八。

ト彌五郎上手へ礫を打つ、是れにて上手より九八出來り、

九八　兼近樣。

彌五　これ、(ト思入あつて、)して佐々木めが、樣子は如何に。

九八　仰せに任せ岩淵九八も紙屑買ひに姿をやつし、佐々木が宅へ入込みしが武器を賣りしも手段の樣

子。

彌五　むう、名に負ふ明智の佐々木ゆゑ、計略ならんも計られず、して高綱は在宿なるか。

九八　則ちあれなる離れ家に、手細工なして居りまする。

彌五　むゝよし〳〵、其方は裏手に隱れ怪しき事のあつたらば、横須賀殿へ注進いたせ。

九八　畏まつてござりまする。

彌五　目立たぬ内に片時も早く。

九八　はッ。

〽はッとばかりに急ぎ行く。（ト時の鐘にて九八下手へはひる、）

彌五　藪より下家へ忍び込み、仕儀に依らば高綱めを。

〽心にうなづき槍搔込み、四邊を窺ひ差足なし、藪押分けて忍び入る。

トかすめて山颪、彌五郎よろしく思入あつて、下手の藪を押分け忍び入る。時の鐘。

〽折から繁る木々の蔭、漏れて差込む待月に、軒の簾を捲揚げて、佐々木親子は張物の、手業を止めて空打ち仰ぎ、

ト此内日覆より誂への月をおろし、よき程に正面の簾を捲き揚げる、内に以前の高綱着流し鹿の皮

の袖無しを着、好みのこしらへ張抜きの大筒を張り居る、下手に大太郎袴裝、短刀を差し、淺き桶へ糊を解き、反故を前へ置き刷毛にて糊を附け居る、後に好みの結び燈臺、山おろし、谺、梟の聲をよろしくあしらふ。

高綱　今宵は未だ初夜近きに、上弦の月早く昇り、晝を欺く此光り。

大太　見渡す野邊に茂りたる、尾花は人を招けども、

高綱　浮世放れし山住に、夜は問ひ來る者もなく、

大太　扉の鳴子おとなふは、梢を落す峰の風、

高綱　谷の水音遠くして、

大太　軒端に近き梟の、

高綱　鳴く音にいとゞ寂寞と、

大太　故郷をおもふ秋の暮、

高綱　爰が閑居の、（ト思入あつて）樂しみぢやなあ。（ト兩人よろしく思入あつて）山家はいとゞ蚊の多く凌ぎ兼ねしも漸く去り、夜延仕事の時節になつた。

大太　今宵はあら方張れましたが、もそつと糊を附けませうか。

高綱　最う四五枚で張り仕舞へば、綺麗な反故を見てくりやれ。

大太　畏りましてござりまする。

へ糊する反故の紙よりも、薄き縁の夫と子に、結ぶ甲斐なき白露の、涙に袖をしを〳〵と、我が家の門へ彳めば、

ト此内大太郎紙へ糊を引始め、高綱これを張る思入よろしく。時の鐘、蟲の音にて、花道より以前の篝火、しを〳〵と出來り花道にて舞臺を見て、思入あつて、門口へ來り外より内を窺ふ、これにて、蟲の音止む、高綱思入あつて、

高綱　千草に殘る蟲の音の、一度に止みしは裏手より、誰やら爰へ來たと見える。

大太　おつしやる通り、簀戸口に、彳む影が見えまする。

高綱　誰人なるか、見て參れ。

大太　畏りました。

へ有合ふ手燭へ火をうつし、庭に下り立ち戸口より、

ト大太郎好みの手燭を出し、燈臺の火をうつし、是れを持ち庭下駄を履き門口へ來る、篝火火影を厭ひ俯向き居る、

そこに居るのは、誰ぢや。（ト篝火默つて居るゆゑ、）何者なるぞ。（トきつといふ、篝火顔を上げる大太郎見て、）や、母上なるか。（ト門口を明ける。）

篝火　大太郎、逢ひたかつたわいな。（ト篝火大太郎に縋る、高綱筒を張りながら、）

高綱　こりや悴、門へ參りしは何者なるぞ。

大太　さあ、是れは。（ト體で篝火を隱す。）

高綱　高野へ參るに道に迷ひ、行暮れし修行者なるか。

大太　さあ。

高綱　修行者ならば報謝なし、麓の道を敎へてやりやれ。

〽敎へてやれと言放し、糊刷毛取つて筒を張り、素知らぬ體に篝火が。

ト高綱刷毛にて筒を張り居る、篝火思入あつて小聲にて、

篝火　これ大太郎、そちに母が頼みがあるが、佐五兵衛からも小藤次からも、此身の詫びをしてたもれど、お聞き入れなき高綱殿、たつた一言この母が、言ひたい事がある程に、どうぞお許しあるやうに、そちがお詫びをしてたもいの。

大太　折角のお頼みながら離別の上は途中でも、母といふなとおつしやる位、物堅き父上樣、私などが

お詫びをしたとて、所詮お許しはない程に、早うお歸りなされませ。

篝火　そりやさうでもあらうけれど、そなたは言はゞ御秘藏ゆゑ、お許しのない事もあるまい、早うお詫びをしてくりやいの。

大太　すりや何うあつても、私に。

篝火　さあ、叶はぬまでもそなたから、此身のお詫びしてたもいの。

〽母の賴みに是非なくも、立つにも立たれぬ大太郎、父はこなたを見返りて、

ト篝火袖に縋りて賴む。大太郎困る思入、高綱思入あつて、

高綱　こりや悴、何をそこにいたして居るのぢや、道に迷ひし修行者なら、報謝して早く返せ。

大太　いえ、修行者ではござりませぬ。

高綱　して、それなるは何者ぢや。

大太　さあ、母樣にござりまする。

〽いふに高綱聲荒らげ、

高綱　なに、母とはそりや誰が事ぢや、そちに母はない筈ぢやぞ。

大太　さあ。

高綱　尤もそちを産落せし、篝火といふ母ありしが、我が心に叶はぬゆゑ、離別いたしてあかの他人、決して詞も掛けるなと、あれ程申し附け置いたに、母などゝは虚氣者めが。

ト父の怒りに大太郎、返す詞もなく涙、袖に餘りて篝火が、

ト高綱きつといふ、大太郎困る思入、篝火は涙を拭ひながら、

篝火　悴に詞交すなとは、そりや情ない高綱殿、是が越度といふ事があつての事なら是非もなけれど、明暮川邊で釣をなされお身の障りになるゆゑに、お留め申すは妻の役、それがあなたのお氣に障り、直に離別の狀を添へ國へ歸れとおつしやるは、さりとは無情おつしやりやう、是れには何ぞ深き譯のあつての事でござりますか、あるなら連添ふ妻のこと、なぜ打ち明けては下さりませぬ、此儘實家へは歸られませぬ、お氣に入らずば妻でなく、下女端女とも思召し、お側に置いて朝夕の、お世話をさせて下さりませ。

高綱　此程より幾度となく、其繰言も聞き飽きた、別に深き仔細もなけれど、我が家風に合はざるゆゑ、止む事を得ず離縁したのぢや、又信州より當地へ參り、浪人なして三ケ年、所持の金子はいふに及ばず衣類調度も賣代なし、既に先刻古鐵買に刀まで賣る程に、疲弊なしたる佐々木高綱、下女端女が何入らうぞ、以前は萬石取りし身も、今百文の鳥目に差支へる程成り下れば、自身に德利

を提げる料簡一人も口が少ないが、先づ活計の爲なるゆゑ、そちを離縁いたしたのおや、まだ年の朽ちしといふでもなければ、何れへなりと再縁して、身の行末を賴むがよい。

篝火　えゝ、再縁せよとはお情ない、

〽そもや此身は幼きより、許嫁にて嫁入なし、是れ此やうな悴まで儲けし妻を今更に、離別なさるは何ゆゑぞ。

其日の生活に迫りなば、

〽破れたる衣を身に纏ひ、只一椀のものなりとも、親子三人三つに分け、共に辛苦をするならば夫婦、行末樂に暮せばとて、

何の再縁しませうぞ。

〽つれない夫の心やと、門に取附き泣きけれど、父の手前に大太郎、母の介抱なり兼ねて、

ト此内篝火門口でさはりの振、大太郎を遣ひよろしくあつて門口に取り附き泣く。大太郎篝火の背中を擦らうとして、高綱を見て思入あつて、

大太　御尤ではござりますが、只今何やうおつしやつても、お許しはない程に、一先づお歸りなさりませ。

篝火　いえ〳〵今日は歸らぬ程に、そちも共々父上へ、此身のお詫びをしてたもいの。

大太　其お詫びはいたしたけれど、此程も申す如く、男は男に附くが習ひ、父が詞に背かれませねば。

篝火　そんならお詫びがならぬとか。

大太　どうぞお許し下さりませ。

篝火　現在産みの我が子にまで、はあゝ。

(太)〽わつとばかりに泣き伏せば、

高綱　まだ兎や角と申し居るか。耳かしましい、早く返せ。

大太　はッ、父の仰せを子の身として背くではござりませぬが、あのやうに仰しやりますゆゑ、何卒お家へお歸りあるやう。

高綱　やあ、そちまでが同じやうに。家風に合はず去つた妻、詫はきかぬ追ひ返せ。

大太　左樣ではござりませうが。

高綱　まだ〳〵申すか、返せと申すに。

篝火　すりやどうあつても、此身の願ひは。

高綱　叶はぬ事ぢや。（トきつと言ふ。）

篝火　えゝ、情ない事ぢやなあ。（ト泣伏す。）

高綱　えゝ、さりとは五月蠅奴ではある、何を左樣にぐづ〳〵と、（ト思入あつて）あゝ汝が母の筐とて秘藏にした鏡があつたが、それが欲しさに參つたか、我が魂の刀は賣れど、そちが魂の鏡は賣らぬ。

〽言ひつゝ立つて戸棚より、袋入りの鏡を取出し、（ト戸棚より袋入りの鏡を取出し、）

大太郎、これを遣はせ。

大太　はツ、（ト鏡を受取り、）日頃母上御秘藏の、祖母樣の此の御鏡。（ト出す、篝火思入あつて、）

篝火　夫に去られ魂も、亂れ狂へば此鏡、貰はいでもよいわいの。

〽押返せば大太郎。（ト大太郎思入あつて、）

大太　まだ年行かぬ私が、ませた事を申しますが、人間は老少不定、明日をも知れぬ身の上ゆゑ、篤くりとお名殘りを。

篝火　え。（ト思入。）

大太　空も晴れたる月の鏡に、父上樣のお顏をば。（ト鏡を出し思入にていふ、）

篝火　成程そちがいふ通り、明日をも知れぬ人の身の上。（ト是れも思入にていふ。）

大太　さあ、それゆゑ是れで。

〽いふに照添ふ月影に、夫の顔を鏡にうつし、是れが別れと打ち見遣り、

ト篝火鏡へ高綱の顔をうつし、是れを見てぢつと思入、

篝火　これがお顔の。

大太　え。

篝火　見納めなるか。

〽はつとばかりに景留めし、鏡を抱き泣き伏せば。（ト篝火宜しく思入あつて鏡を抱き、泣伏す。）

大太　さあ又もや父のお叱りなきうち、早うお歸りなされませ。

篝火　思ひ切つて歸らうわいの。（ト篝火思入あつて、）離別の上はあかの他人、言はずともの事ながら、父上諸共、何れ何處へ行かうとも、人は一代名は末代、必ず卑怯な名を取るまいぞ。

大太　常々母の御教訓、胸に忘れはいたしませぬ。

篝火　人に勝れて花々しき、働きなすを草葉の蔭から。

大太　え、何とおつしやります。

篝火　さあ、離別されても産みの母、心は影身に附添ひ居るぞよ。

大太　有難うござりまする。

〽死する覺悟を不便やと、心に思へど高綱が、態と我が子に荒氣なく。

ト此内筒を張りながら、高綱もよろしく思入あつて、

高綱　やあ大太郎、まだぐづ／＼と申し居るか、あれ程父が言ひ置きしに、そちも共々勘當なさうか。

大太　其儀は何卒。

高綱　然らばとつと追ひ返せ。（トきつと言ふ。）

大太　是非に及ばぬ母上樣、最早お歸りなされませ。

篝火　せめてま一度、夫のお顏を。

大太　そりや御未練でござりまする。（ト篝火門を明けるを大太郎門口をぴつしやりしめる。）

〽はたと立て切る隔ての枝折戸、ま一度お顏と取出す、心の鏡は曇らねど、月は涙の雨催ひ、
影も朧に見えわかねば、是非もなく／＼篝火が、見返り／＼行きければ。

ト此内月を隠し、篝火鏡に影のうつらぬ思入にて、是非なく鏡を抱へしを／＼と花道へ行く、大太郎つか／＼と花道へ行き、

大太　もし、母樣。

篝火　おゝ悴。

大太　御機嫌よろしう。

篝火　そちも達者で。

大太　思へばこれが、

篝火　親子の別れ。（ト手を取交し思入あつて、）

大太　おさらばでござります。

〽袖振り拂ひ内へ入り、門の戸さして忍び泣く、母も心は殘れども健氣な我が子に恥入りて、しを〳〵として歸り行く。

ト大太郎手を振拂ひつか〳〵と内へはひり、門口をしやんと締め泣く。篝火も立ち歸らうとして思ひ切つて花道へつか〳〵とはひる。此内高綱は筒を張つて居る思入よろしく、

高綱　悴、篝火は歸りしか。

大太　はツ。

高綱　年にも恥ぢずたはけ者めが。

〽口にはいへど夫婦の別れ、猛き心も恩愛に、浮む涙を咳に紛らし、

ト高綱向うを見て不便なといふ愁ひの思入、ほろりとなし、大太郎と顔見合せ、せき入るこなし、大太郎背中を擦る。

俄の冷氣に持病の咳が。

大太 お茶を上げませうか。

高綱 おゝ、養仙老より貰ひし藥、さは／＼と煎じてくりやれ。

大太 畏りました。

〽藥をしほに立上り、一間の内へ入りにける。

ト大太郎立上り、向うへ思入あつて奥へはひる。高綱跡を見送り、

高綱 返らぬ事をくど／＼と妻が愚癡にて夜延の邪魔、然し最う一二本、後夜までは掛るまい、一服呑んで始めようか。（ト煙管を取つて空を見る、此時又月出で、秋のならひの雲立ちて、今まで月を隠せしが、梢を落す一吹きの、風に又もや晴れ渡り、空に冴え行く月の影、

〽それといはねど高綱が、空を見上げて天文に、世の盛衰を考ふる、折から又もひそ／＼と、樞を窺ふ掃部之助、鳴子の音に驚けば、

ト高綱煙管を突いて天文を見る思入、花道より前幕の掃部之助達附大小好みの笠を持ち來り、花道に

て頷き思入あつて舞臺へ來る、此内かすめて山おろし、梟の聲をあしらひ、掃部之助門口へ取附き内を窺ひ思はず戸へ障り、鳴子の音にびつくりなし、蹲踞ふ。

高綱　庭の樞へ音づれしは、何人でござるよな。

掃部　誰でもござらぬ、安達掃部之助でござる。

高綱　此程より幾度となくお斷り申せしに、又もや御入來なされしか。

掃部　今一應御意得たけれど、再三の事ゆゑ裏より忍び參つてござる。

高綱　それは山路を御苦勞千萬、何は兎もあれ先づ〳〵是れへ。

掃部　然らば御免下されい。

〽門の戸明けて掃部之助、竊に跡を見返りて、戸差しをなせば高綱か。

ト掃部之助内へはひり、跡を見返り思入あつて、門口をしめ下手へ來る、

高綱　さあ是れへ〳〵

掃部　仰せに任せ。

〽塵打ち拂ひ座に附けば、（ト掃部之助會釋をして二重下手へ住ひ、誂への合方になり）

高綱　月はあれども山路ゆゑ、嘸御難儀でござつたらう。

掃部　主命ゆゑに掃部之助、此身の勞は厭ひ申さぬ。

高綱　先づ御安座においでなされい。（ト煙草盆を出す、掃部之助張拔筒を見て、）

掃部　見受けますれば佐々木殿には、何をお細工なされまするな。

高綱　秋の夜の長きにうんじ、書見を伽にいたしたれど、浪々の身に肝心の活計が立たざるゆゑ、斯やうして手細工いたしてござる。

掃部　して是れなる張筒は、何にお用ゐなされまするな。

高綱　されば、これは銅器に更へ、大砲に用ふる所存でござる。

掃部　あの紙にて張りし此筒を。（ト驚く。）

高綱　さあ謂ゆる畑水練にて、役に立つか立たざるは、試し見ざれば相分らぬ。

ト掃部之助感心の思入にて、

掃部　諸葛臥龍に軍法は劣らぬ佐々木高綱殿が、御工夫ありし此張筒、お役に立たん事あらんや、誠に前古未發の大砲、近頃驚き入つてござる。

高綱　いや左様に御賞美ござつては、甚だ以て恐縮いたす、紙にて張りし此筒が、何の役に立ちませうぞ、世人畢つて某を虛氣になりしと申すのは、爰等のことでござらうて。

掃部　中々以て左にあらず、凡慮に及ばぬ此張筒、斯かる御工夫召さるゝ尊師、坂本方の大元帥、是非御入城御願ひ申す、此程よりして幾度となく同じ事を申せども、何卒御味方下さるやう、偏に願ひ奉つる。

ト身をへりくだりて願ふにぞ。

高綱　扨々これは困り入る、何やう仰せあるとてもお味方はいたさぬと、あれ程拙者が申せしに、再三のお勧めは近頃以て迷惑至極、所詮お受けいたさねば思ひ止つて坂本へ、片時も早くお歸りあれ。

掃部　いや貴殿御承引なき内は、拙者坂本へは歸り申さぬ。

高綱　とは又何ゆゑ。

掃部　されば坂本城中にて、今海内に二人となき佐々木殿を迎ひの使者、誰彼と評議の折、拙者擢で望みしを、老臣始め一座の諸士汝如きが參つたとて、よも承引はあるまいと、止められしを遮つて使者に立つたる掃部之助、尊師お味方下さらねば生きて再び歸られませぬ。

高綱　それは近頃氣の毒千萬。

掃部　此程より再度のお願ひ、最早今宵が絶體絶命、武士の情を思召され御承引下さるか、御報次第で良任が一命捨てねば相成らぬ。

高綱　假令貴殿が死するとも、某命が惜しうござれば、お味方は仕らぬ。

掃部　然らばいよ〳〵坂本へは。

高綱　平に御免下されい。（ト高綱詫びる思入、掃部之助きつとなつて）

掃部　是非に及ばぬ此上は、惜しむ貴殿の命を貰ひ、拙者も此場で相果てる。

高綱　すりや、高綱が一命を。

掃部　お貰ひ申す、覺悟召され。

〽怺へ兼て良任が、抜く手も見せず切りかくれば、高綱動ぜず身を躱し、有合ふ糊刷毛差し附くれば、五體に隙なくためらひける。

ト掃部之助刀を抜いて切つてかゝる。高綱糊刷毛を取つてちよつと立廻り差し附ける、掃部之助刀を振上げしまゝ、隙なく切込み兼ね刀を持ちし手顫へる思入。高綱刷毛を引く掃部之助切つてかゝる、よき見得にて、山颪誂への鳴物になり兩人立廻り、高綱刷毛を投げ附ける、是れにて掃部之助たぢたぢとなり、後の壁にもたれ息の切れる思入、高綱反故を取つて是れを卷き、さあ來いといふ思入、又掃部之助打つてかゝり右の紙にてあしらひ、トゞ掃部之助の刀を紙にて押へる。掃部之助動けぬ思入。

〽凡力ならぬ高綱が、手練にひるむ其折から、宙を飛んで馳け來る小藤次。

ト山おろしばたくにて、花道より、以前の小藤次肌脱ぎにて走り出來り、花道にて、

小藤　はツ申し上げまする。

高綱　おゝ、左いふは谷村小藤次か、申し附けし計策は。

小藤　はツ、仰せに任せ近郷に土民となつて忍びし者ども、今宵殘らず葛籠峠の篝を合圖に不動院の梵字が瀧へ集まる手筈、まつた佐五兵衛親子の者も、御計策の圖を外さず、十計調ひましてござりまする。

高綱　猶も汝は油斷なく、味方の催促心得たるか。

小藤　はツ、然らば御免。

〽飛ぶが如くに引返す、大太郎は一間を立ち出で、

トばたくにて、小藤次花道へ引返してはひろ。掃部之助は心得ぬ思入、奥より大太郎出で、

大太　父上には十計調ひ、御滿足にござりませう。（ト高綱思入あつて）

高綱　我が計策調ひし上は、今ぞ一命差上げん。（ト紙を引く、掃部之助刀を構へ）

掃部　すりや某へ。

高綱　我が一命をお渡し申すは、源家の棟梁右兵衛佐頼朝公の御嫡男、二代の將軍頼家公へ、高綱一命

差し上げる。

掃部　やゝ何と。

高綱　身不肖ながら今日只今、信濃源氏の正統たる佐々木四郎左衛門高綱、御幼君へ一命差上げ、坂本方へお味方申さん。

掃部　すりやお味方下さりますとか。

高綱　如何にも。

掃部　はツ、使者に立つたる身の面目、大慶至極に存じ奉つる。

〽天へも昇る心地にて、三拜なしてひれ伏せば、高綱威儀を改めて、

ト掃部之助嬉しき思入にて刀を鞘へ納め、下へ下つて手をつかへ平伏なす。誂への合方になり。

高綱　そも信州を開城なし、領地を捨て、士民となり、此紀の國の九度山へ退身なせしは元よりして、御幼君へ隨ふ所存。

掃部　すりや信州を開城の、其砌りより高綱殿には、御隨身下さる御所存にてあつたるか。

〽いふに高綱詞を正し、

高綱　頼朝公御他界より兄盛綱は北條家に、遁れざる由縁あつて鎌倉へ隨身せり、我も再三勸めを受け

しが世を見限りし體に持てなし、城地を捨てゝ土民となり、僅かな代の紐を打ち、今日の煙りも立ち兼る體に持てなし武器を賣り、暇ある日は釣のみなし、人に虛氣と見せたるも、深き所存あつての事、既に坂本鎌倉と二つに別れて穩かならず、六十餘州の大小名過半鎌倉の附屬となれば、此儘にては賴家公御成長なさるゝとも、源氏二代の將軍と誰仰ぐ者もなし、爰ぞ先君賴朝公へ御恩報じと一心極め、悴諸共高綱が賴家公へお味方申す。

〽初めて明かす佐々木が本心、聞くも嬉しく掃部之助。

掃部 は、有難き御親子の、其御所存を若君へ申し上げなば、御母公宇治の御方始めとして、城内一同旱魃に大雨を得たる如くにて、諸士の悅び如何ばかり、假令時政數萬騎の大軍にて寄するとも尊公麾を採りたまはゞ味方の勝利疑ひなく、太平謳ふは瞬くうち。

〽あら忝なや嬉しやと、天へも昇る安達が悅び、高綱頭をうち振りて、

ト掃部之助悅ぶ、高綱思入あつて、

高綱 いや太平謳ふは難きこと、某これより入城なし、和睦破れて鎌倉と一戰に及びなば。

〽其時こそは奇計を廻らし、

必ず一度は勝にもせよ、二度は味方の負とならん、始終の勝利覺束なきは此程よりの運氣の動搖、

天地の不思議を察せしゆゑ、我も倅も入城なせば君へ一命捧ぐる所存、然し近頃廣言ながら、

〽百萬騎の大軍にて、四方を圍んで攻むるとも、二ヶ年の其間は、籠城なして鎌倉勢に、攻め

あぐませんは手裏にあり。

人は一代名は末代、美名を殘し落城なす時到りなば潔く、煙りの内に死する所存。

大太　あゝ其時こそは、我も父。（トいゝのりになり、大太郎肌を脱ぎ）

〽卯の花縅の小具足に、雪と見紛ふ月毛の駒、一鞭あてゝ乘り出し、父が教への太刀風に、落

花微塵にばら／＼／＼、切りたて薙ぎたて追散らし、父諸共に戰場にて、

討死なして名を殘さん。

〽勇み立つたる有樣は、末頼もしく見えにける。（ト大太郎よろしく振あつて）

高綱　ほゝお、健氣なる其一言、そちも子孫の榮より討死なすは嬉しいか。

大太　仰せには及ぶべき、お主の爲に命をば、捨てるは武士の身の本望。

掃部　驚き入りし御子息の、覺悟は日頃の御教諭か、誰しも惜しむ一命を。

高綱　捨てよと教ふる親の身は。

大太　美名を殘し戰場にて、

掃部　千年の壽を保つより、
高綱　死するが百倍嬉しうござる。
掃部　流石は佐々木高綱殿、始終の勝利なき事をお覺悟あつて御親子とも、一命捨て、坂本へ、御味方下さる御心底、忝け涙がこぼれまする。
〽落涙なせば高綱は、
高綱　頼朝公の御高恩、忘却せずば我人とも、一命捨つるは當然なるに、それを左様に御賞美あつては高綱面目次第もござらぬ、はゝゝゝゝ。
〽愁ひを隠す高綱が、笑ふ心の大丈夫、天晴軍師と知られける。（ト高綱よろしく思入）
〽折からこなたの破れ壁より、聲を知邊に突き出す槍先き。
トばつたりと音して、下手の鼠壁より槍を突出す。
やあ、思ひ掛けなき此槍先き。
掃部　扨こそ曲者遁しはせじ。
〽槍の柄手繰ればばら〳〵、壁をこぼちて一間より、躍り出でたる土肥の彌五郎。
ト掃部之助槍を引出す、下手の壁ばら〳〵と崩れ、内より以前の彌五郎槍を持ち出る、掃部之助槍を

引取りちよつと立廻つて、

高綱　やあ裏手に忍ぶ曲者は、何者なりと思ひしに、土肥の彌五郎兼近なるか。

彌五　時政公の進めにもどき、坂本方に隨身せし、佐々木高綱覺悟なせ。

掃部　天地に轟く高綱公へ、覺悟呼はり片腹痛し。

大太　左いふ彌五郎覺悟いたせ。

彌五　何を小癪な。

〽拔くより早く切り掛くれば、安達は透さず身を交し、刀追つ取り鐺にて、裾を拂へばひらりと飛び下り、たじろぐ隙を大太郎、槍を取つて脇腹へ、突込む痛手に齒嚙みをなし。

ト彌五郎刀を拔き、切つて掛る、掃部之助刀の鞘にて立廻り足を掻く、是れにて平舞臺へひらりと飛び下りる、大太郎槍を持ち同じく飛下りちよつと立廻り、大太郎彌五郎の脇腹を突く、彌五郎どうとなる、高綱これを見て思入れ。

高の知れたる小悴と、侮つたばかりに、不覺を取りしか殘念や。

掃部　ほゝお、出來されたり大太郎殿、軍始めのよき血祭り。

大太　いでや止めを。（ト立ち掛る。）

〽勇みかゝるを高綱が、

高綱 やれ待て悴、はやまるな。

大太 何ゆゑお留めなさるゝぞ。

高綱 不覺を取りしといふは僞り、名に負ふ叡智の時政が、人ある中に人を選み、忍びに入れし土肥の彌五郎、悴如きの手に掛らんや。

大太 何とおつしやる。

高綱 これには深き仔細ぞあらん、いざ本心を明されよ。

〽天地を見拔く眼力に、

彌五 はゝ、驚き入つたる御眼力、今は何をか包み隱さん、今宵この家へ忍び來るは、高綱殿の手に掛り、身の言譯をなさん爲。

高綱 何と。（ト竹笛入りの合方になり。）

彌五 慾に迷つて賴朝公の御高恩を打ち忘れ、時政殿へ隨身なし、阿り諂ふ其折柄、智勇勝れし佐々木高綱、九度山村の士民となり閑居なすは心得ず、探索なせと嚴命蒙り、則ち相役横須賀平太と此近郷を取圍み、既に獵人九郎作を語らひ、五日以前紀の川にて土足に掛けしも堪へ忍び、隱す色

目の見えざれば、どうがなしてと思ふ折、貴殿に親しき酒賣り佐五兵衛引捉へて詮議なせしに、思ひ掛けなき仁王の目貫に、始めて知つたる眞の親。元某は二歳の折諏訪明神の鳥居先きへ、仁王の目貫の片々を添へ捨てられし身と養父の話し、是れを證據に名乘り合ふ時もやあらんと差添への、目貫となして所持なせしが、今日始めて佐五兵衛が悴と知つて濟まざるは、知らぬ事とは言ひながら佐々木公の領地に產れ、大恩受けし御領主を、土足に掛けし勿體なさ。

〽よく此臑が折れざりし。

先非を悔いて彌五郎が、高綱公の御嫡子大太郎殿の手に掛り、死するは則ち此身の本望、土足に掛けし大罪は、是れにてお許し下されい。

〽性は善なる兼近が、先非を悔いし身の懺悔、聞く高綱は歎息なし、

ト彌五郎よろしく手負の思入、高綱これを聞き思入あつて、

高綱　扨は御身は我が舊領、信州上田の庄屋たる、佐五兵衛が悴なりしか。

大太　早くも斯くと知るならば、此深手は負はせまじきに。

掃部　可惜勇士を殘念至極。

彌五　いや、死する時死なずんば死に勝る必ず恥あり、今に思へば勿體なけれど、高綱公を拙者めが、

土足に掛けしばかりに佞奸邪智の横須賀も、佐々木は誠の臆病なりと心弛んで固めもおろそか、
此關を外さず坂本へ、御入城あつて然るべし。

高綱　おゝ、我もそれと察せしゆゑ、此近郷に隱れ忍ぶ譜代恩顧の家來を集め、今宵當所を立退く所存。

彌五　それぞ幸ひ爰かしこに、見張に附けし百姓共、今宵は殘らず熟醉なし、役に立つ者一人もなし。

高綱　おゝ、其百姓を熟醉させしも、此高綱が計略にて、佐五兵衞親子が代に構はず、賣り歩いたる諸
白ゆゑ。

彌五　すりや我が親が賣り歩いたる、諸白ゆゑに熟醉せしとか。

掃部　何から何まで拔目なき、高綱殿の御計略。

彌五　これに附いても我が親に、今際の名殘り只一目。

〽言ふ聲きいて忍び兼ね、小蔭を立出る親佐五兵衞。

ト此以前下手へ佐五兵衞出て、門口にて樣子を聞き、此時前へ出て、

佐五　始終の樣子は小蔭で聞いたが、先非を悔いてよく死んだ。（ト内へはひる。）

彌五　や、さういふ聲は親仁樣。

佐五　おゝ悴。

彌五　え丶、お懐しうござりまする。

〽人目も恥ぢず彌五郎が、親に縋れば手を取つて、

ト彌五郎佐五兵衞に取附く、兩人よろしく思入、誂への合方にて、

佐五　最前出逢ひし其時に、目貫に心掛けしゆゑ、若しやと思つて別れしが、案に違はぬ我が悴

彌五　養母が話しに聞きたれど雲を當なる尋ねもの、何時逢はれうと思ひしも、目貫が證據に計らずもお目に掛りし親仁樣。

佐五　名乘り逢ふも面目なきは、我が子を捨てるは邪險の親と、思ふであらうが四十二の二つ兒ゆゑに是非なくも、そちを捨てしが其時も、放しともない親子の恩愛、先祖は故ある鄕士にて、家に傳はる仁王の目貫、一對揃ふ片々を添へ、諏訪明神の鳥居前へ、捨て社へ參詣なし、我が子の行末守らせたまへと神へ願うて歸りがけ、見れば我が子の影もなく、若しや山犬に喰はれはせぬかと思ふ所へ道行く人が、今の捨兒は仕合せな、よいお武家に拾はれしと、聞いて安堵はしたれども、何れの誰か名も知れず。

〽二十五年が其間、片時心に忘れざりしが。

扨はそなたは土肥殿の養ひ子とはなつたるか。

〽よくも成人なしたりと、年長けし身も親心、三つ子の如く勞りて、涙に暮れるぞ道理なり。

ト佐五兵衞彌五郎をとらへ、よろしく愁ひの思入

高綱　佐五兵衞親子が計らずも、二十五年の星霜經て、斯く不思議に名乘り逢ふも、正しく所持なす仁王の目貫。

掃部　誰が作なるか、親子一對、再び揃ふもこれ靈驗。

佐五　おつしやる通り、此目貫の證據がなくば逢はれぬのに。（ト守りより仁王の目貫を出す）

彌五　阿吽の二體計らずも一對揃ふ親子の對面。（ト彌五郎も目貫を見せろ）

大太　其對面の甲斐もなく、斯かる急所の深手では、

彌五　所詮存命思ひも寄らねば、今日逢ひ初めの逢ひ納め。

佐五　本意ない別れは悲しいが、よくぞ命を捨てたるぞ。

掃部　其心底があるならば、斯く一命は捨てずとも改心なして坂本へ、なぜお味方はせざりしぞ。

彌五　假令改心なしたりとも、我々如きがお味方なし、何のお役に立ちませう、一命捨てたばかりに人の數にもなられまする。

佐五　成程そちが言ふ通り、死なねば誠の人とはいはれぬ、よくぞ命を捨てたるぞ。

彌五　とはいへ、二十五年が間、生死分らず御苦勞掛け、又もやお歎き掛けまする不孝の段は親仁様、お許しなされて下さりませ。

〽いふ息さへも四苦八苦。（ト彌五郎苦しき思入にて）

最早近附く此身の知死期。

佐五　そんなら是れが、

彌五　親仁様。

佐五　悴（ト手を取交し）

彌五　此世のお別れ。（ト佐五兵衛を突退ける）

〽笛かき切りて彌五郎は、につこと笑ひ息絶えたり。

ト彌郎刀にて笛をかき切り、につたりと思入あつて、打伏せに倒れる、佐五兵衛はつと泣伏す

〽はつと泣伏す佐五兵衛が、心察して人々も愁ひに沈む其折柄、又も馳來る谷村小藤次。

ト皆々愁ひの思入、ばた／＼になり、花道より小藤次走り出て、直に舞臺下手へ來り、

小藤　はツ、申し上げます。

高綱　何事なるぞ。

小藤　只今拙者奥樣の、御隱家へ參りし所。

大太　なに、母上がどうぞなされしか。

小藤　さあ、奥樣には。（ト言ひ兼ねる思入、高綱思入あつて）

高綱　自殺なせしか。

小藤　はあゝ。

大太　すりや母上には、御自殺とか、ほゝほい。

佐五　思ひ掛けない奥樣が、何で御最期なされしぞ。

掃部　承はつて驚き入る、御内室の御生害、是れには仔細あつての事か。

ト聞かれて高綱、吐息をつき。（ト高綱思入あつて）

高綱　別に仔細はござらねど、敵に心を許さす爲、竊に妻と言ひ合せ我が釣なすを異見させ、それを越度に離縁に及び態と無情もてなせしは、親子三人密事の計策、いで坂本へお味方なす其期に到らば自殺せよ、一命捨つる入城に女を具しては行き難し、兎にも角にも他聞を憚る、一大事ゆゑ其が女の魂鏡を渡さば、其期と悟り覺悟せよと申し附け置きたるゆゑ、既に先刻來りし折、合圖の鏡渡せしを今宵限りと妻も悟り、餘所ながら我々へ暇乞をいたしたれば、自殺はかねての覺悟

でござる。

〽かねて覺悟といふ聲も、涙に曇る夫婦の恩愛。

掃部　すりや奥方にはかね〴〵より、お味方下さる其期には、御自殺なさるゝお覺悟とか。はゝ、感ずるに猶餘りあり。

大太　して母上の御最期は。

小藤　申し上ぐるも恐れあれど、一間の内へ屏風を建て机の上へ香華を飾り、膝も崩さず只一突き、喉を貫き俯伏しに、合掌なしての御臨終、朱には染めどお面は、笑ふが如く立派な御最期、お側にありしお鏡と御書置の一通を、持參いたしてござりまする。（ト懐より鏡と書置を出す）

大太　よくぞ持參いたせしぞ。

〽母の形見と大太郎、涙ながらに取上ぐる、折しも山手に聞ゆる法螺の音。

ト大太郎鏡と書置を懐へ入れる、此時花道の揚幕にて法螺の音聞ゆる。

掃部　はて心得ぬ、あの音は。

佐五　味方を集むる合圖なるか。

高綱　あれぞ正しく領主股野が、入城なすを聞き附けて、人數を集むる法螺の音ならん。

掃部　股野が合圖と聞くからは、猶豫ならざる一大事。

佐五　こりや斯うしては居られませぬ。

高綱　やあ股野如きが取り圍むとも、何程の事あらん、佐五兵衛そちは是れなる悴、また奥が遺骸取り片附け、早く當地を立ち去るべし。

佐五　はゝ、畏つてござりまする。

小藤　何は兎もあれ御主君には、御入城の御用意あつて、然るべう存じまする。

高綱　いふにや及ぶ、衣服を改め、悴諸共入城なさん。

佐五　とはいへ、譬の油斷大敵。

掃部　若し又爰へ股野の討手が。

高綱　寄せ來りなば防ぎの用意は、

〽火打袋に入れ置きし、鐵丸取つて打ち附くれば。

ト高綱火打袋より鐵丸を出し打ち附ける、烈しき音する。

これぞ則ち味方へ合圖。

大太　父上様。

高綱　悴來れ。

〽物に動ぜず高綱は、一間の内へ入りにける。

ト高綱大太郎小藤次附いて奥へはひる、是れにて向う遠寄せになる。

掃部　次第に間近く聞ゆる貝鐘、此家を圍むと覺えたり。

〽安達は向うをきつと見て、

佐五　こりやうつかりとしては居られぬ、不便ながら悴が死骸は裏手の川へ水葬禮。

〽死骸を抱へ佐五兵衞は、川原をさして急ぎ行く。

ト佐五兵衞彌五郎の吹替への人形を抱き下手へはひる。

〽折から又も近附く貝鐘、心ならざる後より。

ト掃部之助軒口へ出て、伸上りて向うを見る、此時後へ兵士二人四天素網装抜身にて窺ひ出て、

兵一　安達掃部、

兵二　覺悟なせ。

〽切つて掛るを身を躱し、弓手と馬手へ打拂へば、刀投げ捨て兩人がむんずと組むを振拂ひ、投げ退け蹴退けさそくの働き、時しも天に棚引く白氣、

ト兩人切つて掛るを鐵扇にてあしらひ、合方鳴物を冠せよろしくあつて、兩人を投げ退けきつと見得

どろ／＼になり、日覆より誂への白氣おりる、掃部之助見て、

掃部　はて怪しやな。(ト兩人掛り掃部之助手筒を取り素襖上だけ引脱き、好みの四天になり)訝しやなあ。(ト兵の一を捻ぢ上げ兵の二を踏へ、きつと見得、小太鼓の樂になり)時は今暮秋の初め、陰氣盛んに陽を覆ひ、

〽山霧深く上弦の、月も朧の中空に、衆星の光り貫きて、乾に白氣の立ちたるは、

是れぞ正しく味方の吉瑞。

〽この九度山の山越より、和泉の岸和田堺を過ぎ、坂本城へ入城ある路次に妨けなきしるし。

ト此内掃部之助兩人を相手に立廻りよろしくあつて、

はて幸先よき白雲ぢやなあ。

〽味方の吉事を悦ぶ所へ、息をばかりに駈來る佐太郎。

ト掃部之助白氣を見上げきつと見得、どんちやんばた／＼になり、花道より佐太郎、酒賣りにて鉢卷片肌脱ぎ柿の胸前垂、淺黄の股引尻端折り、天秤棒を擔込み走り出で、直に舞臺へ來り、

佐太　御注進々々。(トどうとなり胸を叩き息の切れる思入、下手より佐五兵衛出て)

佐五　や、そちは悴佐太郎。

掃部　注進とは氣遣はしい。（ト兵の一、二を左右へ投げ退け）して〳〵様子は、何と〳〵。

佐太　はッ。

〽鉢巻取つて汗おし拭ひ。（ト鉢巻を取り汗を拭き、）これは憚り。（トされば候ふ、されば候。（ト息の切れたる思入、栗山桶の水を柄杓へ汲み出すを取つて）ぐつと呑んで柄杓を投げきつと見得、のりになり）佐々木様の仰せを受け、地造り酒の諸白を、荷ひ賣りに出た所、

〽一杯幾らといふ酒を、無代でもよいと言うたれば、出口を見張りの百姓共、先陣後陣を爭うて、

〽えい〳〵聲して押來り、

〽我劣らじと呑む程に、驅附け三杯また三杯、最一つ負けて三々が九杯、息をもつかず續け呑み。

ト此内兵の一、二掛り、佐太郎を引伏せる、佐五兵衛見兼て天秤棒でくらはし可笑味の立廻り、佐五兵衛佐太郎兵士兩人の手を取り、くる〳〵と廻し突放す、兩人ひよろ〳〵となる。

忽ち醉うてひよろ〱〱。

〽竹槍鐵砲打ち捨てゝ、手拍子打つて惣踊り、酒は地酒に天窓へ登り、正氣失ふ鬼殺し、よいと〱〱よいと醉ひ倒れて他愛なし。（ト此内所作立模樣の可笑味あつて）

假令領主の嚴命で、

〽太鼓や鉦を叩くとも。

足はひよろ〱。

〽目はちよろ〱、ひよろ〱ちよろ〱するゆゑに。

一人の敵も三人四人、多勢に見ゆれば怯ぢ怖れ、役に立つ者候はず。

〽御安堵あれと佐太郎が、大汗かいて訴ふれば、佐五兵衞ほた〱打ち悦び。

ト此内佐太郎可笑味注進の振よろしくあつて納る、佐五兵衞諸白と書いた澁團扇で煽ぎ立て。

佐五　おゝ出來した〱、よく酒を振舞うて來た。

佐太　親仁樣、えらい者でござりませう。

佐五　我が子ながらえらい〱。

〽煽ぎ立つたる後より、又も組附く以前の兩人。

ト佐五兵衛遣團扇で煽ぐ、此時又兩人掛かり立廻り、遠寄せ烈しく打込む。

掃部　次第に近付く貝鐘太鼓、敵勢寄せると覺えたり、佐々木殿には片時も早く。

〽御用意あれといふ折しも、一間の内より聲高く。（ト掃部之助兩人を投げ退ける、此時奥にて）

高綱　その用意高綱が、疾より製造いたしたり。

〽襖左右へ押開き、軍師佐々木高綱が、烏帽子大紋さわやかに、續いて一子大太郎、張拔き筒を小藤次が、小脇に抱へ居並んだり。

ト小鼓のあしらひ、正面の襖を開き高綱好みの烏帽子大紋、籠手脛當附太刀好みのこしらへ、大太郎鎧下のこしらへ、籠手脛當附太刀草鞋、小藤次達附脛當籠手大小草鞋にて、張拔き筒を小脇に抱へ附添ひよろしく出來り、眞中に高綱、下手へ大太郎小藤次居並ぶ、佐太郎佐五兵衞はずつと下へ控へる。

掃部　今御用意と仰せありしは、それなる筒でござるよな。

高綱　如何にも某工夫を以て銅器に替へる張拔き筒、これさへあれば大丈夫、そも浪々中三年この方張り置く筒は九度山の不動院に祕め置けば、賴家公へ土産となさん。

大太　して父上には是れより直に、

小藤　御入城なされまするか。

高綱 不動院へ士卒の者集り居ればかしこへ赴き、人數を揃へ列を正し、四つ目の旗を飜へし領主股野が城下を通らん。

佐五 いや取るに足らぬとおつしやれど、股野も城主の事なれば。

佐太 百や二百の人數はあらん、多勢を以て寄せ來らば、

小藤 其時こそは御主君の、

〽かねてしつらふ張拔き筒、一發打てば天地に轟き、臆病未練の集り勢、右往左往に逃ぐるは必定。（ト小藤次張拔き筒を持つてよろしくあつて）

只氣遣ひは鎌倉勢。

掃部 おゝ實に尤、名にし負ふ聰明叡智の北條時政、如何なる計策あらんも知れず。

トよろしくのりにて、

高綱 氣遣ひあるな安達殿。

〽假令時政諸軍を隨へ、長蛇鶴翼八陣に、備を立つて寄するとも。

何程の事あらんや。

〽敵に諸葛の軍慮あらば、又味方にも張良が、千變萬化の奇法を用ひ、只一戰に駈け惱まし、

再び源氏の旗風を、翻へさんは手裏にありと、勇める面色威あつて猛く、實に名にし負ふ坂本の惣大將と知られけり。

ト此内高綱軍扇を遣ひ、物語模樣の振よろしくあつて、

掃部　ほゝ勇ましゝ〱、百萬騎の軍勢より、只一將の尊公にて、坂本城は鐵石同然。

大太　いで此上は片時も早く。

佐五　我々共も出口まで、

佐太　お見送りをいたしませう。

掃部　左樣ござらば大元帥。

高綱　御同道仕らん。

〽大紋の袖かき合せ、列を亂さず出で行く後へ、

ト高綱先きに掃部之助、大太郎、小藤次、下つて佐太郎、佐五兵衞皆々花道へ行く、此時後屋體へ前幕の平太、陣立にて軍兵大勢引き連れ出で、いゝのりにて、

平太　やあ〱高綱、暫く待て、時政公の上意を受け、討手に向ひし横須賀平太、我が雷名に恐れてか後を見するは卑怯なり。

〽卑怯々々と呼はれば、

小藤　やあ卑怯呼はり奇怪至極、いで某が。（ト立掛るを佐太郎留める）

高綱　やあれ小藤次逸まるな、高綱かねて埋め置きし地中の大砲發する時節。

平太　何と。

高綱　今に五體は微塵なるぞ。

平太
皆々　やあゝ。（ト驚く）

〽驚く途端地中より、一時に發する大砲に、屋體も微塵に飛び散つたり。

ト本鐵砲おびたゞしき音して、掛け焔硝誂への煙りぱつと立つ、仕掛にて屋體ばら／＼に崩れ、平太軍兵壓し打たれし心、此音に佐太郎耳を押へ俯伏せになる。高綱是れを見て、

トどんちやんカケリにて、皆々引つぱりよろしく、

高綱　はて心地よき、（トばらりと軍扇を開くを木の頭、扇を翳し舞臺を見て）大砲ぢやなあ。

ト高綱思入あつて、

いざ、安達殿。

幕

眞田幸村

掃部　先づ〳〵お先きへ、

高綱　然らば御免。

ト誂への鳴物になり、高綱、掃部之助、大太郎、小藤次、佐太郎、佐五兵衛皆々花道へはひる、知せに附き、跡シヤギリ。

眞田幸村（終り）

（附録）主なる興行年表

大杯

年時	座名	名題	才助	掃部頭	紀伊守	治右衛門	采女	主水
明治十四年五月	猿若座	大杯觴酒戦強者（おほさかづきしゆせんのつはもの）	市川左團次	市川権十郎	市川壽美藏	市川八百藏	岩井紫若	岩井松之助
明治廿年八月	千歳座	同（おなじく）	市川左團次	市川権十郎	中村芝翫	坂東彦十郎	澤村源之助	市川升若
明治廿四年十一月	市村座	同（おなじく）	市川左團次	市川小團次	中村壽三郎	中村勘五郎	岩井小紫	澤村曙山
明治廿八年十月	明治座	同（おなじく）	市川左團次	市川権十郎	市川壽美藏	中村壽三郎	市川米藏	市川莚女
明治卅五年十月	同座	同（おなじく）	市川左團次	市川権十郎	小川小團次	中村成太郎	市川莚女	中村歌昇
明治卅八年十月	市村座	同（おなじく）	中村吉右衛門	尾上菊五郎	坂東三津五郎			
明治四十年九月	明治座	同（おなじく）	現市川左團次	市川高麗藏	市川小團次			

年時	大正三年七月	大正五年二月	大正七年十二月	大正十一年五月
座名	歌舞伎座	本郷座	帝國劇場	明治座
名題	同	同	同	同
	中村吉右衛門	市川左團次	市川左團次	市川左團次
	尾上菊五郎	實川延若	市川八百藏	松本幸四郎
	尾上菊三郎	市川小團次	嵐吉三郎	坂東壽三郎
		市川市十郎	市川壽美藏	市川筵升

十二時忠臣藏

年時	明治四年十月	明治十七年九月	明治十八年二月	明治八年七月	明治廿七年十一月	大正四年十一月	年時
座名	守田座	新富座	市村座	大阪中座	明治座	新富座	座名
名題／役割	四十七石忠箭計	天下一忠臣鑑	十二時譽義士傳	十二時義士同文	十二時忠臣實記	忠臣いろは文庫	名題／役割
由良之助	河原崎權之助	市川團十郎	助高屋高助	中村宗十郎	市川左團次	片岡仁左衛門	お浪
師直	河原崎權之助	中村芝翫	市川九藏	市川荒五郎	中村壽三郎	……	又之丞
郡三郎	河原崎權之助	坂東家橘	助高屋高助	中村宗十郎	……	……	戸田
小林	河原崎權之助	市川團十郎	……	市川荒五郎	市川左團次	……	庄左衛門
葉泉院	岩井紫若	……	岩井松之助	中村喜代三	市川升若	中村芝雀	清水
おらん	岩井紫若	澤村源之助	岩井松之助	片岡松太郎	市川米藏	……	官左衛門
お組	岩井紫若	中村かほる	岩井松之助	中村喜代三	……	……	源四郎
お雪	河原崎國太郎	……	岩井松之助	片岡松太郎	坂東秀調	中村芝雀	元助

年時	座名	名題								
明治四年十月	守田座	四十七石忠箭計	河原崎國太郎	中村翫雀	中村翫雀	市川左團次	市川左團次	中村仲蔵	中村仲蔵	市川左團次
明治十七年九月	新富座	天下一忠臣鑑	—	—	—	—	市川左團次	中村仲蔵	—	中村芝翫
明治十八年二月	市村座	十二時變義士傳	河原崎國太郎	市川九蔵	河原崎國太郎	澤村訥子	市川壽美蔵	關三十郎	市川壽美蔵	市川壽美蔵
明治八年七月	大阪中座	十二時義士同文	中村喜代三	—	—	市川九蔵	中村琥珀郎	淺尾奥山	—	—
明治廿七年十一月	明治座	十二時忠臣實記	市川蓮女	市川權十郎	坂東秀調	市川左團次	市川權十郎	—	市川八百蔵	—
大正四年十一月	新富座	忠臣いろは文庫	—	—	尾上多見之助	現市川左團次	市川左團次	—	—	—

魚屋の茶碗

年時	座名	名題／役割	次郎吉	久太	七三郎	おつゆ	友蔵	岸田
明治三年五月	守田座	時鳥水響音	尾上菊五郎	中村仲蔵	澤村訥升	尾上多賀之丞	市川左團次	—
明治十五年五月	春木座	三題噺魚屋茶碗	尾上菊五郎	尾上松助	市川權十郎	中村かほる	市川八百蔵	關三十郎
明治二十九年四月	歌舞伎座	三題噺魚屋茶碗	尾上菊五郎	尾上松助	市川權十郎	中村福助	市川猿之助	市川猿蔵
明治三十四年五月	歌舞伎座	三題噺魚屋茶碗	尾上菊五郎	尾上松助	市川八百蔵	市村家橘	—	—
明治三十九年三月	東京座	三題噺魚屋茶碗	澤村訥子	市川猿之助	中村芝翫	—	—	—

明治三十九年五月	歌舞伎座	三題噺魚屋茶碗	現尾上菊五郎	尾上松助	市川高麗藏	尾上芙雀	坂東三津五郎	｜
大正八年四月	歌舞伎座	三題噺魚屋茶碗	市村羽左衛門	市川段四郎	市川左團次	中村福助	中村鶴藏	｜
大正九年八月	帝國劇場	時鳥水響音	尾上菊五郎	尾上松助	澤村宗十郎	市川男女藏	大谷友右衛門	｜

桃山譚

年時	座名	名題	清正	幸藏主	秀吉	大政所	德川	前田	三成	行長
明治二年八月	市村座	桃山譚	河原崎權之助	尾上菊次郎	關三十郎	岩井紫若	嵐璃鶴	市村羽左衛門	坂東橘十郎	
明治六年九月	村山座	增補桃山譚	三升	市村門之助	中村宗十郎	中村歌六	坂東家橘	中村時藏	關三十郎	中村垂藏
明治十三年一月	新富座	桃山譚	市川團十郎	中村仲藏	中村宗十郎	岩井半四郎	中村鶴助	大谷門藏	市川市十郎	中村鶴藏
明治二十年十二月	市村座	桃山譚	市川團十郎	河原崎國太郎	片岡我童	澤村田之助		市川照壽		市川壽美藏
明治二十九年一月	歌舞伎座	增補桃山譚	市川團十郎	市川壽美藏	市川權十郎	中村富十郎	市川猿藏	市川染五郎	市川八百藏	市川猿之助
明治三十五年四月	歌舞伎座	增補桃山譚	市川團十郎	市川壽美藏	市川八百藏	中村芝翫	市川猿藏	市川染五郎	市村家橘	尾上松助
明治卅九年十一月	市村座	增補桃山譚	中村吉右衛門	尾上菊三郎	尾上菊五郎	中村歌昇	中村歌昇	坂東秀調	中村駒助	市川新十郎
明治四十一年一月	歌舞伎座	桃山譚	市川八百藏	市川猿之助	市川高麗藏	中村芝翫	市村羽左衛門	尾上菊五郎	澤村訥子	中村吉右衛門

年時	座名	名題							
大正元年九月	新富座	桃山譚（もゝやまものがたり）	中村吉右衛門	中村歌六	尾上菊五郎	尾上芙雀	尾上菊三郎	尾上紋三郎	中村東藏	中村翫助
大正四年九月	本郷座	桃山譚（もゝやまものがたり）	市川八百藏	中村歌六	市川左團次	坂東秀調	市川市十郎	市川壽美藏	中村又五郎	市川左升
大正五年三月	帝國劇場	桃山譚（もゝやまものがたり）	中村吉右衛門	尾上松助	守田勘彌	尾上菊次郎	尾上菊五郎	中村東藏	坂東三津五郎	坂東彥三郎
大正十二年五月	明治座	增補桃山譚（ぞうほもゝやまものがたり）	中村吉右衛門	中村傳九郎	中村歌右衛門	中村時藏	片岡市藏	市川三升	坂東三津五郎	

眞田幸村

年時	座名	名題 ╲ 役割	幸村（高綱）	彌五郎	佐太郎	佐五兵衛	千枝（篝火）	小助	捕部
明治四年八月	守田座	出來秋月花雪聚（いでそよづきはなのゆきむら）	河原崎權之助	市川左團次	市川左團次	中村仲藏	岩井紫若	市川子團次	中村翫雀
明治十五年三月	春木座	張抜筒眞田入城（はりぬきづつさなだのにふじやう）	市川團十郎	中村芝翫	中村芝翫	市川團右衛門	岩井紫若	市川八百藏	坂東家橘
明治三十五年五月	明治座	眞田打紐緩（さなだのうちひも）	市川左團次	市川權十郎	市川小米	市川壽美藏	市川升若	中村成太郎	市川小團次
大正七年九月	市村座	張抜筒眞田入城（はりぬきづつさなだのにふじやう）	中村吉右衛門	尾上菊五郎	坂東三津五郎	中村東藏	尾上菊次郎	尾上紋三郎	守田勘彌

大正十四年九月十日印刷
大正十四年九月十三日發行

「默阿彌全集第九卷」
非賣品

著作權者印

補修　河竹糸女
校訂編纂者　河竹繁俊
發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦
印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地　堀江關武
印刷所　東京市小石川區諏訪町五十六番地　常磐印刷所
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂



